柳田泉著

明治文學叢刊

政治小説研究 中

東京
春秋社藏版
松柏館發賣

第102號

中巻目次

研究本記

（續）

春の屋主人とその政治小説

一　大學時代の逍遙

此處で私が扱はうと思ふのは、春の屋主人坪内逍遙の文學活動のうち政治小説方面のことであるが、これを十分正しく見るには遠近二つの知識の背景を必要とする。一は逍遙の傳記乃至文學活動一般（就中初期のそれ）に關する知識、二は逍遙と時代の政治熱の關係についての知識、これである。先づその一については、逍遙自身の回憶的記述や前輩諸氏の逍遙研究文獻が相當豐富であるので、通例ならば、その中の最も信憑すべきものを指して、それを讀まんことを慫慂するだけで責任を免れることが出來るわけだが、私は多少の考へがあるので、この研究を逍遙の傳記研究で始めたい。傳記研究といつても、安政六年五月二十二日美濃太田の尾州家代官所に生れてからの七十餘年の生涯を新たに辿るといふではない、その生涯の初期の或る部分、即ち東京大學在學時代の前後にわたる約十年間のことである。私の目的は、この機會に東京大學時代の生活を比較的精密に調べて、それが新興文學の大先達たる逍遙のリテラリイ・カリイアにとつて如何に重要な貢獻をしてゐるかといふことを明白にしたいのである。逍遙の政治小説の淵源を知るにも勿論此の時代に關する知識は必要だが、然しそれだけなら何もこれ程の勞を取らずとも可い、私がこれを敢てするのは、寧しろ文學革命者たる逍遙の心的生長に異常なる關心をもつてゐる爲めである。

明治九年八月、十八歳の逍遙は愛知縣の選拔生として、當時の最高學府たる東京開成學校に入るべく上京した。逍

逍遙は十四で次兄義衛と共に愛知洋學校に入つて英語を學び、翌年縣立英語學校成美學校に入り、十六から上京までは官立愛知英語學校に學んでゐた。縣から選拔される位だから、多少の好學心はもつてゐたに違ひなからうが、此の頃の逍遙には自分は何々を勉強しようなどといふ志望が確然と定まつてはゐなかつた。たゞいはゆる戲作、即ち德川時代の舊文藝に關しては、環境のおかげで、驚くべき造詣をもつてゐた。作者の中では曲亭馬琴を崇拜し、十五六で、馬琴の『俠客傳』に擬した勤王小說[一]を試みた程であつた。又英語學校在學中、修辭學や英文學について多少の知識を得、外人教師マックレランの教授振にエロキューションの面白味を感じた。又教科書中にシェークスピヤの拔萃文が多かつたといふ。

九年の九月逍遙は試驗合格で、いよいよ開成學校普通科に入學した。明治九年の東京開成學校一覽によると、當時同校は、(第一)普通科、(第二)法學科、(第三)化學科、(第四)工學科に分れ各三年の修業期限であつた。その普通科とは今日いふ豫科に相當するもので、第一級から三級まであり、新入生は第三級と呼ばれた。課程は英語、博物、地理、歷史、物理、化學、經濟、理學(心理、修身等)など、普通學のやゝ高等なもので教科書は英書、教授用語も原則として英語であつた。英語の課程中、第一年の一期には修辭學、第一年の二期と第二年の第一期には英文學を教授することになつて居り、教科書として、前者にはヘブン氏著修辭學、ベイン氏著同、後者にはモルレー氏著英文學歷史、アンドルウード氏著『英文學袖珍』、シェークスピールなどであつた(呼び名は當時のまゝ)。此等の課目の教授としてはサンマルス、アリン、外山正一などがゐた。尙ほ各課程の教授要旨を述べた諸學科要略によると、英語及び英文學の科は「英語ノ起源發達文法及ビ作文法並ニ英文ノ起源隆興及ビ性質ノ諸項ヲ包括シ併テ英語及ビ英文ノ進歩ト之ガ變化及ビ更善ヲ生ジタル感力トヲ講明ス」るものであり、修辭學の科は「一論題ニ關スル引證又ハ推理ノ正シキ布置法並ニ散文體ノ潤飾法、言語ノ用法文詞ノ美妙論、語氣論、趣味、批評等ヲ課ス」るものであつた。これを文字

通りに解せば、生徒は多少西洋文學の趣味を養はれたかに見えるが、いふに足る程のことはなかつた。

確たる志向もなく、漫然受驗入學した逍遙は、一時「化學」の名に魅力を覺え、他日これを專攻しようかと考へたりした。

明治十年四月文部省の命令で、開成學校は東京醫學校と合併して東京大學と稱することになり、開成學校の方は新に法學部理學部文學部と分れ、普通科即ち豫科は東京英語學校と合併して東京大學豫備門となつた。修業年限は豫備門三年、大學各部は四年と定められたが、大學各部の一年級といふのは、事實舊豫科の三年級を引上げたものであり、教科課程も全く專門に入る準備的性質のものであつた、蓋し制度改革の際生徒の處置に困じた變態的暫定施設のつもりであつたのであらう。

從つて逍遙も此の年九月から豫備門生徒となつた。十月豫備の寄宿舍が竣成し、生徒九十名の入舍を許した。逍遙もその一人であつた。寄宿舍に入つてからの逍遙は、高田早苗、市島謙吉、山田一郎、赤井雄などゝいふ同窓と特に親密になつた。有賀長雄、關直彥、岡山兼吉、天野爲之なども皆同窓であつた。此の時代の寄宿生活の有樣は、逍遙の「學生時代の追憶」(『逍遙選集』第十二卷)に一斑が見えてゐる。このころ同志五六人で回覽雜誌風のものを作り、赤井氏が春水張りの人情小說を書き、逍遙が插繪を入れたりしたといふ(直話)。

(二)

十一年九月逍遙は本科文學部第一年級に進んだ。本科第一年級といふのは、前にもいつた如く、舊豫科の第三年級に相當するものであり、此の一年だけは法學部と文學部が共通になつてゐた。文學部には(第一科)史學哲學政治學科、(第二科)和漢文學科の二科があつた、第一科の方は、第二、第三年級の間は共通課目を學ばしめ、第四年級に及んで、史學、哲學、政治學(理財學も含む)の一課目を專修する規定になつてゐた。逍遙は第一科を志望したが、それは第二科の何やら固陋なにほひが嫌ひであつたのと、友人が大半第一科に入つた爲めであつた。逍遙は初め史學を

專攻してみようと考へたが、史學の教授たる英人サイルの講義が全然 dry as dust であつたのに閉口し、哲學專攻に改めようとも思つたが、これは受持教師フェノロサの雄辯に恐れをなして思ひ切り、仕方なく政治學專攻の方にきめたのだといふ。その法文學部第一年級の學課及び受持教師は次の如くであつた。

ホートン	英文學
外山正一	英語 論理（第一期） 心理學（第二期）
サイル	史學（第一期）
クーパル	史學（第二期）
横山由清	和文學
黒川眞頼	同
信夫粲	漢文學
古賀護太郎	法蘭西語

右の中で、ホートンは、スプレーグ氏所著の『マスタアピイセス・イン・イングリッシュ・リタラチュア』を教科書とし、チョーサア、スペンサァ、シェークスピーア、ミルトン、バンヤンなどの古典作品（拔萃）を講義し、外山正一はマコーレーの『ミルトン論』、チンダルの『ベルファスト演説』、スペンサァの『代議政體論』等主として近世大家の文章を講義した。史學のサイルは何を講じたか分からぬが、クーパルは佛國史中路易十三世から十四世の治世の終までを講じたといふ。さうして外山教授もクーパルも法文學第一年級の學生の學力不平均なのを特説してゐるが、これは丁度學制改革の過渡期に當つた生徒だつただけに、進級その他が變態的に行はれた爲めであつたらう。

逍遙は如上の大學の正課からは、これといふ感銘を受けたことがなかつたといふ。その同情を持つてゐた英文學の課目についてさへ、教授のホートンは――

學殖が豊富らしかつたが、講義振は純然たる學究だつた上に、眠たい、低い調子でポツリ〳〵、而も私にはやつと六七分通りしか解からない英語で講じたのだから、なまけ者の私なぞは餘り裨益する所がなかつた。（「回憶漫談」『選集』第十二卷）

此の頃から東京大學學生の間には西洋小説を讀む風が見えて來たが（私は、此の西洋小説の流行が何に原因するか知りたいと思ふ。たゞ今のところでは、明治十一年に譯刊されて讀書界を風靡した『花柳春話』の出現が幾分これに與かつてゐはせぬかと老へてゐる）、逍遙の同窓でも丹乙馬、高田早苗などが大にこれに熱中した。文學部生徒の先輩では、福富孝季、岡倉角藏（後に覺三）などが小説好きとして知られてゐた。岡倉、高田などが寄宿舍の爐邊に落ち合ふと、往々文學論に花が咲き、ヂューマと馬琴、スコットとリットンの優劣論などが上下された。逍遙も高田早苗の指導で、西洋小説に指を染め、スコット、リットン、ヂッケンズなどを讀みあさるやうになつた。

だが、西洋小説には初年生でも、戯作文學にかけては、流石に逍遙の造詣才能は同窓を拔いてゐた。同窓の一人市島謙吉は回顧してかう語つてゐる。

君は當時大の馬琴通で、馬琴のあらゆるものを讀過してゐたのみでなく、馬琴脈の文章を縦横に書いた。何といふ標題であつたか忘れたが、馬琴の顰に倣つて南朝畑の材料で一册の小説を書いて示されたのを見ると、馬琴ソックリの例の七五調で、おもしろき掛言葉もあり、サワリもあり、殺し文句もあるので、自分などはエライものだと驚いた。坪内君は馬琴ばかりでなく、三馬でも春水でも一九でも有らゆる作家に通じて、諧謔の文はなか〳〵得意であつた。大學時代に書いた諸謔文字で自分の記憶にあるのは、五六人の同窓が連れ立つて、鴻臺へ徒歩で往返した

其紀行を滕栗毛風に書いたことがあつた。ある時坪内君に示された小説目錄、それは讀み本、洒落本、人情本、草双紙の類まで千種以上も收めたものであつたが、何の目錄かと聞いたら、鄕里に在る時名古屋の大惣（貸本屋）から借覽した書名の大略を書き記したのであると聞き、その涉獵の廣いのに一驚を喫した。坪内君は其頃旣に一ト廉の小說家であつたのだ。（「明治文學初期の追憶」）

多少の誇張があるにしても、大體首肯すべきであつた。たゞ文中「南朝畑の材料で一册の小說を一云々とあるのは、南朝畑ではなしに豐臣畑といふべく、眞田大助の弟を主人公としたもので、眞面目に二三回分起草し、友人達に朗讀して聞かせたことがあつた。手本は馬琴の『俠客傳』であつた（直話）。又紀行戲文を、文中には滕栗毛風といつてゐるが、逍遙自身は八笑人式のものといつてゐる。

此の他、「囘憶漫談」「曲亭馬琴」等（何れも『選集』第十二卷）にこの頃の逍遙を知るべき資料は相當散見してゐる。何れにしても、西洋小說を味ひ始めたこと、小說創作の試みがあつたことは、逍遙の生涯で注目すべき出來事であつたとしなくてはならぬ。

十二年九月、文學部第一科の第二年級に進んだ。此の年第一科には學課の改正があつて、哲學、政治學、理財學が專攻課目として表示されることになつた。その學課目及び受持敎師は次の如くであつた。

ホートン	英文學
フェノロサ	哲學史
クーパル	史學、史論
外山正一	心理論
橫山由淸	和文學（一期）

黒川眞頼　和文學
木村正辭　和文學（二、三期）
小中村清矩　和文學（一期）
三島毅　漢文學
古賀護太郎　法蘭西語

此等外人教師三人の申報が現存してゐるが、文學部第二年級について何を語つてゐる、か。ホートンは曰く――

文學部第二年生ハ私課ノ英國文章史ニ於テ殊ニ結果ノ善ナルヲ見ル　其講堂ニ於テ溫習セルセキスピール文ノ諸篇ヲ擧レバ左ノ如シ　曰クジュリアス・シーザル、曰クマーチャント・オフ・ヴェニス、曰クテンペスト、曰クリチャルド・セカンドナリ　又生徒ニハ隔週每ニ文ヲ屬セシム　其作皆佳ニシテ疵病アルナシ　實ニ如此キ良生徒ハ余ノ始メテ擔當スル所ナリ

フェノロサは曰く――

文學部第二年級生徒ニハ前年ト比シテ講義ヲ用ヒテ哲學史ヲ講習セシメシュエグラル及ビリュイスノ著書ヲ以テ其參考書ト爲ス　蓋シ是レ專ラデカートヨリ今日ニ至ル近世哲學ノ實錄ニ係ルカ故ニ其生徒ノ智見ヲ開發スル鮮尠ニアラズシテ尋常空理ニ鶩スル如キモノト同日ニ語ル可カラズ

クーパルは曰く――

文學部第二年生ハ月曜木曜ノ兩日ニ英國憲法史ヲ水曜日ニ史論學（フヒロソフヒー・オフ・ヒストリイ）ヲ攻習セリ　就中有賀長雄氏ヲ以テ其最トス　然ルニ該級中平生疾病ニ因リ缺席スル者尠カラズ　爲メニ自然其勉强ヲ妨ゲシハ余ノ甚ダ嘆息スル所ナリ　又高田氏ハ注意周密其學業ノ余ヲシテ滿足セシムルモノ多ク天野氏ハ試業每ニ群ヲ拔キ其平常ノ課業ニ就キ大ニ余ガ望ム

所ニ過ギタリ

逍遙が依然たる逍遙であつたことは、優等學生のうちに伍してゐないのでも知られる。たゞ西洋小説は矢張り種々渉獵してゐたと見えて、十二年の冬、スコットの『ラムマァムーアの新婦』の一部を譯し、十三年四月、友人の法學部生橘槐二郎の兄顯三（かつて東京英語學校教師）の名をかりて出版した。

此の學年の心理學の試業問題に（第四）華美ハ一箇ノ質ナルカ、美術ノ諸情並ニ其由ヲ發スル所ノ諸物ヲ示セ、といふものがあるところを見ると、心理講義の際、美の情緒にも言及されたかと思ふが、逍遙は格別の印象をも受けずに終つたかどうか。

十三年九月、文學部第一科の第三年級に進む。その學課目及び受持教師は――

クーパル　哲學（道義學）
　　　　　史學（希臘史　羅馬史）
フェノロサ　政治學
　　　　　理財學
大澤清臣　和文學
中村正直　漢文學及作文
ホートン　英文學（作文及批評）

であつた。此の學年の諸教授の申報中文學部第三年級に關するものを抄出すれば、ホートンは曰く――

文學第三年級ニ講授專修セシメシ書ハハムレット・オフ・シェキスピヤ、スペンサル氏所著ノフェリー・クヰン第一巻、チョーサル氏所著ノカンタブリー・テールス中プロログ及ビナイツテールスノ篇、ミルトン氏所著パラダイス・

ローストノ第六卷、並ニアレグロ、ペンセローソ、リシダス等ノ諸篇ナリ其課スル所ノ論文ハ第一學期ニ四篇第二第三學期間ニ各三篇ニシテ總テ其業ノ進歩ハ十分遺憾ナシト謂テ可ナリ

フェノロサは曰く――

第三年ノ理財學ニ於テハミル氏著理財學ヲ以テ教科書トシ先ヅ該學ノ原則ヲ考究セシメ次デケアルンス氏著理財論法ヲ學バシメ且講義モ之ヲ授ク　又政治學ニ於テハ初メニ世態學（ソシオロジイ）ヲ授ケ次ニ政治學ノ原理ヲ講義ス　但シ政治學ノ原理ニ關シテハ學生ヲシテ數書ヲ自讀セシメタリ

教科細目によると、政治學の參考書はスペンセル氏著政理論、ウールゼー氏著政治論等が擧げられてゐる。クーパルは曰く――

文學部第三年生ニハ第一學期中ニ希臘史ヲ授ケ第二第三學期間ニ羅馬史中其共和政治ノ滅亡並ニコンスタンチン帝治世ノ事跡ヲ講授セリ該級中有賀長雄氏ハ天資雋頴嶄然群ヲ拔キ解釋流ルルガ如ク且ツ能ク苦學ニ堪ヘ殆ト一日モ缺席セシコトナシ（中略）山田一郎高田早苗ノ二氏亦共ニ資質頴敏ナリト雖モ其講席ニ缺多ク以テ余ヲシテ充分ノ好成蹟ヲ見ルニ至ラシメザルハ甚ダ歎惜スベシトス

漢文學教授中村正直は、史記を教へ又漢文の作文を課した。作文は主として專攻の學課や題目を利用したもので、普通の漢學者のやる如き空疎な文章は作らせなかつた。從つて又學生達も喜んで作り、課外の文章や漢詩なども添削して貰つた。逍遙も有平仄無韻の長詩を作つて（主として英詩の譯）度々訂正して貰つたことがあつたといふ。

此の學年乃至それ以前の逍遙の學生々活が甚だ眞面目なものであつたとはいひ難い。逍遙自ら稚氣と暢氣に終始したといひ、風吹がすらとよび、極樂とんぼと譬へてゐるのみならず、彼の友人も或は「無主義的」と評し、或は「始終醉つてゐる人の如し」と評した[三]のでも知られるが、好んで駄洒落や饒舌を弄し、正課を怠けて小說稗史を讀み、同

志と共に天ぷら屋通ひに熱中し、芝居寄席の常特客となり、戯文を作り、團十郎菊五郎の聲色で、史記や源氏物語やシェークスピヤの下讀みをするといふ風で、「回憶漫談」その他を讀むと、かゝる生活に言及した記事は澤山ある。それでかゝる生活が祟つたものか何うか、先生は十四年度の學年試業に落第させられた。その直接の原因はフェノロサの課目(政治學、理財學)の不成績であつたからだといふ。(私は明治十四―五年東京大學一覽によつて十四年落第と記したのだが、坪内先生の記憶では十五年であり、これが略ぼ確實であるといふ、さうすると以下の記事は十五年九月以後となるわけである)。落第の結果は、十四年九月以後は給費の途が切れたので、大學の寄宿を出て下宿し、さうして高田早苗の世話で本郷元町の進文學社の英語教師となつて生活費兼學費を稼ぎ、時々飜譯賣文によつて不足を補ふことにした。逍遙が文壇生活に入る直接の素因は明かにこゝから發してゐる。この落第によつて、逍遙は「これではならんわい」と、やゝ眞面目になりかけた。この決心が後年の彼の人格事業を生むに至つた。

以上の出來事は、逍遙の生涯にとつて重大なものには違ひなかつたが、明治文學史からいつて今一つ重大な(或はい、より重大な)出來事が此の同じ學年中に起つた。それは明治文學革命の聖典視される『小說神髓』の萌芽の發生である。此の學年の何期の試業かに、――

シェークスピヤの『ハムレット』の王妃ガーツルードのキャラクタァの解剖を命ぜられて、初めての時には其意味が解りかね、「性格を評せよ」といふのだからと、主として道義評をして、わるい點を附けられ、それに懲りて、圖書館を漁り、はじめて西洋小說の評論を讀み出した。勿論、これも最初は半峰君の指導に負うたものだ。東大の圖書館も其頃のは甚だ貧弱で、シェークスピヤの註釋はロルフとやつと出はじめてゐたクラレンドン版ぐらゐのもの、小說もチューマ、スコット、リットン、ヂッケンズなぞが主位であり、單行本の文學論や美術論は英書では皆無、修辭書ではベインなぞが第一であつたらう。さういふ有樣であつたから、私は性格解剖法の參考書としては、主として近着の

外國雜誌の文學評論の部を、或ひは英文學史類を手當り放題に拔き讀みして、解つた限りを抄譯したり何かした。後に『小說神髓』として捏ち上げた材料の大概は此間に捃摭で〔あつた。〕

此の『ハムレット』の試驗が何年のことか、從來不明であつたが、東京大學第一年報中のホートン教授の申報によつて（上揭）、此の學年と推定がついたことは喜ばしい。かゝる動機で、次第もなくノートに綴り始めた「小說に關する隨感隨論とでもいつたもの、」端なくもこれが『小說神髓』の萠芽となつたのである。

十四年九月逍遙は通學生として文學部第三年級の課程を再修した。新なる同窓には穗積八束、梅若誠太郞、鶴原定吉、小川忠武、杉江輔人、その他の人々がゐた。この年始めて文學部長が置かれ、外山正一が部長に任じられた。文學部の科目も改正され、哲學が獨立科目となり、第一哲學、第二政治學理財學、第三和漢文學、都合三科となつた。今第二科第三年級の課目及び受持教師を擧げると、——

フェノロサ	理財學
岩佐巖	獨逸語
三島毅	漢文學
栗塚省吾	政治學
小菅揆一	日本財政論
佐伯惟馨	日本財政論
澁澤榮一	日本財政論
木村正辭	和文學
セン	獨逸語

（以上の一節は、十五年落第說が是となれば勿論變更される。卽ち十四年九月には文學部第二科第四年級に進級したことになるので、課目及び受持敎師も多少變更されて——

フェノロサ	理財學
穗積陳重	法理學
ラートゲン	政治學
鳩山和夫	法理學（一期）
栗塚省吾	政治學
小菅揆一	日本財政論
佐伯惟馨	日本財政論
飯田武鄕	日本古今法制

となる。從つて申報にも變更が生ずるわけである。その後は本文のまゝで可い）。

此の課目表を見ると、以前に比してドイツ的分子が斷然增加し、又一面日本的分子も增加してゐるが、これは、時の政府の意志及び社會の狀勢を反映するところがある。その邊のことは、後に大學生の政治熱を說くところで言及されやう。例によつて此の學年に關する諸敎授の申報を抄出してみると、フェノロサは曰く——

理財學科ヲ三年間ニ敎導スルノ新制規ハ初メテ本學年ニ實行セラレタリト雖モ現ニ第三年生ハ前第二年ノ期ニ理財學ヲ修メザリシヲ以テ乃チ本年ニ於テ之ニ該學ノ緒論ヲ講授セザルヲ得ズ　因テ前例ニ原キ講義ノ大體ラミル氏著ノ理財原論ニ取リ補フニケアルンス氏著ノ理財論法ヲ以テセリ　但該學生ノ進歩ハ昨學生ノ同級生ニ比スレバ差々速カナラザル者アルヲ以テ右ケアルンス著理財原論ノ如キハ僅ニ數章ヲ修ルニ過ギズ　云々

栗塚省吾は曰く——

講義ノ旨趣ハ專ラ政治學ノ空理學ニ非ルヲ示シ論理ト實際ヲ調和スル社會學ノ一部ナレバ論理ニ偏セズ又實際ニ僻セズ政理ヲ哲學ニ求メ諸大家ノ論說ヲ研究シ且ツ一々之ヲ實際ニ證シ諸國ノ國憲政法ニ照シテ學ブコトノ簡要ナルヲ知ラシメタリ　此新主意ニ基キテ更ニ政治學ヲ講ゼルヲ以テ往年ノ學科ノ順序ニ從ハズ第三年級第四年級ニ授クル所大同小異ナリ　卽チ政治學ノ總論道德ト法律ノ關係區別、公法ノ區域ヨリ憲法ニ進入シテ國民ノ權利國家ノ性質政體ノ區別邦國ノ機關ヲ論ゼリ、更ニ第三年級ニハ諸大國ノ憲法史ヲ講義シ第四年級ニハ行政法ノ一部ヲ講シ中央行政官地方行政官ノ組織權理ヲ講シ中央集權地方分權ノ得失ヲ論ジタリ　云々

栗塚は司法省少書記官であり、教科書にはウールゼー政治論を用ゐた。なほ、木村正辭は萬葉集、三島毅は史記列傳を講じた。澁澤榮一の日本財制論は異彩であるが、これは學理ではなく「本邦商業ノ實況」を講話したものであつた。これは先生に直接の關係はないが、此の學年、哲學科の獨立と共に、審美學といふものが始めて一課目として講ぜられることになつたことを附言したい。

年譜によると、逍遙『春窓綺話』(四)の原稿たる『春江奇緣』(スコットの『湖上の美人』)を高田早苗と二人して譯了したのが、十四年である(他の場所では十三年の夏季休業中の筆すさび云々といつてゐる)。高田氏の直話(五)によると、十五年六月以後の着手であるといふが、これは書肆に渡した日時であるらしい。これは最初から散文譯で、文體は、漢文崩しの『花柳春話』式であつた。又、有名な『自由太刀餘波鋭鋒』(なごりのきれあぢ)に着手したのも、十五年夏以前であつたといふ。これには確かな推定根據がある。

此の學年(十四―十五年)をもつて大學生の政治熱が頂點に達し、逍遙の學友たる高田早苗、山田一郎、天野爲之(市島氏はこれより先き退學す)等は、同志を合して、十五年七月卒業と共に公然改進黨に奔り、新聞に演說に、改

進主義の宣傳に努めた。逍遙も、諸友に捲き込まれた形で、政治方面に多少引き寄せられずにはゐなかつた。

十五年九月、文學科第四年に進級。課目は――

ラートゲン　行政學
フェノロサ　理財學
穗積陳重　法理學
飯田武鄕　日本古今法制
中村正直　漢文學及作文

この外に日本財政論（講師市川世寧、石川有幸、佐伯惟馨、澁澤榮一、市川は租稅法、石川は關稅法、佐伯は豫算及造幣、澁澤は本邦商業の實況）の講話があつた。

ラートゲンはドイツ人で此の年（十五年）新に招聘された政治學教授で、彼の渡來は時の政府のドイツ崇拜の一つの現れであらう。彼は先づ自國ドイツの國法研究を基礎とし、他國のそれを參考とせしめた。さうして從來ない演習を試み、學生の自發的勉學を勵ました。フェノロサは此の頃は幾分不遇らしい樣子が見えてゐるが、こゝにも官邊のドイツ崇拜の影が見える。申報を一二抄すると、穗積陳重は曰く

第四年級法理學ノ科ハ（中略）法理學四門ノ中分析法理學沿革法理學ノ二門ハ詳密ニ之ヲ授ルヲ得シモ比較法理學ハ僅ニ二三回ノ課外講義ニ止リ推究法理學ハアーレンス氏ノ性法ノ端緒ヲ講義スルニ止リシハ深ク遺憾トスル所ナリ

中村正直の講義は莊子、詩經、飯田武鄕の講義は大日本史の中、兵志刑法志に關するものであつた。

此の頃の逍遙の生活は比較的眞面目な勉強なものであつた。それは、去年來且つ食ひ且つ學ぶために懸命にならざるを得なかつたからであつた。逍遙は進文學社に出講する傍ら、神田の下宿に鴻臚學舍の看板をかけて初學者に英語

を敎へた。十六年の一月からは――

故あつて、幾人もの若い學生を監督する身となつたので、本郷元町の駄々ッ廣い長屋建ての家に移り、下婢を傭ひ、八九人の學生をあづかり、夜學を開いて其人達を敎へると同時に、進文學社の生徒中の希望者をも參加させた。これは一つは、自分の生活資を得る爲でもあつた。けれども迚もこれだけでは學資其他が不足するので、此頃から大分勤勉家になり、進文學社の時間をも增し、頻りに著譯をも爲出した。大學の課目にも比較的よい點を得た。云々(「回憶漫談」)。

かくて十六年七月卒業し、十月文學士の稱號を受けた。學位授與式が十月に延びたのは、夏季の惡疫流行の爲めであつた。

此の學位授與式當日の夕方、在舍の大學生が、不圖騷動を起して、百數十名一時に退學に處された(後に大部分復校)。原因は賄征伐とされてゐるが、さう簡單な事ではないらしい。平生大學幹部の措置に何か不平を買ふやうな點があつたところへ、式日の出來事で何か感情を害ふやうな事があつたに違ひない(此の日は定つて卒業生及び來賓に立食か何かの饗應がある、從來は寄宿生も卒業生から幾分酒肴を分與されることを默認されてゐたが、此の回に限つて大學當局が或る必要から寄宿の通路の大部分に板圍ひした爲め、それが出來なくなつた、寄宿生がそれを憤つたのが直接の導火線であるともいふ)。

逍遙はこの頃既に、『自由太刀』出版の契約をしてゐた(譯了は十六年十二月)ほかに、『當世書生氣質』の原型たる『遊學八少年』の腹稿を立てゝゐた(もう一部分を書き始めてゐたらう)。別に『小說神髓』の第一稿が完成しつゝあつたことは、いふまでもない。かくて大學卒業と共に、豫期したやうに、次第に、先づは自然に時の文壇と緣がつくに至る。專修した學業よりせば政治家、官吏、實務家となるべき筈の逍遙が、一種の機緣に牽かれて創作生活に入

り、新興文壇の第一人者として押立てられるに至つたことは、少時の環境と天分の力が如何に根強く人間の生涯を支配するかを語る極めて興味ある事實である。

だが大學四年の正課が逍遙の文學生活にとつて殆んど何の意義をなさなかつたにせよ、大學生活までがさうであつたとはいひ得ない。いな、元來が戯作の子であるべきわが逍遙をして後年の逍遙たらしめたのは、正にこの大學時代の生活であつた。大學に入らずとも逍遙の文學的天分は伸びたであらう、この場合、明治初期の文壇には、博識な一「魯文」を加へたであらう、新筆致の新得知を加へたであらう。幅の廣い一「緑雨」を加へたであらう。乃至は馬琴春水の好後繼者を見ることが出來たかも知れない。然しその代り『小說神髓』も、『自由太刀』も、『書生氣質』も成る機がなかつたであらう。私は此の大學生活が逍遙の文學的生涯に如何に大きな重要な貢献をしてゐるかを思ふものである。

註(一) 『逍遙選集』第十二卷、「曲亭馬琴」

註(二) 同卷 年譜には十二年となつてゐるが誤りである。

註(三) 同卷「回憶漫談」に、かゝる自評他評の語が見える。

註(四) 『逍遙選集』別卷第二の解題

註(五) 『太陽』第三十四卷第一號「逍遙先生の事ども」(神代種亮氏)

二 政治的背景

背景的知識のその二として、時代の政治熱と逍遙との關係を述べるが、有體にいふと、逍遙と時代の政治熱の間に直接の關係はない。彼は何れかといへば、文學的嗜癖ある人間の常として、現實の政治乃至政治運動はさう好きでは

なかつた(直話)。彼と時代の政治熱との接觸は凡て朋友關係を介して成されてゐる。從つて中心の主題は當時の東京大學生と政治熱といふことになる。

此の時代の政治熱、所謂自由民權が、西南戰爭以後、十一年十二年と漸次高潮に達しつゝあつた間、別天地たる最高學府の大學生とて勿論何等かの影響を感じつゝあつたに違ひないが、それは今辿り難い。東京大學生が此の政治運動に對して公然何等かの態度を意識的に示したのは、明治十三年をもつて最初とする。明治十三年は、いふまでもなく自由民權運動が地方ブルジョアジイの後援を得て全國的に擴大され運動の結晶たる國會開設の國民的建白が太政官に呈出されると共に(四月)、これに對する贊成尙早の兩論が渦卷起つて火花を散らし始めた年であるが、此の年十月、加藤高明鈴木充美等大學生二十名が連署して書を元老院に呈し、國會開設の尙早を主張した。書中の趣旨は、「今日の程度に於ては實地學術の進步未だ意の如くならず國家の基礎尙定まらざるが如き日にありて堂々國會を開設すること時勢に適合せず」(二)といふにあつた。當時大學生は官吏の卵と目され、總理の加藤弘之は明治七年以來國會尙早論の一本山であつたので、此等の靑年の建白も、或はその筋の手が廻つてゐたのではないかと疑ふ人々もあつたが、然し此の時はさうではなく、純眞な彼等が、多年西洋の系統立つた學問をした頭から割出した憂國心から出たものであつたといふ。

十四年は政海多事の年たること勿論で、開拓使官有物拂下事件、大隈參議處分、國會開設の聖詔降下、自由黨の結成、皆此の年であつた。大學內にも政治熱の昂進が著しく、此の年七月の卒業式に、講師鳩山和夫は時事を痛論した爲め、論旨解囑となつた。二十三年を期して國會を開設する旨の聖詔降下は、當時の日本人にとつて天來の福音の如く迎へられた。然るに當時の條例たるや、官吏は政談を聽くことを得るも爲すことは出來ぬ、學生は爲すことは勿論、これを聽くことも出來ない。此の際かく言論の自由を束縛するのは、聖旨に副ふべき第一要件たる上下感應の道を得る所以ではない、かういふ主旨で、此の年十一月大學生岡山兼吉、山田一郞、市島謙吉の三人は、官吏學生の

言論自由に關する建白書を草してこれを元老院に呈出した。別に三百部印刷して官民都鄙の要所へ配布して批評を乞ひ、又東京日々新聞社長福地源一郎を訪ふて說を鬪はし(福地反對)、大學內の共話會の席上で同主旨の事を演說して、多數學生の贊成を贏ち得た。たゞ注意すべきは、この上書は、表面こそ言論自由の建議に外ならぬが、裏面は、「上下感應官民一致以て能く國會開設の準備を全ふするを得べく事局の料理を以て彼の守舊論者と急進論者とに一任せしむべきに非ずとなし着實漸進の方向に棹して政海の航行を安全ならしむべし」(二)との趣旨を言明したもの、即ち改進主義の宣明であつたことである。

是より先き、東大學生間には、政治熱と共に演說討論熱も浸潤し、これの修練を目的とする種々の會合があつた。逍遙の同級生の間では、先づ共話會が起り、戊寅社が分立し、更に晩成會が出現した。この晩成會は高田早苗の主唱したもので、逍遙もこれに屬した。然しその頃の演說討論は勿論政治に關するものであつたに對し、逍遙のそれは定つて文學論であつた(直話)。

此の頃、大隈參議の懷中刀の一人たる會計檢査官小野梓は、大隈參議の國會開設上奏の議にも與かつてゐただけ、時勢が到底このまゝでは濟まないことを察知し、廣く憂國の同志を求めて、從來大隈を支持してゐた報知派（三田派、矢野文雄が牛耳をとる)、及び每日派（嚶鳴社派、沼間守一が牛耳をとる）以外に新に一團を作り、鼎足の形を成して大隈を助けようと欲した。小野の眼が先づ東京大學生に注がれたのは、炯眼といふべきであらう。彼は屬僚たる小川爲次郎の紹介で高田早苗（文學部第三年級）に會ひ、懷を開いて時事を談じたが、小野のベンザム流の實利主義と、高田が學窓で學び得た第二最善主義（セコンド・ベスト・プリンシプル）とは互ひに共鳴するところがあつた。高田は大學の學友を物色して六名の同志を得、小野を中心に鷗渡會（地名に因む）を結び、時事の研究と共に憲法の調査に從事した。その六人とは、岡山兼吉、市島謙吉、山田一郎(以上共話會)、砂川雄峻、山田喜之助(戊寅社)、天野

爲之（晩成會）の人人であつた。(三)

十四年十月の政變によつて大隈は下野し、小野、矢野、その他多數の少壯官吏がこれに殉じた。かくて、同志の間には、從來の大隈支持の三派たる報知派、毎日派、大學派を打つて一丸とし、新なる味方を招いて公然たる一政黨を組織しようといふ議が纒つた。此の時は、板垣退助を中心にした自由黨は結成されてゐたが、自由黨が、ルソオの民約論に理論的根據をもとめ、自由平等をスローガンとしたに對し、大隈を中心の新政黨は英國流の漸進卽ち秩序的進歩主義を標榜することになつた。かくて十五年三月に至つて立憲改進黨の出現となつたが、此の時に發表した宣言及び主義綱領は、主として小野が起草したものであり、これには大學派の同志の調査が大に參考された。(四)

以上の大學生が大隈側、改進黨側に加はつたのに對し、別の運動が始まつた。それは法學部學生關直彥、渡邊安積、三崎龜之助、斯波淳六郎、伊藤某、江木衷、奥田義人等、文學部學生穗積八束、中原貞七、平沼淑郎等の會合であり、この方は文部省の九鬼少輔に糸を引かれたらしく、福地源一郎、丸山作樂、水野寅次郎等の立憲帝政黨に接近した、そのうちで關、渡邊、穗積は福地の東京日々新聞に關係し、三崎、江木、奥田等は丸山の明治日報に關係し、伊藤、平沼等は水野の東洋新報に關係した。(五)自由黨に加入した大學生はなく、たゞ藤田四郎が一人、これと聲息を通じてゐたのみであつた。

十五年の春は、世を擧げて主權論の論戰に賑はつた。それは、國會開設準備中の最大要件は憲法制定であり、憲法の制定には主權の所在を確定することを急須とするといふ趣意から、昨年末沼間の東京横濱毎日が火蓋を切つたものであるが、十五年に入るや、福地の東京日々が此の問題を取り上げ、毎日、朝野、報知がこれを駁し、自由新聞が飛び入りし、論戰反駁が互ひに再三に及んだ。論點の要は、主權在君か、主權在民か、主權在君民かの三つであるが、日々は第一、自由は第二、改進系は第三の說を支持した。勿論わが國の主權について直接に云々する者はなく、主と

して英國を例に引いて學理的に主權の所在を討論したのである。鷗渡會の同志高田市島山田岡山等は相議していふ、目前實地の小利害は所謂政談者流に一任しても可いが、かゝる學理上の大問題に至つては輕躁者流の囂々に附して甘んじてゐることが出來ぬ、我々は須らく此の問題に關して意見を鬪はしてその結果を公にしなければならぬ、と。かくて學業の暇を窃んで討究を重ね、『主權論』の一篇を公にした。全篇の大旨はオースチン氏の『法理學』に基いたもので、先づ主權の性質を明らかにし、主權を保持する主權者なるものは確定せる人ならざるべからざるを以つて、主權輿論に在り、主權道理に在り等といふは僻說の甚しきものと排し、問題の英國主權の所在に至つては、國王と貴族と下院議員選擧人の三者を合して始めてこれに當るといふ斷定を下した（主權在君民論）。此の論戰の始終を通じて、最も花やかな武者振りを示したのは、彼等の學友で政敵たる渡邊安積であつた。渡邊は東京日々に據つて、主權在君說を主張し、大學の圖書館を探り、博引旁證、當るを幸ひに駁擊し、遂に獨り相撲の觀を呈した。然し社會の輿論は、結局主權在君民說に贊成した。兎もあれ、かくて主權論の論壇は、結局大學生の持切りの如き觀となり、自然時の政治海に大學生の勢力を顯はす一端となつた。（六）

改進黨組成後小野が掌事の一人となつたので多忙になり、鷗渡會の會合も途切れがちとなつたので、改めて學生達だけで秋葉會といふものをつくつて（萬世橋外秋葉原に會合するので）、時事研究をした。（七）

政府は、民間の英佛主義に對し斷然ドイツ主義で臨むことにし、文部省も旨を受けて大學の中心をドイツ學に置くことになつた。その上大學生が現實の政治問題に關係して、自由民權を口にするのを見て喜ばず、卒業前教授を通じて學生を慰撫して官海に入ることを勸める一方、當時政治學理財學哲學の教授として學生間に人氣のあつたフェノロサをして十月二十八日學位授與式の際演說せしめた。フェノロサは學生の或る者が、「卒業後官吏になる事を謝絕して政治に關係する意志ある事を暗に攻擊して、私共に對する警告と言はうか、或ひは非難ともいふべき趣意の演說」を

試みたのである。(八)然しその警告乃至非難の對象とされた秋葉會員達は卒業するや、官吏たることを拒絶し公然改進黨の運動に奔走した。

改進黨は政治上の結社であり條例に束縛されて窮屈になるので、舊鷗渡會の同志が主になつて明治協會なるものを組織し、改進黨員及び黨員外に會員を求めて社交機關とし、別に政治法律經濟を研究する機關として壬午協會なるものを設けた。(九)且つこれも小野梓の肝煎で、同志の機關紙內外政黨事情が發刊され(十五年十月)、同月、同じ人々を中心とした政治經濟法律專門の學校が牛込早稻田に起された。今の早稻田大學の前身たる東京專門學校が即ちこれである。舊鷗渡會員の政治活動はかくて一段落に達した。

鷗渡會員の集散離合、帝政派の學友達の消息その他についてはまだまだ多く語るべきものがあるが、私はもう逍遙と政治運動の關係を語る前置としては十分過ぎる程語つたと思ふから、こゝで打ち切つて、逍遙自身のことを語らう。

前にも述べた如く、逍遙は元來政治嫌ひであつたので、同學の友人達がかく改進主義(乃至保守主義)の第一線に立つて奮鬪してゐた間も、敢て自らこれに加はらうとはしなかつた。然し高田市島等の親友は何れも改進黨側に加はつてゐただけに、自然改進黨のシンパサイザー的立場に立たされるに至つた。殊に鷗渡會派の機關紙たる「內外政黨事情」の發兌されるや、一層明瞭にこの態度を示し、彼はこの新聞の常寄稿家として政治的寓意のある戲文を投じ、啓蒙的役割につとめた。又政黨事情と前後して東京繪入新聞にも同樣の政治的戲文を投じて、消極的ながら同じ役割を果した。

かういふ役割を果したことが、然し當時の大學當局には如何に危險なものに見えたか、明治十六年九月一日の郵便報知新聞にかういふ記事が出てゐる。

『東京大學にては此の度官費研究生と云へるを置き、官より每月二十圓計りの手當金を給して隨意に研究せしめらるゝ由、之は卒業生に限る事にて、日下已に四五名ありと云ふ。蓋し是れは、年々卒業する生徒を洋行せしめらるゝ

には莫大の費用を要するが故に、俄に一時多人數を遣はし難く、去ればとて從來洋行の見込ある者を、他の事業に就かしむるも不都合なれば、暫時斯る滞り場所を設けられたるならんとの噂なり。又昨年の卒業生は多く仕途を覬みて、民權などを唱ふれば、本年の卒業生にはなるべく早く事業を授んとの趣意にや、大學總理より各卒業生の志願を聞合せられたりと云ふ。去る配慮ありし故にや、本年は兩三名官權新聞の記者となりし人々ありし由なり。野に在つて民權にても張らんとの志ある人は、唯坪內雄藏氏一名なりと聞く。又去る六月の試驗にて豫備門より本科に入りし生徒は、文學科中の政治經濟の部に入る志願者最も多かりし由、又以て人心の向ふ所を察するに足れり。」

十六年七月大學を卒業すると共に、逍遙は高田氏の勸誘で昨年新設の東京專門學校政治學科の講師となつた。受持つた課目は、英語譯讀、ベジョット『英國憲法論』、歷史などであつた。政治學科の講師には高田、坪內の外に鵑渡會の山田一郎、天野爲之がゐた。面白いことには、高田が英國憲法、英國憲政史、貨幣論を講ずる傍らシェークスピヤその他の英文學を講義したことである。此の頃は、逍遙よりも高田氏の方がかゝる文學物の講義は得意であつた。逍遙の專門學校政治學科講師は、二十三年に同校に文學科が創立されるまで續いた。

逍遙は、いふが如き政治嫌ひであり、又卒業早々、學校教授の傍ら文壇に活動して文名を揚げつゝあつたが、然しその環境と學修に感染されて、一面政治の臭ひを拂ひ去ることが出來なかつた。彼自らもその事は認めて、後年或る事につけてから述懷してゐる。(二〇)

そのころはわたしもまだ二十臺の己惚れ盛り、一つは時勢の然らしめたところ、二つには兎も角も政治經濟の學を修めて東京大學を出たばかりの際であつたので、人並に政治論や社會改良策などを口にしてゐたもので(中略)。見事、準政治家氣取りだから大笑ひである。云々

文中の「そのころ」とは、明治二十年ごろを指す。明治二十年といへば、逍遙の創作的活動の絕頂ともいふべき時で

あり（少くとも外的には）文壇第一流の大家として、新興文學の大先達として盛名を馳せてゐた時である。その時にしてなほ且つ然り、上の語によつて、彼が意識的に嫌つた政治的なるものが、無意識的に意外にも深く浸みこんでゐたことが察せらるゝ。

註（一）『梧堂言行錄』七二―七三頁
註（二）同　八九頁、此の一節は主として同書八六―八九頁を節略せるもの
註（三）同　九一―九三頁及び、『半峰昔ばなし』第三〇、六六頁以下
註（四）『半峰昔ばなし』第三四、七六頁以下
註（五）『我觀』改卷第五號（大正十三年十一月）三宅雪嶺「自分の政治關係」による。
註（六）『梧堂言行錄』九三―九六頁、及び三宅雪嶺『同時代觀』明治十五年（上）の條（昭和五年九月、我觀八十二號）
註（七）『梧堂言行錄』九八頁
註（八）『半峰昔ばなし』第二八、六四頁、『同時代觀』明治十五年（下）の條（昭和五年十月、我觀八十三號）、二書共に七月卒業式の際とするが、事實は十月の學位授與式の際である。
註（九）『梧堂言行錄』一一七頁
註（一〇）逍遙先生隨筆『柿の蒂』（四）、『演劇博物館』第六號（昭和五年二月二十日）所載

三　初期の文學活動

我觀揭出の「自分の同窓」の文中で三宅雪嶺は

坪内雄藏氏は十六年に卒業したが、其頃學校でも、世間でも、文藝に重きを置かず、氏も強ち文藝を以て立たうとせず、高田氏が文藝に關係する程度に於て坪内氏が政治教育に關係した。云々（一）

といつてゐるが、これは一面に於いて當つて居り、一面に於いて當つてゐない。勿論本人には卒業當時稗史小說家になりきらうといふ覺悟はなかつたが、然し卒業後、文壇に新興の機運が何時とはなく動き出してゐるのを見、而かも織田純一郎の『花柳春話』や矢野龍溪の『經國美談』が第一流の小說としてもて囃されてゐるのを見て、あき足らず、同好に對して、これは眞の小說的文字ではないといつたところ、高田氏や市島氏に、では君が一つやつて見よと煽てられ、自身も然らばやつてみようといふ氣になつて作家生活に入つたものといふ(直話)。

左に明治十六年七月以後、逍遙が文壇に名を列してから二十三年前後までの逍遙の文學活動及びその交友の一般を見るのであるが、然しこれも大體は世人の知つてゐる事柄のみであらうから、概念を整理するといふ位の意味で、年譜風に簡明に列ねて置かう。

明治十六年

「自由太刀餘波鋭鋒」の譯を續行、十二月譯了。

「書生氣質」の原型たる「遊學八少年」を案ず。

此のほか「小說神髓」の第一稿略ぼ完成。

明治十七年

一月「泰西活劇 春窓綺話」出版。

五月「自由刀太」出版。

六月「遊學八少年」出版の約成る。

七月リットン「リエンジイ」起譯（十二月脫稿）。

十二月岡野碩より新創文藝雜誌の主任になつてくれとの話あり、意ありしも談成らず。

此の年「小說神髓」第一稿成る。

明治十八年

二月「慨世士傳」（リエンジイ）出版、この作の序文で始めて小說論を公にす。「神髓」の主旨を縮めしもの也。

同月「小說神髓」出版の約成り、綴り直しを始める（三月出來）。

三月「假作物語の變遷」を中央學術雜誌に掲ぐ（第一號、二號、五號）

四月「當世書生氣質」を本式に起稿す。「遊學八少年」の趣向を變ぜしもの。

五月「小說神髓拾遺・時代物語」中央學術雜誌（第六號）に發表、「神髓」は未刊なり。

五月—六月「粹の釋義」、「粹致の活用」を讀賣に載す

六月「書生氣質」分册第一號出版（十九年一月終刊、十七册）、

七月「ハムレット」物語を中央學術雜誌（第九、十一號）に掲ぐ。

八月「內地雜居未來の夢」の案

同月自由燈社員（齋藤賢）來訪、同社員坂崎紫瀾の意を致し、小說協會といふものを作らんといふ。

同月「小說の主眼」（「神髓」の一節）を自由燈に發表。「神髓」未だ出版されず。

九月「內地雜居」を起稿。

同月漸く「小說神髓」第一册出版（十九年四月第九册終刊）。

十一月初旬「京わらんべ」起稿、此の年內に脫稿す。

十二月「妹と背鏡」第一號出版（十九年八月終刊、全十二號）。案は「書生氣質」脱稿後間もなく立てしものといふ。

明治十九年

二月「稗史家略傳並に批評」を中央學術雜誌第二十一號以下に載す。總論は批評論にして「神髓」と參照すべきもの。

三月より「烈女傳」即ち後の「朗蘭夫人傳」を草す（四月草了）。

四月「內地雜居」第一號出版。

五月政學講義錄のため西洋歷史を草す。

同月「文章新論」を中央學術雜誌（第二十八、三十二號）に載す。

九月「美とは何ぞや」を學藝雜誌第二號以下に發表、「神髓」の補正なり。

六月「京わらんべ」出版。

六月「巣守の妻」を女學叢誌第二十九號より發表（二十年三月五十二號終）

八月、この月より今日新聞の論說欄を補助。

矢崎嵯峨のやの「裏店の噂」を刪正す

十月「朗蘭夫人傳」出版

嵯峨のや「神經の罪」に加筆して今日新聞に載す。

十一月より讀賣新聞の雜譚欄補助。

十二月「新變六淑女鑑」出版、これは變六體の小說也、これを種として須藤南翠は改進新聞へ「庭訓籠飼の黄鸝

を書く。浪華新聞、金港堂小説を乞ふこと頻り也。

明治二十年

一月、讀賣新聞客員

「旅ごろも」を讀賣に掲ぐ

同月十六日、厚生館にて「美術論」を演説す。

二月嵯峨のや「美人の面影」を浪華新聞に掲ぐ、時々これを補助執筆す。

四月「此處やかしこ」を繪入朝野に掲ぐ。

言文一致の試みとして公然文壇に問ひし最初のものか。

七月關西旅行中、大阪朝日入りの相談成らんとす(遂に止む)。

九月嵯峨のや「不如死」を補筆し大阪駸々堂へ渡す。

同月「批評の標準」中央學術雜誌(五十八號)。

十月「種拾ひ」(小説の)を讀賣にかゝぐ。

專門學校の講義錄へ西洋歷史及び「論理實習」を草す。

十二月「贋金つかひ」を讀賣新聞に、「忘年會」を同じ新聞に掲ぐ。

「可憐孃」出版、「巣守の妻」の改題せるもの。

明治二十一年

一月「松のうち」を讀賣新聞に掲ぐ、

一月下旬新潟新聞へ「赤星屋物語」といふものを送る(二回中絶)。

二月同新聞に「無敵の刄」（飜譯）送る。
四月「外務大臣」を讀賣新聞に草す。
七月、此の頃頻りに寫生文を試む。
八月「松のうち」出版。
同「贋金つかひ」出版。
九月、文學研究會創立（後單に文學會として知らる）、時の文壇第一流の人々のみより成る。
十一月「細君」起稿、苦心慘澹にて十二月漸く成る。
十二月「少年園」に「少年の心に於ける『宇宙』の變遷並に危險たる『宇宙』を寄稿、文中自らの少年時代の嗜好に誤られしを悔ひて世の少年を誡むる意あり。
此の頃より演劇改良に志を轉じ始む。

明治二十二年

一月、小說を賣品として草することをやめ、眞に修養せんと志す、文學を眞劍に考へ出せし結果也。ゾラ、サッカレーの諸作を味讀す。
二月憲法雜誌に「大憲章」（三回中絕）。
三月、此の頃アヂソンの文章を愛讀し、スペクテータア誌にならひ、「中央都府」といふスケッチ雜誌風のもの﹅案を立つ、當時の首都の各方面人士の內幕を描かんとするもの、蓋しこの案の小規模になりしものが「壹圓紙幣の履歷ばなし」なり。
五月、憲法雜誌に「姓名不詳奇病者」を載す、政治的諷刺也。

九月、演藝矯風會委員會

此の會に列せしが緣となり、脚本に筆を染むるに至る。

此の頃讀賣及び專門學校講義錄のために執筆す。

明治二十三年

二月「壹圓紙幣履歷ばなし」を讀賣に掲ぐ。

六月「小吳魏蜀誌」を同紙に掲ぐ、政治小說也、總選擧を當てこみしもの。

此の春より專門學校の學生有志のため自宅にて沙翁講義。

此の年專門學校文科創立。

秋「をかし」、「政界叢話」を讀賣に載す、英國文界以後の逸話小品集なり。

二十年以後はともあれ二十年前は驚くべき多忙な文學活動である。而かもこれは專門學校その他の二三の學校へ教授の餘暇に成つたものと知つては益々驚くべきものとなるであらう。且つその間には又、文壇に名を揚げて以來新に知り合つた文友諸氏との交際がある。これが又甚しく時間を喰ふ。多忙はいよいよ多忙である。從つて逍遙は十七年以後、肉體的には不斷に半病人といつて可い。胃弱、眼病、腦充血等、殊に胃弱と腦充血は容易に癒つてゐない。その文友の中殊に親しい人々三四を擧げると、齋藤綠雨、長谷川二葉亭、饗庭篁村、關根正直、矢崎嵯峨のやなどがある。此の間の消息を髣髴させる爲めに隨筆『柿の蔕』の二三節を引用しよう。(二)

十七年の夏から十八年、十九年は私に取つては思ひ出が多い。『小說神髓』も『リエンヂー』(慨世士傳)も『書生氣質』も『中央學術雜誌』も『妹と背かゞみ』も『內地雜居』も『京わらんべ』も『マダム・ローラン傳』も十八年五月以前の出版であるからである(著者云ふ、此の年時の記憶違ひであることは、前記と參照すると明白である)。

『女學叢誌』に『可憐嬢』（巣守の妻）を書き、『今日新聞』の論說を補助したりしたのも十九年秋頃の事である。それから東洋館以外のあちこちの出版書肆と知り合ひになつたのも、『書生氣質』の第二號を出した十八年の七月に長原孝太郎君の來訪を得たのも、專門學校が最初の卒業生六十七人を出したのも、齋藤（賢、後の正直正太夫）や、今の關根正直博士や、故竹のや（饗庭篁村）や、長谷川二葉亭や、矢崎嵯峨のや（鎭四郎氏）なぞと相知り、中にも二葉亭、竹のや、嵯峨のや、當時江東みどと名宣つてゐた正太夫なぞとは、月に少くも三四度は文藝談で半日餘を過すといふ程になつたのも此年の秋から十九年へ掛けてゞあつたからである。狩野芳崖翁が突然二度まで訪ねて來たのも其頃。島田、尾崎、犬養の諸家と顏を合せたのも、故大隈老侯に初めて接したのも其頃。しかし私は大の出不精だ。關根君の宅へは、近くもあり、其嚴君只誠翁に（化政度の作者らの傳記に關して）敎へを聽く必要上、時折訪問したものゝ、其他はいつも受け身。一つは前記二ケ所（卽ち專門學校、進文學社）の出敎授の外に、小石川の同人社が每週又九時間殖え、總計一週三十六時間、——進文學社の時間は其頃減じてゐたが——それに往來の時間が要る、かた〳〵出歩く暇がなかつたのである。

隨つて客の來訪も殆どきまつて日曜日であつた。さうして自然の結果として、落ち合ふことが多かつた。竹のやが來る、酒客だから平時でも酒を出す。そこへ長谷川が來る、矢崎が來るといふやうなことが每々あつた。齋藤と竹のやと一しよになつたこともあつた。

矢崎君が宅へ寄寓して嵯峨のやおむろと名宣つて「神經の罪」を『今日新聞』に私の加筆で載せたのも、十九年の十月。今の金子堅太郎子がわざ〳〵訪ねてくれられて、ウォシントン・アーギングを激賞し、「あゝいふものを善く味讀なさるがいゝ」と懇ろに忠告してくれられたのも其年の八月。話がはずんで、いつの間にか十二時を過ぎた。下婢任せで何の用意もない。冷飯に玉子燒で、當時既に歷々の官僚紳士であつた子爵に晝食（ランチ）を勸めた。噫有りがた

迷惑であつたらうと、今でもそれを思ひ出す。

此のうちで、兄事されつゝ根深い影響を受けたのは二葉亭であり、嵯峨のやは唯一の門弟格である。此の頃の逍遙には、學問上から師弟關係にある青年は多かつたが、文壇的に門弟といふものは殆んどなかつた。又それだけに黨閥なども出來なかつた。前述の年譜式記事でみると、明治二十年以後、漸く文學活動が衰へかけるが、これは逍遙自身のいふ如く、二葉亭の影響による自覺から生じた心機一轉と多忙と病弱の所爲であつたらう。此の頃の逍遙を遊蕩氣分にみちた戲作者らしく見る人もあるが、それは大體はデマで、彼は文字通りの奮鬪家であつた。彼はこの點で先達の任を立派に果した。さうして甘んじて硯友社派その他の青年文學者と第一線を交代したのである。

註(一) 我觀第十四號(大正十四年七月)、東京堂版『小說神髓』に抄出附載。

註(二) 『演劇博物館』第六號(昭和五年二月)

四　政治的戲文について

此處で私は漸く本論に入る、だが肝心の本論は前置的研究に比して、さう長々しいものではない。それは、本式に政治小說と見なすべきものは、逍遙の小說中で僅かに二三部に過ぎず、他は準政治小說とも目すべき飜譯小說、乃至眞のいさゝか政治的分子を含んだ寫實小說に外ならぬからである。私は、先づ明治十六年以前、卽ち大學在學中の逍遙が一二の新聞に投寄した政治的戲文を調べてみる。

『發蒙攪眠 清治湯講釋』

此の篇はかゝる逍遙の政治的戲文の最初であるばかりでなく「春のやおぼろ」と署名して公けにした著作の最初である點で注目すべきものである。戲文とはいひ條、やゝ纏つた形で幾分の小說的結構をさへもつてゐる。明治十五年九月十三日から同十二月二十六日まで東京繪入新聞に斷續的に掲載された「清治湯の講釋」なるものがそれで丁度十回で終つてゐるが、腹稿はまだまだあつたものらしい。先生が神代種亮氏に語つたところによると——

『清治湯講釋』は其頃、國會開設論が喧しい最中で、我々は學校で憲法論の講義を聽いてゐたけれども、世間一般には憲法の何物かゞよく知られてゐないので、之を俗解したらばと思ひついて、三馬や魯文の口調に眞似て、書いて見た。當時上野廣小路、柳原通りなどに遺つてゐた麥湯店に擬して清治湯の爺が政治（即ち立憲政體）を講釋するといふ趣向を立てたもの。（二）云々

これで此の篇の書かれた主旨や趣向の大體は覗はれるが、なほ作に即して梗概を述べると、（第一回）清治湯の爺が湯歸りの中年職人を捉へて清治湯の由來能書きを並べ、職人の注文で國會の講釋を始める。作者、自家の立場を說明していふ、『コレハ英吉利の「ポリチーク」さんといふお醫者の直傳で、原語では「ムヘンム」湯と申すさうでございます云々。』（第二回）は國會の效能（專制政治を制す）、國會は代議士によつて働くこと、代議士の職制等の說明である。（第三回）議院のこと、二院制、上院の論（學者華族等から成り、民權家の自儘跋扈を抑へるため）、こゝで一寸議院の說明を中絕して選擧法の說明と代る、第一は制限選擧である。（第四回）つゞいて第二普通選擧の說明、こゝで普通選擧の弊を擧げ、制限選擧を可しとしてゐる。扨話が上下院の選擧法に移る。

今夜は喋舌る事に骨が多いので、洒落一ツいふ隙がなくて、お前さんも定めし聞憎かつたらふ、トいひながら、ふと見ると、客はトウニ欠伸を二ツ三ツして歸つて仕舞つた跡ゆゑ、老爺はロアングリ。折柄居酒屋の中でうなり出したは千本櫻の淨瑠璃らしく「さる程に二位の局は安國體を奉きまゐらせ「ハヽア彼奴も二局主義と見えるわい、トいふをり向ふから遣て來るは、米沸湯の末流に飲酔つた生聞書生と見え、巡査も恐れぬ高聲で「一院の行く所を縱にして萬乘の皇帝を凌ぐ――「イヤハヤ是はたまらぬ、辟易の賦ときて居るワイ。

（第五回）客は町家の少年、老爺に「政府とは何ぞ」ときく。老爺の答へ、政府の職分、第一一般の安寧幸福（内外の別あり）、第二國民の權利、財産、身體、榮譽の保護云々。

ソレ此間もお前さんの隣のお福どん（註、福地源一郎）が、お自由さん（自由黨）は「キョウワ」の清治さん（共和政治）と色だと、自分の家の白壁へ合々傘を書いた時に、お自由さんは憤怒だつたが全體お前さんとお自由さんの家内の人々とは餘程怪しく思はれるけれど。「ナニ決してそんな事があるものかネ。「イエサ無けりやアいゝが世間の評判サ。これは兎も角も、たしかに證據を見た上でそれから書けば一も二もないが、お福どんが岡焼半分で、向ふみずに書いたから騷ぎが大きくなつて、とうとう長い詫書をお自由さんに出したぢやア有りませんか。榮譽といふものは總てアヽで、浮名を立てられりやア誰でも憤怒から、そこで政府は骨を折つて、名譽といふものを保護して下さるのサ。云々。

（第六回）廿三ばかりの細君を相手に、女權反對を諷す。政黨の效能は憲法あつてのもの、憲法の用（自由政體の爪牙）政黨は主義による、情實利權によるべからず（中には利益づくのもあり云々）、（第七回）客待の車夫、老爺に政黨の用について議論を吹つかける。老爺の說明、演說は政治思想普及の手段、政黨人の本務にあらず、政黨眞成の職分、（第八回）政黨の必要（第九回）多數決の必要、（第十回）多數決と自主自由のこと、以上で終る。作者の態度が無偏

無黨を標榜しつゝ、暗に改進黨主義に贊してゐるところ、而かもその贊成の消極的であるところが、如何にも政治嫌ひの先生の政治論として興味があらう。

註（一） 太陽第三十四卷一號（昭和三年一月一日）「逍遙先生の事ども」私は略ぼこれと同じお話を先生から伺つてゐる。

內外政黨事情

鷗渡會員の機關紙たる內外政黨事情は表面服部撫松の江湖新報を改題したものとなつてゐるが、その存續期間の短かゝつた割に（十五年十月――十六年二月）改進黨側の指導理論の宣明に相當大きな貢獻をしてゐる。同紙十九號以下連載の「政黨政治」の如き、その尤なるものである。この新聞には逍遙の友人市島謙吉、山田一郎の二人が關係してゐたので、逍遙もこれに數篇の政治諷刺的戲文を投じてゐる。

（一） フイとなる勿れ（同紙第十三號、明治十五年十一月十一日）
（二） 狐(コン)親會（同紙第十七號、同年十一月十九日）
（三） 家の爲にならぬ乳母（同紙第三十一號、明治十六年一月十九日）
（四） 鐵道馬車（同紙第三十二號、同年一月二十一日）
（五） 順逆兩臣の名（同紙第三十五號、同年一月二十七日）
（六） 畜妾の目的（同紙第三十六號、同年一月二十九日）
（七） 子守の職務（同紙第三十七號、同年一月三十一日）

諷刺は隱微で、要領を得にくいところもあるが、（一）は帝政黨の迷愚を憐れみ、早く改進黨に加入して共に君國の爲めに盡せ、去就に迷ひて形なしの「フイ」となる勿れと敎へたもの、（二）は各地有志家の民權政談に對して地方官吏

が壓迫するので、有志家側でも懇親會といふ新手を案出して政談を逞まゝにしつゝあることを諷せるもの、(三)は乳母（卽ち大臣）がお薩第一主義（薩長專制政治）宣傳のため公金を私用することを咎めしもの、お三々といふは、福地、丸山、水野の三人、保護金拜領者流の代表者と見ていふのである。(四)は鐵道馬車に托し、馬車に種々あるをいひて政黨の目的を諷し、結局改進黨第一なるを宣傳せしもの、此の種戯文の見本として全文を引用して置く。

鐵道馬車あり新橋より廣德寺前をさして發せんとす先づ往來の人に向つて揚言して曰く我馬車は實着馬車なり尋常の馬車の如く狂馳して人を傷るが如き事をなさず妄に急いで顚覆するが如き事をなさず漸々に進んで廣德寺前に至らんとすると、其他あまたの馬車あり曰く我馬車は急進馬車なり曰く我馬車は奮進馬車なり曰く我馬車は中進なり曰く我馬車は私用なり曰く我馬車は御用なり曰く我馬車は鐵道馬車曰く何曰く何其馬車の數の多くして其往來人に向つて揚言する所の異る事の甚しき亦た驚くに堪へたり往來の人相顧て語て曰く澤山なる哉馬車の種類や其の主意を聞けば同じく是人を淺草に運ぶ具たるに外ならざる如しと雖も其運轉して淺草に至るの方法の名を聞けば各々異る者の如し漸進や實に結構なり急進や實に便利なり奮進や甚だ愉快ならん私用や何だかのるも氣の毒なり御用やどうも憚多く恐れ多し然り而して中進馬車とは何の事だか合點參らず鐵道馬車に至りては承らずとも二百も合點とはいはでもの名目なるべし扨どの車へ駕すべきか我己に急進の便利なるを知り漸進の結構なるを知り奮進の愉快なるを知つて猶乘るに躊躇する所以のものは彼如何の方法を用て我を幸福イヤ廣德寺前に運ぶか其手續を明にせざればなり漸進結構なりと雖ども遲きこと病牛の這ふが如く鯰に遇ふ每に車を停て禮拜を行ふ等の事あらばイツソ歩く方が氣樂なるべし急進狂馬の牝を追ふが如く或は人をひき倒し或ヒツクリかへるが如きいと劍呑なる事多くば却て疾歩獨行する大丈夫なるに劣りつべしハテどうしたらよからふなア忽然背後に一馬車あり馬丁高く叫んで曰く我馬車は快進馬車なり馬は「アラビヤ」を使ひ馬丁は多年御に熟達したる者を傭ひ客は上等種下等種を選ばず衆人に便利

なる様に腰掛を設け腰掛より新織の「ジウクン」を敷き尻の痛からざらん様になし道を眞直に線路にとり豫め一人の馬丁を車前に走らして往來人に怪我なからんことを力む其外前進の方法は箇樣々々なりと往來の人相顧て又謂て曰くナールホド此馬車ならば安心して乗るを得べし矣朧曰く鐵道馬車は往來人の便に供する者なり決して一時の玩弄物にあらざるなり故に乗客の最も熱心して知らんと欲する所のものは其運動の方法なり然るを毫も運轉の方法を告げずして妄矢鱈に乗車をすゝむ田夫野孃にあらざるよりは誰かかゝる胡亂なる馬車に乗込む者あらんやさわさりながら世の中の樣々なること立派なる顔付の人達にて遠慮はもとより近慮もなくかゝる胡亂なる鐵道馬車にしばしば乗込者あるは抑何の心ぞや眞の氣の知れぬ人達といふべし

（五）は、將門を名のるは恐るべきも、人皆將門の何人たるを知つてゐるから與する者が少ない、たゞ正成の名を盗んで、表に忠君を唱へて裏面に私利を營み、世人を迷惑するに至つては、この害たる、邪害黨（社會黨）より多いといふこと、（六）は薩長政府が定評ある無節操者流を相手に保守主義の政黨をつくり、國財を浪費し、且つ自家の基礎を危くするをそしつたもの、（七）は地方官が有志家の取締に狂奔して一般人民の治安の任をお留守にしてゐることを諷せるものである。

東京繪入新聞

この新聞は傍訓新聞中の先輩であり、元來政治臭のない新聞であつたが、社長格の前田健次郎が改進黨に加はつて以來、多少の政治的色彩を帶び、改進黨の別働隊として相當な力を添へた。先生は「清治湯」に引きつゞいてこの新聞に數篇の政治戲文を寄稿してゐる。

（一）奥樣がた旦那樣がたの御注意（同紙二二八〇號、明治十六年一月二十三日）

（二）　政黨政治（同紙二二八八號、同年二月二日）
（三）　政黨の目的（同紙二二九七號、同年二月十四日）
（四）　地方黨（同紙二三一〇號、同年三月一日）
（五）　眞成の生徒（同紙二三一三號、同年三月四日）

内外政黨事情の分の例に倣つて簡單に解説すると、（一）は國會開設の期も定つたとはいへ、大事のことゆゑ政府任せだけにせず民間の人々自身も盡力すべしといふ意を諷したもの、國會をお粥に喩へ、お粥は大切のものゆゑ下女任せにせず主人主婦も注意せよ云々とある。（二）は、政黨政治は宜しく政策政綱によつて自然に進退すべきことを教へたもの、政府を下女に喩へ、下女は主人（即ち國民）の嗜好にかなふ樣料理鹽梅を加減するは可なるも、自ら鹹口なるに主人が甘口らしく見せかけて、いつまでも臺所の權を占るは惡い、宜しく甘口の下女と交代して主人が再び鹹口となるのを待つべし、給料に牽かれて戀々たる勿れ云々。

（三）　は政黨の目的はその主義政綱の行はれるが肝要で必らずしも自ら官位につくを欲するものではないといふ意を明かにせるもの、矢張り下女と主人の關係に喩へてゐる。主人が甘口から鹹口に代つたのに驚いて、急に鹹口になる、主人は別の下女をと思つたが、從來の下女が鹹口になつたのに我慢して別の下女を入れない、別の下女はつまらぬ譯だが然し此の下女は一家衞生の爲めを思つて鹹口主義をとつたのだから、給料の如きは問題でない、自分の主義の行はれるのを喜ぶ云々。然し利欲問題といふ如き誤解の生ずるのもデモ政治家があるからだと止めをさしてゐる。
（四）政黨の存在理由は全國一般の爲めといふ點にある。然るに日本の現狀では地方に小政黨が分立してゐる。かゝる政黨は私黨である、私黨の主張は手前味噌に過ぎぬ國家の料理に心配する人々は此の點に注意すべきである。（五）甲乙二學生に學問の目的を問ふことに托した諷刺、單に國會を作り上げたといふことのみを目的とする人は眞の有志家

ではない、眞の有志家は國會が出來るとか出來ぬとかいふ事に論なく專念一心に國利民福を慮かる人をいふと說いたもの。內外政黨事情の方は純然たる黨機關の政治新聞であるが、東京繪入新聞の方は大衆向き婦人向きの小新聞であるので、それだけに、彼に比して文章もが層砕けた體をとり、調子も一段引下げてゐるのが分かる。同時に彼に比して改進黨的色彩が益々稀薄になり寧ろ一般啓蒙的なものになつてゐるのも、事實である。

この外に、同じ頃先生が鄕里の名古屋新聞に數篇の政治的戲文を投寄してゐる。その目次は左の如くである。

○野二馬と懶惰漢（明治十六年一月二十一日）

○政黨の目的（——一月二十五日）

○無形物を敵とせよ（——二月六日）

　政治上の爭ひには主義をうつて、人をうつ勿れ云々。—

○自由は何故貴きや（——三月十四日）

　萬人の幸福を得るため云々。

○自由の濫用（——三月十八日）

○社會は船の如し（——三月二十五日）

○翠雨居士に答ふ（——三月三十日）

名古屋新聞は全部調べ上げたのではないから、勿論遺漏が多いことゝ思ふが、今は、これにも先生の政治的戲文が載つてゐるといふ事を知るだけで滿足するより仕方がない。戲文の特質は、前二者の內外政黨事情や、前者即ち東京繪入**新聞に出たものと、大差はない。**

以上の政治的戲文全體に通じていへば、大體として、先生の政治的イデオロギーの如何なるものかを反映してゐる上に、明らかに政治小說の萠芽的分子を含んでゐるといつて可い（殊に「淸治湯講釋」その他に於いて。）

五　著　作（一）

『泰西活劇春窓綺話』・『自由太刀餘波鋭鋒』

この二部は共に飜譯であり、原作は別に政治的意義を含んだものではないのだが、譯刊當時の政治的空氣、乃至譯者の態度、出版者の宣傳、世人の印象などの事情によつて、今日準政治小說風な位地を與へられてゐる。

『春窓綺話』は前述の如く、逍遙と高田半峯の合譯に成り、發案は高田氏、明治十三年夏季休暇中に着手し、十四年中に脫稿したもの、十五年の夏、半峯の共立學校時代の舊師であり、當時文名の高かつた服部撫松の手を介して書肆に持ち込んだのだといふ。（一）サア・ウオータア・スコットの『湖上の美人』を漢文くづしの散文體に譯し、『春江奇緣』と題してあつたのを、服部氏が、今の題に改め、且つ順序まで顚倒する程十分添削潤色して、自己の名で出版したのである。撫松子は、存外、骨を折つて添削もし潤色もして、處々は全ページを眞赤にしたらうとも想像される。でなくとも隔行位に加筆をしたらしく思はれるほど、私なぞの迚も知らなかつた又は使ひこなし得なかつた怖ろしくむづかしい漢字や成語が目まぐるしく粧點されてゐる。甚しきに至つては、他の譯本から得たらしい全く別の筋を加へたり、梁山泊だの魯智深だのを、比喩の爲ではあるが、引合ひに出したりして、うつかり讀むと、支那小說の訓讀かと思ふやうな箇處が多くなつてゐる。纂述とした所以であらう。云々（二）

これを飜譯するに至つた動機は、兩人ともスコットが好きだつたからで、別に政治的動機はなかつた、又スコットの

原作そのものとて無論政治的イデオロギイを籠めたものではい、然るに撫松はこれを一種の政治小説であるかの如く解し、政治小説的分子を極力多からしめて、時代の空氣に迎合しようとした。此の書の原作は有名な古典であり、物語の荒筋も大概の讀者は知つてゐるので、こゝで繰返さうとは思はぬが、たゞ此のロマンチックな物語詩が撫松の手で如何に政治小説化されてゐるかといふ例證を二三擧げて見せたい。

撫松は其の自序に於いていふ、「余泰西小説ヲ讀ム每ニ、未ダ嘗テ泰西人ノ善ク民權ヲ說キ善ク國家ヲ愛スルニ感嘆セズンバアラザル也。且ツ泰西人ハ善ク小説ヲ作リ、其ノ著ハ唯ダニ翠ヲ刻シ紅ヲ剪リ綺語艶詞以テ人情ヲ眞寫シ風俗ヲ細述スルノミナラズ、婉々曲々、政治ヲ論ジ、民情ヲ說キ、讀ム者ヲシテ眞ニ喜ビ眞ニ怒リ眞ニ悲ミ眞ニ感ジ、覺ヘズ奮起セシム。斯クノ如クニシテ小説モ亦世ニ大益有リ、寔ニ小説ノ體ヲ得タリト謂フ可シ。故ニ政治ヲ論ズル者、小説ヲ以テ人智誘導ノ捷徑ト爲ス。豈ニ我ガ妄誕ヲ說キ婬風ヲ寫ス者ノ比ナラン哉。余モ亦小説ヲ好ミ、彼ニ傚フテ以テ我ガ小説ヲ矯メント欲スルノ意有ルヤ久シ。今敢テ譾劣ヲ顧ミズ、泰西小説ニ就テ誘導ニ益有ル者ヲ纂述シ、名ケテ泰西活劇春窓綺話ト曰フ」云々（原漢文）。これによつて撫松が此の作を全く政治小説視してゐたことが分かる。尙ほ本文第一回總叙めく邊を讀んでも、同じ考へが窺はれる。

本文上卷第一回から第六回までは全然撫松が他の史書から寫し取つて來たもの、スコットの原作には無い。スコットランド王ゼームズが奸臣デムロースに迷ひ、忠臣グリームを遠ざけてから、忠奸兩黨の對立となり、グリームの子マルコルムが父の仇を復し、君側の奸を拂ひ、人民の塗炭の苦を救はんがため、自由の大義を說きつゝ、味方を求めて全スコットランドを漫遊する。グリームの友の勇士ダグラスが奸人を斬つて愛女エレンと共に出奔するといふのが此の六回の荒筋である。而して此の趣向を貫穿せしめんが爲めに篇中處々に他書から得た場面を假說し、人物をさへ連れ込んで種々無理な工夫をしてゐる。上卷第九回、下卷第十一、十二回、第十四回の如き、その最も著しい例であ

る。かくて丘岳嶮しく湖水明媚なスコットランドの山地を背景にして武俠と戀の物語が、思ひもがけぬ自由政治の宣傳的分子を突然混入されて、表面は立派に政治小說化されてゐる。マルコルムはいふ、「一國ノ權利ハ社稷ノ所有ニシテ國王ト雖モ亦之ヲ私用スベカラズ而シテ一國ニハ君アリ民アリ上下相待ツテ以テ國家ノ安寧ヲ謀ルモノ卽チ是ヲ國權ト云フ」云々（下卷第十四回）、彼は所在同志に說くに此の言をもつてしてゐる。撫松のマルコルムはスコットのマルコルムではない、彼は自由の大義の爲にエレンとの淸い戀をも犧牲にせんとする程の東洋的志士である。又下卷第十八回ゼームス王が微服して土豪の長ロデリックと鬪ふ一段は、原作全篇中の所謂やまの一であるが、撫松は、そこにかういふ感慨の語を附してゐる、

「ゲイル」（ロデッイク）ノ飽マデ抗敵セントスルハ固ヨリ非ナリ「ゼームズ」ノ豪氣ヲ恃ンデ之ニ應ゼントスルモ亦非ナリ幸ヒニ「ドグラス」其人ノ如キアツテ中間ニ勸解シ「マルコルム」ノ輩頻リニ奔走シテ平和ノ局ヲ結バシメントスルニ値ハヾ之ニ委シテ可ナリ然ルニ尙且ツ之ヲ肯ンゼズ是ヲ以テ上下ノ調和ヲ失スルニ至ル若シ之ヲ平時ニ移シ人民ハ頻リニ權利ヲ主張シテ官府ニ抵抗セント欲シ官府ハ權力ヲ恃ンデ之ヲ壓服セントスルニ遭ハヾ將タ何等ノ策ヲ以テ之ニ處セントスルカ官民ノ軋轢ハ固ヨリ國家ノ福祉ニアラズ官民互ヒニ一歩ヲ讓テ調和ヲ致スニ如カンヤ本話ヲ讀ムモノ亦輕々ニ看過スルナカレ。

以上によつて大體を概することが出來やう。もと政治小說化したのは服部撫松であり、原譯者たる高田、坪内二氏ではないので、何れかといへば、撫松の章で述ぶべきであるが、便宜上こゝで述べて置く。

註（一）最初は高田氏の名で出すつもりか、明治十四年に同氏の名で板權をとつてゐる（版權書目第二十）

註（二）『逍遙選集』別冊第二の解題

「自由太刀餘波鋭鋒」に至つては、題からも推測されるが、内容が内容だけに、譯者逍遙に多少の政治的意圖があつた、それと、今一つ、逍遙は學校でローマ史をやつてゐたので、沙翁物中これが一番よく解つた、これが飜譯着手の動機であるといふ。同窓の愛川山田一郎がブルタスの演說（第三齣第二場）と電光で讀む密書の文章（第二齣第一場）だけを飛入りに手傳つてくれた。譯者の政治的意圖は、第一齣第一場、劈頭の數行の文字を見れば分かる――

政、自由なれば、國民和し、國民和すれば國治る、一人國を私して、文を舞し、權を弄する時んば、國立地に亂るてふ、貴き誠をそがまゝに、高き賤しき押なべて、共に和らぎ政どち、昇る朝日と輝ける、黄金の鷲は雲井傚す、遠き夷の國々の、端々までも羽をのして、四海に羽うちし羅馬國も、協和の制の弛みしより、國驕り人卑しく、廢れ行く世の慣とて、奸雄しばしば黨を樹て、私利を圖りて相軋る、爭亂絶間なかりける、

當時の自由民權者流の見方によると、シーザーは壓制暴政家の一典型であり、ブルタスは自由の闘士の好代表といふ風に考へられてゐた(一)、逍遙の意圖は幾分此の見方に動かされたものか、乃至進んでかゝるイデオロギイに應じたものか。譯者の態度既に然り、出版者がこれを一種の政治小說めくものとして廣告してゐるに不思議はない。

此書は昔し「ローマ」と云へる國の大將「シイザル」が壓制を行ひしが國を愛する人々に刺し殺されたる事柄を芝居にしくみし西洋の淨瑠璃本にて云々(二)

況んや讀者が、これをもつて、『經國美談』一流の政治小說視したのは當然であらう。

撫松が『湖上の美人』を政治小說化したのは豪傑譯の一種と見てさう怪むに足らぬとして、逍遙がシェークスピヤを譯して、而かもこれを政治小說的イデオロギイの衣かけにして世人に進めなくてはならなかつたところに、如何に當時の政治熱が深く人々の意識に染みこんでゐたかといふことが想察される。

註（一）『通俗民權百家傳』（萩原乙彦輯、明治十一年八月）、『志士必讀・暴君殷鑑』（瀨谷正二著、明治十三年）『泰西革命史

鑑』（久松義典譯、明治十五年一月）等に見えてゐる。

註（二）　明治十七年六月二十日讀賣新聞二八二五號（余は此の號から拾つたが勿論これ以前五月末頃の廣告にあることと思ふ）

六　著作（二）

『開巻悲憤 慨世士傳』

明治十八年刊の『慨世士傳』はリットン卿の歴史小說『リエンジイ』（一八三五年）を意譯したものであるが、これになると、十七年の二書に比して更に大に政治的分子が多くなつて來る。元來原作が殆んどそのまゝで政治小說に近い內容をもつてゐるものであるから、さうなるのは當然であらう。

選集別册（第二）の解題の中で逍遙は――

『リエンジイ』は『アイヴンホー』と共に、私があの頃最も愛讀してゐたイギリスの歴史小說であつたから、大分意氣込んで譯しはじめたのだつた云々

といつてゐるが、飜譯にかゝる直接の動機は別にあつた。『慨世士傳』のはしがき（二月）によると――

近ごろ友人賀來なにがしおのれが家に音信れつゝ一箇の草稿を示していへらくこは笠頓氏の著作に係る莉蓙兒の外傳なるがいぬる頃より譯しはじめて已に百葉あまりの稿を終りつしかるにさゝはる事多くて稿を脱すべくも思はれねば大人願はくばおのれに代りて殘れる分をも譯し了りて世に公になしたまはゞおのれの本意にも背かざるべし

と頼まれたのを承諾して訂正添削し、殆んど譯し代へて公にしたものといふ。原稿は『花柳春話』式の漢文くづしであつた。賀來某については少しも知るところがない。

尚ほこのはしがきには、此の書を公にする理由も併せて述べられてゐるが、これによると、これを公にしたのは小說改良の志によるもので、別に政治的理由があつた如くは見えない。このはしがきは、逍遙の小說改良論の第一聲として重要なものであるが、この點については後に語ることにし、こゝでは此の書を公にした理由は政治熱ではなくて小說改良にあつたことだけをいつて置かう。

『リエンジイ』の內容は何ういふものであるか。

コォラ・デ・リエンジイは平民に零落したローマ名家の出である。聰明で才學があり、夙にローマの古史を讀んで往古世界に君臨した威勢を偲ぶにつけ、當時（第十四世紀初め）豪族の割據に荒らされたローマの情ない有樣を嘆いてゐたが、いつとはなくローマ恢復の大業を以つて自分の任とするに至つた。ローマ恢復とは豪族の手からローマを取り戻して光輝ある昔時の民主共和の政治にしようといふのである。一日最愛の幼い弟が豪族の過失で橫死してから、この志が益々固くなつた。リエンジイは表面豪族に柔順なるが如く裝ひつゝ、機會を得ては自分の才學を示して、ローマ第一の賢者の名をかち得、暗に平民の人望を收めるに腐心した。勿論又、當時豪族に凌虐されて憤りに堪へなかつた法王の威光をも利用することも忘れず、法王代の大僧正レイモンドと深く結ぶところがあつた。平民も豪族の跋扈には不平を抑へかねてゐたころであつたので、リエンジイ等の言動は大に民心を得た。豪族の中でも心ある人は、リエンジイの大志を察して、これが備へをなすやうに說いたが、大勢は世務を知らぬ一書生として、齒牙にかけなかつた。

ラセルリ家のナイナ姬は美人に似氣ない大膽な野心强い女性であつたが、ひそかにリエンジイと相許してゐた。姬の理想は當世第一の偉丈夫でないと嫁さないといふのであつたので、リエンジイの大志は、姬の理想によつて大きな刺戟をうけた。

この時豪族で最も人望のあつたのは、コロンナ家のアドリアン・ヂ・カステロである、だがアドリアンは不圖リエンジイの妹アイリンと戀に落ちた、その上豪族の横暴と人民の不平のことを十分知つてゐたので、リエンジイの相手として立たず、寧ろ好意ある傍觀者の態度をとつた。此の間又豪族の傭兵隊の頭たるウォータア・ド・モントリイルが、日に迫つて來る危機に氣づき、自家の野心を遂げるはこゝぞと、或は豪族に献策し、或はリエンジイに助力を申出てみるが、共に成功せぬので、遠く北方に亂を避けて機を窺ふことになる、(此の書の後半でモントリイルは大に活躍する)。

かくてリエンジイは、一たびは公會所に掲げた諷刺畫によつて人民を煽動し、二たびは新發掘の古碑文の解說に托し、公衆の面前で公然ローマの衰徵と豪族の跋扈を說いて民心を激昂せしめ、一三四七年、遂に豪族の虛を衝いて、一味と共に起つて、ローマを占領し、新法を定めて自由の政治を宣言した。人民等はリエンジイの功業を禮讃する餘り、彼をローマの王にしようとするが、彼は辭してトリビューン(護民官)の職につく。

逍遙の『慨世士傳』はこゝまでゞ止まつてゐる(後篇未刊)、丁度『リエンジイ』の前半である。

護民官となつたリエンジイは、自分の空想的大望の實現を夢み、ローマ市民を首位に置いた新帝國の建設を計らうとする。且つ自己の才能に慢じ、威權を弄し、豪奢に耽つて重稅を課したので、大に民心を失つた。その上、法王の支持を失つてしまふので、豪族はこの時とばかり兵を集めてローマを攻める。然しリエンジイに苦もなく破られて了ふ。だが人民が次第に統治し惡くなるので、機を見て退職し、諸方に放浪して再擧を試みる。皇帝の手で捕へられて法王に引渡され、死刑の宣告をされるが、法王の代交りにあつて助命されるのみか、法王の代理としてローマに入つて豪族を伐つことを許される。リエンジイは奇蹟的にこの難事に成功して再びローマを支配するが、間もなく再び民心を失ひ、遂に群民の暴動によつて殺される(一三五四年)。

前半の才子佳人が助けあつて民主政治を恢復し大業を建てるのは勿論面白い、だが、小說的興味は却つて後半の波瀾と變化にあるともいへる。

『リエンジイ』そのものは勿論歷史小說で、政治小說ではないが、リエンジイが民主政治を恢復するまでの事蹟は讀者の受け容れ方によつては立派に政治小說の役を果す。出版者がこゝを狙つて、これを政治小說的に宣傳してゐるのは、さもあるべきである。曰く

羅馬帝國の末路貴族專橫を極むるに方りてリエンジ（元のまゝ）といへる豪傑夙に回天の大志を抱き民間より起り大に自由の氣を鼓舞して共和の制を復す其事史傳に詳なり云々（一）

譯者にはこの書を積極的に政治化する意圖のなかつたことは分かつてゐるが、以上の如き內容だけに、少くとも本文の或る部分は多少誇張されて自然に政治小說化されることを免れなかつた。今その例を二三擧げてみると、第一套の書き出しのところ、——

むかしは上下相和して、政ごちにし空蟬の。伊太利國も今は唯。貴豪の族の有となりて。平民またく\權を失ひ。陽に共和の憲を存じて。獨逸皇帝直轄の範圖なりとはいふものから（中略）。羅馬府もまたく\貴族の都となりて。平民は猶犬馬の如く。虐政のもとに呻吟して。遣る由もなき怨を呑む。云々

この一段は譯者の書き加へたものである。第四套リエンジイがいよいよ自由の爲めに起たんと決心したところ——

嗚呼我羅馬は已に已に。死灰を脫してまた再び花咲く時節到來せり。公道竟に壓制を。破るは屈指の間にあるべし。我黨加東の英靈を。再び地下より喚起して。至誠鯁義の精神をば。羅馬の市民に抱かしめて。昔にかへる羅馬城に、羅馬魂なる民を。見るは恐らく遠かるまじ。さしてかくいふ莉莛兒が。其大業の器械となり。此狂瀾を輓回する。

率先者とはなるべきなり。進んで自由の戰陣に。まづ其聲を擧得る者。われならずしてそも誰ぞや。進んで自由の軍旗を。まづ陣頭に飜かす者。われならずしてまた誰ぞや。嗚呼愉快なりいと頼もし。自由の氣運は油然として。彼濕雲の雨を帶て。暮山の傍を出るが如く。往昔に返る羅馬府の其盛大を今よりして。はや見得たる心地ぞする。偉業果して功を奏し。我國自由の春とならば。後世の人我をもて。羅馬民政中興の。祖とも崇めて相唱はん。其日は期して俟べきなり。あな愉し嬉しやと云々。

第五套、リエンジイがアドリアン・デ・カステロとローマ恢復の手段を論ずるところ――

之をなすには只一つの、手段を僅に存するのみ。其手段とは餘の儀にあらず。即ち羅馬民族の。輿論に訴へ正さんのみ。夫國家をして赫々たる。光を保たしめんとせば。貴族に依賴るは極めて非なり。彼輩榮利を謀ると雖も、曾て民と共に榮え。共に利福を求むる念なし。かゝれば眞の改良は。民の力に賴らざる可らず。民全般の力をもて。一度改良なしたらんには。羅馬も竟にいにしへの。羅馬に還るの鴻福ある。また疑を容れざるなり云々。

和君等は高貴の家に生れ。已に爵あり封あるのみか。祖先の譽は云々なりと。常に誇りて語らるれど。我黨も又羅馬國の。民族といふ資格に在ては。祖先の譽いと高かり。祖先は素是自由の民たり。不羈獨立の民たりしに。淺ましき哉世襲の。遺產は今しも何處にある。影だにもなきはいかにぞや。貴たる歟否。棄たるか否。只彼の貴豪の族の爲に。或は謁き掠められつ。或は强て奪去られつ。或は睡眠の間に失ひ。或は號泣爭角するも。鬪負て奪ひ取られき。和君希ふは了承あれ。我黨平生望む所は。只正當なる遺財をば。恢復なさんとするに在るのみ云々。

今一つ二つ、第七套、リエンジイが深夜山阪に一味の士と誓ふところ――

時機至るの時に及ばゞ。方々もまた被面を要せず。また其上被も擲ち棄て。一聲の喇叭を聞くと齊しく。一人の騎士を見ると齊しく。自由共和の旗下に。東西一度に聽集まり。此赤心をもて此騎をもて。此生命を棄て。此靈魂を

奉じ。死して冥府の鬼となる歟。生て自由の春に遇ふか。二ツ一ツの戰場にて。壓制非道の貴族ばらを。退治あるこそ肝要なれ云々。

此の一段などは殊に譯者の誇張文字が多い。第九套、リエンジイがラテラン寺院で古碑文を講說するに托してローマ市民を激せしむるところ――

喧嘩を制する監吏の聲に。滿堂再び肅然たれば。莉氏また憤然聲を改め

「起よ羅馬の市民諸彥。數年の妄夢を攪破し去て。我往古の權力の。記憶を心に銘着して。自由の由來を忘れられな。もし諸彥にして今日より。羅馬の舊態秩序を復して。自由を得るに熱衷なし。竟に自由を得られもせば。寔に今日の一演說も。否。舊羅馬の物語も。幸ある時に述たるなり。機に投じたりといはまくのみ。云々

以上の例でみる如く、或は原作の本文につき、或は譯者の思想を布衍して政治小說的文字を並べてゐるが、兎も角も周圍の空氣につられて多少の政治的イデオロギイが籠められたらしく看取される、從つて讀者の中にはこれを政治小說として讀んだ人々も少くなかつたであらう。たゞ十七年刊の二書と同樣、此の書に譯者の政治的イデオロギイが多少示されてゐるにしても、漠然自由主義を是認する程度で、その態度は甚だ消極的なものであり、政黨的色彩は殆んどない。改進黨のシンパサイザアであつた點は依然違ひなかつたにしても、十六年の政治戲文の或るものに見られたやうな明白な態度は反映されてゐない。

政治小說として見た『慨世士傳』は、大體かくの如き消極的なものであるが、單に一篇の飜譯小說として見るときは、この書は、明治小說史上相當重視すべき意義をもつ。前にも述たが、譯者逍遙がこの書を譯刊した主旨は小說改良に資するにあつた。卽ち『小說神髓』によつて公にされる小說理論の實物敎訓的手段として先づ譯されたのが、此

の書だつたのである。

この書のはしがきは『小説神髄』の下稿の一部分と見るべく、同書上巻第三章「小説の主眼」あたりを中心にした小説論であり、封建的勸懲主義を送る吊鐘の第一打であり、馬琴排撃の氣分に於ては『神髄』よりも酷しかつた。逍遙は先づ我國小説の由來より明治以前の小説壇を一言し、明治以後の小説全盛に説き及び、轉じて此等小説の內容の貧弱陳腐を論じ、その原因を察してかういつてゐる、——

蓋し此間の戲作者流はひたすら李笠の語を師として意を勸懲に發するをば小説稗史の主眼と心得道德といふ模型を造りて力て脚色を其內にて工人なさまくほりするからに強ち古人の糟粕をばなめむとするにあらざれど素と其範圍の狹きが爲に覺えず同轍同趣向の稗史を編成なすものなるべし

逍遙は次で西洋文學の飜譯が二三のもの（『花柳春話』『春鶯囀』『經國美談』）を除いては泰西稗史の一斑を窺ふに足る料となるものがないことを慨し、「眞に稗史の主旨を解して稗史を編む者」が殆んどないといふ平生の遺憾を披瀝して、さて『慨世士傳』出版の抱負たる小説改良に言ひ及ぶ、——

我國俗はいにしへより頗る稗史に富みたるをもて眼もおさ〳〵肥たれども只憾むらくは小説の眞の骨髓を了解し得て之を綴れる者なければ讀む人もまた活眼なきにや我物語の瑕失を論じて其改良を圖らまくせし論者ありしを聞かざる也

かくて改良の前提として先づ小説の神髓を吟味する、——

夫小説は美術にして詩歌の變體に外ならざる也されば小説の主髓とすべきは只彼の人情世態のみ人情とは情慾也情慾は卽ち七情にして喜怒哀懼愛惡欲是なり七情の態を見るが如くに描き出して精密周到毫末も洩らすことなくよく人情を穿ち盡して假設虛空の人物をば假作界裡に活動せしめて眞物のごとく見えしむるを眞の小説家の技倆といふ

なりよし人情をば寫せばとて其皮相のみを寫したる者はいまだ之を眞の小說とはいふ可らず其神髓をば穿つに及びて始て小說の小說たるを見るなり

從來の小說家は勸懲主義をもつて著作の規律とし、人情世態の如きは皮相を寫して足れりとしてゐるので、好小說の出ぬのは當然である。西洋にも勸懲作家はあるが、然し彼等は人情の描寫を主位に置き勸懲を客位に置くことを忘れない。此の點は我國の小說家とは反對である。勸懲小說家の泰斗馬琴の『八犬傳』の主人公たる八犬士の如き、その反對の極致を語つてゐる。

しかして八個の犬士にして果して純良の人ならん歟純潔なる良心をもて心猿を制し意馬をつなぎはじめて善行を完うすべし言行は皮相なり情欲は髓なり馬琴犬士が純潔なる皮相の言行を叙したれども曾て犬士が良心もて其情欲を制抑せる條を細に叙したる事なしかゝれば犬士は生れながらに煩惱情慾を脫し得たる所謂神聖のたぐひならん歟そもまた馬琴が人情を穿ちて周到ならざりし歟もし八犬士にして神聖なりせば是を人間とはいふ可からず已に人間ならざる以上は之を人情を旨とすなる小說稗史の主公となすこと極めて不當といはまくのみ

然し馬琴はその時代によつて存在の理由がある、後の作家が只管馬琴に心醉してその勸懲主義を金科玉條視するのは愚だ、宜しく勸懲主義を打破すべきであるといふ。逍遙は馬琴を排した反對に爲永春水を擧げ、彼の作『八幡鐘』(春曉八幡佳年)によつて人情を穿つことの深きを說いてゐる。これは『小說神髓』の思想的傳統の一面を語るものであらう。かくて、『慨世士傳』の譯刊の用意を說き、それが以上の如き小說改良論の幾分の實行を期したものなることを明らかにしてゐる、――

おのれは元來(もとより)小說家にあらねば自ら筆をとるにいたりて果して理論を實行し得べきや將能はざるかを知る由なければこたび本傳を譯するに當りてそゞろに感ずる所あるから力めて原文に意(こゝろ)を注ぎて要なき條は省きもしたれど苟(かり)に

も辨妄の料ぞと思へば原文のまゝに譯しとりて我小說家に見えまくほりせり

さうして東西の小說作家の意匠の差異を見るに足るものとして本傳第七套の「女丈夫丈夫に逢ふ條」を擧げて、さて、讀者が以上の意を體して此の『士傳』を味はつたなら「眞の小說稗史の主旨をば」悟るに庶幾いであらうと結んでゐる。

此のはしがきの小說論は、次章『小說神髓』の所論と相關涉するところがあるので、その紹介に案外のスペースを割かざるを得なかつたが、兎もかくこれによつて『慨世士傳』の明治初期飜譯小說史上の重い位置を察することが出來やう。

逍遙の小說改良論それ自身は封建的勸懲主義打破の第一打、寫實主義主張の第一聲として勿論何の異存もないところであるが、然し元來が歷史小說たる『慨世士傳』が果してかゝる改良小說の代表的見本として一般的に役立ち得るかどうかは、今日からいへば大に疑はしい。疑はしいだけに、逍遙のいふ寫實が、後にいふものと可成り違つてゐるといふことを想察し得る。此の事實は、この寫實を決する際に有力な暗示とならう。たゞこれが、歷史小說であるだけに、馬琴の作品中の名ある稗史との比較は可能でもあり適切でもある、こゝはリットン馬琴優劣論を鬪はす時機でも場所でもないので、さういふ論は試みぬが、逍遙が此の點を握んで東西小說の相異を如實に示し、自家の小說論の例證として大衆を啓蒙しようとしたのは、馬琴心醉の當時に於いては確かに要領のいゝ遣り方であつた。

逍遙が是非讀めといつて擧げた本傳第七套女丈夫丈夫に逢ふ條といふのは、リエンジィが一黨と約束した密會所に赴いて義兵を擧げる相談するに先立ち、情人ナイナ姫を訪れて別れを惜む一條を指したものである。大事を前にした此の濃情纒綿たる一場面は、確に東洋乃至日本の英雄小說にはないものである。東洋流なら、心中に會ひたいと思つ

ても大事の前の小事とか何とかわが身を叱つて、會はずに出かけるところを、リエンジイは却て情人に忍び逢つて大志をうち明け、情人の愛によつて勇氣を幾倍する。この時のリエンジイの性格は、東洋流にいへば女々しいともいへるが、然し東洋流の英雄小説の主人公に比較して、いかにも人間味人情味に富んでゐる、忠孝勇武などといふ抽象名詞の化身とは違ふ。『慨世士傳』には出ぬが、アドリアンが北地にアイリンの踪跡を求める心も、これと同じことである。その他、正史では空想的野心家とされてゐるリエンジイが、この小説では同情をもつて描かれ、天來の使命を信ずる狂熱家の面影が見える。

リエンジイの性格が東洋流の英雄性格の型破りであるとせば、ナイナ姫の性格も同様に（乃至より著しく）東洋流の佳人性格の型を破つてゐる。美色があつて教養才藝に富むのは普通で異とはされないが、氣丈で、野心強く、男まさりで、眞實女丈夫の名に恥ぢない點は、從來の英雄小説の窈窕たる女主人公に見ないところである。「我邦舊來の小説に無い書き方」といふ幸田露伴の語も、[二]成る程と首肯される。須藤南翠の『照日葵』の女主人公の糸萩姫の性格の如き、明らかに幾分ナイナ姫に負ふところがある。

その他の興味ある人物をいへば、始めリエンジイの股肱として活躍し、後にブルタスの役をつとめる熱血漢の鍛冶エチエッコオ・デル・ウェッキオ、リエンジイを煽動しつゝ自派の力を張らんとする冷血巧算のレイモンド僧正、殊に面白いのは、我國の戰國武士に似た野武士の統領ウォータア・ド・モントリイルである。粗豪で而かも細心、勇武と權變を兼ね備へ、見事リエンジイを向ふに廻して一芝居打つが、もつて生れた野心が邪魔をして身を滅す。彼の遺子ヴィルラニの役目も奇なものである。アドリアンは何の點からいつてもリエンジイに亞ぐ副主人公であるが、美貌、聰明、武勇、富貴、あまりに美點のみ揃つてゐるので、却つて讀者の同情は幾分薄い。彼の戀人たるリエンジイの妹アイリンは實に可憐な少孃子である、東洋流でいへばナイナ姫などより理想的な女性かも知れない。

プロットの大筋は正史によつて決定されてゐるが、事件の進行が人物の性格を固く結ばれてゐる。共和政治の恢復と才子佳人の遭遇が二つの興味の中心であるが、それが主人公リエンジイによつてきつちり統一されてゐるので分裂しない。此の小說のプロットでは案外に戀愛が大きな役をして居り、リエンジイとナイナに對して、アドリアンとアイリン、モントリイルとアデラインがあり、さうしてそれが結局彼等の何れもの運命を支配してゐる。弟の死に復讐の血を激さして起つたリエンジイが、自分が死刑にしたモントリイルの子によつて賣られるのは多少作爲の痕が見えるが、東洋流の因果の大法が示されてゐる。

逍遙は、『小說神髓』の拾遺として、時代物語卽ち歷史小說の論を發表した、(三)それによると理想の歷史小說は過去の人情世態を描寫して、(第一)史學の補助となり、(第二)風俗史たる用をなし、(第三)歷史上の人物の性質を明にするものでなくてはならぬといふ。慨していつて『慨世士傳』の如きは、その何れの點でも理想的な歷史小說であつたに違ひない。

『慨世士傳』の代表的場面としては、從來第五套のアドリアンとアイリンの誓ひのところを引くが(「いふは正しく穗に出て」云々)、私は第七套の、ナイナ姬が月夜リエンジイを待つところを引かう。

然程に那以那姬は。彼比兎羅句の情譜をば。くりひろげつゝさしうつむき。一向默誦なすものから。眼は紙上にあらずして。夜風に戰ぐ前栽の。木立音する度每に。夜の隈のみ打見やる。向ひに一箇の古池あり。冴渡りたる月影の。しばし雲間に入るときは。星光水に映ずるありさま。幾千萬の螢火の。散りて亂るゝ風情あり。荒増りたる園生をば。所得貌に蔓延せる。葡萄の蔓の長く垂たる。月に映じて其影の。躍るもさすがに趣あり。夜はまだいたく更ねども。四面靜にして萬籟死し。見渡す限り幽雅にして。いと麗はしき夜景色をば。めで眺るとも思はれぬ。那以那の姬は只管に。園の彼方に生茂る。木立に添ふたる塀へのみ。眼を注ぎつゝさながらに。人待貌なる折しも

あれ。風なき園にさわ〳〵と梢搖ぎて忽焉と。塀の下へ降立者あり。云々

句々誦し來れば殆んど純然たる馬琴調である、さうしてこれが又この頃の逍遙の最も得意な文章であつた。

『慨世士傳』は識者の稱讃を得、須藤南翠、幸田露伴の如き人々は感心して讀んだ。(四)だが評判の高い割に賣れなかつた。內容からいつて大に時人の愛讀を得べき筈で得なかつたのは、比較的高價のためと大衆的に日本化されてゐなかつた爲め、つまりいはゆる豪傑譯になつてゐなかつた爲めとであらう。

註(一) 明治十八年九月、『小說神髓』第一號廣告

註(二) 「逍遙先生の事ども」(神代種亮)所引直話

註(三) 明治十八年五月、中央學術雜誌第六號「小說神髓拾遺・時代物語の論」

註(四) 南翠『新粧之佳人』第五回、露伴の語は註(二)の直話に見える。

七 著作(三)

『當世書生氣質』について

『書生氣質』は、誰も知る如く逍遙の作中最も有名なものであるが、これはその序文でも分るやうに、『小說神髓』の理論を實行した寫實的試作となつてゐて、勿論政治小說ではない。又如何に觀點を變じてみても、政治小說として見られるべき理由はなく、私も强て政治小說として論ずるつもりはない。然し描かれた時代が明治十四五年といふ政治熱絶頂時代であり、人物が書生で、背景なり舞臺なりが往々政治法律の私塾となつてゐるなぞの關係で、勢ひ聊か政治海の空氣の混入を免れない。その例として、一二此の小說中の政治的分子をお目にかけよう。

此頃小町田が莫逆なる。守山友芳は役を辭して。代言事務に從事せしが。一月あまり以前なりけん。父友定に伴はれて。靜岡地方へ赴きたり。さるは代言の事務をかねて。おのが近き頃入黨せし。ある政黨の用向をも。整理せんが爲の旅とか聞えし。（東京堂版、第十一回、一七四—一七五頁）

（註。守山といふ人物は岡山兼吉がそのモデルの一部分となつてゐる。岡山は靜岡縣人で、十五年大學卒業の法學士卒業前から鷗渡會の一員で改進黨に關係してゐた）。

斯る有難き神々たちが。日每夜每に目をくばりて我皇國を守らせたまへば。かきはにときはに家內安全。國土太平。人智開暢。學藝進步。農業振起。商賣繁昌。武備擴張。政治改進。秩序整然。日新月化疑ひなし。（同一七五頁）

（註。これは當時の日本人の雜多な神佛詣でを諷した一節であるが、その文句に當時の日本人の理想的希望がそつくりそのまゝ出てゐる。政治改進。秩序整然この句は何やら逍遙の政治的イデオロギイを反映してゐるやに思はれる）。

（倉瀨）君は桐山の風評（うはさ）を聞たか。（小町田）イヽヤ。（倉）あいつは奮進黨へ入黨したといふ事だ。（小）此節ア。政黨へ加入する事が流行だネ。守山なんぞもたしか。魁進黨へ這入つたといふ事だ。（同、一八〇頁）

（註。書生同志の噂話にもかういふ政黨全盛の消息が出る。だが暫時經るとその反對になる）。

（倉瀨）定めし多忙（いそがし）いだらうネヱ。しかし御商賣御繁昌は祝すべしだ。ハヽヽヽ。（友定）所謂草臥儲の方さ。此頃は學校の景況は如何です。なんだか風評に因ると。擊劍が大變流行だといふぢやないか。（倉）アヽ學校の氣風は。君の在校の時分から見ると。實に一大變動を經過したが。例の校長の諭告以來は。政談はめつきり衰頽したが。腕力はよつぽど盛んになつた。（東京堂版、第十六回、二二五頁）

（註。校長諭告云々は、若し十五年にこれを當てはめると、十五年十月の學位授與式に於けるフェノロサの演說の如きものを指すのであらう。或は時の濱尾總理から特に諭告があつたのかも知れない）。

○桐山は相替らず。勇壯なり。近頃は奮進黨の新聞に關係して。頻に盡力中なりと聞えたり。國事犯の嫌疑など受はせずや。とひそかに眉をひそめたる友人もありけり。（同第二十回、三二五頁）

逍遙の親友高田半峰は、此の書を讀んでこれが細評をものし、中央學術雜誌に掲げた（十九年二月、同誌二十一號—二十三號）。その一節にかうある。

今我國の小說を愛讀する者を見るに、關羽、張飛、魯智深、李逵なきの書を小說視せざるものあり、犬田小文吾なきの書を小說視せざる者あり、濱路、雛衣なきの書も亦小說視せざるものあり、甚きに至つては篇中政治上の主義を包含せず、政治上の議論を載せざれば小說視せざる者あるなり

といつてゐる。かゝる小說觀をもつた讀者は、幼稚無識見な所謂大衆だけではなく、知識階級と目すべき人々にもあつた。自由燈（三二三號）の紙上で此の書の評判記を書いた愛佗痴子の如きその一人で、——

如何に學問一方に凝りたる書生さんでも少しは佗の社會の事物にも思想を及ぼす所がなくては餘り迂遠に過ぐる樣なり（中略）何も切齒扼腕慷慨とはまいらずともせめて當世の二字に對する丈の諷諭は之れありても苦しかるまじく左もなくば或は地方の讀者をして都下の書生は更に政治の思想を持ぬかとの歎息を來すこととならん云々

と論じてゐる。時代の空氣知るべきであらう。逍遙は同紙（三二五號）でこれに對する辯明を公にしてゐるが、その中に、『書生氣質』刊行中に四方から下された是非の評を要約してある、その一節にも——

或は曰く學者はおほむね思想に乏し政事を談ずるの必要を餘所にして如斯クダラヌ戲述をなす實に贅勞の極といふべし寧ろ政事小說を飜譯するの有益なるに如ず云々

とある。明白には何人の論評を指してゐるか分からぬが、かゝる評に同感した讀者も少くはなかつたことであらう。

逍遙は一々その謬想なることを論駁し、更に自由燈（三二九號）紙上で、「小說を論じて書生形氣の主意に及ぶ」といふ一文を合にして、眞正面から――

小說の主髓は人情世態を寫すにあり彼の勸懲を主髓となし又は政治上の寓意をもて其眼目となすが如きは眞の小說の旨に違へり

と論じ、凡ての小說をもつて政治的手段とし、政治家の機關とのみするの誤りを正し、寫實主義の主旨を主張した。（此の事は然し政治小說を否認する意ではない。政治小說に對する逍遙の思想は、次章に於いて多少說く機がある筈である）。

前にも一二度言及したやうに、『書生氣質』は、初め『遊學八少年』といふ題目の下に今少し違つたプランをもつて描かれることになつてゐた。これは軍人、政事、法學、醫學、工學、その他に志す八人の少年を拉し來つて、彼等の經歷を『水滸傳』式に、或は砕けて『八笑人』式に一篇の小說とまとめ上げる都合であつた。その案では、逍遙の上京當時最も親密に交つた八代六郎（後に海軍大將）、後藤齊吉（醫學士の秀才）などが相當重要な役割をつとめることになつてゐた。『書生氣質』中の私塾の塾部屋中の光景を描いたところの如き、この案の名殘かと思はれる點がある。確かにこの案によると、『書生氣質』よりも政治小說的分子が多くなつたに違ひない。『書生氣質』の初版分冊本の作者跋に述されてあるプランの變更のことも、或はこれを指すのかも知れない。

明治九年八月逍遙が開成學校に入るべく名古屋から上京した時、彼同樣始めて上京の途についた少年が八人あつた。彼等がいよいよ着京して新橋驛頭で各々志す方面に向ふ際、逍遙は此の八人の各々を八犬士に擬し（八代六郎の如き犬山道節に當つたとか）他日志を得て相見んことを誓つた。この八犬士の見立が『八少年』の案となる萌芽であ

つたといふ。

『内地雜居 未來の夢』

以下、明治十九年刊の三書について順次に觀察しよう。

『未來の夢』については、作者逍遙は附言に於てかういつてゐる、——

此物語の筋は條約改正以後の事なり。內地雜居も已にゆるされ。國會も已に開けたる體なり云々

かく此の作は本來總體として重大な政治問題と關係してゐる點で政治小說視される素質が十分あり、又作者もこれをもつて政治小說めいたものといつた。[一] 且つ趣向の立て方によつて察するも、若し中絶されずにゐたなら、相當政治的分子を多く織り込まれることになつたであらう(この事は後に分かる)。大體として準政治小說としても可いと思ふ。

執筆の動機は、作者の直話によると『その頃、內地雜居といふことが輿論の題目だつたので、友人に勸められて漫然と筆を執つただけのもので、たいした抱負も何もなかつた。』云々。[二] 然し事實はさう漫然としたものではなく相當調べて書いたものなどは內容の證する如くである。

作者は更に此の作の附言中で自家の態度をかう述べて、「萬般の筋すべて作者の空中樓臺なり。政府のおぼしめしを推測した事にもあらず。作者の願望をうつしたるにもあらず」といつてゐるが、後半は何と解すべきか、恐らく『小說神髓』の立場から來た寫實主義の固執であらう。卽ち『未來の夢』は理想小說宣傳小說ではなく、寫實小說だといひたい意味であらう。然しさうとせば、上記の「空中樓臺」の語と矛盾するのみならず、更に同じ附言中でかういつてゐる、曰く本書は純粹の小說とは異なり。能ベル (Novel) といはむよりは。寧ろ更にアレゴリイ (Allegory 寓意

小說）ともいふべき者なり。云々、曰く完全なる條約改正を寫さずして。わざと不十分に作りなしたるは。多少思ふ所あるが故なり云々。既に「寓意小說」といひ、「多少思ふ所あり」といふ以上、作者の願望をうつさぬといへぬ道理である。この矛盾から、やがて『神髓』の補足ともいふべき未來小說の考察が生れ、(三)やがてこの作を中止する氣持も生じてゐる。(四)

此の作の初案腹稿が本文と相應しなかつたのは、分冊第一號の口繪を見ても分かるが、『書生氣質』第十五號の表裏廣告文には一層よく出てゐる（十五號は十八年十二月刊）。その廣告文にいふ、――

右は春のや翁の新案にて內地雜居後の有樣をば一部の小說に綴りいだしたる者なり世態の變遷輿論の傾向ならびに風俗の進化の如きもよつて以て一斑を窺ふに足るべし第一號は小田原ステイションの間違ひにはじまり箱根溫泉場の話に移る篇中の人物には西洋人支那人等あり間々英語にての對話などありて面白きか面白くなきか書肆もしらず體裁は總て書生氣質におなじ云々。

これの立案に際して、作者の親友市島春城氏も多少の助力をなしたといふ。(五)

此の作の「緒言（こうじやう）」なる一章は、この作の物語の展開されるべき想像的背景、卽ち內地雜居の未來世界についての概念を與へんと試みたもの、大體明治二十四五年頃の社會を想像したものらしい。前置として社會と輿論の關係、內地雜居に至るまでの歷史的經過が略敍されてゐるが、前置は格別記すこともないから、直に作者想像による內地雜居の世態の特色を擧げることにする。

條約改正の二大問題たる海關稅權は回復したが、治外法權の問題は、輕罪だけ回復され、重罪は依然外國の裁判權內にある。從つて日本政府も、內地雜居を三府七港の雜居地だけに制限し、全國の旅行通商には通商劵を與へてや

る。雜居地外は不動產所有も居留も許されない。が、內では、日本の法律に從ふ限り、これが出來る。もつとも此等の豫約は十五年後更に改訂されることになつてゐる。

條約改正、內地雜居が可能になつたと同じ年、東京の市區改正が四分の一程成就した。その概觀をいへば、公園が各區に出來、魚市場が遠ざけられ、上野公園が中央公園として大に廣くされ、國會議事堂が興味の中心となる、キリスト敎の勢力と共に會堂が增加し、佛敎の寺院は衰へる。馬車はふゑ、フラフは目立ち、銀座も珍らしくなる。風俗の點では白人黃人黑人雜然と生活し、日常の衣食住には洋風の分子が大部加はる(表面的)。男のシャウル姿は廢れ、婦人用の褌を店頭にかざるやうなことはなくなる。

經濟生活からいふと、外資が大に入り込むので、金廻りよく金利が安く、從つて事業が勃興する。先づ注目すべきは鐵道の發達である。(「朝に喰ひし福島の肉を夕に東京の厠に投ずる」云々と想像してゐるが、これは少し鈍い。)工業の增加と共に勞役者の需要がふゑ、賃銀騰貴となる。從つて日本の勞働者の生活も向上すべき筈であつて、事實は依然貧乏である。これは何故かといふと競爭の多いため、殊に支那勞働者のためである。日本人は到底支那勞働者の敵ではない、これが大に問題となる。

要するに、社會が總體「シャボン臭い」ものとなり、西洋人が橫行する。知識は大に進むが、道德がそれ程でもない、然し舊弊頑固は全く隱れてしまふ。警察はいよいよ整備する。「硝子窓」が流行し、夜も雨戶を閉さぬ。かくて人民は珈琲とジンに鼓腹し云々といつて、「國土豐かに民靜かなる」內地雜居の幕明きを作者は祝してゐる。

祝してはゐるが、然しそれは作者が內地雜居の結果の好望なのに贊成したのではない。作者の態度は、意識的には消極的な不可知論である、これは附言にいつた「作者の願望」云々とも通ずる。だが以上の未來社會の諸條件を少し立ち入つて吟味すると、作者は我にもなく改進黨のシンパサイザアとして、改進主義の宣傳に努めてゐる。作者の想

像した條約改正の結果は、關税權、治外法權、内地雜居の諸點で、當時改進黨人士の唱へたところと略ぼ合し、後に大隈伯が努力した改正案を豫想せしめるものがある。（六）市區改正に至つては、都市ブルジョアジイと文化主義者が中心となつてゐる改進黨の一大論件であり、（七）此の豫想が美觀と文化と衞生に注意して試みられたところは、丁度改進黨の主張に一致してゐる。又日本の沈滯した經濟生活を刺戟する爲めに外資を輸入する說は、改進黨操觚者の好んで唱へたところであつた。（八）

以上の如き豫想的背景の上に『未來の夢』の物語は進展する。

時は八月末のある日、午後、高崎から上野に向ふ汽車の客室に、七年振りで語りあふ二人の舊知がある、一人は小說家をもつて任ずる菱野詞狂、今一人は洋行歸りの代言人で政治家を志す田所鼎である。二人の話題は七年の昔大阪の澱南學校で親しかつた友人渥美恭輔の身の上であつた。

渥美といふのは、尾張半田町の大酒造家の子である。十四で大阪に遊學し、澱南校に入つて政治學哲學を學び、十八で卒業して更に理科學を修めた。恭輔は大志があり、日本の將來を深く憂へ、商業主義による富國强兵の計を懷いてゐて、田所等とよく議論を上下した。恩ある祖母の懇請によつて一時廢學して家業を助けたが、氣鋭の彼と守舊の父とは方針が合せぬ上、家庭的にも面白からぬ事情があつたので（母は繼母で實子がある）、祖母の死後出奔して洋行せんとし、神戸に田所を訪ねた。田所自身も丁度洋行の間際であつたので、恭輔は田所に乞ふて荷物として連れて行つてくれとせがむが、田所がその不成功を說いて戒めたので、恭輔は原意を謝して去つた。その後は知らぬ。

田所は車中で菱野とかう語つて、恭輔の身の上を嘆じてゐたが、上野で下車して、偶然入つた驛前の珈琲店で、端なく渥美恭輔のその後の消息が判る。此の珈琲の女主人たる少女とその老母とは、かつては渥美の恩人で、今は渥美

の情に世を送つてゐる人々であつた。

少女の兄を稻積玄治といふ。大阪堂島たる米商稻積某の子である。多年の希望が許されて佛國貿易の途についたのは、丁度田所の洋行と同年であつたが、船が長崎に近づいたころ、稻積の荷物のうちから半死半生の密航者が一人現れた。これが渥美恭輔であつた。玄治は恭輔と語つてその志を壯とし、船長の怒りを和め、金を出して客並にし、佛國まで同行した。その後渥美は種々辛苦を甞めた末、ボルドーの酒造家シユーラの信用を博し、シユーラが新に生絲製造に着眼するに及んで、その子ジヤツクの補佐役として事業擴張のため共に日本に來、目下同商會の一番々頭として高崎の生絲製造所にゐる。而かも目下主用で再度渡歐中といふ。

恭輔の幸運に引かへ、稻積一家には悲運が伴なつた。玄治は修業中肺を病んで歸つて來る。父は時勢に疎いのと支那商の駈引にのせられて一朝にして大損亡をする。父も玄治も相ついで死ぬ、少女は兄の藥代のため外醫の洋妾となるを餘儀なくされさうになる。それを、歸朝後恩人の行方を尋ねてゐた渥美に救はれたのである。

田所等が少女母子と話してゐるうちに、この店に預けられた渥美の犬が手紙を拾つて來る。この手紙によつて、不在中の渥美が或る陰謀の犧牲にされつゝあることが分かる。つまりシユーラの生絲製造所の二番々頭が渥美を排して自分で製造所を握らうといふ野心から、シユーラの妾と渥美と醜關係があり、二人が共謀して高崎の製造所を奪はうといふ巧計があるのだと誣ひる。條約の不完全から、居留地外の製造所は、シユーラの妾の名義になつてゐるのである。これを知つた田所は渥美の歸朝を迎へて忠告しようとする。

一方、歸朝を急ぎつゝあつた渥美は、早く獨立して意志を果したいと意氣込む。その第一着手として北海道の殖産に注目してゐる。同船の女客にルシイ・ホートンといふ佳人がある。父を尋ねて函館に赴き、宣教に身を捧げる決心といふ。二人の間には、やがて單なる友情以上のものが生れかけるかに見える。ところが印度洋上風雨荒ぶ一夜、船

は難破し二人は離れ離れになつてしまふ。

『未來の夢』の大筋は以上十四回で中絶する、いはゞ發端が僅にすんでいよいよこれからといふところで、誠に惜しい氣がする。菱野が上野の驛で支那人の掏摸にかゝる話、掏摸を追うた菱野が洋人に毆打される話、洋人の横暴、シューラの妾おつかの素生、田所と在野政治家達、日支人力車夫の鬪爭など、以上では枝葉の物語となつてゐるが、これ等は全編構成の際にはそれぞれ大筋と緊密な連絡をもつものであつたらう。分册第十號の裏廣告に第十五回分の要目として次の趣向を揭げてある。

○不慮の珍事佳人の行方を失ふ
○菱野詞狂の義おみやの母親を助く
○獨立黨の政略頻に敎法家に依賴す
○私立大學の建設
○獨立黨員雄辯時弊を論じて田所鼎を誘ふ
○田所暗夜怪しの人物に逢ふ

政治的分子が相當多分に附加されゝ腹案であつたことは、この豫告だけでも想察されやう。

此の作の中心題目は、日本國民生活の將來である、早晩來るべき內地雜居が日本國民の社會乃至經濟生活を如何に變化せしめるか、又日本國民がこれに對して如何に對應すべきかである。問題は大きいだけに、作者はこれを立派に解決してゐるとはいへぬが(殊に中絶したので)、然し興味ある幾多の暗示を與へてゐる。その暗示の中で最も豫言的なものは、渥美恭輔の口を假りて吐露されてゐる。

土曜の閑談。日曜の散策。恭輔鼎と相面へば。喟然歎息して語つていふやう。我國土地狹く兵弱し。而して猛鷲此に迫り。獰獅西より窺ふ。兵を以て之に當らん歟。其の敵し難きを如何せん。産物を以て之に當らん歟。東に農商に富む米國あり。西に製造に巧なる佛蘭西あり。我爭でか彼に及ばん。論者或はいふ農産以て我國を富すに足る。農業以て我國を護るに足る。トまことに誤れりといふべし。耕地に界限あり。産出に極度あり。畢竟英米に競爭しがたし。海軍を張り。陸軍を備ふ。其必要なるいふまでもなけれど。兵の强弱は專ら國財の多寡に伴ふ。國人いかほどに氣力ありとも。內に供給の滿るなくんば。何とて其兵威を張ることを得んや（第二回）

ブルジョア日本の世界的進出には富國强兵の道あるのみ、これは二途の如くで實は一途、財卽兵である。富國の道は從來の如く農業主義では追ひつかぬ。本國が狹い上屬島も殖民地もない我が國では土地開拓の如き、小規模以上に實行はされ難い。よろしく內地雜居による商業主義、卽ち世界資本主義の潮流に乘じて國力を開拓すべきである。

倩惟るに。御國の地勢は。四方海をめぐらして。西の方支那朝鮮に近し。之を大ブリタニヤの本島に比ぶるに。髣髴相似て優る者あり。大に商業を振ひ起して。我日本國を護らんとせば。或は萬國と競ひ得べし。若夫商業は。本國の産物にのみ依賴する者にあらず。本國の製造にのみ依賴する者にあらず。今や內地雜居ゆるされて。貿易やうやく昌盛を極む。此時に乘じて更に一歩を進め。商業國を以て自ら任じ。米が直接に支那朝鮮に輸入する所のものを。我より直接に彼に送り。英が數萬里の波濤を航して。遙に支那國に送れるものをば。我より直接に彼に送らば。其利莫大にあらざるべけんや。（第二回）

米國に對しては「仲買」となつて利を占めることが容易であるが、英國を凌ぐには大奮發を要する。それには、英國東洋貿易の本尊たる金巾製造業を我に奪ふ工夫をするのが第一である。金巾の原棉は印度産であるから我が國でも一大製造所を建て、印度棉を輸入して金巾を製造し、運輸の便を利用して支那その他に輸出せば、時を經て英國を壓し

得るに至らう。極めて困難な事業であるが、不可能ではない。

この渥美の所論のうちでも殊に強く來るべきブルジョア日本の發達を暗示してゐるのは、一切政治が財力で動くことを論した一節である。

財力は兵なり。金力は權利なり。國にもあれ。一個人にもあれ。金力なかりせば何をか爲得ん。見たまへ英國の國會議員を。金力の推擧する所にあらずや。見たまへ米國の代議士を。畢竟財力の奴にあらずや。人間にして財力に富まん歟。議士をも買ふべく。政權をも買ふべし。英國の上院議官を見ずや。皮相論者が下院の勢力を稱歎するにも係らず。其實暗々裡に。國家の權威を。彼の貴族輩が握れるならずや。蓋し下院中の議官等は概ね貴族輩の領地の民にて。彼が財力にて買はるればなりけり。財力の萬能なる。まづ之をもても知るべきなり。しかるを御國人の欲すくなき。こゝらに其眼を注がざるにや。僅に小官吏となりたるをもて。名譽の梯を得たりとなし。たまたま國會に召れたるをもて。靑雲の足場を卜したりとなす。故に政治學の一部を嚼りて。少しく其武器を得たりと思へば、無資無力にして大聲叱呼。進んで政治界に其敵を求む。嗚呼。財力は本なり。名譽は末なり。財足れば名隨ふ。名なくして譽を求め。譽を得て財を得んと思ふ。其序を誤るの甚しき。何ぞ一にこゝにいたるや。（第二回）

必らずといはゆる自由民權時代のロマンチックな天下國家論ではない、金で賣買する極めて現實的な政治論である。此の論が吐かれたも改進黨ブルジョア的見地の現れと見なくとも可いが、然し多少その邊の匂ひがなくもなからう。當時と二十三年以後のブルジョア日本の政界を比較して見よ、作者に先見の明を誇られても事實一言もない。

さて上の如く將來の日本は商業主義に依るとし、內地雜居の曉には世界相手の商賣につき、先づ民間の商業家は從來の商弊を革め（第十回參照、價格の取引、取引機敏ならず、時間を重んぜぬ如き）、政府は、對世界的商賣に未經驗の商業家を當分保護してやる要がある（第八回）。又商業家自身は因循をすてゝ、進んで西洋人や支那人と競爭的に貿

易する元氣を要する（例へば生糸、茶は勿論前述の金巾製造業の如き、又日本酒をもつて洋酒に敵する工夫の如き）、

又內地雜居その事についていへば、商業主義から、全國一體の雜居を可とするが、それには完全な治外法權撤廢が條件となる。さもないと實地に當つて種々の不都合が生ずる（外人の橫暴、惡事、不道德行爲等を制しきれぬ上、外人が內國人の罪惡を助長する恐れもある）。制限的雜居は外人自身迷惑である上に、日本にも利益が少ない。

だが西洋人はまだ可いとして、內地雜居の曉の大問題は支那人である。必ずや支那勞働者は大擧入國して來て、その勞働者として特長によつて日本の勞働者を壓倒してしまふ。此の問題は極めて重大である。彼等は日本の勞働者を經濟的に壓倒した上、道德的に惡化せしめる。商人としても支那人は私利我慾にのみ心する人間である。兎に角この作中に現れた支那人觀は極めて惡い（第一、第四、第八、第十、第十四回をみよ）。これは一つは、十八年の朝鮮事變から天津條約に絡んだ對支惡感情の反映と見て可い。琉球問題以前からの一つの波で、日淸衝突の前奏曲の一部である。

內地雜居と共に今一つ注意すべきは、北海の水產を外人の手に委せぬやうにすることである。英魯は旣にこれに垂涎してゐる。或はこれに關して葛藤が出來る（第八回）かも知れぬが、斷じて我が手に握つてゐなくてはならぬ。云云。渥美の北海水產會社の案に、その邊の用意が見える（第十二回）。

前に述べた渥美の財力萬能論にも、將來の政治的動向の一面が見えるが、第十回「政治家の小集會」の條にも、將來の政治界に對する豫想が見える。作者が神代種亮君に語つたところによると、「政治家の事が書いてある條は、あれは私が大隈さんに始めにお目にかゝつた時の有樣を寫したのである」云々。此回の表面的出來事は田所が友人に伴はれて在野政治家の團欒に加はるといふだけだが、田所の心中に去來する政治的感慨があり、それが卽ち政界未來記と

なつてゐる。先づ連綿二千五百年來上下協和して相假借した餘德によつて、「殆ど面をだも赤めあはずして。悠々洋々たる安樂のうちに、めでたく美しき立憲制度」を享有することになることは目出度い、輿論はさながら三分して、急激、改進、保守の三主義となるが、議會の實狀は小黨分立である。主義手段は小異大同であつても、その鄕國によつて一種の閥が生じ、閥と閥とが小なる族黨鄕黨となり、それが各々政權を爭ふ。この弊は實に甚しい。

嗚呼立憲の制行はれてより。閱年よしや淺ければとて。かまでに小黨派の分立するは。國家の奉爲に數かざるを得んや。猛獸相鬪へば獵夫ほしいまゝに利をなすとぞ云なる。議院の權力微弱にして振はず。特り少數の「なにがし」をして。久しく其威力を保たしむるは。そも〳〵また故あるかな。（第十回）

卽ち小黨分立の結果、少數の某々貴族をして長くその顯位にあらしめることになる。作者はかゝる政界豫想を何を根據に割出したか知らぬが、末廣鐵腸の『二十三年未來記』などをみても知られる如く、小黨分立による議會の無力といふことは、此の當時の有識者の一致した見解であつた。此の政界豫想が大隈を中心にして冥想されてゐるところに、稀薄な改進黨主義が出てゐるともいへやう。

未來記めく記述で今一つこゝに擧げなくてはならぬのは、文學未來記、乃至未來の小說家に對する警告である。從來は、世人の常識を概していへば、小說家なるものを戲作家と唱へ、一種の風流的閑人視し、從つて小說をも戲弄視し、一種の風流的閑事業視してゐた。たが今はさうは行かぬ。「少々手前味噌のやうにはあれど。世間に小說家といふ者ほど。多忙で氣の揉める者はあらじ」（第十一回）。何故といへば、今日では小說家及び小說に對するイデオロギイが全く變つてゐる。「夫小說家の本分といへば。天下の眞象と眞理を探りてこれを話たやうに描くにあるゆゑ、チョツと散策と出かけたる折だに。なか〳〵油斷をして居るべくもあらず」（第十一回）。目に見、耳に聞き、鼻にかぐ一切

を仔細に點檢して材料にせでは叶はない。「始終白鵠鐘ゝ釣主のやうに讒を動かして居ねばならず」(同)、「一種の慢心のときは是非に及ばぬ。友食ひ結構とみづから許して。果は自身をさへ喰物にすなる。されども（中略）樂のづから其中にありて。喜怒哀樂愛惡を選ばず、いつでも結局は樂とはなるなり」(同)。日本の小說家は僞物が多く、所謂「道樂家の化物」であるから、かういふ理論の實例にはならぬが、西洋の小說家には例が多い。スコットの老實は「我々稗史家の本尊」とも稱へられるべきで、未來の小說家たらんとする人は宜しく崇拜して學ぶべきであらう。作者猶ほ未來の小說家についていふ、——

されば艶話を綴る小說家を見て必ず好男子である可と思ふは。最も誤謬の甚しきもの也。おのれ其人が溺るゝやうでは。爭か他人の溺れたるを寫さん。虛心平氣にして描寫してこそ。天下の眞理をしも描くべけれど。迷うた心をもて觀察三昧。到底覺束なき限になん。されば小說家とならんとするには。元來人情が厚からねば叶はず。さりとて情の爲に溺れても叶はず。將又達磨大師其人の如くに。あんまり悟り過ぎて冷淡でもいかねば。(中略)隨分勉强して觀察を旨とし。暗に哲學者の片腕となりて。眞理を拾ひだすが本分ぞかし。稗官は感覺の力をもて。妙に「トルース」(眞理) を發見すとは。魯の美學家の名言なり。小說にして大に進まむ歟。彼の智力をもて眞理を究むる。哲學其物の材料をさへに。大に增す所あるべしと思はる。沙翁のものしたりし傳奇中の人物が。今しも心理學の材料となりて。屢々論評の種ともなり。性理硏究の便宜ともなる。是豈此道理の適例にはあらずや。(第十一回)

かくなつては、小說は決して閑人の閑事業ではない。最忙人の最忙事である。小說を容易なると考へ又は面白い仕事と考へてこれに着手する人々は、宜しく三省五省すべきである云々。この小說論が『小說神髓』と同精神から出てゐることはいふまでもない。が、同時に『神髓』に比して或る點幾歩を進めてゐることも、直ちに看取される。

中絕しだ小說に對してテクニクの詮索を云々するのは本來間違つたことであらうが、兎にかく一通りの觀察を述べて置かう。

構想の總體の印象は、確かに大作の發端だけといふ氣がする。若しさもなしにこれで趣向の大半が盡きたものとせば、かく交錯した話頭の捌きがつかず、足手まとひになつたまゝ、不自然なあつけない終局を告げざるを得ない。作者の意圖は明白に渥美恭輔の生涯によつて內地雜居時代を描寫せんとするに在るが、然しこれを正面からせず側面から間接に試みたところに工夫はあらう。だがその爲めに構想の統一が害はれて混亂を來してゐることは否めない。かく最初に交錯した話頭を並べて、これを次第に捌いて行くには可成り長大なスペースを要する。構想を複雜にするためのトリックに案外陳腐なものが反覆されてゐる。

背景は緖言に豫定されてゐるので兎も角成る程と首肯はされるが、今少し外國的分子が强烈に描かれた方が效果的であつたらう。第一回の汽車中の光景にせよ、第五回の珈琲店の有樣にせよ、その他の場面にせよ、歐化臭は受けとれるが當時の大問題となつた內地雜居といふ印象が薄い。第一未來世界の描寫としては豐富な想像力が總體に不足である。そのため背景に關する限り、貧弱な未來記的道具立を並べて現在の社會を描いてあるとしか思へない。

人物性格は話頭や舞臺の割合からいへば今少し多くても可い。日本人中、主要な三人（渥美、田所、菱野）は割合に好く描いてあるとしても、肝心の外國人が更に數多く活躍させられ、更に明確に更に精細に描かれなければならない。本筋に登場するのは僅に佛人シューラと英人ミス・ホートンだけである。（それも發端だけとあれば寬假すべきか）。又外國人にせよ、支那人にせよ、如何にも作者の內地雜居論の實例見本に連れ出されたといふ印象があつて、機械的代表的に動きはするが、人間的性格がない。西洋人とてシューラの如き富裕な愚劣漢ばかりではなく、支那人とて掏摸や下等勞働者だけとは限るまい。何れも凡て生きてゐない。此の點は、主要な三人以外の日本人にも略ぼ當て

嵌まる。若い作者が實際社會の知識接觸に乏しかつた爲めであらう。

渥美の人物は最も力を入れて描寫されてゐるが、間接描寫の部分が多いので、その割に鮮明でない。だが何れの點はより見てもブルジョア新日本の典型的人物たることは分かる。財印權の唯物的信條から、その成功第一主義、個人主義、海外冒險心、企業心、何れとして新興日本の經濟社會に活躍するに必要な資格でないものはない。田所は『書生氣質』中の守山を洋行させたやうな人物だが、守山よりやゝ俊鋭で活氣がある。政治家志願といふも、菱野の言の如く、政治家型ではない、未知數であらう。菱野自身は性格的には最も明確な印象を與へるが、それは彼が異常な奇僻の持主だからで、かういふペキユリアリティをかりて性格を描くの不可なることは、高田半峰が既に『書生氣質』の批評中で論じ盡してある。渥美は未來の實業、田所は未來の政治、菱野は未來の文學を代表するとし、菱野の愛すべき奇僻によつてその代表する文學に（理論の高尚にも係らず）幾分の輕侮の心が動くのを免れない。

なほ難をいへば種々ある。犬が陰謀家達の手紙を拾つて來たのは如何なるわけか（第五回）、惡人どもがシューラに渥美を譏する場合へ菱野を結びつけるのは何ういふわけか（第十一回）、又渥美の密航の發見される場を細かに寫實的に述べてあるが、却つてunrealな印象を與へるのは、藝術的描寫と單なる寫實といふことの相違を語りはせぬか（第七回）。その他種々あるであらう。だがこれを從來の春の屋主人の創作に比較すると、文章にも態度にも駄洒落氣が少なくなり、大に眞劍な努力になつて來る。文章の筆力も著しく張つてゐる。第十三回印度洋の難船を寫すあたりはその好見本といつて可い。「清治湯」と同じ系統を追ふところもあるが、彼は一時的な啓蒙的戲作文字であり、是は眞面目に將來の日本社會を寫さうとした抱負ある作品であり、根本的態度を異にする。これは未成品は未成品ながら、ブルジョア日本の勃興期、條約改正と內地雜居、商工業資本主義の萠芽、幾多の問題が沸々と湧き上つてゐた時代を背景にもつ豫言的作品（殊に政治的よりも經濟的分子を主とした作品）として、必讀に値するものである。

『未來の夢』は幾多の點に於いて、須藤南翠の現代的作品の或るものに强い影響を與へてゐる。『新粧之佳人』とこれを對比してみれば、何人も點頭するであらう。背景の取り方、全篇の歐化的空氣に於いてそれが殊に眼立つ。『未來の夢』をもつて此の後續出した『何々年未來記』と名乘る小說の嚆矢とするのは當らない。[九]これは寧ろ大部分末廣鐵腸の『二十三年未來記』の成功によるものであらう。[一〇]だが內地雜居といふ如き尖端的時事問題を捉へて小說化せんとした態度に於いて、鐵腸その人は必ずや影響されるところがあつたと思ふ。

此の作の中止について、讀者の或る人々は逍遙に說明を求めた、逍遙はこれに對して讀賣新聞紙上（明治二十年四月九日）で詳細に答へた。理由だけを簡略に擧げると――

（第一）拙作で小說壇を汚すと信ぜしため
（第二）これを眞似られては日本小說の前途に大弊あるため
（第三）眞の小說は現在若くは過去を寫すに止まるべし將來の事を小說に綴るは決して稗史家の眞面目に非ずと悟つた爲め
（第四）アヽいやだと感ぜしため
（第五）いやだと思つてはもう書けぬため

であるといふ。この五ケ條中第一、第二、第四、第五は同じ「氣に入らぬ」といふ氣持を種々の語で述べたばかりであるが、第三だけは違ふ、これは確固とした文學的原則から出てゐる。この原則の意味を敷衍して逍遙は、未來小說論に纏め上げ、未來小說に關する考へを根本的に示した。讀賣新聞紙（明治二十年六月十四日―十五日）に掲げた『未來記に類する小說』と題するものがこれである。その詳はこゝでは述べぬことにするが、今中止の理由の說明上、簡

明にその主張を要約すると、元來小說は世態人情を模寫するを本分とする。然し單なる模寫では美術にならない、世態人情の妙想を寫さなくてはならない。妙想は無形のものであり、宿る物がなしには現れない。從つて妙想を捉へるには實事を直接觀察しなければならぬ。卽ち小說を成立せしむる根本手段は直接の觀察にある、世人が漠然と論ずる如く架空の想像によるのではない。いな架空の想像では決して妙想は寫し難い。だが直接觀察を根本條件とする以上、未來小說は到底成立しかねる。何となれば如何にしても未來の妙想を直接觀察する手段はないからである。殊に日本の如き外來的影響に感染され易い社會の未來の狀態及び人情の變遷の如きは、想像のみによつて寫し得るところではない。かくて逍遙によると、未來小說不成立の論が成立つ。此の作の中絕の根本理由はこゝにあつたのである。

註（一）　明治二十年一月二十一日讀賣雜譚
註（二）　大正十五年六月、福永書店版『內地雜居未來之夢』解題（神代種亮氏）
註（三）　明治二十年六月十四日―十五日讀賣新聞『未來記に類する小說』
註（四）　同年四月九日讀賣新聞、春の屋主人寄書
註（五）　大正十四年七月、早稻田文學二三三號『明治文學初期の追憶』
註（六）　『明治文化全集』第六卷外交篇中の條約改正關係書類參照
註（七）　明治十七年十二月―十八年二月五日郵便報知新聞『市區改正論』
註（八）　例せば明治十九年三月十七日郵便報知の新說
註（九）　明治十六年に『二十三年未來記』（菊亭靜）がある。
註（一〇）　末廣鐵腸の『二十三年未來記』は明治十八年十一月朝野新聞に出しもの、原題『夢ニナレ〳〵』といふ。

『諷誡 京わらんべ』

嚴正にいへば、『京わらんべ』は、逍遙の著作中政治小說をもつて目すべき唯一のものである。形式は寓意小說であり、本筋は政治的諷刺にあること勿論だが、そればかりでなくは當時の日本人社會全體に對する諷刺も含まれてゐる。その政治的諷刺に將來を警誡する調子がある點は、『未來の夢』と相通ずるところがあるともいへる。

物語そのものは、極めて淡白な素直なものである。

豐原正夫は今年十九の青年華族であるが、その妹に利子姬といふ才色双美の佳人がある。利子姬は親同士の約束で、中津國彥と許嫁となつてゐる。國彥は武家出の書生で、これも十九歲になる。然るに時の大官萩野隼人はいつしか利子を見染め、豐原家の家令縣居管兵衛を手馴づけて、これをわが有にせんと目ろむ。中津は始めは研學專念で利子のことなど忘れてゐたが、都の風に染むにつれて、何となく異性の慰藉が欲しくなり、手近いほとりで試みるが思ふやうにならぬので、利子のことを思ひ出し、急に豐原家に利子姬を卽時引渡し方を申込む。これを聞いて誰より困惑したのは縣居である。彼は早速萩野に駈けつけ、種々智慧を絞つて密議する。その結果國彥に對して身分相違を楯に引取條件を出して引取資格の出來るまで結婚を待たせることにする。（第一）は五年後の二十三まで待つこと、（第二）それまでに一家と主人としての體面を具すること、これである。さうして陰にこれを妨碍しようといふ。國彥は種々工面して先づ麻布に一家を構へる、だがもともと異性ほしさが結婚談判の原因なのだから、五年など待ちきれず、腕力で奪ひ取らうといふことになる。さうして利子姬の侍女お道が江東法印のところへ用事で出かけたのを利子とまちがへて、巧みに奪ひ取らうとするが、江東法印に看破されて失敗する。

失敗後の國彥は自暴氣味となり、志を忘れ、酒色に溺れて茫然と過す。五年後の大目的などは全く忘れたかに見える。利子姬はあくまで親達の約束通り國彥の許にいかうと望んでゐるが、國彥の此の頃は全く頼りないので、やがては豐原家が萩野等の自由にされる日が來ることを考へて、物思ひに沈んでゐる。さうとも知らぬ中津國彥は、依然たる浮はついた生活で殆んど借金に產を失ひつゝも、鷲谷の溫泉に大法螺で舊知を煙にまいたりして得意になつてゐる。それで、豐原家の家令縣居は、萩原と心を合せ、祕かに中津國彥の行動を探つてゐたが、かゝる樣子を見て大に安心する。そ數年大志を忘れて放蕩してゐた酬ひは、さう易々と事が運ばず、突然借金取の內住や身脫女郎の紫陽花などに押しかけられて、馬脚を露はし、つひに利子姬と結婚する資格がないことが分明する。萩野は國彥の窮地に入つたのを救ふ風をして、利子もろとも國彥を自分の邸に引取る。然し二人は名のみの夫婦であつて、親しく口をきくことも許されない云々。

此の寓意小說の政治的寓意は如何。先づ人名の表象の說明から始めよう。豐原正夫は日本國であり又日本新政府を意味する。妹利子は權利、卽ち國政支配の權利を意味する。中津國彥は、いふまでもなく日本國民のことである。萩野隼人は名の如く薩長藩閥を示す。豐原家の家令たる縣居管兵衛は地方縣官連をいふ。江東法印は高等法院の謎語である。縣居の娘お道は權利を得る道、卽ち道理なる秩序を表せるものであらう。紫陽花は日本人の變り易さ、燃え立ち易さを示して居り、又內住某は內地雜居の問題の切迫を意味して居る。十九歲が明治十九年、二十三歲云々が明治二十三年なることはいふまでもない。

以上をキイとして政治的寓意を解釋すると、明治新政府は維新運動の連續として元來國民に對して參政の權利を認

めなければならぬ立場にあつた。然るに薩長藩閥は、參政の權利を横奪せんとし、地方縣知事等を爪牙として國民を愚にして、國民參政の期限を明治二十三年に定め、且つ財産によつてその參政權を制限せんとする。だから國民たるものは奮發して此の條件に應ずることを努め、二十三年を迎へるために十分準備すべき筈であるのに、彼等には一向さういふ風もない。從つて直向外的模倣ばかり試みて、漸層的な內的發展を迂と貶し去る。かくて、實力の有無を考へず暴力によつて手取早く志を遂んとかゝる政治運動者が出て來る。然し彼等の運動は失敗し、高等法院からは嚴しい審斷をうける。此の後國民の參政運動は挫折して又奮はず、小康安逸を願つて、國民權利の大事を忘れ、社會改良の大言壯語に頑固者流を煙に捲くが、何等堅實な參政準備がない。かくて空しく二十三年になつて、藩閥からわざと參政權利を受けとれといはれても如何にすべきか狼狽するのみ、內地雜居問題は迫るし、紫陽花への空手形はあり、折角の二十三年になつても獨立の生計どころか矢張藩閥の世話に甘んじなければならぬ仕儀だから、國效の權利は名ばかり國民のものとなつても、實際は依然藩閥に握られ、國民はその頤使に甘んじなくてはならぬ。云々。

以上の政治的寓意を考へると、前半は事實を述べ、後半は警告の意を含んでゐる。作者が國民に對する態度は、流石寫實主義者だけに、徒らに幻想的に流れず、好意をもちつゝ或る程度まで冷い批判的に出てゐる。例をいへば（第五回）――

年の程は廿一二。色は白けれども艷やかならねば。一目亞細亞産の動物なりとは。誰にもわかりさうな。黄んだ面色。眼は近眼ぞとも思はれねど。兎角眼前の物のみ見て。遠くは眼の屆かぬ不便な質なり。鼻は羅馬鼻とは考らねども。別段低いとの程でもなし。（中略）口は薄脣にて能く動けど。概ね口眞似に用ふる多かり。齒は次第よく並びてあれども。幾分か根が堅くもあらぬと見え。切齒扼腕の其砌に。忽ち齒切を中途で廢て。グウタロべヱ乎となり

妙な病あり。耳は二ツとも滿足なれども。世にいふ筒耳といふのにや　頗る緊切たる大事を聞ても。右から左へと筒抜にする事あり。例へば獅子が來た御用心なさい。ソラコソ鷲がきた御注意なさい。と屢傍の人が忠告なしても

平氣の平左にて恬然顔なり。是等も此人の病といふべし(下略)。

獅子が英國であり鷲が露國であることはいふまでもない。總じてこの第五回の「溫泉場の大虛喝」の一條は、當時の國民の輕佻な移り氣な皮相的な文化生活を思ひきり手強く諷刺したもので、內地雜居を見越しての英學流行、社會改良熱、西洋崇拜、羅馬字會、假名の會、節酒會、束髮會、衣服改良會、宗敎改革等、明治十八、九年の顯著なブルジョア流行世相を縱横に描寫して、當時の國民が眼前の便利主義に捉はれて、如何に腰のきまらぬ風吹鳥的生活をしつゝ、こけ威しの態度で騷ぎ廻つてゐたかといふことをやゝ呆れ氣味に連ねてゐる。作者の諷するところを考へるといはゞかゝる輕佻浮薄虛榮的模倣的な國民は大政に參する資格などない、よろしく國會は尙早とすべしとでもいひさうに思はれる。當時の國民の散亂體の現狀を見ては、作者は眞實から考へたかも知れない。

而かもこゝで注意すべきは以上の虛喝の間に自づから作者の本音めくものが滲み出てゐることである。例へば――

(前略)開化狂がいふ所によるト。束髮は働くに便利だ。洋服は働くに便利だ。ヤレ便利ソレ便利と。妄に便利主義を提出しますが。顧ふに開化狂は。ベンザムが實利の御說敎を嚙違へて。實利を實用と心得てしまつて。實用が肝心だと思ふのかも知らんが。人生終極の大目的は。マア假定して最大數の最大幸福。幸福とは何をか云ふ。到底快樂といふ事でせう。知らず快樂は何者よりなるぞ。曰く精神の快樂。曰く肉體の快樂。此二ツより外にやアありますまい。所謂肉體の快樂のうちには衣食の樂も籠つて居るから。衣食も中々馬鹿にやア出來んテ。暖衣飽食すなはち足れりと。ズッとすましこんで居た時代は所謂堯舜の蒙昧時代で。今時其樣な主義はいけませんテ。人間お互ひに孜々汲々。刻苦拮据して勉強するは。イヤサ。汗水をたらして稼は。抑亦何の爲です。蓋し綽々たる餘裕を得

て。衣服食物はいふも更なり。其他百般の事々物々も唯に命を維ぐ爲許りでなく。幾分か精神を養ふ程な完美な物件にしたいのが本願。此本願が遂たい計で。ヤレ權利とか。ヤレ立憲とか。色々政治にまで及んでさアネ。政治を議するのは權利を重んずるが爲です。權利を重んずるは幸福を重んずるが爲ですネ。ソラ。幸福の原素は何です。ソラ。第一に自營の道。即ち衣食住にございませうがネ。然し只食ひ只被るのは野蠻も大方は成得て居る事。僕等が希望する衣服と食とは。決して其樣なものではないです。未來の幸福の基礎ともなるべき。御前上等のがほしい譯です。

そこには保守を嘲けりつゝ而かも急激を排する改進主義家の面目が見えてゐるのみならず、その改革理想の新興ブルジョアを背景にしてゐることが察知されるところは、時代に照して特に重要であらう。

さて又上述の大虛喝(おほほら)の場でも推想のつくことであるが、此の書には政治的寓意の外に、社會的諷刺ともいふべきものを多分に含んでゐる。即ち此の篇々縱斷的歷史的に見るときには政治的寓意小說となるが橫斷的に社會的に見直すときには社會的諷刺小說となる。例へば豐原正夫が同じ華族の風流家と競爭的に藝妓狂ひをして重代の寶物を質草にするに至る如き(第一回)、透明潔白色氣なしの書生國彥が東京の水に染んで女色を思ふところの如き(第一回)、緜居が萩野の好色に呆れ、「御前は御愛妾が御三方もおいであそばし、殊には奥方もおいであそばしますから」、利子姬の件の如き座興かと思つたと本音を吐くところの如き(第二回)、國彥の失敗にかこつけて男女一旦の痴情を戒しめ、眞の高尚なる戀情を敎へるところの如き(第三回)、及び第五回「溫泉場の大虛喝(ほら)全章」の如きは勿論、就中——

現今は虛喝の世の中。虛喝(ほら)の吹方の巧な奴輩(やつら)が。優勝劣敗で用ひられるテ。(中略)ヨシ〳〵是からは主義を變じて。ズット虛喝主義で威かしてくれよう。イヤまてヨ虛喝ではいかんテ。いつそ諂諛(べんちやら)主義を取つた方がいゝかナ。

時事新報でも論じた事だが。兎角自身にはお髭の塵だテ。しかし我のやうな我儘者では。お世辭が六々にはいはれんからして。寧ろ虛喝の方が持質にあるかナ。ハテどうした者であらうなア。天保の度どうするもんか。兩樣共に用ひて見よう云々。

の一般の如き、又書生の國彥が年明け娼妓に推込まれて閉口するところの如き（第六回、勿論これには前述の如き政治的寓意もあるが）、皆當時の社會現象の或るものに對する作者の諷刺的微苦笑を語つてゐるのではないか。

最後に作のテクニック上から眞の一言いひ添へる。再びいふが趣向の點では淡々とした自然なもので、素直た輕妙な味ひをもつてゐるが、倉卒の作と序文に斷はつてある割に、プロット進行の序破急が整然と工夫されてゐる。或は枯淡に失するといふ難もあるかも知れぬが、これはこれで可い。人物は寓意的表象であるだけ一概に論じ難いが、中津國彥の書生、萩野隼人の薩長官人の如き、性格描寫としても、讀者に明瞭な印象を殘す。第五回「溫泉場の大虛喝」の場景の一種不思議な興味あ丶老熟文字たることは上來度々暗示したところであるから、こゝでは繰り返さぬことにしよう。

八　著　作（四）

『朗蘭夫人傳』

表題本文「泰西女夫傳」のうちだといふ角書がついてゐるので察すると、逍遙にはなほ此の種の女丈夫傳を他に幾篇も譯す腹案があつたのであらうか。原本はグレエス・ホワートン、フェリップ・ホワートン共著の『社會の女王』

(The Queens of Society) の第二篇を譯述したもの。此の書の後版が『交際の女王』と改められたのは、却つて原題に復したわけである。

私はこの書については餘り多くを語る必要を認めない。逍遙はこの書を原本通りの史傳として譯述して居り、格別これを稗史小說化する努力をしてゐない。勿論マダム・ローランはフランス大革命の大立物の一人であり、それだけに、彼女の傳記的事實がそのまゝで讀者に多大の政治的感銘を與へはするものゝ、逍遙が、よしその改進主義的立場からにせよ、此のマダムの履歷と血腥さい革命的背景を利用して、時人に政治的啓蒙を與へるべく小說的構想をもつ幾章幾節を附加してくれたなら、如何なる好箇の政治小說が出來たことであらう。勿論、冷々亭杏雨(二葉亭四迷)が叙文で述べてゐる如く、この傳記的記述のまゝでも政治小說と見る人のあつたことは事實であらう。

(前略) 若しこの書をみてもて世の金喰ひ蟲となさば誠に面にくしもて月をかけし若櫻の一枝をましたるとなさば至て難有し人はなにとか評さん我はかくこそいはめ或人曰く余輩ノ見ル所ヲ以テスレバ則チ然ラズ夫レ政事小說ノ世ニ益アル所以ハ其記事ノ一方ニ向ツテハ人ノ政治思想ヲ喚起シ又一方ニ向ツテハ世ノ政事家ノ爲メニ參考トナルモノアレバナリ蓋シ此書ノ有益ナル所以モ亦此ニ在テ彼ニ在ラズとさることもありなん乎世には棕櫚箒木も幽靈と見ゆる例もあればありと思はゞなかるべきやは云々。

この書が政治小說でないに係らずなほ一二頁を割くのは、以上の一節があるからである。私は次に文例を引用するだけにして置く。

此時麻リイジヤンは十七歲標る梅を見ては志士を思ひ。さそふ水あらばいなむとすなる正に結褵の期に近づきける。其容貌はいかにといふに。むしろ威嚴のある容止にて。窈窕婀娜と言ふ限にはあらず。額は高くして廣く以て腦髓の大なるを示し。瞳は濃碧にして炯々。了見の深遠なると。氣象の快活とを示すものに似たり。金髮は長く垂

れて廣き肩に懸り姿は痩肉にして背は頗る高し總ての容の構造雄々しうして。嚴として又猛きが如くなれども、さすがに笑貌は優にやさしく。柔よく荒士雄をも制しつべく。また鬼神をもとりひしぐべし。さればこそ後にいたりて。彼の修羅場の中央に立て。革命擾亂の狂瀾に駕し。數萬の過激なる猛者をひきゐ。婦女子を木偶とおとしめ卑しみ。共に齢を肯んぜざる。倨傲尊大なる大丈夫をさへに。おのが隷僕とはなしたるなれ。眉斧よく命を斷ち。其美よく人を移す。ましてや才色兼備へて。更に儼然たるますら孃子をや。麻リイが一世を籠絡せしはそも〳〵また故あるかな。（初版第三〇—三二頁）。

以上によつて此の書の大體を想察出來るであらう。通篇かく小說的文字に富んではゐるが、然し依然史傳であつて小說ではない。

『無敵の刄』

明治二十年度の逍遙の作品中には政治小說が一部もない。よつて此の一年を飛ばして明治二十一年以後に移ることにする。明治二十年前後は政治小說の全盛期になる時だのに、逍遙に政治小說の作が一部もない、これには、意識的に避けたらしい形が見える（一）逍遙の本心は恐らく此のまゝ政治小說めくものゝ筆を絶たうと欲したのであらう。然し環境の力がそれを許さず、廿一年から又々筆を政治小說につけ、遂に花苒廿三年に及んだ。

『無敵の刄』は飜譯小說であり、二十一年二月十七日から四月二十七日まで新潟新聞に掲げられたもの、原作は「英國にて演劇にしくみ非常の喝采を得たる」小說とのみで、今日尋ねやうもないが、追つて調べてみることにしよう。內容は大ナポレオンの祕密探偵長たりし革命期の大スパイ、ジョセフ・フーシエを中心に反ナポレオン黨の志士ゼロ

ーム・レグランジの活動を叙したものである。逍遙がこの小說を紹介した第一の理由は、讀んでみて如何にも面白かつたからに違ひないが、然し時勢時事に對する底意（諷刺といつても可い）がいさゝかないでもなかつた。此の小說を紹介する口上にも——

何となくドコとなく當今の日本に關係があるやうで無いやうで至極面白くをかしく候へば云々

とあるが、緒言には更にこれを敷衍して——

（前略）此筆は革命史を一讀して諸君の熟知されし事なるべし然り熟知さるゝ所ならんさりながら諸君は只革命史の大體を知りたまふのみ未だナポレオン、ボナパルトが如何にボールボンの君王にも優れる壓制專斷の君なりし歟如何にナポレオンが設けたる祕密探偵が嚴重にして周密にして變幻無究にして神出鬼沒にして端倪すべからざるものなりし歟は恐らくは知りたまはざる所なるべし是主人が殊更に本篇を採り來りてこれを譯述する所以なり他に期する所絕えて無しと雖も蓋し讀來り讀去りて他に期すべき事あるが如くに思さば人の好みはさまぐなり一人の見て箒とする物、他人は見て幽靈と思ふべく柳下惠の見て養老劑となす物、盜跖は見て野盜の料となすべし著者の期する所と讀者の期する所と全く相違せりと答へんのみ云々

卽ち祕密探偵政治といふものを當時の日本の時事に引つかけたものと、解釋して然るべきであらう。條約改正、大同團結の運動から政海に大渦が沸き、在野政客に對するクーデターとして有名な保安條例の急施に數百名の逐客が悲憤の淚を飮んだのは、直前の事實である。逍遙もまさか蠻骨三島通庸をもつて神通不思議のフーシェに擬したわけではあるまいが、密偵と志士の必死のせり合ひを見て何と感じたか、以上の緖言とその內容と此の時事とを照合してみると、逍遙の底意に何やら首肯すべき暗示がある。

フーシェが旣にスパイとして空前無比の大技能を有する上に、フーシェの織り渡した探偵網が實に周到なものであ

り、又その手足として奔走する密偵が尋常一樣のものではなかつた。此の作中に見えてゐる如く、好んで才色佳絕の淑女を密偵に使用した外、貴族、軍人、平民、あらゆる階級に及んで居り、實に彼の主人ナポレオンの后ジョセフヒンでさへ時々フーシェの密偵の一人となつたといへば、その範圍の廣大なことは想像だにつかぬ程であつた。此の作中に活躍するデュバール夫人、マリ、ラシェルの三美姬と才子ビヾエー（前伯爵）は就中フーシェの股肱と頼むところであつた。

此の作の內容を今少し詳しく語れば、ナポレオン皇帝の勢力隆々としてフーシェの密偵が一人の反對黨の存在をさへ許さぬ程活躍してゐたところ、大膽不敵にもパリの新聞にナポレオン及びフーシェを痛烈に攻擊した論文を續けざまに發表して恐れないヂスクといふものがある。ヂスクとは何人ぞといふことはパリの宮廷社交界の魔呪のやうに語り合はされてゐるが、如何にしても分からない。果てはナポレオンは業を沸し、これは大方フーシェ自身が惡戲して自分をからかつてゐるのだと疑ひ、免職する腹をきめさへする。フーシェは部下の三美姬一才子を始め、精をつくしてヂスクの本人を發見しようと努力するが、何ともならない。ところが、偶然カルトウシュ大佐といふ愚に近い軍人がヂスクの本人の何人なるかを發見し、フーシェに密告する。それは王黨の志士ゼローム・レグランジといふ青年の爲すところだつたのである。フーシェは直ちにゼロームを捕へる手配をするが、ゼロームの方も油斷はなく、大佐が自分の假面を見つけたと覺るや忽ち妹を連れてロンドンに逃げる。フーシェは直ちにこれを追跡せんとし、部下をロンドンへ送る口實として、囚人の一人たる英國貴族（ブレントン伯）を釋放し、此の貴族にデュバール夫人を托して渡英せしめる。勿論スパイといふことは知らさない、親戚の狂人がロンドンに逃げたから、連れ戾しに行くといふのである。夫人はロンドンで兎もかくゼロームを見つける、然し別の方面で重大な障碍に會ふ。それは自分に對するブレントン伯の戀慕である。デュバール夫人は職務と人情の間に大に懊惱する。

かくて話頭が既に佳境に入つて、これからが益々面白からうと思はれるのに、十九回で中絶してゐる。恐らく以後續稿されなかつたものであらう。早く原作に接して此の話頭の變化を知りたいものである。

註（一） 明治二十年一月二十一日讀賣新聞雜譚欄「ヤヨ喃暫らく、白雲山人に物申さん」の一文に此の邊の心境が窺はれる。

八　著　作（六）

『小説外務大臣』

此の小説は矢張り讀賣新聞に掲載されたもので、明治二十一年四月から六月に亙つて二十九回出てゐる、だが一回が二回乃至三回四回にも分載されてゐるから普通の六十回以上に當るかも知れない。わざと「共醉居士翻案」と戯署した上、次の緒書きが添つてゐる。

右は佛國の傳奇家バータル氏が嘗て畢世の腕を揮つて演劇にしくみ大喝采を博せし有名なる脚本なりとぞ近きころ英國の文人ヲチットレー氏が之を小説にひき直し「時好（フハッション）」といへる英國の雜誌に掲げたるが是また好評を得たりといふ居士いぬる日神田邊をぶらつきフト該雜誌の端本を得たるに恰も好し件の小説載せてありもとより端本の事なれば全貌を窺ふこと能はざれど之を要するにテント面白し我國の事にひき直し傍訓（ふりがな）新聞などに載せんにはかならず中るべしと思ふうち粗忽なる家人之を古新聞とまちがへ屑屋へやつてしまひたり殘念なれど詮方なし此たびさる方のお好みとやらにて日就社より頼みを受け記憶の儘を翻案すれど大かたは原書に戻れるならん加ふるに生れてこのかた此たびをかはきりの小説三昧お聞苦しきは嘸かしと承知の上で書く抑の強弓はるの日だけにお目長にみそなはさば翻案者の貌附夷子さまの如くなるべし

勿論一時の戯れではあるが、かく折角の創作を他人の飜案らしく見せかけたのは何故であるか。作者はこれを釋明していふ、——

あれ（『外務大臣』）は當時讀賣の客員として義務上いや〱ながら書きしもの、隨つて創作と名乘るが辛く、戯作たるを暗示すべく飜案を吹聽した歟と記憶いたし候（著者宛私信の一節）。

即ち此の小說の執筆は、作者の本心ではなく、環境によつて强ひられたものなることが分かる。この態度はこの作の全體に通じて反映してゐる。作者は又緒書き中の戯名戯署を說明して曰く——

パータルは多分「場當り」の意なるべくヲチットレーは「落を取れ」なるべくや共醉居士とは何の意なりしや憶ひ出ださず或は「獨醒」の反對、「世人と共に醉ふ」即ち「時好に追隨す」といふ意味にてはなかりし歟（私信の一節）。

條約改正は當時の大問題であり、これを繞る情實には好箇政治小說の題材となるものがある。自分は敢て政治問題を小說化する意志はないが、假りに時好に追隨して場當りの落を取らうといふ意味であらう。

此の小說の標題にいふ「外務大臣」とは、何人ぞ、又時の政治問題を小說化したとして、何れ程の事實が織り込まれてゐるか。作者は更にこれ等の疑問に答へて曰く——

何分年を經候故筋立もよくは記憶せざれど故大隈老侯を多少當込んで空想八分の作意なりしやにぞんじ候但しどういふ事實的背景もモデルもなく其日々々の出鱈目云々（私信の一節）。

即ち大隈重信が此の年二月伊藤内閣の外務大臣に返咲くまでの政局變化を中心に、條約改正運動や歐化社會の動靜や有閑階級のイントリイグやを描いたもの、空想八分はやゝ首肯すべきも、其日々々の出鱈目云々は文字通りに取るべきではない。重立つた人物は左の通りである。

猿渡　敏基（橋場伯といふ）――大隈
東條　重躬（伯爵　大臣）――伊藤
新島　大（伯爵　大臣）――井上
一ヶ瀬忠固（伯爵　大臣）――黒田
小室野一郎（始教師後東條伯秘書官）
稲村　三利（東條伯秘書官）
才東機四郎（教　　授）
織部　喬澄（新聞記者）
長後　久男（學　　士）
壯士　岩根　某
　　蠣崎　某
　本間　某　その他
山の井秀子（女　教　師）
小室野しげ子（女　教　師）
長後みな子（久　男　妹）
東條しやう子（伯爵　令孃）

右の中主要政治家のモデルは判然してゐるが、その他は判然しない、所謂「空想八分」のうちに入るものであらう。

梗概をいへば――

外尊内卑、歐化主義、條約改正のための方便から時の外務大臣新島伯のとつた政策が、輿論の反對を買ひ、壯士連の過激運動となり、伯の辭職となり、引いては内閣も危くなり、折角の經綸も實行されずに終る恐れがあるので、總理大臣東條伯は漸く郷閥孤立の不利をさとり、熟思の末、祕書官稻村と計り、政界一方の重鎭たる一ケ瀬伯と聯盟しようとする。稻村はそのため、一ケ瀬伯の股肱たる新歸朝の教授才東機四郎に東條伯の令孃を嫁させることをすゝめる。東條伯もやむなく承知で婦人政略を行はうとする。才東は又才東で別に多少經綸の才があるので、一ケ瀬伯と猿渡伯を握手させて、一ケ瀬に縱横に國政を料理させてみたいといふ氣持がある。且つ又一つには東條及び稻村の眞意を見拔いてゐるので、東條令孃との結婚をことはる。さうして却て同じ東條伯の祕書役の一人たる小宮野一郎と提携して稻村の奸謀をくじき、猿渡の入閣とする。小宮野は姉のしげ子が東條伯と特殊關係があつたので（今では稻村と特殊關係をつゞけてゐる）、伯の信用もあり、第一東條令孃を戀してゐるので、稻村の計畫をもれ聞いて、戀の邪魔をされたものとひどく心外に思つてゐる（稻村が姉をだましてゐることをも快く思つてゐない）。それで喜んで才東と同盟する。かく、稻村と才東、小宮野、三國の暗闘を中心に、政局は推移して、猿渡の外務大臣を實現する方に動いて行く。これが此の小說の政治的結構の荒筋である。この荒筋から派生して舞臺を賑やかにしてゐる小さなプロットが一連あつて、これが又當時の歐化的有閑社會乃至智識階級の男女人情の一班を示してゐる。稻村と小宮野及び山の井二女學士の關係、口には清純な男女交際を唱へて裏面で敢て醜交を欲する當時の女學生社會。それから才東とその舊友長後兄妹との交涉、兄久男の深刻な不平と嫉妬と邪推、畸型的の野心（長後は猿渡と緣があり、自ら猿渡の腹心をもつて任じてゐる。）殊に妹みな子の才東に對するあどけない戀、老猾な織部と壯士、煽動と探偵、壯士の行動、大臣暗殺未遂などが、雲行のあはたゞしい政界と歐化主義の世相とを背景にして、二重に三重に織りまぜられてゐる。

かくて此の小說は遺憾にも猿渡が外務大臣になるところまで行かずに中絕して、後半の腹案は筋書きだけで物語ら

れてゐる。これによると後半は——

小室野姉弟が稻村の政略を挫かんとて才東と皆子の緣邊を取持つ事、久男が嫉妬と偏執に因つて此緣邊を拒むより人しらぬ皆子の心の苦み、織部の不義(長後を利用する)、稻村の陰謀、長後が其犧牲となつて一方に於ては財產を失ひ一方に方ては良友を失はんとする事、稻村が壯士を煽動して小室野一郎を辱めんとする事、皆子の義、意中の人を棄て兄の病惱を除かんとする事、小室野繁子稻村にあざむかれて再び弟の敵となる事、才東が稻村の密計を洞察して小室野一郎と心をあはせ、一ケ瀨伯と東條伯とを說き、遂に三伯爵をして內會議を開かしむるに至り、猿渡伯外務大臣となるに終る。「其間最も重立たる部分は才東と久男の關係なれどそれらは例の如き感情的の話にて別段に奇なる出來事もなしヲヤ〳〵といふ事件もなくコレハ〳〵といふべき脚色もなし久男の病重りし時愁歎場めいたる幕あらはれ出る積なれど果して愁歎場となるべきか將た茶番と化るや其の邊は覺束なし」云々。

その中絕するに至つた理由については、作者はかういつてゐる、——

よくはおぼえねど中絕せしは必ずしも惡評の故にではなく寧ろ自分で我慢出來なくなり數願して引退つたものであつたやうにぞんじ候云々(私信の一節)。

執筆の動機を考へてみると、かゝる結末となるのは作者の氣持として自然であると思ふ。

『外務大臣』が描かうとした二十年前後の政局は、明治政治史上、國會願望の叫びの高まつた十三、四年に次いで多事な、從つて興味のあるものである。明治二十年の前半には、時の外務大臣井上馨は必ず自己の手で條約改正の成るべきを信じ、一つは改正促進のため、一つは前祝ひの意味で頻りに鹿鳴館に夜宴舞踏會を催して全盛得意の絕頂にあつた。だが改正會議は井上の努力を裏切つて進行せず、折角の宴會も促進の足しとはならぬのみか、却て改正會議に

對する反對が內部から火の手を揚げた。五月、勝安芳の建白はその先驅であり、ついでボアソナードの條約改正案反對意見となり、六月農商務大臣谷干城が歐洲から歸朝して、條約改正反對の態度を明らかにし、意見書を提出して挂冠した。此の氣勢を見て、數年屛息してゐた民間の反政府運動が俄然頭をもたげた。七月に入つて政府は遂に條約改正談判を中止し、九月、主任者たる井上は內閣を去り、伊藤が外務を兼任し、黑田清隆が農商務として入閣した。此の時黑田を總理とし大隈を外務とする案もあつたが、準備が調はぬので、黑田の入閣に止まつた。大隈入閣案は黑田から出たのであるが、岩崎彌之助も大隈伊藤の聯携を欲し、これを實現せしめんとて努力した。

民間運動は、あらゆる材料を集めて伊藤內閣を攻擊した。就中有力な材料は條約改正、租税輕減、及び言論集會請願の三自由であつた。政府も勿論、種々の手段で鎭壓に努めた。民間の運動はこの時までは統一がなかつたが、機を見て起つた後藤象二郞は丁亥俱樂部を組織し、自然民間志士の牛耳を執る位地にたつた。壯士の示威運動は上野その他で度々催されたが、かゝる集會には探偵警吏の方が多い位であつた。後藤は陛下に謁見して時弊を言上するところあらんとしたが、當局が謁見を許さなかつたので、意見書を奉つた。後藤が民間志士の中心となるだけ、政府からせば後藤が民間陰謀の中心と見えた。壯士は遠からず政府を倒し得るものと夢想し、探偵は輪をかけて盛んに報告した。政府はかゝる事相をもつて極めて重大視し、非常手段によらずば治安を維持することが出來ぬとなした。かくて二十年の暮思ひきつた保安條例の發布となつたのである。總理の伊藤は流石に責任を解し、黑田と交代しようとした。だが山縣が大反對したので、暫時大隈を外務として入閣せしむることとした。これが二十一年二月一日である（黑田は四月總理となつた）。（『明治政史』及び三宅雪嶺『同時代觀』による）。

かゝる緊張した政局を舞臺にしてゐながら作者逍遙の態度は（當然とはいへ）極めて消極的である。二十年以前の諸作に見る如き創作熱がない。のみならず政治小說を描きつゝも、積極的に政治小說を作らうとする意志のないことは、

よく出てゐる。第一に注目されるのは、作者の政治的イデオロギイが殆んど全く見えないことである。緊張せる政局を寫すにも淡々冷々、一脈の戲謔的分子をさへ交へてゐる。

當時何者の刺戟に因て歟政治世界大に動搖し或は海關稅則の事に關し或は現政府の政策に關して陸續献白書を提出する事殆ど流行物の如くなりて物情何となく穩かならず加ふるに內閣の大臣中に議論の相稱ざる所ありて卒然勇退せし人などもありて朝野を問はず苟くも政事に志を抱ける者は相あへば其說かならず政事に涉り是非と得失とを知るも知らぬもかしましく其是非と得失を評しあへり其樣熱病患者の譫語をいふが如し就中地方に於ては此熱病頗る蔓延の勢ひを逞しうし最初は此の病にかゝりし者專ら靑年輩のみなりしが後には「三コロリ」に生存りし矍鑠たる人にも傳染して何者の似而非神巫が言觸せし歟献白書を出さぬ地方は政事に不熱心を極めたる者なり有志總代を送らぬ縣地は憂世愛國の思想なしといふ事地方一般の流行言葉となり彼の病熱の傳染する所終に献白書を草せざるはなく有志總代を任選して自腹を其旅費に切ざるなし又中央の首府に於ては所謂壯士といふ憂世の豪傑八方に輩出し或は其牙營を山の手の牛乳屋の奧に構へ赤字の旗翩飜と朝風にひるがへらせ或は下町の下宿屋の樓上に籠りて內閣攻擊の文を草し間接に黨勢を張らんとするなど猶佛國の革命時代に彼の有名なるブリッソウが四階樓上に身を潛まして政府の進退を指顧せしが如し只彼は一人にて「ジロンヂスト」黨を左右し此は數百人にて何事を爲出さず徒らに肩臂を張せしのみ第四回、在野の伯爵)

かく政局推移の中心動力と認められる民間運動に對しても積極的に同情を表示せぬのみか、往々微温的な皮肉諷刺を浴せてゐる。甚だ虛無的無理想的な態度である。それでも、逍遙の政治的イデオロギイとも覺しいものを強て拾ひあげてみようといふなら、あるにはある、猿渡の議論に托して、當時の民間政治運動が空疎な無內容なのを諷してゐる點(第四回)、暴力的政治手段を否認し、大臣暗殺の如きを排擊してゐる點(第十八回)、東條對稲村の如き黑幕政治を

排斥する如き意味を見せてゐる點など、さういふことが出來るであらう。殊に第四回及び第十七回に於いて、在野政治家中猿渡伯（大隈）をもつて第一とするの意を暗示してゐる如き、消極的ながら改進黨意識の現れといへぬこともない。いな、猿渡卽ち大隈を看板として小說を書くといふことが、すでに改進黨的イデオロギイから出たのかも知れない。若し改進黨的立場より云々せば、逍遙の此の微溫的消極主義も、大隈が大臣となるまでの改進黨の對政界態度と多少相通ずるものがあるともいへやう。

條約改正にともなふ一部背景の空氣には、當然皮相的歐化分子が强い。舞踏會、園遊會、淑女社交會（第十一回栢舟會の如き）などがあり、衣食の歐化主義は勿論、男女交際も盛んであり、社會改良の基礎が、こゝあるとされてゐる。然し作中の開化女流の唱へる交際論は眞面目なものではなく、自己の醜行を蔽はんための辯護の具たるに過ぎない。時代の反感も勿論描かれてゐるが、作者自身も不賛成の口吻を示し、所謂淑女の半可通に苦笑してゐるのみである。

かゝる空氣が出てゐることは認められるがこれ以外、背景の描寫としては甚だ十分でない。時處が曖昧朦朧たるもので、讀者に一貫した明確な印象を與へない。これは一つはかゝる小說の性質上、忌むところがあつた爲めと、今一つ、かゝる社會に對する作者の知識が直接的でないためであらう。

總じて背景の社會は貴族とブルジョアとインテリゲンチャの世界で、政治も、社交も、學術も皆此の人々の壟斷するところであり、無産大衆が姿を見せてゐても、これは單に何等かの點で此の人々の手先としての役目を果してゐるのが察せられる。かゝる大衆は無論自覺自省を缺いてゐるが、たゞ彼等のある者は恐ろしく眞面目であり、作者の意圖に反して、彼等の底力によつて政局が動かされてゐるのではないかといふ感じが、讀者の腦裏を掠めぬでもない。

構造の上からいへば、政治的主眼と背景と物語の進行が甚しい破綻を示さずに轉じて行く點は、先づ難がない。然し眞の意味でプロットの有機的發展といふものがなく、クライマックスがなく、場面の變化が主となつてゐるので、相當の變化があつても、讀者には單調に感じさせる。且つ主人公がなく、たゞイントリイグのみが寫されてゐるやうに思はれ、人物の出入が不規則で、雜然不統一の印象を與へられる。イントリイグの點では、實にやゝこしい程入組んだもので、凡そ此の小說に出る人物にして何等かのイントリイグに關係してゐないのはない位である。東條伯は稻村と、猿渡伯は地方總代及び長後才東等と、一ヶ瀨伯は才東と、稻村は更に織部と、又別樣の意味で小室野、山の井二女史と、才東は稻村、小室野、長後と及び別樣の意味で長後の妹みな子と、小室野は才東と及び別樣の意味で東條しやう子と、織部は又長後と、及び壯士岩根蠣崎などと、壯士等は壯士同志と、各々一種のイントリイグをやつてゐる。さうしてイントリイグはイントリイグへと人によつて絡がつてゐて、甚だ糾紛したものになつてゐる。だがその陰謀が、政治的たると社交的たるとに論なく、何れも根深い點がなく、淺薄な皮相的なものであるだけに、表面はいかにも複雜だが、實際讀んでみてこれ亦その單調に驚くのである。

人物描寫の點では、猿渡、東條、一ヶ瀨の三伯爵の分は、作者も力を入れてあり、先づまづ Portrait として及第してゐる（猿渡は第四回、東條は第十回、一ヶ瀨は第十四回）。公平を期し愼重に筆をつけてゐるが、その奇癖を寫して諷刺の筆で風神を髣髴させてゐる。蓋しこれは逍遙の一技倆である。出來榮えは猿渡のが最もよく、一ヶ瀨これにつぎ、東條は比較的具體的描寫がなく抽象的に映る。三伯以下の男性では、不思議にも政治的には端役たる長後久男の性格が割合に鮮明な印象を與へる。これは肉體的にも精神的にも畸型的人物として描かれてゐる爲めもあるが、作者が何ういふものか、終始彼に同情ある態度で接し、皮肉諧謔を浴せても惡意を見せてゐない點からも注目される。稻村も黑幕的存在として比較的明確な印象を殘す。いはゆる俗物視される賤むべき性格だが、それだけに「腕」の人と

して動く。その割に才東、小室野は判然しない、小室野は兎も角も、稲村と對抗的地位にある才東は今少し確固とした性格を示すべきであらうし、作者も相當力を入れて說明してゐるらしく見えるに係らず、上すべりがしてゐる。聰明だが熱がない。織部はいかにもかゝる時代特有の水陸兩棲的の老獪人物らしく見える。壯士は純情、單純なところが可い、モノマニアめく行動ながら一貫してゐるだけに相應以上にはつきりした印象を殘す。女性の方では、小室野しげ子が一番よく描けてゐる。氣位が高いが、ぐづで意氣地なく學問のある割に愚劣な、無節操無定見な當時の開化女性の一典型と見られる。山の井も部分的にはよく描けてゐる、みな子をつかまへて男女交際の神髓を吹きこみ、內實は自家の醜交のカムフラージュをやるところが面白い。東條令孃は眞の一寸姿を見せるばかりだが、いかにもお茶ッピイらしく、印象が割に鮮やかである。長谷皆子は、才東に對する相手役として、もつと表面へ出てゐるべきであり、ある意味で小室野、山の井以上の位地を占めていゝ性格なのに、たゞ十六歲の可憐な美少女といふだけで陰の方に止まつてゐる。後半に於ける性格の發展が見たいものであつた。凡て人物描寫の一面に諷刺の意がこめられてあるのは、例の如くである。

最後に特筆すべきは、作者が一二の場面で眞のセンチメントをにじませてゐることである。これは從來の逍遙には見られない點であつた。みな子の才東に對するあどけない戀心、又壯士岩根が同志に大事決行を約し、ふと故鄕の母を思つて一滴の涙を垂れるところなどに、人の心をうつさうといふセンチメントが見られるのは、此の小說の思ひがけぬ獲物の一つであらう。第八、大運動會(のつゞき)の一節を引く。

あやしの旗怪しの目標(めじるし)黑ひ/\に押たてゝ此方の小高き丘の上に雲霞の如く簇集せしは所謂壯士の大運動會なり三千世界一色に玉玲瓏と降積む雪の中央(まんなか)に黑團々をなせし様は彼の北極洋の大氷山に黑き怪鳥が幾百千羽群り下りし如くなり雪を孕める朔風は喬き梢に怒り號び殺氣を帶べる喝采は虛空に響いて喧ましく拍手の聲を混ずる時は落か

からんとする雷に似たり
今演說の最中と覺しく黑團々の中央なる一段高き松の根元に突立あがれる一個(ひとり)の壯士色淺黑く貌痩たるが垢染たる二子織の布衣(ぬのこ)の袖をまくりあげて髮おどろなる額際より熱汗淋漓としたゝらし眼を怒らし面を赤くし一段落に達する每に空拳(こぶし)を空中にふりなびかし齒垢に汚れし口頭より沫をとばして演說せり其聲低きにあらざれど拍手の聲風の音等の騷がしき上に辯士の熱心度に過したためか其聲だん〱にしやがれたれば演說もやゝ本論らしき所に及びしところ只聽く者が我心を以て辯士の心を忖度するのみ遙かに後(うしろ)に立たる輩はわづかに虛空にひるがへる拳の影を望み見て愉快々々とわめき叫び喝采する聲わるゝ如し兎角するうちに辯士は苦しげなる聲をふりしぼり一段思ひ切つて調子を張あげ
「斯くの如き專斷を諸君は倘默許するか（ノウ〱の聲八方に起る）事の理否を問ず是非をたゞさず暴力を用ひて憂世の志士に凌虐す之れをしも忍ぶべくんば何事をか忍ぶ可からざらん諸君も倘之をしも忍ばんとするか（ヒヤ〱）…………

『外務大臣』は二十年以後の逍遙の創作中、本格の政治小說として見るべき殆んど唯一のものであるが、その唯一のものが、以上に述べて來た如く作者の態度が甚だ消極的であり、いはゞ時代の政治に對する幻滅感を示してゐる。從つて政治小說に對しても大に興をさましてゐることは事實である。第二十回「ひとり相撲」の中の最後、政治小說を評する語葉を讀めば、思ひ半ばに過ぎやう。

九　著　作（七）

『大　憲　章』
『姓名不詳奇病者』
『中　央　都　府』

廿二年に入つて政治小説に多少緣のあるものが三篇ある。『大憲章』、『姓名不詳奇病者』、『中央都府』、がそれである。それについて略叙しやう。

『大憲章』は明治二十二年二月から三月に亙つて『講壇改進憲法雜誌』に掲載されたもの。第十三世紀英國の大憲章（マグナ・カータ）發布に關する史談であつて、小説ではない。だが逍遙はその序詞中で――

本章大憲章の由來を語らずたゞちにランニミイドの一段を述ぶ時事に思ひ寄する所あればなり

といつてゐるのを考へると、開闢以來の盛儀と稱された此の年二月の憲法發布に因み、彼我を對照比較して、日本人民の幸福を暗示するつもりであつたのであらう。第一章「自由の曙光」は、英蘇の諸侯王がジョン王に迫り、種々の經緯の後、ランニミイドに大憲章をかち得ることを述べ、第二章「ジョン王」（上）はジョン王の出身、爲人、虐政非行を說き、第三章「ジョン王」（中）は第十三世紀の英國を述ぶ。以下中絕してゐる。

英國の自由の曙光、はじめてきらめきし神聖なる平原といふは皇城倫勤とヲチハムの里との中程に位しテームズ河の南岸、くはしく言へばステインスとウインドソルとの間にありランニミイドの牧場といふは是なり其邊沼多く千里一望、さすがに棄難き詠ありといふ。（中略）ましてや當時此處に於て淺ましき鬪諍の聲をきかず由々しき內亂の

未然に當りて思ひ測りしより平穩なる談判を經て國憲の基礎となりし未曾有の憲章を享有せし其人々の歡びは如何ばかりなりけん山川に鳴渡りし歡呼の聲々、今も尙史上に轟く心地す、時は六月といひながらも彼の國の曆に據ればまた盛暑ならぬ程なりしならん想ひ見る件の牧場、芳草は滋々として綠氈を布き、遠き杜、近き叢、新樹鬱蒼として青地の錦を懸けテームズ河は流れて絕えずおのづから不易の祥瑞を示し鳥喜び殘花笑ひ、山水人間共に勇み神聖なる自由が萬國に先ち此土に來降するを迎へしなるべし

『姓名不詳奇病者』、同じく二十二年五月憲法雜誌に掲載されたもの、一篇の諷刺文字ではあるが、逍遙空前の奇作である。首なく尾なく、趣向なく、宿構なく、卒然書き放したもの丶如く見えるが、蓋し政治諷刺としては上乘なものである。

此の年某月某日、某地の公道で卒倒した紳士體の年若い男がある。年のころは二十二三、姓名は不詳である。その被服は如何、「肌被は擊劍の折に用ふる筒襦袢といふものに似たり、それも紐ちぎれ締りなし、上なるは洋服、フロックは新調と覺し、チョッキとズボンとは古物と見ゆ、純粹の西洋仕立にあらず、思ふに八九年以前の誂なるべし云々。所持品は如何。「フロックのカクシには切ほぐしたる洋書夥多あり、多くは英書なり、いづれも一部につき三四乃至六七葉切取たる者、案ずるに原書の部數は尠くも數十部なるべし、此等の斷片彼此錯交、いづれが孰れなるや分らず、其中謄寫せるもの幾十葉あり、此等は皆他人に委托し要用なる部分を拔書させしものか、其拔書の仕方前後紛雜殆んと何事を書いたるか解しがたし、自筆と思はる丶は所々に挿入せる評言のみ、曰く斬新、曰く奇、曰く可奪、曰く可倣、曰く夫或然、曰く難解、曰く誤矣、曰く腐儒無顏色、曰く利己主義なる哉、曰く愉快、曰く敬服等、要するに心醉、輕信、自卑、自得、疑惑等の意、前後矛盾してあらはれたると同時に、其信條不定また不確、常に變化せ

るを示せるもの多し。チョツキのカクシには、寫眞六七葉あり、畫像を寫せりと見ゆる者二葉、其中神代の偶像云云、他の一葉(中略)、疑ひもなく大楠公の畫像云々、更に二樣あり(中略)、正しく維新頃の名士ならん(中略)、他の一枚も同じ人なり、但し其衣服は洋服なり、首だけを繼かへしならん、(中略)其他三四葉、いづれも海外の名士と覺し、新たに買取しものと見ゆれど、大かたは復寫か(中略)、推するに一は和聖東、一は奈破翁一世、一はビーコンスフヒールド侯なるべし云々」。「尚仕込杖一本と小さき手提一ツあり云々」、仕込杖は「中身に日本刀を用ひたれど鍊鍛甚だ下等なり。(中略)濫用せしものと見えて所々きづあり、蓋し犬威しの料となるべし」云々。手提に仕まひ込まれてゐた品々の中に、膏藥一貝丸藥二包ある、「膏藥の能書には神治膏と書いて、毒蟲にさゝれたる又は萬の腫物に善し云々とあり、案ずるに此男諸毒に感じ易く、且脹性にてありしならん、手足こゝかしこに腫物の痕あり、醫師の診斷によれば、斯かる質の皮膚は兎もすれば突然脹れあがり、殆ど破裂せんとするものなり、但し大概は破裂するに至らず、日を經るに隨ひ次第に縮み萎々として治するものなり云々、丸藥二包みは(中略)、一は肺病の妙藥、一は胃病の奇劑となり」云々。卒倒の原因は、醫師の言によるに一種の毒蟲に刺された爲めの奇病であるといふ。「仍て身體を點檢するに右の掌底に握れるものあり、開き見るに果して物あり、金色燦爛たり其形、背に翼あるは鳥類の如く、足ありて走れるは這蟲に似たり、煮燒して食ふべきものとも見えねど只何となくウマゲに見ゆ、殊に不思議の引力を有せり、見る者皆引寄らるゝ心地す、實に稀有の怪蟲なり、(中略)博識の說に曰く此は是黃金蟲の一種なれど、往々恐ろしき毒を含む」云々。

　此の姓名不詳なる奇病者の正體は何者ぞ。蓋し政治上の新興日本をさすのである。被服は攘夷武士の俄開化の暗示であり、所持品中洋書の切ほぐし云々はその政治思想が西洋直輸入たるを諷し、偉人忠臣の畫像や寫眞はその思想の傳統が維新の尊攘主義とその俄開化と海外の英雄偉人崇拜とを合して新興日本の政治理想の本質となつてゐることを

說明したもの、仕込杖は腕力主義、手提は國粹思想であらう。その「此男諸毒に感じ易く、且眼性にて」云々の一段、政治的日本の浮薄輕佻、新物好きを諷し得て痛快なものがある。黃金蟲の奇病とは、いふまでもなく藩閥政治家が黃白によつて民間政治家を買收せんとし、民間に又多年の清節をすてゝ買收されんとする政治家のあることを示したものであらう。光輝ある憲法發布の歲の一面に、かゝる病弊が流行してゐたことは、注目すべきところである。筆者逍遙は、末段に言を重ねてこの黃金蟲の恐るべきを注意し、

別項しるしたる如き毒蟲追々こゝかしこに飛揚するといふ、公道をたどる者宜しく警戒すべし、聞く所によれば件の毒蟲は握らされば害なく、目を眩せざれば害なしとなり、されば公道に立出る者はまづあらかじめ握る所あるべし、又あらかじめ注目する所あるべし云々

と述べてゐる。

『中央都府』、これは案だけで具現されたものではない、この案の由來については、（第三）文學活動の條、明治二十二年のところを讀返して頂きたい。たゞ案そのものを揭げて置く。その全部が政治に關係をもつてゐるわけではない、一部に政治家が出場し、自らその內幕が暴露されるのである。

第一號○或る實着なる地方人の履歷　地方の私立學校を卒業したる程の知識、性質は忠實溫良、年齡二十五六

○友人の國元にある者一人（慷慨家）

○（此の人）紹介書を持參して或る有名なる學者を訪ふ　學者の履歷爲人（type of scholarly gentleman）

第二號○學者の紹介にて書肆の家に入込む事　書肆の內幕　主人の爲人（善良）、書肆の主人の需に應じて學者案を立て終に此の雜誌を發刊す云々　學者と朋友と面會して雜誌の計畫をなす小說家　講師、新聞記者、政治家

第三號〇小說家の提案にしたがひ左の小說を揭ぐ云々　と斷りて三回つゞきの短篇を揭げ、更に講師の案にしたがへると斷りて、祝詞論文の面白きもの奇拔なるものを揭げ共號を終る

第四號〇種を求めんとて始めて小說家の家を訪づる時の模樣　小說家の家內の樣子　不圖オチャッピーの娘と或好男子とのさゝやき話を聞く　小說家との問答　講師の家を訪ふ　不逢　卽ち學校へ向ふ　不在　蓋講師屢々かけもち也　更に場末の私立英學校へ向ふ

第五號〇私立英學校の外部內部　講師との問答　或 club へ行く約束

第六號〇國元より手紙（地方の模樣）新聞紙に關する批評　夕刻 club 行　club の模樣　講演のいろ〳〵　圖らず政治家に逢ふ　政治家の交際ぶり　遠謀　藝者買ひの御馳走　少し腹を痛めて歸る

第七號〇胃病　醫學士を訪ふ　醫院の模樣

以上の案を見ると、自然逍遙自身の經驗見聞が中心となつて行く筈であつたらしい、だが此の案自身は遂に具現されなかつた。然し翌廿三年に及んでやゝ形を變へてその幾部分が具現されるに至つた。『壹圓紙幣の履歷ばなし』がこれである。

一〇　著　作（八）

『壹圓紙幣の履歷ばなし』

『修羅のちまた　小呉魏蜀誌』

『壹圓紙幣』は名の如く壹圓紙幣の履歷ばなしに托して社會諸階級の內幕を解剖しようとしたものであり、別に政治

小說めくものでも、特に政治を主としたものでもない。たゞその第五、六、七回に、次第に差し迫つて來た議員選擧の空氣が窺はれ、選擧政略の魂膽、御馳走主義などが看取される。一種の暴露的興味がありはするが、たゞそれだけのことで、別にそれ以上政治的に根深い趣向があるのではない。改めて論ずるまでもない。此の作全體としては多少いふべき事柄もあるが、政治小說といふ立場からいへば、今略述したところで足りる。廿三年二月讀賣新聞に揭げたもの、幾多の腹案を殘して僅かに二十回で終つてゐる。代議士を狙ふ大身林田某の黑幕參謀たる何々省の何官柿橋遂四郞法學士（某校の敎師を兼ね）の演說の一節を引いて置く。

予は海の如き愛を有す故に故國なればとて偏愛せず否我は宇宙を愛すといふは所謂壯士の申すこと蓋し風土記(トポグラヒー)と愛(パト)國心(リヲチズム)とは離れぬ關係のあるもの予は風土にかゝはらぬといふ者あらば見られたし云々（中略）。扨近頃藩閥打破主義の盛んなるにつれて地方主義をも駁するものあれどさるは一理にして純理にあらず云々（中略）。巧に一轉し地方一致主義の必要を辨じ地方の幸福に熱衷する者は該地(そのち)に螺旋根(タプルート)をもてるものに限る愛國心といふのは蓋し愛鄕心の國體に外ならず云々

かゝる說は逍遙の空想に止まらず、當時の選擧政略として實際行はれたものであらう。

『修羅のちまた 小吳魏蜀誌』、これは明治廿三年六月一日から二十四日まで讀賣新聞に揭載されしもの、私の知る限りで逍遙の政治小說の最後の作である。一口にいへば當面の大問題たる衆議院議員選擧に關する競爭上の「奇譚」を小說體に綴つたものであるが、勿論この作そのまゝの出來事が何處其處にあつたといふことはいへぬとしても、何れは種子(たね)のある物語であらう。

此の作はプロット進行の具合が甚だ芝居がゝりに出來てゐるので、梗概の物語もその順序によることにする。

第一回は上野三橋際の或る待合茶屋の奥の間、こゝで某縣降幡郡縣會議員で蠶業會社長を兼ねた大歳致平なるものが、網懸(あがけ)友高の妾おりつと密謀する。二人はその昔譯ある仲で、故あつて多年別れ別れになつてゐたのが博覽會見物に來て再會し、舊情を繼いだもの。大歳はおりつに賴み、友高の娘を篠崎村の角組某と緣組させぬやう、友高を焚きつけて邪魔してくれといふ。この事が大歳の議員選擧に絕對的必要なのである。こゝへ尾頭千助たるものも加はつて更に相談し合ふ。

第二回、問題の選擧區、栗橋町の合同懇親會の前後、選擧區四郡の形勢は三黨鼎立で丁度吳魏蜀の三國のやうである。西田尻は輸入候補法學士猿投某、岩淵町(相澤郡)は土地の兒島某、降幡郡は大歳が立候補してゐるが何れも小番郡の向背で勝負が定まる。小番に有力者二人、角組亞四郎、俵子某といふ。角組は猿投を助け、俵子は兒島派に傾く。いよいよ栗橋町太善寺の聯合政談演說會兼忠國黨員大懇親會となる。角組方は博徒を語らひ、大歳派は壯士書生を賴み、互ひに牽制しあふ。角組は代議士選擧は一自治體の問題でないから宜しく國家第一主義を採り、全國的に信用ある人を選むべしとて、暗に他の二派を排斥する。

第三回、兒島方振はず、本人が辭退せんといふを、後援者が承知せず、買收で對抗する。その買收が下手だつたので、角組派に尻尾をつかまれ、激昂せる角組派と俵子派が共に壯士を集めて血鬪せんとする。俵子の妻おくめの機轉で僅かにそれが避けられる。

第四回は小番郡篠崎村の角組亞四郎宅、角組は病臥してゐる、彼は網懸友高の甥であり、友高は猿投法學士の後援者である。亞四郎は小番を西田尻方に切靡かせるに大功があつたのに叔父が却つて彼の手段の疎暴と血氣とを咎めたので、不平を抱いてゐる。そこへ大歳方の尾頭千助が來て、猿投をほめ、角組の嫉妬心を焚きつける。又兼て打合せたやうに、友高の妾おりつも見舞に來、暗に猿投と友高の娘おさよと譯ありげに話す。おさよは角組の愛人で角組が未

來の妻と思ひ込んでゐる少女である。角組は、これを聞いて大に叔父一家を憤る。

第五回西田尻郡高岡村網懸友高の宅、おりつはおさよを捉へて猿投の人物をほめ、猿投の方に心を向けるやうに煽てる。おさよは否といはぬ。此の時亞四郎は小門の外で二人の會話を漏れ聞いて、くわつと逆上し、いきなり飛び出して、おさよの心變りを責め、婦人の道を說きつける。おさよは呆然としてゐる。元來おさよは別に亞四郎を夫とも何とも思つてゐたのではない。友高が出て來て亞四郎を嗜なめる。亞四郎は血迷つて友高に打ちかゝる。友高怒つて、亞四郎の素生から母の不義と自害、自分に恩のあることをいろいろ語る。おりつはわざと仲裁に入り、亞四郎を連れ出す。だが此の時うつかり大歲と打合せの密書を友高に拾はれる。友高はこれを讀んで大歲等の魂膽を悟つてしまふ。一方千助の宅では大歲が、手先の細工の拙いことと、友高が自由にならぬことに不平をいつてゐる。

第六回、岩淵は西田尻派と合して猿投を助けることになり、友高の宅で祝賀の會がある。この會場へ狂亂せる亞がのり込み、友高を斬る。友高手負ひとなり、おりつ等の惡計を語り、亞四郎におさよを嫁せしめる本心を明す。かくなる上は是非なし、立派な議士を選んで國の爲めに盡しくれよと遺言す。亞四郎はこの騷ぎに正氣に歸り、自首せんといふ。だが醫師の診察によつて友高の傷は致命のものでないことが分かり、萬事目出度し目出度しとなつて終る。

政治小說として見るときは、此の作は甚だ消極的なもので、作者の政治的イデオロギイの如きは明確に知り難い。然し大體として、彼の第二回の大善寺懇親會に於ける角組亞四郎の演說に、作者の思想が反映してゐると見て可からう。即ち、地方感情に制せられず、全國的信用ある人を第一とし、無學者名譽餓鬼は選擧せぬやうにせよ、凡て國家第一主義をとるべしといふのであるが、此の主義が結局勝つて、亞四郎方の猿投學士の勝利となるといふのは、正に作者の理想と見て可い。選擧のための御馳走政略を嘲けるところは『壹圓紙幣』の中にもあつたが、こゝでは又、買收を排し、暴力、脅迫、鬪爭を不可とし、專ら言論を重んじ正道に依ることを暗に主張してゐる。『壹圓紙幣』にも

此の作にも、新興ブルジョアが黄金の力で政治にのさばり出ようとかゝつてゐるのが描かれてゐる點は、注意すべき所で、時の勢ひである。作者は自ら實際に對して諷するところがあつたものに違ひない。

　これを小説のテクニクの上からいへば決して勝れた作とはいへない。總體の構造は芝居掛りで、趣向に古い草双紙や院本の焼直しめくところがあり（大歳が妾と腹せて大望を遂ようとかゝるところ、戀に眼のくれた若者が奸婦に煽てられて叔父を斬るところなど）、人物も朦朧とした類型的人物であり、事件も合成的に捏ち上げた寄細工の痕が見える。場面として多少とも面白いのは、大歳派の壯士が形勢を論じて敵派を牽制する相談するところ、及び忠國黨合同懇親會の場などである。大體輕妙な味ひの戯作めくものではあるが、間に合せの作で、決して眞面目な結構に成るものではない。第二回（上）の一節を引用しよう。

　此中奥には牛窪斋郎大醉の體にて「時に貴さまは如何いふ具合にけふの演説を破る積か最も我黨の勁敵とすべきは夫の法學士猿投昌英、其他は齒牙にかけるに足るまい。

「ウンニヤさう思ふは土地の事情を君が周到知らぬからだ、蓋し當地の選擧區は都合四郡から成立つて、其中に三黨鼎立し、恰も呉魏蜀の有様と一般、西田尻は猿投昌英、岩淵町（相澤郡）は兒島孫六、降幡郡は大歳を候補にして互角の競爭、若し一郡で五百有餘の選擧權ある小番郡がいよ〳〵西田尻の有となれば我々の懐算も無效となり勝利は忠國黨に歸してしまふが只幸ひは岩淵黨が西田尻黨と同志打して此方では土着主義で町長の兒島を出さうとすれば向ふでは輸入主義で例の猿投を出さうとする、小番郡は二つに裂れて角組は西田尻、俵子は岩淵黨、それゆゑけふの聯合會も實をいへば水と油、運動は一所でも内實は別だと總理（大歳）の説、只最も油斷のならぬ門閥家の角組亞四郎、先祖からの餘光があるので小番郡の三分以上はあいつのまゝになるとのこと今の所は猿投よりも角組の方が勁敵だわい

「フムして見れば小番郡は三國志でいふ荊州だな
「襄陽城は角組の生れた篠崎村
「とはいへタカが愚將の劉表― 私學校の二年生――何をあいつがし得るものかい
「しかし學力より門閥に勢力のある小番郡油斷をすると骨折孫堅、陣沒(うちじに)してはつまらぬはなしだ
「鐵壁をも碎く壯士の腕力――貴さまはきやつを怖れるか
「馬鹿いへ誰が怖れるものか――ヤ時間がたつたぞ我黨の輩(やから)が待つてるだらう、牛窪もう出かけやうぜ
牛窪は向ふを睨み「今に目に物見せてくれん」兩人代を拂ひ立あがり棄ぜりふありて上手へはいる。(下略)

二　結　收

以上春のや主人の政治小說を、私の力に及ぶ限り辿つてみた、事々しく結論といふ程ではないが、雜感めくものを纒めて見よう。

春のや主人の明治文學史上に於ける位地は兎も角も空前絕後のものであり、その文學革命の影響について今更らしく何事かを語るのは或る人々には一種の冒瀆に類する位である。だが今これを局限して政治小說に對する影響の點からいへば、勿論一般小說革命が將來された結果として、政治小說もその影響をうけた、元來逍遙が小說革命を將來した本源的勢力は何かといふと、それは彼が當時としては明治小說史上空前の作物を幾つも續けざまに公にしたからにもよるが、何よりも第一に同じく空前の小說理論を公にして、文學理想の方面、イデオロギイの方面、技術形式方面に於いて明治文學界に根本的革命的な感化を及ぼした點にあるのは明白である。卽ち作物の影響と理論の影響と相俟

つて至大な感化を及ぼすのではあつたが、然し何れかといへば、後世からは理論の影響の方が比較にならぬ程勝つてゐるといへやう。此の點、即ち春のや主人の小説論については次章にやゝ詳しく論ずるとして、今政治小説の歴史上からいへば、矢張大體として同じことがいへる。逍遥は政治小説の具體的作物によつても勿論相當の影響を與へた。例へば『未來の夢』の如き、それを見るに足りる。然し以後の政治小説家に對する最も重大な感化は何かといへば、小説のイデオロギイを革命的に一新して、その結果政治小説にもテクニク上形式上から根本的に影響を與へるに至つたのである。即ちやはり理論的影響の方が大なるものであつたのである。（政治小説の論の方も、次章の小説論の條下で述べることにしよう。）

凡て春のや主人の創作は明治二十年を境界として二期に分たれる。前期は創作的興味が甚だ旺盛であり、文を作るにも苦慮するところなく、小説雜文千篇立地に成つて尚ほ綽々として餘裕ある趣きを見せてゐる。これは、彼の文學活動中二十年以前の條を參看するとわかる如く、年々多忙な教職の傍ら數篇の著譯に筆を執つて、なほ門生友人の作物を校閲補删する餘裕があつたのでも知られる。此の旺盛な創作的興味は十九年に至つて最高に達し、最も膏が乘り出して來るが、二十年以後になると急衰して、殆んど小説創作に興味を失つた體になる。後期に入れば入る程此の傾向は強く、單に興味を失つたばかりでなく、小説執筆を自ら回避し、韜晦する風が著しく目立つ。時々の創作も、眞劍に努力することはせず、いつも遊戯的態度を殊更に示す。決して積極的には筆を執らずいつも消極的である。此の變化は政治小説の場合にもそのまゝ當てはまる。

此の變化は何ういふところから出てゐるか。それは何よりも逍遥が自ら語る如く「意氣沮喪して」[一]、小説創作に自信を失つた爲めであらう。意氣沮喪は肉體精神兩方面から來てゐる。肉體の點でいへば、此の頃逍遥は積年の過勞から

度々疾病にかゝつた、就中胃腸と腦充血は殆んど持病となつた。これと同時に精神的には青年二葉亭の言動が逍遙の人生觀、創作態度を根底から打壞し、逍遙をして前の如き創作的態度を持續することを不可能ならしめた。元來二葉亭は逍遙に師事兄事したのであつたから、自ら逍遙から得るところも多かつたらうが、反對に逍遙に感化を及ぼしたところも斷じて少々ではなかつたのである。だがその邊の交渉を詳細に叙するのは、この篇の主意と違ふからそれはせぬが、今政治小說といふ點に局限していへば、二十年以後の逍遙の政治小說に變調を來したのは、如上の小說に自信を失つたこと以外、時の文壇の新環境が實際政治と無關係になり、爲めに元來の政治嫌ひが次第に政治と絕緣するに至つたこと、時代の政治運動とその歸結に幻滅を感じて、政治的事象に興味をもたなくなつたこと、等による。更に、これは小說のテクニクとしての根本問題であるが、政治小說はその發生上元來理想小說である、その描寫の手段に於いて寫實主義的手法を用ゐることは勿論矛盾でも何でもないが、この寫實主義を內容の全般にも適用して徹底的客觀的態度をとるに至れば、勢ひ作者の理想は閑却され、政治小說としては消極的無理想的虛無的なものとなり、遂には政治小說として特殊の存在理由を失つてしまふことになる。逍遙の場合には、その政治的幻滅によつて殊にその傾向が助長されたかの如く見える。政治小說と寫實主義の問題は更に次章に論述しようが、變調を來した主な原由は以上の如きものであらう。

　前述、後期の遊戲的態度とは別に、逍遙の創作には、『淸治湯』以來一種無意識本質的に戲謔的分子が含まれてゐる、これは　逍遙の敎養の根本に潛む舊文學、いはゆる戲作文學の自嘲的樂天觀から我知らずいつとはなく潤み出てゐるものである。それが十九年の『未來の夢』に至つてやゝ塗切れがちとなり、逍遙の作風中最も緊張したものを思はせるが、以上に述べた如き理由から忽ち挫折して故意に遊戲的態度をとるに至り、此の戲謔分子がこれに合流して、新に可成り勢ひを逞ましくし始める。だが政治小說の如き理想小說にとつては、かゝる態度が危くすると致命的

にその效果を減殺する惧れがある。これは逍遙の政治小説の短所といふべきであらう。

逍遙の政治小説は形式上からいへば、稗史風のものから現代政治諷刺風のものに移つて來た。これは、幾分時代の要求によるものであり、（二）又幾分は自家の小説論に即して作せざるを得なくなつたものであらう。何も稗史風のものを排してかうしたのではない。

私は、前段で、時代の政治運動とその歸結に幻滅を感じて云々いつたが、それは、十九年の『内地雜居未來の夢』に見えるブルジョア天下の豫言の積極的意氣と二十一年以後の政治小説に見る消極的態度を比較してみれば、略ぼ推察される。天下の萬事がブルジョア金力にて左右し得べく、又左右されるのを當然とするといふ意氣と、『外務大臣』はともあれ、『壹圓紙幣』、『小呉魏蜀誌』の如きに見えるブルジョア反抗冷嘲氣分との間には可成りな差異が見られる。ブルジョアの實權が露骨に政治に伸びて來たのを實際見て、大に幻滅を感じてゐるのである。これは、いよいよ憲法政治實現となると共にブルジョアが露骨にその權力を振つて、前日利用したインテリゲンチャを顧みなくなつた事實と、相通ずるところがありはせぬか。これは反對に、インテリゲンチャを後援してこれを介して自家の理想を行はうとするブルジョアが、作中で正しく認められ勝利を與へられてゐる點を見ても見當がつく。

逍遙自身の政治小説は以上の如きものであり　それ自身完全なものといへぬは勿論、稚拙を基調とする明治政治小説界に於いてさへ悉く最も優秀な作物とのみはいへぬが、その理論が一般小説界に革新的影響を及ぼしたことから引いて、爾後の政治小説の形式を決定した點、小説らしい政治小説を公けにして見たといふ點で、春の屋主人坪内逍遙が政治小説史に殘した足跡は、可成り大きなものである。明治政治小説が小説として體を成したのは逍遙の出現以後である、形式テクニクの點で爾後の小説が、終に逍遙のつくつた理論的範疇を揚棄することが出來なかつた點を見ても、それが分明であらう。

註（一）日記（昭和三年一月太陽　神代種亮氏「逍遙先生の事ども」引用）

註（二）十八年五月二十一日、自由燈、坂崎　斌記事。

政治小說と『小說神髓』

一

一 『小說神髓』の主張

前章に述べた如く、政治小說に對する影響といふ見方に於て、坪內逍遙の小說理論を『小說神髓』によつて吟味しよう。第一に『小說神髓』の主張を正直に聞くことにする、それから此の主張が政治小說に何う影響して來るかを見よう。『小說神髓』の主張を聞くにしても、今こゝでは批評の語をあまり挿まずに、正直に素直に、たゞその主張そのものを受け入れて、逍遙の小說理論のエッセンスだけを知れば、足ることにする、これを批評し分析する仕事は、私の他の著作に讓ることゝし、こゝでは必要のない限り成る可くさうしないつもりである。諒察されたい。

小說とは何ぞ、

逍遙は自家の小說理想を主張すると同時に、一方、小說界の時弊を排擊した、つまり立と同時に破を用ひ、破と同時に立を主張したのである。さうして立、卽ち主張の根本は勿論動きはせぬが、破、卽ち時弊排擊の際には、時と場合に應じて種々な點から小說の概念を闡明しようと試みた。從つて小說に對する逍遙の眞實の考へを知らうとするには、かく種々の語で種々の場合に述られた小說の說明を綜合して、これを整理し、然る後殘つた成果を、逍遙の小說觀の根本と見なくてはならぬ。

そこで、一應『神髓』の順序なりに、小說の說明を列擧して見よう。その前に、『神髓』の原型ともふいべき『開卷悲憤

慨世士傳一（明治十八年）の「はしがき」に定義めくものが出てゐるから、それを第一に擧げることにする（重出だが）。

夫小説は美術にして詩歌の變態に外ならざる也。されば小説の主髓とすべきは只彼の人情世態のみ。人情とは情欲也。情欲は卽ち七情にして喜怒哀懼愛惡欲是なり。七情の態を見るが如くに描き出して、精密周到、毫末も洩らすことなく、よく人情を穿ち盡して、假設虛空の人物をば假作界裡に活動せしめて、眞物のごとくに見えしむるを眞の小説家の技倆といふなり。よし人情をば寫せばとて其皮相のみを寫したる者はいまだ之を眞の小説とはいふ可らず。

此の「はしがき」の書かれた時は、もう立派に『神髓』が脱稿してゐたのであるから（『神髓』跋文）、この定義めく一節が『神髓』の結論らしく見えるのは、當然のことであり、恐らく『神髓』から結論したものに違ひない。

さて以下の分は『小説神髓』の順序によつて行くつもりである。テキストとしては、著者最後の校訂本ともいふべき『逍遙選集』本によることにする（別册第三）。此の版は、重要な訂正は施されてゐないが、多少の補入もあり、行文の訂正もある、從來、何人もこの異同に注意しないらしいが、今後の研究家は、この本文を以て定本とすべきであらう。

（第一）　美術は人の心目を悦ばしめ且つ其氣格を高尙にする者なり（一四頁）

（第二）　夫れ小説は無韻の詩ともいふべく、字數に定限なき歌ともいふべし。（中略）詩の骨髓は神髓なり、幽趣佳境を寫し得なば詩の本分は卽ち盡せり。（中略）されば小說、稗史にして若し神韻に富むよしあらむ歟、之れを詩といひ歌と稱へて美術の壇上に立たしむるも敢て不可なきのみにはあらで、むしろ當然といふべきなり。（一六—一七頁）

（第三）　小説の旨とする所は專ら人情世態にあり。一大奇想の絲を繰りて巧みに人間の情を織做し、限りなく窮り

なき隱妙不可思議なる原因よりして更にまた限りなき種々様々なる結果をしもいと美しく編いだしつゝ、此人の世の因果の秘密を見るが如くに描き出し、見えがたきものを見えしむるを其本分とはたすものなりかし(一七頁)

(第四) 小説は假作物語の一種にして、所謂奇異譚の變態なり、奇異譚とは何ぞや。英國にてローマンスと名づくるものなり、ローマンスは趣向を荒唐無稽の事物に取りて、奇怪百出もて篇をなし、尋常世界に見はれたる道理に矛盾するを敢て顧みざるものにぞある。小説すなはちノベルに至りては之れと異なり。世の人情と風俗をば寫すを以て主腦となし、平生世間にあるべきやうなる事柄をもて材料として而して趣向を設くるものなり(二一頁)

(第五) 小説の主腦は人情なり、世態風俗これに次ぐ、人情とはいかなるものをいふや。曰く人情とは人間の情欲にて、所謂百八煩惱是れなり。(中略)此人情の奥を穿ちて、賢人、君子はさらなり、老若男女、善惡正邪の心の中の内幕をば洩す所なく描きいだして周密精到、人情を灼然として見えしむるを我が小説家の務めとはするなり。よしや人情を寫せばとて、其皮相のみを寫したるものは、未だ之れを眞の小説とはいふべからず。其骨髓を穿つに及び、はじめて小説の小説たるを見るなり(四三頁)

(第六) 小説は常に摸擬を以て其全體の根據となし、人情を摸擬し世態を摸擬し、ひたすら摸擬する所のものをば眞に逼らしめむと力むるものたり(四八頁)

(第七) 小説は、見えがたきを見えしめ、曖昧なるものを明瞭にし、限りなき人間の情欲を限りある小冊子のうちに網羅し、之れをもてあそべる讀者をして自然に反省せしむるものなり(五一頁)

(第八) 小説は美術なり、實用に供ふべきものにあらねば、其實益をあげつらはむことなか〳〵に曲(ひが)ごとなるべし(五八頁)

(第九) 小説の目的は娯樂を人に與ふるにあり。(中略)人の文心を娯ましむるにあり。文心とは何をかいふ。曰く美

妙の情緒これなり（五九頁）

（第十）小説は即ち人生の評判記（クリチシズム）にて、甲の失敗なしたる所以、乙の成功なしたる所以、或ひは權力を得て道義心の腐敗する趣き、或ひは情に牽かれて道理を誤る次第、歴々篇中に叙しいだし、もつて讀者の評判に供ふ（五九―六〇頁）

（第十一）それ小説は人間の肉慾に供する物にあらで、其風流の嗜好に投じて娯樂を與へむと望むものなり（六一頁）

（第十二）小説は情を主として其脚色をもうくるものゆゑ、男をなごの情話の如きはもつとも必須の材料なりかし（六五頁）

（第十三）小説はもと世態をば寫しいだせるものにしあれば、讀者にして活眼ありなば、書中に叙したる所によりて反省すべきが當然なり（六五頁）

（第十四）それ小説は尋常なる傳記、實錄のたぐひに異なり、人物といひ事蹟といひ、悉皆作者の想像もて假作（つく）りいだせる虛空のものにて云々（七七頁）。

（第十五）小説といふものは、時世々々の人情世態を寫すを骨髓となせばなりけり（八三頁）

（第十六）それ小説は情態をうつすをもて其骨髓となすものなり（八九頁）

（第十七）小説は人情及び風俗を活るが如くに叙しいだして、讀む者をして感ぜしむるを其目的とはなすものなり（一一二頁）

（第十八）およそ小説は作者が架空の想像に成るものなり（中略）（故にあらかじめ法度を設けて其脚色を構ふること勿論肝要なる事なりかし）（一一五頁）

（第十九）小說家もまた之れにひとしく、其本分は情態をば見るが如くに寫しいだして、讀者を感動するに外たらねど、そのものしたる小說、稗史に人の氣韻を倚うすべき彼の大效力なきに於ては、其小說は美術にあらねば、

共著作者も美術家たる稱號をしも得る由なからむ（一二二―一二三頁）。

以上で「小說とは何ぞ」といふ設問に對しての逍遙の答が盡きたのではない、擧げればまだまだ擧げ得るが、以上の中のものと異句同意のものがあり、他のテクニクに關連したものがあり、小說家といふ點からの說明があり、必らずしも「小說とは何ぞ」といふ設問に應じ得るものとのみ考へられぬから、先づ以上で他を代表するとし、以上十九例に含まれてゐるイデオロギイを分析整理して統一を試みてみたい。

第一、第八は、一括出來るもので、要は小說が美術の一 genre なること、從つて美術を制約してゐる第一の定義に間接に制約されてゐること、「人の心目を娛ましめ、氣格を高尙にす」といふのが本分の輪廓となつてゐることを示してゐる。而して逍遙によると、此の二作用は分つて二となすべきではなく、後者は前者の自然的結果であるといふ、それで假に今、前者を娛樂の二字で表し、後者を感化の二字で表すと、娛樂と感化ではなくて娛樂による感化、それが美術の（卽ち同時に小說の）使命だといふことになる。

第二は此の仲間に入れてもいゝものであるが、たゞ神韻といふ新分子が見える、神韻とは「幽趣佳境を寫す」ことであると說明されてゐる。この神韻が、娛樂（從つて感化）の原動力であることが知られる。そこで第一、第二、第八を纏めると一應かういふことがいひ得やう。

（a）小說は一の美術にして、詩歌と同じく神韻によつて人の心目を娛ましめ其氣格を高尙にするものなり

頗る漠然たるものであるが、漠然なだけに反對も否定も出來難いところがあり、進んでもつと具體的な概念を捉へる前提としては、先づこれでも可い。第十二は第四に併合されて可いから、――

（b） 小說は世の人情と風俗を寫すを以て主腦となし、平生世間にある男女の情話の如きを材料として趣向を設くるもの

と第四の後半を改めても可い（第四の前半は後に使ひ途がある）又第九と第十一を合して――

（c） 小說の目的は人の文心を娛ましむるにあり、文心とは何ぞ、人の風流の嗜好、卽ち美妙の情緒これなり

とすることが出來る。又第十三と第十七を合して――

（d） 小說は人情世態を活寫して讀者を感ぜしめんとせるもの、活眼なる讀者は反省すべし

とすることも出來やう。更に第十四と第十八とを合して――

（e） 小說は人物といひ事蹟といひ、悉皆作者の架空の想像に成るものなり

とすることが出來る。又、第十五と第十六を合して――

（f） 小說は時世々々の人情世態を寫すをもつて骨髓とす

となし得る。更に第六と、第七、第十を合して――

（g） 小說は常に摸擬を以て其全體の根據となし、摸擬する所のものをば眞に迫らしめて、見えがたきを見えしめ、曖昧なるを明瞭にし、限りなき人間の情欲を限りある小冊子のうちに網羅して、人生の評判記（クリチシズム）たらしめ、讀者をして自然に反省せしむるものなり

とすることも出來やう。

さて以上のうち、（a）を除き、（b）以下に於て改めて整理綜合を行ふと、何うなるかといへば、――（b）と（c）と（d）（f）を合せると、次のやうになる。――

（A） 小說は時世々々の人情世態風俗を寫すを主腦となし、平生世間にある男女の情話の如きを材料として趣向を

設けて、讀者の風流の嗜好卽ち美妙の情緒を娯ましめ、且つ讀者に反省を與ふるものなり

そこで、(e)と(g)を合して次のやうなものをつくらう。——

(B) 小說は人物事蹟ともに作者架空の想像に成るものにして、全體の根據は摸擬にあり、その摸擬する所のものをば眞に迫らしめて、見えがたきを見えしめ、曖昧なるを明瞭にし、無限の情欲を有限の舞臺に活寫して人生の批判記たらしめ、讀者をして自然に反省せしむるものなり

さて、前に返つて、(第五)を考へてみよう。これは可成り長文句であるが、その複雜らしいのは、「人情」の說明が入つてゐるからで、この說を除いて要領だけにすると、——

(C)小說の主腦は人情なり、此の人情の奧を穿ちて洩す所なく描き出して、これを灼然と見えしむるを眞の小說なりとす

といふ簡短なものになつてしまふ。ところで主腦が「人情」にある以上、人情の固定化したものといへる世態風俗は第二に落して可いと思ふから、(A)と(C)と合せてかういふものにして見る。

(甲) 小說の主腦は時世々々の人情の活寫にあり、世間普通の男女情話の如きを材料として人情の奧を穿ち、これを洩す所なく描き出し灼然たらしめ、以て讀者の美妙の情緒を娯ましむると共に反省の心を起さしむるものなり。

さてそこでいよいよ(第三)と(B)との調和綜合にかゝつて見よう。これは、大體次のやうに直すと、二つの主意が盛り込まれると思ふ。

(乙) 小說の旨とする所は專ら人情世態にあり、摸擬を全體の根據とし、想像によつて架空の人物事蹟を排設し、一大奇想の緣を繰りて巧みに人間の情を織做し、限りなく窮りなき隱妙不可思議なる原因より更にまた限りなき種々樣々なる結果をしも美しく編いだしつゝ、摸擬を眞に迫らしめ、此人の世の因果の秘密を見るが如くに描き

出し、見えがたきを見えしめ、曖昧なるを明瞭にし、無限の情欲を有限の舞臺に活寫して人生の批判記たらしめ、讀者をして自然に反省せしむるものなり。

さて(甲)、(乙)を比較して考へるに、(乙)の「限りなく窮りなく」の一節は、(甲)の「人情の奥を穿ち」云々の一節を詳細に說明したものと解して可いと思ふから、(甲)と(乙)を綜合し、且つ今殘して來た(第十九)及び(a)をも加味して、その結論を纒めて見るとかういふ意味にならうと思ふ。

小說の主腦は專ら時世々々の人情世態にあり。小說は摸擬を全體の根據とし、想像によつて架空の人物事蹟を排設し、一大奇想の絲を繰りて巧みに人間の情を織り做し、(世間普通の男女情話の如きを材料として、)限りなく窮りなき隱妙不可思議なる原因よりして限りなき種々樣々なる結果をしもいと美しく編みいだしつゝ、摸擬を眞に迫らしめ、此人の世の因果の秘密を見るが如くに描き出して灼然たらしめ、無限の情欲を有限の舞臺に網羅して以て讀者の美妙的情緒を娛ましめ、同時に人生の批判記として自然の反省を誘起し、氣格を高尚ならしむるところあるものなり。

『小說神髓』によつて逍遙の意を汲んで「小說とは何ぞ」といふ設問に答へようとせば、先づはかういはなくてはならぬ、『神髓』による小說の總論的說明としては、先づかういふところであらう、尙ほこれに加へるに、前記(第四)の前半も、ロマンスと小說の區別を說いたところをもつてせば更に完全なものになるであらう。別に補足的說明として、小說は所謂兒女童幼の玩弄でなく、「大人學士具眼の士」を相手としたものにならなくてはならぬと逍遙が說いてゐるが、この二事は、逍遙の小說理想が如何に當時の「小說」といふ觀念と異なるかといふことを、更に明白ならしめるに役立つものである。

そこで最後に吾等の得た結論を、或る意味で逍遙自身の綜合的結論といふべき『慨世士傳』の「はしがき」と對照

して見よう。さうすると諸君自身見て明白である如く、多少字句の表現乃至その排列の順序に異同はあるが、盛られた觀念に於て根本的な相違はなく、「はしがき」の方の定義は、そのまゝ吾等が抽出した結論に併合され得る。今試みに二つを合して重複を除くと、次の如きものが得られるであらう。

夫小說は美術にして詩歌の美態に外ならざる也。小說の主髓とすべきは時世々々の人情世態にあり。摸擬を全體の根據とし、想像によつて架空の人物事蹟を排設し、一大奇想の絲を繰りて巧みに人情を織り做し、限りなく窮りなき隱妙不可思議なる原因よりして限りなき種々樣々なる結果をしもいと美しく編みいだしつゝ、七情の態を見るが如くに描き出して此の人の世の因果の秘密を灼然たらしめ、假設虛空の人物をば假作界裡に活動せしめて眞の物の如く見えしめ、以て讀者の美的情緒を娛ましむると共に、人生の批判記として自然なる反省を誘起し、氣格を高尚ならしむ云々。

こゝに至つて始めて「小說とは何ぞ」といふ設問の答へとして間然する所なきを感ずる。これで逍遙の「小說」理想が、先づは統一的に綜合的に把握されたといつても可いであらう。

逍遙の「小說」理想の革新的意義。

以上の定義で示された逍遙の「小說」理想が、當時の小說界に對して如何なる革新的意義をもつか、如何なる點で革新的であるか（革新的であることは、今こゝで事々しく論證しなくても可からう）。これが吾等の取上げる第二の設問である。

これに對して、小說の發展を歷史的に檢討して、ロマンス（奇異譚）とノヴエル（小說）の區別を立てたこと、小說の骨髓として寫實主義が主張されたことの二條が擧げられるのが普通である、吾等も勿論それに異論がない、それ

どころか吾等の結論もそれに同じものとなると思ふが、たゞ吾等は少し道を變へて、上に擧げた逍遙の小說理想の分析によつてその何處に革新的意義があるかを認めたい。

さて彼の小說理想を取り上げて考察して見よう。

小說の主髓は人情（世態）の活寫にある、然し人情は事に觸れ物に遭つて人の心に現れるものであり、人と物と事とを離れて別に、人情といふものが獨立に存在してゐるのではない。そこで人情の活寫には、「人物事蹟」を必要とする。卽ち人情を描くためには、人物と事件（蹟）が排設されなければならぬ。然るに逍遙の說くところによれば、此等の人物と事件は摸擬であり、假設虛空、想像に成るものといふ。こゝに何よりも先づ虛といふ觀念が生ずる。且つ此等の人物事件は名々勝手にバラバラの行動をする時は、人情も世態も描寫が不可能になる。だから「一大奇想」が繰り出されて、これ等の行動起息を制約しなければならぬ、因果關係で連なつてゐなければならぬ。此の奇想の想も勿論虛である。今此の二つの虛の觀念を總稱して、想としよう。そこで、小說の第一先決條件は、想でなくてはならぬ、となる。而して想卽ち虛であり、虛卽ち假作世界といふ觀念は、當時の小說觀念の根本であるから、この點で逍遙の小說理想と當時の小說觀念とは相通ずるものがあるわけである。

これは、逍遙の小說理想をもつて當時の小說觀と根本的に對立するものと考へて來た人々には不思議に思はれるかも知れない。然し新が舊に對し、反動が動に對するのは、その舊、その動を基礎として事が起る意味で、これと全然離れた別なものが生ずる意ではない。逍遙の小說理想が當時の小說觀念に對立するといふのは、何も當時の小說觀念なるものと全然絕緣して特別なものを主張したといふ意味ではない、改良とか革新とかいふのも、進步といふことの別名であり、進步とは連續を生命としてゐる以上、舊と全然絕緣した新といふものがあり得る譯がないのである。事實又、逍遙の小說理想の生長過程を考へてみよ、逍遙が大學入校以前、大なる稗史小說通であり、馬琴の熱愛者であ

り、これに大學時代に學び得た西洋文學の知識を調和してかゝる小説理想を生じたことが事實である以上、逍遙の小説理想に當時の一般小説觀念と相通ずるところがあつたとて、元々怪むに足りぬ、當然のことでなければならぬ。

想の次に來るのは、想を表現するもの、摸寫又は描寫である、而して描寫はあくまで實（迫眞）を貴ぶといふことは、逍遙が數々反覆して述べてゐる、これが卽ち寫實精神である、想の表現は寫實的でなければならぬ。想の表現が何故に寫實的でなければならぬか、これを考へると、逍遙の小説理想が、時の小説觀の弊を矯めるため、應病與藥的立場から立てられたものなることが明白に分かる。吾等は『小説神髓』の緒言に於て既に逍遙の態度を聞かされる、曰く――

（前略）しかるに革新の變あるに際して、戲作者暫く跡を斷ちて小説したがつて衰へしが、けふ此頃に至るに及びて、また〳〵大いに復興して、物語のいづへき時とやなりけむ、こゝかしこにてさま〳〵なる稗史、物語を出版して新奇を競ふことゝはなりにけり。甚だしきに至りては新聞、雜誌のたぐひにすら、いと陳腐しき小説をば飜案しつゝ載るもあり、勢ひ斯くのごとくなれば今我が國に行はるゝ小説、稗史は其類、其數幾千萬とも限りをしらず、汗牛充棟なんどと言はむはなか〳〵におろかなるばかりになむ。想ふに我が國にて小説の行はるゝ此明治の聖代を以て古今未曾有といふべきなり。（中略）。されば戲作者といはるゝ輩も極めて小少ならざれども、おほかたは皆飜案家にして、作者を以て見るべきものはいまだ一人もあらざるなり。故に近來刊行せる小説、稗史はこれもかれも、馬琴、種彥の糟粕ならずば一九、春水の贋物多かり、蓋しこのあひだの戲作者流はひたすら李笠の語を師として意を勸懲に發するをば、小説、稗史の主腦とこゝろえ、道德といふ模型を造つて力めて脚色を其間にて工夫なさまく欲するからに、强ち古への糟粕をば嘗めむとするにはあらざめれど、もと其範圍廣からねば、覺えず同轍同趣向の稗史をものするものなるべし。是れ豈に遺憾ならざらむや。さはあれ斯やうになりもて來るも其罪偏へに拙劣

なる作者の上にありといはむ歟。否、活眼なき四方の讀者またあづかりて力あるなり。

これ程の小說全盛時代に、何うしてさういふ弊を生むことになつたか、――

古來我が國のならはしとして、小說をもて教育の一方便のやうに思ひて、しきりに奬誡勸善をば其主眼なりと唱へながら、なほ實際の場合に於てはひたすら殺伐慘酷なる、若しくは頗る猥褻たる物語をのみめでよろこび、他のかたくるしき筋の事は目を住めてだに見る人稀れなり。併して作者の見識なき、總じて輿論の奴隷にして流行の犬ならざるなければ、競うて時好に媚なとして彼の殘忍なる稗史をあみ彼の陋猥なる情史を綴り、世の流行にしたがふものから、勸善といふおもむきの名義もさすがに拋棄(なげすて)がたさに、しひて勸善の主旨を加へて人情をまげ、世態をたわめて、無理なる脚色をなすことたりけり。此に於てか拙劣たる趣向はます／＼拙くして、大人、學者の眼を以てほと／＼讀むに堪へがたかり。是れ併しながら、作者もたゞいたづらに稗史を弄して、眞の稗史の主眼をさとらず、彼の謬妄なる舊慣をむなしく墨守なすに因れるのみ云々。

以上によつて吾等は、當時の小說觀の弊のあるところを十分識認出來やう。即ち、小說を勸善懲惡の具と見なし、道德的效果を擧げるのを小說の第一の目的としながら、讀者（婦女童幼）の嗜好に媚びて小說の面白からんことを欲して、却て自繩自縛の態に陷入つて行詰つてゐる、これが小說不振の原因である。小說を振興するには、先づ小說をこの不自然な自繩自縛から解放して、自由な天地に來さなくてはならぬ。道德教訓を主眼とせば、小說の材料たる人情世態を歪曲して、その主眼にあふやうに描寫する。一切の無理不自然がこゝから出るのである。それで小說の振興には、人情世態を救ふ際の歪曲せる態度を去り、主眼の道德意識も人爲的に故意に押出さずに、人事の自然な描寫から自然に感得されるやうにしなくてはならぬ、寫實第一である。こゝに應病與藥的手段としての、寫實精神が生れて來る。讀者の範圍とか道德的教訓とかに頓着なく、作家は人情世態を活寫してその骨髓を穿ち、その眞諦を描け、そこ

に小說進步の道が開かれやう。小說が虛即ち想から發するのは事實であるが、虛を寫すに虛を假りるのは狹い主觀の世界に跼蹐することであり、當時の小說はその弊の極端なるものを受けてゐた。この弊を矯めるのに、逍遙は、虛を寫すに實を假り、客觀世界の實を寫すことによつて虛を彷彿させたければならぬとしたのである。

然らば、想の表現を如何にして寫實的にするか、寫實精神の發揮は、いよいよ小說技術（テクニク）の問題となる、これは多少複雜な記敍論述を要するから、吾等は次に、今一つ別の問題を片づけてから、詳しく扱ふことにしよう。

小說が小說となるのは、描寫即ち表現によるのであるから、逍遙がこれを重視し、『小說神髓』の中で「小說の主眼は人情の骨髓を穿つにあり」といふ意味の語を反覆してゐるのは、當然である。此の點からして、勿論小說即描寫といふ印象が讀者に與へられることも有り得やう。そこで、逍遙が、小說から目的意識を切り離した、道德意識を排斥した、徹底寫實主義をとつたなどゝいふことが、大抵の『小說神髓』研究に必ず見える結論の一となつてゐる。これは勿論上記の用語たり論旨なりを極端に解せず、舊小說觀の弊に對するものと見て置けば、勿論誤りではない、その通りである。然しこれを極端に解すれば、そこに飛んでもない誤解が生じてしまふ。成る程逍遙は、以前の小說觀の敎訓第一、道德第一に對し、描寫第一を主張した、これは一應の意味で敎訓意識、道德意識を排斥したことになる、然しながら逍遙が徹底的に絕對的に自分の小說觀から道德意識目的意識を排斥し絕緣しようとしたか何うか。或はこれに對して然りと答へる人々もあらう。然し私は否なと答へるに躊躇しない。逍遙は目的意識、勸懲意識を排斥した、然しそれはこれを小說の第一要素とすることを排斥したので、絕對的にかういふものと絕緣したのではない。描寫、寫實といふことゝ從來第一とされた勸懲意識とを入れ代へて、後者の代りに、描寫を第一に置いたのである。描寫と入れ代つた勸懲意識、目的意識、道德意識は、いはゞ効果といふ分子となつて逍遙の小說理想に殘つてゐる。

逍遙の小説理想の中で、娯樂、人生の批判、氣格高尙、此の三つの語で表はされてゐる部分がそれである。殊に、娯樂についていへば、逍遙自身、「小説の目的は人の心を娯ましむるにあり」と、立派に目的といひ切つてさへゐる。又氣格高尙については、これを目的といふのは不可也と逍遙はいつてゐるから、目的といはないとしても、これを伴はぬものは、眞の小説でないといひ切つてゐる（定義第十九參照）のであるから、これ又その小説理想に是非必要な分子であることが分かる。人生の批判についても、逍遙自身、文學者は人生の批判を第一の目的とすべきだと説いてゐる（五一頁）、然らば、小説に於いてとて、これが多少の目的とならぬわけがあらうか。何れにしても、小説には目的がある。決して、逍遙の小説理想に目的意識が絶無ではない、それどころか、これが小説たるために必要な要素となつてゐる。卽ち教訓意識、目的意識を伴なつてゐる點では、當時の舊小説觀と相通ずるものがあるといふべきである。たゞ注意すべきは、描寫に對する關係であるが、以前は教訓目的が描寫を決定し、支配した、然し逍遙はこれを逆にして、描寫によつて教訓、勸懲が決定されることにし、以前の小説の如く、作爲的に描寫に先在するものでなく描寫から生ずる自然的效果であるとしたのである。逍遙の語を突きつめて行けば、人心を娯ませることゝ、人生の批判及び氣格の高尙化とはたゞ直接間接の差があるのみで、實は同時に行はれるものであるといふ、從つて此の三つを合して效果とよんでも然るべきであらう。然かも此の效果は勿論善いものたるを要する。さうなると、小説の主腦は人情描寫にあつても、小説卽描寫といふ徹底寫實主義は成り立たぬ。何となれば、單に人情を描寫したのみでは眞の小説とはいへぬ、描寫が善い效果を擧げて始めて眞の小説といへるのだからである。

又小説から目的意識を去るといふことは、廣義にいつて意味をなさない、それは、文學に目的のないものはないからである。文學といふ文學は、少くとも宣傳、卽ち意趣の傳達といふ目的はもつてゐる筈である。從つて小説にも目的があつたとて當然のことでなければならぬ。但しさうすると、「文學獨立」といふ觀念と何う交渉するか。此の觀念

も逍遙の小說理想についてはよく語られるものであるが、目的意識排除といふ立場から說かれるものであれば、この「獨立」といふことも相對的な意に解するのを當然とする。卽ち時の小說が道德意識に支配されて、これを顯彰するのを第一目的としたのに對し、これを第一の座から引下ろして、そこに描寫を据ゑ、この描寫の效果の一部分にそれを收めてしまつた。さうして當時の小說の陷入つてゐた自縄自縛の不自然から獨立さした。さういふ意味での獨立なり解放なりでなければならぬ。而してさう會得した上で、これを「文學獨立」又は「文藝解放」とよぶならば、勿論何人とて贊成するのが當然である。

逍遙が『小說神髓』の跋文でいつてゐる如く、此の頃の逍遙の文學論小說論は絕對不動のものではない、又全部が全部空前絕後の獨創といふのでもない、例へば、小說の主腦が人情世態にあるといふことは、逍遙に先立つて、假名垣魯文その他の口から出てゐる言である。凡て逍遙は獨創よりも調和折衷を貴ぶ場合が多い、豫言的態度よりも啓蒙的態度である、天下後世に至つて始めて價値の分かる敎訓を垂れるよりも時代々々の弊を矯めて應病與藥するといふ方が彼の本志である。『小說神髓』を讀むにもさういふ注意がいるので、よく時代と周圍を調べてこれに連關させて觀察批判しなくてはならぬのである。時代を離して孤立させたのでは、如何に逍遙の說を justify し、これを賞讃し、これに千古不磨の格言的價値を與へたにせよ、それはたゞ逍遙を當惑させ閉口させるのみであらう、『小說神髓』の硏究者は、その本文の講究は勿論、その外來的資料、その時代との關連、日本文學の傳統、逍遙の思想成形の過程等を考慮に入れて、公正に判斷しなくてはならぬ。

以上述べて來たところにより、私は、逍遙の「小說理想」の革新的意義は、虛假卽小說といふ當時の文學觀念に對する寫實主張の精神が第一であり、その他の革新的な結論は皆これから出て來るのであると論じたい。さうしてこれは、前にいつた如く格別獨得な意見でも何でもないのである。

寫實精神の發揮。

逍遙の小說理想の革新的意義はその寫實精神にあるといふことが、以上で一通り明白になつたとして、その寫實精神を如何に發揮すべきか。吾等はこれを『小說神髓』の作法論卽ちテクニクの論に徵して、いさゝか詳しく具體的に吟味したい。その順序を脚色、性格、背景、文章の四つに分けることにしよう。

(脚色)。

脚色の何よりも必要なことは、逍遙が『神髓』の本文で述べてゐる、曰く——

およそ小說は作者が架空の想像に成るものなり。故に其趣向を設くるに當りて些も原則のなきに於ては一向寫眞を主眼として、孟浪思ひを構ふるまゝ、前後錯亂して脚色整はず、事序繽紛として情通ぜず、出來事あまりに繁に過ぎる爲に因果の關係の察し難き事もあるべく、人物あまりに數多くして爲に終結のつかぬこともあるべし。故にあらかじめ法度を設けて其脚色を構ふること勿論肝要なる事なりかし(全集版、一一五頁)

「一向寫眞を主眼として」云々の前後を再讀して頂きたい、たゞ寫實だけでは小說にならない、小說を小說たらしめるには、脚色がなくてはならぬ。尤も吾等は先に逍遙の小說理想を吟味した際に、「一大奇想を繰り出して」云々といふ語に出會つた筈であるが、これなども脚色の必須なことを語つてゐると見て可い。脚色の要は、描寫に美的排列を與へて讀者をして倦まざらしめにある、卽ち人情の骨髓を穿ち、讀者にその效果を多く與へて感動せしめる、それが脚色を設ける根本目的だと、逍遙は、いふのである。

脚色は人情の發揮を主とする、男女の情話の如き勿論好材料であるが(六五頁)、それに限らない、たゞ何れも平常世間にあるやうな事柄でなくてはならぬ。而して平常世間にあるやうな事柄であつて、猶ほ且つ「美妙の情緒」に

訴へるものでなくてはならぬのである。こゝに一種の淘汰作用がある。

　脚色は筋立、卽ちストーリと、運び、卽ち進行法則から成る。筋には三つの區別があり、喜劇的、悲劇的、悲喜劇的に分れるといふ。（一一八頁）。そのうちで純喜劇的、純悲劇的といふのは、餘り多くなく、最も多いのが、悲喜劇的なものである。喜劇的脚色の注意をいへば、此の種の脚色にありがちな鄙野猥褻を去らなくてはならぬ（一一九頁）、それは美術としての本分に背く、何となれば氣格高尙の條件に添はないからである。日本の舊小說中の此の種のものには、特に「下がゝつた」話が多いが、あれは滑稽の本旨を取違へたもので、およそ滑稽戲謔の祕訣は、「端嚴、倨傲、高尙なるものと、粗魯、賤劣、鄙々なるものとを巧みに交へて叙する」にある（一二〇頁）。然し現社會に材を求める以上、鄙野猥褻も全然除去することが出來ない。それでかゝる脚色を必要とする時は、成る可く淡白にし、眞の必要の程度に止め、後は想像に任せる、又成る可く上流社會に材を求める、それも可い。何より必要なのは、作家がかゝる脚色を叙するに於いて虛心な氣でなければならぬ、作者の興味で主觀的に誇張しないで、客觀的に淡寫して置くことである。西洋小說の例に見るやうに、無形の情を寫すに力を入れて、有形の態度を出さない、あの行き方が可い。（一二四―一二五頁）。鄙野猥褻も數々あるが、就中强姦と、男女閨中の描寫が最も不可である。第二に悲喜劇的脚色については、此の悲喜の分子の混合を程宜くしなくはならぬ。極端ではならぬ。これを極端にすると、悲喜各自の情の持味の新鮮さを失つてしまふ、これは讀者を倦ましむるの道である、此の「程宜く」といふことは、たゞ寫實一點張りでは出來ぬのである。こゝに作家の腕が見えて來る。さて又、悲喜混合の度が程宜く出來ても、悲喜の分子の出し具合が機械的に交代してゐるのみでは、單調不自然なものになる、だからそこを自然に變化あるやう、「變幻不可思議なる美妙の手段」を講じなくてはならぬ。第三の悲劇的脚色については、餘り極端な悲劇の分子のみ續けば讀者が倦むから、濃淡の手加減が必要である、殊に、結末は淡白に收めなくてはならぬ。（一二七―

（一二八頁）

以上によつて、逍遙が脚色に於いて寫實、自然、客觀的なことを重んじてゐはするが、同時にそれだけに終始してはゐないこと、主觀的理想小說風の手加減を認めてゐること、逍遙の寫實といふのが全的、徹底的なものでなく、美的、善的、選擇的な氣味があることが分かる。

さてその上筋を運ぶ上についての注意が、又いろいろある。元來舊來の小說にも法則はあるので、それを逍遙は馬琴の語を假りて說明してゐる（一一六—一一七頁）。その法則といふのは、一に主客、二に伏線、三に襯染、四に照應、五に反對、六に省筆、七に隱微、これである。此のうち、今直接脚色の問題に關係して來るのは、二、三、四、五の四項であらう、第一は性格の問題、第六は敍述文章の問題、第七は逍遙の小說理想からいへば、作法の法則外に出すべきもの、小說の自然の效果に待つべきもので、作者の主觀によつて法則的に設くべきものではない。さて脚色に關係する、二、三、四、五の四項の中で、「伏線は後にかならず出すべき趣向あるを數回前に些と墨打をして」置くこと、「襯染は下染にてこは後に大關目の妙趣向を出さんとて數回前より其事の起本來歷をしこみをく」こと、此の二項は脚色上是非必要なことはいふまでもない。脚色を運ぶ大原則は、脈絡通徹といふことである（と逍遙はいふ）、それは「編中の事物巨細となく互ひに脈絡を通じて、相隔離せざるをいふ」。首尾照應、前後關連、因果的に本支しつかりと結ばれてゐなくてはならぬ、つまり有機的に發展しなくてはならぬといふのである。ところで伏線も襯染も、畢竟はこの脈絡通徹の一部分であり、必要は大に必要なものであるが、各自獨立の法則となる程際立つたものではない。これを獨立の法則と見る舊作法には、いさゝか鬼面嚇人の不自然さが見える。又、照應と反對、「照應は對應ともいふ、例へば律詩に對句ある如く、彼れと此れと相照して趣向に對を取る」をいひ、「反對は照對と似て同じからず」とのみあつて馬琴も明白に說明してゐないが、照應はその趣向に出る物は同じでも相手の人が違ひ、從

つて演出する事件が違ふ、反對は出る人が同じでも環境が違ひ、從つて事件が違ふといふ、物と人と中心の置所の違ひから生ずる趣向上の區別が、此の二つにあるとなつてゐる。區別の有無は兎も角、二者ともに人爲的に奇を弄し巧を求めて趣向上に變化を來さうとする心持は同じものである、逍遙は此の二項を斷然排斥し、「なまなか斯かるくだ〳〵しき奇を求めまく企てなば、其本旨たる人情世態をあやまることのなからずやは」（一一七頁）といつてゐる。馬琴流の排撃である。要はかゝる技巧が、逍遙の眼目とする寫實的自然さを害するためと見て可い。

逍遙はかく馬琴流の脚色法則を訂正排撃した上に、當時の小說の脚色上の弊を抽象して、新小說創作上忌避すべき事項を九ケ條擧げ、懇々と作家の注意を促してゐる（事實は十一條あるが、そのうち五、六の二條は性格論に入るべきであるからこゝでは擧げない）。

（第一）は荒唐無稽を忌む、これは奇異譚、即ちロマンスには用ゐられて可いが、ノヴェル即ち小說には用ゐてたらぬ、定義範圍にも明言してある通りである。

（第二）趣向一轍を避けよ、變幻浮沈窮りなき人情世態を寫すことを生命とした小說には、この缺點は致命的なものになる。

（第三）重複を避けよ。これは說明の要がない。

（第四）鄙野猥褻を忌む、これも、前に喜劇的筋立のところで論じた通り、男女の情事を材料にするのは可、それも淡白に客觀的に情緒のみ寫すやうにし、主觀的誇張を加へてはならぬ。

（第五）矛盾撞着を忌む、これも格別說くまでもない、この缺點があると脈絡不通徹になつてしまふのであるから、これを忌むのは勿論である。

（第六）學識誇示を忌む、「作者が學識を誇示する事なり。老熟の作者には此事なけれど、少年の作者には間々ある

事にて、是れ又忌むべきの隨一なり。」然し老年の作者でもこれがある、馬琴の如きその第一である、逍遙は恐らく老匠馬琴を眼中に置てこの言をなしてゐるのであらう。こゝで注意を要するのは、人物の會話の際にはこれが禁物であるが、地の文、叙述の際には、これが却て一種の魅力となり得るといふことである。たゞ時機を見て投ずることは勿論のことである。

(第七)永延長滯を避けよ。これは長編大作がいかぬといふのではない、無暗に不自然に趣向の引延ばしをするのがいかぬといふのである。

(第八)人物をして屢々長き履歴を語らしむる事、これも絕對に禁忌するといふのではない、寧ろ省筆の一種として進んで用ゐて可い場合があるが、然し程々に加減しないと、讀者の倦厭を來し、全脚色に大害を與へる時があるから、よく注意しなくてはならぬ。

(第九)詩趣缺乏を避けよ、それは順序として第八に來るものであるが、一寸重要な項目であるから最後に殘した。これは肝心のことであるから、逍遙の語を引かう、「おのれがいはむとする本意は、傳奇の旨趣缺乏といふ事なり。それ小說は世態の眞像を叙するものゆゑ、ともすれば其脚色も淡々無味に成り易かり。故に此弊をすくはむため、時に傳奇中の趣きをば其脚中に調合して、人を倦ましめざる工夫をなすべし。」さうして暗闘その他をかりたが可いといふ意を言ひ加へてゐる。だが、何を借りるかそれは問題ではない、問題なのは逍遙の腹の中である。これは、いはば寫實小說卽ちノヴェルは趣向が平凡淡白なものになり易いから、傳奇小說卽ちロマンスの趣向を借りて脚色を面白くせよといふ意味である。若し逍遙に、寫實主義として徹底する覺悟があつたのなら、かういふ妥協はしないであらう。又寫實といふものゝ意義が自然主義前後に稱へられたものと同じ意義であれば、かういふ妥協的態度が入り込む隙があるまい。私はこゝで、逍遙のいふ寫實の意味が、後にいふ程嚴正な意味內容をもつたものではなかつたのだら

うと推察したい。當時の極端に概念化した小說脚色乃至人物に對して、より自然な寫實的に見えるものを要求した程度に止まるものではなからうかと疑ふのである。此の事は又、一方、スコット、リットン、デュマなどの小說を寫實的として稱美してゐる逍遙の態度から考へても首肯出來るのではないかと思ふ。何れにしても、逍遙の寫實なるものが可成りルーズな、妥協的なものであつたことは、事實であらう。これは次に性格について述べる時にも亦出會ふ問題である。然し假に逍遙の寫實といふ觀念が可成りにルーズな、妥協的、部分的なものであつたとしても、時代の小說乃至文學觀念に對してもつ革新的意義の大きさには違ひがない。「寫實主義でなくてはいかぬ」と考へてこれを主張した逍遙の態度に、その意義が懸つてゐるのだからである。

此の一項は、逍遙の思想の時代性を知る鍵として、面白い役目をつとめる。

次に性格論卽ち人物を設ける法則に移らう。

（性格）。

逍遙は、『小說神髓』の上卷で一般的に小說中の性格卽ち人物について種々說くところがあり、下卷の方に於いて特に主人公の設置を中心に性格論を再論してゐる、勿論同じく是れ性格論であり、相通ずるところが多いから相合して吟味して行つても可いが、强てさうする必要もないから、こゝでは、逍遙の說いた順序で步を進めてみよう。

時の小說を對象として論ずれば、この人物も亦、脚色と同じく弊の多いものである。だから逍遙は力を極めてそれを排擊することによつて性格論を始める。その弊とは、小說の人物の背後に、「作者があつて、屢々絲を牽く樣子のあらはに人物の擧動に見えなば、たちまち興味を失ふべし」、「物にたとへて之れをいはゞ、機關人形といふ者に似たり、匆卒にして之れを觀れば、さながら夥のまことの人が活動なせる如くなれども、再三熟視なすにいたれば、偶人師の姿も見え、機關の工合もいとよく知られて、興味索然たらざるを得ず。」（四四頁）。舊小說の典型的作家たる馬

琴の有名な作の如きは、性格の點ではかういふ弊で滿ちみちてゐる。これでは、小説の主腦たる人情世態を無視した「觀念の化物」であつて、人情を寫したものではない。眞の小説の人物は心理學の道理に從つて假作られなければならぬ。作家の意匠次第に勝手に行動するやうな人物ではならない。勿論小説の人物は全く作家の意匠工夫から生れた虚空假設の人物に過ぎない（逍遙は繰り返してかういつてゐる、此の點でも逍遙の寫實といふもの丶意義の嚴正が尋はれて來る）、然し一旦出現して小説中の人物となつては、作者とて擅まにこれを進退させてはならない、まるで他人を扱ふやうに、その自然の運きだけを寫さなくてはならぬ、「我が假作たる人物なりとも、一度篇中にいでたる以上は、之れを活世界の人と見做して、其感情を寫しいだすに、敢ておのれの意匠をもて善惡邪正の情感を作り設くることをばなさず、只傍觀してありのま丶に模寫する心得にてあるべきなり」（四五頁）。作家の好惡から、その人物を偏頗な扱ひをしてはならぬ、或る人物にのみ特別の保護を與へる如きは、嚴禁である。「彼の勸懲をもて主眼とせる和漢の小説作者のごとくに、斯かる情は此人物にふさはしからず、さる情慾をいだかせなば此人物の價を損ぜむ、必ず聖人君子に恥ざる立派の人物になしおくべしなど、作者が岡目の手細工もて人の感情を折衷なし、勸懲といふ人爲の模型へ造化の作用をはめこむときには、其人情と世態とは已に天然のものにあらず、作者がみづから製作へたる誂へ向きの人情なれば、其人物を除くの外には決して見がたき人情なるべし」（四六―四七頁）。勿論、小説中の人物は假作に成るものであるから、作者の意匠次第で完美なものも描き得るわけであるが、その時には「豫め限界を設けて人情の外に出でざるやう工夫を凝す」を肝要とする、即ち「此處彼處なる人間より其性質の原素をもとめて」、これを綜合して一の完美な人物を作り出すやうにせば可い（然しさういふ原素の綜合は不可能であるから、かういふ人物の描出も實際は不可能でなければならぬ）。

さてか丶る人物を假設して「人情世態」を寫すには何うするか、それには情慾と環境の交錯する機微を觀察しなく

てはならぬ。——

まづ情慾といふ物をば其人物が己に既に所有したりと假定めて、さてしかじかの事件おこりて箇樣箇樣の刺戟をうけたならば其人いかなる感情をおこすや、また云々の感情起らば其餘のあまたの感情にはいかなる影響を生ずべきか、また從來の教育と其營業の性質によりて其人物の性はさらなり其感情の作用にも何等の差違を生ずるかと、いと細密に揣り寫して、外面に見えざる表情をあらはに外面に見えしむべし。（四八頁）。

逍遙はこゝで個性といふ觀念に非常に近づいてゐるが、まだそれをしつかりとつかんでない。さて彼は說明を續けていふ、若しその人物が善人なら、さういふ善人が其折々に感じさうな感情をのみ摸寫し出す、若しその人物が惡人なら邪曲な心に抱くやうな感情をのみ摸寫しなくてはならぬ。然しその際に、善人にも尙ほ煩惱あり、惡人にも尙ほ良心があつて、「その行ひをなすにさきだち、幾らか躊躇ふ由あるをば洩して寫しいださずもあらば」、その人情摸寫は皮相になつて、眞を穿たぬことになる。

小說作者も、性の醜きものも、情の邪なるものも、敢て忌嫌ふことをばなさで、心をこめて寫さずもあらば、いかで人情の眞に入るべき。（四九頁）

これは尤もな言である。此間に逍遙は、直ぐその後に、「さはとて婬猥野鄙にわたれる隱微に過ぎたる劣情をだに寫しいだせよといふにはあらず」といつてゐる。これは脚色の場合にも禁忌の一項となつてゐるが、その理由は、小說は美術であり、美術の本質上かゝることを許さぬといふのである。此の禁忌は、寫實といふ主張からせば、少なからずその力を弱めるものであらう。然しその主張の力を弱めてまでも、これを說かなければならなかつたのは、此の點に於ける當時の小說の弊が餘りに甚しかつたからである。然しこれ又逍遙の寫實が絕對徹底的なものでなかつたと疑はれる一證左となる。同時に『小說神髓』の主張が、時弊に對する投藥的な立場を第一義的に守つてゐるものだとい

ふことが分かるのである。

さて「主人公の設置」の條に移らう。最初の主人公の必要、數調べの如きは略していゝと思ふから、そこは略して、主人公性質論から始めよう。逍遙によると、主人公の性質は、「非凡異常」でなければならぬ。主人公が非凡異常であれば、讀者がこれに愛慕を感じ、その將來に關心をもつからである。

故に脚色を巧妙に物する事の外、讀者の注意を促すべき卓越非凡の本尊を設け置くこと必要なり。（一四六頁）

然しその卓越非凡は必らずしも善でなくても可い、「讀者を感動して非常の注意を促すべき非凡の資格を有したらむには、醜惡奸邪の人物といへども」得て主人公となすべきである。反對に、「陋劣なる愚蠢の人物」、又は怯懦なる人物は、滑稽小說以外に於て主人公たらしめてはならぬ。さて又、主人公は成るべくは善惡照射するやう作らなければならぬ、これは小說の趣向を複雜にして興味を多くする必要からである、殊に醜惡奸邪の主人公を立てる時には、是非ともこれに對する善良正直な主人公が必要である、何となれば、人間の天性は元來何うしても善美を愛するやうに出來てゐるからである（一四七頁）。

以上、主人公の性質論に於て、逍遙は又もその所謂寫實主義の弱點を示してゐる。何となれば、「小說すなはちノベルは、世の人情と風俗をば寫すを以て主腦となし、平常世間にあるべきやうなる事柄をもて材料として而して趣向を設くるもの」だからである。卽ち小說にして寫實を生命とすとせば、それは一面凡人主義を意味するものでなければならぬ、「卓越非凡」はさう平生世間にざらに轉がつてゐるものではないからだ、卓越非常をロマンスの主人公の特色とし、平凡尋常をノヴェルの主人公の特色とすと說いて、始めて、逍遙の寫實主義が生きる。然るに主人公にかういふ資格制限を加へるのは、一種の理想主義で、寫實精神を重んずる所以ではないのである。此の點でも、逍遙の小說理想に舊小說と相通ずる要素が又殖ゑるわけである。

主人公（而して一般の性格）を作るに當つて二派の別が生ずる、理想派と現實派これである。現實派とは如何、——

現實派は現に在る人を主人公とするにあり。現に在る人を主人公とするとは、現在社會にありふれたる人の性質を基本にして假空の人物をつくることなり。（一四八頁）。

理想派とは如何、——

理想派は之れ（現實派）に異なり。人間社會にあるべきやうなる人の性質を土臺として假空の人物を作る者なり。（同）

その意味は分かるが、これは「あるべきやうなる人の性質を想像して」とでも改めぬと誤解が生ずる、その理由は、次に明瞭するであらう。

ところで、現實派は、それで可いが、理想派のいふ「あるべきやうな」人物を作るには二つの方法がある。先天法（演繹法）と後天法（歸納法）とがそれである。そこで先天法とは如何、——

己に定斷せる理想上の性質をば仔細に分析解剖して、以て篇中にあらはれたる主人公の性質を造ることなり（一四八頁）。

例へば「忠、信、孝、悌」といふ如き理想を分析してそこから主人公の性質を作るといふのであるが、これは逍遙も例に引いてゐるやうに、馬琴の『里見八犬傳』の八犬士、『朝比奈巡島記』の三豪傑の如き、かうして作られたものである。この方法は、注意して用ゐぬと、その主人公の性格が人間に似て人間でないといふ異樣の化物になることが多い。（殊に歷史小說の主人公の如き、それが正史上の實在人物であれば、決してこの方法を用ゐてはならぬ。）後天法とは如何、——

作者が想像の力もて、此人界にあるべきやうなる種々の性質をば選り集めて、程よく之れを調合して、以て人物を

造るの法なり。故に此法を用ふる作者は、主に實驗と觀察とを其必須の手段として、人の性質の原素となるべき種種の性情をば造れるから、あまりに空理にはしりて、人らしくもなき人間をば造る程にはいたらぬなり。（一五〇頁）

先天法は別に問題がないが、此の後天法は大に疑問である。第一、實驗と觀察にて此人界にあるべきやうなる性質を集めるといふが、さういふことは果して可能であらうか。この場合「あるべきやう」といへば、現在あるものではない、一種の理想的なものを意味する、さういふものを何うして實驗し觀察することが出來やう。（若し又これを、「ありさうな」といふ意に解するならば、それは一種の現實派を意味することにならう）。且つ想像の力もてするといひ、實驗と觀察をもてするといひ、全然反對な作用を混同してゐる。想像もてするならば、これを作ること可能であらうが、實驗と觀察に依らうとするなら、不可能である。然るに想像による場合は、それは結局先天法と同じことになり、實驗と觀察による場合には現實派に同じことになる。卽ち理想派の方法としては、事實、先天法があるのみであり、後天法は成り立たない。現實派をこそ、後天法（歸納法）と名づくべきであつたのである。

逍遙は進んで更に、此の現實派と理想派との得失を論じてゐるが、これはたゞ時代の人々の啓蒙のためといふ外に意味がない。逍遙の小說理想からいへば、先づ現實派による外に方法がなく、理想派の方法は使ふことが出來ないからである。既に寫實主義を執つて立論する以上、現實派・理想派の得失の如き、論ずるまでもない筈である。然るに前の主人公性質論といひ、今の理想派論といひ、逍遙の寫實といふ觀念の徹底したものでなかつたことを例證して餘りがあらう。

（背景）。

背景については餘り語られてゐない。人情世態のうち、世態の方は大部分背景に織り込まれるのであらうのに、逍遙は人情のみ力說して世態の描寫について殆んど語るところがない。明白に背景らしいエレメントについて述べてゐるのは、次の一節の外は殆んど見當らない、――

故に此種の小說に於ては、（中略）ひたすら世間にあるべきやうなる情態をのみ描きいだして、さながらの眞物のごとく見えしめむことを望み、力めて天然の富麗をうつし、自然の跌宕を描き、讀者をしてしらず〳〵其假作界に遊ばしめて、而して隱妙不可思議なる此人生の大機關をば察らしむるにいたるものなり（五五頁）。

或は、性格の條で說いだ環境のことが、背景と關聯されて考へられてもいゝかも知れない。然し何れにせよ、背景に於ても、寫實を貴ぶこと、自然の描寫に力を入れること（これは當時の小說の最も甚だしい缺點の一つであつた）、人物事件と相關的に描くこと等の意味が看取される。然しこれに對する逍遙の注意がさう行渡つてゐないところを見ると、背景といふものが小說創作上一の重要なテクニクとして逍遙の頭に入つてゐなかつたのかも知れない。

（文體）。

當時の小說は大部分は文章に力を入れたものであるから、逍遙もこれに對して恐ろしく力を入れ、法則論の大部分を擧げて詳論してゐる。然し小說の文體が言文一致と定つた今日からいへば、此の『神髓』の文體論の條は、歷史的な意味より他の意味をもたないものである。

逍遙の文體論は、要するに舊小說通用の文體三體を擧げ、その何れが小說の文體として適するやを論じたものである。三體とは、雅文體、俗文體、雅俗折衷體、この三體である。

（第一）雅文體。「其質優柔にして閑雅なれば、婉曲富麗の文をなすにはおのづから適へりといへども、惜しいか

な活潑豪宕の氣なし」（八二頁）。然るに活潑豪宕も文學の要素として重要なものであり、小説の場面人物にも少くない。だからこれは完全な小説文體とはいひ難い。元來小説の文體は風俗人情の進化に從ひ、多少改良されて新機軸を出さなくてはならぬものであるから、この古文體が今日の文明社會を寫すに適するわけがないのである。

（第二）俗文體。「俗文體は通俗の言語をもてそのまゝに文をなしたるものなり、故に文字の意味平易にして、普に解しやすきの徳あるのみかは、別に活動の力あるから、所謂華文に必要なる簡易の品格、明晰の品格はいへばさらなり、峻拔雄健なる勢力あり、追懷愛慕の想念をも惹起しつべき品格あり。加之時としては文字の音調、氣韻共に頗る情趣に適應して、よく心底の感情をば表しいだすに妙なることあり」（八七頁）。小説文體としての俗文體にはかういふ利があるから、言文一致の西洋はいふまでもない、言文不一致の支那でさへ、小説には俗文を多く用ひてゐる。然し當時の日本文壇では言文一途の豫想が明白につかない上、標準的な俗文も定つてゐず、語法もなく、文法もないので、冗長鄙野であり、何うもそのまゝ小説文體とし兼ねる、と逍遙はいふ（八八頁）。世話物には、「情文雙つながら相適ひて、頗る精妙であるが、時代物には不便且つ不都合であるやうに思はれる。そこで逍遙の斷案は、人物の會話に俗文を用ふるのは可いが、俗文に一大改良が施されぬ限り、地の文にこれを用ふることは出來ないといふのである。然しこの改良は早晩施されなければならぬ、「おのれは今より首を長うして新俗文の世にいづる日を待つもの」云々、新俗文の語に言文一致に對する豫想が兎も角出てゐると見て可からう。

（第三）雅俗折衷體。これは稗史體、草双紙體との二種に分れる。

（甲）稗史體「地の文を綴るに雅言七八分の雅俗折衷文を用ひ、詞を綴るには雅言五六分の雅俗折衷文を用ふ」（九四頁）。これは重寶な文體で、雅野貴賤を寫し分つことも、富麗幽婉宏壯激越の模樣を敘することも出來る。歴史小説の文體としてはこれに上越すものはない、然し世話物には少々不向きであるが、それは詞中に歴史性があるから

であらう。馬琴の「八犬傳」『近世說美少年錄』の如きがその文體の模範である。

（乙）草册子體は、稗史體から雅言漢語を少くし、俗言を多くしたものである。柳亭種彦の『田舍源氏』の文體が好模範であらう。これは莊式の歷史小說を描くには不便な文體であるが、世話小說には最も適するものである。もつとも豪宕宏壯等を寫すときには、多少工夫して漢語を增すとか何とかする要がある。

以上によつて、小說の文體は、歷史小說であるか世話小說であるかによつて違ふことが分かるから、先づ作家自身何方をとるかを定めて、それ次第で文體を定めなくてはならぬ。そこで逍遙の曰く、時代物は文化文政度の作者連が極力努めたところで傑作も多いから、「時代物を抛擲して世話物にのみ意匠を費し、未曾有の物語を工夫するに如くはない。從つて文體もこれを主眼として、世話物に適したものを改良工夫するが第一である。それには草册子體は世話物に都合よく又よく改良も出來る。だから將來の小說文體はこれを改良したものにするが可い云々。

以上の文體論は逍遙元來の主張からせばいさゝか要領外れの觀がある。既に小說理想が定まつてゐるのであるから、その主眼に應じて文體も當然定まるわけである、今更舊小說の文體を列擧して、そこから得失を論ずるまでもない。人情を寫すが主眼ならば、人情を寫しいゝ文體が將來の小說文體として成功する、寫實が主眼ならば文體も寫實で押し通すがいゝ、その立場から俗文論に左袒して、俗文改良論を唱へ乃至言文一致を主張しなくてはならなかつたところである。ところが、逍遙はさう徹底した革新的態度に出ず、妥協して、草双子體改良論を唱へてゐるのは一貫せぬ態度である。これも蓋し時弊矯正的思想から出てゐるもので、止むを得ないところであらう。

彼は後に「文章新論」（十九年五月、中央學術雜誌）といふものを公にして、此の文體論を訂正したが、それには明白に、此の矛盾を清算して、小說の文章は情感を表現するものたるを要すと斷言してゐる、これは尤もなるところで少し遲過ぎる恨がある。

影響。

『小説神髄』の影響といふ點については、私は格別、事新しくこゝで言添へる必要があるまい。文學史家によると、明治に文學あつて以來、創作界にこれ程大きな影響を與へたものがないといふことが定評になつてゐる、さうして此の評は、その時々の文學史家の立場々々で多少の誇張や冷視を伴つてゐるにしても、結局は成る程と受け容れられなければならぬものであらうからである。

『神髄』の影響は、爾後の小説の何處に現れたか。『神髄』の影響の大きいといふことは、『神髄』の主張の成功を意味するものである、從つて『神髄』の主張の在る所が即ちその影響を生じた所だと見て可いであらう。そこでこゝで『神髄』の主張を要約せば、寫實主義の主張といふことになる。而してその寫實といふものは、上來見て來た如く不徹底なやゝ皮相的なものであるが、この主張によつて小説を寫實的に改良しようとした。さうしてその眼目として小説の脚色、人物の設置運用を實寫的に行へと説いた。彼の寫實の本質は、「眞に迫る」、「見える如く」、「自然に」等々の語で表されてゐる、「人情の奧祕を穿ち」云々等の語も見えるが、これは逍遙の説明を讀むと人情の動きを心理學の原理に背しないやうに寫すといふことで、勿論人情を主觀的に哲學的に解釋せよといふのではない。從つて逍遙の寫實精神の發揮が、主として外面的テクニクの上に試みられようとしたことは、當然である。要するに、逍遙の寫實とは現代的に客觀描寫をせよといふことに外ならなかつた。脚色も、人物も、道具立も、人物の言行も、情緒も、凡て成るべく現代社會の實際に寫したものにせよといふことであつた（此の意味で彼のいふ歴史小説は、現代小説の變態なるものである）。この小説觀に反封建分子があるといふのは、かういふ意味での寫實主義の一面性に外ならぬのである。さうして彼の寫實主義の不徹底が同時に此の反封建的分子の不十分となるのは、當然である。これは、逍遙の出

身、教養、性格等から考へて、止むを得ないところであつた。

逍遙の新小説理想主張の態度が革命家としては微温的なものであつたゞけに、その反響も微温的であつた。決して一時にどつと賛成を得たり、又は出る早々滅茶苦茶に反撃されたりしたものではなかつた。然しそれに係らず、彼の小説理想は、音のない春雨が大地を濕ほすやうに當時の文學社會に滲み込み、遂に完全にといつてもいゝ程に彼等の小説觀を代へ、その創作態度を代へ、作物の調子を代へしめて、所謂寫實小説の全盛時代を招來することが出來た。（此の寫實小説が、たゞ寫實を以て能事了れりとせず、多分の理想主義、倫理觀道德觀を混じてゐたところに、後期の寫實小説と違つたものがあつたことは、以上の所論から推察されるところであり、こゝに新しく注意するまでもない）。 逍遙の主張が何うしてかう成功したか。それは、逍遙が當時の小説の弱點を實際的に深く知り盡して居り、行詰つた原因、弊の來るところを歷史的に洞察して、そこをよく衝いたからに外ならないのである。

逍遙が後に二葉亭に告白した如く、彼の小説觀、彼の主張は寄木細工に等しいものであつたか何うか。吾等は或る程度まで逍遙の言を正受しなければなるまい。これは『神髄』をよく讀んだ人々の直に氣づくところである。殊に外國文學の資料の使ひ方が、まるで木に竹をついだやうな拙劣さを示してゐるところもある。又その根柢に人生觀なり、社會觀なり、世界觀なりの確乎としたものがないので、二葉亭にその主張の根柢を聞かれても返事が出來なかつたのであらう。然し逍遙の立論の態度が、極く幼稚だが、一種の科學主義によつて居り、進化論をさへ援用して論據を助けてゐるところは、興味ある事實である。思想としての逍遙の寫實的主張は、矢張り時代の實學精神、科學精神による舊文學觀の訂正と見て然るべきであらう。かう解すると、彼が寫實を主張しつゝ同時に利用厚生の精神を可成り多く示してゐるといふ一見矛盾の如き態度が理解されるのである。だから逍遙の主張した寫實主義は、換言すると小説をして最大な效用を發揮させるための寫實主義であつたといひ得るのである。

だが議論はこの邊で止めよう、こゝではたゞ逍遙の小説理想たる寫實主義とその影響の決定的だつたことを知るだけで足りるからである。

二　『小説神髄』と政治小説

逍遙は『小説神髄』に於いて、横に小説を分類しては、勸懲小説（Didactic Novel）と摸寫小説（Artistic Novel）の二種に分け、縦に分類しては、世話小説（Social Novel）と時代小説（Historical Novel）の二つにした。これは恐らく異つた二種の分類とすべきではなく、左の如く合一せしむべきものであらう。

- 小説
  - 現　世（世話）
    - 勸　懲
    - 摸　寫
  - 往　昔（時代）
    - 勸　懲
    - 摸　寫

彼のいふ勸懲小説といふのは廣義にいふと目的小説と同義にならう、又摸寫小説は寫實小説と同義になること勿論である。彼は更に現世往昔の小説の細別として、政事（治）小説、宗教小説、兵事小説、航海小説等を擧げてゐるが、これ等は性質上、勸懲派、即ち目的小説に屬するのが當然であるらしい。彼はその中で政事小説を定義してかういつてゐる、――

政事小説は專ら政事界の現況を寫しいだして、暗に黨議を張らまくする政事家の手になれるもの多し。ベカンズヒイルド侯の『春鶯囀』など共例なり（五七頁）

『小説神髄』に於ける政治小説の説明はかうい極簡短なもので、逍遙の考へや態度をはつきり摑むことが出來ない

が、彼が例に引いた『春鶯囀』は別として、一般の政治小說といふものを排斥するかに見える。何となれば、從來の政治小說は勸懲小說、目的小說の一種で、露骨に政治思想宣傳を見せたものが多い。然るに逍遙からいはせると、勸懲第一の小說は眞の小說ではないといふ。假りに政治小說そのものを全面的に排斥しはしないにしても、當時の政治小說の或るものの如き、イデオロギイ一點張のものでは、當然排斥される立場にならう。逍遙の小說理想からいへば、政治小說も亦、寫實小說とならなければならぬ、「政事界の現況を寫しいだして云々」といふ逍遙の說明も、此の理想の一片を示したものとも受け取れば受け取れるのである。然し逍遙の政治小說論をもつと明白に聞くべき資料は、『神髓』の他に別にある。

明治十八年八月四日の自由燈三二九號に、「春のや隱居おぼろ」の寄書が一篇ある、題して「小說を論じて書生形氣の主意に及ぶ」といふ、これは、『小說神髓』の公に刊行される少し前、『書生氣質』刊行直後のものであるが、これが政治小說、寓意小說の問題を扱かつてゐるのである。『書生氣質』が純寫實（當時の他の小說に比して）であつて道德的敎訓を第一にしてゐない點を辯解し、かねて自家の小說理想の一端を寫したものである。

小說の主髓は人情世態を寫すにあり彼の勸懲を主髓となし又は政治上の寓意をもて其眼目となすが如きは眞の小說の旨に違へり但し小說は美術なるから暗に風敎を稗けつべき意を寓すべきは當然なれども寓意の寓の字の意味を誤り寓意を主意となす如きは最も甚だしき誤りなり云々

逍遙の小說論の主張で、大體は以上述べて來たところを要約したのみであるが、これを政治小說の側からいへば、「政治上の寓意をもて其眼目となすが如きは眞の小說の旨に違へり」といふ語が明白に語られてゐる點である、これによると政治小說は、尋常なものでは眞の小說ではないと考へられたのである。だがすぐ後に「寓意を寓すべきは當然」とあるから、政治上の寓意を第一にしなければ、そこに再認識可能の道があるのだといふことが分かる。

故に近代の（西洋）小説家は概ね人情を主髄として其脚色と趣向を設けて専ら美術的の精神にて小説を編む事とはなりぬ英のヱリヲット女史をはじめ米のブレット、ハアト氏の如きも此主意のやうに思はる。

これは人情主髄の寫實小説主張であり、格別いふことはない。さていよいよ政治小説の論となる。曰く、――

中には（西洋にても）政事上の目的よりして意を寓するも尠からねど其寓意の鹽梅に至りては痛く我國の作者に異なり蓋し我國の勸懲作者は勸懲を以て主位に置き人情世態を以て賓位に置く泰西の小説家は之に反して情態を以て主位に置き奬誡の意を賓位に置く是第一の相違といふべし。

かの如く寫實を第一にし奬誡を第二にせば、政治小説も眞の小説として成り立ち得る（逍遙の小説理想では、奬誡的分子は必ずなければならぬとなつてゐることは、上に說いた）。

故にヂスレリイの著したる政事小説の類と雖も別に其黨の主持する議論を擴張するをもて主髄とはせず専ら政治社會の情態をば寫しいだすことを主眼とせり

これは模範的政治小説を擧げて説明を具體的にしたところである。かくヂスレーリの小説の如く寫實的な調子を帶びれば、少なくともテクニクに於いて寫實的に見えさへせば、それは政治小説であつても、眞の小説となり得る。こゝに政治小説の理想的タイプがあるわけである（ヂスレーリが果して眞の寫實小説か否か、單に政治社會の情態を描寫して足れりとしてゐたものか何うか、それは新に研究問題となり得るが、今のところは、そこまで論及する要はないので止める、たゞ次章ヂスレーリの政治小説の條で、多少かういふ問題に對して答へられることになると思ふ。）

我國の作者達が往古の事蹟を寫しいだして暗に方今の政治を諷刺しあるは當局を筆誅するとは雲泥萬里の相違になん。

ヂスレーリ一派の寫實的政治小説を標準として當時の政治小説を一言したもの。

我國にもいにしへより政事小說ともいふべき者絕えて無きにはあらざれども皆是所謂アルレゴリイ（寓言小說）の類にして眞の小說とはいひがたかり想ふに法令の嚴なるが爲に眞の情態を寫すことの不自由多かるが爲なるのみ隱居は性來利用主義にてなんでもかんでも利用し得べくば之を利用せん心得なるゆゑ時に美術をも利用に轉じて國家の改良を圖らまく思へどさいとて美術の主旨を殺して之を利用するに忍びざるから筆權の自由の得らるゝまで暫く辛坊なさまく思へり世の實益に汲々たる人々請ふ一向に美術家をもて國家に薄情しとな思ひたまひそ。

性來の利用主義云々は、恐らく逍遙の本音であらうが、此の點を考へても、逍遙の主張した寫實小說論が後世の所謂藝術至上主義、藝術のための藝術をそのまゝ意味してゐたか何うか、大に疑はしい。逍遙の意味は、恐らく違つてゐたにちがひない　彼は尙ほ一例を擧げて政治小說、寓意小說の理想を切言してゐる、――

寓意小說の事につきて今尙白したき一例ありむかし米國のストウ女史は奴隸使役の非德なるを歎じて「アンクル、トムス、カビン」といへる一小說を編述せり所謂寓意小說（寓言小說とは異なり）の一種なれども其眼目とする所は專ら主僕の情想を寫して其弊害を發露せしのみ殊に勸懲の主意を執りてわざ〳〵あるまじき情態をば叙しいだしたる場合はなし故に慈悲深き主人の樣をもいと細密に寫しいだして奴を役する者かならずしも殘忍暴虐ならぬを示せり

これ又、寫實を第一とせば寓意小說も眞の小說となることを論じたもので、ヂスレーリの場合の補足と考へて然るべきであらう。

何れにしても、以上によつて逍遙の政治小說の理想を見ることが出來る。卽ち『小說神髓』で主張されたところと同じく、これを現代的寫實的に改良する、それが要點である。

以上で政治小說に對する逍遙の理想は先づ分かつたが、然しこれを何ういふ風に政治小說に生かすかといふことは

問題であらう。何となれば、逍遙は「小說の主眼は人情の描寫にあり」といふ、つまり Human Passion が主眼である、然るに政治小說はたゞ人情を描寫したのみでは不可ない、人情よりも寧ろイデオロギイの方、Human Idea の方に力を入れなければならぬことは、政治小說の定義からいつていふまでもない。だから若し此の寫實といふことを後世の如き嚴正なものにしたら、政治小說は正面から政治理想を寓するといふ積極的な方面が不可能になり、比較的可能なのは、政治社會の暴露といふ如き消極的な方面のみとならう。然し此の方面とて十分可能とは行かぬかも知れない、政治社會を暴露する以上、消極的なものにせよ一種の理想が何うしても出て來るからである。たゞ政治社會と政治家を描寫して置いたらと一應は考へられる、然しそれが政治小說では結局出來ない。政治小說は、社會小說と違つてありのまゝの現社會を描寫するといふことが出來ない、描寫を主とするとしても、政治小說は主として政治といふ局限された社會の一面に關連してゐるのであり、從つて主題、脚色、人物何れも主として此の限られた社會に關連しなくてはならぬ、從つて政治社會に對する特殊な知識が必要である、卽ち選擇的である、又かゝる小說を讀んで政治的效果をあらしめるには、その筋立が、政治的に通貫してゐなければならぬし、讀者に是非の判斷が明瞭につくやうに說明が出來てゐなくてはならぬ。何うしても特別な用意が要る。且つ又、如何にさういふ道具立が揃つたとしても、現實の問題として、如何なる社會に於いてにせよ、政治活動の眞相を描寫するだけの自由が、作家に與へられるであらうか。それは先づ有り得ない。況んや當時の日本に於てをやである。

そこで政治小說は結局政治理想の宣傳啓蒙を目的とするものであるとし、寫實主義を用ひ得るのはテクニク方面である。而かもその寫實主義も、當時の政治小說に對しての問題で、嚴正な純寫實の意味ではない。テクニクに於いて寫實精神を示し、『小說神髓』の敎へた作法に從つて（又は西洋政治小說の模範によつて）これを構成する、これで一應當時の政治小說としては立派に寫實的なものとなり得たのであつた。

かくて、理論上は兎に角、當面の政治小說そのものからいへば、政治小說は、此の『小說神髓』の小說理想によつて決定的の影響を受けた、それは後にいふ如く、今後の政治小說の實物がそれを語るであらう。

即ち當時の現狀に即していへば、政治小說も、專ら宣傳第一とし、小說としてのテクニクの完整その他の點に政治家らしい無頓着を示し、たゞ熱烈な感情を投げ出せば足るとして來たが、それでは次第に單調に流れ、同工異曲の作物ばかり多く、小說として行詰りを生じて來た。而かも當時の文學界が西洋文學の刺戟で次第に進步して來るので、文學意識の低い作物は次第に讀者に倦厭される。然るに時代の政治熱が眞劍なものとなるにつれて、政治小說の必要が益々多くなる、單に自由黨志士の主張する如く、下等社會の勞力者乃至婦女童幼に政治思養を吹き込むために必要なのみならず、大人君子さへこれを讀んで蒙を啓き、趣味を養ふことになる。從つて、小說として複雜な立派なものたるを要求することになる。且つ肝心の政治事情が漸變して、國會論內閣論が中心となつて來ると、その政治論も具體的な微密な思想が必要となつて來、從來の如き簡略なお粗末なテクニクの小說では、此の方面からもイデオロギイの表現が困難になつて來る。種々の點で政治小說の再組織が要求されてゐたわけである。そこにもつて來て西洋政治小說の立派なものが紹介されて、模範を示す、或る意味で時代の文學改良熱を集成した『小說神髓』が小說行詰りの打開に新しい方法を唱へ、寫實精神を敎へる。此の當時としては、創作精神が幼稚であるから、かういふ模範に依り、かういふ原理に由る外、自家改革の途がない、又これ等による自家改革こそ、當時としては立派な小說（近代的乃至それに近いものといふ程の意味で）となる唯一の途であり、立派な小說となれば最も面白い小說として持て囃される機會も多く、又かく持て囃されて多く讀まれると、自然政治小說としての效果も多いといふことになる。

かゝる再組織必要の機に臨んでゐた政治小說が、かゝる模範を見出し、かゝる理想を知つて、自ら甘んじてその模

範を假り、その理想に影響されようとしたのも、不思議はない。從つて『小說神髓』に見える寫實的テクニクが、次第に政治小說に作用して、政治小說を變化さして行く。こゝに於て先づ『小說神髓』の理想と略ぼ合致した政治小說が出來、政治小說側の要求も大體滿足されることになる。

此の兩者の合致を確めるために、吾等は今一度坂崎紫瀾の政治小說改良論の一節を引かう。

(前略)願ふ所は唯此の十九世紀以來の社會にありとあらゆる風俗を寫し出せる政治小說を續々と現出ありたきことで御座る殊に我が日本の開化は實に西洋現在の開化を學びしものなれば其現在の社會に關する政治小說は自づと日本人を感動するの效力に富みしこと蓋し疑ひもなき事實にて世の小說譯出に從事せらるゝの諸君は先づ此點に着眼して後に其稿を出板したまへ(中略)兎に角成丈時代の新しき現在の政治小說を譯出せられなば看客の喝采を博するは勿論其賣上高の增加するは此の道人の保證致す所で御座る然るに唯西洋の政治小說を譯出するばかりでなく此の道人も非力ながら敢て我が日本の現在社會に關する政治小說を著述なしたき心得なれど新聞紙の筆鋒すら未だ自由ならぬ今日に若し彼の春鶯囀の如く各政黨などの內幕を夫れとなく世上に公布して己が意見を其文中に寓せんことなどは思ひも寄らず責めては之に類する西洋の政治小說の一部なりとも多く譯出に相成なば其效力の程は如何なるべきや(中略)抑も其黨派主義の如何を問はず我が日本人の風俗を高尙に誘(みちび)く者は最早日本封建時代の小說の能く辨ずる所にあらず實に西洋現在の社會に關する政治小說ならでは叶ふまじと心付きたるまゝ聊か平生の持論を吐露して敢て之れを世の西洋政治小說譯出に從事せらるゝ諸君に望む次第で御座る(「政治小說の效力」、十八年五月廿八日、自由燈二七一號)

讀者諸君は、紫瀾の此の言と『小說神髓』その他に示された逍遙の政治小說の理想を比較せば、明治十八、九年以後の政治小說が、以上の理想、以上の要求で暗示されたところの寫實的特性をもつたものに變じて行くことの當然なの

が分かるであらう。

三　政治小說家側の政治小說論

以上の如き理想と要求の一致は、然し何の犧牲も無しに出來たのではない。多少誇張していへば、政治小說側の可成り激しい反對を押し切つて贏はれたといふ氣味がある。

政治小說家側の小說論も、逍遙の小說論も、元來は根元の同じ文學改良意識から出發してゐるものであるが、此の二つは、その目標を異にし、理想を同じくせず、遂に對立的立場に到着するに至つたことは、上卷述る通りである。だが政治小說家の文學改良論も、次第に時代の動きに連れて、一般的な文學改良運動と多少とも步調を揃へるものと、全然他の文學運動は顧みず、政治小說だけについて理想をもつてゐるものと分れて來た。前者は調和派と呼ぶべくば、後者は純粹派と呼ばるべきものであらう、前に述べた坂崎氏の如きは、此の調和派に屬する、而して和田半狂の如きは、此の純粹派を代表するものといつて可い。（半狂については上卷一二七頁以下を見て頂きたい）。

和田半狂の政治小說上の意見を見るべきものは、

○日本の政事小說（十八年七月十七日、繪入自由新聞七七八號）

○政事小說の作者（同年七月十九日、繪入自由、七八〇號）

○稗史小說の婦女子の翫弄物となり了らんことを嘆ず（同年九月十日、繪入自由八二五號）

等である。勿論上卷に述べた政治小說作家乃至政治家側の政治小說と根本は同調であるが、それより一步も進んだといふよりも、それを少し極端に押し進めて、一種の政治小說萬能論めく論調を生じて來たところが、純粹派の面目を

そつくり出してゐる。

右の論文の第一は、要旨をいへば、政治小説が下等社會の勞力者や婦女子などの政治思想養成に必要缺くべからざるものであり、現にさういふ小説が大きな效果を示してもゐる。これは有難いことであるが、何うも政治小説の全部が全部此の目的をわきまへてゐるとはいひ難い。此の程出る立派な政治小説の中にはわざと字句を高等にしてインテリ向きに作つたのがあるが、あゝいふのは政治小説としては邪道である。政治小説は思ひきつてもつと字句を通俗平易にし大衆向に改良する必要がある。

此の一篇に早くも、來るべき政治小説の新潮向に對する不滿不賛成の響を含んでゐる。

第二の要旨は政治、小説萬能論ともいふべきもので、小説作者で政治思想のない作者は社會に有益な小説を作ることが出來ない。作家は凡て政治思想をもつてゐた方がよからう。又此の頃小説改良の流行となり、東京大學を出た學士が小説を書いたりするまでになつたが、然しその改良小説を見ると政治的と思へぬものがある。これでは折角學問をしても何の役にも立たぬ、兎も角小説改良を試みるなら、その大學で學んだ學問を應用して政治小説を作つて社會人民に利益を與へて貰ひたい、政治的關係のない小説などに學問や精力を勞費するのは賛成されない云々。

要する文學改良運動が、政治小説著作をもつて唯一の理想としなくてはならぬといふ極端な意見である、今日からいへば、半狂どころか全狂扱ひにされる極端な意見であらうが、此の當時からいふ説を堂々と新聞社説に掲げてゐるところを見ると、むしろ賛成者を豫期してゐたもので、必らずしも狂的な所論ではなかつたのである。

第三は明白に逍遙の小説意見に對する反駁である。此の論文は九月十日の日附であるから、それ以前に起草されたものと考へ、何うも『小説神髄』を讀んで書いたものか何うか疑問である、讀んでも第一分册のみであらう。恐らく同じ年八月、自由燈に連載された「小説の主眼」(『神髄』上卷の分と同じもの)を讀んで反駁を書いたものであら

う。主旨は簡單にいへば、逍遙流の小説理想、卽ち小説は美術なり、世態人情の眞を寫せば足る、ありのまゝの世態人情を描寫する以外作者の想像で手加減を試みぬといふ論は、西洋カブレの僻論で、これは、若し小説が果して此の通りになれば、再び意氣地ないものになり、婦女子の翫弄物になつてしまふ。

(前略)先生方のお説の通り稗史小説の骨髓は左樣なものとするも夫れでは現時の我社會に取つて稗史小説の功能は何所に在るや蓋ふに我社會は以つて稗史小説を唯だ美術の一つと致し置ても宜しき時代なりと鑑定さるゝか但しは婦女子の翫弄物となり了るを何とも思はれざるか左り迚は誠に不深切なる先生方にあらずや余輩は假ひ西洋流の理屈に反すとも先生方の笑を招くとも其樣なことは屁とも思はず稗史小説を一番利用して社會改良の道具の一つとなさんと欲す否世の所謂下等社會の心田を開墾するには政事に關する稗史小説を以つてするに如かずと答ふ(中略)嗚呼東洋の救濟主を以て自ら任ずる者は別に一新機軸を出して以つて世界無比古今未曾有の政事小説を作爲するの世道人心に稗益ある事を知らざるべからざるなり。

實に意氣昂然たるものである、無法といへば無法、頑固といへば頑固、いひやうない議論であるやうに見えるが、中に何やら眞率の氣が消し難いものがある。

逍遙が後『神髓』を刊した時に「小説の稗益」の一項を特記したのは、かういふ抗議に辟易したからではなからうかと思ふ程である。

然しかういふ政治小説萬能論は、半狂あたりの文章を最後として次第に影を沒して行き、それと共に『神髓』へ合流して行くものが多くなるわけである。半狂の論が大した反響もなかつたのは、彼に西洋最新の學問の知識がなく、小説家としては勿論又政治家としての聲望手腕にも見るに足るものがなかつたからであらう。

四　收　結

收結として、『小說神髓』その他の革新的洗禮を受けた後の政治小說に具體的に何ういふ變化が起つたかを一瞥しよう。

『小說神髓』の分冊（五冊）刊行は十八年九月から十九年四月に亙るものであるが、五月合本が出た。『神髓』に對する反響は勿論分冊時代からあつたことに違ひないが、殊に纒つて讀まれたのは十九年五月以後と考へて、この前後、即ち大體十九年頃からその革新的洗禮が次第に政治方面に出て來たものと見て可い。さうして當時は繰返すまでもなく、政治小說の全盛の上り阪時代であり、而かも前にもいつたやうに政治小說の轉換時代であり（此の轉換が全盛の一助となつたともいひ得る）、政治小說の作家は政治家として知識階級として第一流の人々であり、革新の意氣に燃えて居り、文學への理解があり、文學改良の志望はあり、西洋文明へも憧憬をもつてゐたのであるから、『神髓』の主張が先づ政治小說方面で生かされたのは、當然のことであらう。殊に、テクニクの點で寫實を主張して、從來の支那流の小ウルサイ技巧を排擊した點が、素人作家たる無經驗をカムフラージュするに都合がいゝといふところから歡迎された氣味もあつたといふ。

從來『小說神髓』の主張を先づ生かしたのは、主張者の逍遙自身の外、二葉亭四迷がそれだとなつてゐる、勿論四迷も受けたに違ひないが、門下といふ點では誰より先に嵯峨のやおむろ（矢崎鎭四郎氏）を擧げなくてはなるまい。坂崎紫瀾が比較的早く逍遙の小說論に動かされてゐたらしいことは、上に述べた通りであるが、當時紫瀾の下端をしてゐた綠雨齋藤賢も夙に『神髓』の愛讀者であつたといふ。その他幾多早熟の天才青年文學者がこれを讀んでこれに動

かされたか知れない（紅葉事件の如き）。然し逍遙自身の外に、時の文壇に眞先にかういふ革新的新潮を導入して、新形式の小説を公にし、讀書人の大喝采を得たのは南翠須藤光暉である。此の點で南翠の功は大きい。これに續いては、今は埋もれたが當時の一名家小宮山桂介、又大阪では宇田川文海の如きがある。政治小説家の代表的作家と見られてゐる末廣鐵腸の如きも、自ら逍遙の小説理想に動かされたと公言してこそゐないが、作風で見れば、これ又最も早く影響を受けた一人であらう。紫瀾が、後に『神髄』流の寫實的政治小説を書かうとしたことは、上卷に說いて置いたところである

此の以後、政治小説は形式も内容も次第に變徵を示す。形式は稗史的體演義體のものが漸く少くなり（然し作家によつて終までその氣味を留めてゐるものはある）、社會小説現代小説といつた形式のものが多くなる。内容は、單に不平反抗の感情吐露の具としてのみ用ゐられるか、政黨主義宣傳の機關としてのみ利用されて來た從來の多くの政治小説と違ひ、兎に角客觀的テクニクで一の世界を描寫し、これによつて小説思想を具體的に示すといふことになつた、その小説思想も、實際の小説運用に關するもの、乃至確實な知識的啓蒙を目ざしたものが多く、單純な悲憤慷慨流のものはなくなる。勿政府側の敗北、民黨側の勝利を描く點はあるが、然し政府側必らずしも惡のみといはず、民黨側必らずしも善のみでない、又勝つには勝つだけの自然な具體的な理由があり、單に感情だけで作者が勝たせるといふのではない。作者に描かうといふ政治理想があつても、それをいきなり露骨に投げつけることはせぬ、小説としての描寫をつくし、テクニクの運用を巧みにしてその理想を一の世界に宿して示さうといふ。概していつて、客觀的、描寫的、建設的、組織的となる。さうして、模範とされた政治小説は、（度々繰返した如く）、前記の分が、露國虛無黨、佛國革命に關する諸作であつたのとは反對に、英國の前大宰相ビコンズフヒールド伯ベンジャミン・ヂスレーリの小説であつた。いはゞ、『小説神髄』は、爾後の政治小説を理論的に制約し、ヂスレーリの諸作は實例で制約

したといつて可い。

『神髓』と政治小說の關係はこれで一應收結することにし、吾等は、次にヂスレーリの小說の實例を研究することにしよう。

ヂスレリーの政治小説

ヂスレーリの政治小説

ビコンズフヒールド伯ベンジャミン・ヂスレーリの政治小説乃至人情小說が我が國に紹介移入されたのは、さう多しとしない。先づ——

明治十七年『春鶯囀』(Coningsby)
明治十九年『政海之情波』(Endymion)
明治二十年『双鸞春話』(Henrietta Temple)
同　年『大膽書生』(Vivian Grey)
明治廿一年『昆太利物語』(Contarini Fleming)

此の五篇であらう、而かも中には抄譯もあり中絕もあるから、完全なものは先づ三篇である。然るに、この三篇(全部でも五篇)の譯文小說が日本の政治小說界に及ぼした影響は極めて大きい。それは、政治小說といふものゝ模範なり規準を與へて、これが本格の政治小說だといふことを敎へたからである。卽ち『小說神髓』が小說の主眼、テクニク等の點で爾後の政治小說を制約するところがあつたに對し、ヂスレーリの政治小說は具體的の實例によつて、本格の政治小說はかゝあるべしといふ規準を示し、爾後の政治小を說して大に學ぶところあらしめたのである。而して以上の如く、『小說神髓』の者からいふ政治小說の理想が、大體に於てヂスレーリの小說で代表されてゐるので、政治

小説作家がヂスレーリ的政治小説を手本として成功した場合には、それが當時の小説理想から見てもテクニカルに立派なものであつたらうに違ひなく、從つてヂスレーリ政治小説の出現は、遂に『小説神髓』にいふところの主眼、テクニク等に於ける進歩への刺戟となつたこと、勿論であらう。そこで、ヂスレーリの政治小說は、政治小說研究上重視すべきものであるのみならず、一般明治小説史研究上からも、相當に注意を拂はれていゝものである。

明治十七年『春鶯囀』の譯が出る前に、ヂスレーリに關して當時の讀書人が何れ程の知識をもつてゐたか、一般的にはさう多くはなかつたことが察せられる。彼が近代英國で稀有な政治家の一人として、日本の新聞紙上にその名を掲げられたのは、明治の初年からである。然し彼に關して可成りに纏つた知識が傳へられるに至つたのは、明治十四年四月彼が歿した時が始めてであらう。此の時日本の大新聞も小新聞も、それ相當の紙面を割いて、ビコンズフヒールド伯ベンジャミン・ヂスレーリの傳記功業の一端を掲げ、哀悼の意を表した。(例へば十四年四月二三日朝野の如き)、此の時矢張り彼の業績の中に小說詩文があるといふことが傳へられたものである。その後ヂスレーリに關して纏つた知識を與へたものは、森田思軒の「ビースンスフヒールド侯起身ノ事ヲ記ス」といふ數回の隨筆體文章であらう、始め郵便報知に出て、後明治協會雜誌に轉載された、これが十六年十月のことである。然しこれは政治家としてのヂスレーリを述べるのが主で、小說などのことは語られてゐない。

彼の小說のことが特記されたのは、明治十五年時事新報の記事であらう。十五年七月二十一日の記事に「政治家小說を作る」と題して、英國のビコンスフヒールド、露國のワルヂェッフ等が人民啓蒙、政治理想發揚のために小說を書いたといつて、さもさも珍奇なニュースらしく特報されてゐる。最もこれは、今日だから可笑と思はれるが、當時では珍奇がることが當然であつた。社會に於ける、又一般文化に於ける文學乃至小說といふものゝ位地が低くて、そ

の作者も自ら戯作者などゝ卑下してゐた位であるから、知識階級が小說創作に手を染めるといふことには、高尙な目的に殉ずるといふ多分な犧牲的精神を必要としたのである。況んや前大臣、前大宰相が小說を書くなどといふことは、夢想も出來ないところであつた。だから大宰相が小說を書くといへば、小說側からは大した宣傳記事であり、又事實それだけでも影響するところがあつた。だから、ヂスレーリの小說は、大宰相の書いたものだといふので、一面英雄崇拜的氣持から、十分歡迎される理由をもつてゐたのである。

尤もヂスレーリの小說が勢力をもつといふのは、その小說が、そのまゝで當時の日本社會に受け入れらるべき分子をもつてゐたからでもあるに違ひない、卽ちそれに讀書社會、社交界等の要求に應ずるに足るものがあつたからに違ひない。このことについては、後に各箇の作品について語る時言及されるであらう。

ヂスレーリの諸作が政治小說の模範視されてゐたことは、明治十四年の櫻田百衞の『自由廼錦袍』の自序、又は十五年刊『蝴蝶紀談』(上田秀成)に對する雜賀豐太郎の序等にも見えてゐて、明白なところであるのに、政治小說の要求が叫ばれ出した際もつと早く紹介されなかつたのは何うい ふ譯であらう、本來ならば第一に紹介されて然るべきであつたのに、一時デュマその他の歷史小說が全盛を占め、かういふ本格物が紹介されなかつた。私は、此の事は、自由黨全盛と關係があると考へる。政治的事情からせば、自由黨の最も有力な指導理論はルソー流の民約論であり、自由平等であり、政府の革命であり、中には內々で共和政治を理想とした者もなくはなかつた。いつも輿論を口にし、自ら人民の代表なりと信じ、事實又幾分か代表はしてゐたものゝ、何よりも革命の理想が彼等を動かした。然るにヂスレーリの小說の敎ふるところは、秩序ある政黨政治の發達であり、眞に民意によつて動く着實なる政治論であり、その小說に描かれてゐるところは、文明社會の社交室であり、先進法治國の議場の光景であり、當時の自由黨の要求するものとは、甚だ相違したものであつた。加ふるに、ヂスレーリの政治思想は必ずしも保守主義を墨守したも

のではないが（寧しろ保守の假面に恐ろしい革命的權略家が隱れてゐるやうな氣がするが）、彼の政治的所屬は保守黨である、此の點も自由黨派からいへば氣に喰はなかつたであらう。さて轉じて文學界の事情からせば、一般的にいつて讀書界には馬琴的演義稗史の勢力が強く人情本式の寫實體小說は、まだ一段と卑下の態度をとつてゐる、勿論全體からいつて文學小說の趣味が低く、有識者には輕視されて居り、何の社會的勢力などない。從つて大體近代寫實小說の形式を取つてゐるヂスレーリ物は一般大衆には味ふ力が乏しい上、英國政治史に關する可成りな知識がなくては、十分理解されない。然るにかゝる知識もあつて、讀んで面白いと思ふ如き人々は、何れも小說稗史といふものを輕視し、先づこれに筆を取らうとはしない。かういふ事情で早く紹介される可くして紹介されなかつたものであらう。然るに十七八年來、政治情勢に變化を來し、自由黨凋落、改進黨擡頭となつて來る、それと共に政治論も過激な革命沙汰は漸く迹を潛め、秩序ある社會政治が理想とされて來る、これについての國人の知識が啓蒙的に進んで來る。英國風の議會制度、政黨內閣が先づ模範的なものと考へられて來る。國會が近づくにつれて猶ほさうなる。ヂスレーリの小說へも理解の可能が加はるわけである。且つ文學界でも、ユーゴーの忠言で、政治と文學が接近を始め、知識階級の小說著作が眞面目に企てられる、文學的知識が進歩して來る、又歐化主義の空氣が都鄙を風靡する頃になると、西洋の例から小說の社會に於ける機能も認識され、識者の小說改良を志す人が少くない。ヂスレーリの小說を消化する可能性が益々強くなる。そこでヂスレーリ小說の紹介となつたわけである。然るに愈々讀んで見て、讀者は、此の本格政治小說に對して異常な興味と驚異を感じたらしい。そこで、彼の政治小說が遂に、最高の水準と見做さるゝに至つた。

　而かも、こゝに至つても、尙ほヂスレーリの政治的立場が顧念され、改進黨の人々は勿論、自由黨の人々もヂスレーリの政治小說の興味と宣傳的價値については異論がないに拘はらず、敢て紹介しようとはせず、改進黨側では尾崎

咢堂がヂスレーリ傳（『經世偉勳』）を公にしたのみ（それもグラッドストーンを知る爲めにヂスレーリを描くといふ辯解が伴なつてゐる）、後は保守的色彩をもつ人々によつて紹介されてゐるのは、注意すべき事實である、『春鶯囀』の關氏然り、『政海之情波』の渡邊氏然り（少くとも世間的には）、『昆太利物語』の福地櫻痴、塚原諸氏然り、

これは譯者の側の意識乃至遠慮の所爲であるが、讀者の方は、さういふ點に頓着なく、たゞ英國の大宰相の傑作政治小說として大に歡迎し、大に愛讀し、大に模倣したものであつた。讀者が何をヂスレーリの小說に認めたか、その細かいことは後に述るとして、概括的にいつても、ヂスレーリの小說が當時及び爾後の政治小說に與へた影響は深い。そのうちでも第一に目につく形式方面のことに、この篇の初頭に述べて置いたから、今こゝでは繰返さない。ただ、內容的なことで主なものを二三いはう。その第一は、從來の或る作の如く無暗に悲憤慷慨することを止めて、冷靜に現實の政狀乃至政治理想を批判分析する態度の出て來たことである。或は政黨の內部を描く、或は政黨同志、或は政府對民間黨の政策を具體的に論じ、眞面目にその得失を研究し、その主張を明白にしようとする（末廣鐵腸の作の如き）。かういふことは從來なかつた。從來の日本の政治小說は概して政治意見の發表に急であつて、面白い小說を作るといふ心算は少なかつたらしい。ヂスレーリの政治小說は、小說としても相當面白い立派なものであり、結構も大きく、趣向も複雜し、性格描寫に興味もあり、哲學的空氣もあり、人情的分子も多い、讀んで非常に面白く思はせる（例へば、『春鶯囀』第五十回から第五十二回の邊を讀んでみ玉へ）。そこで、日本の政治小說家も漸く小說としても面白いものを作らうと心がけるやうになつた（鐵腸、南翠等）。主人公活動の舞臺として政治社會、交際社會の描寫が加はつて來る、時代、社會の空氣、さういつたものが描かれて來る。これは後々の小說にも關係があらう。文明政治と社交とが不離の關係にあることが明白にされる。婦人の政治上及び社會上の位地の向上（乃至理想的に、向上せしむ可きものといふ見方）が示されてゐる。その他技術的細部に於いて、日本の政治小說がヂスレーリに負ふて

ゐることは、枚擧に暇なしであらう。

以上は、然しヂスレリー政治小說の一般的影響ともいふべきものであるが、私の手許にはそれの影響を如實具體的に突きとめ得る資料が多少ある。

明治十五年刊『自由之栞蝴蝶紀談』の序に於いて彩霞園主東洋太郎（難賀豐太郎）はかう語つてゐる。「曾聞英國の故宰相たりしビーコンスフォールド君は其少年の時頗ぶる風流煙霞の癖ありて常に嘲月弄花の間に遨遊し云々、君もと幼兒より文才ありて詞章に長ぜしかば椽大の筆を弄して胸中萬斛の風懷を寫し小說稗史物の本を作りて之れを世に公にせしに計らず非常の聲價を得るに至り爲めに洛陽の紙價を貴からしめて爾後意志を廟堂の上に得て天下の大權を掌握するの日も亦政治を談ずるの餘暇筆を小說に弄して稗官の流を學び快話奇談の間却て政治上微妙の論理を寓意して黨論擴張の一助となし併せて老後の一資產を起したり云々、余が友蝸石園上田秀成氏ビーコンスフォールド及びワルヂェッフの兩氏が顰に倣ひ今度蝴蝶紀談を新著す善く方今内外の事情に通曉する實に政治學楷梯の小說青なる事を保證す」云々。

坂崎紫瀾は烏々道人の名を以て、明治十八年五月二十八日の自由燈に「政治小說の效力」を論じてゐるが、その中で、ヂスレーリの『春鶯囀』を讃してかういつてゐる、「抑も西洋の政治小說なる者は彼の新聞と演說とに對して政黨論戰の三大器械とも評せらるゝ程のものなれば隨ふて其趣味も亦高尚にして中等以上の人物をも感動するの效力ありとす現に我が日本に飜譯となり發賣する露國虛無黨退治奇談又は春鶯囀の類の如きは普通政論の譯書を讀むの效力に勝るものあるを覺ゆるぞや（中略）然るに唯西洋の政治小說を譯出するばかりでなく此の道人も非力ながら敢て我が日本の現在社會に關する政治小說を著述なしたき心得なれど新聞紙の筆鋒すら未だ自由ならぬ今日に若し彼の春鶯囀の如く各政黨などの內幕を夾れとなく世上に公布して己が意見を其文中に寓せんことなどは思ひも寄らず責めては之

に類する西洋の政治小說の一部なりとも多く譯出に相成らば其效力の程は如何があるべきや是れ固より道人が敢て我が黨の主義の爲めにのみ利用せんとする偏頗心にては毛頭之れなし其證據と申さば即ち此の道人が例に援く春鶯囀の著者は如何なる人物なりやと申す一儀を御吟味あれ抑も其黨派主義の如何を問はず我が日本人の風俗を高尙に誘く者は最早日本封建時代の小說の能く辨ずる所にあらず實に西洋現在の社會に關する政治小說ならでは叶ふまじと心付きたるまゝ聊か平生の持論を吐露して敢て之を世の西洋政治小說譯出に從事せらるゝ諸君に望む次第で御座る。」此の文章によつて、吾等は、『春鶯囀』の讚美、これをモデルとして政治小說を作りたいといふ意（事實、紫瀾の『美人國』は『エンヂミオン』に負ふところがあらう）の外に、ヂスレーリに對して保守黨といふ點で幾分かの遠慮のあつたこと、社會改良の見地から民間黨が幾分共同戰線を張つた形のあること、ヂスレーリの小說がその背景を離れて利用されるに至つたことなどを學び得るのである。

明治二十年十月刊『政事家社會』といふ政治小說に於いて織田純一郎はかういつてゐる、「（前略）頃者偶然エンヂミオンを讀むに英國上流社會の狀態を記す余以爲く是れ余が常に欲する所の小說なり宜しく之に倣ふて一篇の小說を作るべしと是に於て斯稿を起すの意を決せり」云々。織田氏は平生日本に上流社會を描いた小說のないことを慨してゐた、それで自ら創作しようとして、何も手を下しかねてゐたが、此の頃『エンヂミオン』を讀んだところ、これが自分の希望通りの小說であるからこれに倣つて筆を下したといふのである。織田氏の所謂上流社會といふのは何の意か、これだけでは茫漠としてゐるが、表題の『政事家社會』とあるのを考へ、內容を讀んで見ると、政治社會の上層社會、即ち政府、大臣等を指すことが分かるのである。

二十年十一月刊『政海情波ねやの月』高安龜次郎著に至つては、此の角書が既にヂスレーリの『政海之情波』の模倣なることを示してゐる、その自跋にいふ、「秋雨愁々として頻りに書窓を撲つ余机に倚るも唯其慘憺たる聲を聞くのみ

にして亦無聊に堪へず會々「ビーコンスフヰルド」伯が著はせし所の「エンヂミオン」を繙き之を一讀して「モントフホット」夫人の快活能く一大假戰場を開き遂に世目を驚かしたるの段に至り悄然嘆じて曰く嗟乎東洋亦此快活なるの一夫人なきか會々婦女子の朝は毅然として婦女子が氣風の振起せざるべからざるを痛嘆するも夕は舞踏場に出て、萬燈の下男子と痴談をなすに過ぎず廉恥地を拂ひ貞操天に消ゆ嗟乎東洋亦此快活なる一夫人なきかと遂に鈍筆を煩はすに至る況んや「ビーコンスフヰルド」伯が少年の筆勤實に余をして欽羨興起せしむる者なるに於いてをや若し夫れ脚色の好惡文章の暢否に至りては之を讀者の意に放任せんのみ」云々。これは渡邊氏の譯本を讀んで感じたものであらうが、その感じ方が少し見當を外れてゐるも、ヂスレーリに私淑して小説を書き出したことに疑ひがない。

志賀遮莫は、明治二十一年十月刊の『總理大臣』なる政治小説の中で（第十一回）、かういつてゐる、「西洋は言詞が緻密で文章も法が定つてありますから微妙の關係を寫すには極めて適してあるので御座いませう……併し妾はさう思ひますよ日本の小説家でも巨萬の資本を投れて英のビーコンスフィルドの様に金錢上の利益を欲する譯ではなく翅だ己れの事歴を後世に遺さうと云ふ主義で著作に從事したら隨分見るに足る小説が出來るだらうと思ひますよ」。

最後に今一つ、坪内逍遙が共醉居士の名で讀賣新聞に掲げた『外務大臣』（二十一年四月六日）、あれの第十七回に、長後久男といふ學士が政治小説を書くところがある、長後は、批評家の賞讃に對して謙遜していふ、「ホンノ微侯の猿眞似です初陳著述ですから到底見られません自分ながら微侯之作と讀みくらべては慚愧に堪ないで」云々。志賀氏も坪内逍遙も、その小説をヂスレーリの直接影響の下に書いたといふのではないが、ヂスレーリの政治小説の影響が如何に強く當時の文學社會に浸み込んでゐたかといふことが察せられるであらう。

以上は、ヂスレーリ小説の當時の日本文學界に與へた影響の中、具體的なものゝ一瞥である。勿論研究の進むにつれて、かゝる實例はまだまだ増加させることが出來ると信ずる。

私は尙ほ田山花袋の『東京の三十年』(三三頁) 島崎藤村の『櫻の實の熟する時』(第一回)、その他に言及することによつて、當時のインテリゲンチヤ文學青年等に對するヂスレーリの人氣が如何に强いものであつたかといふことを立證出來るのであるが、此等の著作は別に珍らしいものでもないので、讀者諸君自身で讀んで合點していたゞくことにし、こゝには略す。

次にヂスレーリの政治小説を個々に吟味を加へてみよう。

『政黨餘談 春鶯囀』(Coningsby)

一 概説

『政黨餘談 春鶯囀』、全四册。

譯者は橘郁居士法學士關直彦、福地櫻痴閲。關氏は此の時、日本の保守黨ともいふべき立憲帝政黨に籍を置き、福地櫻痴を助けて東京日々新聞記者として活躍してゐた、諸君は先づ此の一事を記憶すべきであらう。

繪入第一篇(溪間の卷) 明治十七年三月刊。
同 第二篇(雪消の卷) 同 年四月刊。
同 第三篇(初音の卷) 同 年六月刊。
同 第四篇(百囀の卷) 同 年九月刊。

此の種の分册刊行は、當時の例として全部の刊行には二三年を要するのが普通であるが、三月から九月まで半歳間に

これを了したといふのは異例であり、これは、この小說に對する世人の人氣の如何に大なるものであつたかといふことを示すのである。

抑も『春鶯囀』、即ち『コニングズビイ』は何を語らうとしたものであるか、これを最も簡明に說いたものは、尾崎學堂の『經世偉勳』（十九年五月刊）に若くはない。

碩儒バッフォン氏云へるあり「才智ハ勉勵ニ存ス」と實にや微侯の如きは絕へず政治世界に馳騁して須臾も怠らざるの間にも常に文筆を拋たず或は歷史を講じ或は政理書を繙き又或は稗史小說を涉獵して己れも亦椽大の筆を揮ひ言を小說に托して齊家經國の大議論を發露せりコニングスビー（Coningsby）シビル（Sybil）タンクレッド（Tancred）の三小說は何れも侯がチーコンネル氏を罵詈しピール氏を譏謗するの餘暇を以て著はせる者にて三小說中最初に世間に出でたるをコニングスビーと爲す侯コニングスビーを著はすの目的は第一に諸政黨の起源、沿革、及び性質を說き第二に之に因て起れる國家人民の狀態を說き第三に今日の衰勢を挽回するは宗教の職任なるを說くに在りしも第一の旨趣丈け充分に記載し其他は筆を着けたるのみにて充分に記載するを得ざりしと云ふ著者の言に依る此書も亦ヴヰヴヰアングレーと同じく變名の下に縉紳貴顯を寫し出せしかば讀む者皆な書中の人物を以て朝野の名士に引當て其讀法を出版する者數名の多きに及べり新聞雜誌は概ね惡評を加へたれど其二たび佛語に譯され三たび日耳曼語に譯され阿蘭陀。伊太利。波蘭士皆な之を反譯せるを見れば尋常一樣の小說に非ざりしことを知るに足れり本邦にても近頃之を反譯せる者あり題して春鶯囀と云ふシビルは券狀黨の由來性質を說ける者にて侯は之を著はすの前博く該黨首領の言行を調査し其盛んに運動せる地方を漫遊して之に關する材料を蒐集せりされば該黨の有樣を記すること最も精細明確にして或時は券狀黨を團結せる小民の實に憐む可き情實あるを說き或る時は其腕力に依賴せるの不可なるを鳴らし又或る時は政府が之を待つの傲慢且つ刻薄なりしを責む要するにシビルはコニングスビーの續篇とも見る可き者にて侯

が之を著はすに方て懐抱せる第二の目的たる國家人民の狀態を說ける政治上の小說なりタンクレッドは又シビルの續篇とも見る可き者にて今日の衰勢を挽回するは宗教の職任なることを說て第三の目的を了せり其旨趣文章共に緻密にして新意奇想も少なからざりしかど餘り世人に喜ばれざりしと云ふ、或る人右の小說を評して曰くコニングスビイは奇峭、シビルは雄健、タンクレドは精緻と蓋し適評なり（前編第四章）

以上に依つて『コニングスビイ』卽ち『春鶯囀』の大體如何なるものかといふことは會意されやう。これを豫備知識として、吾等は、今少し詳しく『コニングスビイ』を研究してみることにする。そこで、先づ第一に語らるべきは、Young England（青年英國）なる一種の精神運動の出現でなければならぬ、それは、小說『コニングスビイ』と「青年英國」運動とは凡ての點に於て緊密なる關涉をもつてゐるからである。

二 「青年英國（ヤング・イングランド）」

ウィリヤム・フレヴェル・モニイペンニイの『ビコンズフヒールド伯ベンジャミン・ヂスレーリ傳』（The Life of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield）はヂスレーリの傳記としては權威的なものであるが、その第二卷（一九一二年、ジョン・マアレイ版）の第六章はヂスレーリと「青年英國」の關係を說くに費やされてゐる。今主としてこの章によつて「青年英國」（Young England）の起源、本質、ヂスレーリとの關係等についての歷史的研究を進めたい。だがそれにしても、一體「青年英國」とは何か、モニイペンニイの歷史的敍述に入る前に、一應大摑みにそれを說明して置いた方が、却てモニイペンニイの敍述の理解を助けはせぬか、それにはスビイア教授の『政治小說』の一節を借りるのが便利であらう。

「青年英國」運動とは、一八四〇年代に英國保守黨の青年代議士達の間に創まつた一種の保守黨更生運動で、多分に

社會主義的色彩を帶びてゐるものである。これより先き歐洲大陸には諸方に反動的自由主義運動が興起したが、その著しいものは、「青年伊太利」、「青年獨逸」である、「青年英國」の運動も此等の興起に刺戟されたことは疑ひを容れない。大陸に於ける此等の運動は、ヴイエンナ會議の結果に對し、及びその結果オーストリアの大宰相メッテルニヒの採つた專制主義政策に對しての集中反動として起つたものだ。從つて「青年伊太利」も「青年獨逸」も、自由主義そのものゝ縮圖ともいふべきものであつた。ところが、英國に於ける此の「青年英國」の運動は、反自由主義の立場から起つて來た。それは、英國に於ける自由主義の成長に對し、殊に次第に伸びゆく唯物的傾向を形成しつゝあるそれに對し、國家の本質的統一を破壞した產業的變革を現出しつゝあるそれに對して、明白に反對の態度を示した。「青年英國」は古い封建的な社會理想に復歸することを主張した、それは、さういふ理想が社會化されることを欲した。「青年英國」は藝術の復興と、精神的感情の深まりと、教會の重大な義務に對する覺醒を主張した、それは、次第に忘却されつゝあると信じた古い英國の習慣儀禮に立ち戻ることを絕叫した、而かも殆んど無政府狀態ともいふべき、次第に伸張して行く自由主義の面前に於いて、絕叫した、云々。

これで「青年英國」の如何なるものか、極大體が分つたと思ふ。

そこで今少し立ち入つて歷史的研究に入らう。

モニイペンニイの叙述は、一八四一年の議會から始まつてゐる。一八四一年の議會が英國政治史上如何なるものであるか、又ヂスレーリの生涯にとつて何ういふものであるか、その邊の事情にもモニイペンニイなりその他の權威なりを引いて說き及べば申分がないわけであるが、さう悠々としても居られぬので、こゝも「經世偉勳」で間に合すことゝし、この書の前編第三章を讀んでいたゞくと結構である。だが此の種の書物は餘り讀みたがらぬ人々が多いことであらうから、その一節を引出して置かう。

明れば千八百四十一年となりぬ一月二十六日議院を開場したるに此年も前年に變はらず世上甚だ騷がしく一揆徒黨の風説は至る所として之を聞かざるはなく劵狀黨の連りに逮捕せらるゝを見て哀憐の情を生ずる者次第に增加せり加之急進黨は穀法廢止の議を唱へて人心を煽動せるに劵狀黨は其意、穀物輸入稅を廢して麵麭の値を下落せしむるに在りと聞き麵麭を廉價ならしむるは賃銀を下落せしむる所以なりとて大に之に反對し農民は輸入稅を廢すれば內國產の穀價下落せんことを恐れて亦之に反對す急進黨は反對に激して益々穀法廢止說を主張し春より夏に掛けて穀法廢止の請願書を議院に呈すること三千九百十八通の多きに及び之に調印せる者百十四萬四千八百三十名と聞ゆ劵狀黨並に地方黨（即ち農民黨なり）の如きも頻に同志を募て穀法廢止に反對せる請願書を呈すること一千七百五十八通之に調印せる者十一萬七百二十一名に及びたれど穀法廢止を請ふ者に比すれば遠く遜色ありし此會期中に出でたる請願書は皆な穀法に關する者のみならず五月二十五日ダンコムブ氏の奉呈せる勞力社會の請願書は一百三十萬人の調印を有し云々何れも政治犯罪人の爲めに寬典を請ふの書に非るはなかりき（中略）サア、ロベルト、ピール（保守黨首領）は五月二十七日を以て信任缺乏の動議を起し執政官が下院の信任を有せざる事と信任なくして依然其職位を占るは憲法の精神に違背する事とを痛論す雄辯滔々として大河の流るゝが如く其言着々援據あつて殆と當り難く見えたれど流石にロード、ジョン、ラッセル（改進黨名士）丈けありて巧みに之を辯駁し保守改進の二名士一たび舌戰を交へて論辯五夜に涉り遂に政府の敗北と爲りたり（中略）此討論中侯（チスレーリ）も亦立て其首領ピール氏を援け政府を擊つの演說を爲せり侯は先づピール氏の政權を貪らず朝に在るも野に在るも常に國家公共の利害を以て其心と爲し毫も偏私の言行なきことを稱揚し而る後ち舌鋒を轉じて改進黨政府の徒らに政權を自黨に保持するに急にして絕へて國家人民の安危休戚を慮らざることを痛論す（中略）六月二十三日之（議會）を解散す（中略）改進黨の政權を握ること十年の久しきに及び人民既に其政治に倦めるのみならず彼の劵狀黨の如きは一は政府が穀法を廢し

て賃銀の下落せんことを恐れ一は政府が己れを待つの苛酷なりしを憤ふるの二因より相ひ率ひて保守黨を助援せり故に保守黨の氣焰頗る强く諸方の選擧地は陸續其手に落ち終に三百六十八名の代議士を出すことを得たるに改進黨の議員は二百九十二名に過ぎず其保守黨に及ばざること實に七十六名なりき（中略）ロード、メルボゥルンも今は止むなく辭表を上れるに陛下は直ちに之を聽許しサー、ロベルト、ピールを迎へて內閣組織の任を命じ給ふ（中略）此時に方り前年より引續きたる不景氣は益々甚だしくふして農工商の別なく非常の困難に陷り小民の業を失ふて餓死する者少なからざる位なれば盜賊放火の患次第に增加し人心恟々として枕を高ふせざるの機に乘じ劵狀黨の如きは諸方に集會を開て小民を煽動し翌千八百四十二年五月には三百三十一萬五千七百二名の連署を以て一の請願書を奉呈し頻に苦情を訴ふ穀物輸入税の廢止を望む者は非穀法同盟なる者を團結して不景氣の原因一に穀法に在るが如き說を唱へ其勢力日に益々强大にして殆と當り難く見えたり此時徵侯は穀法を廢すればとて決して不景氣を救ふ能はず且つ農は國の本なるが故農民の利害こそ最も政治家の注目す可き所なる由を說て非穀法論者を駁せり政府も亦種種心を苦めて不景氣救濟の策を施したれど其甲斐なく嘆嗟怨恨の聲道路に充滿して人民の不平逐日愈々甚だしかりき（下略）

此の一八四一年の議會を背景にして、「青年英國」の運動が發酵して來るのである。以下は主としてモニイペンニイに依ることゝする（『ヂスレーリ傳』第二卷第六章「青年英國」の項）。

一八四一年の議會に於いて、保守黨側に立つた一群の青年代議士がある、彼等は何れもイートンからケンブリッヂと、一緒に教育を受けて來たものであるから、學窓時代の友誼の記憶で互ひに固く結ばれてゐるのは勿論であるが、それだけではない、教會及び國家の諸問題についても若干の共通思想をもつてゐたのである。彼等の主動者ともいふべきはジョオジ・スマイス（一八一八－一八五七、後に七世ストラングフォード子爵）である、彼は、ヂスレーリの

語葉によれば、「幾多の輝やかしい天賦をもつた人物、華やかな機智、無限の敎養、魅力に富む擧止をもつた人物」であつた。彼には眞劍な目的といふものがなかつたので、遂にその友人達を失望せしめることになつたが、これも友人の一人たるロード・リットンの言を借りていふと、その生涯は全く「素晴らしい失敗」(Splendid failure) であつたといふ。此のスマイスは、『コニングズビイ』の主人公の原型であつた、だが『コニングズビイ』に描かれてゐるものよりも『エンヂミオン』に描かれてゐるもの丶方が、眞に迫つてゐるとのこと、『エンヂミオン』では、彼はウォーダァシェーア（ワルダァシェーヤ）といふ名で出てゐる。

このスマイスの選び上げた青年友僚（スマイスの華やかな才智と魅力ある人柄の魔力を感じた人々）の中で第一に上ぐべきは、ロード・ジョン・マンナアズ（ラトランド公の第二子）である、——種々な知的天賦ではスマイスに及ばないが、忠實な、純眞な、深切な天性では、殆んど天成といつてい丶人物だ。彼は『コニングズビイ』及び『タンクレッド』の中にロード・ヘンリイ・シドニーといふ名で出て來る、さうしてその他にも原性格のもつ魅力が出てゐるといふ。此の仲間で下院に入ることの出來た今一人は、アレキサンダア・ベエリイ・コクレーンである、彼は若いスコットランドの土豪で、『コニングズビイ』にはバックハーストといふ名で出て來る、「火のやうに烈しい、而かも寛大なバックハースト」といふのがそれだ。

今日からいふと、此の小グループがケンブリッヂからもつて來た思想と、後にヂスレーリの成熟した智力の影響を受けてから獲た思想との間に劃然と一線を描くことは難しい。第十九世紀の良家の青年によく見るやうに、彼等は何よりも第一にロマンチックであつた、——ロマンチシズムなるものがその有らゆる表現をつくして魂を打ち込んだ功利的な時代への反抗に對して、熱烈な同情をもつてゐた。時代の第一線に立つ大思想家、ニューマン、カーライル、その他聲々に同樣な主張を叫んでゐる人々から、今やより高尙な人間の關心事一切をなほざりにするまでに高まつて

ゐる單なる富と機械への過度の崇拜のなげく可きものなることを學んだ。政治的にはスコットのロマンチック流で生長して來たので、彼等は勿論最初から保守黨であつた、而かも彼等の保守主義にはいつでも一種ジェームズ黨的な匂ひがとれなかつた。スコット自身の場合と同じやうに、現在の王室を認めるといふことは、彼等がスチュアート王朝の傳統を大切にするといふことゝ何等矛盾するわけがなかつた。さうして彼等の政治的信條の最も重大な一箇條は、（スマイスの言でいふと）、王政は決して道具ではなく主義であり、彼等の第一の目的の一つが王座に勢力と威嚴を取り戻して上げたいといふことであつた。それで實際政治家として舞臺に飛び出すやいなや、スマイスは直にかういふ意見を主張する機會を見出して、大に劇的感銘を與へた。（下略）

此の若いケンブリッヂ卒業者達は、確乎とした本能から、特權と不活動の外に何物もない墮落した保守主義には背中を向け、少ピットとキャンニングとの輝やかしい主義や實行のうちにその靈感をもとめた。大學時代には、彼等はピールをこそ、かゝる彼等の大好きな政治家達の傳統に對する繼承者と認めたらしかつた、それでピールの勢力の着着と增大して行くのを熱心に見守つてゐた。然しピールは實際的な政略家であり、ロマンチックな性向の少しもない人物だ、だが彼の若いアドマイヤラア達の見地は、一八三四年のタムウアース宣言位で局限されてゐるものではなかつた。（タムウァース宣言といふのは、首相ピールがその選擧區民に對して、保守黨今後の改革精神を宣言した歷史的文書で、有名な選擧改正案その他の結果がこれによつて確認されたものといふ）。彼等は教會にとつて、十八世紀のエラスタス流の精神（宗教は國家に從ふべし云々）が許さうと欲したよりも、或は恐らくピール自身が讓歩しようと欲したであらうよりも更に大に自由な位地をかち得んと欲した。凡て正眞のロマンチックのさうであるやうに、彼は中産階級に對して反感をもつてゐた、然るにこの中産階級こそピールの政治的偶像であつたのだ。彼等は、その勢力が次第に生長するのを恐れ、貴族階級紳士階級に義務感念を覺醒することにより、彼等をば人民の先達にして保護者

といふ正當な位地に立戻らせることによつて、中産階級の勢力を牽制しようとした。一般人民に對しては、彼等は眞實鮮明な同情をもつてゐた。彼等は、下層階級に對して、保守黨が失つた信頼をもつて居り、さうして彼等をばその當時陷入つてゐた悲慘と奴隷生活から救上げることが出來さうなものだと信ずるだけの勇氣をもつてゐた。彼等の心は種々な思想に溢れて居たが、その思想のうちには餘りに美し過ぎて實用にならぬやうなものもあつた。だが然しその何れもが高尙な無私心なもので、凡て勞働貧民の陰鬱單調な生活に歡喜をもち回し、過去の「メリ・イングランド」の特色の一つであつた諸階級間の調和を更生せしめることを目指してゐた。かゝる思想の生みの親は、特にロード・マンナアズだとされてゐる。『コニングビイ』を讀んでも(原本第九篇第一節)、——

領内の百姓に對する無限の而かも强い同情、それがイートン時代のロード・ヘンリイ（シドニイ）の際立つた敏感さの一つであつた。まだ學生の身ながら、彼は百姓の娯　や彼等の家庭經濟の內容の調査に浮身をやつしたものだ。年をとるにつれて、彼の識見の視野は、智慧や經驗と共に擴がつた、而して……今やその出世の門口に立つに及んで、彼は、一つの廣大な高尙な目的に、即ち人民の大團體の境遇の向上といふことにその時間も思想も、努力も生涯も捧げたのである。

ヂスレーリがスマイスと知り合つたのは、議會に入る前であつた、さうしてスマイスを通して順々と他の連中とも知り會つた。彼と此の一小群の間には、最初から互ひに離れ難い力が働いてゐたらしい。ヂスレーリは今や四十の坂に近かつた、だが青春への愛著が、彼の小說によく見られるやうに、彼の顯著な特色の一つだ、さうしてそれが、年と共に寧ろ更に顯著なものになりつゝあつた。彼は、若人の熱情と狂奮に同情することが出來た、彼等の豐富な衝動を讚美し、彼等の弱點を寬假することが出來た、而かも時々老輩をして(彼等はよしやその感情に無關心であるにせよ)新時代の青年の進展を一種の若々しさをもつて見張らせるあの陰險な羨望の念の如きは、全然もたなかつた。早くも

一八四一年の開會には、スマイスと彼の友人達は、ヂスレーリの周圍に集まり始めた。ヂスレーリはこの頃夫人に與へた手紙で、かういつてゐる、「私はこの頃、自然に主として靑年の新議員から成る一黨のリイダアになつてゐる」云云。十年の間、彼はその心中の政治的眞理を、一顧もせぬ公衆や無關心な下院に說きつゞけて來た、さうしてかち得たものは、政治的冒險者といふ名に加ふるに、政治的幻想家といふ名であつた、この名は前者よりも更に致命的な損害を與へたのだ。然るに彼は今や聽衆を得た、而かも彼等の心にはよく準備が出來て居り、彼に對して喜んで耳を傾けた。(下略)

間もなくヂスレーリかスマイスかゞ、形式的結合のない純然だる友誼關係といふ以上にもつと緊密に關係しようといふ考へを抱いた。一八四二年の秋に、スマイスとコクレーンがパリにゐたが、十月の或る夜ヂスレーリと一緒に食事をした。一週間後ロンドンからスマイスが書いた手紙が、その結果を示してゐる。

余は貴君の御指示通り、ジョン・マンナアズとエチ・ペェリイに手紙を出した。前者には、吾等は席を共にして、多數黨の決するまゝに投票するのだといふこと、(職任上のことを含めて)如何なる提議があつても、當然吾等の神聖會議に通告されなければならぬといふことを語つた。あのケルト人(ペエリイ氏)には少し用心して、吾々は席を一緒にしよう、さうすると一黨派になれるかも知れないからといふ意味の提議だけして置いた。貴君は余の暗示通り、コクレーンに十分お會ひになつたか。彼を新に吾々の新計畫に同意させるには、あの晩餐後プラース・ヴァンドームを三時間步き廻らなければならなかつた。彼はすつかり當惑してゐた、――貴君が彼に對してよりも余に多く語葉を向けたといふので、怒つても、嫉んでもゐた。彼は、貴君が彼を理解しないのだといつてゐる云々(意譯)。

ヂスレーリの直接の考へは何うかといふと、今の內閣は九十名程多數を制してゐるが、その九十名の中には四十乃至五十名を算する農業者階級の不平議員がある、だから今こゝで靑春と氣力にみちた、而かも議席に忠實な保守主義の

一分派が出來たら、首相の語調に不可抗的の制御を加へることが出來るに違ひない。總體的に彼の對內政策には同情するが、對外政策の性質を規定しよう、殊にサァ・ロバァト・ピールの腹の底には彼等自身のそれと響應してゐる確信があるから、明にそれが出來る。彼によれば「さういふ一黨派は容易に見出され得る、事實最も高邁な識見に動かされつゝも彼の議會陰謀の如きには何等關與しない英國青年の一團は、目下たゞその首動者(リーダァ)を待ちつゝあるのみ」といふ。これはヂスレーリがパリでフランス王に捧げた秘密メモランダム中に明記されてある（モニイペニンニイ第二卷に此のメモが附錄されてゐる）といふが、然しこれは大分樂觀に過ぎるものたるは、いふまでもない。如何にヂスレーリが、『タイムズ』の持主ジョン・ウォルタアを友人として居り、必要な時には彼からの援助を期待し得たにしても、同志數十名を糾合して一黨派を樹てるといふ事は、さう簡單にはいかない。

事實のところ、數の多少は兎もあれ、スマイスがマンナアズに暗示したやうに正式に誓約した、いつも投票を共にするといふ如き黨派は、遂に形成されたやうには思はれない、だが一八四三年の議會開期の際、スマイス、マンナアズ、コクレーン等一味の小群が、明白に一團として認められるに成功し、下院では「青年英國」（Young England）といふ名で呼ばれるに至つた。此の名稱がケンブリッヂ時代からの繼承であるか、又はヂスレーリの演說に見えてゐるやうに（一八四四年十一月十一日ビングリーに於ける演說）、初めは嘲笑的に與へられ、やがて此の一團によつて積極的に採用されたものであるか何うか、甚だ明確ではない。スマイズは一度、例の機智滿々と口輕にかう放言したものだ、曰く自分達の今計畫してゐる新黨は、「ヂスレーリ黨」と呼ばれるのが至當だと。スマイスは最初から惡戲氣分をもつてゐたらしい、——惡戲のみとはいへぬ、眞面目な目的もあつたに違ひないが、一抹の惡戲好きな心が出てゐる、且つ彼が時の政府に對する敵意から何等かの計畫を試みたとしても、それが具體的にヂスレーリによつて奬勵されたといふ證據が全くない。此の三人の友達が啓蒙せる保守黨のリイダアとしてピールに對して抱いてゐた熱意は、

議會に入つて後長く殘つてゐなかつた、首相の嫌厭すべき擧動、討論に於ける重大めかした平凡さ、機會主義者的政策などを每日經驗するにつれて、ずんずん減じて行つた。コクレーンが殘した手記によると、彼等はまだ反對陣地を形成してゐるとは考へられてゐなかつたので、「青年英國」黨の代議士達は、通路の下ではなく、大臣席の直ぐ背後に陣取つてゐたといふ。ヂスレーリの議席も、矢張りこゝであつた。彼は、此の三人が各々自力で多少の識認をかち得るまでは表面は超然と構へてゐたが、事實は最初からこの運動の先達であることが明白であつた。

保守主義の天才に對する信賴、保守黨を歷史的傳統に還元させることによつてその勢力を回復させ得るといふことについての確信、民本的基礎に依る保守黨の改造、上層階級の勢力の維持と强化を欲する心、それを欲すると同時にひたむきに民衆を信賴し、彼等の福祉に純眞なる關心をもつこと、就中改進黨に對する嫌惡、改進主義の次第に浸入されつゝある中產階級的自由主義への嫌惡、——かういふものを、ヂスレーリと彼の若い友人達は共有してゐる。ケンブリッヂから出たての少年達の漠然たる思想や抱負に形なり定義なりを與へたのは、勿論成人(をとな)（ヂスレーリ）の仕事であつた、だが、彼が彼等に敎へたところが多かつたとせば、彼等が彼に敎へたところも幾干かあつた。ヂスレーリが青年だつたころには、ロマンチシズムがバイロンの拓いて行つた革命の道の方に流れてゐた、ところが、それが今は反動の道の方に强く流れてゐるのである。十九世紀も早く千八百三十年代にオクスフォードから起つた（その爲めにオクスフォード運動といはれる）あの記憶すべき運動、あれは政治上宗敎上自由主義の優勢に對する反抗運動であつたが、間もなくその姉妹大學たるケンブリッヂにも傳染したのであつた。此の運動に最も早くから働いた人々の一人にフレデリック・フェバアがゐる、彼は時々ケンブリッヂの友人を訪問したが、この友人達の中にはスマイスやマンナアズのやうな學生もゐた（此のフェバアはヂスレーリの小說『シビル』の中でオーブレー・セン・リスとして出てゐる）。このフェバアが、彼等にオクスフォード運動の感化を與へたのである。この運動は勿論宗敎的なものが中

心であるが、スマイスやマンナアズはこれに接してその政治理想に十七世紀風の色彩を帶びさせるに至つた。彼等は此の思想に接する前に、その政治的研究を前代までのばし、ピットとキャンニングに理想的保守政治家を發見してゐた、一方ヂスレーリは更に深入りして、ボリングブロークの時代と著書からインスピレーションを引出した、だが今度は此等の若いケンブリッヂ連中は大膽にも、改進黨の神聖視してゐる名譽革命（一六八八年）の彼方にまで踏み込んで、チャールズ一世の治世に保守主義の源泉を求めたわけだ。教會の點に關しては、オクスフォード運動は、エラスタス的觀想の束縛から彼等を完全に解放することが出來た、王權の點に關しては、それは、彼等のセンチメンタルな神權論を合理的な政治論に、眞面目な政治理想にと變形させることが出來た、さうして彼等を通じて、ヂスレーリの心にもそれが同樣な效果を生じた。ヂスレーリは、宗教の點では彼等の意見に全幅の同情はしなかつたにせよ、王權に關しては、彼等の教訓にふくまれる新しいものを迅速に消化したのである。

ヂスレーリは前に『英國憲法辯』(The Vindication of the English Constitution) を公にしたところは、この「名譽革命」といふものを健全な必要なものだと認めた、さうしてその後、當時優勢だつた改進黨的理論とは截然反對して、自分自身のプランの上に英國の政治史を再建しようと試みてみた。ところが、『シビル』になると、新しい見地が見える、單に「革命」だけでない、「宗教改革」でさへが殆んど何の尊敬をこめて取扱はれてゐないことに氣がつくであらう。此の變化は何うもスマイスやマンナアズ等の影響に歸すべきものが多い。(中略)今や彼は、民主的制度としての王權の種々な可能性を、十二分に稱讚し始めた、嫉妬深い中產階級の侵掠からこれを守るのが焦眉の急務だと考へ始め、さうしてその特權を永久に回復することを夢想し始めたのだ。フェバア及び「青年英國」を通じて、オクスフォード運動が、一時代後にヴィクトリア女王及びその氣に入りの大宰相の政策を構成するに與つたと信じても、決して空想ではない。

「寡頭政治を變じて眞の玉座をめぐる自由な貴族政治に戻すこと、國民の陶冶者として、教會に生命と精氣を注ぎこむこと、……ロード・ボリングブロークがウトレヒトでの談判に成功したあの原則によつて商業道德を確立すること、愛蘭土の統治にオリヴァ・クロムウルの政策ではなくチャールズ一世のそれを以つてすること、一八三二年の選擧區民を宗派的束縛と狹少な同情から解放させること、勞働が繁榮と同時に統制を必要とするといふ事を確言することによつて人民の物質的及び精神的狀態を向上させること、その向上にも、抽象的思想に基いた政治革命によつてよりも寧ろ古い形式の使用と過去の回復によつてそれを成就すること、」——これこそ、手際よく反省的鳥瞰圖にまとめられて居るが、ヂスレーリや「青年英國」の考へた如く、保守黨の眼前に擴げられた仕事なのである。彼等の保守的理想の觀念は、『コニングズビイ』、及び『シビル』に更に詳しく描破されてゐる、然し只今のところ、以上でも彼等の政治的目的の十分な撮要として役立つであらう。……(中略)

これからいよいよヂスレーリが「青年英國」と共に議會で奮闘することになるのであり、モニイペンニイの傳にはその奮鬪の跡が一々仔細に叙述されてゐるが、吾等はさう詳細に說き及んでゐる譯には行かぬので、眞の數言に簡約することにする。一八四三年春の議會では、愛蘭土問題が議案の中心となつだが、「青年英國」は愛蘭土に同情し、首相ピールの政策に反對した、ヂスレーリは彼等を助けた。而かも絕對多數を擁するピールの態度はあくまで傲慢挑戰的で、益々彼等の反感を深めたので、彼等は愛蘭土問題から引いて內閣の改造、社會の更生まで絕叫するに至つた。夏の議會では、ヂスレーリは東方問題でピールと衝突し、大演說をして痛烈にピール的保守黨政策を攻擊した。こゝに於いてピール一派とヂスレーリ及び「青年英國」一派との正面衝突は避け難いものとなつた。それと共にヂスレーリ及び「青年英國」黨の名は政界興味の中心となり、議會に於ける「青年英國」の重味も漸次加はつて來た。一八四四年、『コニングズビイ』出現の際には、「青年英國」が最も勢力をもち、社會の各方面から最も興味の眼を向けられ

てゐたのである」こゝでモニイペンニイを引用しよう。

「かゝる演說に力を得て、「青年英國」はこの開會期間に着々とその勢力を增大した。事實、それは依然として、共通な一團の思想をもつた個人的友人の一群といふその本來の特徵を留めてゐて、形式に組織されて明確な主義をかざした一黨派にならうとは敢へてしなかつた。『生活が多く一緒だつたので、別に組織がなくとも一緒に行動したのだ』とは、遙かに後年になつてヂスレーリ自身が述懷したところである。ロンドンでは、グローヴナア・ゲートの家（ヂスレーリの家）が彼等の集合所であつた。田舍では、彼等はデーブデンで會つた。此の家の持主のヘンリイ・ホープは、自身は最早議席についてはゐなかつたものゝ、最初からして此の運動の熱心な支持者であつた、時々は又ウォルクア家の田舍別莊のビイアウッドでも會つた、此の人の同情も確實なものであり、それと共に『タイムス』紙の好意ある關心（支持とまではいへずとも）も保證されてゐたのである。下院に於いては、この運動は幾人かの新しい味方を獲得した、かゝる味方は、本來の友人團體に加入しさへした。かゝる人々のうちには、警句の名人であり、院內の兩黨に人氣のあるアウガスタス・スタッフォード・オーブライエンがゐた、「ダントン式風貌」の持主たるヨークシヤの土豪ウィリヤム・バスフヒールド・フェランドもゐた、フェランドは、製造家流の罪惡と、彼等の被傭者達の苦難とを大聲疾呼するので有名であつた（その題目についての知識は聽衆を當惑させるところがあつたにせよ）。モンクトン・ミルンズは、何處か不安げにこの一團の周圍に羽ばたきしてゐた（身を委するのを躊躇してゐたのだ）。院外では、ホープとフェバァの外に、アムブローズ・ライル・フヒリップを味方に加へた、フヒリップは有名なローマカトリック教信者で、『コニングズビイ』の中のユーステース・ライルの原型なのである。スマイス、その他の連中の社交的人氣は、社會全體にとつて、「青年英國」を多少の興味あるものにした。『コニングズビイ』（第八編第一章）の中にある二人の伊達者紳士の對話が、社會がこの運動に對して何の程度の理解をもつて取沙汰をしてゐたかといふことを立派に

描いてゐると思ふ。（關氏譯第五十七回、抄略）

「バックハーストは（メルトン氏の話）公爵家の若公ヘンリイ・シドニーやコニングズビイ青年と結盟といふのだ、新種の若人といふかね、新思想だとか何とか彼とかいふのだよ……イースタ祭にイヴェリンガム家に滯在してゐたときに、盛に話し合つてゐたよ。コニングズビイは丁度旅行から歸つたばかりのところで、連中もすつかり緊張してゐた。レディ・イヴェリンガムも仲間の一人なんだ。何が何だか、僕にははつきりとは分からんがね、然し今にもつと聞かされることにならうよ。」

「君のいふ通りなら、何かかう動物電氣か、お呪ひの文句めいたものらしいね、」相手がいふ。

「さうさ、僕には何が何だか分からないのだ、」メルトンはいふ、「でも、丁度孵化（かへつ）たばかりの若い連中にや、そいつが皆にとつついてゐるらしいね……僕は自分でも餘程よく聞いてみようか知らんと思つたんだ、何しろイヴェリンガムでは、皆が大變な鼻息で騷いでゐたからね、でもこいつには、歷史だとか何とかゞ澤山要るのらしいぜ。」

「へえ！　そいつは堪らん、」相手はいふ、「新しいものに調子を合せるのは、慣れてをらんとむづかしいものさ。僕には謎は苦手だよ。」オルムズビイ氏が通りすがりに立ち止つた。

「今メルトン君から新思想の話をきいてゐるんだがね、今に世界中の人が皆信ずるやうにならうといふやつなんだ、」カシリス氏はいふ、「レディ・イヴェリンガムが贔屓にしてゐるんだ……コニングズビイ青年が外國からもつて歸つたんだつてね、ねえ君、ジミイ。」

「いや、君、違ふよ、そんなのぢやないよ。」

「でも歷史が澤山必要なんだつていふぢやないか。」カシリス氏はつゞける。ゴールドスミス（こゝでは通俗な歷史書といふ意）の埃（ほこり）でもはたかなくちやならんね。學校時代にや、カンタァトンがいつも歷史の優等だつたなア。あいつにはいつも閉

ロしたものさ、ウィリアム・ゼ・コンカラアだとか、ジュリアス・シイザーだとかをもち出してね。」だが、「青年英國」に對する興味を目ざましたのは、『コニングズビイ』の主人公（スマイス）の社交的成功よりも、それの著者（ヂスレーリ）の如何程華々しい演說よりも、小說『コニングズビイ』そのものゝ力が多かつたのである。」

モニイペンニイの傳は、こゝでいよいよ『コニングズビイ』の研究になる。

正直にいふと、「青年英國」の研究は、『コニングズビイ』即ち『春鶯囀』を十分理解する爲めの準備工作に過ぎず、從つて當面の必要からせば以上のやうに詳細なものは必要がなかつたのであるが、事柄そのものに非常な興味があるので、つひそれに惹かれてかくの如く深入りした次第である、だが、私は、讀者が「青年英國」に關して此の程度の知識をもたされたとて決して無駄をしたとは信じない、この知識は『春鶯囀』の味讀には勿論必須であるが、そればかりでない、『春鶯囀』の出た當時の時代を照すにこの知識をもつてせば、讀者の眼光に自ら映ずる何物かゞあるべく、そこに自ら「青年英國」に似た「青年日本」即ちヤング・ジャパンなるものゝ空氣が漂よつてゐることが分かるであらう。

そこで此の「ヤング・ジャパン」なるものについてゞあるが、私は前著『明治初期の飜譯文學』の中でヂスレーリの小說の飜譯について一言した際に、眞の注意書きの程度でかういつて居つた、「よくヂスレーリのヤング・イングランド運動と、新興日本即ちヤング・ジャパンなるものと類似視されるが、然し前者は一種の反ブル運動であり、後者はブル中心運動であることをよく考へて見なくてはならぬ」（一四一頁）。ところがこれが說明の言葉の不足で誤解を招いて木村毅君から「早漏的見解」と指摘されたりしたが、この機會に、私の考へてゐるところを辯明して置かう。

私は「ヤング・ジャパン」と「ヤング・イングランド」の對比を否認するのではない、その何れもが、各自の時代にとつて進歩的意義をもつてゐた點が相似てゐるといふことは、いふまでもない。だが、時勢、動機、背景その他を比

較して此の二つが本質を同じくしてゐるものであるとは斷じ得ないのである。「ヤング・イングランド」運動が、貴族の自覺による保守精神の更生を基調とした反ブルヂョア運動であり、貴族の自覺の一現象として民衆の安寧を顧慮したものであることは、以上の叙述によつて首肯されよう。いはゞ「ヤング・イングランド」運動は、老衰者のホルモン注射によつて壯年者の跋扈を抑へようといふのであり、上からと下からと合力してブルヂョアを挾擊することを精神としたものである。何れにしてもその反ブルヂョア的なものであるには、疑ひがない。これは所謂ブルヂョア政治全盛の當時としては、當然革新的、進歩的な意義をもつものである（その何れ程かは別として）。然るにヤング・ジャパン運動の方は、本質上ブルヂョア政治、ブルヂョア社會實現の爲めの運動であることに論があるまい。これ又、封建的藩閥的空氣の強く殘つてゐる當時としては、革新的進步的な意義をもつこと、固よりである。此の點でヤング・ジャパン運動の本質はブルヂョア運動たらざるを得ない。こゝに於いて私のいふ如く、二者は甚だ相似たところがあるが、本質を異にするものだといふ斷案が生れて來る。

然らば、ヂスレーリの傳記なり、小說なりが何故に時代に相當歡迎されたか、それが次に私の說明しなくてはならぬ問題であらう、だがその說明にこゝで取り掛るのはまだ早い、それは、以下ヂスレーリ小說の紹介について若干說明する際に於いて當然論及されるべき問題であると思ふので、後段に讓ることにする。讓ることにするが、たゞ一事だけ擧げて置かう、それは、以上にいふヤング・ジャパン運動とは別樣の意味でヂスレーリの運動に近い本質をもつた「青年日本」といふ如き空氣があつたことである。普通にいふヤング・ジャパンはこれを廣義にいへば、ブルヂョアジイ發展を中心にした新興日本の躍進、これを局限していへば、郵便報知、時事新報等を宣傳機關とした社會改良運動、善い意味でのブルヂョア化促進運動であるが、私の指摘するのは少し違ふ、私の指摘するのは、第一に尾崎學堂の新日本運動である、これが同じ改進黨的坩堝の中から出ながら、可成り異色をもつてゐて、所謂ヤング・ジャパ

ンよりもヂスレーリの主張に幾分近い、この運動のことは後章尾崎氏に關する條に詳述しよう。私が今一つ指摘したいのは、東京日々、明治日報に集まつた青年學徒の一團である。明治十五六年頃の東京大學卒業生が改進黨のシンパサイザアとなり鷗渡會を組織したのは有名な事實で、誰も知つてゐるが、當時此の一派と反對に、敢然として保守漸進、國粹尊重の立前から筆戰に從事した青年學徒の一群があることは餘り知られてゐない。此の青年學徒の中には、『春鶯囀』の譯者關直彥、穗積八束、渡邊安積、三崎龜之助、平沼淑郞、三宅雄二郞等々を數へることが出來やう。此等の人々の主張が餘り知られぬのは、纏つた運動なり一貫した主義なりに形成されてゐないからであり、それといふのも、そこにはヂスレーリの如き智謀ある黑幕が彼等の戰線を統一しなかつたからである。これが一轉して機を得ると、「日本人」及び政敎社同人の運動となつたのだと考へられて可からう。此の考へは又、遂に「日本人」同人の運動の本質（國粹的立場からの政治改革主張といふ）を說明してゐるやうに思ふ。

三　『コニングズビイ』について

次に原本『コニングズビイ』に基づいて、梗概その他を語ることにしよう。モニイペンニイを利用してゞあることは、勿論である。

『コニングズビイ』は一八四三年の秋、一友ヘンリイ・ホープの暗示で起稿されたものだといふ。出版は一八四四年五月である。その題目は『コニングズビイ、一名新時代の人々』（Coningsby, or The New Generation）といふのだ。これはヂスレーリの小說中最も人氣のある作物の一つであるが、その人氣は、當時の政治家社交家を生きたまゝ生捕つて活寫したのが第一、第二には當時可成り騷がれてゐた「青年英國」のマニフェストと見られたからであつた。

此の小説の本筋のストーリは大したものではない、たゞ政治と歴史を結びつければ、――乃至社交生活、政治生活の種々な場面を紹介するため、且つこの小説の、大舞臺を横切つて行く社交的政治的種々な人物の長行列を紹介するための口實として役立てば、役目が果されたことになつてゐる。表面上の主人公となつてゐるハリイ・コニングズビイは（これはヂスレーリの政友ジョオジ・スマイズをモデルにしたもの）、モンマス侯の嫡孫で而かも孤兒である。このストーリが始まるのは一八三二年、コニングズビイ十四歳の時であるが、この時コニングズビイは始めてイートン校からロンドンに招かれて、モンマス侯と初めて面會することになる。侯は一八三一年の選擧改革の喧騷を他所にイタリイに遊んでゐたが、翌年春改革案の運命が危急に瀕したので、これを阻止する勢力に手を借すため歸國したのである。モンマス侯は、莫大な富の持主であり、大きな勢力をもつ政治家であり、稀に見る明智と、不屈不撓の意思と、強い我意と、放縦な習慣の持主でもあるといふことになつてゐるが、これは當時有名な放蕩政治家三世ハァトフォード侯をモデルにしたものといふ。第一章で吾等はモンマス侯の政治顧問で大に侯の信用を博してゐる前代議士ニコラス・リグビイに會ふ。リグビイの人物は、怜悧で策に富むが、やゝ下品な淺薄な寄生者（パラジイト）形氣の人物である。「此人の長所と云ふは剛膽にして物事に綿密なり高尚の思想に乏しけれども能く諸事を記憶し想像力に富みたる上にも又辯舌に秀でたり（中略）此リグビー其年の未だわかゝりし頃或は演説を爲し或は小册子を著し又は新聞に書を寄せ抔し居るが其諧謔諷刺の文に長じたりとの世評を得て遂に一小官を博したり、されども尚も己を知りて用ふる人の出來よかしと頻りに勉勵したりしに計らずもモンマス侯の知遇になりぬ」（第一編第二回）。（これはハァトフォード侯と同樣な關係になつたジョン・ウィルソン・クローカアといふ人物を使つたものといふ）。

老侯の外遊中、このリグビイがコニングズビイを監督してゐたのである。ところが、今迄コニングズビイには冷淡な態度を示してゐた老侯が、一度彼に會ふと、その孫の魅力に引きつけられる、と同時に、これならば自分の志を繼

いで大きな事業をするに違ひないといふ見込みをもち始める。第一編に見るところのコニングズビイのイートン生活の描寫はあくまで事實を主としたものといふ。こゝでコニングズビイは一團の少年の中心となつてゐるが、これは矢張りヂスレーリの親友はロード・ヘンリー・シドニイと、サァ・チャールズ・バックハアストとなつてゐるが、これは矢張りヂスレーリの政友ロード・ジョン・マンナアズ、及びアレキサンダア・ベェリイ・コクレーンをモデルとしたものである。それから第三のオスワルド・ミルバンク、これは或る製造工場主の子であるが、これのモデルは世評の如くヂスレーリの後年の政敵グラッドストーンではなくて、當時の言論界に絶大の勢力をもつてゐた『タイムズ』新聞の持主の後取たるジョン・ウォルタアのことであるといふ。コニングズビイは、政治に對する興味が目ざめ始めたときに、ミルバンクを通して始めて、自分と彼との關係は、保守貴族等と自由貴族等の世襲的な鬪爭とは違つたものだといふことを悟る。彼は初めて、世には貴族とは全然別な一大階級が存在して居り、これが貴族に對抗して權力を握らうとしてゐることに氣がついた。だがコニングズビイは、ミルバンクが父親から受賣的にもつて來た粗雜な意見（革命思想）のうちに、十分考慮に値するものがあるのを見る。

この間に一八三四年の内閣更迭騷ぎや、それにつれての政商オームズビイの活躍、政界寄生蟲タッドポール、テーパアの情報交換などいろいろ面白いことがある、これはこのまゝ直譯したら、當時の讀者にも可成り受けたかも知れないが、寧ろ二十二年以後の人々には大に受けたことであつたらう。政治小說といふ立前からせば、こゝを譯さなくてはならぬものであるのに、譯者闕氏はかういふところを一切煩瑣だとして省略してゐるのは惜しい。

サア・ロバアト・ピールの短期内閣にも諸政黨間の劇的な鬪爭がつゞくが、その反映として、保守主義を支持する全イートンの熱心といふものは、最高潮に達した。だがその熱が引くと、コニングズビイや彼の友人達は、一體保守主義とは何を意味してゐるのかといふことを問題にし始める。それに對する最後の答は、コニングズビイが後にケン

ブリッヂで數年の思索勉學を經た後に、漸く彼の心に形成されることになるのであるが、然しもうイートンを去る前前から、彼は、政治乃至宗教に於ける人間感情の現狀が、健全といふよりは遙に遠いといふこと、現在勢力のある大まかな放縱な信念に代るに、何かしらもつと深い、熱心な、明確なものをもつてしなくてはならぬのではないかといふこと、新信仰の使徒は當然新時代の青年に求められなければならぬといふことを、漠然とながら熱心に考へるまでになつてゐた。丁度彼の心理狀態がかうなつてゐたころ、彼はイートンを去つてケンブリッヂに落ちつく間に、一寸した冒險に出會ふ。さうしてその冒險によつて大に利益を得る。友人のヘンリ・シドニイがその生家たるボーマノア侯爵邸にゐたので、彼を訪ねようとして出かけた道すがら、コニングズビイは、或る田舍宿屋で一人の異人に會ふ。「その言神託の如く、隻言に人生の大事を盛る」といふやうな、「吾々をしていつまでも考へさせる」やうな言葉を吐くことの出來る、あゝいふ異人の一人だ。その森林の描寫（そこにはヂスレーリの自然に對する同情、彼の大好きな姿をした自然に對する同情が息づいてゐる）は、旅人をこの宿屋に避難させるあらし、それにつゞく對話のそれなどと倶つて、恐らくこの小說で最も上出來の一章となつてゐる。

そも此貴人は如何なる人にや年尙壯なれども雄辯快舌應答に禮あり節あり、又如何なる事柄にも暗きことなく如何なる學科にも博く渡れるに似たり事の蘊奧を叩くも能く答へ物の理非を判するに惑ふこと無し話の序に人物を評するに歐洲諸國の帝王を初として凡そ有名の政事家記者作者好事家に至るまで皆交際を爲さゞるは無き樣にて其性質長短を云ふに多くは誤らず又其持論も適切にして確として動すべからざるもの有ればコニングスビーも心の裡に大に感じ世に豪傑の士とは斯る人をや云ふならんと思ひたり此人能く辯ずるも冗事は喋々する性にはあらず又一人して談話を專らにせず屢々コニングスビーにも問を掛け其議論所感を答ふる時は謹みて此を聽く蓋し少者を輕蔑せさる禮節の振舞とぞ見えにける（第一編第十三回）

異人はコニングズビイに敎へていふやう、個人の性格の神聖なる感化力を信ぜよ、經驗を要せずして青年時代に大業を成す創造的心力を信ぜよ云々。彼の言によれば、殆んど凡ての偉大なる事業は、古來青年によつて成されてゐる。實に、凡そ人生には、たゞ一個の規言がある、「青年は過誤の時なり、成年は競爭の時なり、老年は後悔の時なり」である。だが、青春そのものは天才でないにせよ、天才は、その青春の時に於いて神に近い力をもつ。見よ、古今共に最も偉大な將軍がイタリイを征服したのは二十五の時ではないか、ガストン・ド・フォアがラヴェンナの勝者となり、ロクロアの勝者コンデーは共に二十二に過ぎない、法王インノセント三世、レオ十世は共に三十七で法王となつた、イグナチウス・ロヨラもジョン・ウェスレイも、共に青春の腦髓を使つて大業を成した、フランス人中の最大偉人パスカル、ラファエル、バイロンは何れも三十七で死んだ、リシュリューは三十一で國務大臣となつた、ピットとボリングブロークは、他の人間ならクリケットに夢中になつてゐる年輩で總理大臣となつたではないか。實際、英雄の歷史は青年の歷史である、英雄たらんとするの道は、英雄的言行を信ずるにある云々。さうしてコニングズビイが、その場合には、異人その人の行爲が英雄的でなければならぬと述べると、かういふ答へが來る、「さういふ行爲は自分の能くするところでない、但し信の一事に至りては、未だ彼の耶蘇の徒弟達にも讓らずといふ自信がある」云々。

ボーマノアでは、上流社會の生活の最上なものが十分に描き出されてゐる——都雅、優美、洗練、威嚴、安舒、慈悲、それに、社會的乃至公共的義務に對する强盛な觀念、さういふものが十分に描かれてゐる。こゝで吾等は、此の家の二令孃と知り合ふ、一人はレデイ・テレザ・シドニイ、今一人は（結婚してはゐるが）レデイ・イヴェリンガム、それである。その後者は、ヂスレーリの小說によく出るところの魅力に富んだ社交女性の一人であり、——楚々漂渺とした、あくまで女性的な、それでゐて機智も、才氣も、躾けもあり、何處となく甘美な嘲弄めく鋒鋩をさへ示

す時がある。

元來此の夫人（エベリンガム夫人）は有名の美人と稱する程にはあらねども稟質(うまれつき)愛敬ありて容貌又た艶麗(あでやか)なり其擧止(ふるまい)に禮儀ありて又能く談話の術に長じたり凡そ談話は我より談柄を開きて其對手の話を導き又能く彼方の話を聞くを最要とす、されば夫人は能く此要を解し居らるれば一たび夫人と語るものは皆之を喜ばざるなし（第一編第十五回）

コニングスビーはボーマノアに滯在中、シドニイの友人ユーステース・ライルの邸のあるセント・ジェネヴィーヴを訪れた。ライルは若い富裕なロマンカトリックの信者で、邸内に美しい禮拜堂があり、そこが又貧民救濟所になつてゐる。（ボーマノアでも何處でも、此の頃貧民救濟のことが大に問題になつてゐる）。此の禮拜堂がコニングスビイのロマンチックな本能を動かして大に彼の心を引きつける、その上、それが政治的見方からせば、最も甚しく改進主義に對抗せるものとして意義をもつ。ユーステースの父は宗教的自由を欲する餘り、改進黨に與して遂に政治的に孤立する苦杯を嘗めたが、ユーステース自身は、英國に改進主義の貴族政治を出現せしめたのが、法王教政の衰滅によるといふことを忘れたことがない。だがそれでは、改進貴族黨に代るものはと見廻すと、保守主義と稱する無益不幸な雜種的黨派より外は何一つない、これは「世上の議論囂々として變更を望むにあらねば決して現存の事を變更するに同意せず、望まれて後ち讓るを以て規則とする」政黨である、「此の黨派の古來現存の制度を保存するは我輩が森林に雉を保護する如く全く之を他日に殺さんが爲めなり」である。吾等が特に語られてゐるところによると、ライルは、コニングズビイの成熟する心に最も多く影響を與へる三人物の一人だとなつてゐる（ライルのモデルはアムブローズ・ライル・フヒリップ、ヤング・イングランドの一味である）。

コニングズビイは、例の宿屋で異人に會つたときに、廢墟の時代（廢墟で見物して滿足してゐる時代）は過ぎ去つ

たと語られ、マンチェスタアを見物したことがあるかと聞かれる、その上、「冒險は冒險好きの人に來る」ことを諳られる。そこで彼は、ボーマノアから、祖父の待つてゐるコニングズビイ城へと向ふ途中、マンチェスタアに立ち寄る。さうしてそこで數日を費して工業と機械の驚異の世界を心ゆくばかり見物する。就中、彼は學友オスワルド・ミルバンクの父ミルバンク氏の模範工場を訪問する、さうしてミルバンク氏及びオスワルドの美しい妹エヂスと知り合ふ。ミルバンク氏は、特別な理由があつてモンマス侯が大嫌ひである、且つ貴族全體についても獨特な見解をもつてゐて、それを呆氣にとられてゐるコニングズビイに滔々と浴せかける。彼が指摘するには、英國の貴族階級は他の階級と竣別を要求するやうな特別な資質を何一つもつてゐない、それは、ミルバンク自身の屬してゐる階級に比して、より富裕でもなく、より物識りでもなく、より怜悧でもなく、より多く公私の德を示してゐもしない。それは、「生れ」といふことをさへ、殊榮の理由としてもち出すことが出來ない、ミルバンクは古い家系をもつてゐる貴族のことなど一人として聞いたことがないといふ。紅白薇薔戰爭がノルマン・バロン達を一片づけに片づけてしまつた、だから現存する英國貴族の主要な源流は（而かもミルバンクによれば不名譽な源流だが）、敎會の掠奪、スチュアート朝の連中の公然たる賣爵行爲、現在の都邑賣買、この三つにある。云々。かういふところを讀むと、ヂスレーリに對して、今に彼がその政治的リイダアにならうとしてゐる階級（貴族）に阿諛してゐるなどといふ批難は浴せられはせぬ。

さて吾等はコニングズビイ城へ進む、そこでも吾等は貴族生活の一面を示されるが、そこではヂスレーリが彼の最も有效な諷刺を若干弄する餘裕を示してゐる、――靈魂の拔けた、非人情的な壯大さ、これ見よがしの贅澤、乃至躁宴、混亂の連續で、「田舍生活のスイートなる類ひは」全然無い。彼はこゝで、彼の心の中に釀酵しつゝある思想の食糧を夥しく見出す、さうしてその釀酵が、彼のいつかの森の宿屋の異人と再會したことによつて一層刺戟される、彼は異人がシドニヤといふ名で知られてゐることを聞く。シドニヤは無限の富をもつたユダヤ人であるが、年輩は靑

壯期の頂上といふべく、運動家らしい姿體をしてゐる（だが病氣のために何んな運動も試みたことがない）、物柔かで優雅であるが、擧措こそ表裏なげに振舞へ、一皮下は測り知ることが出來ない、而かも稀有な表白の才をもち、且つ長い間の冥想で熟し、「國家もたぬ人」が代償的に所有し得る絶對的な偏見解脱で助けられてゐる智力によつて、彼は如何に困難なる問題をも、いはゞ直觀によつてかの如く、根底の根底まで見透すことが出來る。

シドニヤは學問に經驗に凡そ人間智識の淵源を極め各國の學問に通じ東西古今各方の國語と文學とをも明らめ理學の闡明は之を實驗に試み東西諸國貴賤貧富の社會に住して其狀態を熟知し人工と天力の結合して事物の產生する所以をも究め人間開化の種々の度を觀て叉曠原山野に住する野蠻人の情態をも見、凡そ世界諸國に於て宗派法律風俗慣習口碑遺傳等の其社會に種々の勢力を有する所以をも實見したり（第二編第二十七回）。

シドニヤはその來歷によつてヂスレーリ自ら任じてゐるところが大分見える。實にシドニヤは純粹智者の一典型であるが、彼には、惜しいかな、一大欠點がある。彼は、「感情」のない人である、――勿論全然無情といふのではない、深刻な情緒を感ずることも出來、偉大な、而かも人目たゝぬ慈悲の行爲をすることも出來るからだ。だが、一個人が彼の心を動かしたものがない、女性は彼にとつて玩弄物であり、男性は機械である。

凡そ人の身に取りて最大の至寶と云ふべきは相識の友を得て樂を共にし憂を共にし相補翼し相誘導するにあつて朋友の間の此眞情は富貴名聲も之を爭ふ能はざるものなるが惜むべし我完全のシドニヤには天此性を與へざりき（第二編第二十七回）

此の小說に於けるシドニヤの職分は、コニングズビイを敎育するにある、コニングズビイは又コニングズビイとして新時代の青年を敎育するのを職分としてゐる。彼はコニングズビイに對して、英國の將來を、法律乃至制度よりも更に力强いものゝうちに――ナショナル・キャラクタア（關氏は國體と記す）に求めよと敎へる。彼の敎ふるところに

よれば、現在の人々が不當に重大視する政治制度の眼に見える變化よりも、諸經濟的敵意とかその他の如きナショナル・キャラクタアの衰退の兆候の方が、英國の將來に對する脅威であるといふ。一國の構成要素が如何にして再び混一されるに至るべきか。それは政治權力の新傾向(改善的)によつては得られない、乃至世間の通論として主張されてゐるが如き經濟的原因に力點を置くことによつても得られない、か丶る經濟上の原因の如きは、その作用上第二原因たるべく、決して第一原因たるものではない。ナポレオン戰の「平和」以來、英國には、純然たる理論的基礎によつて社會を改造せんとする企てがあつた、唯物的動機の基礎、功利主義によつて改造せんとする企てがあつた。だがそれは失敗した、又失敗するのが當然であつた、蓋し人間は理性によつて支配されず、想像によつて支配されてゐるものだからである。

シドニヤ「見られよ、凡そ古より人間の偉業と進歩の標示とも爲すべき人生の大事業と云ふもの一として理論（ライスン）(理性)の助に成りたるものなし彼の上古トロイ府を圍みし大戰爭は理論に據れる歟、彼のサラセン人種をして沙漠の故鄕を出でて世界萬國を擊ち靡けしめしも亦理論に基せし歟彼の十字軍を煽起せし事と云ひ宗派を別ちゼシュイト派を生じたるが如き諸事を見るも一も理論に根ざせし事なし殊には彼の佛國大革命の大亂の如き生起の根元に溯りて此を見れば理論の力は毫末だも與からざるなり凡そ人怒氣に激せられて事を成す時其猛勇近づくべからず想像に訴へて事を爲す時勢ひ亦實に當り難したとひモルモン宗派の如きものと雖も事あるに當りてはベンザムよりも尙多くの熱心家を其味方に計ふる事を得べし理論の效用なき斯の如きなり」コニングズビイ「さらば想像に依りて一たび社會を破壞したれば又想像を以つて社會を救濟する事を得べき歟」シドニヤ「人に尊信服從の性あり然れども若し之に命令を與ふるものなく又之に信向すべきものを與へざる時は彼自ら宗派を立て(神佛を作り)、又自ら己が情の欲する所に從ふて其主長を見出すべし」コニングズビイ「然れども斯くも英國の如く宗派の多く細別したる所

にては如何にして我々は誠實（信仰）と云ふ物を見出すべきや誰か又又國君（ダウニング街の）に對して尊王の忠誠を感ずべきや」　シドニャ「余は人間性質の久遠永劫の理を述るなり、君が答は目下の事跡なり彼の數種の宗派と雖も興るものあれば又亡ぶるものあり（第五王國の人々何處にありや）英國今はダウニング街の統轄する處となりたれども然れども亦一時はアルフレッド大王及びエリザベス女王の親ら統御し給ひし所にあらずや（第二編第三十回、コニングズビイとシドニヤの問答）

次の章（三十一回）も有名なものであるが、こゝでシドニヤは、そのユダヤ民族の天賦と才藝を說き、彼等の解放を主張する。彼は政治上にはセンチメンタリストではない、單なる不寛裕といふことに對しては、それが權力の一要素であるとせば、彼はそれに對して少しも反對するものではない、だがかゝる勢力ある一階級をして自分自身その下に生活してゐる制度に反抗することを自身の利益だと考へさせるのは、毫も政略の宜きを得たものではないと考へる。ユダヤ人は、民族としては、勤王的感情を有し、宗敎信向の念深く、本質的には保守派である、然かも彼等の現在の政治的無資格が、彼等を驅つて平等主義者や自由主義者達に伍せしめる、而かも時代を經る每に、彼等は益々勢力を得て來、彼等の敵意を挑發する社會にとつては益々危險なものとなつて來るに違ひない。この邊は、ヂスレーリ自らのため辯ずるのであるが、勿論十分眞理でもある。

吾等はコニングズビイ城からケンブリッヂに移る、こゝでコニングズビイは又もイートン時代の友人に取り卷かれてゐる。彼の初學年の末に、ウイリアム四世の崩御につゞく總選擧がやつて來た。ケンブリッヂ選擧區では古いイートン出身者が保守黨候補者になつたが、彼等は何れも保守黨側に援助して大勝利を博した。いよ〳〵候補者當選の日に彼等はコニングズビイの室に落合つて彼等の勝利を語り合ふ。

（前略）バックハーストは己が盡力の效空からざりしにぞ意氣揚々として入り來り椅子に倚り掛りて「君達は聞かれ

しか我事誠に都合宜かりし此度は非常の勝利にして保守主義の未だ曾て得ざりし勝利なり併し（微笑ながら）若し人ありて余が斯くも盡力せし保守主義とは如何の主義なりやと問ふものあれば僕は何とか之に答へん未だ其辭を知らざるなり」コニングズビイ「否其主義とは我々が尊榮なる制度を永世に維持するの主義なり、其制度たる、君主は其特權を奪はれ、寺院は委員の支配を受け、貴族も進んで天下の模範となる能はぬ有樣なり」ヘンリー・シドニイ「此制度の爲めには我國の大本とも云ふべき農民の一階級は既に地面より追ひ拂はれ之に繼ぐに賤種の勞役者を以てせしめられたり」コニングズビイは語をつゞけて「此の制度の下に於ては王冠は模樣となり、教會は一分派となり、貴族は遊食階級になり、人民は奴隷と化したり」ロード・ヴェーア「此の保守主義と云ふものは反對黨の爲す事をば常に何事をも拒絶しながら又烈しき抵抗騷擾に遇ふ時は何事をも許容せり、故に議院中に在ては保守にして戶外に在りては破壞主義と云ふも可なり如何にとなれば不法の抵抗を爲す時は何時にても其望む處の改革を許すが故に間接に於ては破壞主義なり」コニングズビイ「それは同一の主義を宣言することなしに同一の誓約せる目的のために活動せる最初の公共團體なり」ロード・ヘンリ「その上、全國に亙つて政治的不信實を確固と存在せしめたる連中にもあり」バックハースト「嗚呼扨も〱此一週日の間は馬鹿〱しき事に貴重の時日を費したり！」コニングズビイは微笑しつゝ「いな、これきりにて二度と中學生徒めく弱點を見せまじ。如何なる場合なりとも、フロリヤット、イートナ（イートン萬歳）」ロードヴェーア「コニングズビイ君、僕は彼のハムプデンが戰場に骨を暴らしシドニイが刑場の鬼となりし共遵奉せし壯快の主義に代へて、彼の卑怯なる保守主義を取る能はざるなり」コニングズビイ「彼のハムプデン、シドニイ等が身命を擲ちし處の主義は、ヴェニス流の共和主義なり」。バックハースト「そは又如何にや」コニングズビイ「余は之を再演すべし彼のハムプデンが騷動を煽起せし時より以來一千六百八十八年に至るまでに英國改進黨の首領の重なる目的は、ヴェニスの貴族的共和制度を模して我國に行はんとせしに在り、凡

そ思慮ある凡ての政治家の研究と讚美は……」ロード・ヴェーア「さらば改進黨も今は既に衰滅に屬し保守激進共に不正なる歟」（第三編第三十四回）

コニングズビイは休暇を得て、パリにゐる老侯を訪問する、こゝでヂスレーリは、前に度々仄めかしてゐるパリ交際社會の場景を吾等に紹介する。パリで、コニングズビイはオスワルドの妹エヂス・ミルバンクと再會し、戀に落ちる、エヂスは今や美しい少女に生長してゐる。彼の愛はエヂスから酬はれはするが、モンマス侯とミルバンク氏の間の不和が邪魔になる。而かも此の不和が最近は特に深い、といふのは、ミルバンクが、傲慢なるモンマス侯の多年の野心を挫いて、コニングズビイ城に手近のナボスの葡萄園を我が手に入れたり、侯の手先のリグビイと選擧の競爭をして打ち負かしたりしたからである。戀人同志は將來を誓ふ、だがミルバンクはコニングビイを近寄せまいとかゝる、そこには悲しい破戀の思ひ出も伴ふので、昔、コニングビイの母が若い頃、コニングズビイの父とミルバンクは此の女性の愛を爭つたのであつた。だがやがて、いかなる出來事が進行中とも何とも知らぬモンマス侯は、來るべき總選擧の支度のために、コニングズビイを呼びよせて、ミルバンクの相手として候補に立つやう諭す。舊時代人たる老侯と新時代人たるコニングズビイとが各々の立場から意見を述べ合ふ場面は、恐らく此の小說でも一番の見せ場の一つであらう。

コニングズビイは躊躇しながら非常に困却の體にて「小子（やつがれ）の爲め御心切の仰言誠に辱けなし、されば折角の仰を否み奉るは誠に以て畏けれども實は小子は今日に當りて議院に入るの望とては候はねば何卒此儀は御免し下されたし侯「何とナ、」コニングズビイ「其故は下院の議席を占むる如き左樣の重大なる責任に對しては小子未だ充分の用意も候らはず故に小子の如きものゝ其席を穢さんことを恐懼致し候へばなり」、侯は微笑ながら「ナニ責任とや何の責任のあるものか……（中略）……汝（そなた）が爲すべき勤と云へば汝が同黨派と共に投票する事の一つのみ……（後略）」

コニングズビイ「仰には議院に入るも何事もなし只汝が黨派と共に投票せよと宣ひしが其黨派とは定めし保守黨の事ならん左樣に候歟」侯「勿論我々が朋友輩の事よ。」 コニングズビイ（やゝ顏色を蒼白にしても、しつかりせる態度にて）「誠に悲しき儀には候へども小子は如何にも保守黨を維持せん事は仕り兼ね候」

聞くより侯は大に激して椅子を離れ聲を張り上げ、――侯「如何に、定めし何處かの小女郎（めろ）に迷はされて汝も終に改進黨と變心せしよな」。 コニングズビイ「否や祖父（ちゞ）君決して左樣の儀には候はず小子程改進黨嫌ひの者は候はず」。侯「シテ汝が料見は如何も乃公とは合點行かぬワ」。 コニングズビイ「小生が意義は外ならず此迄篤と保守黨の爲す所を察するに彼黨は信用に背きたるの黨と云はざるべからず……」。 侯「定めし汝は彼の保守黨が愛蘭政治會社を拋棄せし事を言ふならんが余も其事に就きては汝と同論なれども、そは既に過ぎ去りたる事にして過去を慨くも何の益あらん然れども今は我黨の首領にピールあり當時の時勢に適當の士なり不滿足でも我々は左云はざるべからず又左樣に信ぜざるべからず尤も我々貴族が權力を失ひたる事は我々が過失にて決して汝が高祖父侯の時代には夢にも思はれざる事なるべし勿論當時に在りても平民より宰相を擧げて政治には任ぜしものゝ、そは必竟些細の事務を執らしめし迄にして當時常に千六百八十八人の貴族の秘密大委員會と云ふものあり實際の政權は皆其手に握り何事も皆當時の宰相に與へしなり」。 コニングズビイ「小子は其千六百八十八人の貴族秘密委員會とやらんを再び見ん事を恐るゝなり」。侯「然らば汝は如何なる鬼神を見んと欲する歟」。 コニングズビイ「小子が見んと存ずる處は政治上の不信向に非ずして政治上の節操と云ものを望み候なり」。 侯「エヘン！」 コニングズビイ「又小子が保守主義を維持賛成するの前に於て彼の主義は、そも如何なる事を保守せんと欲するやを承りたしと存ずるなり……（後略）」。 侯「そは誠に高尚の論なり併し余は能く余が所望を達せんにはピール（保守黨首領）に荷擔せずしては他に道なきを知るなり、扨又凡ての政黨と凡ての政治その目的は如何なるものなるやを考へ見よ唯に自己の欲する所の

目的を達せんが爲めに外ならざるべし余が宿望は侯爵の冠を變じて公爵にせんと欲するにあり且つ又今一つの目的は汝が祖母（即ち侯の前夫人）の男爵領は後嗣なくして絶え居れば之を汝に繼がせんと思ふにあり此事ピールは決して余に否み得じ……（中略）……然りハーリーよ行々汝が人にも尊重せられ又汝が成效を得る事を見もし聞もせば其時の余が喜悦は如何ならん今余が欲する所は汝が議院に入りて代議士たるを見んと欲するに在るのみ凡そ人は議院に入らんには成る丈け早きが好し年長けて議院に入る時は如何に才能ありと雖も何うも朴野なる所あるを免かれず而して今や幸にも汝が身に投りたる好機會あり汝は此金曜日には必ずダールフォルドに至り能く貴人達を饗應し席上の演舌には勉めてピールの事を頌賛しヲコンネル（急進愛蘭黨）及び今の女官典侍の輩を誹謗せよ凡て織工匠輩を排撃せよ、又愛蘭の事に就ても數言を述ぶべし愛蘭登記法案を固執せよ、之が汝を人々に紹介する最良の名刺の如き效あらんシテ又我親愛のハーリーよ其演舌の節には何事を差措ても必らず彼のミルバンクと云へる奴を斟酌なく排撃せよ彼奴をさへ壓倒せば啻に汝が選擧せらるゝ保守黨の爲に巨大の勢力を増し加ふるに我々が爵位をも得らるべきの利益あるのみならず第一我讐敵を撲滅するの大愉快あり彼奴を壓倒する爲には金錢は云ふに及ばず何事も惜むな余は汝が效を奏せんことを期して待つぞや」コニングズビイは甚だ迷惑の面色にて「祖父君小子は何事に限らず御利害に關はりたる事柄に附きては後れを取らんことを悲めり」侯心切の調にて「余は屹と汝が功を建てんことを保するなり……（中略）」コニングズビイ「唯小子が意見の曲ぐべからざるものあるが爲め何卒此度の候補者は御免を蒙らん事をのみ願ひ奉るなり」侯又烈しき聲にて「否や／＼汝が言ふ所は余には解し得られず……（中略）……政治家と云へるものは何も哲學者か理論家の樣に六ケ敷き理論も何も入るものではなし汝は唯汝が一家と共に進路を共にさへすれば好きものぞ」コニンググビイ熱心に「仰には候へども凡そ人々が此國を維持すべき政治の本主義を放擲して只其一家の利益とのみ進路を共に致せし故に皆自ら禍を招きて彼の改革按の如き大變革を生じ候ひぬ……（中略）

……「侯「何に改革按とや彼は必竟ウェリントン公(保守)がグレイ卿(改進)とが〔石炭委員のことにての〕爭論より斯様の結果を發生せしめたるにて左もなくば彼の變も起らずグレイも愛蘭に行きてしまひしならん……」 コニングズビイ「併し今日祖父君を初め我貴族一般の危難は彼の千八百三十年と同一の危難の地位に立ち給へり」 侯「否々保守黨は今は嚴然組織せられ保守黨の諸社は能く其職を盡して勢力を恢復したれば我黨の安全なること疑もなし。」

コニングズビイ「併し此保守黨は何の爲めに組織せられしや最上が改進黨を壓倒する事に候べし、たとひ改進黨を壓倒して彼等を政府より追ひ退け得るとも其後は如何候はん成る程祖父君には公爵を得給ふべし……(中略)……祖父君今日吾等の望とする所は新たに公に封ぜられ舊き男爵家を〔磨き立てる〕事には候はず我大英國の國家を安全にし人民の幸福を得せしめんが爲めに一大政治の主義を充てんとする事に候なり祖父君よ希くは御心に皇權の再び尊敬を得信向の再び我人民生活の常習となり財産と勢力とをして兩立せしめ人々が其本分の義務を盡さん事をのみ願はせ給へ若し此結果を得る目的あらんには小子は及ばずながら其主義に荷擔して飽までも忠誠を盡し申すべし此時に當りては政治の進路も實に高尚の進路にして議院の議席も實に羨むべきの榮譽に候はん」。 侯甚だ不機嫌の氣色にて「ハーリーよ此の一家の親屬は何なりと思ひ〳〵の考へを抱くを得べし然れども其行狀は皆余が好み通りに爲さざるべからず……(中略)いとも苦々しき面色にてコニングスビイの顔を見遣り給ひ尙も詞を續けて「汝は彼の子供らしき想像上の思想に溺れて凡そ生活の凡ての目的を犧牲として失ひ終る様の思想なき人の如くならず必ず思慮深き成人の如く余が言に從ふに相違あるまじ」。

コニングズビイは然しエヂスの父と選擧を爭はぬといふ決心を抂げない。幾ばくもなく、モンマス侯は急に死ぬ、侯の莫大もない遺産は、侯とフランス女優某との間に出來た私生兒でロニングズビイが親類といふことも知らずに親切にしてやつてゐた少女の手に殘される。侯の遺産相續權を失つたコニングズビイをシドニヤは慰める、シドニヤの富

に對する態度は、現實の百萬長者なら容易に出來さうもない輕侮的なものであるが、而かもこれは豪華壯大好きな贅澤癖あるヂスレーリにとつては更に容易なものであつた。シドニヤの說に曰ふ、單なる所有といふことは幸福に於ける最小分子の一つである、又曰ふ、コニングズビイの相續權喪失は好運なる不幸といふに過ぎぬ、眞の禍殃ではないと。コニングズビィは今や自由の身である、即ち――こゝでヂスレーリは衷心から語つてゐると想像して可いが――若し彼にして負債あることなしとせば眞に自由の身である云々。彼の撰び得る進路は二つある。一は外交官たることである、だが「外交官はいはゞ幽靈である」。「外交官は政治上のユダヤ人の如く、國もなく、政見もなく、大衆的確信もなく、彼の自由偉大なる國家に於ける優越せる市民の生涯に行き亙つてゐる强い生存實在感がない」。そこで、そこには今一つ、更に高尙尊榮の進路がある、それは即ち法律家である、コニングズビイは大璽官を目指すことに決心する。

だがシドニヤの氣を引立てるやうな影響から離れて、寂然、自分の室にとぢ閉つてゐると、コニングズビイは前途の計について絕望に陷入る、然し一夜「世界に一二を爭ふ（ロンドンの）大街」を散步するうち、一身の不幸を忘れて、心の平靜を取り戾す。

此有樣の盛大なるを見てコニングズビイは區々たる一身の不幸を忘れ曩にシドニヤが示せし如く物は凡ての關係より之を見るべしと云ひけるは此なりけり今僅かに遺產を失ひたればとて何程の事かはある只此世に尊きは人の實價にて富みと云ふも賴むに足らず血統と云ふも亦今の開化の世には無用なり世の進むに連れて腦髓は血よりも尊しとか聞きぬ人の今の世に大豪傑と云はるゝは富にもあらず又系統にもあらずかし只智識と才能の如何にありけりと悟りつゝ「嗚呼此都會の盛大なるに依り能く我不幸を打消したり扨ても我才能は必ず此都會の盛大をも壓倒せんぞやと獨り語ち夫よりは斷然失望の念を絕ち、たとひ今より如何なる辛苦艱難に遭遇すればとて我天然の才能を磨き得

有の智識を使用して再び不幸の讐敵に勝ち成效の凱歌を謳ふことを得るに至るまでは一心不亂に苦行すべしと決心し其夜は快く眠りけり（第四編第六十六回）

恐らくは著名ヂスレーリも、その生涯の不遇時代には、かういふことを考へて獨り自身を慰めたことが幾度となくあつたことゝ思ふ。だが勿論彼は、自分のヒローに單に堅忍な生活をさせるだけで滿足するものではない。一八四一年の總選擧には、彼の友達等が皆代議士候補となり、又彼の自身の生涯からいつても、一時期を劃さうといふものであるのに、肝心のコニングズビイは、あらゆる活動の機會から遮斷されて、ミドルテムプルの一法學生として寂しく殘る。だが突然彼の前途が變る、今迄激しく彼を打ちのめしてゐた運命は、好意の雨を降らし始める。ミルバンクは、今迄自分の誤解してゐた事情が次第に好く分かつて來ると、自分がリグビイを相手に爭つてゐた選擧運動から身を引いて、コニングズビイを候補者に指定する、コニングズビイは勿論堂々と當選する。その上彼は、コニングズビイと自分の娘エヂスの結婚を許し、二人に十分な財産を用意してやる。而かも間もなくモンマス侯家の莫大な遺産を相續した病身な不幸な少女が死ぬ、その全財産をコニングズビイに遺す（彼の女は心密にコニングズビイを愛してゐたのである）。かくていかにもヂスレーリがよくやるやうに、運命の好意をあくまで荷つたコニングズビイは、その政友達と共にいよいよ政治生活に入るところで、この小説は終つてゐる。

扨も今爰に集りたる親友諸子は共に同窓の學友にして之より將さに政治の本舞臺に登らんとす其信義は既に篤く共主義は既に良し然りと雖も此數人が未來の運命は如何なるべき歟彼の強盛の大集會（議院）に臨で能く其學窓の下に蓄積したる眞理を維持し得らるべき歟或は又彼人々が勇氣も無識の徒の嘲弄に逢ひて挫かるべき歟其寛大仁愛の思想も卑劣の慾望心に逢ひて失ふべき歟其才能智識も不正の黨派の器具となり果つべき歟虚榮の爲めに其富資を奪はれ嫉妬の爲めに其深切を奪はれざるべき歟或は又獨立獨行眞理を踏で撓まず倦まず能く其責任の大なる事を知り其

國家の幸福を回復して能く其身の英名を後世に傳ふるに至るべき歟そは此の六雄（コニングズビイ、オスワルド、バックハースト、シドニー、ヴェーア、ライル）が志操を守ると守らざるとの如何にあり（第四編大團圓）

『コニングズビイ』の作は、一の藝術的作品とも、「青年英國（ヤング・イングランド）」の宣言とも、何れとも見なし得る。勿論ヂスレーリがこの作を書いたのは、必らずしも「青年英國」の宣言者たらしめる意圖からのみではなかつたらう、勿論「政治小說」なる一の藝術的作品を造るつもりで書いたのであらう、だが、藝術的作品として見てさへ、此の小說の構想には「青年英國」が位地を占めてゐる、而かも大に重要な位地を占めてゐることは事實である。「單なる嘲戲者を純眞なる諷刺家たらしめるには、或る種の眞面目な信條が必要である（たとひ如何程茫漠模糊としたものであるにもせよ）」とは、サァ・レズリイ・スティヴンの名言である、さうして「青年英國」が丁度さういふ信條を提供してゐるのである。ヂスレーリは『コニングズビイ』に於いて、あの「三十年代（サアティズ）」（一八三〇年時代）といはれる時代の壯大な世界を、例の彼の豪華偉麗を好む感情をあくまで傾けて吾等に描寫して見せた、その上、當時の政界の大小星を、十二分の洞察と同情と理解とをもつて一連に描破して見せたのである。彼はかゝる描寫の際、政治的活動に於いて見られる卑劣な、笑ふべきタイプの凡てを再現して見せた、テーパア乃至はタッドポールの連中、「年額千二百磅級」の連中、ダールフォード自由黨に自己紹介をする代議士候補者達、卽ち「法定の費用だけを出さうといふドナルド・マクファーソン・マクファレーン氏」彼は直ぐさま片付けられた、ジャアミン街のジンジャリイ・ブラウン氏、彼は男爵の弟息子で、當選確實ならば一千磅まではいからといふ人物、釀造家のジャギンス氏は二千磅組であるが、每年定額の寄附には同意しようとはしない、サァ・バプチスト・プラシドは、費用の點は明言しないが、『その點に關しては何の困難もあり得ない』と絕えず言明してゐる、だが彼は、競馬に寄附することを道德的見地から反對した、而

かもこれがダールフォードには重大なことであつた、ロード・フィップブウビイ、ジャウスタア・シャープ、さては下つてブリイ(暴れの)ブラックスやマゴッグ(お化け)のラッス等々自由保守兩黨の壯士リイダア格にまで及んでゐる。此等の凡てを、ヂスレーリは、如何にも大家らしい烱眼と、極めて冷靜な超然とした態度で寫し、あらゆる非行、あらゆる汚行を目にしてもたじろがない。だが彼とて、その資質に缺點があり、例の豪華癖が往々浮誇虛飾に誘惑しがちである如く、彼の超然的態度も時としては輕薄に流れ、時としては皮肉に傾きさへする。とはいへ、彼は單なる皮肉家でなかつた、それで彼の描破する畫面の全體的效果は決して浮誇なものではなく、堂々人を壓するものであり、從つてそれは輕薄でも皮肉でもなく、眞劍な、多大の感興を與へるものではある。政治に於ける醜陋な分子、それも少しも逃避されてゐない、だがこの醜陋分子が決して寫眞的寫實主義者の精神で取扱はれてゐはしない、その上そこには、いつも「青年英國」のロマンチックな理想があつて、信念の安息所となり、光明の中心となり、彼の描寫全體に調和と雄拔を與へてゐる。種々缺點や不滿の點はあるが、「新時代」の青年の高大な熱意が一切を補正して餘りある。

「青年英國」の信條にして、若しもつと茫漠とせぬものであり、もつと朦朧とせぬものであつたなら、又この小說の目的にして、あくまで露骨な乃至狹い政黨的意味での政治的といふのであつたなら、その結果は藝術といふ見地からして失敗であつたに違ひない。だが「青年英國」は一の黨派といはんよりも寧ろ浮動せる精神といふべく、乃至は精々でヂスレーリの青春時代の夢、一切の朋黨的目的乃至局限を超越して眞實に國民的國家的な政黨への夢想(あらゆる「時代」の若い頃には度々さういふ夢想に襲はれるものであるが)、さういふものゝ復現といふべきである。シドニヤがコニングズビイに滔々と注入する叡智は、全然政治的なものではない、いな、これを政治といふべくは、それは政黨を超越し、國家を超越し、種族以外の一切から超越してゐる點で、天上界の政治であらう。此の開朗たる叡智

に對して、コニングズビイとその友達は、彼等自身の智慧を附け加へる、さうして吾等はその彼等自身の智慧のうちには二つの相異なる分子を見分けることが出來る。その一はいはゞ少年らしいセンチメンタリズムであり、單なる儀式めくもの、メイポールや教會建築への嗜好であり、これに對しては、恐らくヂスレーリはさう眞劍に打ち込んでゐなかつたらしく思はれる。今一つは、純然たるヂスレーリである、彼の『英國憲法辯』や彼の演說やに於いて既に知られてゐる如きヂスレーリである、保守急進の分子を等分に混合した彼獨得の政治的信念をもち、常套的な政黨區分には比較的に無頓着な彼ヂスレーリである。だからして、「青年英國」の政治論があくまで濶大な偏頗のないものとなり、この小說をして純然たる黨派的宣傳分子たる疑問を帶びしめないのは可い。作者は、その中心的見地から、公正無私の心をもつて全局面を見はらし、適當な鑑別を加へて進退を指揮してゐる。當時「ポンチ」誌は、幼いハァキュリイズがその双方の手に各々改進、保守といふ双生蛇の首を一つづゝ握り絞めてゐる圖を出し、それがヂスレーリであることを諷した、事實又、彼の諷刺の鞭には、改進保守兩黨ともに惱まされたものである。

一般的にいつて、政治的分子が、あまり目立たぬやうに極めて手際よくストーリの本文に織り込まれてゐる、だが時々、例へばコニングズビイが何か語り出すやうな場合、脫線してお說教じみたものになるところもある。さういふときに、讀者は、ヂスレーリの枝話が長くなればなる程不消化物の砂まみれの殘滓らしい感じを受ける。ヂスレーリにもユーモアの感覺がなくはないが、彼の十八番の思想が問題になつて來ると、妙に威嚴をつくろひ勝ちになる、だが彼にはかういふ缺點を補ふに足る不思議な氣分轉換法がある。自分自身を馬鹿なものに見えさせる恐れを自覺してゐないときには、彼はいつでも自分に向けられた笑ひを豫想することが出來る。上に引いたモンマス侯とコニングズビイとの對話にこれが見えるし、又サア・ジョセフ・ウォリンジャアが新時代の人々の意見に呆れるといふあの天眞爛漫振りにも、さては「ヴェニス風の制度を批難して數十人の人々を驚かし此の未知の危險に少なからぬ脅威を感じし

めた」バクハーストの演說に對する言及の中にもそれが見える。

作中の主要な性格についていへば、コニングズビイその人は全部成功とはいへない。彼は殆んど生きて動いてゐる人物とはいへない、それに時々は生意氣なうるさい人間らしい氣味も見える。原物のスマイスは決してさういふ人物ではなかつたのに、コニングズビイをスマイスを似せようとする努力が殆んどなされてゐない。サァ・レズリイ・ステイヴンの言によると、デスレーリの初期の小說の主人公は創造的であり、後期の小說の主人公は單に受動的になりがちであるといふ。『コニングズビイ』にその變化が見えて來る、といふのは、表面上の主人公は眞の主人公ではなくなつてゐるからだ。コニングズビイはシドニヤから智慧を借りる、この小說の智的活動全體からいつて眞實中心人物といふべきは、コニングズビイではなしに、シドニヤである。シドニヤはロスチャイルド家の或る一人から暗示を得たものといふ、さうして兩者の間に於ける幾多の相似點は、餘りに明白であり、到底偶然の一致だなどゝいふことを許さぬ。シドニヤはいはゞ理想的ロスチャイルドである、莫大もない富だけでなく、洞徹した、一切を包容する智的眼光をも賦與されたロスチャイルドである。シドニヤは事實上神に等しい、恐らく及ぶ限りヂスレーリの宗教の神體に近からしめられたものであらう。勿論シドニヤには、ヂスレーリそのものが澤山に入つてゐる。シドニヤはセファーディ（スペイン乃至ポルトガル方面のユダヤ人）種族の出であり、アラゴンの「ヌエヴォス・クリスチアノス」（新基督教徒）の子孫であり、この點でロスチャイルドとは違ひ、ヂスレーリに似てゐる。且つ又、シドニヤが「凡てのものを觀察はしたが、敢て激論することは避けた」といふこと、さうして若し「强ひて意見を問はるゝ時は、嘲謔に逃避した」といふこと、リグビイから何か長々と話しかけられた後で、「彼はたゞ一寸お辭儀をして、『多分はね』といつたまゝ、隣の人方に向いて、ランカシヤには鳥が澤山ゐたか何うかと尋ねた」といふことなどを聞かされると、吾等は、これは何うも作者

自身の例の癖の本寫しだと認めざるを得ない。

ヘンリイ・シドニイとバックハーストは、コニングズビイよりは遙かに眞實であり、原物に近い。モンマス侯の性格は、構想も描寫も見事な出來である、さうして原物よりも乃至サッカレイが同じモデルから描いたといふスタイン卿よりも遙かに面白い又魅力ある人物に成つてゐる。無情で、放縱で、無遠慮千萬な人間ではあるが、シュラ（古ローマの將軍、壓世政治家）流の貴族のタイプとして、一種の莊大なところがある、傲慢だが、威嚴があり、我儘振りが堂々として居り、而かもあくまで自信力が強く、運不運によつてその剛岸な態度を二つにしない。たゞリグビイだけは、何うもヂスレーリも感情に動かされて書き過ぎた加減があり、先は出來損ひといつて可い。（リグビイの原物たるクローカアとヂスレーリとは或る理由で仲が好くなかつたのである）。

女性側についていふと、エヂス・ミルバンクも餘り立派な出來とはいへない。レデイ・テレザ・シドニイは全く面白くない、妹のレデイ・イヴェリンガムが恐らく女性としてはこの小説第一等の出來榮えであらう。別なタイプだが、ガイ・フラウンシイ夫人も矢張り結構な出來といひ得る。

彼の女のもつて來た衣裳函は、その雜多の點、工夫の點、流行の點で、決して人にひけを取らぬものであつた……最初のうちは、綺羅を飾つた貴婦人方は一人として彼の女に目をつけはしなかつた、いや目をつけたところが、精精で肩越しに目を見張るぐらゐであつた、何處へ行つても、聲を殺してから囁やくのが聞かれた、「あれは何方？」晩餐後、女性達はいつも慇懃に幾組かの團欒をつくつた、その何れからもガイ・フラウンシイ夫人はいつも除かれた……最初の五六日は、實際可成り困難なものがあつた……だがガイ・フラウンシイ夫人は自分を信じてゐた、自分の才敏、いつでも間にあふ才藝、多年習練した魅惑力、さういふものを信じてゐた。さうして、それは當然だつた。彼の女は紳士方の着城以來、いつでも味方が得られることを確信してゐた、……何ういふ風の吹き廻しか、一

週間も經つと、ガイ・フラウンシイ夫人が何もかもの中心のやうに見えた、いつでも一群の最屓家達に取圍まれてゐた、彼の女と一緒なら馬にも乘らう、舞踏もしよう、芝居もしよう、さては足下に跽づけなら跽づきもしようといふ「一流の殿方」と呼ばれる連中が、いつも彼の女の周にゐた。綺羅を飾つた貴婦人方は、自分の方から打ちとけることが絕對的に必要になつた、彼女達は、晚餐後には彼女にいろいろな質問をかけ始めた。ガイ・フラウンシイはたゞ開幕だけが必要だつたのだ。彼女は、上手なお世辭つかひだ、喜怒を色に出さずに、一寸した恩を施してやるといふ無限の精力をもつてゐた。彼女は、女性方に、新しい流行の型を借してやつた、流行のあらゆる神祕にかけては、彼女程通じてゐるものは少ない。かうして、溫和しやかな口車やら、陽氣なおしやべりやらで、まつたく「舌にはお砂糖、尾にはお鹽」、彼女は見事に彼女達凡てを捕虜にするに成功した。(原本第四篇第八から抄譯す、關氏の譯には此の一段がない)。

ヂスレーリは、女性を描くとき、入念な大幅ものを描くときよりも、一寸したスケッチを描く方が愉快らしい。プリンセス・ルクレシア(ルクレシア小女公)の性格描寫も始めは可い、「彼女は、ふだん自分のものいふ人々に對して、あなた方には前にお會ひしたことがないし、今もお會ひしたいとは思はないし、又これからも二度とお會ひしたいことはないのだといふ印象を與へることが出來た、而かもそれもひどく禮儀正しく出來たのだ、」だがルクレシヤの性格が、十分生長してくれると、メロドラマになつてしまふ(シドニヤに對する態度でさうと察しられる)。

これより原作の文體のことに及ぶのであるが、原文を引かず、又他の諸作と比較して示さずに原文の文體を論じても無意義であり、本書の目的はそこまで立ち入ることを許さぬのであるから今は略して置かう。

又この小說の原作の成功についても、詳細はモニイペンニイの傳記に讓つて、こゝには說かぬことにする。たゞ相當な成功をかち得たといふことだけ記憶されたい。

四　譯者『春鶯囀』について

譯者關直彥氏には、自傳『七十七年の回顧』(昭和八年十月刊)がある、氏はその中で「政治小說春鶯囀」と題し、次の如き追懷を試みてゐる、

明治大正に亙りて我國奎運の隆昌なる歷代其比を見ず。然れども余が社會に初めて出でたる明治十五六年の頃、舊文明より新文明に移り代る過渡の時代なりし爲舊文學は廢れて新文學未だ起らず、漢文は片假名交りの文體と變りて世の便を達し、稗史小說の如き、幕末學者の排斥する所となり、下町文學として賤められたれども小說には京傳と云ひ、馬琴と云ひ、劇作には武田出雲、近松門左衞門の如き、劇作には京傳の如き一九の如き、日本文學として は實に名文なるも世人其妙を味ふを知らず、舊幕時代には學者多しと雖も其文は韓、柳、歐、蘇の壘を摩するもの に出でず、之に反して脚本小說に至りて、ゲーテ、セクスピヤにも劣らぬものであり、リットン、サッカレーにも 比肩すべきもの亦些なからず、宜しく之を獎勵して益々其向上發達を計らねばならぬとは余が學生時代よりの理想 なりき。仍つて小說又は劇作を賤まぬ氣風を養成し、以て後の文豪作家を誘ひ出す呼出奴とならんには先づ西洋に ては如何なる偉い人が之を書き、如何に之を尊重するかと云ふ實例を示すが一番の早道なり。仍て彼か是かと物色 する中、ふと見當りしは曾て英國首相として有名な伯林條約を結び、一世に英名を轟かしたるビーコンスフヰール ド伯ヂスレーリの作に、コニングズビーと題する政治小說なり、作も好し作者も好し成程西洋にはこんな偉い人が 小說を書くからには小說と云ふものは、文學上非常に尊いものなるべしと、世人は思ふならん。斯くして小說が尊 重せらるゝことゝならば我が國の學者、文人も亦競つて書くものも輩出せん、先づ請ふ隗より始めよと思ひ立ち、 余は之を飜譯して出版す。名附けて春鶯囀といふ(筋書略)此稿は塚原澁柹園翁の校閲を經、挿繪は其妹塚原女史

の筆に成る。今から見れば、文と云ひ印刷と云ひ頗る幼稚の拙作なりしが、大分世人に讀まれたり。

この追懐記事によれば、關氏は單にこの小說の紹介者といふ以外に、小說改良論者として明治初期文學運動史上に相當な位置を要求する立場にあるらしい。勿論私はこれを全般的に否定するものではない、恐らくさういふ氣持も、當時大學を出たばかりの學士で、新文壇の覇權を目ざしてゐた春のや朧の友人の一人に數へられた關氏としては首肯されるものがある。然し私は此の追懐記事の多分は、後に考へついたもので、此の小說を紹介した當時の意識とは可成り違つてゐることを、指摘しなければならぬ。明治十七年三月の日附ある『春鶯囀』の自序に曰く――

時に來る二十三年國會開設の聖詔降り政黨四方に起る板垣氏は自由黨を組織し大隈氏改進黨に總理たり時論概ね急激に流れ粗暴に走り又漸進着實の論を唱へて其衡を當るものなし時に福地君（櫻痴）慨然として正議を唱へ漸進着實の士と共に立憲帝政黨を組織す余も亦其末議に與れり之より諸黨諸新聞の攻擊一に我日々新聞に集る福地君泰然として動かず余も亦筆鋒を執て異論邪說の排擊を助く當時世人政黨の意を解せず誹謗軋轢之れ事として將さに治安に害あらんとす余政黨論議を著はして政黨の本義を明にし其作用の當否を論じ日夜憩はずして終に病を得たり醫師余に勸むるに湯浴を以てし又律書政典を繙くを許さず此に於て余只前の政治小說コニングズビーを携へて函嶺に赴く浴間偶々之を披きて讀む其意匠微妙にして快樂極りなく手卷を置く能はず喫飯沐浴尙ほ煩を覺ゆ況んや當時の勢諸黨樹立の際に當り余が身を政治社會に委ねたれば此を讀み彼を想ひ感慨する處殊に深く三旬の光陰恰も一日の如く病の既に治したるを覺えざりき（中略）次年余又伊香保に浴す筐中又此書あり乃ち浴場の無聊を醫せんが爲めに戯に之を譯述す居る事三旬積て册を爲す乃ち卷中コニングビー（人名）が他人の中に人となり一たび大貴族の嗣子と定り又其權を失ふて再び辛酸を甞め終に擧げられて代議士となるに至るは恰も春鶯の幽谷より出でゝ喬木に移るの狀あり其唱ふる處の主義は大中不偏の正義にして又群雀の喋々たる中に黃鳥の囀轉た麗朗なるに等し卽ち書名を春

鶯囀と名つく云々

これによれば關氏が始めて『コニングズビイ』を讀んだのは、明治十五年であるらしい。譯筆を執つたのは、明治十六年夏ではあるまいか。而してこの序によれば、關氏の興味は專ら政治的なものから出てゐたといふことが明白であり、前述自傳の追懷に見える小說改良論意識が一言もいはれてゐない。關氏の此の小說を紹介する意識が主として此の小說の意匠美妙、政治社會の描寫、著者の「大中不偏」の主義にあつたことは、疑ふべきではない。且つ追憶記事に、塚原澁柿の校閱を經たといつてゐるが、實は既記の如く福地櫻痴校閱である。挿繪も塚原女史の筆といふが、事實は郁田良知畫となつてゐる、良知は、『通俗花柳春話』の挿繪も描き、『春鶯囀』の發行所坂上半七とは關係のある人物である。種々の點で、十七年初刊の自序を信ずるのが正しいであらう。吾等は此の自序によつて、譯者が『春鶯囀』を紹介した時の心的態度又は紹介の目的といふ如きものを知り得るのである。

譯文『春鶯囀』には、自序の外に、原著作ヂスレーリの小傳もあり、別に凡例もある。だがその何れを見ても「ヤング・イングランド」に關する言及は一つもない、これは注意すべき點である。關氏は此の運動のことを全然知らなかつたであらうか、それとも知つてはゐても、故意に無視して取り上げなかつたものであらうか。關氏はヂスレーリの傳記を專門的に研究はしなかつたらうが、一通りの傳記は讀んだこと勿論であり、又ウエムシス・レイドのコニングズビイ案內の如きものをも讀んだといふから、ヤング・イングランドのことを、全然知らなかつたとは考へられない、知つてゐて、何故に此の小說との關連に於いて言及しなかつたか、恐らくさう密接な關係があるとは考へなかつたものか、乃至煩を厭ふてわざと無視したものか、何れにしても故意に避けたものであらう。だがこれを避けることによつて、譯文『春鶯囀』と、原作『コニングズビイ』とは一寸その性質が違つたものになつたといへる、否な、違

つた見方から紹介されるに至つたといへるのである。原著者の「ヤング・イングランド」運動を宣明しようといふ意志が全然掻き消されて、在來普通の政治小說化して來るからである。譯者の態度が旣に「ヤング・イングランド」を無視してゐる以上、讀者の頭腦がさういふものに氣がつかなかつたとしても、何等怪むを要しない。原本『コニングズビイ』に關する限りに於ては、「ヤング・イングランド」は密接不離の關係をもつてゐるが、『春鶯囀』に關する限りに於いては、表面上「ヤング・イングランド」運動なるものとは何等緣のないものとなつてゐる。この相違は研究家の注意しなくてはならぬところである。

譯者が『春鶯囀』の紹介に當つてとつた態度は必ずしも嚴正なものではなかつた。凡例に曰く、——

尤も字々句々を直譯せしものにあらず又本編に關係なき冗長の議論に亙りて一般讀者の煩を覺ゆべき處は之を省き只著作の要を失はず作者の旨意用意の處を沒せざらん事を勉めたり云々

だから少し極端にいへば、『春鶯囀』は、關氏が原本『コニングズビイ』を勝手に讀み、勝手に解釋し、勝手に取捨して、その要旨を傳へたものともいへるのである。「作者の旨意用意」を沒せざらんと勉めたのは事實であらうが、然し「本編に關係なき冗長の議論」を省いたといふ、その議論に作者の用意が多くこもつてゐたのではなかつたか、「ヤング・イングランド」からいへば殊にその點に遺憾があつたのではあるまいか。恐らく原本としては肝心な部分が冗長として省略されたところが多いのではないかといふ氣がする。

『春鶯囀』に於いて、譯者のかういふ態度の爲めに原本『コニングズビイ』と何ういふ相違を來してゐるか。第一に注意されるのは、原本では前述の如くシドニヤの智慧が中心になつて動いてゐるのに、『春鶯囀』の方ではシドニヤはあくまでも影の人であり、コニングスビイが中心である。さうしてコニングスビイ以外、バックハーストも、シドニ

イも、ライル、ヴェーアの如きも、皆可成り省筆を用ゐられてゐる。譯者の用心は一にコニングズビイの運命の浮沈榮達にあるかの如き印象を與へてゐる。卽ちコニングズビイの一人芝居といつた感じを與へられるのである。就中、コニングズビイとエヂスの交渉の如きは、原本に比して可成り誇張されて取り上げられてゐるやに見える。更に、原本では、貴族社會の描寫、殊にその社交生活を細々と寫して、當時の貴族の如何なるものかを示すと共に、そこを自然に新時代人達の改革理想を引出して來る素地にしてゐるが、『春鶯囀』の方では、その描寫や社交や貴族思想やその尊大、無能やの描寫を往々略すので、新人達の新人達たる所以が明瞭に浮んで來ない。從つて新人達の貴族社會革新、保守黨改革の理想が、確然と表明されてゐない。ブルヂョアジイの進出と勢力は相當に描かれてゐるが、これに對する新人達の態度が判然しないので、（つまり「ヤング・イングランド」の理想がこれに對立的に點出されてゐないので）、その社會に侵蝕して來る力が十分認められて居ず、從つて貴族の方でブルジョアに妥協するのか、又ブルジョアの方で貴族に妥協するのか、結末はやゝ曖昧な妥協主義に終つてゐる。尤もこの結末は譯者と譯文だけのせゐではない、前に學堂居士がこの小說のことを語つて、この作の三目的中第一だけ十分說かれた云々といつてゐた如く、いはゞ原本が旣にヂスレーリの理想の前半のみを說いて終つて居り、その後半の完成を『シビル』及び『タンクレッド』に委した形になつてゐるからでもある。これを要するに、譯者闕氏の眼光は、氏のいはゆる「大中至正の保守精神」なるものに注がれてゐるので、わがヂスレーリの眞精神たる「ヤング・イングランド」の貴族改革運動の如きは顧みるところとはなつてゐなかつたのである。

　譯者の態度が以上の如くであり、『コニングズビイ』の眞面目をそれとして傳へたものでない以上、讀者の腦裡の印象も決して『コニングズビイ』の眞面目的でないといふことは、勿論のことであらう。讀者のヂスレーリ乃至『コニングズビイ』に關する知識が譯者より遙かに低いことは當然であり、それだけに闕氏の譯書を單に面白い政治小說と

してのみ受取り、關氏の立場、ヂスレーリの政治主義の如き、格別意を留めて見なかつた。その例は、新聞批評として――

繪入小說春鶯囀は彼の有名の故英國大宰相ジスレイリ君が著はされたる政治小說コニングスビーと題する書にて保守黨貴族の孫コニングスビーと改進黨の製造家ミルバンクの娘エジスの相思の情を寫したる者にて二人の素志も兩父が黨派心の軋轢に妨げられ數々の奇談ありて容易に之を遂ぐる能はざりしが遂に種々の艱難を經て代議士に擧られ始めて初志を遂するに至れる話にして彼國社會交際の有樣黨派の狀態等を知るに至便の書なり云々

といふのが代表的なものであるのに依つても明白であらう。而かも、此の例は、關氏と關係ある東京日々新聞の評である（十七年四月十五日同紙）、東京日々の如きは、關氏の立場、ヂスレーリの政治主義を理解して大に說き立つべくして、かゝる案外た批評を書いて平氣である。東京日々記者さへ尙ほ然り、一般讀者が『コニングズビイ』の眞面目を理解して讀んだのでないことも、敢て怪むに足りぬのである。

讀者が面白いとして歡迎したのは何ういふ點か、政治小說である以上そこには二つの動機があつたに違ひない、第一政治小說としての面白味、第二單に小說としての面白味、この二重の面白味があつたに違ひない。『春鶯囀』を小說として見るとき、我等にその甚だリットン卿『花柳春話』に似たことを思ふ。コニングズビイとエデス・ミルバンクとの關係が、『花柳春話』のマルトラヴァースとアリスの關係に似てゐる、勿論本質的に何もかも似てゐるといふのではないが、二人の關係交渉の外的發展と二人の性格とが大體に於いて似てゐるといふのである。强ていへば、『花柳春話』の方は冒險的分子が多く從つて作爲的な痕跡も多く、『春鶯囀』はやゝ自然であり、主として社交場裡に於て發展するといふ差はある。それから『春鶯囀』に於ては、いかなる場合でも政治が忘れられないが、『花柳春話』の場合には政治は眞の景物といふに過ぎぬといふことがある。然し當時のわが國文壇に流行してゐた戯作にとつては、共に消

新な、モダン好みな、而かも日本人の小說理想に合致した讀物たることは異論のないところである。且つ作者が一前大臣、他が前大宰相たる點に於いても似通つた點があり、時人の英雄崇拜心に訴へた興味も少々ではなかつたであらう。一言でいへば、『花柳春話』は政治的分子が極めて少いに拘はらず、實に劃期的の歡迎を受けたものである、然るにこれを政治小說化したともいふべき『春鶯囀』がそれ相當の歡迎をうけることは、政治といふ資格が一つ多くなつたゞけ、益々當然であるやうに思はれる。

さて政治小說としての『春鶯囀』から、讀者は何を學んだか。恐らく讀者が此の小說に見出して喝采したものは、必らずも譯者關氏が讀者をして特に注意せしめようと欲したものではなかつたらう。讀者は讀者で勝手に解譯して、己が見て佳としたものをその獲物としたかの如く思はれる。それは前記、新聞批評にもその邊のことが窺はれるが、何れにしても、讀者の喝采が必ずしも、「大中不偏」の保守精神ではなかつたであらう。讀者は先づ此の小說に、現代立憲政治運用の敎科書を見た、引續いて近代英國政治史に關する豐富な知識を得ることが出來た。殊に、一八三二年から四四年にかけて、英國憲政の危機ともいふべき時代に對して比較的正確な認識をもつことが出來た。代議政治とは何ぞや、人民とは何ぞや、かういふ問題が歷史的に規定されてゐるのを把握した(第一篇第七回)、又內閣の更迭、ダールフォードの選擧會の如きも、來るべき廿三年の新國會のための實物敎育として興味あるものであつたらう。槪していつて生きた政治の知識が豐富に盛り込まれて居る。それは著者自家の經歷を描くことが卽ち政界の活寫となるのであり、その知識なり描寫なりの生きてゐるのも、當然であらう。

次にコニングズビイに感化を及ぼす三勢力なるものである、それはユースティス・ライルによつて代表される地方豪農、ミルバンクによつて代表される地方製造家、卽ち工業資本家、シドニヤによつて代表される商業資本家、此の三勢力であるが、これがそれぞれ當時の日本政局にとつて如何なる意義をもつてゐたかといふことを考へると、當時

の讀者の注意を惹くところがあつたに違ひない。

コニングズビイが近代文明の怪物、機械に對して抱いた驚歎、これも讀者の心を捉へたものであらう。而かもこの怪物の本質が資本主義と科學知識から成るのを見て、彼等は何と感じたであらうか。更に讀者の最も驚いたものに、老ミルバンクの貴族論がある。これは實に大膽にも資本主義的ブルヂョアジイをもつて、今日の貴族であると斷言したもので、當時としては思ひ切つた思想である。

コニングズビイ「さらば貴君が望まるゝ天然眞正の貴族とは何れの地に見らるべきや」、ミルバンク「さればなり其眞正の貴族とは國民が才智德行財產人望及び生來の他に優れりと認むる人の中に於て之を見るべし此輩は輿論を誘導するが故に實際國家の政權を支配せり（暗に己れ等の階級を指す）余は決して破潰黨に非るなり彼の人造の平等の害あること僞詐の貴族の害に勝れり此れ兩ながら國民の元氣を害ひ工業を妨ぐるものたり余は人の自由ならんことを欲す卽ち眞正の自由を得んことを欲するなり啻に身體の自由のみならず營業の自由をも得んと欲するなり（中略）余は常に言へり我下議院は上院（貴族院）よりも遙かに上等の貴族なり（中略）英國の風俗は旣に外形上の貴族政治に代ふるに眞實の貴族政治を以てせり眞實の貴族政治とは卽ち余が言ふ處の市民中に秀俊たるものゝ政治卽ち是れなり（第二篇第二十回）

此のミルバンクの貴族論と、社會進步論とは、その小說中でも最も際立つた思想であり、讀者はこれを讀んで多大の感動をうけたことゝ思ふ。ヂスレーリは、この故に保守精神を振起し、貴族を改良してかゝるブルヂョア的共和主義を抑へようといふのであるが、一部の讀者にとつては、ヂスレーリの思惑とは正反對の感激を與へなかつたと斷言しきれぬのである。

シドニヤの英雄主義（第一篇第十三回）も讀者にとつて心を惹かれた一つであらう。然しシドニヤの敎說では、國

家の存立の基礎を國民的性格（National character 關氏はこれを國體と譯してゐる）に置く可しといふ論、革命は經濟的理由によらず想像力による、從つて社會の分裂をヒールするには矢張り想像力に依るべしといふ論の如きも、甚だ耳新しいものに聞えたことであらう。

その他、黨のことを考へず、主義の正邪を思へ、他黨に勝つことを第二として自家永遠の改革を考へよ、新時代の輿論は、新聞雜誌をもつてすべし等、當時の人々に適切なる論議の散見してゐることも、讀者にとつての魅力の一條であつたに違ひない。尙ほ政治と社交の關係、時々は社交卽ち政治となること、國民への政治敎育の徹底、婦人の政治社會進出の如き問題も、當時としては、それぞれの立場から注意されたものに違ひない。更に又、新人達の間で貧民救濟の問題（第一篇十五回）が討議されてゐるのも、當時の政治家達の現實的の論議と相まつて、何等かの意義を反映して示したことであらう。

甚だ大略であるが、當時の讀者が、原著作者ヂスレーリの意圖の如何に拘らず、又譯者關氏の意圖の如何に拘らず、譯文『春鶯囀』に何を見、何を感じて、あの如くこれを歡迎したか、以上によつて揣摩されるであらうと思ふ。

譯者關氏の傳記は、その自傳『七十七年の回顧』に讓つて、こゝでは省略することゝする。

『シビル、別名、二種の國民』(Sybil, or The Two Nations)

一

始め私はヂスレーリの政治小說の紹介に筆を着けるに當つて、遂に『シビル』（一八四五年）について一言する機

會は遂にないものと諦めてゐた。然るに偶然のことから、明治初期にこの小說を日本に移入しようとした企圖があつたことを知り、それによつて幸ひにも此の小說について一言する機會を得たのである。機會は慶應義塾の富田正文氏によつて惠まれた。

明治十九年頃、慶應義塾の先輩たる門野幾之進氏は、氏の友人で同じ先輩でもあり、報知新聞記者等を勤めた本多孫四郎氏と共力して、ヂスレーリの政治小說『シビル』の飜譯に着手した、さうして半分程成功したが、事情があつて中止し、そのまゝになつてゐる云々。

これが富田氏から私宛の書翰の內容である。これによると、『春鶯囀』の原本『コニングズビイ』の續篇ともいふべき『シビル』を紹介する企圖があつたことが、立派に明白にされたわけである。その半成の譯稿が、或は今だに門野氏の篋底に深く藏されてゐるかも知れない。

これは、私にとつては近頃にない福音である。それにつけて、次に『シビル』の如何なるものか、その梗概を一言して置かう。

二

前に、『經世偉勳』の文を引いて、『コニングズビイ』以下の三部作を解題した際に、『コニングズビイ』を著はす目的は、――

第一に諸政黨の起源、沿革、及び性質を說き第二に之に因て起れる國家人民の狀態を說き第三に今日の衰勢を挽回するは宗敎の職任なるを說くに在り云々

といつた、然し『コニングズビイ』に於てはその第一の目的だけを述べたゞけで、他の二項には言及されなかつたこ

と、既記の如くである。ところで、以上三項の目的中、第一に引續いて第二の「政黨の現狀によつて起れる國家人民の狀態」を說くことを中心にして成立つた政治小說が、此の『シビル』なのである。今『經世偉勳』の中で『シビル』に關する部分を繰返して拔いてみると、――

シビルは劵狀黨の由來性質を說ける者にて候は之を著はすの前博く該黨首領の言行を調査し其盛んに運動せる地方を漫遊して之に關する材料を蒐集せり左れば該黨の有樣を記すること最も精細明確にして或時は劵狀黨を團結せる小民の實に憐む可き情實あるを說き或る時は其の腕力に依賴せるの不可なるを鳴らし又或る時は政府が之を待つの傲慢且つ刻薄なりしを責む要するにシビルはコニングスビイの續篇とも見る可き者にて候が之を著はすに方り懷抱せる第二の目的たる國家人民の狀態を說ける政治上の小說なり。

これによつて『コニングズビイ』の續篇ともいふべき性質が大體推察されるであらう。從つてそれが思想的に、「靑年英國」と關連してゐたことは勿論である。いはゞ『コニングズビイ』は英國政黨の批判であり、『シビル』は、それに關連して、政黨墮落の半面たる下民の痛苦と重大な社會問題を扱つたものであるといつて可い。

『シビル』、別名二種の人民といふ、二種とは貧、富の二種である。富者と貧人の生活を對照的に描き、貧富の不平等の甚しきことから、劵狀黨發生の已むを得ざるを論じ、轉じて劵狀黨の暴亂の慘憺に及び、最後に兩者調和の爲めの「靑年英國」の理想の發揮となるのである。ヂスレーリは度々北方へ旅行して工業都市る細民生活を視察し、彼等の生活については深い同情をもつてゐた。

時代は一八三七年から一八四四年に亙る。劈頭紹介されるのは、ロンドンの有閑貴族俱樂部の懶惰生活である。ここで吾等は男主人公チャールズ・イーガアモントと會ふ、彼は有閑貴族一方の旗頭マーニイ伯爵の末弟で假嗣子たる身である。二人は善惡貴族の好對照として描かれてゐる。兄は傲慢、非道、强慾で知られた人物、地主としても、彼

の領地マーニイの荒廢した有樣、勞働者の不潔貧窮な生活が、彼の性格をよく語つてゐる。イーガアモントは兄と違つて、寛大な精神、優和な心の持主である。環境が環境だけに、彼も怠惰な青年時代を過して來た。處が二十四の時手痛い失戀の苦痛を嘗めたので、放逸な生活を止めて旅行に出たが、この間大に悟るところがあり、暫時して昔の生活に戻つて來たやうに見えた彼は、密かに一生の事業を求める念に燃えてゐた。やがて母の忠言で議會に還るが、彼の求めてゐるものは、そこにはない。然るに、間もなくマーニイ僧院の廢墟で三人の異人に出會ふのを機會に、彼の生涯の方向は決してしまふ。一人は、ウォータア・ジェラードといふ、職業はある工場の取締で、勞働者のリイダアの一人であるが、堅固な舊い信仰と立派な高雅な精神の持主である。今一人はスチイヴン・モーレイ、殆んどモノマニヤともいふべき社會主義者の新聞記者である、その三はジェラードの娘で本編の女主人公シビルであつた。

シビルは一人の女性といふよりも、ある大きな思想のシムボルであり、ある大きな狂熱の實現、乃至或る一階級の代表であるやうに思はれる。彼の女は人民の味方、貧窮な人民(Nation)の味方、彼等の苦惱に對する憐憫、彼等の救濟の希望を代表してゐる。而かも彼の女も、かういふ叅狀黨の闘士によく見るやうな野卑さがなく、矢張り父のやうに、堅固な舊い宗教的信仰に對する憧れをもつてゐる。イーガアモントは、一度シビルと會ふと、もう彼の女の捕虜になつてしまふ。イーガアモントは彼の女の後を追つて、モウブレイの製造市に行く、ジェラードはこゝの或る工場で取締をしてゐるのである。彼はこゝで自分を隱し、フランクリンといふ假名で勞働者社會に出入し、ジェラード、モーレイ、シビルなどとの交際を深める、彼はこゝで豁然と彼の一生の使命に眼覺める、——シビルを愛すること、貧者の寃苦を一掃すること、これである、さうしてこの二つは事實は一つであつたのだ。

モウブレイの領主は出身の如何はしいモウブレイ伯爵であるが、その館内の豪奢に引きかへ、その周圍の織物勞働者の生活の如何に悲慘なものであるか、こゝでも貧富が對照を成して存分に展開されてゐる。

一八三九年は、有名な劵狀黨請願の年である。ジェラードは劵狀黨一方の旗頭としてロンドンに來る、シビルも來る。彼等は手分して代議士を個別訪問する、かうしてジェラードは、イーガアモントに再會する、ジェラードは、先にフランクリンといふ名で新聞記者と稱し、自分達の仲間に入つてゐた人間が、事實は貴族であり、而かも暴君マーニイ伯の兄弟であり、從つて人民の敵だと知つて、大に驚く。だがイーガアモントは彼等の敵どころではない、かつてモウブレイで見聞いた凡てをぢつと考へて、人民の運動に熱烈な同情をもつてゐる。而かも人民の熱望が次第に實現されて行く道も彼には見えてゐる。人民のリイダアとして彼等の解放につくすことこそ、英國貴族の新人（「青年英國」）の任だと感ずる。此の邊のことは、彼とシビルとの對話に詳しい。

シビルは、初めは偏見と猜疑にとらはれてゐるので、イーガアモントの愛情など受けつけないが、次第に彼の熱心に動かされて來る。此の兩者の戀愛の進行を描くヂスレーリの筆致はなかなか見ものである。イーガアモントが眞實人民の爲めに粉骨して盡してゐるのを知つて、シビルの頑なな心も融け始める。そのターニングポイントとなるのが、下院議會に於けるイーガアモントの劵狀黨請願に關する大演說である（ヂスレーリは實際此の時の議會に劵狀黨に同情せる大演說をなした）。

劵狀黨の暴動が頂點に達するにつれて、イーガアモントのシビル及びシビルの父に對する深切が益々高まる。父のジェラードは然し、暴動の責任から入獄の罰を免れなかつた。今やシビルのイーガアモントに對する感情は昔の比ではないが、然しイーガアモントの結婚の申込みの如きはまだまだ絕望といふ外はない。三年後、ランカシヤに同盟罷工の一揆が起り、ジェラードもマーニイ伯爵もこの騷ぎの際に殺され、モウブレイ城は群衆の襲擊を受けて燒かれる。この時、イーガアモントは非常な危險を冒してシビルを助ける、こゝに始めてシビルはイーガアモントの愛を全幅的に受け容れることになり、同時に、政府の反省とヤング・イングランドの努力で人民の現狀が改善の實を示して

来るといふところで、此の小説は大團圓となるのである。

私は更に進んで此の小説の研究批評を試みるだけの材料も興味も持つてゐるが、何せ、紹介されかけたまゝで公刊されなかつたものであり、そこまで深入りして貴重な紙數を犧牲にするのも躊躇されるので、今は以上の梗概を述べたまゝで、筆を止める。思ふに、此の小説の飜譯の中止されたのは何等か他の事情に依るものであらうが、然し一面亦、此の小説が、その内容からいつて、聊か時代に先立ち過ぎてゐたといふ點も、自ら中止事情の一つに數へられはせぬであらうか。私はさう考へたいのである。

『三英雙美政海之情波』(Endymion)

一 概説

『三英雙美政海之情波』、全四冊。

譯者は時事新報記者で慶應義塾出身の渡邊治である。

(第一巻) 明治十九年十月 出版
(第二巻) 同 年十二月 同
(第三巻) 明治二十年三月 同
(第四巻) 同 年八月 同

即ち全四巻が約一年の内に刊了されてゐるが、これも當時としては迅速な部類に屬すべく、此の譯書に對する世人の歡迎の相當以上なものであつたことが、そこに反映してゐる譯である。

『春鶯囀』の例に倣つて、尾崎氏の『經世偉勳』を借り、『政海之情波』即ち『エンヂミオン』の如何なるものか、いさゝか概念を述べて置かう。

（前略）此小說は名をエンヂミオン（Endymion）と云ひ事をエンヂミオン、フェラールス及びミリア（ミラ）と呼ばれたる兄妹の履歷に托して微侯が一家の有樣と政治世界の情形とを寫し出せる者なれば那翁三世皇帝、ビスマーク公、名相パーマルストン公を初めとして博く當世の諸名士を卷中に集めて僞名の下に之を模寫批評せる趣向は侯が少壯時代に著はされたる許多の政治小說に異ならず唯だ波瀾老成復た曩時の矯激なるに似ざるのみ此書の始て世に出てたるは千八百八十一年の初めにて微侯時に七十八歲の高齡なりし侯は前年具氏（グラドストン）の爲めに破られ暫く敵黨の銳鋒を避けて半は政治世界より退隱せしが萬機の煩務を免かるゝの後ち直ちに草稿を起せる者と思はる其氣力の旺盛なる豈に東洋人の企て及ぶ所ならんや。

大體はそれで可いとするが、二三訂正を要するものがある、此の小說は、一八八〇年十一月の刊行となつたものであり八一年ではない。又この小說は內閣を退いてから思ひついたものではなく、もつと早く『ロゼイヤ』(Lothair) 一八七〇年の完成後間もなく起草されかけたものであるが、その後のヂスレーリの多忙な政治的生涯がその續筆を許さなかつたのである。又、此の小說はよくヂスレーリの絕筆と稱されるが、事實は生前最後に公刊された小說といふだけで、絕筆ではない。眞の絕筆は、『エンヂミオン』著述の筆を措くか措かぬに、新に起草した一小說で、それは今日未完のまゝ殘つてゐる。

『エンヂミオン』といふのは、『コニングズビイ』と同じく篇中の人物の姓をとつて題にしたものであり、譯者渡邊氏のいふ如く、單に『エンヂミオン』又は『エンヂミオン物語』と題して然るべきであつた、だが譯者がこれを『政海之情波』と題したのは、この小說が、同じ政治小說でも、政治に對する女性の感化影響を中心にしたものであ

り、且つ此の當時日本の社交界では女性と政治の問題が大に注目を惹いてゐたので、特に、かういふ目立つ題目に代へたものである

因に角　の三英とは篇中の人物、エンヂミオン・フェラーズ、フロレスタン公（親王）、フェロル伯（公）の三英傑（これはそれぞれヂスレーリ、ナポレオン三世、ビスマルクの三人をモデルにしたもの）、雙美とはマイラ（ミラ）・フェラーズ、レデイ・ベレンガリヤ・モントフォートの二美人（前者はナポレオン三世の后ユージェニーとヂスレーリの姉サラをモデルにしたもの、後者はウィンダム・リュイス夫人卽ち後のビコンズフィールド伯ヂスレーリ夫人をモデルにせるもの）を指したものである、だが此の小說の性質からして三英に對し雙美では、雙美の方が力が弱い、宜しく五美位にすべきであつたらう、事實又この小說の內容を知れば、譯者が五美と角書をしても、決して不思議と思はなかつたであらう。

二　『エンヂミオン』研究

私が『コニングズビイ』研究の場合に參考したモニイペンニイの『ビコンズフィールド伯ベンジャミン・ヂスレーリ傳』の最後の二卷はジョオジ・アール・バックルの續筆である。從つてこの『エンヂミオン』に關する部分は、モニイペンニイではなく、バックルの筆に成るものである。以下、そのバックルの研究によつて述べることにする。

『エンヂミオン』に最も強く現れてゐる思想は、男性の、殊には政治家としての男性の生涯を指導し構成して行くについて女性が至大な決定的に重要な役割を演ずるといふのである。七十の坂を遙か遠く越したヂスレーリは、自分の長い生涯を振返つてみて、自分が如何に、姉のサラの目ざとい同情に、又オースチン夫人の奬勵と批評に（辯護士ベンジャミン・オースチンの妻女、『ヴイヴイアン・グレイ』の淨寫や出版の世話したのは、彼女であつた。）彼の妻の獻身と收入に、レデイ・ブレッシントンとレデイ・ロンドンデ

りの友情に、ブリヂェス・ウィリヤスムズ夫人の厚意に（ヂスレーリ崇拜の一女性、彼女はヂスレーリに全財產を讓與せしのみならず、死してヂスレーリ家の墓地に葬られんことを乞ふた）更にその衰老殘年の間、レディ・ブラッドフォードとレディ・チェスタァフヒールドとの親交により、又女王陛下の寛大な厚情によつて與へられた同情と理解の空氣に負ふところが多かつたかといふことをつくづく覺つたのである。疑ひもなく、女性に對して彼が負ふところは、大きなものであつた、だが彼の驚くべき成功の主な要素は、畢竟彼の內在せる天才、彼の辛抱强い努力、彼の不屈不撓の意志であつた。彼は、機嫌のよいときには、（かつてレディ・ブラッドフォード宛の書翰でさうしたやうに）、「予は婦人に凡てを負ふてゐる」と言ふことを好んだ、だが、彼の場合にはそれは眞實ではなかつた。とはいへ、彼の最後の小說の主人公エンヂミオンについては、それは眞實なのである。彼の男性的な姉のマイラがなかつたなら、後に彼の妻となる社交界のリイダア、レディ・モントフォートがなかつたなら、さては（やゝ程度が低いが）大銀行家の女アドリアナ・ニューシャテルがなかつたなら、さては幸運な結婚によつて、長屋番人の娘から保守黨の大貴婦人（グランド・ダーム）に出世したレディ・ビイマリスがなかつたなら、エンヂミオンは、二流所のお役所で生涯を暮して、巧妙な應對と嚴正に職務を遂行することによつて、次第に昇進して次官役にもなり年金にありつくといふところで終つたであらう。然るに此等の女性のおかげで、彼は、四十歲前後で、大英國の大宰相となつたのである。

　彼の生涯の物語は簡單に述べられよう。彼は一八一九年に生れたとなつてゐる。祖父は成功した樞密議官であり、父も一時は大に顯達するかと思はれた政治家であるが、その父は華美好きな社交家であり、多年收入以上の生活を無理に續けた上、政治上でもキャンニング又はグレイと終始せずにウェリントン公の股肱として動いたので、遂に一八三二年の改革法案のために全く破產して、自殺させられたのである。エンヂミオン・フェラーズが十六の時ソマセットハウスの書記職で人生にスタートすることが出來たのは、彼としては精一杯の好條件であつた。だが、彼には双生

の姉妹のマイラ（ミラ）がある、彼の女は、打ち勝ち難い意志の權化であり、少女時代からして自分の一生を弟の立身出世の爲めに犠牲にしようと決心してゐる。十七の彼の女が最初の求婚者を拒む言葉として、かういつてゐるのでもそれが分かる。「されど妾が此世に在らん其限り。この身の運は如何なりとも。弟が爲めに心を勞し。なにさ。女兒にても力の及ぶ事ならば、弟が出世の成るやうに。一心磐石をも搖がさずに。やは止む可きか」（第二卷第廿六回）。エンヂミオンと同じく、彼の女も兩親の死によつて一文無しとなつたが、彼の女は雄々しく職業婦人となり、銀行家ニューシャテルの女アドリアナの附添となるが、運命の輪の廻轉によつて、或る老年の大政治家に會ひ、彼の愛を贏ち得る、此の政治家は當時外務大臣の顯職にあるローハムプトン侯である（パーマアストンをモデルにせるものといふ）。かくてマイラは十九歳で彼と結婚する、それといふのも、弟の立身出世の足しになりたいといふ目的だけからである。「我家の不運も。過ぎ去りたりと。稱して可ならん」（卷二第四十五回）彼の女はエンヂミオンにかう語つてゐる。「つら〳〵思ひ廻ぐらせば。今日までに、幾年月の其間。つらき暮しをなしたるも。他日の榮華を待たんが爲めなり。妾の身に此好運の來りしは。そなたの爲めを謀りても。大切なる。運の向き來る吉左右ならん」。レディ・ローハムプトンとしての彼の女の新しい身分は、弟のエンヂミオンを直ぐさま社交界に入れることが出來る、彼の女は自分の勢力を利用して、第一に弟の爲めに夫の同僚の某大臣の私的祕書の役を得てやる、やがてもつと高い政府の或る役に轉任させてやる、遂にエンヂミオンが二十六の時、彼の女の夫たる外務大臣の下に次官の職を贏ち得ることが出來る。かく立身の口開けは、姉によつてついたのであるが、爾後の成功榮達は、「社交界の女王、改進主義の權化たる有名なベレンガリヤ」、即ちレディ・モントフォートの力によつてゐる。此の有力な女性は、エンヂミオンが社交界に姿を現すやいなや彼を贔屓にする、社交的にも政治的にも彼の後押しをする、彼を國會に入れてやる、さうして彼の女の大金持の夫が死んで、遺產の大部分が彼女のものになつたとき、自分自身をも自分の財產の一切をもエ

ンヂミオンに與へる。エンヂミオンはかうして不動の位地、「國家に於ける足場」を得る。一方、彼の姉マイラは早くも寡婦となるが、二度目の結婚には、運よくも或る外國の君主（フロレスタン公）の后妃になる。さういふわけだから間もなくエンヂミオンが外務大臣になるのも、怪しむに當らない、さうして幕が下りる時には、もう大宰相として女王陛下の御手に接吻の禮を盡してゐる。又議會に入る時には、エンヂミオンが更に二人の女性から有力な助力を受けたことを記さなくてはならぬ。一はレディ・ビイマリス、この女性は保守黨に屬するが、エンヂミオンの當選にとつて致命傷ともなるべき筈の反對を一呼して追拂つてくれた、今一人はアドリヤナ・ニューシャテルで、彼の女は匿名で彼のためにコンソル公債二萬磅を貰ひ、エンヂミオンに少なからぬ金錢上の助力をする。

此の種の主人公は、何うしても無色無味なものになりがちである。彼は篇中で、美貌で擧止快活である上に、「怜悧で、知識に富むが、『而かも人を警戒させる獨創性や餘りに頑固な確信』などはもち合せてゐない」といふことになつてゐる、「用心深く、而かも感化され易い」となつてゐる、「いつも適度な事を口にしたし、行ひもした」となつてゐる。事實彼は、「最高を目ざす」勤勉な徒弟である、だが彼自身何の決心も、何の躍進（エラン）も、何の閃發も、何の天才もない、全くヴィヴィアン・グレイ、コンタリニ・フレミング、コニングズビイの如きヂスレーリの早期の小說の主人公、光彩煥發の冒險好きな人々とはあくまでも違つてゐる。問題の人チャールズ・ヂルクが、エンヂミオンの政治的生涯が、主として彼自身のそれをモデルにしたものだと信じて甘んじてゐたなどといふことは、寧ろ驚くべきことであらう、況んやさう信ずるやうにヂスレーリ自身會話で、裏書きしたなどとは益々然りである。何故ならば、エンヂミオンが一國の首相にと進達した物語は、一種のお伽話であつて、可能とも信用し得べきものとも認められないからである。そのために、世界に於ける女性の勢力の全能といふ論を支持する人々が殖ゑるとは思へない。

エンヂミオンの姉、がつちり家のマイラも矢張り失敗である、然し今一人の主要な保護女神のレディ・モントフォ

ートは、生々として魅力に富んでゐる。此の夫人の性格の一部分は、ロード・メルボーンの女友であつた才媛カロライン・ノートン夫人の追憶から引出されたところもあるらしい。多少のところは、ヂスレーリ自身とレデイ・ブラッドフォードとの關係によつて描いてゐるらしい。彼女の夫のロード・モントフォートの性格も、構想から表現まで立派に出來てゐる。

蓋し伯は十九世紀の世に生れながら。十八世紀時代に生存せる貴族の思想を。其儘に有し得る人にして。今の諸貴族とは事變り。少くも責任と云へる感覺なく。(中略)何れより見ても。昔時の貴族と外。思はれず。……(中略)モントフォルト伯は決して惡心あるの人にあらず。伯は無心の人なり。左れば。苟くも其一身に不便宜のなき限りは癇癪も起さず其性質もやさしけれど。是れ其天性の溫和愛樂なるが。然らしむるにはあらず。只其心に苟くも紳士として。此紛擾限りなき世界に立つからは務て平穩無事の體を失す可らずとし。かゝる玄妙の考へよりして。云云(卷三第五十二回)

『エンヂミオン』はその主要な筋書に關する限り、存分表現されたとはいへぬが、それに拘らず、種々の興味が澤山ある。それには文章の光彩あるところ、性格の妙趣などもあるが、その上、著者ヂスレーリの見地に對し、十九世紀の第二期(一八二五—五〇)の社會や政治に對して側面的に解明して示すところも頗る多い。何となればこの小說は歷史と小說の混淆物だからである。ヂスレーリは老年に及んで、好んで自分の男盛りの時代を回顧したがる、さうして自分が二十代、三十代、四十代に熟知してゐた世界に自分の空想の人物の舞臺を定める。一八二七年キャンニングの死から出發して、一八五五年の聯立內閣の失敗の時まで、この物語の背景は、眞正の內國政治の動きである。その邊から以後は、全然ローマンスになつて、シドニイ・ウイルトンの大宰相職も、エンヂミオンの繼承も、五十年代の

歴史には、別に表書きする事實がない。丁度前記の部分が、ヂスレーリの傳記でも最も興味のある部分であり、モニイペンニイの傳記三卷に最も詳しく述べられてゐる。カンニングの死の政治界に對する影響と、それに續く五六年間の困惑した政海を扱つてゐる卷頭の數章は、特に人目を奪ふ程生彩がある、これは恐らく公務繁劇のために一八七二年か七三年に執筆を中絶するの止むなきに至つたより以前に書かれたものであらう。且つ又、中には、もはや一八八〇年にさへ追憶の色あせてゐた社會の動きを極めて手際よくスケッチしたところも少なくない　一八五〇―五一年の「法王侵略」(Papal Aggression) に關する動搖、一八三九年のイグリントン・トウナメント(この小説では、モントフォート、トウナメントとして描かれてゐる)、あの飽くまで空想的な觀物(ヂスレーリは一八七二年にソマセット公爵夫人ジェーンからこれについて聞いたものである、ジェーンは此の試會の行司役で、この小説ではレディ・シイモーアとなつてゐる)、それから四十年代の鐵道狂時代(資本と勞働の「新捌け口」が發見されて、莫大もない財産が作られたり――失はれたりした時代)等に關するものがそれである。

エンヂミオンが、その性格なり官歷なりに於いて少しもその作者に似てゐないのに、此の小説の最後の數章に於いて、ヂスレーリか自分自身に認めた資質や感情や習慣やを與へられてゐるのは、やゝ不相當なやうに思はれる。「彼の聲の力と諧調」、甚だしく流暢といふではないが、いつでも討論に應ずること、嚴重に抑制されてゐる鋭い諷刺の力(彼の極めて有效な、だが危險な武器)、彼の完全な感情の制御、――『エンヂミオン』の前半の讀者は、かういふヂスレーリ流の資質に對して殆んど豫期するところがなかつたであらう。又、「彼としては事務に沒頭するより仕方がなかつた、實に國務は幾多の心配、悲哀に對する適當藥である。吾等が一國の幸運と名譽を護らなければならぬ場合に吾等の些々たる苦惱や悲痛の如き何であらう」。ヂスレーリがかう書いてゐるときに、彼は確にエンヂミオンよりも彼自身のことを考へてゐたものであらう、又、「モントフォート家かヒル街に一寸一走りして、彼の女等に正

眞の消息を傳へたり、人目を盜むやうな愉快さで、更に愉快な人々とあはたゞしく一口の食物を頰ばることも出來ない」云々と、エンヂミオンが議事中の議院から拔け出しかねる有樣を書いたときには、議會中にブラッドフォード家の人々やレディ・チェスタアフヒールドと共々に執つた親密な內輪な晩餐のことを思ひ出してゐたものに違ひない。

重大な國事の遂行に十二分に參與した政治家の經驗が、この小說の隅から隅に行き渡つてゐる。政治の技術を學ぶためには、外國の政治家を身自ら知ることが切要だといふ語は、ベルリン會議で重要な役割を演じた人の口から出たものとしては效果がある。ヂスレーリはこゝで、ローハムプトン侯がヴィエンナでなした如く、「現に此世界を支配する人々を測知する術」を學んだのである。「此の知識をもたずに國務を處理することは、結局、文房具屋の仕事といふに等しい、それは全くペンと紙とが應接するので、人間ではない」。思慮深い政治家にとつて、「人間及び事務を支配する術の最も微妙な要素」は、「性格の觀察及び識知」であるかと見える。彼は、青年を信賴しない點で、ロバァト・ピールを責めてゐる（卷四第七十二回）、「凡そ先達の人は。後進の人に。其信用をおくこと。最も大切にして。取りわけ。集會々議の席にありては。後進の人に。其働きを現はさしむるは必要の事なり」云々。ヂスレーリは幾多の場合にさうした、殊にロード・ジョオジ・ハミルトンとエドワード・スタンホープの場合の如きその著しいものである。彼は、一家の私事の混亂（これは一生彼に附き纏つてゐたものだ）を、寧ろ滿足な氣持で眺めてゐる。「これは何うしても、人類を統治するといふ大事業に沒頭することの避け難い結果であるかと思はれる」。彼は、現實の生活に於いてもさうであつた如く、その思想の世界に於いても、衣服の問題を等閑にしはしない。ヴィゴー氏（初め裁縫屋、後に鐵道王となる、鐵道王ハドソンと大裁縫師プールとを合してモデルとしたもの）はエンヂミオンにかう語る、「某は御身の年齡相應に。又職業相當に。將た目的相應に。仕立して差上げ申さん。勿論人は若年の時には。成的派手を好む者なるが。併し御身にして。若し政治社會に立つと云ふ御望とあらば。少くとも二十一を過ぎては。

餘り派手過る御服裝は。宜しからず」云々。ヂスレーリ自身は、この服裝の變更を四十まで延したものである。その他種々な個人的特色が注意されるであらう。彼は、女主人公マイラに對して、彼自身が感じたといふ「光に對する熱情」を、彼の女一人の時にさへ與へてゐる。燦爛たる光明が人の氣質に對して有益な道德的影響を與へるといふ信念である。彼は、會話といふものを定義して、「敏速に對應して頑なな風を示さぬこと、議論せずに反駁すること、重大な問題は道化師流の雜色衣でつゝむこと」といつてゐるが、これは心中彼自身の談話を考へてゐたものであらう。彼自身の野心、意志の力に對する信念、機會の利用に對する信念は、次の如きマイラの言葉のうちに至極明白に叫ばれてゐる、「決定せる目的をもつてゐる人間は、それを成就しなければならない」、「生存をさへ犧牲にして實現しようとかゝる意志には、何事も抵抗することが出來ない」、「偉大なる人々は機會といふことのみ考ふべく、時期といふ如きは考ふべきではない。時期といふ如きは、虛弱な疲憊した人間の口實に過ぎない。彼等は、當然自分自身の意志によつて成就されなければならぬものを成就するため、『時期』といふものをその生涯の匿名同伴者にしてゐるのだ」云々（卷四、第八十二回）。彼が古來の才子から假りにウォルダァシェーア（ジョオジ・スマイスをモデルにした人物）の口に押し込んでゐる種々な意見の中、宗教に關するものだけは、何やら彼自身の氣分がこもつてゐるに違ひない、「怜悧の人々は何れも同じ宗教である」、「では、その宗教は何です」、「怜悧な人々は決して語らない」、云々。ヂスレーリは、『ロゼイヤ』及び『ロード・ジョオジ・ベンチンク傳』で、宗教方面に於ける彼の理想を可成り多く吾等に語つてゐるが、彼自身の個人的宗教に關しては、絕對に語つたことがない、これはヂスレーリの顯著な特色の一つであつた。

『エンヂミオン』には『ロゼイヤ』程に「引用」が豐富でないが、ヂスレーリ流の格言めいた語句が相當に澤山散見してゐる。政治方面のそれとしては、「少々お道化て民主的輿論などと呼ばれてゐるあの中等階級の野心を包んだ

平凡議論」などといふのがある、社會的な意味をもつたものとしては、一ガータア章の騎士かホワイト館（クラブ）の會員か――英國人の自由にし得ざるはたゞ此の二つのみ」といふのがある。次に上出來た警句が二つある、「何時も探求してゐる探求者には、何事も知られない」、一機智家の饗宴は、沈默の宮殿であるに定つてゐる」。

女王陛下は、此の小說を讀まれて、保守黨首領の最後の述作の主人公が自由主義者であるのを見、訝かられたといふ。此の小說は確かにさういふ超然的態度で書かれてゐる、一八二八年から一八五五年までの歷史が自由主義の立場から否ないはゞ自由主義陣營の內から取扱はれて居ること、ウォルダァシエーアをかりて、ヂスレーリ自身が同情してゐた「青年英國」黨の意見が、奇妙な誇張した形で提示されてゐるが、それが是認をかち得るためといふよりも寧ろ笑ひを誘ふやうに出來てゐることなどが、かゝる態度の證左といひ得やう。更に對外政策に關するウォルダァシェーアの獨斷を例に取つて見るが可い、「ユトレヒト條約以來の一切の外交策は、余には空騷ぎであるらしく見える」。或はその頃の園遊會にストロベリーの「籃（ボトル）」の見えなくなつたことについての彼の嘆息（卷四第九十九回）を取つて見よ、「大方、あれも、凡ての結構なものと同樣に、スチュアート王朝の人達と一緒に消えてしまつたのだらう」云々。或は彼の海軍に關するパラドクスを聞くが可い――

わが英吉利の國王が海上の王と爲られしは、何んと宏大なる考へにてはあらずや。地球と云へる惑星の大部分は皆海なれば。この海を占領する我英國が世界にありて。第一强國たるも亦謂はれなしとせず。畢竟我國海軍がかくまでに盛大を致して海上の王と仰がるゝは。全くスチュアルト王家の御蔭にして。當時のゼームス二世陛下こそは眞に英國海軍の基礎を固めたる有名の君主にて在はすなれ。シテ。陛下の父君チャールス一世陛下も天晴の英主なりしが。不幸にして內亂の爲めに果敢なき御最期を遂げ玉ひしぞ最と悲しむべき御事にてあるなり。左れど共御治世中軍艦の費用を供へん爲め。軍艦稅法を行ひ玉ひしなどは。天晴の御働らきとや申すべき。ゼームス二世陛下も

流石は父君の御子だけあらせられ。軍艦税を實行し玉ひしこそ國家の利益たりしこと疑ひなけれ。全體この税法は最とも適當なりし税律にてありしものを。異義黨のやからが之れに反對を試みたるゆゑ。今日では海軍豫算と云ふ負擔を引き受けたではござらぬか。

實際又、自由民權主義の慣習があくまで嚴重に尊敬されてゐるといふわけではない。「かつてハムプデンをして戰場に討死せしめ、シドニイをして斬首臺上に登らしめた彼の主義」（自由）が、人民の自由とは同一視されずに、「英國の民權黨政府なるもの」と同一視されてゐる云々、而してかゝる大きな歴史的關係を示す代表的存在が、「自己の階級に誇りをもち、自己の政黨についてより多くの誇りをもち、……傲慢なる自制とわざと平民らしい慇懃さに凍結してゐる尊大な民權黨貴族」（卷三、第七十一回）であるかの如く、理解させられてゐる。一八四一年に於けるメルボーン内閣の議會解散について、ヂスレーリはかう書いてゐる、「自分達が作り纒めた集團をかうして終局せしめるのは、不自然でもあり、殆んど非立憲でもあつた。とはいへ、かゝる事柄についてはさまで細心でない民權黨は、彼等には矢張り機會があるものと考へ、斷然それを失ふまいと決心した」云々。（卷三第六十九回）。

ヂスレーリの小説中、この『エンヂミオン』に於いて程、活世界から性格を假りたものはない。ウォルダアシェーアがジョオジ・スマイスの等身像であることは、既に述べた通りである。スマイスは一八四七年カンタベリイで「保守黨こそは英雄的人物の連續である」（第四十回）云々と演説したが、それが一八七五年彼の遺著なる『アンジェラ・ビサン』といふ小説の卷頭にある彼の小傳の中に採錄されてゐる、その語が『エンヂミオン』の中でウォルダアシェーアの口から出てゐるから、隱さうとしても出來ない。それからロード・ローハムプトン、これは外務大臣としての彼の言動の關係する限りでいへば、既記のやうに、好意的に誇張されたロード・パルマアストーンの肖像たるに違ひない。「ロンドンの女王、流行の女王、保守黨の女王」たるゼノビヤはレディ・ジャアジイをモデルにしたものであ

る。エンデミオンの長官たるシドニイ・ウィルトン、「高尙なる性向、高雅なる擧止、著大な敎養の持主」であり——「偉大なる紳士」である彼は、　の姓名と性格から、何うしてもピール派の有名な政治家シドニイ・ハァバァト（後にロード・ハァバァト・オヴ・リイ）を想起せしある。大財閥ニューシャテル一家は、勿論ロスチャイルド家を一寸變裝したものであるが、たゞそのユダヤ人種的分子をわざと書き漏して、その創立者はスウィス人だとなつてゐる。素晴らしい厩舍と、庭苑と、溫室とがあり、「ヨーロッパ第一の名物」といふ料理長のゐたエノー（ハイノールト）莊といふのは、——市中から一時間程の馬車道云々といふので見ても——ロスチャイルド家の莊園ガンナスベリの面影を壯大にしたものである。『エンヂミオン』に描かれてあるやうに、ヂスレーリはこゝで度々あゝいふ週末園遊會や週末饗宴を樂しんだのであつた。アドリヤン・ニューシャテルは、この大財閥にふさはしい財政的天才に敎養と政治的野心を加へた人物になつてゐるが、これは可成り直接に著者の親友ライオネル・デ・ロスチャイルド男爵を描寫してゐる。「ラウドたる機會を失つたので」、ローマ法王に服從してカーディナルとなつた國敎派の僧侶ナイジェル・ペンラドック、これは大僧正マンニングをモデルにしたものであるが、『エンヂミオン』に於ける彼の描寫によつて、先に『ロゼイヤ』の中でカーデなル・グランヂソンのモデルとして扱つた際に受けた批難を償つたといはれる。「微笑せる禁慾主義者」たる彼の姿は、「到るところで見られた、上流社會の華美な會合にさへ見られた」。だが英國の改宗といふことは、「彼の不斷の目的であり、彼の日夜の祈願であつた」。ジョブ・ソーンベリの人物には、偉大なる自由貿易論者リチャード・コブデン、ジョン・ブライト二人の特色がこもつてゐる、それからバァチイ・トレメーン氏及びトレメーン・バァチイといふ愛嬌ある一對の人物には、微かながらバルゥア兄弟（サア・エドワード及びサア・ヘンリイ、兄が卽ちリットン）の面影が見える。ヴィゴー氏は前にも述べた如く裁縫師プールと「鐵道王」ハドソンを無理にこね合したものである。

篇中のセント・バーブは小說家サッカレイをモデルにしたものである。サッカレイはかつて『有名著者小說案內』(Novels by Eminent Hands) でヂスレーリの『コニングズビイ』を飜弄したことがあつた。その後、サッカレイは別に眞面目に小說家としてのヂスレーリを頌讃する演說を二度もしたに拘らず、ヂスレーリの方ではサッカレイを面白く思つてゐなかつたらしく、此の小說のセント・バーブは「極めて虛榮心の強い、物嫉みの強い、お愛嬌のある人物として」、可成り意地惡い扱ひを受けてゐる。然し Book of Snobs (『俗物讀本』) で不朽の名を止めたサッカレイ自身に、可成り俗物的な分子があつたことは事實であるらしい。セント・バーブの描寫では、此の特質が極めて誇大にされてゐるが、そのためにこのサッカレイのキャリケチュアが殆んどサッカレイと見えないのは、面白い。サッカレイへの諷刺云々といふ點を別にしていへば、『エンヂミオン』全篇中これ位活き活きとした、面白い性格が少ないといへよう。

フロレスタン公及びフェロール伯の二人物は、ヂスレーリが實際政治上で相手にしなくてはならなかつた最も著名な外國政治家、即ちナポレオン三世及びビスマルク公をモデルにしてゐる、而かもその描寫が多少モデルに忠實に運ばれてゐる。ルイ・ナポレオンの流浪生活を彩る種々な陰謀や浮沈、それが、王位要求者(プリテンダア)フロレスタン、最初アルバァト伯爵といふ名でロンドンの社交界に姿を現した、不思議な、沈默がちの、孤獨な人物の生涯に、そのまゝ再現されてゐる。少年時代から執拗な巧妙な陰謀家である彼は、その神聖な宣誓を破つたことを辯解するに、自分は「運命の子であり、自分の行動は、歷史的必然の不可抗的原理が自然に發展」したものであるといふ口實をもつてしてゐる、だが一方彼は又、優雅溫和な擧動を惠まれて居り、深い沈思に我を忘れてゐない時には、控へ目がちな同情を示すに吝かでないので、女性達の興味をひくロマンチックな人物でもある。彼が公然とその名を現してロンドンに邸宅を定めたときには、「兎かく彼を敬遠するのが、當時の社會の精粹たる人々の遣り方であつた。王權黨は固より革命氣質

の王族といふものを好まない、民權黨は、責任の位置にあるので、王位要求者を公認することが出來ない、殊に、彼等がお慈悲めかしく肩を搖りつゝ意味ありげに認めたやうに、甚く謹厚な性格でない彼では尙ほ更である」(卷二第五十五回)。彼は自分の大望を推進めるために、度々政略的饗宴を開いた、さういふ席では、彼は「自身では寡默を好んだとはいへ、人々の會話を努めて引出した。彼が口を開いたときには、その引締つた言句と壓縮された意見とが際立つたものであり、よく人々に記憶された。」(同第五十五回)。一八四八年、革命の年に、彼の父の王位が還された、さうしてルイ・ナポレオンと同じく、彼は「自由主義ながら用心深い、調和的ながら確乎とした」政府を立てた。英國の味方なることを宣言した、歐洲大陸の或る王家と結婚しようと欲したが、失敗した。

フロレスタンもフェロール伯も、モントフォート演武試合に出る、これもルイ・ナポレオンが例のイグリントン試合に確に出席したのと同じである。而かも此の二人は、この演武に於ける花形騎士であつた。フロレスタンは、フェロールと彼とは、生涯の間に、試合の賞品たる黃金の兜よりも更に貴重な幾多のものを爭はざるを得まいといふことを認める。フロレスタンはいふ、フェロールは「愛すべき人でもなく嫌ふべき人でもない。彼自身は一切の情熱、いな一切の感情に超越した智力をもつてゐる、だからかういふ人間を相手にするときには、吾等自身さういふ智力か感情かゞあれば、吾等が却つて損をする」(卷三第六十回)。

フロレスタンのビスマルクに對する超然たる感歎の態度は、ヂスレーリがビスマルクに對して始終持してゐる態度でもある、——「獨創的な(而かも氣紛れではない)心の人物」、「滅多に失策をしない人物」云々。此の偉人の四十代の活き活きした描寫がある。「決して美貌の人とはいへないが、彼の容貌は目立つたものであつた。あくまで十分な智的發達を示す眉上、がつしりした兩顎。背は高く、双肩廣く、腰が細い。」(卷三第五十三回)。此の時彼の「熟慮してゐたものは、殆んど母國と呼び得ないもの、寧ろ議定書で洗禮され、且つ彼自身あくまでも信賴し得ぬと見てゐ

る種々なる條約で命名されてゐる一團の土地の位地であつた」（第五十三回）。フェロールはレディ・モントフォートとの會話の際に、かゝる不滿足な情勢を是正すべきビスマルク流の方法を示してゐる。

拙者の主君は。拙者を本國に召し戻すの御意もあり。就ては拙者には主君の爲め。新規の憲法を制定せんと。頻りに此計畫の最中なり。左れども。新規の憲法は。何の用をも爲すべからず。いつも〳〵憲法の創定者は先づ革命の犧牲に罹りて斃れざるはなし。我主君は。憲法を創定するなんどの迂策を廢止にし。更らに邦國の基礎を作出し。其のもろ〳〵異同の列邦を統御して。之を忠義愛國の大版圖に變更するの計畫を爲すに若く可らず

夫人　そは。又如何にして。其計畫を爲し玉ふか

フェロール侯　之れを爲すには一策あり。只だ血と鐵との二つに便らんのみ

夫人　オホヽ。また。人を吃驚させることを。被仰りますか」

侯　左れども。愈ゝ拙者が事業の成就いたす其れまでは。尙ほ一層。御身等を吃驚せしむる事あるべし。（卷四第八十四回）

又他の機會に於て（卷三、第七十二回）、フェロールはエンヂミオンにかう語つた。「ヨーロッパとは只地理上の語葉である。ヨーロッパには一の國家もない。余は貴君の國を除かう、貴君の國は地球のあらゆる部分に屬して居り、政治的國家といふよりも寧ろ速かに商業國になりつゝある。余は又ロシヤをも除かう、何となればロシヤは本來東洋的國家であり、その將來は全然東洋に存してゐるからである。」ドイツは如何といへば、彼は地圖の上にさういふ國家を見出すことが出來ない。それは、實質的にはイタリイと同じやうに弱い。「吾が方には、一等國の役を演ずることを許されてゐる王國が二三あるにはある、だがそれは單に演ずるだけである。」（卷三第七十二回）。「それでは一時的にはフランスがヨーロッパを席捲することになるであらうか、」エンヂミオンが問ふ。「ヨーロッ

人である限りに於いては、然り、」これがその答へである。

『エンヂミオン』といふ名の由來として、これは王權黨の戲曲家デェヴナント、デッカア、詩人ヘリック等の友人で、レディ・ビコンズフヒールド（ヂスレーリ夫人）の先祖の一人でもあるエンヂミオン・ポータアといふ人物によつて出來たものといはれてゐる。成る程此の名が最初暗示されたのは、さういふところから出てゐるかも知れない。だが、男性の生涯に對する女性の力を讚美せんが爲めに書かれた書物の題に、而かもその主人公の名として「エンヂミオン」といふ名を選ぶといふのは、一種暗號的にレディ「セリナ・ブラッドフォード」に對する献呈の意をこめたといふことを指摘しても可からう、蓋しギリシヤ神話に於いては、エンヂミオンは、月の女神セレネの戀人となつてゐるからである。本文第三回の終りに、矢張りエンヂミオンの名の由來を說いてゐるが、そこにはたゞチャールズ一世に仕へた廷臣の名に倣つたとのみ說かれてゐる。

三　譯文『政海之情波』について

以上、私は私として原本によつて『エンヂミオン』のことを說いたが、轉じて譯書として『政海之情波』について、二つの點から語りたい、その一は、譯者が此の小說を何う見て紹介したかといふこと、その二は、讀者が此の小說から特に何を受け取つたかといふことである。

譯者渡邊氏の此の小說に對する理解乃至知識の程度を窺ふ可きものに、その譯者自叙がある。私はそれをこゝに抄出するであらう。第一節は、ヂスレーリの政治小說に對する渡邊氏の總論である。

伯の政治小說は孰れも自身の主義經歷を素として傍ら當代に有名なる人士の事略を叙し。或は己れの主義節操を寫し或は反對黨の政策を罵り。時に現在の施政の善惡を評して又將來邦國の運命を讖言する等必ず深意の存せざる無

く。仔細に之を讀めば妙倍々妙にして諷議詠諫。實に穿ち得て快と呼ぶの佳境に入るを得べしと左れば伯の小說を讀むに最も適するの人は伯とその時代を同うして與に同一の政治壇に立廻りしたる英國人より外に其人あるの理なし。自由黨なり保守黨なり各々之を讀めば此所は誰甲を倒罵したる側寫なり彼は某乙を攻擊したる裏面なるべし。こゝは僕を褒めたる所にてはなきか。いや實は君を貶したる寓言ならんなどと其身に引較べ。また其時代に照し恰も。實體の美人を前に具へて左に其寫影の善惡を判ずるが如く。一目瞭然評批交々下るに便なり。左れば讀むものの愉々快々は勿論。更に著者の一身に取りても其願望正しくこゝに在ることとなるに數千里を懸隔てたる日本人が其時代の活歷史をも知らず又その寓意の如何をも探ぐる能はず只表面外形より之を窺くのみにては。所詮本妙味の知れ得る筈もなし。尋常一樣の政治小說。空中の蜃樓左なくば雨間の虹彩にして其の根無し草と看て取るより外に仕方はある可らず甚だ遺憾の次第なり

言聊か極端に奔せたところがあるが、『コニングスビイ』の例によつて此の言の一理あるのが知られる。次に『エンヂミオン』についていふ。——

然れども獨り本書に至りては其大體の立意精神。伯自身が幼時の艱難苦辛より漸く政治海に漕ぎ出し又官途の潮流に楫取りして浮沈去來。幾多の變故を經て初て龍城に珠玉を探り。其乙姫にはあらざれども女皇陛下の寵を得て政海の首領と仰ふがるゝまで。その路筋も判然しあれば文章以外の眞意蓋し粗ぼ得て窺ふに足るべし。この外には三世拿勃翁が襁褓にして皇儲に定まりながら一朝政變。帝室安きを失ひ。幼時海外に潛匿して具さに艱苦を嘗め。及び。恢復を圖りて或は囚はれ或は竄せられ遂に其志を遂げて帝業を開きたるの雄略。若くは俾斯馬克公が幼にして武人の教育を受け中途志を立て專ら外交の術を務めとし。普魯西皇帝を輔佐して日耳曼聯邦を建るに得意の鐵血政略を以てしたる閱歷孰れもその要領を此稗史中に描寫し來り。一部の小乘なるも之を讀めば恰も歐洲大陸の活歷

史を繙くの心地して一層の快樂あることと譯者信じて之を疑はざるなり。

『エンデミオン』の讃として要領を得たもの。次いで、ナポレオン三世、ビスマルク公について、此の小說が實在人物をキャラクタアにした興味を先づ擧げる。

右の外尙當代の人物を寫したるもの極て多し。中に就て政治家には保守黨の總理大宰相デルビー伯(卽ちシドニー・ウヰルトン)、自由黨の總理大宰相パーメルストン侯。急進黨の巨擘。自由貿易の先達たりしリチヤード。コブデン氏露國有名の外交家ブランノー男。(卽ちセルギウス男)、五大洲第一の巨商ロスチャイルド男。英國鐵道事業の開山たりし鐵道大王ホドソン氏。若くは小說家には英の二大著作家サツカレー氏ヂツケンス氏等苟も當世著聞の士は皆な收めて篇中の旦末淨丑たらざる無し是れ亦以て此書の奇觀を添ゆるものなり

渡邊氏の眼光は、進んで此の小說の主眼たる婦人と政治、婦人と社交、政治と社交等の問題に觸れる、この點を力說することによつて、この小說は一面立派に社交小說としての使命も果してゐるわけである。

人文開發するときは社會交際の禮倍々高尙して嫻雅優逸。眞に人生の樂事を盡すを得べし。加ふるに男尊女卑は武斷專制の國の常態にして文明邦國は之に相反し。男は女を敬し。女は男を親み其敬親の交り專ら形而上高雅の處に止まりて少しも形而下卑猥の端に涉らざるを法とす且つ斯る高等の社會に在りては交際上。女子の權力も頗る强く政治上の機密若くは社交間の隱秘まで男子の元を知らざる邊に既に已に詳悉して周旋彌縫以て男子をして其福運を全からしむ。故に妻としては與に立身の計務を議すべく友としては與に處世の要略を諮るべし。知德兼修復た東洋の婦女子とは同日にして談ず可らざるなり本篇載す所の婦人には三世拿勃翁の母后。オルテンス皇后若くは倫敦の女皇と綽名されしジエルシー夫人。三世拿勃翁の后妃たりしユーゼニー內親王。主人公の夫人ビーコンスフヰルド伯爵夫人若くはロスチャイルド家の一人娘アリス孃(卽ち此の篇のアドリヤナ)等。諸淑女貴婦人。內帮外助して

甲斐々々しく交際社會に立働きたる其狀態をも巧に描寫して洩す所あらず。今後交遊社會に立たんとする日本男は素より。婦人なりとも心あらん人は今に及んで此書を讀み以て猛省する所無かる可らざるなり

次に渡邊氏の眼光は、此の小說に含まれてゐる根本問題の一つに深く觸れる。ヂスレーリの政治小說一般に對し、乃至『エンヂミオン』に對して、渡邊氏が如何に精細な理解をもつてゐたかといふことを語る最も好い證據であらう。

歷史は事の眞を敍るもの。稗史は其假を描くもの。兩者の區別判然たるに似たれども抑も其實に就て論すれば假は乃ち眞の分條にして例へば猶體あつて後ちに影あるが如く。其體の長短大小は乃ち其影に長短大小ある基因たるなり。左れば正史上に於ては自由保守のその主義を殊にし平生互に相容れざるものなれども之を小說に構ふるに及んでは異を剪り同を索めて。不同一の人を同一の壇面に立たしむるも實に已むを得ざる次第ならん例へばビーコンスフヰルド伯自身が擬する所のエンヂミオンは政治壇上にありては保守派の忠臣。復た自由主義を容るゝものに非ずと雖ども。篇中ローハムトン侯を自由黨の總理たりしパアメルストン侯に像り。エンヂミオンが其麾下より出てゝ立身したる。若くは保守黨の首領デルビイ伯に擬したるシドニー。ウヰルトンが反對黨の內閣にローハムトン侯等と趨走す杯此等のことは實際にあるまじき話なれども小說に於てはシドニー。ウヰルトンをローハムトン侯內閣の一員と爲し。若くはエンヂミオン宰相となるに及んでリチャードコブデン氏に擬りたるソルンベリーを擧げて閣員と爲したる如き孰れも虛構空架の談にして俄に之を見れば詐も亦太甚しきが如くなれども是乃ち小說の假なり影なる所以にして苟も其神を失せざれば其體の如何は深く咎むるに足らざるなり。且つ伯は其本傳にも載せたる如く。初めは急進の主義を持して後ち保守黨派に與せしは實に當時の大勢に迫られて然りしもの。伯が磊落の氣象にして決して區々たる保守自由の一局部論に齷齪すべき謂はれなきなり即ち其期する所は國家人民の福祉にしてこれを外に主義無かりしは伯の心事を知る人の皆肯諾する所たり、左すれば伯が保守自由急激三政黨員の區別　沒して寛容

大度この架空の稗史を編したるは寧ろその眞神を寫したるの深意とも云ふべく。たゞ當時の政治社會に其眞を行ふ能はざりしを憾み之を稗史小乘に托して其不平を訴へたるものならん歟。讀者幸にこの旨を了せられなば伯も亦地下にありて吾志を知るの厚きに含笑する所あらんと信ず

以上に依つて、渡邊氏の此の小説に對する理解乃至知識の程度が略ぼ完全なものであつたといふことが、（第二）の「エンヂオン」研究と比較して見て、一應首肯されるところである。氏の譯者としての豫備知識は恐らく關氏以上であつたに違ひない。

こゝで一顧したいのは、その飜譯の態度であるが、渡邊氏は、口譯速記の方法によつた。速記者は市東謙吉であるが、此の大部の譯書を速記した市東氏の勞も謝すべきものであらう。渡邊氏の口譯は勿論逐字直譯ではない、一篇中關係の少き一二冗長の議論は却て讀者の煩を來すならん」といふので、省いたといふ、又字句の跡についても、直譯風でない。といつて所謂意譯に流れたものでもない、原文を離れず原意を酌んで、而かも文意語句の明暢を期した點に特色がある。然し仔細に原文と譯文と比較するに、何れかといへば、稍や意譯に近い出來榮のものとなつてゐて、決して精嚴なものではない。間々誤譯を混じてゐることがあり、字句の解釋に於て自己流のところもあり、又極めて面白い一節の對話が、譯者に了然たらぬ一典故、一警句があるために全然省かれてゐる如き箇所もなくはない。然し一切を出入した上で、先づ先づ此の種の物の中では佳譯に屬するといつて可からう。

譯者が此の小説に見たものゝ如何は以上の如くであるとし、讀者は何を見たであらうか。

勿論譯者の見たところと讀者の見たところとさう根本的に違つてゐるとは思へない。然し立場の相異で多少所見の相異あることを免れないのは、『春鶯囀』の例で知られやう。此の小説で讀者が第一に興味をもつたのは、實在の大人

物をモデルにしてヂスレーリ自身の立身成功の迹を描いたといふ點であらう。實在の大人物といつても、殊に當時の讀者の熟知してゐたに違ひないナポレオン三世とか、ビスマルク公とかいふ歷史的人物を十分に活躍させたといふ點が殊に英雄崇拜癖のある當時の日本人の心を惹いたものであらう。エンヂミオンの經歷は必ずしもそのまゝヂスレーリの經歷になるものでなく、幾分表徵的に解されなくてはならぬものである。然るに、讀者は（而して譯者も或る程度までは）、エンヂミオンの經歷そのものをとつて、直にヂスレーリの實傳なりとし、これに無限の憧憬を抱いたのである。以上の二點に於いては、私の見た限りの新聞批評が略ぼ一致して認めてゐるのでも、讀者の見たところの一班を概することが出來やう。（十九年十月廿一日東京橫濱每日新聞、十月十九日時事、十月十五日繪入朝野、十月十六日讀賣、十月二十日每日新聞、等々）。

從つて、讀者が先づ注意したのは、幾分ぼかして描寫された歷史的事件、及び英國政界の實情であらう。これは、此の小說を必然的に政治小說と見做した當時の讀者としては、當然であつた。エンヂミオンが政治上の成功の元素は、堅忍着實、機を見て進むといふことにあること、交友の利（女性の友人の助力ばかり强調されてゐるが、男性の友人ウォルダアシェーアの如き、反對黨ながら多大の益を與へてゐる）、先輩の忠言もこの成功に必要なること、殊にセルギウス男（本篇セルジュス男といふ）、フェロール伯の敎訓の如きに取り分けてさういへる。エンヂミオンの議院入りで、英國の選擧事情、議會の空氣、議會の慣例の如きものが知られる。又內閣の更迭には、政策と民心との調和如何が重大な役を演ずること、何れにしても政策の爭ひで、國利民福をのみ眼中に置いた公明正大なものであることなどが知られやう。殊に、反對黨同士の私交が、政策の爭ひが如何程激甚であつても、決して害はれぬ如き、黨爭といへば他は眼中にない當時の日本の政黨者流には如何に異樣に映じたであらう。又ローハムプトン公がエンヂミオンを先手に使つての對政府駈引は、議場に於ける討論の好模範を示したものである。

政治界を動かす一種の人間として、新聞記者に銀行家を並べた大膽な出方は、これ又當時の一般政黨者流の眼を見開かせるに十分であつたらう。

勿論日本の政治的動向も、必然的に經濟的基調に乘つて動きつゝあつたから、此の小說中のさういふ方面の記述も、注意して讀まれたに違ひない。經濟的政治家といはれたシドニイ・ウィルトンが、此の篇で可成り重要な活動をする、人民の經濟的環境を觀察して政治改良を試みようといふ彼の考へが、至るところに見えてゐる。劵狀黨が猖獗を極めんとするや、エンヂミオンを視察に赴かしめ、エンヂミオンに、政治家が人民の經濟生活を重視すべきものなることを敎へたのは、彼であつた。

經濟方面では、自由貿易論が强く主張され、製造家の一部はこれに共鳴してゐたが、何といつてもその中心は輸穀法非輸穀法の議論であつた。非輸穀論は最初は空論として無視されるが、社會狀態が劵狀黨を生むまでになつて、遂に實行されざるを得なくなつた。而かもその實行されたときには、もう遲い位であつた。

劵狀黨の活動については、今更述べるまでもないが、それにつけても、これの起つて以來資本、勞働の關係は可成り尖銳化して來、勞働側では資本家を敵と見做してゐる。職工エナックの共同勞働の理論には立派に社會主義的なものが見えてゐるが、それが當時の日本として一應耳新しく聞えたとして、更に一段と深い興味をもつに至らなかつたのは、何故であらう。恐らく、この譯書の出た當時としては、日本勞資社會の實狀がまだそれを誘導するまでに深刻化しなかつたからであらうか。

更に一つ注意すべきは、鐵道熱である。これによつて一八四、五〇年代の不振な英國財界は一時確かに未曾有の活氣を呈した。これは勞資双方のために「新捌け口」とされ、失業救濟の福音と歡迎されたのである。これは當時漸く鐵道熱の勃興して來た日本にとつて、格別の興味ある一項であつたらう。鐵道が民間經營の間は可かつたが、議會に

鐵道熱が入ると、議會がいつとはなく金儲の爲めに利用され始めて來る。こゝに日本の青年政治家達の鑑みなくてはならぬところがあつたのである。

尙ほ鐵道と流通資本固定等種々の問題があるが、わざとさういふ點に細かに立ち入らぬことゝする。

次に注意を惹いたのは、社交生活の描寫である。當時日本も歐化政策から割出された皮相的文化生活が歡迎され、社交といふことも、人民の生活上必須のものとなりつゝあつた。だがその點では何うしても上流貴族の生活が萬人注目羨望の焦點であり、文學方面でも好んでこれを描いて喝采を博しようとした、然し上流貴族社會に對する知識が不足なため、さういふ描寫は恐ろしく不滿足なものたるを免れなかつた。然るに『政海之情波』に於いては、眞物の、最上の貴族や大臣、貴婦人紳士等の社交生活が澤山に紹介されてゐる。この點が當時の讀者の要求に合致したのである。例へば、卷二第三十八回、大銀行家たるニューシャテルの大臣招宴の描寫が、如何に寬濶な、盛大なものであるか、大臣連の打ち寬いでゐる有樣、貴夫人連の喋々長舌を弄する有樣、紳士連の阿諛追從の態度、主人側の奔走周旋の樣子、室內の飾り付から料理酒品の粹美に至るまで、力を盡して描かれてゐる。これ等の描寫こそ、當時の讀者の最も歡迎喝采するところ、爾後の小說家(例へば南翠の如き)、又は政治小說でこれを下手に眞似た如き描寫が甚だ多いのでも、それがさうと知られるであらう。

殊に目を驚かすのは、かゝる社交宴會の席に於ける婦人連の活動である。婦人の政治的活動はかゝる社交の席に於て高潮に達する。婦人の社交界進出、婦人の政治界進出、社交と政治などといふ問題も、當時の日本の識者先達の間には盛に論議批評されてゐたのであるから、此の點からも『政海之情波』が、當時の讀者に愛讀されるべき理由をもつてゐるのである。而して、『エンヂミオン』の第一の使命が婦人の政治にに對する勢力を力說正認するにあるといふ點を考へて見ると、當時の讀者は『政海之情波』の此の點を更に更に强調しても可かつたらうと思ふが、社會進化の

度に差異があり、女性の社會的位地にも變化があるから、『政海之情波』に對する女性進出の點からの興味がこの程度に止まつてゐたのは、止むを得ないとしよう。

然し今日の吾等からいへば、此の點が如何にも際立つてゐることを否定出來ない。此の小說が元來女性の政治を動かす勢力を力說しようとしたものなることは、今も述べた通りであるが、それにしても此の主旨が、實に豫想外に徹底的に全構想に行渡つてゐるのである。當時の人々の印象は兎もあれ、それが今日吾等が『政海之情波』を讀んでも實に强く鮮やかに映つて來るのである。マイラ(ミラー)、ニューシャテル孃、モントフォート夫人の三女性が、エンヂミオンを勵まして政治世界に乘り出さしめ、彼を援助し、彼を鞭撻して遂に總理大臣まで漕ぎつけさせる。この三女性の勢力の偉大なことは勿論、そればかりではない、モントフォート夫人の敵方たる保守黨派のビイマリス夫人の勢力の如きも、實に素晴らしい、それはエンヂミオンの選擧運動の際(第六十八回)に見ても知られるのである。婦人連がそれぞれ最屓の男性を助けて政治上に志を得させるやうにする。そればかりでない、婦人同志が積極的に政治理想をもち、或は自由、或は保守と分れて、婦人同志が互ひに政治的競爭をする、ゼノビヤ夫人、モントフォート夫人、ビイマリス夫人の間の關係を見れば、その邊の事が、明白に看取される。マイラが夫のローハムプトン侯を動かしてフロレスタンに好意ある政策を取らせる(第五十四、五回)如きも、政治外交を婦人の勢力で何れだけ動かすかといふことを語る好例である。當時の日本の政治小說にも、この女性の政治進出が、幾多の實現を見せてゐるが、これは勿論當時の新興日本の政治理想の一つとして、そこに反映してゐるわけであり、從つて、當時の政治小說が、『政海之情波』に絕大な支持者を見出し、或は標準的な模範を見出したことも、想像がつくであらう。

女性の性格の描き方、これは前記のバックル氏その他が概して餘り賞讃してゐないが、此の頃の日本の小說作家のテクニクから見ると、矢張り可成り成功したものといはざるを得ない。マイラ(ミラー)の性格は事實女らしくない、

專ら大志を抱き、エンヂミオンを政治的に成功させ、我家を再興するといふ點に渾身の血を注いで、生きた女性といふ感じの少ない性格である。この爲めにバックル氏から、此の性格描寫はよく出來てゐないと極めつけられてゐる。それは一應も二應もその通りであらう。然しマイラは必ずしも冷血打算の怪物で感情の無い女であらうか、私はさうは思はない、彼女はフロレスタンに對しては最初から女性であつたと見るものである。それは兎も角として、當時の日本の小說からいふと、此の種の大志ある野心に燃えた女性といふ性格は、文學上極めて珍らしいものであり、僅にリエンジイ『慨世士傳』の那以那姬にその先驅を見出す位のものである。次にモントフォート夫人、これはバックルも賞めてゐたやうに、立派な出來である。女性中で最も立派な性格である。此の人も然し性質英俊、まるで男子の如く、政治上の奔走を好み、國事に努力することを欲し、自分の男友を助けて政治的成功せしめるのを無上の快樂としてゐる。かういふ女性も、當時の日本社會に珍しい、文學上にも勿論である。これについでは、ビイマリス夫人、これも相當な出來榮えであらう。アドリヤナ・ニューシャテル孃も明朗な好女性で、自らエンヂミオンを愛しつゝ、エンヂミオンの心がモントフォート夫人にあるのを知り、諦めてウォルダアシエーヤと婚し、而かもエンヂミオンを飽くまで助力する。當時の日本の女性なら大愁歎場になるところを、一切目を瞑つて人に語らず、朗らかに片つけてゐる。エンヂミオンから結婚の贈物を受ける時の言葉は、味があつて可い。これ等女性のかゝる特異な性格が、爾後の幾多の政治小說社會小說に於いて模倣されることになるのは、いふまでもない。

マイラの結婚利用主義は、恐ろしく大膽な新しい考へと思はれたことであらう。政略結婚は日本でも珍らしいことではないが、女性がかう大膽に、結婚をもつて政治上社會上成功の武器とす可しと主張し、その確乎たる主義から割出しでエンヂミオンとアドリヤナ・ニューシャテルを結合させようと努力する如きは、(第五十七、第六十五、第八十二回)當時の日本の普通の結婚觀などからいへば、驚駭す可きものであつたらしい。然し一部の識者には、マイラの

考へを我流に解し、夫妻互助（精神的にも物質的にも）の福音と引直して、賛成した人々もあつたらしい。末廣鐵腸の政治小說『雪中梅』、『花間鶯』等には、結婚を利用して政治的成功を得るとも見られる例が描かれてゐるが、多少此の邊の考へが加味されて居るかと思はれる。

『政海之情波』に今一つ新しい分子と思はれるものは、その宗教的分子である。デスレーリは特にカトリック教興復の現象を描かうと試みたのであるが、これを描かうとした際に自ら政治・宗教の問題にも觸れてゐる。然し當時の日本の社會でこの邊のことにまで眼光を走せた人々は少なからう。然し日本の政治界に於いても、基督教が自由主義を應援し、神道佛教が保守主義を後押する形で、政治界の方から宗教論を持ち出して讀者の注意を惹いたこともあつたのであるから、全然手答へのないこともなかつたらう。

四　『政海之情波』譯者渡邊治氏

『エンヂミオン』の譯者が主人公エンヂミオンにも似た才物であつたことは、勿論偶然の一致ながら興味のあることである。渡邊氏の親友だつた箒庵高橋義雄氏はその回想錄たる『箒のあと』に渡邊氏の才物振りを繰返し繰返して書いてゐる。此の書の記事、その他の資料に據つて、渡邊氏の小傳を掲げて置かう。

渡邊治、台水と號する（合して治の字となる）。水戸の人、水戸藩士渡邊某の子で、下市三ノ町の家に生れたといふ。「代議士列傳」その他には安政五年生となつてゐるが、これは選擧の關係から故意に繰り上げたもので、事實は文久三年生れであつたらしい。早く父を失ひ、母の手に生長した。高橋氏は彼のことを、「才學夙[illegible]、少年の頃より其擧動が大人の如く、然も負けず嫌ひで大に勉強したので、上市の寺門勤氏の塾に出入する頃には神童の評判が高かつた」（上記書、二四六頁）。といつてゐる。寺門氏は彼の叔母婿であり、水戸一といはれた有名な漢學先生であつた。

彼は漢學を主とした所謂水戸學風で先づ鍛はれたものである。寺門塾から、彼は上市の自强舍に轉じた。これは、一種の共同學塾で、高名な先生が數名出勤し、上下兩市士族の子弟は大方これに通學することになつてゐた。小原俊臺、佐々木籌、渡邊正順などいふ先生が居り、通學者は塾有の書物を借覽することを許され、又時々先生の講義を聽き、或る時は詩文の添削を乞ふといふやうな、極めて自由不規則な敎授法であつた。彼はこゝに十五から十六まで、明治十年頃から十一年へかけて通つた。尙ほ自强舍時代のことについて、高橋氏はかういつてゐる。

> 塾長は誰と定まつては居らぬが、幹部制で其部長とも見られたのは劍道の達人で然かも士族中の勢力家であつた大關俊德で、學課は讀書作文を主とし、知名の漢學先生が出席して其敎授に當り、又有志者の希望に應じて擊劍を練習せしむる道場もあつた。生徒は凡そ五六十名であつたが、水戸人で後年名を成した者は大抵此自强舍の出身で、井坂直幹、石河幹明、渡邊治、村田彬、越智直、龜井善述、小池友德、眞木謙、石河幹德、戸田忠正等は皆な當時の通學者であつた。處で私は明治十年より十一年の三月頃まで此自强舍に通學して居たが、此間に西南戰爭あり、水戸は概ね西鄕贔屓であつたから、何となく當時の政府を喜ばず、思想は全く儒敎固まりであつた。其處で私は井坂直幹、渡邊治の二親友と相談して、井坂の澁井の宅で每月三四回講義會を開いたが、彼の淺見絅齋の編述した靖獻遺言を最初の輪講本に選定した處を見ても、當時水戸學生の思想が那邊にあつたかを知るに足らう。前記の通り自强舍の敎授法は漢學輪讀が大眼目で作詩作文が之に次ぎ、時々先生より課題が出るのが、楠正成、同正儀、新田義貞論など云ふ南北朝關係の人々に關する者多く又記事文では下那珂川記、袋田觀瀑記など云ふ題目で、夫れに續いては送某之於東京序などが最も人氣ある課題であつた。添削は小原、佐々木兩先生が擔任されたが、井坂直幹氏の楠正儀論が大層小原先生より褒められた事があつた。(『篩のあと』上、三六頁―三七頁)

更に、當時の水戸書生の氣風について、高橋氏は面白い回想を留めてゐる。以上の如き漢學書生が何うして後に見る

文明開化の使徒と變るに至つたか、これを讀むとよく分からう。

西南戰爭の結果は日本思想界に非常な變化を起したやうだが、水戶に於ては舊思想が最も濃厚であつただけ夫れだけ一層感動が深かつたやうである。水戶は曾て攘夷論を以て維新の首唱と爲つたが、漢學の盛んであつただけ深く浸み込んだ舊思想は容易に拭ひ去られず、維新後の文明思潮には甚も後れ勝で、新政府の施設は總て之を喜ばず、當時政府反對の西郷に對して無闇に同情を表して居つた。然るに西南戰爭で其本尊が破壞されたので忽然迷夢を破られた感じがあつた。左れば明治十一年五月大久保內務卿暗殺の報道が自强舍に達するや、何の事とはなく寄り集つて居た學生がワッと一度に立ち上つて頻に拍手した、折柄茨城縣學務課長志賀某が來合せて、今のは何の拍手であつたかと聞いて、其事情を知り、怪しからぬ學生共かなとて大に叱責されたので、學生一同稍々時勢に悟る所あつたが、一般の風潮に後れて敎育は猶ほ漢學一方に傾いて居た水戶地方も、此時よりして漸く變化を生じ來り、翌十二年より水戶に中學校を設立すべく、（十一年に）師範學校構內に其豫備校を設くる事と爲つたので、私等も從來の如き不規則なる漢學敎授に甘んじて居つては、後來世に立つて事を成す能はざるべしと思ひ附き、左らば是れより英學を修めて日進敎育の門に入らんとて、私は渡邊治、石河幹德、村田彬、越智直、諸氏と申合せて右豫備校に入學する事に決心したが、是れが自强舍連中に聞えたならば必ず何かの脅迫が起るであらうと、大秘密にして時機を待つて居る間に、井坂直幹氏なども稍々時勢に目醒めて來て、不思議にも自强舍に一部傳來して居た福澤先生の『文明論之槪略』を讀み始め、是れは中々馬鹿にならぬから君も一遍讀んで見たら何うかと私に密告された事があつた。其中慶應義塾出身の松木直巳が師範學校長として水戶に來り、大に福澤流の文明論を振り廻したので、自强舍連中も漸く款を師範學校若くは中學校の敎授連に通ずるに至り、福澤先生著の西洋事情、學問の勸め、小幡篤次郎譯述ヱイランド經濟論、西周譯心理學など云ふ英書譯文を讀んで其不審を質問するやうに爲り、純漢學塾の學生

も漸く英學先生の門に出入する有樣とはなつた。（三八頁—四〇頁）。高橋氏は、新人松木校長の感化についてから語つてゐる、恐らく渡邊治も、高橋氏と略ぼ同樣な感化を松木氏から受けたものであらう。

當時の師範學校長は慶應義塾々員の松木直已で、豫備校の英學教授をも兼任して居た。松木氏は中津出身で最も濱野定四郎氏に親近し、慶應義塾には入學しなかつたやうだが、福澤、小幡兩先生とも同鄉の關係があつた爲め在京中は勿論、水戶に赴任後も常に音問を絕さなかつた。濱野氏の薰陶で英學も相當に出來て居たが、爲人機敏で辯舌が達者であつたから、福澤先生直傳として漢學排斥論やら民權論、國權論やらを振り廻し、私等を煙に卷いて仕舞ふので、私等も始終難問を試みて議論を上下したが、全然小兒扱ひにされて殆んど切り込む隙がなかつた。其間にミルの代議政體、ギゾーの文明論、アダムスミスの經濟論など云ふ、當時初耳の新論を斷片的ながらも吹き込まれて私等は大に啓發する所があつたので、當時の水戶に於ては彼は唯一の新人で、其一言一行は常に私等の視聽をそびやかして居た。（四一頁—四二頁）

明治十一年中學校創立と共に、渡邊氏はこれに入つて、十四年六月までゐた。高橋氏の中學時代の記述には次のやうにある。

當時の中學校は後年盲啞學校長として令名のあつた町田則文氏が校長で英學及び化學を擔當し、又假名の硏究を以て學士院賞を受け、次いで文學博士と爲つた大矢透氏が圖畫科を受け持ち、漢學は佐々木簀氏、理科は越後出身の上遠野富之助氏が擔任して居つたが、學生は第一期生として私の外に渡邊治、石河幹德、村田彬、越智直等の一級併せて二十四五人であつた。私は下市三ノ町の實家より學校まで二十五六丁の距離を每日徒步で通學したが、渡邊治は私より三つ年下ながら才學夙成で、何時でも首席を占めて居るので、私は何時か一度は其首席を奪はんもの

と、渡邊を競爭の目標として實に火の出るやうな勉强を續けた。

明治十四年は、渡邊氏の身の上にも高橋氏の身の上にも大變化が齎らされた年である。それは、足かけ四年間在學して最早や四ケ月で卒業する筈であつた中學校を退學して上京の上、慶應義塾に入學することになつたからである。さうして此の上京の端緒は全く松木直已によつて開かれたのであつた。

その仔細をいへば、此の頃福澤諭吉は在朝の大隈、井上、伊藤の三參議と協議し、立憲政治を布くに先だち、民間の政治思想を開發するため、自分が主筆となつて一大新聞を發行する案を立てた。そこで彼は新聞記者たるに適する文章家を養成する必要を感じ、內々物色してゐたところ松木直已は、福澤に水戸中學に文章を能くする少年が四五輩ゐる旨申出た。すると福澤は、その學生等がそれ程文章の才があるなら、その學生を速に慶應義塾に入れて、卒業後新聞記者たらしめたら如何であらうか。その間の學費は自分が負擔しても可いと言つたので、松木氏は大悅びで水戸へ歸り、直にこれを高橋氏と渡邊氏に傳へ、成るべく福澤の意に添ふやう慫慂した。（二人の文才想ふべし）青雲の志のあつた二人は、二つ返事で承諾し、早速退學して上京した。それと同時に松木氏から石河幹明、井阪直幹の二人にも同樣の相談をしたので、二人は高橋、渡邊より稍や遲れて上京し、矢張り福澤先生庇護の下に慶應義塾に通學することゝなつた。渡邊、高橋の上京は明治十四年の六月であつたといふ。渡邊十九歲、高橋二十一歲。二人は直に入塾を許されて一心に勉强した。然し此の時の新聞計畫は實現されず、福澤先生はその代りとして獨力で、明治十五年三月時事新報を發刊することになつた。、

明治十五年四月、渡邊は高橋氏と同じく慶應義塾を卒業し、翌五月直ぐさま時事新報に入社した。こゝで彼は新聞人たる活教育を八年間學んだ。この八年間について、渡邊氏自身かう語つてゐる、——

先生を始め諸君も御承知の如く私は去る明治十五年時事新報創立の後間もなく入社致しました今年迄出入八年の間

時事新報社の業務に從事して唯だ單に新聞記者たるの資格を以て筆硯を弄びたるに止まらず、或る時は庶務會計に當り、又或る時は印刷の事業をも引受け、凡そ時事新報が私に與へたる丈けの新聞事業のあらゆる便利は此の八ケ年の間に私の一身に着き添ひました、是は私に取りまして無形の財寶即ち一種の價値、他人の容易に買ふ可からざる教育にして云々(中略)サテ又既往八年の間に起りたる一身の境遇を考ふるに年一度若くは數度、地方漫遊の途に登り、到る處同窓同塾の友を尋ね又或は地方の有志家を問ひ知識研究の一方便と致して居りました云々（廿二年五月十日、交詢社送別宴謝辭）

此の間特記す可きことは、明治十七年十二月の朝鮮の變が原因で、日清兩國政府間の葛藤急ならんとした時、伊藤博文は李鴻章と天津で折衝し、兎も角平和的解決を告げた。この時渡邊氏は時事新報から特派されて北京へ赴き、談判の模樣を通信した、それは十八年三月から四月にかけてのことで、別に詳しい記行や見物記がある。又、その平素の持論は、慶應義塾流の獨立自治を標榜した文化的改進主義であつたが、實業振興を基調とした、經濟論中心の氣味があり、彼自身の所謂經濟政治がその信念であつたかと見える。彼は又、多忙な記者生活に於いて閑を割いては盛に著譯に從事した。その範圍は政法歷史から文學に亘つてゐるが、殊に文學には可成りの趣味があつたらしい。著譯のことは後に述べよう。

新聞人としての彼は時事新報に自由に手腕を揮つたのみならず、別に二十一年今日新聞を買收し（金港堂主原氏と共同にて）これを「都新聞」と改號して經營の任に當つた。一方又、その新聞人としての立場を利用して井上馨、山縣有朋、伊藤博文等に近づき、漸々に政治家として打つて出る素地を作つた。井上とは可成り共鳴するものがあり、井上の自治黨運動にも同情者の位地に立つたものである。

明治二十二年春、彼は愈々政治界に踏み出す志を固めたものと見え、福澤先生にも相談して社務を緩めて貰ひ、「各

地の人士に交際し各地の事情を視察して我見聞知識を擴めん」と地方漫遊に出かけた。此の時彼の足跡は中國から九州に至つたが、その歸途大阪を經るや、端なく一友（恐らく當時藤田組支配人をしてゐた本山彦一）から大阪毎日新聞社の内情を打ち明けられ、彼にその引き受け方を勸められた。（その内情については、上卷「佳人之奇遇」の研究の條、柴氏傳、五二二頁前後參照）。彼は歸京後愼重に考慮した揚句、斷然これを引受けるに決し、此の年九月時事新報會計課長を辭し、下阪した。下阪直前、福澤先生を始め、時事新報の同僚及び慶應義塾の同志朋友が交詢社で送別の宴を張つて大にその行を盛んにしたが、彼はその席で今日一身上の方向を語つて、自分は教育及び實生上實業家になれぬから、如何に實業の中心大阪に赴いても實業家にはならぬ、自分は學者として記者として、實業家を指導する位地に立ちたい、又平素の持論たる經濟政治を實現せしむるため政治社會に打つて出たいといつた。だから彼は下阪について別に何の條件もつけなかつたが、たゞ政治上の目的で地方漫遊をするだけは自由にしてくれといつて許されたのである。

彼が着任早々如何に不振の大阪毎日を盛ならしむべく努力したか、それは『大阪毎日新聞社史』なり『本山彦一傳』なりに詳しい。彼は數回に亘つて改革案を發表し、着々それを實行に移した。その要點は、政治上不偏不黨で大阪實業界の機關となること、内外の經濟政治通信を迅速確實ならしむること、小說商話の掲載（商話とは古今内外富豪の逸話）、日曜祭日休刊の復活、定價引下げ、東京支部の設置等であつた。中に就いて、小說掲載についての彼の抱負は可成り大なるものがあり、その消息が度々示されてゐる、これも吾等は後に述ることとにする。

彼は先づ本山彦一氏を介して大阪毎日を大阪實業家三十餘名の共有機關たらしむるに成功し、資本金五萬圓の株式會社とし、自ら主筆兼社長の位地に就いて、思ふ樣手腕を揮つた。彼の經營は着々實功を示し同紙隆盛の基を開いた。更に二十三年春、餘儀ない事情で東京の朝野新聞の社長も兼任したが、これも新聞人としての見事な手腕を認め

られたからであらう。

二十三年七月の總選擧には、中立を標榜して茨城縣第一區から出馬し、碌に運動がましい運動もせぬのに、見事に當選した。鄕黨に於ける彼の名望見るべきである。彼は此の時滿三十歳に達せぬので、有體にいへば被選資格がなかつたのであるが、何とか工夫して生年月を繰上げたものであらう。從つて議會始まつて以來彼程年少な代議士はないのである。

いよいよ議會開會となるや、中立派代議士の七十餘名は颯然團結して大成會を形成し、自由、改進に對して天下三分の策を畫して、世人をあつと云はしめたが、その黑幕の一人は渡邊氏であり、流石の山縣公等も政治家としての彼の將來に囑目したといふ。大成會は「政治上ノ實際問題ヲ研究シ其結果ヲ以テ議政ノ方針トシ」「想像ヲ以テ政綱ヲ畫カス、純理ヲ以テ實現ヲ議セス、專ラ事實ノ問題ニ付公平ノ判斷ヲ下シ、以テ憲法政治ノ大成ヲ期セントス」るを趣意として成立したものであり、必らずしも保守主義でも御用黨でもなかつたのであるが、政府大官に關係のある人人が多く加入してゐたので、自然政府方と見られ總體に守保的な空氣を示してゐた。彼の如きも御用臭ある一人と見做されてゐたが、これは然し彼の心事を知るものではなかつたらう。

此處までの彼の活動は超人的といつても可い、然し彼はその爲めに意外に高價な代償を拂つた。彼は元來肺に持病があつたものか何うか、この頃からその肺患が昂進し、二十四年第二議會以後は、須磨の別邸に起臥する身となつた。かくて大好きな政治活動は漸く一歩を踏み出したのみで遂に斷念せざるを得なかつたので、殘餘の心血を大阪每日の經營に注いた。木內愛溪のドイツ留學、門田正經の濠洲特派、寺門（後彼の養嗣子）己之次郎のシカゴ大博覽會特派の如き、病間の彼によつて實現された英斷であつた。かくて事實その心血を注ぎ盡して、二十六年十月十五日須磨の別邸で歿したのである。享年僅に三十を超えたばかりであつた。高橋氏は彼を弔して「彼若し長く政界に存在せ

ば大臣は勿論、或は首相の印綬を帯ぶる事を得たであらうと思はしめたのは蓋し稀的天才と謂ふべき者であらう」といつてゐる、恐らく當つてゐるかも知れぬ。

渡邊氏の著譯で私の知り得た限りのものを掲げよう。

明治十七年「政法哲學」（二冊）　濱野定四郎共譯

○英國有名ノ哲學者スペンサー氏ガ畢生ノ力ヲ悉シテ著述シタル社會學原理ノ中主トシテ政治法律ノ運用及進化ヲ詳論シタル者云々

明治十九年「政海之情波」（四册）

明治二十年「鐵血政略」（四冊）

○本書ハ獨逸宰相俾斯馬克公ノ傳紀ヲ本トシテ歐洲最近四十年間列邦國政政略ノ變化關係ヲ述ベタルモノ云々一名歐洲最近四十年間政治史

明治二十年「歐洲戰國策」（一冊）

○方今ノ形勢歐洲ノ列國動モスレハ又正ニ搏擊セント欲シ戰雲亂霧全歐暗澹ノ狀アル事普ク人ノ知ル所然レドモ戰爭ノ起ル必ズ其禍因ナクンバアラズ、本書ハ白耳義國經濟博士ドラブレー氏ノ著即チコノ禍源ニ溯リ、十九世紀ノ今日列國ノ間ニ戰爭ノ免ル可ラザル原因十有三種アルヲ說キ云々

明治二十一年「鏡花水月」（一冊）

○シエークスピヤ「間違ひの喜劇」の譯

未詳　　「警世私言」

最後に渡邊氏の小説論及び小説に就いて特に一言したい。

渡邊氏が何時頃から何ういふ因緣で小說を好むに至つたか、傳記資料が少ないので明確にいへないが、少年時代から。文學癖があり、小說稗史等も愛讀したものであらう。それが上京後に於て西洋小說に接し、習癖をいよいよ甚しくしたものと見られぬであらうか。或は西洋社會に於ける文學小說の位地、社交と小說、紳士的敎養と小說、さういふものゝ關係を聞知して、彼の如き文化主義者は益々これを嗜むに至つた。その痕跡たるものは、上記著譯目錄を見れば分かるであらう。然るに彼が大阪每日を主宰して紙面の改良に任ずるに及んで、その改良の一現象として、從來殆んど政治經濟一點張りの大阪每日に、大に文學趣味を誘入して大阪人士の感情を高めようとした。紙面改良の廣告中小說に關する條を見れば、彼が如何に掲載の小說に力を入れたかといふことが、一見して知られるのである。卽ち從來の小說記者宮崎三昧、羽山菊醉の外に、西洋小說を黑岩淚香に譯さしめ、新作脚本を竹柴其水に草せしめ、講談速記を三遊亭圓朝一派に乞ひ、改良小說を都新聞主筆で文壇の新人たる日置海鶴に書かしめる案を立てた上に、自ら一役買つて、自分は政治小說を掲げることにした。さうして此のプランは多くプラン倒れになつて實現しなかつたものゝ、彼の小說執筆だけは實現し、續々と大每紙上に掲載されて、台水散史の名は關西文壇の一新偉力となつた。當時彼は社說を草し、商話を書き、社務を整理し、交際に應接し、實に多忙に多忙を重ねてゐたのであるが、それに拘はらず、小說に筆を染めて止めなかつたといふことはよくせきと言はざるを得ぬ。かゝるプランを立てた彼に一家の小說改良論がある、その要領を拔いてお目に掛けよう、曰く、——

元來小說事たる小子亦其考へなきにあらず、ソモ今の小說は流派を以て之を分つ新體小說あり舊筆法の小說あり又は筋書正本風の小說あり或は飜譯體若くは圓朝流の講談體又近來に至ては言文一致體あり實に今日の小說世界は革命大亂の時代にして又其長所に就て論ずれば各派自ら各派の長所あり而して其缺點より論ずれば各派共に同く氣に喰ざる所あるが故に其短所をのみ咎めて其長所を採らざれば何れの小說も見るに足るものなかるべし、又其の長を

採て短を捨る場合には今の小說一として見るべからざるものなし依て今後本社の小說に於ては小子は左の如き順序を立て一改良を試みんと欲するなり（二十二年五月二十一日大阪每日「小說に就ての意見」）

「左の順序」といふのが則ち前に擧げた西洋小說、筋書小說、講談速記、改良小說の順序で、此の各種小說の精英を讀者に味はゝしめて、自ら文學趣味の向上を計らうといふのである。「一改良」の語は、こゝでは單に「採長補短」といふ以外に明確な意味をもたされてゐないが、恐らく大阪の讀者を眼當に新聞小說の改良をするといふ意であつたらう。その西洋小說を揭げる趣意はといふと、——

西洋小說の趣向は日本小說の趣向に比べて變化多く妙味多きは云ふ迄もなき事實なれども東西趣を異にし彼此人情の相違あるより西洋小說は兎角面白からず或は學者流に至りては西洋の小說を愛讀すれども婦女子若くは下　の人に至ては日本古來の小說ならば兎も角も、西洋小說の新趣向に至ては頓と其腦髓に入らず、而して小說に尙ぶ所は能く時の人情世態に合して人の喝采を博するに在るものなれども其喝采の聲を高くせんと欲せば勢ひ多數の人の氣合を度とし取捨折衷せざる可からず乃ち西洋小說は如何に新趣向に富むにせよ世間の評判好からぬを意とせざるは甚だ小子の取らざる所なれども他の一方より考ふれば今や文學日に開け人情舊を捨て新を悅ぶの世なれば我社に於ても婦人等の嗜好を損ねず又多數愛讀者の御機嫌に戾らざる範圍の內に於て時々西洋の新案小說を極て平易に日本風に書直し以て小說の新機軸を世に弘めんと欲するなり。

社會に於ける小說の位地、第一流文化人の小說に對する理解、讀者の頭腦の程度といふものが知られて面白い。筋書正本は、正本を讀む小說と見てその妙を出さうといふもの、又第三の講談小說は主として三遊亭圓朝乃至圓朝の如き名人の講談を指してゐるものであるが、然し「小說と講談と固に一物にあらずと雖も然れども人をして自然に其妙を感ぜしむるに至つては同じく是れ一種の美術にして圓朝子の談話は之を完全なる文學若くは小說として見るも可な

り」云々といふ斷案は、大衆文藝優勢の今日、注目すべき言であつたといはなくてはならぬ。次に改良小說とは如何、これこそ新興文壇小說を概括的に指すものに外ならない、——

改良小說とは日本在來の古臭き小說に反し西洋新奇の思想を交へ之を日本の世話人情に移して新趣向を編出したるものにて近時評判あるの小說は皆改良的ならざるはなし今日にては馬琴流の小說既に厭きたり爲永春水も亦面白からず西洋小說の飜譯は澁滯にして讀にくし唯其中間に立て最も人の耳目に入易きは改良小說ならん。

さうして彼は、「西洋小說嘉すべし脚本小說愛すべし又講談小說も可成りと雖も殊に其の味の妙なるものは改良小說なり」といひ、殊に此の種の創作に力を入れてゐる、この邊にも「一改良」の意がこもつてゐると見て可からう、彼自身の小說も勿論大體は此の種類に入るべきものである。さればとて彼は、日本在來の小說の趣向錯亂の妙と世態人情に投ずる力は十分認め、これは採る心算だと明言してゐる。最後に彼は自家の小說執筆について態度を宣明してゐる、曰く、——

西洋著作家チャールス、ヂケンスは倫敦每日新聞の主筆として政談時評に筆硯を弄するの傍ら稗史を編して遂に文學社會に一方の泰斗と仰がれたりビーコンズファールド侯尙ほ一介青年の書生たりし頃よりして小說の著作に從事し遂に大宰相の位を履んで歐洲の覇權を握れるその指頭に筆を挿んで稗史を編す小子素よりチャールズヂッケンスたらんことを期するものに非ず又況んやビーコンスフォールドを氣取らんとするものに非れども性來小說の嗜癖多く、今日までも我名を署して公けにせし西洋小說若くは又匿名以て世に出せし稗史もあり下手の横好き獨り好がりの厚顏先生たりと雖も政治を論じ時務を評し特に社會百般の事を議する八ケ釜しき筆の餘間に素人作の新小說台水散史の名を以て續はるゝ一編あらば小子の作と御見知りあつて御存分の惡口批判敢て辭せざる所なり。

而して彼の理想としたところは、前記プログラムにあつた如く、改良式の政治小說の創作にあつたことは疑ひを入れ

ない、事實又、以下の彼の作品中にはさういふ意旨をもつたものが多いのである。吾等は渡邊氏の小說に關する意見を讀んで、彼個人の「意見」を知る外に、當時分科過程にあつた小說界が如何に混沌たるものであつたか、當時の日本文學の實狀が如何に明白に過渡的狀態を脫してゐなかつたか、その他種々なことを學ぶことが出來るのである。

前記引用中、「匿名にて出せし稗史」は未詳であるが、此の宣言以後彼の名（台水散史）にて或は無署名にて公にされた小說は左の如くである。

明治二十二年六月「實錄隼人の風」

〇明治十年に戰死した薩人新納格之進の遺子彥熊が、父の遺志を繼いで支那經略に苦心し、遂に安南黑旗軍に投じて武功を立てる物語。

同　　年十月「霹靂一震」

〇譯ともいふ、鐵奕風の小說、學士高峰が國家の富强を增す爲めアフリカ內地に入つて富源を探險し、遂に大金剛石鑛を發見する話。男性的冒險と國權思想と成功談とを合したもの。

同　　年十一月「音聞白子高浪」

〇勢州白子の漁夫幸太夫の露國漂流記を小說化したもので、なかなか面白い、幸太夫が露帝に信任され貴族の女と婚すると、歸國後露探視されて幕府に縛されることなど、綺幻不側の冒險兒の運命が描かれてゐる。露國と海といふところに多少作者の用意があらう。

同二十三年三月「戀の柵」

〇先づおとなしい世話小說、商家の內幕めくものがある。

同　　年四月「修羅場」

○自ら政治小説として譯出したもの、米人ダニールジョンソン著といふ。原名不詳。演劇脚本らしい。

「修羅場は歐洲列國の形勢を演劇脚本に仕組みたる政治小説なり篇中の人物にはビスマルクありナポレオンあり若くは獨逸の天子若くは米國の大統領その他列國の外交家政治家悉く收めて生且淨丑たり即ち政治小説として面白く且つ値打あるもの此修羅場に過ぐるの書無きは散史の深く信ずる所なり」云々。

成る程散史のいふ如く、普佛戰爭に取材した極めて面白いものである。然し大毎の讀者には受けず、十二三回で中絶したらしい

同　　年四月「さがり藤」

○幕末京都を舞臺にした時代小説、「修羅場」の受けないため、その補ひとして同時に起草掲載されたものである。これが受けて「修羅場」の受けないのに散史は大に不平であつた。

此處で散史は議會生活に入るので、その小説執筆は暫時途切れるが、明治二十四年以後に於いてそれが續けられなかつたか何うか、只今のところ、私はまだ二十四年以後の大阪毎日新聞を通覽してゐないので、何ともいへないが、恐らく多少の作はあつたのではなからうか。聞くが如くば、彼の名を署して單行本に、『無爵王』といふもの、『二人探偵』といふもの等があるといふ。前者は然し彼の名を署してゐても彼の作ではない、木内愛溪の作で、大阪毎日に歴然と載つてゐる。後者は或は彼の手に成るものかも知れないが、何等見るところがないのが遺憾である。

『驚天動地　經世偉勳』全二冊

これは政治小説ではない、ビーコンスフヒールド伯ヂスレーリの傳記である。然しその文字に一種稗史風の氣味が

あり、加ふるにヂスレーリの傳記そのものが作爲なき小說の趣を示してゐるので、讀者は政治小說を讀むつもりで、讀んだらしい。此の書については、著者尾崎學堂の章（下卷）に述べるつもりであるから、こゝでは略す。この書は非常な賣行を示し、ヂスレーリの宣傳として多大な效果を擧げたことだけ言つて置かう。

『政海冒險大膽書生』（Vivian Grey）

『雙鸞春話』（Henrietta Temple）

『昆太利物語』（Contarini Fleming）

此の三種は、或は純然たる政治小說と見られないものもあるが、『春鶯囀』、『政海之情波』を紹介した序であるから、簡單に紹介しようと思ふ。

『大膽書生』。

これは「歐米大家文學之花」といふ飜譯雜誌に連載されたものである。此の雜誌は明治二十年十二月創刊され、二十一年三月第四號で廢刊となつたものらしいので、この小說の譯も第四號所載の第五回で中絕したものと思はなくてはならぬ。雜誌には、東臺荷香逸人譯となつてゐる。此の荷香逸人は何人であるか、この雜誌が井上勤のものであり、所載の飜譯が四種の中井上のものと分つてゐるのが三種あるから、この一種も井上勤ではあるまいかとなつてゐる。只今の處、これが井上勤の譯でないといふ證據がないので、傳說のまゝに井上勤譯として置いても可いが、私だけの想

像をいふと、これは若い頃の內田魯庵氏の手すさびに成るものではあるまいかと思ふ。氏の叔母鏻子（父の異母妹は井上氏の夫人であつた關係から、內田氏も若い頃からよく井上氏の飜譯の手傳ひをしたといふことである。內田氏は此の頃下谷に住んでゐたから東臺といふ名稱もさう亂暴なものではない。旁々何うも內田氏らしく思はれる、然し內田氏の荷香逸人と號したことを未だ私は知らぬので、斷言はしない。然し恐らくさうであらう。

この小說は或る程度まで政治小說といつていゝものであるから、別に設題して詳論しては何うかと考へたが、何しろ雜誌で五回掲載されたきりのものではあり、且つ雜誌そのものも大して勢力のあつたものではないので、政治方面にも文學社會にも格別の影響がなかつたと思ふので、僅に概略だけを語つて置かう。

この小說は一八二六年から七年へかけて出版されたものであるが、ヂスレーリのこれを書いたのは、恐らく二十前後のことであらう。

ヴィヴィアンは、有名な著述家の子で、聰明で早熟な青年であるが、嵐のやうな學校時代を終つた後、一時無二無三に勉强に熱中してゐる。二十に及んで四周を見廻して彼の法外な野心を滿足させる手段を求める。ヴィヴィアンの劍は則ち彼の機智頓才のみである。

此を思ひ彼を考ふれば我が爲すべきの業甚だ稀なり我れ若し鉅萬の富を累ねたる貴族の家に生れたらんには我が爲すべき事夥多なるも我が運命の拙きを如何にせん我が頭角を世上に拔んづる能はざるものは單に玩弄物に過ぎざる金銀の片端と其實價もなき門閥と云へる財產なきに因るのみと又以爲らく今世上の狀態を察するに當今權勢ある貴族多しと雖も多くは才能に乏しきが爲めに大臣と爲るを得ず又た我身を顧みて大臣と爲るべき資格中何等の物を缺ぐやと思ふに唯缺ぐ所の物は門閥の權のみ若し才能ある人と門閥の權勢を有する人互に其力を合さば天下の事何事か爲らざらん然るに何ぞ相待つの殷にして相遇ふの稀れなるか我れ將た門閥に生れざるを以て玉を抱きて一弊屋裏

に呻吟一世を送らざるを得ざるか我れ何れの時か其人に遇ふて我が才能を表はし得るか自問茲に到りて斷然たる答辭を作るべからざるを知ると雖も、猶焦心苦慮政海に頭角を拔んずるの工夫を凝しぬ（「文學之花」第二號、第三回）

かくてヴィヴィアンは名も富もある貴族を利用して自分の野心を達しようとかゝる。彼が自分の傀儡に選んだのはカラバス侯といふ不平貴族である。これは氣の弱い、その癖に虚榮家で野心家で不平家といふ人物であるが、ヴィヴィアンの父ホレースが或る時彼を食事に招いた。その時侯が席上變妙な政治論を始めて衆客から駁撃されてグウの音も出なくなるところを、ヴィヴィアンが機智と雄辯で助け船を出し、巧く漕ぎぬけさせた。これで侯爵はすつかりヴィヴィアンに感心して、二人の間に忘年の交が成り立つ。ヴィヴィアンは侯爵邸に訪れる度に、侯爵の爲政の才能と政界に於ける不遇を說いて、巧みにその虚榮心を煽てるので、侯爵は有頂天になつてしまふ。やがて、二人の間に一種の政治同盟が結ばれ、侯爵の田舍別莊シヤトウ・デジイル（慾望城）を中心に「カラバス黨」の組織にかゝる。ヴィヴィアンは兎に角雄辯を揮つて偏狹な利己主義の地主貴族の一團を集めて「カラバス黨」の形だけはつくる。此の貴族の中に面白いことには、「ビコンズフヒールド卿」といふ人物がゐるのである、――然し此の人物はヂスレーリとは違つて、「立派な紳士だが、內々を申すと、大層もないお馬鹿さんだ」となつてゐる。そこで新黨成立となつて、下院での活動に首領が要ることになる、衆望は勿論ヴィヴィアンに歸するが、彼はわざと謙讓してその位置にはつかず、自分から發意して、今はウェールズに引退してゐるクリーヴランドなる人物を引出さうとすゝめる。さうして自分で使者に立つてウェールズに赴き、獨特の外交手腕で遂にクリーヴランドを引き出して來る。此の人物はまだ年も若く、かつて將來有望な政治家とうたはれたのであつたが、カラバス侯に賣られたことがあり、憤慨の餘り政治界を斷念したのであつた。ヴィヴィアンは兎に角クリーヴランドを連れてシヤトウ・デジイルに來る。ところが、クリー

ヴランドもさるもので、彼は又彼で、自分だけの目論見があるから、侯爵の世辭や、ヴィヴィアンの雄辯位では欺かれない。政略的な饗宴や相談會が何度もある、地主貴族の不平家連と、二人の青年政治家の間に何度も出入りがある、同盟も何度も出來たり破れたり又出來たりする、そのうちに、此の小説には今迄明確な役目をもたなかつたフェリクス・ローレン夫人（カラバスの弟の妻君）といふ女性が、はつきりした役目を演ずることになる。彼の女は、嫉妬の餘りか又は單なる惡戯好きな氣持からか、侯爵の心をヴィヴィアンに不利な方に誘ふ。さうしてそれとなくヴィヴィアンの眞の意圖が何處にあるのかといふことを侯爵に明す。そこでカラバス黨に陰謀や裏切が起る、味方だつた貴族が擧つてヴィヴィアンの反對に立つ、クリーヴランドが甚しい侮辱を浴せる、といふことになる。ヴィヴィアンがあれ程苦心して建てた紙の家が急に壞れてしまふ。ローレン夫人は、凡ての禍根がヴィヴィアンにありと見て、彼を毒殺しようとかゝるが、それは不成功に了り、却て自分で不意の血管破裂に襲はれて死ぬ。侯爵は一切の責任をヴィヴィアンの頭上に投げつけて、彼を呪ふ。クリーヴランドとヴィヴィアンの間には決闘があつて、クリーヴランドは殺される。此の後、ヴィヴィアンは精神の激動から長いこと病氣をする、さうしてそれが癒えるや、一切を忘れるため、又彼自身を忘られるために旅行に出る。こゝで第一部が終る。

此の小説の第二部は主としてヴィヴィアンの旅行に關するもので、ヴィヴィアンがまだ野心に惱まされ、過去の苦い悔恨にうたれつゝドイツ地方を彷徨する。グロテスクな、センチメンタルな、法外な分子が澤山描かれてゐて、讀んで面白いといへば面白いが、研究といふ目的からいへば、格別の意味がない。

この小説には自叙傳的分子が可成り多いといふこと、この小説によつてヂスレーリが少年時代から猛烈な政治的野心に燃え立つてゐたのが知られること、此の一作によつてヂスレーリの名が社會にとゞろいたこと等々は、ヂスレーリの批評家の口を揃へて語るところであるから、巧拙を離れてこの小説はヂスレーリ研究者の熟讀を要するものであ

るが、然し吾等の目的からせば、今こゝでさう力を入れる要がない。尾崎氏の『經世偉勳』にも、この小說について特別詳しい記叙があるから、有志の方は『經世偉勳』について讀まれるが可い、必ず得るところがあらう。左に一節だけ掲げて置かう。

ヴヰヴヰアン、グレーは暗に諸名士を論評し兼て己が懷抱せる思想を叙述したる政治上の小說なり故に之を讀む者皆な書中假設の人物を擧て現存の人物に對照し是は誰殿ならん彼は某公なる可しなど一々推當して其讀法を著せる者も多かりき書中に主位を占めたるヴヰヴヰアン、グレーの父ホレース、グレーを畫て日夜書館を去らず勉學し頻に其子の文を作るに拙速を尙はさらんことを期望すと云へるは侯が其父アイザック、ヂスレーリ氏の人と爲りを模寫せる者なること辯を俟たず而してヴヰヴヰアン、グレーを頓才英智ある獨學に因て業を修め常に公立學校を輕侮すと評せるは著者自ら其胸懷を披述せる者なること疑を容れず左れど之を以て徹頭徹尾著者自ら其境遇情感を寫出せる者なりと云ふは非なり著者の意若しヴヰウヰアン、グレーを以て己が相貌、心志、情感の寫眞と爲すに在らば其グレーの人と爲りを模寫すること決して彼が如く苛酷ならざる可きに其之を寫して唯だ機を相し利に投ずる一個の輕薄才子と爲せるは侯の之に假て己が人物を著はすに在らざるを證す可し然れども侯の小說を著して諸般の人物を形容するや常に好んで半寫法を用ひ相貌は甲を模寫し言行は乙を模寫すと云ふが如く各人各種の性質を湊合して一種喜ぶ可く笑ふ可く叉賤む可き人物を構成するが故其一言一行に就て考察すれば著者自ら其境遇懷抱を寫せりと見ゆる所甚だ多し況してや此小說の如きは徒らに水花鏡月の幻想に藉て錦心繡腸を發露し以て其才名を炫燿するが爲めに作れる者ならず論する所は國家の大事、寫す所は當世の名士、一言一行の細と雖も多くは深長の寓意を含む者なれば著者自ら其胸懷を寫出せる條章の多きは當然の理なり唯だ書中一個の人物を指て是れこそ徹頭徹尾著者自らの寫眞なれと云ふは不可なるのみ單に著者自ら其境遇意想を寫出せる者なりと云ふは尙ほ可なりヴヰヴヰアン、

グレーの言行を見て侯現に之を爲し若くは若くは未だ之を爲さざるも他日必ず之を爲さんと欲するが如く推測し口を極めて之を譏謗するは卽ち不可なり然るにヴヰヴヰアン、グレーの評判甚だ高く侯の名聲從て揚るに及び侯を攻擊せんとして先づグレーの一言一行皆な侯をして其責に任せしめんと欲する者頗る多かりき是れ寔に笑ふ可く又憫む可しと雖も侯の矯激なる言行も亦幾何か此勢を馴致せりと云はざる可からず侯は好奇の癖ありて其服裝、言語、動作、皆な衆に異ならんことを欲し態度應待頗る書中の主人に似たる所多したれば當時英國に盛んに頻に縉紳間に出入せる米國人ウヰリスは其著書中に始てブレッシントン夫人に謁せる時、夫人が若(ヤング)ヂスレーリの人と爲りは毫もヴヰヴヰアン、グレーに異ならず才氣飽くまで多く自惚心も亦少なからざる男自慢の好少年なりと語られたる旨を記せり(『經世偉勳』前編第一章)

『雙鶯春話。』

此の小説の原本は一八三六年の刊行である。譯書は明治二十年三月出版、鶴堂牛山良助譯述、素山跡部正道校補とある。牛山氏は長野縣の人、明治初期の飜譯文學の功勞者として記憶すべき一人であるが、遺憾ながらその閱歷その他は一切未詳に屬する。

これは全然政治小説ではない、情史である、所謂、Love Story、戀愛小説である、副題にもさうなつてゐる。マルタ駐屯軍の士官フアヂナンド・アーミンは、古いカトリックの名家の後取であるが、アーミン家は今零落してゐる、それに係らず母方の實家が大富豪なのでそれの遺産が來る筈といふのを當てにして、放蕩な生活をしてゐる。ところが、彼の許には意外な報知が來る、彼はその遺産相續の資格がなくなつて、それが從妹のカザリン・グランヂソンの手に渡つたといふのだ。借財で首も回らなくなつた彼は、仕方なく英本國へ歸る、さうしてカザリンと會つて見る

と、世なれない美しい少女である、そこでファーヂナンドは、自分の窮境からのがれる一番容易な方法は、彼女と結婚することだと考へて、その決心をする。美貌で才氣のある若者のファーヂナンドのことだから、容易に彼女の心を捉へる。さうして彼の方には眞の少しの愛情もなかつたのだが、二人は許婚の中になる。ところが、その後間もなく、ファーヂナンドはヘンリエッタ・テムプルに會ふ、すると大きな、即時の、壓倒的な戀の力が、彼の心を捉へてしまふ。ヘンリエッタも彼の愛に酬ゐる、二人は將來を誓ふ。ファーヂナンドは彼女に暫時祕密にしてくれるやう頼む、カザリンとの許婚はヘンリエッタに隱して置くが、早晩これを破談にしなくてはならぬと考へる。だが借財の壓迫から、父母の身に破滅と不名譽を來しはせぬかといふ心配もあり、躊躇してゐるうち、心にもなく双方を手管で操ることになり、それが間もなくカタストロフヒを生む。ヘンリエッタの彼の女の父は、ファーヂナンドとカザリンの許婚の約を發見して、ファーヂナンドの意圖を惡意に解する、暫時して二人は又會ふが、二人とも愛情がまだ死んでゐないのを覺る。ヘンリエッタは偶然な機會で英國最大の豪家の後取となる、さうして父親の壓迫によつて、公爵家の嗣子ロード・モントフォートの許婚となる。葛藤ば益々紛糾したものになり、ファーヂナンドは借財の爲め捕縛されて假監禁を喰ふ、彼の信用の大綱ともいふべき從妹との許婚關係は公然と斷れる、加ふるにヘンリエッタを失ふので斷腸の思ひをする。だが萬事最惡の絕頂になつたかと思はれたときに、アルシビアド・ド・ミラベル伯の巧妙な外交手腕で一切が目出度くすむ。ファーヂナンドはヘンリエッタと再び交情を戻し、モントフォートとカザリンは、互ひに失意を慰め合ふつもりが、やがて愛し合ふやうになつて終る。

　前にいふ如く、この小説は政治小説でないから、詳しく語ることは止めるが、二つの點で、この頃の創作小説に相當影響がありはしなかつたかと思ふ（例へば南翠の『新粧之佳人』の如きものを假に頭に描いて見られよ）。その一は、愛の力と女性の讃美といふ點である、——

戀は靈感である、それは偉大なる行爲を勵まし、吾等の本性の創造的能力を發展させる…　愛嬌あり、明朗に、獻身的な女友は、花園や宮館にも遙かまさつた財寶である、かゝるミューズがなしに人生で成功する男性は殆んどない。といつて可い。（原本、第三編第四章）

今一つは男女交際の場景の描寫である。これは一々例を引くまでもなからう。南翠の新式小說等の男女交際の場面を讀めば、可成り强い影響があるやうに想像される。然し譯者牛山氏がいふ如く、「風敎の裨補」になるか何うか、極めて廣義に解すれば、それもさうかと首肯されるが、狹義の敎訓の意ならば、必ずしも風敎の裨補にならぬ。たゞあらゆる意味で、强い戀愛小說である、つまり戀愛宣傳小說ともいふべきものである。その點に於いて、當時の日本文學社會に對して新しい刺戟となつたかと思はれる。

『昆太利物語』上中下全三册。

福地源一郎、塚原靖譯述となつてゐる。明治二十年七月より十二月まで東京日々新聞に連載されたものを、二十一年十一月（中は二十二年四月、下は二十三年十一月）纏めて手を入れて出したものである。單行本の手入れは塚原氏が專ら當つた由、本文の譯述も、塚原氏の方が多いのであるまいか、然し「或時は福地君飜譯して速記者に書取せつるを予が筆添へて綴りしも有り、又或時は予自ら飜譯の筆執たるを同君の是正を乞ひ共を物語文に編たるも有り」と塚原氏がいつてゐるから、共譯であることに間違ひがない、だがその爲めか文體に不統一のところが見えるが、これは止むを得まい。

　この小說も、政治分子はあるが、有體にいふと、『大膽書生』、卽ち『ヴィヴィアン・グレイ』の類ひで、純然たる政治小說といふべきではない、寧ろヂスレーリの理想の一班を披瀝したものとして、理想小說と呼ばれるべきかも知

れない。ヂスレーリ自身この日記にかう書いてゐるといふ、「余の著作は余の感情の具現したものである。『ヴィヴィアン・グレイ』に於いては、余の活潑な現實の大望を描いた、『アルロイ』に於いては余の理想の大望を描いた、『サイコロジカル・ロマンス』は余の詩人的性格の發展である。此の三部は余の感情の祕密な歷史である、――余は余自身についてはもはや筆に上せぬことにする」(モニイペンニイ傳第一卷一八一―一八二頁)。此の『サイコロジカル・ロマンス』即ち心理的小說とは、『昆太利物語』の原本『コンタリニ・フレミング』の副題である、從つて、『ヴィヴィアン』以前の二書は、『ヴィヴィアン』に對して多大の共通分子をもつて居り、ヂスレーリの傳記的立場からせば大きな意義をもつてゐる、就中或る點で『コンタリニ』が最も自己暴露的なものであるといはれる。

この小說は、文學的にはヂスレーリの作中傑出したものゝ一つであり、批評家によつては随一ではないかとまでいつてゐる。「散文の『チャイールド・ハロルド』」とか「英國の『ヴィルヘルム・マイスタア』」等の呼聲に見ても、文學的に優秀なものなことが知られやう。

コンタリニの父フレミング男爵は、古いサクソン貴族で、北方の朝廷(瑞典那威)に仕へて外務大臣になつてゐる(後には總理大臣)。母はヴェニスの舊家コンタリニ家の女で、コンタリニが幼少の折死んだ。コンタリニは子供の頃は多感な物に愁ひがちなところがあり、その目的はいつも藝術の分野と活動のそれの間に動搖して定まらなかつた。一方には、「その想像上の征服事業、英雄的抱負、空想的冒險の長い華々しい夢」があり、他方には、「詩人としての傾向の最初の暗示、その能力に對する意識の增加、その冥想、その孤寂、疑惑、內心の慘めさ、自己の藝術に對する無知、その失敗、絕望」等がある。「名聲の强い必要を感ずること、而かも知的優越なしには人生は堪へ難いものだといふことを意識すること、而かもかゝる凡てを感じつゝ同時に自己の能力に何の信賴ももち得ざること、かういふ瞬間は、如何なる人間も慰めることの出來ない憂鬱に支配される。』コンタリニは、一度はさういふ氣分でゐるとき、

ウィンタアといふ男にあふ、これは畫家で、哲學的な心的傾向と廣い經驗をもつた人物だ。ウィンタアはコンタリニ少年の詩的才分を認める、さうして偉大なる藝術家にならうとするには、自分の藝術を研究しなければならぬといふことを彼に教へ、「テーベの廢墟でオベリスクから寫して來た」といふ呪文めく箴言を與へる。――

忍耐せよ　企望も蓄へよ　多く讀めよ、考へ込むを止めよ　自然は教育よりも大なる力を有す　萬事の進步するは時にあるべし（譯本上卷、第十一回）

コンタリニは、この箴言を守つて、よく忍耐し、いつも書物を手にしてゐようと決心する、ところが、彼が第一に讀んだのがヴェニスの歷史であつたので、彼の身中に眠つてゐた活動を愛する心が眼覺めて、彼の抱負に別の方向を與へる。彼の祖先の「コンサルの血」は劍を要求する、彼はヴェニスの總督とならうと決心する、それでその第一步として、學校から飛び出してヴェニスに向ふ。

だが彼のヴェニス行は實現されず、ジプシイの一團に加つて英雄にされたり、僞伯爵と意氣投じたりしてゐるうちに伯爵に旅費を盜まれ、進退窮して父の許に返る。父は自分の過去を顧りみて、別に呵責せず、却て諄々と世間學の大意社交の祕訣などを說き聞かして、彼の才能を生長させてやる方に心を用ゐる。コンタリニはやがて父の忠告とウィンタアの意見によつて大學に入り、孜々として歷史、古典等を勉强し、ドリック民族に關する大論文を書いて全校を驚かす。然るに父の勸めで讀み始めたヴォルテールの著書に强い感動を受け、空想的な社會改造の理想を揑ね上げる。此の邊は、今日の吾等が讀んで一番面白い部分であるのに何ういふものか、英國の研究家は全然看却してたゞ「青年らしい種々のアドヴェンチュア」とのみ書きすてゝゐる。コンタリニは、――

此の哲學の理に由て新に政府を構造し、百事自然法に則つて此世の中を送るに非ざれば迚も人間眞正の幸福は得べからず實に今日我々の住む社會と云ふは不公平不條理不信實不道德の大塊（かたまり）をもて組立たる惡物なり故に到底此の罪

塊を眞先に打碎き人間神出世の時に引戻すに非ざるよりは決して天賦の人權を全くすること能ふまじ（中篇第十回）といふ「空漠たる妄想」を描き始め、それを自分の學校内で宣傳して大成功を收めるので、驚いた學校當局は、その宣傳や會合を禁止する。すると、コンタリニの一味は、コンタリニを統領にして、ヨンステルナの大森林にあつた城に立籠り、此の新社會哲學を實行に移さうとする。ここまでは天晴革命家氣取りであつたが、やがて食料も金もなくなつたので、面白半分から追剝や盜賊となり、近所の村々や旅人を襲つたりする。それで彼等を純然たる山賊と見た官憲は討伐隊を送つたので、止むなく一行は解散を決し、各自自由に下山した。コンタリニも無事父の許に逃もどる。さうして理想の實行には自ら經驗を積むが先決問題だと覺され、人を動かす（理想）前に先づ自ら動けといふので、遂に父の秘書官となる。ところが、適材適所ともいふか、種々功勞があり、數年の中に外務次官に昇進する。そのうち、王位承認問題について、對列國の關係が大に惡化した際、列國使臣の御前會議に、コンタリニは大膽にも發言を試み、遂に列國使臣を屈して、外交上に大成功を博する、かくて彼の最高の野心を現實化する道が開けかけて來る。

その間にも彼の詩人的一面が、少年時代憧憬の的となつてゐた或る貴夫人との再會から眼ざめて來、忽然インスピレーションに驅られて、七日間に一小說を書き上げる。『マンシュタイン』と題するものがそれ、これを彼は匿名で出版して大喝采を博する。この小說はいはゞ詩人的性格の發展を手早くスケッチにして示したもので、主人公は「その內心が、その外的位地と不斷に鬪つてゐる」青年である。だがその匿名が發見されて、モデルにされた人々から囂々たる叫びが上る（この邊は、『ヴィヴィアン・グレイ』出版の當時とそつくりである）。

その後、政治上の急變があり、國王も彼の父も一時國を去ることになる、コンタリニ自身も父の命でパリからロンドン邊の外交社會見學に送られる。だが彼自身は、何うしても自分は詩人で實際政治には適しないと考へるので、自分の再敎育をやらうとする。さうして自分の詩人的能力を發展させる方法を取らうとするが、それには、あらゆる狀

態にある人間及び自然を觀察する必要があるので、いよいよパリを去つて先づスウィスからイタリイの地に入る。
コンタリニはイタリーでは、多年憧憬のヴェニスに入り、そこで宿世の縁ある新婦と結婚する、新婦は母の實家の最後の一人でアルセステイ・コンタリニといふ。二人は風光明媚なクリート島で幸福な一年を送つたが、アルセステイは難産の爲め死ぬ。コンタリニは泣々クリートを去つて又漫遊の旅をつゞけることになるが、悲嘆の餘り、マウント・アイダから身を投げて死なうとかゝる。然し死なずに助かり、そのまゝ東方の旅行をつゞける。旅中又もウィンタアに出會ひ、忠言を受ける。ウィンタアは、コンタリニにもう冥想をやめて働く時が來たのだと告げた。然しコンタリニはその忠言に從はず、又國王からの招狀をも辭退し、詩人の生涯に入らうと決心する、さうして父の遺産、叔母の遺産等が手に入つて大富豪となつたので、ネープルスに落つき、昔のハドリアン帝にも劣らぬ豪華な別邸を構へ、餘生をそこで過さうとする。「こゝに、美の研究と創造のうちにわが生を過さしめよ。私の希望はさういふのだ。だがそれが果して私の生涯となるか何うかは、私も疑はしいと思ふ。」そこで此の小說は終つてゐる。

この小說のやまは、學校脫走から東方旅行までの間で、殊にヨンステルナの一學が興味の中心になつてゐる。然しこの小說全體のモラルは何かといふと、政治的なものではない、女性の力の讃美である。コンタリニは生涯四種の女性に支配されてゐるのでもそれは知られる、四種の女性とは夫人クリスチアナ、女神エゲリナ、聖女マグダレーン、アルセステイ・コンタリニ、これである。そのうち第一と第四は現實の女性、第二、第三は空想の女性である。これ等の女性がコンタリニを驅つて大業をなさしめ、大事を企てさせて成功させる。又コンタリニが父を總理大臣にする時、政治に對する女性の力を利用して成功するところも、この小說のモラルを示してゐる。强て政治的なモラルを探せば、社交が政治上有用なこと位である。

ヂスレーリがこの小說でコンタリニの社會改造論を述べてゐるのは、何れかといへば、これを嘲弄する如き氣味か

らであるが、これはこの譯書『昆太利物語』の出た時代を考へて讀むと特別に面白い。譯者は勿論さういふことを感じて譯出したのではあるまいが、この小說に現れてゐるコンタリニの生涯は、明治二十年前後から、その以後にかけての當時の一部青年インテリゲンチヤの運命と甚だ似たものがあるからだ。別に兩者の間に必要の影響があるとか、後者が前者を眞似たとかいふのではない。たゞあくまでも似てゐるといふだけである。即ち、コンタリニは空想の子として英雄的功業を夢想する。フランス思想に動かされて社會改造の大野心に燃える、現實との衝突でその改造理想が遂行されぬと知つて、實際政治に入らうとする。然しそれも思ふに任せず、遂に詩歌の世界にのがれ、そこに安住しやうとする。これと北村透谷といふ如き、代表的な青年インテリゲンチヤと對比して考へてみ玉へ。その生涯の運命と、志望の向ふところと何ぞそれ似たるやといひたい。今もいふ如く、此の兩者の間に何の交渉もないのであり、一は空想中の人物、一は現實の人間であるが、二つが日本の社會に時代を同じくして紹介されたといふところに、私は、この小說が元來持つ筈でなかつた大きな興味を感ずる。

此の『昆太利物語』は、さういふ意味で今少し細かく檢討に値するかも知れないが、もうヂスレーリの政治小說について可成り頁數を割き過ぎたから、この邊で切り上げることにする。

政治小說家としての須藤南翠

一

須藤南翠の文學史的位地は、今なほ嘗つて反動的に失墜せしめられたまゝ放置されてゐる。だが明治初期の小說界を少し細かに調べた人は、彼の作物が、明治二十年前後に於いて凄じい大衆的人氣の中心となつてゐた痕跡を幾つも見出すであらう。たゞに大衆的人氣とのみいはず、識者階級も、彼を饗庭篁村をもつて、當時の新文壇の巨擘とするに異存がなかつた。幸田露伴氏は當時を追懷していふ。

其頃に於いて（中略）時代の蒸し出した新しい空氣に其の鮮やかな色彩と芳香とを具して人の注意するところとなつた二文星があつた。其一人は饗庭篁村先生で、他の一人は須藤南翠氏であつた。（中略）篁村先生は讀者心理を向ふに置いて物を書かれるやうな人では無くて寧ろ自ら語らんと欲するところを語り歌はんと欲するところを歌ふ方の詩人氣質の豐かな方であつたが、南翠氏の方は（中略）能く讀者心理を合點して、それに應じて物語の展開や結構を定めるだけの智を有してゐた人で有り、篁村先生は其の自然の流露に於ておのづから人を惹付ける力が有り、南翠氏は其智謀に於て社會の視聽を寄せさせ色々の人々をして其小說を耽讀せしむるだけの技倆を有して居られたので、二氏の當時に於ける勢力は實に大なるものであつた。篁村先生は讀賣新聞紙に據り、南翠氏は改進新聞に據り、其他諸先輩が有つたに關らず二氏が先づ當時の小說壇の二巨星として輝いてゐた其光に敵する星は先づ無かつたのである。（一）

以て南翠當年の名聲を概することが出來やう。彼は篁村と併稱されたが、單に人氣といふ點からせば、篁村を凌いでゐた。それも理由があるので、彼は新聞記者としてこそ篁村の稍後輩になるが、小說的讀物の作者としては、篁村より先輩であり、且つ作物の數が遙かに多數であつた上、讀者の心理時好に投合するやう努めたからである。篁村が眞劍に續物を書き出した頃には、南翠はこの方面で相當名聲があり『昔語千代田刄傷』、『茨木於瀧』、『新藁於皆心黑髮』、『春色日本魂』等の著者として、可成りな賑やかな讀者層をもつてゐたのであつた。

だが南翠をして「當時の小說壇の二巨星」の一とまで輝かしめたのは、彼の所謂政治小說の人氣によることは否み難い。彼の政治小說の現れたのは、主として明治十九年、二十年、二十一年であるが、此の二三年こそ、南翠の人氣と勢力の絕頂期であつた。明治二十二年、三年にかけて、或は小說萃錦を計畫し、續いて新小說を立案し、更に小說集『こぼれ松葉』を月刊するなど、その活動に見るべきものがあり、南翠自身も得意であつたらしいが、それがやがて反動期に入る第一歩であつた。爾後漸次顚落の道を辿り、遂に反動的忘却のうちに埋沒されたまゝになるに至つたのである。

從つて南翠及び彼の著作を全面的に取り上げて新たに吟味を加へ、從來の明治文學史の幾行幾頁かを書き直す仕事は、明治文學研究者にとつて若干の興味あるものではあらうが、私としては今のところ、遺憾だが南翠研究にさう深入してゐる餘裕がない。それで研究の範圍を此の書の主題に關係する部分だけに限り、南翠の政治小說についてのみ語ることにする。

なほ南翠の傳記的事實を知りたい人々は須藤眞金君の筆に成る『南翠傳』（大正十五年二月）及び岡田翠雨氏が明治文化第五卷第四號から第十一號まで連載した『余の師事せる南翠先生』を參照するが可い。

註（一）早稲田文學、大正十四年六月號、「明治文學胎生期研究」

二

南翠の政治小説を語るに先立つて一言して置きたいのは、時代の政治的機運即ち自由民權論に對する彼の關心である。此の點については眞金君の傳記にも岡田氏の記事にも（その他の文學史的著作には勿論のこと）、何等言及されてゐないが、私はそれだけに特に一言して置きたい。此の點に關して若干の知識をもつことは、南翠の政治小説を解する上に於いて必要な豫備的暗示が與へられるからである。

此の自由民權の新機運に對して若い南翠の土屋郁之助は如何なる關心をもつたか。兎もかく封建武士出のインテリゲンチャで、功名心も衒氣も人一倍强く、好新的模倣癖があつて感染し易い心の持主たる南翠が、英米佛の政治思想を背景にし專制政治反對人民平等參政を標榜して起つた自由民權運動に何で反對する譯があらう。且つは先輩末廣鐵腸がゐるではないか。徴兵制度に不滿を抱いて郷里を出奔し、東京に走つて放浪生活に入り、やがて團直樹を説いて新平民の學校の設立を計畫したが事成らず、有喜世新聞の發刊の際探訪として拾はれたのが明治十一年二十一歳の時である。社長の寺家村逸雅に文才を認められて雜報記者に引上げられ、雜報や續物を書く合間合間に、「うきよはなし」の一欄に論説めく雜文を載せた。此の雜文の調子の變遷に、南翠の政治的新機運に對する敏感さが現れてゐる。十一年の分は教訓的諷諫的なものであるが、十二年の分は稍や時事批判を雜へ（「琉珠の警報」の如き）、十三年に至つては明白に政治論的傾向となり、自由民權論の同情者たる態度を明白にしかけてゐる。

だが十三年の政治論には、まだ初めの方のものに戯謔の調子が見える、二月廿八日の「從下持上路」（有喜世新聞、六三〇號）と題するもの丶如き、その甚しいもので、寧ろ猥褻といふべきである。四月十五日の「米商會所は果して

存すべきか」(同新聞、六七六號)あたりよりやゝ眞面目になり、十四年に入つては、自由民權論の立場から政治時事を論じて相當痛烈な論をなしたりする。四月十六日の「疑團再び凝結す」(有喜世、九七四號)と題するものは、西園寺公望が東洋自由新聞社長を辭した件を論じたものであるが、その末節にいふ、

嗚呼君は不幸にして華族の家に成長し重大の義務無上の快樂を自らするを得ず常に好欲の素志を枉て空しく自由の筆硯を投ずるに至れり是亦不得止と謂べし然るに自由記者は君は華族の二字に眷戀して好欲の自由を失ふが如き人に非ずと然らば則ち、主上の思召しに仍て然らん其思召たるや皇室の藩屛たる華族たる所以に非ずや君にして若も華族の二字に眷戀せず斷然新聞記者を自任すれば速かに民籍に入つて好欲の自由を治め我日本の民庶をして睡眠を攪さしめざるや何ぞ氣樂な華族に安んじ掣臂を甘受するを將ゐん余輩が再び疑團の凝結せしは則ち眷戀の二字にありとは言へ君が長い物には卷れろだと仰やらば余輩亦何をか言はん。

十四年十月自由黨の結成となり、十五年三月には立憲改進黨の創立となる。而して有喜世新聞はあらゆる點に於いて改進黨所屬たることを明白にした。從つて今迄漠然自由民權論のシンパサイザアたりし南翠は今や明々白に立憲改進黨として言論した。立場が明確になるに連れて、對象も明確になる。從來漫然政府攻擊に向けてゐた筆は、政府黨の立憲帝政黨及びその機關紙明治日報、東京日々新聞、大東日報等に向けられた。(二)十五年四月板垣退助岐阜の變あるや、南翠は慷慨して「岐阜の怪聞」といふ一文を載せ(有喜世、一二六七號)、手痛く頑迷者流の妄動を非難した。

(前略)蓋し此兇行者は我黨を以て綱紀を紊亂し皇帝を破壞し國家を顚覆するの逆賊と思惟し已れが福利を保安增進せらるゝを覺らず散髮を見ては禽獸と呼び石室を見ては夷狄と詈り路易十六世に讓らざる壓制覇府の抑制に馴て死に後れたる不幸を憾むの徒たり嗚呼天下また誰か斯る卑怯の人ありや苟しくも頑固者流の手にたらずと謂はゞ抑も誰が命令ぞや論じて玆に至れば記さんと欲して忿激し言んと欲して嗟嘆し筆を投じ口を箝んで暫らく後報の來るを

待つ。

此の年の暮、板垣洋行問題で口火のついた自由改進兩黨の抗爭の火の手が揚るや、南翠はこの抗爭は兩黨に取つて各各の損失となることは承知しつゝも、敢て屈せず論戰した。

十七年三月、憲法制定の準備として制度取調局が設けられ、伊藤博文がその統裁に任ずるに至つて、南翠は「憲法の調査には建議の自由を特許すべきを論ず」と題して、全七回に渡る長論文（彼として）を掲げた（開花新聞三一一號、三一二號、三一三號、三一四號、三一七號、三一九號、三二二號）。今その大意を紹介しよう。彼が發端の語を假りると――

抑も我邦の憲法は主君の欽定に成るべきか將た在朝在野の俊士に委して草案の勞を煩たるゝかは辛巳（明治十四年）大詔以來江湖に嘖々たる所にして彼の保守黨の如きは欽定憲法を仰體せんとまで明誓し之に反對する諸黨は憲法は主權の所在宰相の責任を區劃し立法行政の二大權を總括すべき者なれば之を制するには充分民意を採擇すべしと切殆ど其の歸着する所を知らざりき云々。

南翠はこの欽定か否かの問題に對し、一概に欽定でもあるまいと見てゐるが、然し萬一有司の一部にその制定を委任されるならば民論參考の爲め建議の自由を與へられたい、といふのである。彼は進んで法の起源、法の目的、法の種別を說き、憲法なるものゝ本質を論じてゐるが、憲法を民約論的に解してゐるところは注意すべきである。彼は更に法は活機ではなく、一に運用者と國民精神、如何にあると論ずる、ドイツの憲法が憲法そのものが善美なるに關らず識者に排斥され、英國のそれが成文法としてはドイツに及ばぬも、一般から稱揚されてゐるのはこの爲めであるといふ。英佛を始め歐米の憲法はその國情政體によつて相異るが、我邦の憲法も同樣に、徒らに外國に模倣せんより――

寧ろ後世布くべきの政治に基き國體を察し民情を採り彼の則るべき外國憲法の長を以て補はゞ完全無比の法券を成

すを得べし。

である。そこで憲法の性質を定めるには政體の異同を論ずる必要が生ずる。元來我邦の政治の目標は五ケ條御誓文の面にも明である如く一種の代議政體即ち君民共治である。世界の政體は君主政體、少數政體、民主政體に分れるが、

哲人は更にこれを王政(モナーキ)と暴政(タイラニイ)、有爵政(アリストクラシー)と寡人政(オリガーキー)、共和政と群民政(デマゴギー)の六種に分けてある、然し之種にも弊があり、偏倚することが出來ぬ。即ち吾等の生命を托すべきものは、數者を參交して以て完美を究めたる參交政(ミキスト)(一に有限政(リミテツド)といふ)あるのみ

英國が政を世界に誇り君尊く民富む所の者は一に參交憲法に則り國君獨り權を有せず國王貴族人民の三者各個單一の權力を以て相牽制融和せしむるに是因る豈亦他あらんや此に至つて余輩頗る英を慕ふの意ある者の如し云々。

といひ、我になく改進黨たる立場を露してゐる。皇室の尊榮と人民の幸福を保つのが吾等の二大目的であるが、前者を保つ道はその權限を劃して宰相に責任を負はしむるにある、又後者の保有增進には國運の進步が必要、國運の進步には政治の改良が喫緊であるが、今日政治改良の要諦は政黨內閣組織、地方自治、これである。治國の要は民意を達するにある。宜しく國民大多數の志望のある所を以つて政體を決し之を憲法に明記すべきである。さうしてそれには此の請願條例に依らず私議を建る自由を許さなければならぬ云々。これが南翠憲法論の大體である。論理の整はぬところや南翠獨り合點の處なども少くないが、然しこれは獨學の小新聞記者たる南翠が、精一杯の蘊蓄を傾けたものかと思はれる。說の當否は兎に角、南翠の政治に對する興味がたゞの附燒刄ではなかつたといふことだけは明かに分かるであらう。

以上簡單に一言する筈が遂に冗長な一節とのびたが、だが兎に角以上によつて、若し南翠が衷心から時代の政治に對して關心を持つてゐたこと、その關心が改進黨的立場に立つてゐたといふこと、此の二事が明確にされた。以下、

私はいよいよ南翠の政治小說の研究に入るが、讀者諸君はこの二事を根抵に踏へて讀んで頂きたい。

註(一) 例へば次の如きものをみよ。

明治日報を讀む (有喜世新聞 明治一五、三、三一)
再び (同 明治一五、四、五)
大東日報 (同 明治一五、四、一一)
日報記者の眼病 (同 明治一五、六、二〇)

三

南翠の政治小說は一般には、『照日葵』、『綠簑談』等を以つて最初とされてゐるが、然し明治十九年一月四日から改進新聞に出たといふ『照日葵』の緒言に——

余政治小說に志す久し今又此著あり云々

とあるところを見ると、此等を以て最初の政治小說とすることが出來ない。私の調べた限りでいへば、南翠の政治小說試みは、明治十六年の『旭日美譚』が最初である。さうして『旭日美譚』以後なほ二三の政治小說めく作物があるから、この十六、十七、十八の三年間を一種の準備期と見ることが出來る。私は先づこの準備期の政治小說的作物について語つて、南翠の政治小說が相當長い由來をもつて生れたものなることを明かにしたい。

南翠が政治小說に志した動機は何處にあるか。小說家たる彼がその持前の政治的興味から政治小說に手を染めるに至つたといふことは十分考へられる。だが彼をしてかゝる小說形式を試みしめるに至つた直接の强力な感化は、矢野龍溪の『經國美談』の出現であつた。それは南翠自身の語葉で知り得られる。『旭日美譚』の序詞でいふ、——

稗官頃日（このごろ）餘暇を得て金聖嘆忠義水滸傳を讀み某を抽て其の隱微の緻密なるに感歎し羅貫中の博學にして慨世の宏想逈かに彼の直諒諷議以て自ら縲紲の裏に陷（陥）る者より勝れる萬々たるを釋了すまたに龍溪矢野文雄先生が近作の齊武名士經國美談を讀で我邦貫中に優る數等の稗官あるを知了す聞く北米合衆國の法教院にては小說を以て高等の學科に置くと宜なる哉俗を說て俗を導き義善を筆して義善を勸め兇惡を記して兇惡を戒しむるは稗官者流の責任にして最も捷徑的の學問たり然れども本邦小說の大人君子に擯斥せらるゝ者は稗官其人學識に乏しく微妙的の間に於て高尙の眞理を述る能はざるに因れる乎不肖固是れ不學謭劣の小輩なり只纔かに思惟する所のものを白々地（いきゝぢ）に言（いふ）に過ざれども聊か腹稿の成れるあり云々。

これによつて南翠が政治小說着筆の動機の强半が『經國美談』の感化にあることが分かるが、なほ此の事は、『旭日美譚』の性質によつて確められる。これは後に述べよう。

此の序詞の文章は、南翠の政治小說著筆の動機を語つてゐる外に、南翠の小說觀を示してゐる。此の小說觀は明白に勸善懲惡主義なものであるが、これは單に當時の小說界の風潮を眞似たといふよりは寧ろ彼が心醉した馬琴から直接承け繼いだ信念であり、それに新聞記者的敎訓意識が加はつて、一貫した牢乎たるものとなつたと解すべきであらう。從つて政治小說の場合に於いても此の信念は變ぜず、南翠の政治小說は卽ち勸懲主義小說の一變形と見られぬこともない。この點を心得て置くことも、南翠の政治小說を讀むときには必要である。

さて南翠の準備期に屬する政治小說乃至これの試みと見るべきものは、左の六種である。

○明治新說　旭日美譚　前輯第十套まで

明治十六年四月―八月、開花餘情

〇秀才奇勳 雪の下萠　全五十七節

明治十七年一月十八日——同五月十日、開花新聞

〇春色日本魂

明治十七年五月三十日——八月三十一日、開花新聞（改進新聞に續く）同十八年五月單行

〇天誅組譽之旗擧

「春色日本魂」の續篇、原題「倭魂後日譚」、明治十七年九月十八日——十二月十八日、改進新聞

同十九年九月單行

〇結城合戰花鍬形

初「結城合戰園花籬」、明治十八年三月一日より改進新聞、同十一月單行

〇遠砧音菊月（とほきぬたおとにきくづき）

明治十八年十月六日より改進新聞、

此等六種について今略說すれば、——

『旭日美譚』は、前に引用した序詞にもあるやうに、『經國美談』の感化によつて成つたものであるが、『經國美談』が古ギリシャを舞臺にしたに對し、これは幕末日本から明治維新の大業を取り入れようとした。中心の物語は簡單である、但馬出石、仙石家の士渡邊太郎昌綱なるものが故あつて幼少流浪の折、吉野の山間で高士坂田某から教へを受けて天下救濟の大志を起し、林田小五郎、泉の爲次と義兄弟の約を結んで共に國事に奔走する、さうして藤本鐵石、松本奎堂、吉村寅太郎、安積五郎等の同志と尊王攘夷の大運動を起す、つまりは中山忠光卿を奉じて天誅組の實

行運動となり、十津川の戰ひとなる（前篇十套は此の戰ひの敗れるまで）。物語に潤ひをつけるために、渡邊と宿緣ある倭文子、林田の許嫁玉江などをあしらひ、例の等持院の木像首斬、孝明帝岩淸水八幡行幸なども一場面に取り入れられてゐる。處々に壓制とか權利とかいふ文子を挿んで居り、又浪士の合同運動で明治十五六年當時の民權志士のそれを暗示してゐるなど、政治小說を作らうとした努力は認められるが、その最初の試みであるためか、堅くなつてギゴチないものになり、殊に趣向の點で、種々道具立を並べるが舊讀本稗史からの借用が多く、唐突不自然で、甚しきは神經的幻夢をまで再三驅使してゐる。人物は男女とも稗史脫化の類型で名さへ變れば何うでも通用する。やゝ例外ともいふべきは主人公渡邊太郎が諸浪士の過激手段を喜ばず、改革にも秩序の重んずべきを說くことで、これは幾分か個性を示してゐるといへよう。『經國美談』が同じく秩序尊重を高調してゐること、及び南翠の改進黨的イデオロギイと相對して、首肯されることである。兎に角舊稗史や支那小說などからいろいろとお世話になつてはゐるが、總體として、救國濟民の理想と才子佳人の人情を合一して、『經國美談』を手本に、新日本建設の大舞臺を小說に取り入れようとした腹稿であつたこととは看取出來る。文章の馬琴風はいふまでもない。

『雪の下萠』は飜譯體の政治小說である。だが原書は何といふものか、その原書が實傳であるか小說であるか、一切分からない。恐らくは、何か多少種子がある物語を南翠が小說體に布衍したものではあるまいか。これも南翠の好奇癖時好追隨癖の現れの一つと見て可い。原話又は原作が政治的意義の籠つたものであつたか何うかは知らぬが、南翠が政治的意義を籠めて紹介したことは、その緒言に明瞭である、――

洋の東西を問はず國の大小を論ぜず本身人文の自由を得て最上快樂の空氣を呼吸し自主の天地に逍遙せんことを希望して已ざるは獨裁政治の下に立つ民庶の素懷にして仔細に之を分析すれば斯の數箇の原素は其の腦漿にまで固有

ずる者と謂べし抑も民庶の自治精神を養成する者は自由の空氣にあらずして却て抑壓苛制の强大なる惡氣にあるなり壓制の者たる民庶をして之を服せしむる威力を有するにあらずして嫌惡顰眉の間に於て大なる反動力を貯へ充に自治の精神を與ふるものなり語を變て之を言ば自由は刺衝に因て發生し壓制は自由を養ふ良藥なり故に壓制の下には自由に熱心なる民ありて自由政治の下には寧ろ經濟に富むの民あるなり云々。

此の物語は亞細亞土耳共珂良迷洲の一都邑安黎朶に發端する。此の地は一八六七年頃、奉行和圖尹たるものに支配されてゐたが、壓制暴虐な彼は貧家の少女阿夢の姿色を愛し、權柄づくでこれを意に從はせようとするが、少女もその父母も服しない。大法師吳以陳も奉行の旨を承けて說得するが效がない。奉行は機を伺つてゐるうち、土地の祭禮の夜、人込みで兄にはぐれた阿夢を見て、衞兵に命じ、無理に奉行邸に連れ込んでしまふ。阿夢の兄武流範少年は氣慨ある有志の若者であつたが、妹の身の上を案ずる餘り、師なる英人博士顯理に相談する。顯理はかねて武流範一家を知つて居り、又奉行の暴政を怒つてもゐたので、添書を與へ首都君府の判事某(英人)に紹介し、判事の手で奉行の惡政を訴へさせ、安黎朶を自由の鄕たらしめんとする。だが君府に着てみると、當の判事某は英國遊學中である上に、奉行一味の姦黨の勢力が强くて志を遂げかねたが、幸ひ武流範は剛直な執政の一人諾、彌兒朗及びその女美壽明の知遇を得、祖國不振の現狀につき種々啓發されるところがあつたので、武流範は安黎朶の事は第二として先づ祖國の政治改良に働かうといふ大志を起す。武流範の留守中、博士顯理は奉行の虐政を難ずる演說をした罪で、刑となり、博士夫人及び一女綠林智は怨を飮んで露領より墺地利、普魯士を經、歸國の途についた事、阿夢が博士の死を聞き作つて奉行に從ふ樣をして博士の仇を報はうとしたが事成らずに捕はれた事、續いて博士の門下李の手で脫獄して逃れ去つた事、我が兩親が賊に殺された事、それと共に阿夢が再び行衞不明となつた事などがあり、これが遂一李の口から武流範に傳へられる。

大志を立てた武流範は彌兒朗父娘の勸めで英京に赴き、學問傍々土耳其の現狀に英人の同情を向けさせ、英の力をかりて政治改良の大業を遂げようとかゝる。かくて武流範は英京に赴いたが、生憎又も判事某と出違ひになつた上、掏賊に會つて所持金を失したので、一時美壽明から教はつた清賞曲を歌つて口を糊するが、却つてこれが緣となつて英の大宰相グラッドストーンと知り合ひ、又故あつてグ氏の手許にゐる綠林智と再會する、武流範はグ氏の食客として數年政法の學を修め、傍らグ氏の力添へで土耳其の政治改良に英人の注意を向けしめる。だが露土の關係危急になつたので歸國し、彌兒朗等を助けて國憲編纂等に盡力してゐるうち、いよいよ戰爭となる。武流範は李等と一軍の將として活躍する、殊に有名なプレヴナで露軍を破る。（此の間、和圖手が阿夢に再會し、これを慘殺すること、武流範の病中彼を捕へて露軍に降らんとし、却つて俠女綠林智に首を刎られる事などある）。然し形勢可ならず土耳其が露國に對して屈服的媾和條約（サンステファノ條約）を結ぶや、武流範は大にその不當を鳴し、自ら大使となつて渡英し、英相ビコンスフィールドを動かして國際會議を伯林に招集せしめ、露國を抑へて土耳其の保全に努めた（一八七八年）云々。

本文中には南翠の附加した感慨的文字が相當多く、時の政治に對する諷刺もある。地方官が大臣と結んで壓制を行つたり、志士の取締を苛酷にしたり、剛直な執政を排斥したりするのが、皆その意味をもつてゐる。武流範が清賞曲を唱歌して綠林智と再會する段は『經國美談』中「春の花」の唱歌が緣となつて主從再會するところを模したことが分明である。此の一段は南翠の創作であらう。且つ篇中の男女が悉く實現の人物か何うかも疑へば疑はれる、第一、土耳其人でありながら英人に近い名が大分ある。又通篇、英國の政體、社會、風俗、凡て英國の文物一切を崇拜する精神が歷々と見えてゐるが、英國が土耳其を助けた事實は事實として、英人の義氣が極めて理想化された人道的なものになつてゐるのは、英國好みの改進黨的立場を示してゐる。

『春色日本魂』、及び續篇『天誅組譽之旗擧』この二篇は篇中の人物や事件、舞臺の點で、『旭日美譚』の作り換へとも見られ、又『照日葵』の習作とも見られるが、それ自身は勿論政治小說といふべき程のものではない。殊に『日本魂』の方がさうである。『日本魂』の主人公、舘主計、前名河野祐一郎は但馬出石仙石家の忠臣河野瀨兵衞の遺子で、遺臣宮島某の手で成長した。河野の友人で仙臺藩の大身舘靭負は祐一郎の器量骨格を見込んで養子にする。それで祐一郎は主計と改め、國主陸奥守の側近に仕へたが、妻が同僚松倉某の横戀慕を刎つけたのと、一にはその忠正剛直な性格が姦人等の邪魔となるので、彼等から種々の侮辱を受ける。主計は一身に關する限り執拗な彼等の巧謀を取り合はずにゐたが、やがて姦人等が主家に累を及ぼす惡事を行つてゐることが分かつたので、彼等一身一味を斬つて切腹する。仙臺の臣となつてからの筋は南翠が嘗つて開花新聞に掲げて大當りを取つた『昔語千代田刄傷』(十年三月）に甚だ似てゐる。貞女義僕孝婦を配することも同じである。或は後者に模して腹稿を作つたのかも知れない。題名は、公家の爲めに身を殺して姦を斬つた大丈夫の心が卽ち日本魂だといふのであらう。

『天誅組譽之旗擧』は舘主計の遺子河野祐一郎（主計の前名と同じ）を主人公とする。祐一郎は幼少ながら勤王の志あり、義兄弟松平鐵之助等と國事に奔走し、十三歲で母の許を脫走し、京都に赴き、姉小路公知卿に仕へ、ついで中山忠光卿の跡を慕つて天誅組に入り、大和十津川に戰つた。後仙臺藩に仕へ、河野の家名を興し、亡父の遺志を果した。此篇祐一郎には百合江、鐵之助にはお多禰といふ佳人を配し、別に前篇から續きのお春熊太郎といふ毒婦兇漢の一對がある。此の天誅組を叙した點『旭日美譚』と連絡があることは事實である。南翠がかう好んで十津川の戰を描いたのは、これを所謂維新革命の原動力と見て、幾分か當時の政治的意識を目覺ます手段としたのではないか（坂崎紫瀾の場合の如く）といふ疑ひも起り得るし、又『旭日美譚』に於いては事實さうであつたのであらうが、『日本魂』及び『天誅組』に於いては思して何うか。『天誅組』は多少さういふ氣味があることはある。卽ち全然これ等を

政治小說の範圍から省かれぬ所以である。

『結城合戰花鍬形』、　これも格別政治小說といふべきものではないが、下總結城領に於ける正姦黨の爭ひから明治維新の一局面を寫してゐる點で全然政治小說と無緣とはいひ難い。前半、結城寛朝が姦臣志賀主水と妖婦染川の惑はすところとなり、貞節な花籬や忠臣小幡兵馬等を遠ざけるあたりは普通のお家騷動とあまり變つたところがないが、後半、勤王か佐幕かの問題から、寛朝（勤王）が父勝朝（佐幕）と各々黨を率ゐて戰ふところは、尋常戲作者と着眼を異にしてゐる。此の趣向は『照日葵』にそのまゝ用ゐられてゐる、殊に勤王の正義派が一度佐幕の奸人派に敗北するが、最後に勝利を得るといふ筋書も、『照日葵』に踏襲されてゐる。それでこの小說も『照日葵』の前驅的作物の一つと見て見られやう。題意は、結城家の重寶花鍬形なるものゝ紛失とこれの探索が篇中の主な挿話となつてゐるので、かう標出したのである。

『遠砧音菊月』、　この小說は、『情海波瀾』、『自由廼錦袍』、『自由艷舌女文章』等と系統を同じくする寓意的政治小說である。表面を讀むと、例によつて例の如き才子佳人の離合苦樂と奸人と善人の對立を叙したもので、格別政治小說だといふ前觸はない、然し熟く讀むと一讀して言外の寓意を覺ることが出來る。卽ち才子佳人の結婚に托して我が明治初年以來の內治の大勢を寫出し、或は壓制の弊害を述べ、或は志士の艱難を說いて、「以て當時を諷し後世を誡めし者」たることが分かるのである。

南翠は、發端に於いてはたゞかういつてゐるに過ぎない、——

本篇記す所の事實は元治（實は文久）慶應の間に起り明治十四年の十月に終る長物語にして其間起伏極りなく笑ふべきあり哭くべきあり喜ぶべきあり歎ずべきある一奇談にはあなれども云々

然し此の十四年十月が「二十三年を以て國會開設す」旨の聖詔の下つた時であるのを思ふと、南翠には抑もそも最初

から政治的寓意の小説を作るつもりであつたことが知られやう。然るに此の小説を讀むに、南翠は明白に二道をかけてゐる、即ち政治小説として成功せんことを欲すると共に、一方獨立した稗史としても面白きものにしようとした、即ちそれから政治的分子を拔いても面白く讀まれる小説を書かうとした。南翠の二道は必らずしも無理な注文ではない、然しこの二つの要求が統一を缺くと、たゞ無暗に複雜な、有機的結合のない、ゴタゴタしたのみの小説となる。丁度南翠の場合には、それが統一されてゐない。小説的骨格と政治的分子が統一されずに、めいめい勝手な道を行くといふ有様である。而かも南翠も流石にこれが苦になつたかして、その根本の觀念を正さずに、たゞ表現の末節で辻褄を合せようとするものだから、無暗にプロットを複雜にするだけで、迷宮に入つたやうな氣にする。つまり稗史のプロットの根幹に明治維新以來の政治上の大事を織り込んで、それを諷刺する、それは可いが、その政治上の暗示を稗史的プロットの間には何の有機的統合もされてゐない。種々な歴史的事の暗示が小説のプロットを勝手に支配する、その爲めに篇中の性格には統一がない、まるでメチャメチャなのもある。

先づ大筋を話して、後に政治的寓意を探ることにしよう。

日野、菅生、玉川原から東京へかけてが舞臺となる。

羽田生れの惡漢五十松、京上りをして公卿侍となり、佐藤興繼と名のつたが、貰ひ子の菊子といふのが美人なところから、江戸に下つてその娘を餌に一トもうけしようとする。佐藤は和歌の嗜みあり菊子は繪に秀でゝゐたので、これを利用して犧牲に近づく。第一の犧牲は菅生村の大壽菅三郎右衛門、彼は菊子の色にほだされた爲め、子ある妻に去られ、寶物の六玉川繪卷と定家色紙と黄金を奪はれ、遂に一家沒落となり、自殺して果てる（寶物の元の主東與三六夫婦の死は全く傍杖である）。菊子父子は第二の犧牲として麴町の老舗伊勢屋（太物店、久住氏）を狙ひ、父は易者として、子は醫者として同家に出入する。然るに菊子が、同家の長男由太郎に戀する爲め、姦計が巧く行はれな

い、佐藤は焦つて、同家に不幸のあつたのを幸ひ（主婦の死去）、子分と共に大枚の金を盗んで逃げる。同家には然し今一組、番頭徳兵衛とその情婦お秋（萱の舊妻）といふ惡玉がはびこり、番頭は主人由兵衛にはお秋をすゝめて後妻にし、自分は店の全權を握つて勝手なことをする。これを見かねた由太郎の許嫁お露の養父五郎助は度々忠言をいふが用ゐられない。危く惡人原が成功しさうになる時に、お露の手から意外な助けが出て、善人が榮え、惡人が亡びるといふのが、大筋である。

そこで、此の小説の題名であるが、砧は調布の玉川から思ひついたものだから不思議はないといひ條、由太郎の許嫁お露が日野川原で砧打ちをするところが實際篇中にある。菊月の菊は菊子である。暗に貞奸兩人を寓示したものであらうか。

以下政治的寓意だけを拾ひ上げて示すことにしよう。

（四套二）慶應四年一月、番頭徳兵衛が、主家伊勢屋から大阪町の自家に歸り、子方をつれて伊勢屋へ談判に行かうとしてゐるところ、云々、これは徳川慶喜が京都を去つて一時大阪城に入つたが、明治元年兵を率ゐて入京せんとし、鳥羽伏見の役となつたことをいふ。

（六套三）明治元年三月十四日、由太郎、お露の婚約の時、五ヶ條の掟書をつくる、その五ヶ條に曰く、——

第一何事も相談致し萬機私しを爲す間敷事

第二夫婦心を一つにして盛に商賣を勵むべき事

第三久任（伊勢屋）沓は一家として子孫に至るまで各々親密に致し兩家をして破産せしめ間敷事

第四仕來の事と雖も惡弊を破り世間の正道を旨とすべき事

第五知藝を環宇に求めて大いに長久の基を堅むべき事

これは、有名な五ヶ條御誓文を通俗化して啓蒙に使用したものである。從つて由太郎とお露の婚約の意味も、五ヶ條御誓文の目的と同じである。さうなると由太郎が何人か、お露が何人か、略ぼ知れるであらう。

（八套一）明治七年十月、お露が二人の惡者の爲め危難に出會ふところは、臺灣事件を諷刺したのであらう。二人の惡者は支那の背後に動く露英二國のことであらう。

（九套三）明治八年四月、五郎助が頻りに元年の五ヶ條の約を實行せよと迫るので、止むなく由太郎は一つの案を作つて五郎助に與ふ。

當家と管家との維持法は一ツの憲法を定め置て相談の上何事も取計ふ云々

これは明治八年四月の立憲政體確立の聖詔降下を諷してゐるのである。

（十套二ー三）明治九年一月、お民（お露のこと）の虐待は、當時志士に對する官憲の壓迫を諷してゐやう。

（十一套一ー三）明治十年十月、菊子等がお民を虐待し、盜賊のいひがゝりをつけて屯所に拘引せしむるところは、西南戰爭に關連して、志士等が同じ目に會つたものが多いことを語つてゐやう。

（十二套一）明治十一年五月十四日、伊勢屋の後家お秋が麻布で賊に殺されたといふのは、大久保利通の死を諷してゐる。

（十五套一）明治十三年四月、五郎助が再三伊勢屋にお露と由太郎の婚約履行についてかけあひに行く、伊勢屋では由太郎も德兵衛も會はぬのみか、門の外に締め出す云々。これは志士が盛に五御誓文の實行催促するため大臣方を訪問すること、大臣方が面會を拒むこと、集會條例その他で彼等の行動を大に束縛することを諷してゐる。又德兵衛が五郎助とお露を由太郎に讒言するのは、地方官吏が政府大官の旨を願つて志士を惡者にしようとかゝるのと同じ意味である。

（十七套一） 悪者五十松、菊子等が、徳兵衛を誘かして函館の伊勢屋支店を奪はうとする云々、三萬兩のものを三十兩年賦にする云々。これはいふまでもなく、あの開拓使拂下事件を指すのである。

（十八套一―二） 東與志男が由太郎が、お露との婚約を履行せぬ爲めに紛亂が生ずるから、思ひきつて結婚してしまふが可いと勸告するのは、ブルヂョア、知識階級も人民の要求を支持し始めたといふ意味であらう。

（二十套四） 明治十四年十月、由太郎お露が二十三日婚禮の旨披露云々、これは二十三年國會開設の聖詔の下つたのをいふこと、勿論である。

以上で、その小説の政治的寓意は先づ大體拾ひ得たものとする、讀者もこれで、この小説が政治小説といはれる理由が分つたであらう。最後にその收結の一節を引いて置かう、――

斯く萬般の事整いければ姦黨原は地位を失ひ輿論に任せて與志男夫婦が新に南家の家政を補佐し、商賣漸次に繁昌して日に内政の改まり進みゆくなる福運に外共侮を被ふらず廢家を興し祀を續ぎ一門朝日の昇るが如く家は益々富榮えしとぞ是や一家の代議政體基礎固く動きなき萬古不易の一班を拙なき筆に記し止めて萬々歳を壽ぐのみ

以上は政治小説家としての南翠の準備期に屬する政治小説乃至これに準ずるものであるが、これ等を通觀して一二の結論が得られる。それは第一に、南翠は普通文學史家によつて暗示されてゐるやうに、末廣鐵腸、柴四朗など政治小説を書き出したのに刺戟されて政治小説を書き出したのではなく、寧ろ政治小説家としては此の人々の先輩に當るといふこと、第二に準備期の南翠の政治小説的試みは當時の政治小説の諸體（演義稗史體、飜譯體、寓意的人情物體など）に亙つてゐること、第三に此等小説中の政治的イデオロギイが、明白に南翠の改進黨的立場を示してゐること等、これである。殊にこの第二條は、南翠特有の好新癖模倣癖を示してゐると共に如何に南翠が新境地開拓に努力し

苦心したかといふことをも十分示してゐるであらう。

四

以上、十八年でいよいよ南翠の準備期は終り、十九年と共に開花期全盛期に入る。今南翠の著作力とその小說の價値を標準として考へると、彼の眞の全盛時代といふのは、十九年、二十年の僅か二年間である。然しこの二年間に、南翠は豐富な著作力を示して全盛期相當の實を擧げた。そのうちで、今政治小說乃至政治小說と目すべきもののみを擧げると、左の五篇がある。

○慨世悲歌 照日葵（てるひのあふひ）
　明治十九年一月四日―四月十四日、改進新聞、同二十一年七月刊

○處世寫眞 綠簑談
　明治十九年六月一日―八月十二日、改進新聞、舊と「雨窻漫筆綠簑談」といふ（十九年十月刊）
　後篇は同二十年十一月九日以後、改進新聞、同二十一年六月刊

○一顰一笑 新粧之佳人
　明治十九年九月三十日―十二月九日、改進新聞、同二十年五月刊

○春曉攪眠 痴人之夢
　明治二十年三月刊

○露花蛺蝶 朧夜櫻
　明治二十年三月二十三日以降、改進新聞

○遠征奇勳暾の旗風

明治二十年七月九日―九月二十九日、改進新聞、「旭章旗」と改題、二十二年十二月刊

さうして十九年に續け樣に發表された三篇こそ、たゞに政治小說家としての南翠の代表作であるのみならず、南翠をして時の文壇を代表する第一流の大家たる位地を得せしめた作品で、南翠の著作力の頂上を示すものであつた。以下此等の諸作に就てやゝ詳しく語らう。

『照日葵』

『照日葵』は南翠自らの語るところによると、十八年十二月に腹案を立てたものといふ。大筋は、慶應から明治の初めにかけて奥州名取の家中にあつたといふ、正奸兩黨の爭ひを骨子とし、これを勤王佐幕と結びつけて時勢を匂はし、暗に政治的意義を含めたものであるが、人物事件は全然假作に出る。

本文の發端は慶應三年春であるが、抑も名取家に於ける正奸兩黨の軋轢なるものは可成り以前からあつたものと見て可い。だが兩黨正面衝突の原因は正黨の大館段左衛門父子の不時の出世にある。名取の大領の治邦は、徒士大館の能舞を見、その至藝に感じて上士に取立てる。その上大館の子主稅介の才識拔群の爲め、治邦に懇望されて、治邦の女糸萩姬の婿と定まる(それは半ば姬の願ひにもよる)。ところが、奸黨の巨頭たる家老多賀石見は我が子源次郎を糸萩姬に配して自ら威權を振はうとし、同じ巨頭の一人一戶民部も自ら糸萩姬に配せんとする心があつたので、共に大に失望するが、やがて奥向の女達の手をかりて主稅介追出運動にかゝる。運動が漸次具體化するにつれて、聰明な主稅介は形勢を察し、治邦に暇乞して修業に兼て天下の風雲を見るといふ名目で江戶に出てしまふ。糸萩には初め主稅介の江戶行を名目通りに解してゐたが、やがてその眞因を知ると共に、雄々しくも出奔し、男裝して主稅介の後を追

ふ。多賀一戸等の奸黨は、姫の出奔によつて間接に威權を手に收める手段がなくなつたので、計畫を一變し、今や彼等の一派で直ちに名取家を横領しようとかゝり、その第一着手として正黨に對してクーデターを行ふ。正黨の磐前出羽、白河帶刀、宮古靱負は奸黨に先んじられて四方に奔る。これより先主稅介の父段左衞門は主稅介の江戸行の後謀反の寃罪をうけて自殺する。その原因が即ち照月葵なる唱歌で、これは段左衞門が時勢を諷して名取藩士の士氣を引立てんために作つたものであるが、惡智にたけた奸黨がそれを逆用して治邦に讒したのである。出奔した正黨名士に對して奸黨は刺客を放つ、江戸の主稅介にもそれが及ぶので、女裝して難を避ける。

此の間時勢は急轉し、世は明治に入ると共に朝廷の幕府討伐となり、天下を擧げて勤王か佐幕の何れかに與(くみ)することになる。一時奸黨に捕はつた主稅介は、辛うじて毒手を脫するが、時勢の急務、父の横死、奸黨の暴虐を知るや今迄の消極的な明哲保身的態度をすて、名取一番を勤王無二の人々たらしめ、同時に自らブルタスとなつて奸黨の巨魁を斬つて父の遺恨を散ぜんと期する。かくて前記の正黨人士の外に渡船葵軒、磐船倭文麿などの援助を得、江戸に潛んで主稅介との再會の機を待ちつゝあつた糸萩姫を盟主に頂いて義軍を結成する。義軍の結成迄の間に、一戸民部を相手のスパイ戰など種々あるが、それは略す。

奸黨は名取藩の政權を一手に握ると共に、內には良政を布き恩德を施して人心を收め、外には日和見の二段備への策を立てる。即ち陽には奧羽列藩同盟などに加はつて佐幕的色彩を示し、大領治邦をして國境に出馬させて會津を聲援するが、陰には若殿治季を奉じて計るところがあり、會津落城と共に、多賀、一戸等は俄に勤王を唱へ、戈を逆様にして治邦の軍を討ち、名取領を平定する。だが今は奸黨の甘言に乘らなくなつた人民は頻りに反抗を企て、糸萩姫や正黨の人々を迎へようとかゝる。此の消息に接して、義軍は結束して立ち、明治元年十月いよいよ名取領に押寄せて奸黨と戰ふ。さうして種々苦戰し、敵の奇計に掛つて姫(實は替玉)を奪はれる目にあつたりしつゝも、主稅介のナ

ポレオン流兵法なるものが效を奏し(民部傷死)、愈々海上から名取城に攻め寄せる段になつて、突然の大暴風に義軍の船は漂流覆沒し、散々な有様となる。

かくて奸黨は安心し、人民は不平を呑んで二年、三年と送る。三年四月、治邦は朝廷から罪を赦され、且つ位階を賜はつた祝ひに加茂祭を盛大に行ふ。この時十數人から成る異樣の花裝した踊子の一團が城中に入る。さうして隙を見て祝ひ歌を照日葵の歌にうたひかへつゝ、折柄見物中の奸黨の席に斬り込み、狼狽する巨魁を斃す。これは義軍の首腦たる主稅介、糸萩姫、出羽、葵軒その他の人々で、彼等は大暴風のためロシヤ領に漂着し、露京に滯在して見聞を博め、去年の夏日本に歸つてから直向再擧の機を覗つてゐたのである。かくて義軍の志は達し、家中悅服する。主稅介と糸萩姫は治邦の許を得て婚し、主稅介は治邦の意をうけ、明治維新の精神を體して名取領に一種の立憲政治を布く。

以上が『照日葵』の梗概である。卒然これを讀むと、明治十九年當時の文壇の現勢からいつて可成りな力作大作であるらしく受取られる。趣向を大規模にして變化を多くし、而かも新奇分子を加味することを忘れぬ點、文章を艷麗高尙にせんとする苦心、水滸傳や馬琴の手法に西洋小說風の加減を試み、道具立が堂々として首尾均齊のある點、人物を個々性格的に書き分けんとせる點など、その伎倆は到底曩日の綴物戲作者の南翠ではない。洽々たる長篇、その創作力は當時としては稀有のもので實に群を拔くものがある。だがこれの價値を公平にいふと、野心强い習作模倣作といふべく、力作大作の名を許すには餘りに獨創がない。細看すると長所といふ長所、取柄といふ取柄は十中八九他の小說からの借物であり、而かもそれが可成露骨に見えてゐる。成る程南翠としては、こゝまで纒め上げるのに異常な苦心を要したことであらう、それは、この作が南翠從來の政治小說的試みを集大成した、いはゞ劃期的の作品となつてゐるのでも知られる。編中舞臺を奧州に取つた點、時代を幕末にとつた點、正人奸黨相軋る點、勤王佐幕に絡ん

で父子相爭ふ點等々をとつて十九年以前の政治小說的作物に比較すると、集大成といふ事實は首肯されるであらう。

『照日葵』は南翠自身としてはそれ程主要な作品ではある。然しその本質的價値を吟味してみると、模倣に次いで模倣あるのみである。その例をいはう。此の作は作の根本精神からが模倣である。從來の政治小說的試みが『經國美談』の影響下にあることは前に述べたが、從來の試みを集大成せるこの作が亦依然『經國美談』の強い感化を示してゐるのは、或る意味で當然であらう。正奸兩黨が相爭ふ、奸黨が勝つて正黨が國外に奔る、刺客がこれに纒ふ。兩黨互に智力を戰はす、スパイを用ふる。結局時至つて奸黨が破れ、正黨が憲政を布く。『照日葵』の根本的構造は明かに『經國美談』のそれから借用したものである。部分的趣向に於いて『經國美談』から暗示を得、乃至これを敷き寫しにしたものに至つては可成り多い。その中極々明白なものを二三擧げると、先づ照日葵の歌は有名な「春の花」から暗示を得てゐる。鳥海橋の難（第七章）は巴比陀（ペロピダス）が阿善へ出奔する場面の作り替である。主稅介が義軍の將位に就くに、威波能（エパミノンダス）の公義を引くところはまだ可いとして、阿武隈川畔の戰ひ（十九章）に兩軍の陣立を描くあたりは『經國美談』隆具（レウクトラ）の戰の見えすいた模倣であり、殊に花裝せる義軍の一團が加茂祭の最中に奸黨を斬る（二十章）一段は、十二壯士が女裝して奸黨を刺す『經國美談』の好趣向をそつくりその儘敷き寫しにしたものである。『經國美談』以外のものの模寫も勿論少くない。就中負ふところの多いのは『八犬傳』である。その影響の殊に著しいのは、女裝の男性、男裝の女性の工夫。正黨の名士が潛居するあたり、糸萩姬が敵に奪はれ、敵が陣頭に姬の身體を縛して味方の鋭鋒を鈍くしようとかゝるあたりに見える。總體、細部の趣向は馬琴の作に負ふてゐるところが多い。その他、主稅介をしてブルタスを慕はしめ（十章）、又阿武隈川畔の戰の前日、主稅介が雄辯を揮つて義軍を激するあたり（十九章）などには、『自由太刀餘波鋭鋒』の面影が見え、主稅介が倭文麿や葵軒の許で古文古史を學んで大志を發するところは『慨世士傳』のリエンジイから學んだものといつても可い。

人物の描寫に於いても、他から借りたものが餘りに多い。事實、篇中の性格を描き分けようといふ南翠の工夫と努力には誠に諒とすべきものがある。正黨奸黨、男性女性の描寫に於いて、大體に從來の稗史同類型を脫してはゐないが、二三或る程度までこれを破つてゐるものがなくもない。男性では奸黨の一戶民部、女性では糸萩姬及びその附女勝見の如きがこれである。就中民部の如きは從來の勸善懲惡主義的惡人が幾多の笑ふべき弱點を有するに反し、冷徹した智力と冒險的膽氣を有ち、而かも正黨の諸名士を飜弄するに足る縱橫の機略を藏し、小惡人型に見る好色貪財の如き弱點はもたない。糸萩姬の性格に至つては、大名の愛女だが、心樣雄々しく質朴で武を好み、男尊女卑の俗見を排し、一種の男女同權說を持し、眞に理想の人を夫と選び、身分に拘らぬといふ、從來の稗史小說中殆んど見られぬものである。勝見は他の點は兎も角、姬にかゝる男女同權を吹き込んだ女性として新しい。だがかゝる性格にもそれぞれ粉本があり、南翠の獨創に成るものではない。卽ち民部は『經國美談』の冷溫知(レオンチアデス)と原田甲斐を合せたもの、糸萩姬は『慨世士傳』の那以那姬と『三國志』の孫夫人を合せたものに外ならない。男主人公の主税介はむしろ類型的な八犬士流の性格であるが、なほ『經國美談』の巴比陀(ペロピダス)、『慨世士傳』の莉延兒(リエンジ)から脫化してゐる。

此の作に模倣が多くて獨創の極めて少ないことは以上說く通りであるが、單に模倣といふ點を別にしても、幾多の缺點矛盾がある。第一に僅々二三年の短日月間に餘りに多くの事件を無理に織り込んだので、前後不明を來し、混沌たる印象を與へる。力めて高尙斬新を欲して從來の小說の埒外に出ようとした結果、文章にわざとむづかしい熟語や成語を用ゐ、美辭麗句を陳ねて極度に修飾し、趣向を目まぐるしく變化させて讀者の意表に出ようとかゝる。才思文藻の豐富は成る程此の作の一長所に違ひないが、濃艷も程度をすぎると嫌惡を伴ふ。南翠には故人の佳句をそのまゝ生呑して使用する癖があり、又和漢洋の故事の引用も多過ぎて煩はしい(例へば十二章、二十章)。殊に西洋の故事の引用の如き、政治的必要から出てゐるが往々噴飯を値するものがある。且つ又馬琴流の生物識り的講釋が所々にある

(例へば十二章)。又趣向の新奇を求める爲め架空に流れ易く、變化を欲する結果却つて重複が續出する。如何に同藩中の出來事だとて父子兄弟相分れて爭ふことが多過ぎる。死んだと思はれた主税介、糸萩姫が、共に身代りであつたり、一方が間諜を用ゐると他方も用ゐる、すると一方が又間諜の間諜を用ゐるといふのもやゝこしい。不自然な點も勿論少なくない。例へば、如何に才智俊秀なりとて足輕の子を大名の婿にする如きは考へられぬ。女裝の主税介が奸黨の手から脱走するとき、二人の弟に助けられるが、双方とも兄弟だと知りも思ひもせぬこと（十章）や、主税介と糸萩姫が顏を合せつゝそれと氣づかぬなど（十四章）も、あり得べき話ではない。蘭法の毒藥が一方には藥となり一には毒となるなど（十二章）も奇を弄し過ぎる。義擧の後も、出陣早々主將たる糸萩姫を敵に奪はれるなど（身代りにせよ）は、あるまじき出來事である。義軍が漂流してカムチャッカに着き、露都に滯留して文物を視る（二十章）如きはむしろ讀者を愚弄する惡趣味であらう。人物の性格に現れたあり得べからざる矛盾撞着については枚擧に暇がない。愛女の意を察して賢才を養子にするかと思ふと忽ち又疎外する治邦、禍殃の至るを知りつゝ異常の榮寵を甘んずる大館父子、許婚の夫を追ふ身で主税介を尋ねもせぬ姫、拔群の智力をもちながら妹一人(勿來(なこそ)、姫の附人)の處置に拙策を弄する民部、兎に角篇中性格の輪廓がそれと認められる人物が、前後別人の如きあり得べからざる矛盾を藏してゐること、比々皆然りである。背景の非現實的なこと、支離滅裂的なことも可成り重要な瑕瑾の一つとなつてゐるが、これに就いては詳しく述べない。

要するに『照日葵』は南翠の從來の作風を集大成して精一杯の力量をみせようとした野心强い習作である。此の作での南翠の結局の目的は、自由民權主義を寓し、改進黨的政治主張を宣傳するにあつたことは明白であるが、たゞ彼が餘りに力を入れ過ぎて、種々な結果を同時に成就せんとした爲め、却つて數多の缺點を來した。

南翠の腹案は最初から政治小説を書くにあつたらうが、野心強い彼は單に夢柳一派の如き宣傳小説を書くだけでは滿足が出來なかつたらう。彼は先づ小説として、斬新高尚無類の傑作を書き上げる氣になつた。當時の小説觀からせば、それには、西洋小説風の文體や立案を學んで、『八犬傳』『水滸傳』の如き、和漢固有の小説と折衷するのが第一である。此の折衷の手本を彼は『經國美談』に求めた。『慨世士傳』その他に求めた。かく彼の志は畢竟折衷にあつたのであるが、それは西洋文學の教養を缺いてゐる彼には、皮相的模倣以上に出ることが出來なかつた。それは彼が極力模倣しようとかゝつた『經國美談』に於いてさへ、精神を握み損なつてゐるのでも分かる。

『照日葵』の作の根本構造は、前にもいつたやうに『經國美談』から借用したものであるが、正黨が奸黨を斃すといふ脚色を政治的に生かして使ふには、正黨に民權的理想なり、奸黨に壓制暴政的行爲がなければならぬ。『經國美談』はこの點甚だ鮮明であるが、南翠の小説には甚だ曖昧模糊たるものである。正といひ奸といふも、實跡に出たものがないので、その區別が徹底しない。若しこの區別が判然してゐれば、最初から正黨に殺奸誅惡の志があるべき筈である。正奸兩黨に、民權黨專制黨といふ明確な區別がない以上、大主義が立たぬので、此の作に寓した政治的イデオロギイが附燒刄に終つてしまふ。事實彼が種々當時の政治的イデオロギイを陳べて政治小説的色彩を强調し民權思想を宣傳せんと試みてはゐるが、その悉くが單なる場當りに終つてゐるのでも明らかである。(例へば十二章、二十章)。かく政治的寓意と作の內容の不調和の爲め、全體が時代錯誤的印象を與る。即ち明治元年乃至それ以前の人間と出來事が、明治十九年當時の政治的イデオロギイをもつといふ結果となる。此等の場當りその爲めに、却つて當時の讀書大衆が如何なる政治理想をもつてゐたかといふことを知る興味が出るが、これは然し此の小説の成功條件の一つではない。

此の『照日葵』が『經國美談』と同じく、改進黨的政治主張の宣傳を主眼の一としてゐるのは、南翠の立場として

當然であるが、以上の理由からして『經國美談』程に整然と徹底的にこれを宣傳することが出來なかつた。第十四章で、主稅介が――

古史を繙き利害を考へ治亂興廢得失の事蹟を和漢歐洲の史に照して思ひ量り猶佛國史を啓きては路易十四世が暴戾を恣りジャコビン黨の狂發して自由の眞理を誤り認め路易十六世が罪を數へて斷頭臺に恥辱を與へ猶も怒の散ぜずして無辜の淸民を殺戮せしダントン。ロベスピヤ等が逆を懷ひコルデー烈女の細腕にて勢鋭きマラーを刺したる義勇を心に賞讃し其の革命の策を愆り國の疾苦を造りたる慘狀を見て淚を振ふ

といふのは、勿論改進黨の立場から自由黨に當つたものであるが、主稅介等の名取討入は、名は義擧といふが矢張り一種の革命行爲ではないか。たゞ第二十章、主稅介が治邦の使者に殺奸の主旨を演べるところは、前に（二）に於いて述べた南翠得意の憲政論を引用して、やゝ改進黨的主張を明確にしてゐる。

我れハムデンの義を知らずダントンの狂を倣はずとも聊か道を知るが故に始めよりしてブラタスの淸義を學びシーザーの邪慾を斷たんと存じつるのみ今我が君の仰せ給ふは誠の事の極端にて我が身をも顧みず死を決して姦黨を今日始めて殪し得たる事の意(こゝろ)は動閥政治の害を除かん爲めのみなり（中略）抑も政治に云々（此の間は憲政論中の政治の種別の繰返し）我國は從來有爵政治に取り封建割據の體はなせども動閥のある元老の意を以つて何事をも爲し得ざる事あらぬが如く威權の最も强大なるに其の責任は王者にありて王政ともなり暴政ともなり一種不思議の惡習なり此の惡弊は藩政の上に遷りて門閥なる元老權を專らにし君主を賣りて私意を遂げつゝ一も責を我が身に負ず民怨めども君知らず君患れば民喜び上下の乖離は天地の如し（中略）恐れ多くも朝廷にては此の積弊を攘　せ給ひ王政維新の勅を乖れ前に述べたる六政種の最も宜しき所を採りて立憲君民同治を開き彼の英國の政治の如く國皇貴族人民に主權を分ちて多數の人の意の趣く所に隨ひ政事を布き給はんとは去る元年三月に天地神明に誓はせ給ひし五

事誓文の第一に「廣く會議を起し萬機公論に決すべし」と示させ給ひし明文にて聖意を知るべきに云々。

極めて漠然とした論ながら、これを前の（二）の憲政論と對照すると英國最良の改進黨の立場が窺はれる。又主稅介は殺奸誅惡の後、名取藩に一種改進黨的立憲政治を布いて、如上の主旨の幾分を實踐してゐる。參考のためこれを一瞥しよう。

主稅介は憲を示して名取の主君は神聖に頂ぐべき尊位を保つものとし、其職分は朝廷の藩屛たるの務を守り有司の任命政令の認と不認とを總攬し又た藩政は舊來の門地を以て一層とし士卒を以て二層とし庶民を以て三層とし此の三層より選たる總代を以て會議局を組織せし上執政官は是れより拔擢すべき旨を親裁を得て發令したれば云々。（二十章）

南翠が此の小說に於いて主眼とした今一つのことは、所謂維新革命をもつて民權運動と見る思想である。南翠が明治維新を舞臺にしたのは、『經國美談』の古希臘と對照させたつもりからでもあらうが、此の思想を織り込みたいからでもあつた。かゝる思想は南翠の創造ではない、自由黨の一部志士達の如き早くから同じ思想をもつてゐたのである（坂崎紫瀾の條參照）。坂崎紫瀾の如きは立場が違ふが、南翠より先に矢張り同じ思想の下にその政治小說を書いてゐる。南翠がかゝる思想に薰染してゐることは、上記の殺奸主旨の演述にも一寸見えるが、主としては此の作の第十章で、主稅介の思想の變遷をかりて述べてゐる。南翠の維新革命觀を要約すると、天明年間王陽明の學派が大に行はれたが大鹽の亂と共に衰へて朱程の學派の再起し、賴山陽の日本外史著述となり、水戶中心の皇學乃至國體學となつて維新革命の原動力となつたが、更に維新と共に洋學勃興し萬事を西洋に取るに至つた。此の洋學は漢學皇學の狹量な愛國心に對する反動で、眞の愛國心から發したものであり、愛國の眞髓たる民權の大義をこれによつて悟るに至つたのである。云々。別に感心する程の卓見でもなく、一貫した論理的秩序があるわけでもない、寧ろ牽强めく點がない

でもないが、兎に角彼が、かゝる維新革命觀を取り入れてこの小說の主眼の一となしてゐることを注意したい。

『照日葵』の內容の複雜なのにつられて思ひの外多くの紙數を費した。此の邊で彼の第二の長篇『綠簑談』にうつることにしよう。

『綠簑談』

南翠自身の校訂版たる古蒼樓叢書の流布本の方には「處世寫眞」といふ角書きがついてゐるが、初めの角書きは「雨窓漫筆」といふのであつた。これは內容からいつても題名からいつても、「雨窓漫筆」の方が似つかはしいが續篇は「處世寫眞」の方が內容には相應してゐるかも知れない。然し本來綠簑の二字は釣魚や釣客に關連してゐるので、此の小說の如く專ら百姓に關連せしめるのは何うかと思ふ。南翠の惡趣味の現れの一つである。

此の小說には十九年版（前篇のみ）があることは前にも述べたが、この版は改進新聞を拔萃したもので、流布本とは少し違ふ。今此の方の序詞を引いて、『綠簑談』の成立、主趣などを一通り見て置かう。

外史(おのれ)未だ敎の庭に在りつる頃米人リーバー氏が著はす所の自治論（Self Goverment 一名 Civil Liberty）を讀みて聊か感ずる所ありつる儘を筆に止め一篇の小說として其が儘篋底に藏めたりしが頃日社會の氣運を觀るに良や目を政治上に注ぐ者多かるを以て政治小說（Political Novel）の如きも大に密接の關係を有つ傾きあるやに思考せらるるより偶ま篋裏に探り之を把出しこゝを削りかしこを補ひ骨を留め肉を人情に假て全體を粧ひ見る彼鷄肋愛を割難きと云へる類にや又捨難きの想ひあり依て題號も元の儘に「綠簑談」と稱へて茲に紙上の餘白を借ることとはなせり其主旨專ら中央集權と地方分權との問題に係れるとは雖も皮相よりして味ひなば通篇總て情史ならざるはなく退いて之が氣骨を味へば滿卷悉く政論ならざるはなし云々。

以上によつて著者の意のあるところが大體は分かる。その讀んだといふ『自治論』といふものも此の引用では原文を讀んだらしく書いてあるが、南翠にそれ程の英學の力があつたとは思はれぬから、恐らく林董の譯（十二年刊）の方で讀んだものであらう。

此の小說の主旨たる中央集權と地方分權は著者が漫然と取り上げたのではない。この問題は、元來改進黨の綱領の一條項（第二章の三に、中央干涉ノ政略ヲ省キ地方自治ノ基礎ヲ建ル事）であつて、改進黨としては機會ある每に地方分權地方自治を高唱して來たものである。その根本精神をいへば、中央集權は封建制度の餘習を一掃して明治維新の大變革を統一的に建設するには必要なものであつたが、既に此の役目を果した後までも久しく權力が中央に集中されてゐては財力智力もこれに伴つて中央に集中することになり、地方は疲弊する、且つ干涉政治の端が發して政費增加となり人民の自治心を壓抑する、何れにしても國家の特策ではない、國家の健全な政治的發達を期するには地方分權に依るを可とする、といふ主張である。此の主張は、數年來の不景氣、地方人民の窮乏に裏付けられて、大に根强いものとなつてゐた。會々明治十八年末、來る二十三年國會開設に應ずる準備として中央政府の大改革が行はれ、政府組織が根本的に改制された。改進黨は此の機を逸せず、この度の改革を地方政治の上にも及ぼして宜しく地方分權地方自治を行ひ、民力を休養し自治心を養ふべきを主張し、自黨の機關新聞紙上で殆んど連日此の問題を論じた。その代表的な論文は十九年一月郵便報知新聞紙に揭載された尾崎行雄の大論文「更革私議」である。地方政治改良に關する點でその要旨を擧げると、府縣長官は政務官事務官に分ち、本籍人を用ゐること、官公吏の減俸、地租輕減、戶長郡區長の公選、府縣會の職權擴張等凡そ民力休養地方自治に關する喫緊事數條を詳論してゐる。改進黨は更に此の年四月三日大演說會を開いて、新內閣、國會準備、地方至治の事を論じ、翌四日同黨大會を開いた上、尾崎行雄の建議たる「地方自治ノ件ニ付キ政府ニ建白スル事」、島田三郎の建議たる「言論集會ノ件ニ付キ政府ニ建白スル事」を

可決し、同二十日島田の手で此の二件の建白書を東京府廳に呈した。

改進黨のかゝる主張と活動を背景として考へると、改進新聞記者であり同黨政策のシンパサイザアである南翠が、かう地方分權の主張を寓して政治小說を書いたのは偶然ではなく、正しく同黨の此の主張を啓蒙的に宣傳する意志からであることが明白になる。

此の小說の出來事は凡て明治十九年より三年後の二十二年から二十五年迄の間のことになつてゐるので、一種未來小說の形式をとつてゐる。そのうち前篇の分は二十二年から二十三年へかけてのことである。物語の筋は、『照日葵』に比べると、單純で且つ素直に發展してゐる。

越山卓一といふ越後の山村出身の青年がある、夙に中央集權の惡弊と地方分權の必要を認め、何とかして地方自治の發達と民力の休養に貢献したいといふ志をもつてゐた。越後は貧富の差の甚しい點では日本有數の土地だから、卓一の志を立てたのは、かういふ特殊事情も與つて力があつたことであらう。卓一はこの志を持して上京し、政治法律の學を苦學中、英國歸りの著名な代言人中島博智に見出され、中島家の書生として勉强を續けてゐるうちに、同國柏崎の豪家の子で齋藤孝といふ友人の法科大學生が、歸省の途次卓一の實家を見舞つて見て來たのだといつて、容易ならぬ消息をもたらした。卓一の父は官金盗奪の嫌疑で警察に拘引され、病氣がちであつた母はこの事件以來どつと枕につき、妹のお雪が健氣にも一人で苦勞してゐるといふのである。卓一は學業を中絕するのを遺憾に思つたが、然し止むを得ぬ事情なので、中島に暇を乞ふて急いで歸國することにした。中島は民權主義者で改進黨であり、勿論地方分權說に賛成してゐたので、平生卓一の志を憐れみ、弟の如く世話してゐた。中島の妹お今といふのが、才色双美の佳人であるが、卓一の人物を見込んで深い情を運んでゐた。

卓一は急いで歸國して、父に面會に出かけたが未決だとて許されぬので、自分で耕作したり日傭に出たりして妹と共に母を養つてゐる。冬になつて父の罪も決し、卓一も長岡の公判廷に召喚されたが、丁度長岡に出發する日、雪解の河水が溢れて洪水となり、卓一の家は辛うじて母子三人の生命が助かつただけであつた。だが幸ひ長岡の公判で卓一の父は證據不十分で放免された上、長岡から歸鄉の途中、かつて東京で知りあつた新聞記者山田文治と同道し、山田の助力で當座の窮乏を凌いだ。山田は民權黨で地方分權論者であり、改進派の每日電報の主筆として有數の人物であつた。

父が歸つた上、山田の厚意で漸く生活の苦を逃れて、僅かに學業を始めかけたかと思ふと、卓一の身には新に二つの災難が振りかゝつて來た。一は、かねて妹のお雪に戀慕してゐた戸長森村某の息子權一郎が、甘言でお雪を誘拐して失踪したことである。今一つは、かねて村民が分け持ちにしてゐた一區の美田が時の大臣春川伯爵の垂涎するところとなり、村一體がかつて春川から多少の恩借金のあるのを楯に、春川の意をうけた戸長が姦智を弄して取り上げようとかゝつたことである。村民は卓一を推して春川、森村と爭つたが、長岡の初審は敗訴になつた。卓一は村民に說き、自身で總代になつて控訴の爲めに上京する。

齋藤の誤解や奸人の讒間のために種々な手違ひが生じて中島にも齋藤にも會へず、僅かに山田一人味方になつてくれる。且つ山田のおかげでお雪の在處が判明する。お雪は權一郎の意に從はずに節を守り通して、ある貧民窟に監禁されてゐたのである。中島は卓一の上京を少しも知らなかつたが（戸長森村は中島と卓一の間の通信を自分の手に握つてゐたのである）、一日大臣春川伯爵から此の控訴事件の鑑定を依賴されて、始めてさうと知つたが、自分の許を訪れて相談せぬのを不思議に思ふ。此の間中島に對する誘惑が頗る大きなものがあつた。それは、春川伯の令孃艶子は夙に中島を慕ひ中島も文明の淑女として相許す心があつたが、政治上の主義の相違から春川伯は二人の間を許さなか

つた。それが今度の事件となつたので、女心の淺墓さから父を動かし、此の事件を中島が引受けて勝てば二人の結婚を許すやうな暗示をさせて、中島を引き付けようとかゝる。だが中島は情によつて理義を亂すことはせず、斷然この誘惑を却ける。

一方卓一は、山田の斡旋で漸く中島と會ひ今度の事件に助力を賴む。齋藤もお今と山田の辯明、及び卓一自身の言葉で誤解を一掃し、元より同主義のことだから大に卓一を後援することになる。山田はお雪を引取つてわが妻お澄に學問手藝を仕込ませて立派な淑女に仕立てようとする。山田夫婦の心算では、卓一にお今を、齋藤にお雪を配したい樣子に見える。訴訟は控訴院に於いて凡び卓一側の敗訴となるが、卓一は屈せず、中島を賴んで上告する。權一郎は山田や卓一を憎む餘り、春川伯の手についてスパイとして奔走するが、一も成るところがない。艶子は權一郎に誘られ、狂亂して中島に決鬪を申込むが、幸ひ大事に至らない。かくて上告の結果、春川伯の敗訴と確定し、土地は卓一及び村民の所有に戻る。

二十一年版は十九年版に多少の增補をしてあることは注意すべきである。二十一年版には發端に一章を設けて、卓一が少年時代に教師から地方疲憊の話をきいて中央集權の弊を知り、地方自治に努力する決心をすることを說いてあり、その他例へば權一郎がお雪を連れ出すところ、艶子が中島を狙擊するところなどのやうに描寫が大分細かになつてゐる部分が數多くある。大體は變りがない。

續篇。(これの趣向は中井錦城の立案になるものが多い旨斷はつてある)。卓一と齋藤は、山田夫婦の媒酌で、お今お雪と結婚して、それぞれ歸省する。卓一夫婦は故鄉の山村で村民の敎化に努めるが、齋藤は新潟に出て代言人となる。何れも、山田、中島と同じ改進黨に入り、地方同盟會なるものを組織して、素志貫徹に猛進する。卓一は自分の幸福を思ふにつけても、自分のため仲違ひせし中島と艶子の間を何とか纒めたいと思ひ、齋藤とも話合つて種々心を

碎く。その中にも一年遲れて、期待された議會が開かれたが期待に反する議會の實狀に不滿な青年は血氣の暴論を唱へて民衆を煽動するのを、卓一は敢然實力養成論の立場からこれに反對して縣下を遊說して廻る。お今お雪等は婦人矯風會を創めて新潟婦人の位置を向上させるに努力する。齋藤がその何れにも盡力してゐるのはいふまでもない。名望家宇佐美の後援もある。山田は地方自治論を强調する餘り、部下人士の誤解をうけ、それに煽動者などもあつて、折柄の不景氣に失職してゐた不平職工連は山田の新聞社にデモンストレーションを行ふ。然しそれも中島の老練な調停で無事に納まる。やがて東京府と新潟縣に補缺選擧が行はれ、中島、山田、卓一、齋藤は何れも當選する。かく議院に地方同盟會の勢力が加はるにつれて、中央集權論者の春川伯爵と中島等は益々對立的態度になる。春川伯の娘艶子はふとした機會からお今等と打ちとけ會つてから、中島がまだ自分を思つてゐることを聞き、心に嬉しく思ふ、だが父の意志を曲げることが出來ぬので、到底出來ない緣と悲嘆の餘り悶々の日を送つてゐるが、やがて悟つてカトリック教に入り、日本の地を離れて神尼の潔い一生を送らうとする。折柄、日本と西班牙國の間に明治丸事件といふものが起り、風雲が急に迫る。探險船明治丸の乘組員が南洋の西班牙領某島で土人に虐殺されたのを、西班牙政府が事實を揑造して逆に抗議して來たので、國民的激昂を買つたのである。山田、卓一、齋藤等の民黨議員は政府に迫り、直に宣戰して國威を發揚せよといふ、春川伯は政府を代表して、先づ外交談判に依るべしとこれに反對する。此の時中島はその公正な立場から親友等の怒りも恐れず、春川伯の說を贊成する。かくて談判說が勝を制し、談判の結果、遂に西班牙政府の屈服となる。そこで春川伯は中島の公正なる態度に感じ、始めて艶子の乞を許す旨を示す。お今お雪等は橫濱にかけつけ、乘船する間際に艶子とあひ、父の心のとけたことを告げて連れ戾す。山田等は一時中島の變節を疑つたものゝ、その心事の高潔なのを知つて感激し、進んで中島と艶子の間を目出度く纒める。

此の小說は流石に小說家的意識のある南翠の手に成つたゞけに、政治的イデオロギイを露出した政治小說と違ひ、文學的に見ても相當價値があり成功してゐる。だが正編だけでは果して何うか、矢張り一種の宣傳小說で終始してゐはせぬか。然し續編の濃やかな情味、性格、心理描寫（皮相だが）などが幾分近代小說めく何ものかを與へてゐるのである。且つ政治小說としても續編に入つてこそ、越山、齋藤等の地方自治に對する努力經營が明らかにされてゐるので、正編だけでは、新式の佐倉宗吾流民權小說と見られても仕方がないところがある。もつとも續編の方にも多少の無理がある、それといふのも元來が正編の男女性の關係を、殊に中島と艷子の關係を圓滿に纏めようといふのが構想の基調となつてゐるからである。從つて政治的イデオロギイがいさゝか犧牲にされた傾きがあるが、それは止むを得まい。

この小說については語るべきことがいろいろある。成るべく簡約して語つてみよう。

此の小說の政治的イデオロギイの基調が改進黨の精神なり主張なりから出てゐることはいふまでもない。此の小說は地方自治の問題を扱つたものであり、篇中活躍の志士が改進黨主義者であると著者は斷つてゐるが、越山卓一の巡囘遊說の精神や演說（續、第九囘）、齋藤孝の選擧に對する態度（續、第十六囘）、中島博智の英國議會政治崇拜や戰爭反對論（續、第二十囘）、などを見ると、さう斷はられずとも、改進黨主義なることは明白に見える。處々で自由黨派の過激主義を陰に抑へてゐるのも、それを裏書きするものである。當面の主題たる地方自治問題についていへば、露骨な筆致で本格的に論じられてはゐないが、篇中の人物の演說、會話、新聞社說、乃至著者の感懷めく形式で、本筋にからんで機會ある毎に巧みに此の問題の要領がとり入れられてある。背景描寫の間にも、中央都府の驕奢、地方農村の困憊、貧富の懸隔、大臣の專橫、官吏の卑屈などを暗示してある。さうして問題の具體的細條になると、改進黨の主張が明瞭に提示されてゐるのは面白い（例へば續第十二囘の、中島の地方長官公選論と郵便報知紙上の尾

崎行雄の「更革私議」中の國論を比してみよ)。 かくて中央集權の由來、その弊、中央都市の不健全な發達、地方の困窮、農民の辛苦、地方自治の必要、等から、官長公選、地方公債、土地整理等の具體案まで、一通りの概念が得られるやう手際よく献立が造られ、さては地方自治偏重に陥り、地方あるを知つて國家あるを忘れぬやうとの警告にまで及んでゐる(續、篇第十回、勞働者のデモ及び中島の調停說、正篇第十九、中島の演說)。

前に一寸述べたやうに、この小說には又未來記めくところがあつて、近き未來の政治界に對する豫測があり、國會への注文や希望や人民への警告などを未來記的に語つてゐる。此の小說では、國會の開設が一年延期されてゐるがこれは人民が無力ならば二十三年の國會もかういふことになるといふ警告に外ならない。第一國會には、眞の民間志士は持重の策をとりて出ず、從つて第一國會に出た議員は皆政府の傀儡めく無能の人物のみとなる、國會改選憲法改正の叫びが全國に揚る。その結果、「勸誘されたり依托されたり」した議員は大半辭職し、代つて志士、學士、有力政治家等が補缺に出で、第二國會は大に見るべきものとなる。この國會が元老院代議士院の二院制なことは改進黨の主張の實現されたものと見るべく、たゞその理想たる英國議會の如く、「二大政黨並び立ちて旗幟を樹つる」(續第十八回)運びまでは未だ遠い。議席の區劃も秩序整然となつて、政府黨在野黨の別が立つてゐるが、それも極大體のことで、政府黨の席にも意外の急進論があり在野黨の席にも政府贊成者がある　政府黨たる右席には內閣黨、保守黨、尊王黨、帝政黨、在野黨たる左席には改進黨、自由黨、改革黨、立憲黨、中正黨などが就く(續、第十八回)。いはゞ小黨分立の狀態である。此の邊の敍述想像は末廣鐵腸の『二十三年未來記』の影響をうけてゐることが看取されるであらう。議員の見地公正にして、議案によつては敵黨にも贊成するところ、又議員の私交と公爭を混淆せしめざらんことをのぞむところは、共に英國議會を眼中に置いた啓蒙的希望である。

以上は未來への想像であるが、現實の時弊に對する諷刺も亦、處々に伏線されてゐる。官吏が人民の無知を利用し

て私利を營むこと、戸長區長などゝいふものが本來人民の爲めにすべきものでありながら事實は上長官の幇間的存在になつてゐること、人民通信の自由に對する干渉、民間の政治會合にスパイを入れること、法官の審判が上長官の意志で左右されることなどは、そのうちでも目立つたものである。

今日、或る意味で最も多く興味を與へるのは、此の小説の背景である、背景をなす時代生活の描寫である。勿論未來記小説だけに背景にも未來記的假想が織り込まれてゐる。だがその未來世界といふのは僅か三、四年度に實現すべき近い未來であるから、その假想にはそれが現實的根據があり、いはゞ當時の尖端的生活を多少誇張し理想化した程度の描寫が多い。中には十九年當時の社會をそのまゝ二十三四年に當てはめたところも見える。何れにせよ、此の小説の背景的描寫に、南翠當時の各階級の生活風俗習慣の寫實めくものが相當豐富に織り込まれてゐるのは事實である。これをもつて直ちに「現代の風俗史」とか「社會史」とかいふことは出來ないが、少くともその一片たるに庶幾い。吾等は、艶子及び春川家の衣食住によつて上流社會の生活狀態を、中島山田等のそれによつて中流社會の生活狀態、越山等のそれによつて下流社會の生活狀態を、幾分ながら精確に摑むことが出來る。作者が最も力を入れて描寫してゐるのは中流以上の尖端生活ともいふべきもの、春川家の新邸開き(正篇第三回)、艶子の室(同第九回)、艶子お今等の風俗、不忍の競馬、(正篇發端)、墨田の競漕(續第十四回)、精養軒の園遊會(同十九)、鹿鳴館のバザー(正篇第二十回)、貴女同志の社交と遊戯(續篇第二回)、洋風の結婚式(續第三回)、海水浴(續第十三回)、艶子と中島の約婚指環の交換(續第十五回)などの場面は、時代の尖端生活の描寫として大衆に羨望の吐息をつかせたものであらう。さうしてかゝる尖端生活の根本特色は、蔽ふべからざる歐化主義であり西洋崇拜(共に皮相的の)である。だが、その反對に、下層民の生活は又何といふ封建的窮狀を留めてゐることであらうか、前者に比すると全然別世界に屬する觀がある。此の對照は、都市生活の幸福と地方生活の不幸を強調する目的で多少誇張されてゐやうが、

然し明白に世相の一面を描破したものである。中流社會に於ける新舊分子の不消化的な混淆が露骨に見えるのも、時代の面影とはいへなからうか。一二箇所（正篇第十二、十五、十六回）に瞥見する首都の貧民窟の描寫は、南翠の放浪時代乃至探訪記者時代の實見に基づくものと見えて、誇張のない鮮明な印象を與へる。

更に此の小説を、プロットに限つて見れば、南翠の所謂「通篇情史ならざるはなし」で、その根本は才子佳人の人情小説に外ならない、たゞ、それの組合せを巧みにし、人物の性格や心理描寫めくもので新味を加へてあるまでゞある。だが、當時の文壇にあつては、この程度の新味でさへ稀有な獲物と見られた。物語の筋は單純で割合に素直であり、『照日葵』に比して整然と一貫してゐる趣を示してゐるが、これは南翠の小説家としての技倆の一進歩を語るものであらう（事實此の二作の間には數年の時日が經つてゐる）。たゞプロットの進行上、長篇では卓一が中心となり、續篇では艶子が中心となつてゐるのは、當然である。

南翠の意志は勿論政治小説を書くにあつたが、新聞小説家たる手前、その小説が同時に面白い小説であることを必要とした。こゝが政治家出の政治小説家と違ふ點である。彼は努めて時代人の興味の中心たる尖端生活を描寫したのも、それの一つの現れであつた。小説を面白くするためには如何なる手段をも辭さなかつた、此の頃たゞ噂さになつてゐた亞細亞全洲大博覽會といふものを取り入れたり、艶子が中島を誤解して決闘を申込むといふ如き（正篇第十七、十九回）不自然な際物的趣向をさへ用ゐた。自由結婚の問題を織り込んだ如きも、勿論同様に讀者の注意を惹かうといふ心算からに違ひない。だが此の問題を織り込んだについては、南翠に或は今少し大きな野心があつたかも知れない。即ち時代の有識青年男女が希望してゐた正しい兩性關係の確立といふことである。彼は艶子と中島の關係を假りてこの問題に解決を、乃至解決の暗示を與へようとしてゐる。さうして自由結婚に對する東洋女性の誤解（正篇第七回）、これに對する警告から、東洋道德と自由結婚論とのストラッグル（同第九回）に説き及んでゐるが、彼自身何方

に贊成かといふことは明言されず、漠然とした自信のない態度で、自由結婚の勝利らしく結んでゐる。本人は然しこれで飽くまで明瞭に解決したつもりでゐたのか知れない。だが南翠が從來の男尊女卑的兩性關係の矯正に贊成してゐたことは、肝心の地方開發や選擧運動などに女性の協力を必要としてゐるのに見ても明らかであらう。その他讀者の興味を惹くための場當りとして角田眞平とか增島六一郎とかいふ名士の名を處々に出したり、作中人物の會話に生かぢりの英語を雜ぜたりしてゐるが、かういふことも當時は讀者の興味を惹くトリックとして相當有效に役立つたものであらう。森村權一郎がお雪を誘拐する一段の如きも、本來は別に必要がないのであるが、たゞ當時の大衆の興味に媚びるために作り添へられたのだといへばいへる。

だが何といつても全篇を通じての中心興味は艶子と中島の曲折の多い關係である。二人の關係が、周圍の性格と政治上の主義と絡み合つて層々と發展して行つて遂に頂上に達するところは、近代小說を髣髴させるものがある。南翠は此の作中で、艶子をして（乃至艶子に關して）ビコンズフヒールドの『コニングズビイ』（『春鶯囀』の原本）の名を度々語らしめてゐるが、艶子と中島の趣向は、コニングズビイとエヂス・ミルバンクの關係を逆に用ゐたものではなからうか。お今と卓一の結婚式から歸つた中島博智が俄に身邊の寂寥を感じるところ、夢現の間に艶子と相語るところ（續篇第三回）、艶子が中島のことで焦れて母親に喰つてかゝるところ（同第四回）、神尼となつた艶子と中島が汽車中で思ひがけずめぐり會ふところ（同第八回）、艶子が父に向つて、如何なる壓制も中島に對する愛をわが胸から消し得ぬといふところ（同第十二回）は、多少忘れ難い印象を與へる場面である。

作中の人物の性格をいへば、男性は槪して實在の人間らしく、女性は可成り理想化を免れない。人物の風貌等の描寫も總體やゝ寫實的なものとなつてゐるが、此の點でも女性は理想化されてゐる。主人公ともいふべき越山卓一が、此の種の才子佳人的政治小說によくある人情本式美男ではなくて、寧ろ醜男に近い剛健な意志の持主となつてゐるの

は型を破つてゐて面白い。卓一の性格は老成深沈、改進黨の理想とすべき志士的風格で一貫してゐる。（末段、戰爭贊成はプロットの必要からである）齋藤は卓一と對をなす愛嬌ある輕躁家だが、無理に一癖ある人物とするためにややわざとらしくなつてゐる。山田は熱血漢、改進黨といふよりも自由黨壯士の面影がある、中島は好紳士、たゞ二タ言目に英國を引合ひに出すのはいさゝか氣障である。女性四人、お今、お雪、お澄、は特にいふ迄もない。それぞれ當時の理想的淑女を描いたものであらう。お雪の權一郎に對する態度で、著者は彼女の貞節の如何に固いものかといふことを示したつもりであらうか、かういふ空々しいことが當時實際にあらうとは思へない。たゞ艶子に至つては、當時の尖端的貴女の代表的典型であり、氣隨我儘で直情で、何となく浮氣らしく、それでゐて妙に純なところも見える。他の三人の賢妻よりも人間らしいところに取柄がある。殊に父と愛人の政治的鬪爭の板挾みの苦しさから宗教に免れ、それでもなほ詮らめかねて悶々するあたり、幼稚といへば幼稚であるが、此の當時としては傑れた性格描寫であると思ふ。

『綠簑談』の文章は、十九年版の方は『照日葵』流の濃艶絢爛な修辭に幾分煩ひされてゐるが、二十一年版に至ると、殆んど讀本的稗史の臭味を脫した新な文體で、南翠自身は試驗中の鵺文（ぬえぶん）だと斷つてあるが、暢達のうちに老蒼なところも見え、場面や氣分によつて描寫の變化を示さうとしてもゐる。南翠は小說の文章についても餘程野心があつたらしく、自作一篇每に文章を新たにするつもりだと述べてゐる。（二十一年版序）。

獨り我が家に取殘されたる中島博智は書齋に籠りて人の上また妹が上を思ふにつけて思はるゝは傍に飾りし風琴（オルガン）なり是ぞ春川艶子孃の妹阿今が新婚を祝して贈り來たれる品にて其の音律のうちにこそ深き聲色（ねいろ）の籠りやすらめ品嵩なりとて何ゆゑに是れをも携へ行かざりしぞ我れを慰め樂ませんとて故ら殘し置きつるか彈ずるとても何をか謠はん我れは孤獨の身となりぬ友とし語る人もなく落葉に埋る山の井の底沒む人も來ずなりて寢覺を訪ふは風月のみ憂

きを語るは花鳥のみ噫我が花鳥よ風月よ汝は能く我が鬱を拂ふや……（中略）此時博智は目睡しか否尙ほ想ひの傍ありて時辰の軋りは音を止めしも夫れに代れる音を聽きたり我が睡らぬを慰さめてか呂律も太ど妙にして時辰が軋る類にはあらず或ひは輕く或ひは強く又は徐かに又は急に樂しむ如く歎くが如く悅ぶが如く愬ふるが如し喨々として耳を澄せる瀏々として腸を斷つ此の時美人の聲ありて云々（續篇第三回尙の錦綱）

要するに、南翠の『綠簑談』は改進黨の政治意見の宣傳小說としては先づ成功したものである。たゞ地方自治の必要の原理的宣傳に專らで、これを實行した曉の人民の利益如何を具體的に描出することがないので、宣傳效果の徹底してゐない憾みはある。從つて或は作中の地方自治論者達は、初めからこの問題を利用して自分達の政治野心を遂げる基礎を固めたもののやうにも受け取れるかも知れない。殊に末段、民力休養の旗幟をそつち退けにして對外戰爭を主張する如き矛盾に出會ふと、益々彼等の誠意が疑問になる。然しこれは正篇續篇の間に一年半以上の年月の隔たりがあることを考へ、正篇續篇の執筆の目的が力點を異にしてゐることを考へると、分かることである。正篇では政治思想の宣傳が主となつて構成されてゐるが、續篇ではこれがやゝ客位に置かれて居り、作者に今一つ別の目的があるからである。だがかゝる一切を出入させても、政治的宣傳小說としては宜しく成功したものと認むべきである。殊にこの作中の政治的寓意が、漠然たる自由民權論の宣傳から離れて、政黨的色彩が明瞭になり、黨の具體的な政策政見をテーマとしてゐる點は、政治小說の新傾向を劃するものとして、刮目すべきであらう。

此の作で活躍する地方自治論者の改進黨員であることは南翠が特筆してゐるところであるが、そのうち中島は代言人、齋藤は地方の富豪、山田は新聞記者、齋藤の後援者の宇佐美は地方のブルヂョア銀行家で、何れもインテリゲンチヤであり恒產ある中流社會を下らぬ位地を占めてゐる。貴族がブルヂョアに敗北することは勿論だが、プロレタリ

アだとてこゝではまだ無力である。越山は元來プロレタリア出身だが、獨力では如何ともならず、ブル・インテリの先輩友人の恩惠的保護でやゝブチ・ブルヂョアの位地に上つて始めて志を成す。選擧に金が物をいふ(買收とまではいへぬが)ことも注意すべき點である。此の邊にも改進黨の政黨としての正體とその政治的目標とがいさゝか示されてゐはせぬか。政府との爭ひにも言論に終始して過激な手段を講ぜず、一意議會政治の改良發達を期してゐる。殊に注意すべきは、選擧運動といひ、地方開發といひ、皆婦人の積極的助力を得てその實效を擧げるやう述べてある點である。政治的經濟的に、婦人が男子から獨立して、男女同權といふところまでは勿論行つてゐないが、南翠の小說に於いては、兎に角婦人の位地が著しく向上させられ、十分に一人格あるやう描かれてゐる。

此の歐化主義時代の表裏各階級の生活の描寫も、『綠簑談』の取るべき特徵の一つであらう。中に就いて、上中層社會の描寫に多少誇張的想像があり、下層社會の描寫がやゝ切實な印象を與へるが、然し背景に於ける寫實味と人物に於けるそれと相俟つて、一面『綠簑談』に何やら寫實主義(皮相的だが)めく色彩を與へる。背景的出來事で興味ある一つは、續篇第十章の所謂「職工のストライキ」なるものである。これはスパイに煽動された見當違ひな示威運動といふだけのもので、決してストライキではないのであるが、それが如何にも一種の勞資爭議でゞもあるかの如き口吻で語られてゐる、さうして職工の運動が昔しの義民傳か何かにある百姓の强訴一揆そつくりなのは極めて愛嬌がある。こゝで勿論南翠のイデオロギイの朦朧さと生噛り的敎養が遺憾なく暴露されてはゐるが、然し丁度實質的に資本主義に轉向せんとしつゝ乃至轉向しつゝあつた當時の社會相の一反映として觀れば、多少の特殊な感興が起るであらう。恐らくかゝる試みとしては最初のものではなからうか。

槪していつて南翠は、此の作に於いて、自分自身の小說を最いた。全然獨立した作風とはいへず、模倣も燒き直しも少しはあるか、それでも『照日葵』に比すると數段の進步である。ともかくも『綠簑談』は南翠の代表作で明治政

治小説界の傑作の一つと斷じてよからう。南翠はこの小説を界限に、二度と時代物語風の政治小説を作らなかつた。此の作に對して、識者の中には蔭言をきく人もあつたが、(二) 大に時人の喝采を得たことは、二十一年版卷末の詩と南翠の語葉によつて知ることが出來る。

註(一) 明治政史(全集版)四七五頁その他

註(二) 明治十九年十月二十日繪入自由新聞一一五九號「臭い改良家」

『一顰一笑新粧之佳人』

此の作も南翠の小説中、『綠簑談』と相並んで代表作視される最も有名なものであるが、『綠簑談』と違つて、政治問題を主眼にした小説ではない。南翠自序によると、それが明瞭である。——

さて此の書にしたゝめしは何の主眼なるやといふに著者が耳にのみ聞き得たる事柄を二種まで取合せて旁ら將來婦人の智徳が那の點にまで進歩すべきや何やうなる變化あるべきやといふ問題を設けておこがましくもつゞり初めたるものなれば一概に波瀾を設けしとのみ咎め給ふべからず云々

一般に此の作も明治初期政治小説の代表作の一と見られてゐるが、以上の自序によると、この見方を少し變へなくてはなるまい。勿論政治小説といへないのではない、いなそれどころか一種立派な政治小説と見られはするが、自序によると、作者の目的は、將來の婦人を想像し、理想の婦人を描いて當時の婦人社會の弊風を警醒する點にあつたわけで、此の作を政治小説にすることがその主眼ではなかつたのである。こゝはいさゝか注意すべきであらう。

『綠簑談』と同じく、この作も總體の構想は未來小説の體となつてゐる、それも『綠簑談』の如く三四年後の近い未來ではない、更に遙かに遠い未來の物語である。

歳月流るゝが如く物換り星移りて幾春秋を經たりけん日本帝國の中央首府たる東京の模樣一變して東京灣築港成り市區改正の大土木を竣り、政治上には保守改進二大政黨の對立による政黨內閣が成立し、社會上には衣食住の歐化と男女同等が認められ、各國人の內地雜居が許された頃の物語となつてゐる。

此の頃、地方休養のために入府稅廢止といふ問題で議會に破れた改進黨內閣は、解散して信を國民に問ふたが、少數で敗北し內閣を明け渡す。改進黨の一名士水本清は、保守黨の首領萩原易賢と橫濱で選擧を爭つたが、見事失敗する。此の時萩原には、植村和歌子などといふ女學士や貴婦人が應援し、その當選に與つて力があつた。水本は選擧の際、萩原から「妻もなく一家の主人ともなり得ないやうな人間が國政に參しやうなどとは嗚呼がましい」と罵られたので、痛恨骨に徹した上、女性應援の有效なのを見せつけられて、政治家として志を遂げるには良妻が第一必要條件だと覺り、佳人を求めてよき半身たらしめんと欲する。偶ま日光に遊んで、泉某の娘お千代と知り、棄て難い思ひがある。お千代の父は牧場主で、お千代も父を助けて牛乳を搾る如き勞役を自らしつゝ、一方自己の教養を怠らず、才色共に當代の淑女たるに恥ぢない。水本は改進黨の首領前野善良が泉父子と親しいのを聞き、前野夫妻に賴んで、お千代と正式の紹介を得て交情を結ぶことにある。お千代の兄速三は放蕩無賴の人間で、父に勘當されて萩原の家に仕へてゐるか、同輩の支那人陳某と腹を合せ、同じ同閣員青山仙の夫人政江と浮田某との不義をとり持つたり、改進黨首領前野の奧庭に爆彈を仕かけたり、種々惡計を行ふ。水本の舊僕なるアフリカ人ダインズは、陳某に怨みがあるので、陳を刺さんとして萩原邸に忍び入るが、それが目的を遂げずに捕はれ、速三等の讒口と萩原の狹量から、水本が前野と計つて放つた刺客であると見なされてしまふ。

此の頃の女性社會、殊に上流婦人は、知識の進んだわり合ひに皮相的な歐化主義で、婦人解放論を誤解し、不道德放埒を自由と考へてゐて、甚たしい墮落に陷ちてゐる。その著しい例は、青山夫人對浮田の件、萩原易賢對植村和歌

子の件である。然かも植村は浮田とも密交がある。お千代は前野夫人やその友青柳努（青山夫人の妹）の引立てゞ貴女社會に出入するが、貴女社會の惡い點を避け、善い點だけを學んで自分の智德を切磋する。これも、水本に相應はしい能力を貯へて、水本の政治的活動を助けたい一念からである、やがてダインズ事件以來朝野兩黨の政爭が苛烈となり、私交にも黨派的分立が及んで來たのを見て、お千代は密に心を傷め、前野夫人、青柳努などと謀り、植村その他保守派の貴女社會にも說いて、女流主催の朝野懇親會を開いて、幾分かこれを緩和しようとする。だが折角の懇親會も、萩原の傲慢から水本の憤激となり、大した效果もなしに終る。この會の後、水本はお千代の眞心を疑ふやうになり、いつとなく疎々しくする。折柄當時動かぬと考へられてゐた保守黨內閣は、輿論を代表する海軍擴張案に對する陸軍側の橫暴から、海軍大臣の辭職となり、俄然危機に直面する。海軍擴張論はかねてから改進黨の持論であり、與黨中にも贊成者が少くなかつたので、遂に政府は議場に破れたが、直ちに內閣を明渡さないで、議會解散の途に出る。水野は蹶然起つて、橫濱で時の內閣總理萩原易賢を相手に再び當選を爭ふ。この時お千代は水本に隱れて必死の運動をつゞける。さうして種々奇策を馳せて、選擧民の心をかち得、遂に大敵に打ち勝つて、水本が當選する。かくて改進黨が再び內閣を組織し、前野が總理となり、新議員水本は海軍大臣に擧用される。水本はお千代の努力に感激し、昔に增る愛情を生んで、遂に前野夫妻の媒介で結婚し、會遊の日光に新婚旅行を試みるところで、物語が終つてゐる。

以上の梗概によつて察すると、如何にも『緑簑談』と同種同型の改進黨主義の宣傳的政治小說のやうに受け取られるが、事實又、さういふ意圖が作者に全然なかつたとはいへないが、それは決して第一目的ではなかつた。『新粧之佳人』の第一目的は、前にも述べたが女性社會の現狀を警醒し、未來の婦人を理想的に描いて、新社會の女性をそこ

まで到らせたいといふ抱負を示すにあつた。いはゞお千代を描くのが主で、水本を描くことは從であつた、女性社會を描くのが主で、男性の活動を描くのは從であつた、從つて女性改造の抱負が主で、政治的宣傳は從であつた。作者の意圖は正にかくの如くであつたことはこの作を仔細に讀んだ人々の必ず肯んずるところであらう。

此の作の或る場處で、南翠は新時代の婦人社會についてかう語つてゐる——

> 歐西の文物の齎し來たる開明の空氣は夙に社會の上流に呼吸せしめて新風俗を模倣するに厚きことは往昔支那文物が輸送たる制度風俗禮樂政罰の秋津洲中洲を席卷たるより最と速かなりとは言ひ得ざれども政治といひ法律といひ文學上より應用し來るものは謂ふも更なり服制といひ建築といひ總ての遊戲に至るまでも上流社會の採用する處となりしかば上の好む所下之れより甚だしきは莫しといへる通理に則り年は一年より是等の事物を革め來る事の進步を見つ內部の組織如何は知らねども全く歐米文明の美域より得來りし所の錦に裝飾されたるの觀あるに至れり流行の造物主は多く婦人社會に天使を下すを以て數年前までは宛しも後れたりと見えし夫人淑女は性來に貯へし最も敏捷なる知覺神經を充分に働かせたれば其の學問こそ男子には及ばざれ婉雅の美德は艷優の裊態と相伴ひてあはれ微妙き將來文明の母たらん者を見受るまでに達したりける男子も亦婦人の淑德を進むるとともに女子を輕侮する壓力を薄くして稍や敬愛の念を發し來たれば門戶を閉して生涯家內に禁錮されたる苛刻の判決も自然の道理に打消されて此に放免すべき道德の大赦に遭遇せるものと謂ふべし然れば社會の全體より流行の造物者たり天使たる印綬を授けられたる婦人們は好んで泰西の俗を容れ勉めて文明の流行を宣託すれば苟且の遊戲にも此の命令に服從する事とはなれり（下略、第十二回）

これは勿論南翠がこの作を執筆した當時の婦人社會の實狀の直寫ではないが、然し實狀の幾分かを含んでゐるからその概念を捉むだけは出來よう。今この作中に散見するところを綜合して、婦人社會に關する南翠の觀察を窺つてみる

と、西洋思想の移入以來、婦人の位地が次第に高まつて來たが、殊に此の頃婦人改良論が唱へられるに至つて、婦人自身大に自覺し、自己の權利を恢復しようと奮發する一方、男子も文明開化のお蔭で女卑の念を次第に去り、婦人を扶披して智德を啓發させて社會上對等の權利を與へてやらうと試みる。然し何分積弊の餘を忽然光明の新天地に逍遙さよやうといふのだから、萬事皮相的表面的急造りのものとならざるを得ない。では婦人社會を本質的に改化するには何うするかといふと婦人教育を盛んにするより仕方がない。此の問題は、南翠が婦人社會に對して警醒してゐる第一である。時人は、それには先づ上流社會に教育を與へてその智德を高からしめ、以つて下に及ぼすのが可いといふ。だがその教育は、當時の上流貴婦人のうけてゐる非實踐的な虛飾的な高等學問であつては何もならない、婦人教育は正に實踐的な道德的な堅實なものでなくては駄目である。かゝる方針で教育されると、中層社會の婦人でも、その智德によつて上流社會と交はり、逆に感化を及ぼすことが出來る。青山伯夫人と泉お千代を比較することによつてそれを知ることが出來るであらう。

お千代は南翠の理想の女性である。健全な中等有產社會の家庭に生れたので、勤勞の神聖を知つてゐるが、虛榮の浮華に蝕ばまれない。文明の學問は修養するが、皮相な歐化的放縱には墮しない。自ら教育して、着實な、活潑な、寬裕な思慮ある婦人となり、上流貴婦人に伍して文明の母たるべき智德を磨くが、彼女等の惡德には感染されない。一方父の許しを得て、理想の男子と交際し、相愛し、これを助けて成功せしめ、遂にこれと結婚して完全な幸福を得る。およそお千代の爲すところを觀ると、南翠が將來の婦人に對して如何なる理想を抱いてゐたか、略ぼ察することが出來る。彼は新時代の女性に、此のお千代の如かれと呼びかけたのであつた。

南翠が婦人社會に對し警醒してゐる今一つの問題は、婦人寡居論である。婦人の理想が智德を練磨して社會的に男子と對等な位置を占め、理想の男子と婚して天倫を全ふし、男子の半身として成功を助けるにあるとすると、理由な

き寡居は往々隱れたる罪惡の源となることがある。植村和歌子の場合がこれである。青山夫人の場合には、根帯のない歐化主義的敎養が姦通を助ける媒介となつたが、和歌子の場合には、僞善的な寡居が前者より更に甚しい愛慾二重奏の根源となつた。和歌子は宮仕へまでした身でありながら、同時に二人の情人をもち（萩原と浮田）、そのうち一人は青山夫人と持ち合ひになつてゐる。何といふ醜狀であらう。然かも此の二件は、多少の小說的誇張があるにせよ、當時の貴婦人社會の裏面を語る事實であつた。かう姦通が公然となつては、今に犯姦律を修正して姦夫の權を認めることにならうといふ前野夫人の皮肉は（第八回）、南翠が當時の上流貴婦人の醜行を罵殺したのである。

此の小說で南翠は新時代の典型的婦人を必然的に政治と結びつけてゐる。だからとて南翠をもつて婦人參政論者だなどと速斷してはならない。南翠は婦人參政論者どころか、男女同權論者でさへもない。との小說の婦人論乃至婦人問題めくものは、何れも模糊とした根本的洞察を欠いたものばかりであるが、それといふのも畢竟かゝる議論が彼自身の意見に成るものではなくて、明治十七八年頃から起つて來た婦人自覺論、婦人改良論（社會改良の一部門としての）反映に外ならぬからである。例の先覺になりたい衒氣と好新癖とからかゝる議論を鵜呑みにして、半消化のまゝこゝに吐出したものに外ならない。だから南翠が婦人と政治を結びつけたのも、何も確乎とした主張があつてのことではない、これも政治萬能といふ時代意識が改進黨のシンパサイザアたる南翠を動かして、かういふ結果を生ぜしめたものといつた方が可い。

此の作中の男性の主要人物は皆政治に關係があり、政治的成功が男子社會の理想となつてゐる。從つて婦人が此等の男子に對して如何なる關係にあるにせよ、旣に政治と接觸せざるを得ない。新時代の婦人の理想として、理想の男子を助けてこれを成功せしめるのが美德であるとなつてゐるが、その成功が政治的成功のみを意味してゐる以上、婦人の政治界進出は必然的となる。又婦人の智德が進んで、社會上男子と對等と認められるに至ると（同權とはいはぬ

かゝ輿論の原動力の一半となる譯だから、男子としても政治的に婦人の後援を必須とする。此の點からも婦人が政治界に引き出されずにはゐない。此の作に現れた婦人達の對政治態度は二つある。一は積極的進出で、各自自身の好む男性の政治的成功のために奔走經營することであり、他は消極的ともいふべく、女性一體として男性に對する注文で、政爭黨爭を公的の場合に限り私交上に及ぼさぬやうにさせることである。蓋し南翠によると、政治上の主義を異にするのは、たゞ國家社會に盡す道を異にするに過ぎない、主義を異にするために爭ふのは當然であるが、爭弊が私交に及ぶと肝心の國家社會の安定を危くするに至る。婦人は特有の社交性を利用してこの弊を防止しなければならぬといふのである。

かゝる意見が、例の如く南翠の創見でないことは觀察に難くはない。いづれは何かの受け賣りか自分の見聞から捏ね上げたものかであらうが、私は、『綠簑談』の場合と同樣、多少ともビコンズフヒールド卿ヂスレーリの『春鶯囀などから學ぶところがありはせぬか、作者の眼底に英國風の理想はありはせぬかと思ふ。これは、此の作中の婦人達が亦選擧に勝つためにも大に社交性を發揮してゐるのを見ても、政治と社交と極めて密接な英國風の政黨政治を思はしめる。

此の小說が專ら政治小說としても書かれたものでないことは前にも述べたが、然しこの中に現れた婦人と政治の關係だけからでも、この小說が政治小說と見られ得る性質をもつてゐることは、勿論明らかである。今これを政治小說として見るとき、婦人と政治の問題の外に如何なる政治的イデオロギイを含んでゐるかといふと、改進保守二大政黨の對立、地方休養、海軍擴張などの問題が織り込まれてゐる。二大政黨對立は、英國議會政治を標識とする改進黨の理想であり、黨弊の私交に及ぶを避け、又政治家の人身攻擊を排する點などと共に、改進黨流英國崇拜の現れといふ

氣味がある。（第三回）萩原が水本を罵つて、學問經驗德望妻子何一つなき一書生云々といふ語は、實は改進黨側から舊自由黨連を諷した語であつたかも知れない。（第十九回）水本が萩原の私行をあばくところは、矢張り人身攻撃ながら、作者が讀者に是非語りたいと思つてゐたところであり、讀者がこれを聞いて大に喝采したところであらう。作者は政治家の人身攻撃の例としてヂスレーリとオーコンネルを引合ひに出してゐる。地方休養問題は、改進黨の最初からの綱領の一つであり、これに就いては『綠簑談』に詳しい。海軍擴張問題は、全く時事問題を織り込んだもので、海軍擴張はこの當時の人民が双手を擧げて賛成したところであつた。十九年六月には海軍公債が發表され、七月には海軍大臣西鄉從道が各國海軍視察のため世界巡遊の途に上つたことなどに見ても、喫緊な時事問題であつたことが分かる。未來の新社會に於いて、黃白黑色人種が同居してゐるあたりは、條約改正問題に絡む內地雜居論を具現して示したものと見て可い。要するに、この作は改進黨の爲めの宣傳小說として書かれたものではないが、自然多少その臭味が伴つてゐることは認めざるを得ない。

この小說のテクニクを一言するに當つて第一に考へるべきことは、この『新粧之佳人』の創作序次が、丁度『綠簑談』の正讀兩篇の間に入ることである。これを中間に入れてみると、『綠簑談』の正讀兩篇のテクニク上のギャップが多少塡められて、推移の跡がさう目立たなくなる。

例によつて小說を面白くとの用意から、又南翠自身の好新好奇の癖から、和漢洋種々な手法や道具立や趣向を併用してゐるが、概していつて人物の場景の描寫に西洋風の手法が多い割合に、プロットの根本的な進め方は、支那小說の作法から學んだ波瀾照應起伏云々の方則によつてゐることが分明である。氣のきいた性格や心理の解剖めくところがあつて近代小說風な面影を見せるかと思ふと、全然舊式の稗史草双紙を燒き直したやうな趣向が鼻を突いて來

る。又小説を大衆に面白く讀ませるためには、可能不可能に論なく、相變らず種々新奇な工夫を借用する。此の作第六、七回の、青山伯夫人と情人浮田が輕氣球で空中密會を試みる一條などは、文明流の戀愛冒險を描いたものとして、當時の讀者に眞實天外から落ちた奇想の如く持囃されたものであつたらう。然しこの一條は『世界進歩第二十世紀』（佛人ア・ロビダー作、服部撫松譯述、十九年六月刊）から暗示を得たことが明白である。この一條ばかりでなく、『第二十世紀』が此の作に對して總體的に可成り强い影響を及ぼしてゐることは、二著の印象を比較してみると、明白に首肯される。或は南翠がかゝる婦人社會を中心にした未來小説を描いてみようといふ興味を起したのは、『第二十世紀』を讀んだ結果かも知れない。（『第二十世紀』については服部撫松の章を參照されたい）。第五回水本が佳人を思つて煩悶するところは、『慨世士傳』（リエンジイ）からの奪化と視られる。黑人ダインズと支那人陳の不和の一條は、重要でないやうで實は可成り重要なプロットだが、これは明らかに春のや朧の『內地雜居未來の夢』から端緒を捉へたものであらう。更にそのダインズをアラビイ・パシャ旗下の一亡卒とするに至つては、當時大流行の東海散士『佳人之奇遇』の人氣をかりようといふ細工であること、いふまでもない。

人物の描寫に於いては、成るべく誇張のないありの儘の性格を描かうと試みてゐるところは見えるが、然しさう成功したものではない。その中でも女性の方が男性よりも誇張的で理想化されてゐるところが多い。たゞ人物を個性的に描き分けようといふ點は、やゝ成功してゐる。お千代は理想の女性だけに最も多く理想化されて居り、それだけに性格としては幾分實在味が乏しい。二三、難をいふと、お千代が水本を愛するに至る心理的經過の説明が不足して居る。且つ溫和な控目がちな家庭的處女であつたお千代が上流婦人と交際を始めるや忽ち衒學的にスペンサアの「教育論」を讀んだり「婦人道德論」を評したりする生意氣さは唐突不自然である。又水本に隱して選擧運動を試みる如き、本來なら出しや張りの誹りを免れない。女性側の面白い性格は、女學士靑柳菁と前野夫人である。兩者ともに快活で

卒直であり、描きやうによつては餘程面白い人物が出來上つたかも知れない。青山伯夫人と植村和歌子は共にモデルがあるので、種々の點でさうと讀者に推了のつくやうに描かれてあつたものであらう。男性の人物では、お千代の相手役の水本が、從來の人情本的美男型でない『綠簑談』の越山卓一と同じく、剛健質實な直情徑行的男性である。これは作爲の痕を免れぬが、類型に墮せぬだけ可い。保守黨首領萩原の倨傲狹量、改進黨前野の沈毅寛洪は幾分その人らしい。泉速三は古い惡形に新しい教育を與へたもの、ダインズは尋常の忠僕型、陳も類型的小惡漢、何れも作者の傀儡としてプロットの進行を助けてゐるに過ぎない。浮田は根深い野心家に描いたら面白いものになつたかも知れないが、この儘では上流貴女の秘密玩弄物たるのみ。然し當時案外かういふ存在が、そこゝに實在してゐたかも知れない。

背景の興味は二つに別れる、一は作者の空想に成る新東京の描寫に對するもの、今一は當時の尖端社會の理想的生活を中心にした風俗世相の描寫に對するものである。第一の例は、第一、十二、十五回等に散見してゐるが、要は市區改正の大土木が行はれた後の東京の變化に對する空想であり、東京がその時に至つて如何に近代歐米都市に似た（皮相的にだが）ものになるであらうかといふことが興味の中心であつたらう。當時は恐らく世人は作家南翠の富贍な想像力に驚嘆したものであらうと思ふが、今日から見ると、その東京未來記の豫想の幼稚なあどけないところが、讀者に微笑させるだけである。たゞこゝに豫想された東京が、擴張された產業都市の面影を示してゐるのは、多少の注意を惹く（第一回）。第二の例と見るべきものは至るところに多い、女性の社交生活、倶樂部生活、遊戯、宴會、男性との交際、その他當時の尖端社會の衣食住の理想が如何なるものであるかを知るべき材料は數多散見してゐるが、揃ひも揃つてそれが如何に皮相的歐化主義に感染されてゐるかといふことは、驚嘆を通り越して滑稽な程である。その著しい例を見ようとならば、第十五回中央倶樂部に於ける男女名士の會合、第二十回、水本夫妻結婚式及び

新婚旅行の條を讀めば、一班を知ることが出來る。然かもかゝる所謂新風俗に對する啓蒙的說明が此の小說の呼物の一つであつたのを知ると、當時の風尙も察せられる。

南翠の老手は、此の作に於いても多少の好場面を描き出してゐる。第五回日光山中で水本とお千代と初めて會ふところ、殊に雨の日の悶々の後、お千代に會ふため後を追ふところが妙、第十一回兩黨首の遊獵のところ、第十二回、荻とお千代とのクラブ遊び互ひの心の中を打つ球に擬して語るところ、第十五回中央俱樂部の懇親會で水本と秋原と口論を始めるところ、こゝは互ひの性格もはつきり出てゐて面白い、第十六回水本が種々な動機でお千代に對してやや消極的態度となると反對にお千代が俄に積極的な氣持ちになるあたり、第十七回前野がお千代を連れて水本の家に赴き、水本の態度の曖昧なのを責めるところ、第十八回青柳荻が姉や和歌子の不倫醜行を痛罵するところ、など、とりどりに興味ある場面である。

文體は、例の和漢洋折衷の修辭を用ゐてはゐるが、此の作には新聞調が加味されて大分暢達平明なものになつてゐる。たゞ機に臨んで時人の所謂斬新な表現や造語が口を突いて出る趣きがあるが、當時としてはこれも南翠特技の一であつたらう。時折上流人士の會話の中に、彼等としては驚くべき程の下司な語句が見えるが、これは續物作者として叩き込んだ頃の筆癖の拔けきらぬものであらう。

此の作に於いて南翠が描いたのは、產業的大都市と發展した東京に於けるブルヂョア社會、殊にブルヂョア女性社會の敎育と道德の狀態、及びこの女性社會の政治に對する關係を豫想したものである。お千代は理想のブルヂョア女性であり、その女子敎育觀に於いて又日常生活なり道德なりに於いて理想的なブルヂョア女性に描かれてゐる。活動する女性も男性も主要なものは皆貴族かブルヂョアジイであり、プロレタリアは甚だ下等な賤しむべき、又は惡むべき役割だけを宛がはれてゐる。封建貴族の殘喘を代表する保守黨が漸落するに對して、ブルヂョアの改進黨は着々進

出する。この點は『綠簑談』も同じである。政治的成功の第一條件が資産の有無であること、又選擧が直接金錢で買收されはせぬが「金」の變形したもの（例へば饗應、興行的宣傳等）によつて決定することなど、何れも改進黨のブルヂョア政黨たる一面を現はしたものであるが、以上の件々は、當時進行中のブルヂョアの社會革命を背景として見るとき、極めて暗示に富む反映となる。

南翠の小說論一斑

此處で南翠の藝術論の問題を論ずるは、確かに場違ひといふ氣がする。かういふ問題は南翠を政治小說家としてだけでなく、全般的に取り上げる場合に論ずべきものであらうが、然し彼が自ら讀物の通俗作家視されることを欲せず、高く標置して自家の藝術的態度を表明することを始めたのは、十九年に入つてから以後のことであり、殊にその議論として纒つた主なものは、以上の『綠簑談』と『新粧之佳人』に附隨して發表されたものであるから、此等の小說の理解に必要だといふ辭柄の下に、こゝでそれを一瞥することにする。

十八九年以前の南翠の根本的な藝術論――即ちこゝでは小說論であるが――の完全明瞭に表白されたものは無いが、曲亭馬琴を崇拜して極力その小說文章を模してゐたところから見、又彼の作物中に散見する斷片的な語句を味ふと、南翠の小說觀が根本に於いて尋常の勸懲主義であつたことは、疑ふ餘地がない。然るに十七八年以來漸く歐化主義が盛んになるや、餘波が社會改良論となり、生活改良論、風俗改良論、演劇改良論、講談歌舞改良論、美術改良論、文章改良論に關連して、小說改良論が生れた。この小說改良論の基礎は何ういふことかといふと、もつと社會に即した現實的なものにするといふことである。だがこの同じ改良基礎から、二つの改良意識が生じた。その一は直接社會の利益になることを目ざしたもの（政治小說論などこれに屬する）、これは從來の勸懲主義の勵行ともいふべき

ものであるが、今一つは西洋の寫實小說の影響を受けたもので、現實を尊重するが、利益意識目的意識を第二にするといふあくまで革命的なもの（『小說神髓』の如き論はこれに屬する）、前者は時代の政治熱を背景として居り、後者は歐化主義が歐米資本主義社會の生活樣式を皮相的に模倣することを主眼としたことの反映として、我國の文學をも直に西洋風の寫實小說の潮流に乘り出させようといふのである。本來の改良論としては勿論この後者が本流であり、前者は變態といはれやうが、然し變態にせよ、時代の排他的な政治熱を顧みると、何うしても一度はかういふ改良意識が生じなければならなかつたのである。南翠の小說觀も必然的にこの變化を受けたことが、『照日葵』の緒言（十九年一月四日改進新聞）に知られよう。こゝで南翠が小說の本質を論じてかういつてゐる、――

硯池の波瀾能く人心の偸安を攪破し毛鋒の刺衝能く民情の腐蝕を挽回せんとするものは則ち稗史小說の骨髓なり靄々たる彩雲を畫き出して人心を歡ばしめ啾々たる慘風を起し來りて能く民情をして傷ましむるものは則ち稗史小說の皮肉なり此の骨髓ありて此の皮肉あり始めて一部の全傳をなせる事洋の東西を問はず時の古今を論ぜず其の軌悉く一に歸す。

從つて小說の效用はといへば、――

小說は啻に婦人童蒙の愛翫に供するの翫具にあらず一物を假りて政治を談じ風俗を議し世敎人心を稗益するの要具なるに

今日の小說家流は「徒らに婦女に阿りて利を俗賈に射るを計るのみ」である、これでは小說改良の目的は達しられないから、自分は夙に決するところがある。――

予（おのれ）こゝに慨すること久しく一昨年以來徐々筆を此の點に向け卑近の事を叙して暗に風俗を嘲けり政治を慨論することを勉め爾來着々歩を進め來云々

これで南翠の十八九年の小說觀が小說實益論であつたことが分かる。

然るに十九年以後、『小說神髓』に接するに至つて、十二分に好新癖があり聰明なジャーナリストたる南翠は、大に逍遙の新說に服し、根本に於ては『神髓』の小說理想を奉じた。然し彼は多年の作家的經驗から、この小說理想がまだ眞の理想に止まることを信じ、その改良小說によつて獨特の折衷的主張を示さうとした。のみならず、南翠は識者から多少の冷嘲を浴びつゝも、(一)自ら改良小說家の巨擘をもつて任じ、同時に改良小說家たる權威を示すべく、一作毎に自家の立つ小說論を披露して讀者大衆の啓蒙に當つてゐたが、この小說論でも專ら自家の說を述べた。此等の小說論四五篇讀めば、南翠小說論の主眼が判明する。今左に此等の文章の所論を突き交ぜて、小說に對する南翠獨特の理想を紹介しよう。

第一はいはゞ根本原理の論で、これは『小說神髓』をそのまゝ尊重してゐることが明白に出てゐる、——

抑も小說たる美術は哲學の內部に立入りて哲學の說き能はざる感情の微細分子を解剖するを以て主眼とする者なれば支那小說の如く勸善懲惡を說くにも及ばず曲て結局を設くるにも及ばず其の感情の果を說くを以て足れりとするものなり(十九年「籠飼の黃鸝」緒言)

然るに小說の本質論になると、『神髓』の所論を多少我流に解釋して、『神髓』の眞意から逸出することになる、——

小說に尙ぶ所のものは主として當時の人情風俗を神變不思議の間に寫し出して暗に諷刺の意を寓し隱に世道人心を補ひ讀者を想像の天地に導き空中の樓閣に誘ひ追風捉影も啻ならざる妄誕虛構の事項を叙して恰かも身其の境に在るが如く讀來り讀去るの間知らず識らず眼前に橫はる事實の如き感を生じて或ひは怒り或は怨み或は歡び或は憂ひ或は笑ひ或は哭かしむるを以て妙の妙なるものとす(『綠簑談』續編序)

之れを要するに小說は讀者を驅つて無形の別乾坤に奔馳せしむるにありて歡樂のうちに自ら實益を裨補するを以て

極美上乘のものと謂ふべきなり（同續編）

以上は要するに『小說神髓』の所說を自家の立場から敷衍し調和したものであるが、『神髓』が必らずしも實效實益を小說の公然たる條件とすべからずと論じてゐるのに對し、南翠はこの實益實效に殊に力を入れて公然たる必須條件としてゐるのが目立つ。のみならず、『神髓』は兎も角寫實精神の主張であるのに、南翠の解釋は『神髓』の許す以上に想像的分子を重視し、描寫の實よりも想像の虛を以て小說の本質と見てゐるやうに受けとれる。即ちノヴェル的分子よりもロマンス的分子を生かすやうに勝手に解釋してゐる。此の解釋が偶然な誤解から出たものでなく、一種の折衷的精神から出てゐるのは、南翠の次の如き語葉に見て、明白である。——

（前略）斯く一概に進步したらんには鏡の揭げ所の非常に高きに過ぐるが故に人の或は之を望むこと能はざるの憾あらん是れ小說家の最も至難とする所にして又好小說の出づること稀なる所以なりとす人の嗜好に投ぜんことを勤むれば人間智識の階級夥多なる今日に於て何れの分部に投ぜんとする乎其の多數を樂ましめんとすれば多數は蒙昧無智なり金瓶梅一卷を以てするも可なり寧ろ嗜好の二字は小說家なる者の意想以外に措かざるべからざるものなれば則ち余は余が一己の意見を以て美術の進步を計るべき階級を設けたるなり云々（「籠飼の黃鸝」）

これを讀むと、南翠は、『神髓』の所論を小說界の現狀に照して未だ理想に過ぐるものとし、ロマンス分子を多く取入れた過渡的段階をつくつて、改革の急激を緩徐にしようといふ折衷的精神を抱いてゐたことが分かるであらう。かういふ折衷的精神は、テクニクの論、即ち實際の小說作法を論ずる一段になつて、益々偶然でないのが知られるのである。——

小說に尙ふ所のものは主として立案の確定と脚色の玄妙奇拔なるにあり意匠の深遠と案排の格好適當なるにあり文章の優美と詞調の平易婉曲なるにあり伏線の起伏、照應の對格、波瀾の小大、主客の位置、省筆の用法、抑揚頓挫

の所由とも其の宜しきを得るにあり正記變叙直寫間寫の章法其の宜しきを得るにあり（『緣蓑談』續編）

これはテクニクの總論である。それは如何にも『小說神髓』の所論を踏まへて論鋒を繰出してゐるらしく見えるが、よく讀むと、『神髓』の所論を勝手に解釋して南翠流の一家言としたものなることが分かる。『神髓』流のテクニク論からいへば何よりも第一に人情の寫實自然を貴ぶべきであるのに、南翠流の主張には、『神髓』の排擊した馬琴流の稗史作法心得書からの覆唱めく文句が澤山見える。『神髓』の主張はいさゝかでも近代小說の作法に近よらうと努力したものであるのに、南翠の主張は、逆にロマンス時代の方法に退行するのを理想としてゐるやうに見える。勿論南翠とて、意識的に『神髓』に反對して、人情描寫第一主義を輕視するのではないが、時代に卽して折衷主義を主張しようとする精神がかういふロマンス分子の主張ともなつたものであらう。かゝる折衷論の主張は南翠の舊文人的イデオロギイを不用意に暴露したものでもあるが、何よりも南翠の主張が實際家としての知見から出てゐるといふことを知らなくてはならぬ。而して南翠の折衷論と『神髓』の所論と比較することによつて、當時の一般小說作家の思想が南翠のそれより又幾段と低卑なものであつたといふこと、『神髓』の所論が、彼等にとつて如何に實行不可能の理想論に見えたかといふことを知れば、南翠の折衷論の主張が作家側の進歩を顧慮して實際的必要から出たものであることが分かるであらう。このテクニク論は然し南翠の小說を味讀するる上には大切な鍵として役立つものである。

小說に尙ぶ所のものは積消兩極の精神なり極美極惡の精神なり幽邃富贍の精神なり積極の心なければ則ち人情の最善を語る能はず消極の心なければ則ち人情の最消を語る能はず極美の心は以て標準的の人物を形くるべし極惡の心は以て懲戒的の人物を形くるべし而して幽邃富贍の心を以て之を灼爛紛繽の上に彰はし枯凋索落の裡に潛め讀者をして逐蹤奔走の間に勞れしむるを以て力ありと稱すべきなり（同續編）

此の一節はテクニク運用の根本精神を論じたものであるらしいが、南翠獨得の半可哲學で、正直にいへば何事を說か

うとしたものか要領を得ないものであるが、強て模索していへば、想像によつて人情の奧處を探り、その表出に對照を求め、よく交互に奇正を出して變化を多くするやうにせよとでもいふのであらうか。こゝでも寫實に背けとは論じてゐないが、何れかといへば、寫實よりも理想主義的な精神を多く重んじてゐるらしく見える。

小說は猶ほ彫刻の如し然るを近時說を爲す者ありて曰く小說は人情を祕密藏裏に發掘して形體に露はれざる境を叙述すれば足れり奚ぞ徒らに苦んで脚色を費すを要せんやと又曰く小說に主說を蟠根錯節のうちに臚列するものなり乃ち我が錦心繡腸を水花鏡月に寫し出さば可なり奚んぞ苦んで人情に阿ねるを須ひんやと嗚呼此の論者は小說として索然として無味淡泊に歸せしむるものなり（下略）（同續編）

前半の論は、『神髓』流寫實末社連中の主張、後半の論はロマンス論作者、政治小說、目的小說一輩の主張、この二つの極端が小說をして「無味淡白」に歸せしむることは、『神髓』の論者も道破したところである。南翠はこゝでも一種の折衷調和論を主張してゐる。兩者の短を棄てゝ長をとり、時代の要求に合した小說を作るといふところにその理想を置いたものなることは、この論でもよく分かるのである。

南翠は更に自家の創作態度に就いて語るところがあつた。第一は自家の態度の總論で、——

予の小說は支那風の趣向も取らず西洋流の脚色も取らず我が國に行はるゝ和俗數百種の命意も取らず否々悉とく之れを心に取りて折衷咀嚼しつゝ自ら一種の意志を練出さんことに勤むるなり（『絲簑談』正編、以下單に正篇とす）

とある。南翠の目指すところが必ずしも間違つてゐない、いなこれが古來小說作家の理想的態度であるともいひ得るが、南翠は此の理想を成就するだけの力を持ち合はさなかつたので、彼の擇取した材料が渾然融和せず生のまゝで指別されるやうな事にもなる。第二は小說の構造眼目に關する用意で前述の原理をそのまゝ反照したもの、——

小說の要は專ら立案にあるものなれば予は力めて意匠を新にし作意を高尙にして之れを玄妙不思議の間に叙し盡さ

んと圖れるものなり云々（正編）

これは、前記テクニク後論から自然演繹されるところ、第三は描寫に關するもので、描寫には想像による入神を喜ぶ。——

要するに余は有の儘の事を有りの儘より一歩進めて人情の表發せざる神祕に寫し出さんことに想像力を働かして意表とか不思議とか若くは時好に投ずるとか常套以外の事とかいへる類を少しも精神に含らしめず、世の中の眞理は此の位にまで進むならん人情といふものは此の點にまでは達するならん此處の感情は斯くあるべし此處の道理は斯く變化するならんといふ極端を推究して夫れより發し得べき事柄と發せずして精神に止まる事柄とを別ち心理學の理論を用ゐず人心解剖の分子を畫きて想像推考の間に眞個の感情を寫さんとするに在るなり（正編）

種々迂りくどく述べてあるが、要するに現實そのまゝを描かず想像によりてこれに主觀的解釋を加へて入神の妙を發揮すること、想像の働きは自然なるを貴ぶこと、自然なる想像によつて心理解剖を試みて人情の眞を捉へることを强調したものである。心理解剖に言及して、想像を用ゐて心理學の理論を用ゐずとしたところは、明白に『神髓』に反對してゐる、これは南翠としては意外の奮發であらう。最後に——

美術の眞面目に適ひたるものなるか否らざるかは別問題に措き予は一の極美的を極筆極寫するも他の極端にまで抑詰たる想像は成るべく避けんとするなり何んとなれば痴情の極端には春畫よりも猶ほ甚だしきものあり殘酷の極端には親を殺して其の血を啜り肉を咬ひて舌鼓うつ者なしとも言はれざればなり斯の如きは美術の本旨にもあらざるべく世道人心を害する此れより甚だしきものはあらざるべし（續編）

自然に遠い極端な想像も善事描寫には許すが惡事描寫には許されないとするもので、こゝでも南翠は勿論『小說神髓』を蹈まへて議論してゐるのであるが、一面又、實益を重んずる彼自身の小說理想から出てゐるのであることを、知ら

ねばならぬ。

以上南翠自身の創作態度を要約せば、(一)脚色立案には奇抜高尙を重んず、(二)描寫には想像による自然的入神を貴ぶ、(三)想像による心理解剖を試む、(四)世道人心を考慮す、といふ四條となるが、(一)(四)は勿論舊封建文學、卽ちロマンスの必要條件、(二)(三)は一見新時代の改良小說の必要條件らしく見えるが、その想像を重視してゐる點でロマンスと連絡をもつともいひ得る。この點からしてそこに明白に折衷的とも、漸進的とも、過渡的ともいはれるものがあるのである。

南翠は根本に於いて新時代の新思想を我が有とする力を缺いてゐたので、彼が改良小說の基礎理論としようとした小說論は、今日では到底不透明な、糊塗的な、飽迄受け賣り的なものといふ外はなく、且つその作法に於いても、自ら好んで西洋風を加味したに拘らず、支那小說から學んだ封建文學のそれが根幹となつてゐたことは明白であるが、自ら進んで『小說神髓』の所論を、自分の立場から時代に卽したものに訂正しようとした意氣は買ふべきであらう。且つや、想像の重要を力說したのは、『小說神髓』の缺を補つたものともいへる。勿論『神髓』にも舊小說の觀念と共通なものは少くないが、そのテクニクの論に於て、强て科學主義を取つて、空想一點張りな時の小說界の弊害を矯正しようとした、そのために表面からは、想像の働きをやゝ抑へた形になつた。然し結局想像は小說創作の重大要素である。これの働きを重視した南翠がその小說論に於いて、想像力重視といふ點から『神髓』の所論への折衷說を立てようとした根本精神は、文學史的にも當然認められて可いところである。たゞ彼は舊人である爲めに、『神髓』の所論を超克した近代文學の立場から想像論を主張することが出來ず、一歩退いて舊小說卽ち稗史的ロマンスに論據せざるを得なかつたので、彼の議論は淸鮮を缺いたものとなつてゐる。又、彼自身意識的に『神髓』の補訂などは考へず、たゞ新と舊との折衷的段階をつくる方にばかり氣を取られてゐたので大きな損をしたともいひ得るのである。

兎もあれ此の小說論は、十九年以後の彼の作物中既記のものにとつても、これから記すべきものにとつても、同樣に理解を助ける役を果たすであらう。私は、彼の改良小說の文體に就いての用意を擧げて、筆を轉ずることにする。

總じて文章は六かしき裝飾を省きて唯すら〳〵と直達を計るをよしとすれば予は勤めて卑近の文字文體を用ゐんとす然れども小說は固と文學の花なれば有りのまゝにぶツつけて記さんには冬時山を望むと一般にて何處までも見え透き景色も眺望も更にあらざるべし(中略)抑揚あり頓挫あり豪宕あり波瀾あり省筆あり照應ありて始めて光彩を生ずるものなれば予は專ら變化をのみ主としたり其の一定の格に入ると入らざるとは敢て患うる所にあらざれば或は叙事を主としながら記事體に混ずるもあるべく或ひは四六體となり或ひは散文となり和文かと見れば漢文もあり俗文かと見れば飜譯文體もあるべし予は唯自他の混同に頓着なく時に臨んで筆を下し是れ等の文體が若しも適所適所に活用することを得んには誠に面白き新文體となるべきを信ずるなり故に本篇の如きも始終一ならずして識者の笑ひを招かんことを知りつゝ所謂鵺文なるものを用ゐたり此に注意を促すべきは予は今文體の試驗中なり夫れ故某の文體と某の文體とは全く他人の口格より出たるが如きものあり予は當時文體を一篇は一篇より變更せんことに意を用うる者なれば讀者は宜しく此に注意せられたきものなり(正編)

この文章の混用は、彼の創作態度の東西古今雅俗混用の流儀と相應するものである。彼は『小說神髓』の信者であるだけに、『神髓』の論者と同じく、言文一致を理想に置いた。然しその實現を遠い將來と見て、暫定的に新文體の創始を志した。然し元來がその理想が終に實現されることを信じたのであるから、能ふべくば、その實現を助ける方法をとらうとした。だから大體としては成るべく文を言に近づけ、言も江戸方言を生かすことにする、その方針で時代に即した新文體を求めて行かう、これが、南翠が文體巡禮の素志であつたのである。そのことは彼の小說『金香露』(明治二十年五月)の緒言に明言してある。

註(一)　明治十九年十月二十日、繪入自由新聞一一五九號「臭い改良家」の一節
「馬琴爲永流の小説は美術の趣意に負と御自分が Aesthetics or Science of Beauty の一端をも學ばぬ癖に唯だ經國美談周遊雜記經世偉勳等の書を丸呑にし直に政治上小説上美術上の一切の眞理に通曉せりと心得實際有れもせぬ意匠を以て小説を作り不適當の洋語などを挿篏て之こそ改良小説の雛形なれと新聞に掲ぐる改良家あれば」云々。

『癡人之夢』

以下明治二十年刊の政治小説について語らう。

明治二十年度に於ける南翠の小説中、政治的意義をもつてゐるものは三篇ある、さうしてそのうち二篇は、十九年度以前のものゝ如き對内的な政治的テーマではなしに對外的なもの を扱つて居り、讀者の意識を國内的政治鬪爭から、對外的結束乃至經營に向けようとしてゐる。これは興味ある轉換といはなければならぬ。

『春曉攪眠 癡人之夢』は、春のや主人の序文にも見える通り一篇のアレゴリイである。筋を人情義理の葛藤に借りて隱微な政治寓的意を籠めたものである。

通篇の趣向をいへば、兩國同朋町に球屋小りうといふ妙齢の美妓がある。父は神田大和町の米問屋葦原家から出たもので、球屋の今日あるは全く葦原家の恩義といつて可い、又球屋も表向きは出店のやうに出入をしてゐる。然るに球屋の先祖中山某は横濱南京町の茶問屋中村淸太郎の家から分れたものなので、内々は中村家からも多少の世話になつてゐる。然るにこゝに面倒が出來たといふのは、葦原の當主豐秋も中村の主人淸太郎も此の小りうに思ひをかけて、わが有にしようと互ひに張り合ふ。小りうは心中豐秋に靡く氣があるのだが、中村への先祖代々の義理もあるの

で、さう無情な扱ひも出來ない。その中、豐秋の方では、中村が小りうを自由にしてゐるといふ評判に立腹して、小りうに納得せしめた上、中村家へ掛け合ひ、根引きしてしまふ。然るに此の掛け合ひを承諾したのは當主清太郎ではなく、當主の母西光院（名は阿慈といふ）で、西光院は清太郎が小りうに夢中になつてゐることなど知らずに、大和屋がたゞ金の爲めに掛け合ふのだと思つて、手輕く承諾してやつたわけである。清太郎はこれを聞いて大に怒り、身上にかけても小りうは取り返さうと言ひ張る。西光院は今更途方に暮れ、橫濱一の代言人蘭英吉に相談し、智慧を借りる。蘭自身もかつては小りうに心なくはなかつたので、種々な打算的な氣持ちから、中村方の黑幕となつて働く、西光院は蘭の心を堅めるため貞操をも犧牲にする。ところが、大和屋が手強い中村家の談判も聞き入れぬので、その仕返しに中村家の出店の砂糖店製造部の牡丹組の若い者達が、球屋の抱への美や子といふ雛妓に亂暴する。かうなつてはいくら談判しても纏まる譯がない。結局豐秋と清太郎が決闘することになる。決闘には英吉が審判といふ觸込みで、暗に清太郎に有利な姿勢を取らしめる。いざ決闘となり、双方傷を負ふが、最後の一發といふところで、一度調停を試みた雨宮堅太郎が飛んで來て引き別ける。さうして、小りうは大和屋へ渡しその代り球屋の雛妓みや子と八重吉を中村家に引渡し、中村家よりは若干の身代金を出すといふ條件で、此の葛藤は落着した。然し清太郎は傷が數箇所だつたに係らず着込みが厚かつたので間もなく癒えたが、下着の薄かつた爲めか葦原の傷は容易に癒えず後々まで苦しんだといふ。

趣向は何れかといへば無難だが平板で、當時の新聞續物以上には買へるものではなく、十九年の南翠の大見得を切つてゐるのに對して、意外と思はれる程であるが、南翠自身はいつものやうに趣向の奇で讀者を釣らずにその寓意の點で感心させるつもりであつたのであらう。ではその寓意とは何かといふと、琉球處分問題に臺灣征伐その他を扱つて、明治初年以來の日清間の葛藤を描いてみようとしたものに外ならぬ。これを解く鍵は先づ篇中の人物が何を表

示させられてゐるかを解くにある。葦原豐秋はいふまでもなく日本である、中村清太郎は清國（中華又は中國）である。小りうは琉球に當り、みや子八重吉は宮古島八重山群島をいふ。西光院は西太后（阿慈の慈は慈禧太后の諡號から出てゐる）、引いて清國政府をさす、蘭英吉は英吉利卽ち英蘭であり雨宮堅太郎は米利堅の亞米利加である。砂糖店製造部云々は臺灣の蠻人に外ならない。から解き了れば、前の梗概を讀直すまでもなく讀者は首肯するであらう。

南翠の脚色は史實のまゝを踏襲してゐない、勿論小說としての自由を存してゐる。然し大體として史實に依つてゐることは勿論であるから、今更事々しく史實を引いて、某事は某事の寓意である、某事は某事と前後するなどと細微な對比を試みることはしない。たゞ問題は、琉球處分問題は明治十二年のことであり、臺灣征伐は更に數年溯つた明治七年にあるのに、南翠が明治二十年に於いて今更此等の過去の事件を事新しげに小說に寓して怪まないのは、何故か、といふ點である。蓋しこれには理由がある。

明治十九年八月、清國北洋艦隊の水師提督丁汝昌は鎭遠定遠濟遠威遠の四隻を率ゐて浦潮斯德に航し、歸途長崎に寄港した。表面は兎もかく、我が國に對する示威運動を兼ねてゐたこと、いふまでもあるまい。然るに上陸した清國水兵が市中で亂暴狼藉をしたので、巡査及び市民との衝突となり、双方死傷があつた、これが所謂長崎事件なるものである。彼我政府では事件を重大視してそれぞれ官吏を特派して調査談判せしめたが、結局要領を得ず、十一月に談判が中止された（二十年二月落着）。此の報に我が國人の憤懣いはん方なく、清國の驕暴を憎み、同時に政府の腰の弱さを痛擊した。然るにこれと略ぼ同時に、琉球事件なるものが喧傳され、世人の想像が忽ちこの二事件を因果的に結びつけたので、國民の興奮はいやが上に高まつた。琉球事件とは、琉球處分以來、同地には黑黨又は支那黨といふ不平黨が多少活動してゐたが、此の頃になつてその一部が密々に支那內地に渡り、再び支那政府の支配を受けたいと願ひ出たところ支那政府が喜んで承知した。ところが此等の黑黨が歸國の途中難風に流されて鹿兒島に着いたので忽

ち露顯してしまつた、といふのである。而かも、宮古と八重山を提供する代り最惠國條款を與へよといふ我が最後的解決に淸は應ぜず今日に及んでゐる以上、淸國が改めて琉球返還を要求することも有り得ると考へられてゐたのであつた。淸國側でも亦、上海その他の地方新聞が長崎事件の引合ひに琉球問題を出し、日本側の暴を云々したので、琉球問題が双方から煽られて再燃した形となつた。南翠の『癡人之夢』はこの雰圍氣から生れたものである。

南翠は日淸の衝突を必至のものと見てゐる。明治以來の兩國の關係を見るに、臺灣事件といひ、朝鮮事件といひ、琉球事件といひ、このまゝでは一歩一歩衝突の外はない。それが明治十九、二十年の交に及んで、我が國力が漸く充實して來るに從ひ、（葦原豐秋はブルヂョア資本家である點に注意せよ）、この傾向が益々顯著になつて來た。十九年から二十年へかけての軍備擴張計畫、殊に海軍擴張のそれは、支那海軍の優勢に刺戟された點が多い。南翠の小說の結末がやゝ悲觀めいた調子になつてゐるのは、當時の軍備劣勢に對する警告と見ても、又淸國の復讐を恐るゝ心の現れと見ても可い。篇中蘭英吉の暗中飛躍は、英淸の接近を諷したもので、これは事實であつた。又發端の二朝親雲上の怪夢は世界の未來、歐米列强の東洋への野心、日淸の大局的同盟を暗示してゐるが、それは眞の暗示たるに止まつてゐる。

此の作は政治的寓意を除くと餘り取柄のない人情式小說であるが、テクニク上から一二いふと、構想の全體が南翠の夢となつてゐるのに、發端が夢中夢的に描かれてゐるが、二つの夢の間に連絡がなく調和がない。これが大きな缺點である。寓意小說として止むを得ぬかも知れぬが、人物の描寫も表面的に失する。又、この作は、平生の南翠に似ず、趣向に他奇なく、文章も平暢で、何とはなしに春のや主人を思はしめるものがある。殊に『京わらんべ』と一脈似通つた氣味がある。例の好新癖で、意識的に模倣したか否かは明言出來ぬが、多少の影響は認めて然るべきか。

『朧夜櫻』

『露花蛺蝶 朧夜櫻』は署名は無いが、『金香露』の緒言によつて南翠の作だといふことが知られる。

この小説は正直にいふと政治小説といふ程政治的分子の多いものではない、たゞ主人公蜷川英雄の目的が國會改良にあるといふ點に多少南翠の政治意見が見えるから、兎も角これを準政治小説と見なし、簡短に述べることにした。

この小説は南翠の作とはいふものゝ、事實は飜案といつてもいゝ位のもので、原本はシェークスピアの『リヤ王』である。知らずして讀めば兎に角、『リヤ王』の梗概を承知してゐる人なら、讀むこと數章ならずしてそれと氣がつくであらう。從つて梗概を説くまでもないのであるが、全然説かぬといふのも餘り粗略なわけであるから、一通り語らう。

西國出身の元老院議官波多義鄕に三人の娘がある、春子、秋子、松子といふ。義鄕は六十餘歳で未だ老朽の身といふのではないが、功成り名遂げたせゐか、近頃何となく浮世の雜事が煩さくなつて、退官して餘生を樂しまうとする。それで財產を三分して三人の娘に與へ、三人に佳婿を得て心殘りなくしたいといふのである。春子は官人に嫁したいといふ、秋子は銀行、會社の重役や紳商がいゝといふ。松子は內心理想とするところはあるが、口に出さず、他日の用意に三千金だけ別けて貰ふ。

間もなく、波多家へ出入する中外銀行頭取福浦富藏の媒介で、春子には法制局參事官小笠原乙楠といふのを迎へて夫とし、秋子には中外銀行の支配人で洋行歸りの行方利（なめかたきとし）といふのを迎へる。義鄕夫婦は、今は松子だけと思つて、頻りに焦つて心中を吐かせようとするが、官人も銀行家もイヤといふのみで何とも希望を言はぬので、止むなく福浦に賴み、裏面からそつと聞かせる、すると、今學校にゐる書生でも後々大成する望みある人が欲しい、それも自分が見てきめたいといふ希望だと分かり、福浦は、誓つてさういふ人物を見出してやると約束する。

こゝに福浦と同郷で、而かも舊友の子に蜷川英雄といふ書生がある。明治十年の役に無二の西郷方なる父を失つたが、母が健氣な女性だつたので、英雄を立派に育てた。英雄も學問に身を入れ、造士館の秀才といはれる位だつたので、田舍に朽ちさすのは惜いと書れ人とも思ふ餘り、母が無理して東京に遊學させる。英雄は大に喜んで頻りに政治法律の學を勉强してゐるうち、母が死んで學資の道が絕え、おまけに病氣をして、甚しい窮乏の裡に陷入る。纔に下宿屋の主人の義俠で生命をつなぐといふ有樣である。それで一日、同學の友小笠原が今は時めく內閣總理大臣祕書官(昇進して)、となつてゐると聞き、助力を乞ひに行くと、小笠原は、助力はするが、その代り在野志士の間に立入つて祕密探偵の役をせよと諭すので、英雄は怒つて去る。

その內二十三年の議會の開會が迫つて來る、(此の物語は明治二十二年に發端することになつてゐる)。英雄は窮措大の身ながら、憂國の念が止められず、每日各新聞の揭示場を巡讀して步いて、徒らにその無氣力に憤慨してゐる。或る時、星ヶ岡公園で父の舊知福浦と邂逅したが、福浦はかねてから英雄のことを聞いてゐたので、同情の餘り助力を申出で、先づ附近の料理屋に誘ふて、英雄の抱負志望を聞く。英雄はいふ、官に入つて志を天下に行ふのは、男子一代の本懷であるが、今日の官吏は何れも朋黨に依つて青雲を踏むもので、正當な登用法に依るものでないので、卑屈な人間にならぬと立身は難しいから、只今の狀態では官に入るのも好ましくない。又商人は何うかといへば、今日の紳商は賭博めく投機で金儲をした者が多く、正當な才智と活動で成功したものは先づない。つまり德義を棄てなければ商人として成功の出來ぬ有樣である。資本を十分運動させて事業を起し、國家のために生產の途を開くといつた志の人は先づ無い。從つて商業界に入るのも思はしくない云々。ところが、此日同じ家で波多家が避暑の淸遊を催してゐたので、偶然室外を通りかゝつた松子は英雄の議論を耳にし、大に感心する、さうして福浦に賴んで紹介して貰ひ、種々談話を試みる。福浦は心中、松子の夫たるべきはこの英雄の外ないと定めてしまつた。

そこで日を經て福浦は此の事を波多家に申出すと、老父母も松子も異議なく承諾する、英雄の方は一二度辭退したが、終にはこれも承諾したので、遂に松子は英雄を夫に迎へ、英雄は波多を名乘ることになる。

義郷は松子を愛する餘り、それが英雄にも及び、英雄の志が政治にあるのを知つて、來る可き議會に代議士として出さうと、小笠原や行方に盡力させて準備をする。然し英雄は一向氣乘りせず、立候補を辭するので、義郷を始め、松子も大に失望する。且つ總體英雄の樣子が前日とは雲泥の違ひで、毎日酒食を恣にして遊惰に日を送つてゐる。最初は何れも若氣の至り、且つは一朝にして富貴の身になつたのだからと大目に見てゐたが、終には英雄の本心を計りかね、皆々眉をひそめる。流石の松子さへ、内心自分の眼鏡違ひを嘆ずる始末である。然るに英雄は餘り暴飮暴食の結果大病となつたが、病中何か考へたものと見え、松子の諫めを容れ、病後早々洋行の決心をする。松子は喜んで先の日の三千金を出してその費用とする。然るに英雄は何うしたことか、出發間際にその三千金を紛失し、その他重々の失態があつたので、遂に波多家を失踪してしまふ。

その後の波多家は不幸の連續である。先づ義郷は老病や心痛やで死ぬ、松子は小笠原家に引取られて一子を生む。ところがその小笠原も俄に大臣の寵を失つて非職となる、又行方も鐵道株の思惑に大損をして田舍へ引込み、續いて利は病死する。何れも今は松子の厄介になつて生活するといふ慘澹たる有樣である。その間、數年、松子は家事を治め、一子を敎育して當てにならぬ英雄の歸來を待つてゐる。福浦もよく世話をする。

松子の待つた甲斐があつて、英雄は歸つて來た、而かも立派に法學士理財學士の名譽を得て英國留學から歸つて來たのである。こゝで英雄は松子に本心を明し、その行動の不屆だつたことを謝すると共に、今は奮つて代議士になり、下院議院に於いて牛耳を取る身となつて、松子の貞烈と共に世間の語草となつた。

此の小說は、松子が主役であり、英雄は客位にある點を考へても、南翠の主意は『籠餇の黃鶯』と同じく、若き女性に對する處世訓といふつもりが第一であると見て然るべきである。彼が若い女性の爲めに夫選びの難問題を解決して上げようとした、その序に時勢なり政治問題なりに筆が觸れたのだと見て可い。

プロには前に述べた通り、シェークスピアの『リヤ王』から出てゐる。それは劈頭波多家還歷祝賀の場で、三人の娘が各々志を述るところあたり、それから義郷が三人娘に財產を三分することを宣言するところなどを讀むと、はつきり分かるが、然し南翠とてもさるもの、そのまゝ使ひはしない。リヤ王後半の運命を松子にかづけ、おまけに最後の大悲劇を大團圓に收めてゐる。その上、松子の婿たる蜷川英雄の傳、これが又一工夫で、その傳記が永々と織り込んであるので、一寸別物のやうに面白く讀める、こゝは南翠の作者的老猾さだ。

勿論輪廓を『リヤ王』から借りたとしても、時代の背景は當時の社會を活寫したものであり、種々面白い暗示が見える。小笠原が英雄を政府の役人に周旋してやるが、その代り在野志士の間にゐて密偵の役目をしろと注文するあたりは實地の見聞に出るものに違ひない。英雄が、役人や商人を罵倒するのは、當時官吏萬能から、それに引つゞいて黃金萬能になりかゝつてゐた當時の社會人に對する作者南翠の警醒の語葉として、可成り熱を帶びたものがある。いはゞ當時のインテリゲンチャの反官、反ブルヂョア氣分から溢れ出た氣焰錄として、多少の注意に値するところであらう。

全體を通じて拙劣だと思ふのは、英雄が波多家に入婿してからの人格的變化である。南翠のつもりでは、大に寫實的自然な細かいところを見せるつもりで描いたものらしいが、あの部分位不自然に出來てゐるところはない。英雄程の俊秀な青年でも一朝にして富貴になつたが最後人情の自然として勵む心が鈍るといふところを示さうとしたものに違ひないが、それが理由が分からぬので、木に竹をついだよりもまだ唐突な變妙なるものに受け取られる。後になつ

てその説明として、福浦の口から、それは議官の尊王主義と英雄の民主々義が合ひさうもない上、友人からは富家の奴隷になつたと見限られるし、國會の前途も覺束なし、種々なことが絡み合つては自暴自棄的な氣もちも手傳ひ、波多家を離縁されることを望んだものであるといふ物語が出る。それならさうと又方法もあつたらうにと思ふ。それから三千金の紛失一件も、餘り奇を弄した傾きがあり、人を馬鹿にしたと思はれるところがある。三千金を紛失したと思つてゐたら、實は自分の思ひ違ひで福浦家に忘れてゐたので、それを福浦から受取つて洋行に出かけたことになつてゐる。それを、英雄が歸朝してから松子を始め一同に物語つて詫るのであるが、福浦は始から英雄のさういふ行動や、心志を全部知つてゐるのに、皆が心配するのも構はず、默り通してゐるなぞは、常識人情にあるべきことではない。この點も失敗である。

最後に英雄が洋行の目的を、新聞記事をかりてから語らしてゐるが、これは南翠が當時の政治に對して抱いてゐた希望を具現したものとして、本文を引用して置かう。

（前略）氏が前途に歸する所は日本現時の憲法に反對して模型と儀式とより組織せられたる國會を改良し國民の權力を强大ならしめ以て英國に於ける議院の如く進歩せしめんことを希圖するものにて歐洲大陸を漫遊の目的も專ら玆に有るが故に佛、瑞、伊、墺、洪、曼、嗹等の諸國の國會は仔細に之を探究したる中に就きて嗹馬の國會は氏に反省利益を與へしなるべし、氏は人に會ふ毎に我國の議院にして永く現勢を打續けなば遂には嗹馬の如き弊害を招がずとは言ひ難し（中略）政府の權力の偏重なるに至つては殆ど嗹國と相伯仲すべし今より之れを防遏せんとするには宜しく憲法を修正して議院の權限を擴張せざるべからず輿論を洞見して內閣の更迭を促さざるべからず立憲政體の美は政治家の德義なり云々（第十節）

以上の新聞記事を補ふに、英雄自身、自家の心事を語つた語をもつてせば、南翠の意のあるところは、誠に瞭然たる

ものがある。

吾輩は元々日本に起るべき立憲政體が必ず完全なるものでは有りますまいと云ふ事は憲法發布以前から着眼して居つた所で則はち明治二十一年頃に憲法の調査が少しも進んで居らず殊に民間の志士論客に意見を問ふて折衷採擇の道をも開かず維新の始めには言路洞開といふ事を唱へて居ながら今日に成つては却て言路閉塞の形に成る所を見れば如何執政者と立法官とが完全なる憲法を制定し國會の局面を圓滑にしようと考へても木に緣て魚を求むるやうなものであるから吾輩が故議官の家へ入つたのも一は此持論を說て元老院中にも、在野の志士に私案憲法を徵集して法度制査の參考に供すべしといふ說を唱へる人を出し何うかして內閣員にも幾分か此の思想に感じさせ樣といふ精神でしたが（中略）萬事思半するもので迚も之れを實行する事は出來ませんでした夫ゆゑ議員をも辭した次第で今度洋行の主眼も制度改正に有りますから專ら法律を學び傍ら財政整理の爲に理財學を修め幸ひにして双方とも學位を得ましたのは偏へに波多家と最愛なる松子が賜でありました云々（第十節）

此の理財學即ち經濟學を兼修したといふところは、今後の政治界に活動する人々の新しい資格の一つを暗示したものであるが、そこは流石にジャーナリストたる南翠だけのことはある、議會が次第に經濟議會になつて行くにつれて、この資格が議員必須のものとなつたことは、議會史を知る人々の首肯するところである。

『曦の旗風』、後改題『旭章旗』

此の小說も卒然讀過すると何等政治的イデオロギイの無い一種の冒險小說なるやに感じられるが、事實は矢張り政治的寓意をもつた作で、當然政治小說と見て可い。

此の作は大體明治二十九年即ち一八九六年を中心の出來事となつてゐるが、作者は別に未來小說を作る意があつた

のではない、たゞ自家に多少の寓意があつた上、空想を十分に驅使する必要から、時代を未來めかした方が好都合だつたからであらう。舞臺を廣くとつてある割合に筋書は簡單だが、相當の波瀾がある。

舊幕旗下の士八島發達なるものは、時政に慨する餘り激進黨なるものを組織し、壯士を煽動して内閣大臣を恐嚇し、施政の改良を目ざすが、事成らずして國事犯に問はれ、孤島に憤死する。發達に三子があり、長子健夫は海軍大尉、次子塊一は地質地理學者で兼ねて政治に興味をもち、三子文三は理財家で法學博士であるが外交問題に關心してゐる。明治二十八年の十一月天長節、健夫が、外祖母藤野の許に海外渡航の暇乞に來て再從妹たる吉住政道男爵の一女愛子と會ひ、藤野の取りなしで許婚の約を新にするのが抑々の發端である。吉住男は八島と妻同志緣者なのに、激進黨暴發の際高等裁判長として國法を曲げず、八島を孤島に流した人であるが、此の爲め兩家の私交を害したのを心苦しく思ひ、藤野の乞ひを容れて健夫と愛子の婚約を許す。

十二月健夫は二弟と共に佛船アマゾネ號で出帆する。健夫は海軍見學、塊一は露都に地理學研究、文三は歐洲に文物制度調査といふ觸れ込みである。塊一は長崎から別れて浦鹽斯德に向ひ、健夫と文三はそのまゝ西航する。然るに、翌二十九年一月一日、アマゾネ號は星嘉坡とマラッカの間で意外な暗礁に觸れて難船する。意外なとはアマゾネ號の航海中、マレイ群島中の某所に恐るべき大規模な火山爆發があつて、海岸線や島や暗礁などの位地に變化が出來てゐたからである。

船はマラッカに達する見込みがなく、且つ沈沒も時間の問題となつたので、船客一同は端艇で去る。健夫は日本海軍軍人の名譽の爲め船員と共に止まる。今一人、露國の商人コスドレッフも前に海軍にゐたといふので、船員と生死を共にすることになる。

文三は健夫から强ひられて端艇で去つたが、波のためその端艇が投げ出されてマラッカ近くの一孤島に漂着する、

數日の後、土人に見つかり酋長の前に連れて行かれるが、酋長は何とも判きかね、マラッカ島王に報告する。文三は此の間にこの島に流落してゐる一佳人豐香英と知り合ふ、香英は支那の人買ひに幼き折連れて來られた日本女性なのである。長じて亞丁に賣られ、星嘉坡に賣られ、遂にこの孤島の酋長に購はれたのであるが、清操を固く持して汚さない。(香英は藤野の實の孫なことは暗示されてゐる)。香英と文三の密談を知つた酋長は嫉妬の餘、二人を罪人と宣言して星嘉坡の政廳に送る。だが酋長の豫期に違ひ、政廳では二人を無罪にする、のみならず、警察長某は妻の好みから日本贔屓であつたので二人ともその家庭に客遇される。此の警察長は元來が地質學者であつて、文三に例の大爆發のことを語つたので、始めて難船の原因が判明する。文三は難船の事を諸方に出し、香英を警察長夫人に托して、所志通り渡英する。

浦鹽へ着いた塊一は種々準備の後雪のシベリアを横斷して露都に向ふ。シベリア旅行中、地理地質の觀察もしたが、秘かに虛無黨の流人と時勢を慷慨したことが幾夜もあつた。露都に着いた彼は、大學では地理學を學びつゝ圖書館では政治を研究する。彼は露國なるものに恐ろしい底力があることを認めるが、人民に參政の自由がないのが國力發展の第一障碍だと看破する。彼は圖書館で一人の露國佳人と相知つたが、それが意外にもコズドレッフの娘アデリナン孃であつた。塊一は莫斯科へ赴いて地理學の大試驗に參加する。その途中虛無黨の一味が鐵道を爆破して皇帝を暗殺せんとし、失敗した風說を聞く。試驗が終つた彼は、クリミヤに歸省するア孃に伴はれてその家を訪ふた。孃の許嫁の夫バジョールが此の鐵道爆破に關係して銃殺された事が世間に知れたので、母親が心配して呼び寄せたので、ある。塊一はクリミヤから小亞細亞へも渡る遊意が動いてゐたが、一日新聞を見て、兄弟の遭難を知り、急いで搜索に向はうとする。ア孃も父の安否を氣遣ひ、同行する。この時は二人は相許す仲となつてゐる。ところがチデッサで、二人は虛無黨の嫌疑をうけて捕はれてしまふ。

健夫はといふと、本船と運命を共にしつゝ漂流してゐたが、風の都合で逆に東南に流し戻され、バンダ海邊を浮んでゐるうちに、或る孤島に日章旗がたてゝあるのを認め、單身探險に上陸する、ところが端艇と本船の間の綱が切れて孤島に取殘される。健夫は土人を見つけて聞くと、此の島はミカドのものであり吾等は日本人だと答へる。島の首都めくミヤコにつくと、一人の日本婦人が出迎へて、詳しい物語に健夫の好奇心を滿足させる。島の名を日の出島といふ、この島は明治二十年、もとの畝傍艦乘組の士官磯野某とこの都で沖津某が征服したもので、婦人は磯野の妻であつた。磯野と沖津は去る年今一つの屬島に造船所を設けて大洋を渡る帆船を建造し、本國や濠洲と交通せんと目論んでゐたが、例の大爆發と共に島もろとも行衛不明となつた。この婦人は琉球八重山の島主の女で龜といふ、父は企業心の強い人で臺灣から南洋へかけて貿易に出た途次、この島に寄港して土人に殺され、彼女一人磯野に救はれたのである。健夫は磯野等の志を壯とし、土人に宣言して自らこの島の新太守となり、遺志をついで、南洋諸島中に日本の領土を開拓しようとする。龜女は日を經て歸らぬ夫のことも忘れぬが、新太守の雄々しい姿を忘れかねるやうになる。然し末遂げぬ戀と思つて諦めてしまふ。

その頃日本では或る外交問題で臨時議會が開かれ、開戰非開戰の議論が沸騰してゐた。それはといふと、此の年の春、日本の一貿易船が南洋マレイ群島中の一無名島で土人のため掠奪燒却された上、船員が殺害された。然るに同島は地理上荷蘭(おらんだ)領なので同國に談判したところ、極めて冷淡な返答であつた。それで、今同島土人を膺懲する師を起すかいなかゞ大問題になつてゐたわけである。

折から選擧區からの招電で至急歸朝した文三は、選擧の期には遲れたが、折からの議會の形勢に慨嘆して、起つて國權上外交上から開戰の有利について大演説を試みた、それが大に輿論を刺戟して、忽ち遠征軍派遣費が可決され、軍艦その他船舶六隻に軍兵軍需を載せて南洋に向つた。文三も同行した。

荷蘭のバタビヤ殖民政府は、日本軍遠征の報を得、これに先じて問題の無名島を占據して置くつもりで艦隊を出す。島に近づくと意外にも、はや日章旗が飜つて砲臺の防備嚴かである。蘭艦は土人の所爲と見て、威嚇的に砲撃したが、島側でも應戰して屈せぬ。問題の無名島は今は日の出島太守八島健夫に征服されて朝日島の名を帶びてゐるものであつた。彼は勝敗決せぬうちに、やがて日本の遠征軍が到着して蘭艦を追拂ひ島に上陸する。健夫は總督に島狀一切を報告し、日の出島へも案內し、二島が何國の版圖にも屬しない所から日本領と宣言する。日の出島で始めて健夫、塊一、文三が再會する。アデリナンも父のコスドレッフと會つて喜ぶ（コスドレッフは先に健夫の行方を搜索の爲め日の出島に上陸したもの）。塊一とアデリナンはヲデッサで百方辯疏の末漸く許され、佛國の搜索船に載せてもらつて尋ねて來たのである。

健夫と文三は總督の許可を得て本國へ報告に立ち歸り、改めて政府から健夫は兩島軍事總督に、文三は兩島行政太守に任ぜられ、更に健夫は愛子(やす)を、文三は阿英を新夫人として携へて渡島し、兩島の經營に當る。塊一もアデリナンと結婚し、島に永住して殖產貿易に盡力する。

この小說は敢て寓意小說といふではないが、幾分の寓意をもつてゐるので、先づその解明から始めよう。八島發達とは何の意か、大八洲なる日本の發達伸張の意である。吉住政道は明治新政府を代表するもの、その何れもと伯叔の緣ある楞(あふち)の命婦(みやうぶ)（山邊藤野）は二千五百年來綿々不斷の日本國、殊に明治に對していへば舊日本を象徵したものであらう。八島の三子は一は軍人、一は科學者で政治家、一は理財家で外交家であるが、此の三人は新日本の以上それぞれの方面を代表するものと解すべきである。吉住の女愛子は愛國心を象徵する。これを概括して上の梗概に照して語り直すと、明治の初め官民の政治鬪爭に終始して、兩者の間に深い溝が出來たが、表面上慘敗したと見えた民間の發

達は駸々たるものがあつて、軍事、學術、政治、經濟、外交ともに有爲實力の士が輩出する。やがて國會開設となるや、時々二千五百年の古い歷史をもつ舊國家感情とが愛國心に訴へて兩者を和睦させ、一致して日本の新なる國家的發展を測る方にスタートさせる、といふことになる。これは勿論當時の現勢そのまゝではない、たゞ南翠の理想に止まつてはゐるのだが、然し全然現勢と無緣な理想ではなかつた。兎もあれ、この小說を評價するには、これだけの前置を心得てゐなくてはならぬ。

此の小說の中心題目は國權擴張、海外發展である。從來の民權主張に比し、本來なら甚だ飛躍的な唐突な氣がする筈であるが、以上の如き前置的寓意が伏せてあるので、幾分これを免れてゐるのみならず、却つて從來の民權主張も國權擴張の準備であるかの印象を與へてゐる。さうして篇中に於いてこの國權主義乃至國權擴張を公然口にしてゐるのが、理財家兼外交家の八島文三であるのは、甚だ面白いところである。彼は星嘉坡の警察長英人ジョンソンに向つてかういつてゐる、——

拙者は外形の裝飾を見て目を樂しませんが爲めに航港するものにあらず制度文物は人情習慣によりて多少の異同あるものなれば拙者は歐洲の制度文物を調査して直ちに之れを日本帝國の風俗習慣の上に應用せしめんとは思はぬぞかし拙者は日本帝國の地位をして貴國と對抗せしめ東洋に於て英國と同一の威力を握らんと欲するものなり西洋には數千年來因襲したる風俗習慣あるべし日本にても數千年來固有の習慣ありて苟にも日本人たらんものには其の精神なきものあらぬまでに貴重なるものとなり居れり拙者は此の習慣を喜ぶ者なれば勤めて此の元氣を振作して遠く西洋に對する外交政略の基本となすべし（初、上卷七〇—七一頁）

東洋に於いて英國と對抗し同一の威力を握らうといふ理想は、明治三十年前後を豫想したものとしては他奇のないものだが、漸く條約改正に本氣に手を付け始めた二十年當時としては可成り大膽な發言であつたらう。なほ文三の國權

第一主義は、無名島征討問題で臨時議會が非開戰說に傾いた時に憤慨して成した大演說の一部に最も好く出てゐる。

文三は慨然として切齒なし我れ若し歸朝の期の早くして國會に入るを得たらんにはと扼腕すれども（中略）如何ともも詮方なく切りに議員の柔弱にして國權の何たるを知らず私しに政府に反對するを本務とすることを擂ほりしが今は中々に忍び難く自ら奮つて輿論を一變せしむべき演說を爲したり法律博士財政學士の名を以て府下第一の廣堂を演場となし「現國會は賣國の臣なり」といへる論題を掲げ（中略）先づ最初に自分の學位姓名を告げ自分は日本に生れて日本に死するものなり自分は日本を家とし國とする者なれば純粹なる日本人なり忠良なる日本臣民なり故に日本國の爲めに忠愛の言語を爲して日本國を利せんとすといへる三段法を說き始めたり（下巻九二―九三頁）

南翠がこの作で暗示說示してゐる國權擴張策は要約すると、北守南進の語で盡きるらしい。北守とは露と和親し相提携することをいふ、それはコスドレッフ父子の八島兄弟に對する關係で暗示されてゐる。勿論露國の野心の恐るべきこと、又露にはこの野心を遂行するに足る實力あることは分つてゐるが、人民に參政の自由がなく上下相鬪つてゐる間、露國はその實力を十分外に伸すことが出來ない。且つ露國の利害は淸國英國と相衝突する。日淸は現在の大勢では兩立を許されぬ、早晩干戈に相見えるものとせば、早く露と結んでその備へをなすのは特策であらう。塊一をして露國に留學せしめたのは蓋し諷するところがある。かくて北守すると共に、英佛米獨列强が東洋に着眼してゐるうち、殊に英が威を振はぬうちに、早く南洋に進出せよといふのである。健夫の兩島經營、政府の南洋派遣軍等は讀者にかゝるイデオロギイを把持させるために外ならない。北守の方は、尾崎行雄の『新日本』（巻二、二十年三月）中の外交論と似たところがあるが、南進の方面は何によつて立てた議論か。志賀矧川の『南洋時事』（二十年四月）あたりに依つたものか。單に貿易の點からだけでも、今後は南洋貿易を重視すべきで、英國の富源は印度と濠洲にある（下巻一三〇頁）云々の口調は、これに似てゐる。〔然し何れにしてもこの北守南進論が勿論南翠の獨創に出でたものでな

く、既に一部の輿論にかくの如きものがあつたのであり、南翠はこれに共鳴し、この作をかりて同じ思想を宣傳したに過ぎない。この點は注意すべきであらう。

南翠は讀者をして南洋なるものに興味をもたせるため、彼として出來得る限りの工夫や知識を用ゐた。大衆作家たる彼は、先づ事件の點で、世人のイデオロギイを南洋に結びつけてゐるあらゆる事件を利用した。洋船の沈沒、海島の大爆發、畝傍艦の行方、土人の殺掠、當時としては何れも世人の記憶に新しい事件のみであつた。佛國メッサゼリ・マリチーム社のメンザレー號及び同アナデヤ號が上海附近で沈沒したのは明治二十年五月のことであるが、この頃又、十年前佛國某汽船が新嘉坡出港の後行衛知ずなり、南洋中にて世人の今迄知らざる暗礁に觸れて沈沒したといふ風說があつた。海島の大爆發は、明治十六年八月の有名なクラカトア火山爆發をモデルにしたものであらうが、別に十九年四月十一日の東京日々の記事によれば南太平洋トンガ島附近に新島湧出云々の記事がある。これ等も參考になつたらう。畝傍艦の行方不明は、十九年末から二十年にかけて世人の耳目を聳動した事件であり、その眞相は今日でも分からないが、當時は大風に遭つて南洋に漂流難破したものであらうといふ說が專ら行はれた。南翠が此の好題目を逸しなかつたのは、流石だといひ得る。南洋の無名島の土人が日本船を掠奪燒棄し、船員を虐殺するといふ事件は、この作だけでなく、『綠簑談』の續篇中にも出て來るが（因みに、『綠簑談』續篇は二十一年の作で、この作より一年後）、これも當時實在した怪事件であつた。明治十七年三月英國の捕鯨船「エーダ」號がマーシャル群島中のラエ島中で日本人虐殺の形跡を發見し、段々探査したところ、數月前六名の日本人を載せた船が該島に漂着したのを、土人が共謀してその日本人を殺し、貨物を奪ひ、船には石油をかけて燒棄したことが判明した。「エーダ」號は同七月横濱に入港し、神奈川縣廳を經て外務省にこの事を申し出たので、外務省では後藤猛太郎鈴木經勳の二人をラエ島に派遣して眞相を調査せしめ、同時にマーシャル群島の島形を詳しく測量せしめた。外務省としてはそれ以上何等の處分

も講じなかつたが(條約改正談判の始まるころなので)、間もなく同群島はドイツの占有するところとなつた。これも亦當時內外人の注目した問題であつたのである。

更に風物の點でも能ふ限り正確に興味をひくやうに描いてゐる。南洋諸地方の地理風俗は勿論、日の出、朝日兩島の地理地形なども、何に依つたものか、緯度經度から詳しくやゝ科學的に說いてゐる。時々例の衒學癖で、熱帶植物などの講釋をやつてゐるのは愛嬌がある。殊に兩島の價値を工業的物資の有無から觀察し、鐵、石炭等の含有を力說し、又永住可能の點も考慮してゐる。たゞ殖民策に土人との雜婚を奬勵するは可としても、一夫多妻主義に至つては、封建的イデオロギイを露出したものである。

此の作を小說として見れば、南翠が折角の努力に係らず、成功したものといへない。この作は本來架空のロマンスなのであるが、南翠はこれに寫實的生命を與へるべく懸命に努力した。だがその懸命の努力が、總體として盛澤山の結果となり、生々しい知識の寄木細工めく效果を生じて、失敗の一原因をつくつてゐる。舞臺を廣くしたのは、いはゆる規模雄大でいゝが、然し纏りがついてゐない。これは露國と南洋を無理に一卷につめ込んだからで、南翠は勿論南洋進出を力說したかつたのではあらうが、塊一の露國行は何の爲めか今少し意義を明瞭にしないと、全然蛇足に終る。八島兄第その他の人物に寓意的な味ひをもたせたのは當時の讀者に手際と喝采されても、その代り此等の人物を幾分人形めいたものにしてしまふ。難船と海島大爆發と結付けるのは、如何に割引しても牽强の不自然である。波瀾重疊もその通り、いか程積み上げてみせたつもりでも、たゞ人爲的に陳列されたものといふ印象しかうけ取れない。畝傍艦の風說を利用したのはいゝし、この點で、南翠は押川春浪等海洋冒險小說家の先輩と見ても然る可きであるが、風說だけを利用して、同艦の行方を描いてみせなかつたのは狡猾な手法ともいへる。塊一とアデリナンの交際は

側の啓蒙的文化主義で、ブルヂョア社會の謳歌とも見られる。

要するに、この作の價値は、南洋進出を論じた新手の宣傳小說たる點にかゝつてゐる、この點を別にすると決して成功したものではない。

南翠の改進黨的イデオロギイは、この作にも散見してゐる。東洋の英國たらんとするといふ理想は勿論、露國が實力を伸せぬは人民に參政の權なく上下交も相鬩いてゐるためだとか、然し虛無黨流の急激な更革は理に於て爲し難い(下卷四頁)、八島一家の者が兩島の守となり土民に自由を與へて父の靈を慰める(下卷一三一頁)など、皆これの現れであらう。然し政治小說としての此の作の興味は、明治二十年前後のブルヂョア日本膨脹の姿を髣髴たらしめてゐる點にある。當時のブルヂョアジイの發展が極めて急で、此の頃早くも海外に市場を求むべく、國際資本主義と對抗する運命に置かれつゝあつた。國權擴張とは必竟この運命を開くべき呪文であり、當時盛に揚げられた海軍擴張、條約改正、外交刷新等の叫びは皆此の呪文を言ひ換へたものに外ならない。八島發達はブルヂョア日本の發達であり、その三子はブルヂョア日本の發達に肝心な軍備、政治、外交を代表し、科學、經濟を兼ねてゐる、それが國權擴張の名の下に海外市場を南洋に求めようといふ。勿論單なる一小說家の理想に過ぎなかつたとはいへ、この理想と燃え立たした若いブルヂョア日本の颯爽たる姿が、朦朧とながらそこに窺はれるのである。

五

明治十九年、二十年で全盛期に達した南翠は二十一年以後に於いても新興文壇の大家として盛名を持續はしてゐるが、政治小說家としては早くも漸衰期に入つたものといつて可い。二十一年度の如き、政治小說乃至準政治小說の作

が四種も公にされてゐるので、却つて全盛期にあるものゝ如く見えるが、これは然し表面上のことであつて、內容的には旣に漸衰期に屬するものといふべきである。況んや二十二年度以下はいふに足らない。だがこれは政治小說家としてのことで、一般小說家としての南翠は、二十一年から二十二年にかけての方が却つて文壇的勢威を張つてゐる。これは彼の舊著の新刊、殊に著作集『こぼれ松葉』の刊行が、丁度此の二年間に企てられたことが與つて力がある。二十三年以後に於いても、文壇的には第一流大家視されてゐたが、然し南翠自身にはその位地を維持する氣力精魄がもうなかつた。さうして何時の間にか老大家と敬遠され、二十五年に大阪朝日に入社すると共に、新興文壇に於ける生命を全く失つてしまつた。

漸衰期に於いて、私は明治二十一年から二十五年（事實は二十三年）までの南翠政治小說を扱ふつもりである。此の期に於いて彼は文壇の大家と持上げられ、自らも大家をもつて任じて、頻りに文學の方にのみ深入りしてゐるうち、何時とはなしに政治上の興味を失つて來た。元來が南翠の政治的興味は本質的なものではなく、好新好奇的な氣持から發してゐたものであるから、かうなると剝げ易い。且つ又、政治小說家としては事實上後輩視すべき柴東海、末廣鐵腸等の政治小說が天下の讀書界を風靡して來て、從來第一人者をもつて自ら任じてゐた彼の自信も何時とはなく動く。此の際、新に彼の眼を惹いたのは、春の屋おぼろの掲げた寫實小說の新旗幟であつた。政治小說に於いて末廣等に一籌を輸したと感じた彼は、忽ち從來の虛名と惰力をこの新な野に應用して、自己の新境土を開拓しようとかかつた。彼はその著作力の强半をこの方に傾けると共に、政治小說家の第一人者といふ理想を拋擲してしまつた。

かくて二十一年以後の南翠の政治小說には、概して前期程の熱も意氣込みも政治的理想もないものになつてゐる。全然鬪爭意識のない、政界裏面描破を中心にした政治的寫實小說ともいふべきものになつてゐる。此の種の政治小說が一種の暴露的興味を與へることは事實であるが、何としても漸衰的傾向を免れない。以下この期の政治小說的作品

を擧げてみよう。

○社會象幻うつし繪
　明治二十一年一月二十四日—二月十九日、改進新聞、同年五月刊

○大義高潔唐　松　操
　明治二十一年四月二十一日以降、改進新聞、同二十二年七月刊

○隱　君　子
　明治二十一年八月、改進新聞。同二十二年八月刊

○萬　春　樂
　明治二十三年春か、改進新聞。同二十三年七—八月刊

○新　編　破　魔　弓
　明治二十三年一月、國民之友第六九號附錄

○罔　　兩
　明治二十四年一月、國民之友第百〇五號附錄

○魔　風　扇
　明治二十四年九月一日以後、經綸第十三號以下

尙ほ二十一年の條に『絛篗談』の續篇が入るべきであるが、前篇の條に入れたので、こゝでは省いて置く。

『唐　松　操』

明治十九年八月九日、時の大審院長玉乃世履は突然自殺した。年六十二。この事件は突然だけに大に世人を驚かした。自殺の原因は今なほ不明であるが、當時表面では、久しく惱んでゐた腦病のため一時的に精神錯亂を來したのだとされた。然し精神錯亂でなかつたことは、自殺前の擧動に照して事實である。そこで、裏面の推測が種々なされたが、その最も眞消息を捉んだらしく傳へられたのは、彼が不圖或る種のファショ的陰謀に捲き込まれ、恩と義の板挾みとなつて刄に伏したものだといふことである。南翠はこの風說に基づいて想像的鋪張を加へ、挿話的事件を工夫して『唐松操』の一篇をなした。

南翠の同鄕人で多年南翠に親炙した岡田翠雨氏の語るところによると、(一)この材料を南翠に提供したのは、岡田氏であつたといふ。

「これは大審院長として令名かくれなき玉乃世履が急死した事を資料としたもので、其主人公唐松は卽ち玉乃に擬したのである。其ころは所謂鹿鳴館時代であつて、時の宰相伊藤博文公は、歐米の文化に心醉したのか、同化の好意を衒ふ爲めか、無暗に歐風米俗を模倣して、頻りに遊宴や舞踏會や假裝會を催した(中略)。

予は一日同鄕の先輩鐵腸末廣重恭氏を芝區田村町の邸に訪ねると、其雜談中『君は大審院長の玉乃が急死した理由を知つてゐるか。さうか。知らないのか　そんなら話さう、尤もこれは虛實不確定だから確信は出來ないが、近頃伊藤があの通りの飮宴政策をやつてゐるのを見て、谷干城、曾我祐準、三浦梧樓などの將官達が、伊藤が國體を辱かしむる者だといつて憤慨し、遂に彼奴を生かして置いてはいけないといふ極論に到達し、鹿鳴館の夜會の時、相圖を定めて、不意に燈火を消してしまひ、闇黑に乘じて、よつてたかつて伊藤を絞め殺さうといふ密謀を決したのだ。それをどうしたのか、玉乃が漏れ聞いたのだ。そして又、玉乃が漏れ聞いたといふ事を將官達が知つたものだから、大事去れりと愕いて、或る將官は直ちに玉乃に迫つて、此の陰謀を伊藤に密告したら、貴樣も唯は置かない

ぞと威嚇したのだ。處が玉乃は伊藤のお蔭で、今日の榮位を贏ち得た程の間柄だから、假令其身は八裂きにせられても密告せずにはゐられない。けれども一面將官達にも捨て難い情誼があるので、密告しては將官達にすまないといふ苦境に陷入つた。それでいよ〳〵玉乃は進退谷まつて遂に自殺したといふ事だ。尤も伊藤には書面を以てそれをなく諷箴を與へたといふ事だ』と話された。

予は之を聞いて、かゝる聖代にもかゝる珍事のありけるかと瞠目せずには居られなかつた。予は日夕南翠先生の許に出入してゐる事ゆゑ、其の夜直ぐに駈けつけて、こんな面白い話を聞きました、と手柄顏に注進に及んだ。すると其頃の先生は、時事問題を捉へては、小說の主義にするのを得意にしてゐられたから『こりやア面白い、假令嘘でもいゝから書いて見よう』と日ならず起稿されたのが『唐松操』であつた。（昭、四、七、明治文化五ノ七）

この引用によつて『唐松操』の成立が明白にされたばかりではなく、その內容も略ぼ說示されてゐるので、此の小說の概念は以上の文章から得られる。私は更に作に卽して語らう。

『唐松操』の一篇は大體唐松操なる人物の傳記を小說化したものであるが、南翠はたゞ傳記的事實を中心にしたのでは無味乾燥になるべきを恐れてか、種々「筋」を工夫して變化を作らうと試みた。卽ちこの作の前半はかゝる「筋」の變化から成つてゐるのであるが、先づ發端は唐松が前名高木綠といつて京都邊に流浪してゐたころ、愛宕山の山塞に水戶の天狗黨の殘黨とあひ、その一子を托される話がある。その次は一場の探偵小說で、事は唐松の愛人子日屋小松に絡まる誘拐事件である。簡單にいふと、唐松の命で小松を大阪から東京へ迎へやうとしてやつた飛脚が惡者三平に氣取られ、小松は娘のお琴と共に東京へ誘拐されて來。唐松の正眞の使者は惡者に殺される。小松母子は危く賣飛ばされるところであつたが、靜波某の力で惡者の巧みが露見し、唐松は惡者を制敗し、小松母子と再會する。この間に唐松の出身、履歷、言行などが織り込まれてあるのはいふまでもない。その中で注意すべきは伊富廣章（伊藤博文）

との關係であるが、それも今簡單に、唐松が生國の岩國から萩へ遊學中、甚だ伊富に恩をうけたこと、元治の亂に伊富に救はれたこと、明治政府に入つてからも、常に伊富に推擧されて來たことを記憶して置けば足りやう。

後半に至つて唐松の傳記に絡む挿話めく横筋は、養子綠と養女お千代の情話、唐松の一女お琴と抱へ馬丁德三の密通などの顚末であるが、然し此等の挿話は、本質的にこの小說の眼目に關係があるのではない。たゞその何れもの處分に於いて、又も伊富の世話になつたことは事實である。從つて「其の恩其の義共に高くして恰かも操の伊富に事ふること師の如く父の如く兄の如き敬愛を呈せり」だが、――

然とて操の高潔なる決して之に阿ねることなく公私の別を判然と分ちて職に臨んでは假令伊富に不利なる事柄とても斷じて之れを曲庇せず高明正大を以て其の心と爲せし（第十五、一五七頁）

唐松の公明正大の例をいへば、伊富は夙に婚姻政策によつて一種の長閥を作つて薩閥に當らうとしたが、唐松は事に托して應じなかつたことがある。

此の小說の政治的興味は、第十八以下、卽ち唐松の傳が明治十六年に入つて以後の部分にある。唐松は、「其の春秋の積るとともに其の身も連りに累遷して世にも尊き大判官の席を占むべき身と」なつてゐたが、「此時に當りて世に隱れなき一大事變の出來して唐松の身を苦しむるには」至つた。その一大事變とは何か、小說中にはたゞ「專ら政治上の機密に關して大なる激動を生じたるもの」とだけいつてあるが、これは明治十五年から十六年にかけて世間を騷した有名な福島事件を指すのである。南翠はこゝで此の事變の發生するまでの官民の政爭を撮要してゐるが、一寸手際よく出來てゐる。然し要するに――

政府は命令の權と多くの勁勇なる兵士とを持つものなり康安を維持する爲めには如何やうなる人と雖ども之を窘して禍根を斷つに猶豫せざるべし（第十八）

である、從つて——

此の人民の代表者が檄を八方に傳へて抵抗の意を示し時に或は脅迫の擧動あるを認めては今は猶豫するに遑なく之れを目して禍亂を煽し政府を壞亂せんと謀るものなりと斷定し直ちに多少の黨與を縛して之れを獄に投じ法律の命令を以て夫々所分を了したり云々（第十八）

これは十六年一月のことであつたが、主犯者年は地方裁判に宣告すべき權理がないからこれを大裁判官たる唐松操の手に附することゝなつた（卽ち高等法院の構成）。唐松は直ちにこれが理害を判して公明の裁判を與へんとしたが、如何せん司法權が全く行政府内から分離獨立してゐないので、唐松の意を直ちに判定として宣告するに多大な苦心を要した。然し唐松は、千思萬考の末、斷乎として所信を曲げず、右の事變の重立つた者のみを國事重罪中の最輕刑に處し、附和隨從した連中は全部無罪放免とした。

唐松の判決は法曹社會にも在野政黨にも滿足を與へ、被告にも得心せしめた。然し最初から陰に陽に唐松に壓迫を加へてゐた伊富は、輿論に阿ねたといふので唐松を恨み、二人は互ひに遠慮をしあふ仲になつた。だが陛下は唐松の苦勞を嘉して三十日の慰勞休暇を賜うたので、唐松は家を擧げて、野州鹽原の溫泉に赴いて疲れを慰めた。

唐松はこゝでかねて知り合ひの長會我部祐親（會我祐準）、片桐義且（三浦梧樓）の兩將軍と會つた、さうして此の時兩將軍と會飮中、容易ならぬ密謀を打ち明けられたのである。密謀の要領は（長會我部の語をかりる）、——

世の姦雄といふものは決して大功を爲し得るものではないぞ小康を貪て人心を收攬した上私利に營々たる者ぢや若し此の姦雄の奸略の增長した時は吾輩軍人は護國の義務を以て必らず之れを鋤戮せんではならぬ今日は既に形跡の露はれんとする日ぢや現に先生（唐松）が裁判した如き人物の蜂起するも皆な之れ姦雄自ら招くの禍ひで彼れ日本帝國を如何せんとするぞ吾輩の同盟は漸を以て增し漸を以て固い若し吾輩にして事を爲さんとすれば軍隊の過半は吾

輩の爲めに彼等に砲口を向けて現に某總督(小松宮をさすか)の如きも吾輩の盟主となるべき密約が成立てある(第十九)

といふのである。姦雄とは伊富を指す。唐松は大に驚いたが、兎もかく表面同意の風をしつゝ、一應伊富に忠告するからそれまで大事決行を待つて呉れといふ。唐松は歸京の後伊富に會つて、國會の開けるまで官吏を監督する彈正臺の如き役を設けよといひ、暗に諷するところがあるが、伯富は、政府の事は局外者の疑義を容れるところではないといつて斥け、且つ唐松を、人望の奴隷となつて輿論に泥醉したかといつて嘲ける。舞臺が轉じて、明治十八年天長節(十一月三日)の夜、延遼館なる外務大臣の夜會に於ける兩將軍及び唐松の密議となる。片桐は是非とも今夜中に非常手段を取らうといふ。三人とも内閣大臣の歐化主義には可成り憤慨してゐる。

未だ舞の御稽古には早いぞ今此の人民が何ういふ生活をして居る國が何ういふ情勢(ありさま)になつて居る外國からは小兒の如く取扱はれて居る夫に隣國までが馬鹿にして……馬鹿にされるから否ん……一朝有事の日には何うする積りぢや吾輩軍人と雖も必勝を期す事も出來んぞ只一死以て國に殉ずるのみぢや死骸を積んで壘壁を築く分の事ぢや民力休養國本强盛といふのは今日の急務ぢや冗費冗員を節減して踏りをする手間で鐵道の世話でもするが宜いさ……ぢやが唐松君、此の懶眠を醒すには到底先生の手段では醒めやせんぞ(第二十回二三八頁)

然し此の夜の決行は長曾我部の考へで延期された。舞臺は更に一轉して、明治十九年に入る。伊富の歐化主義は日一日と甚しい。

我が書きたる想像は巴里の大脂煙畫をそつくら其の儘寫し來りて東京の起繪畫(パノラマ)に宛嵌たるに外ならず全世界第一に位する偉觀壯麗の函庭を縮徉する人物も總て全世界流行の神使たる巴里都人士となさんとせり若し肚裏に潛みて觀察すれば已れ既に赭色碧眼白皙饒舌の人となり了し鼻隆く額廣く丈昂く膣裕き偉丈夫たることを夢るならん憐れむ

べし爾は純然たる黄色人種にして黒毛漆眼矮幹小軀の東洋紳士たることを知らずや巴里にて味ひたるボルドー酒、伯林にて飲みたるライン酒の宿醒は未だ容易に醒めざるか伯林のホテルに結びし有爵政治の壯夢は朝に至つて眞形を現はし巴里の某宮に見たる舞踏會の快夢は夕に至つて實相を現ぜり爾我日本を如何せんとするぞと眉うち顰めて論評する者あり（第二十六、二七五—二七六頁）

此の年三月、伊富に假裝舞踏會を鹿鳴館に催した。兩將軍はいよ〳〵この舞踏會で伊富を暗殺することに決し、唐松にも此の議を打ち明ける。唐松は從來の行掛りからこれに贊成するが、同時に恩人伊富の爲めに死なうと覺悟する、それで當夜は、兩將軍一味の面に當の伊富を刺すに垂んとして、唐松のために長蛇を逸する。さうして間もなく兩將軍が總督といつた方は、海外軍事視察といふ名で洋行させられ、兩將軍は表面は文官を兼る身に榮轉せしめられ、內實は兵權を解かれてしまふ。兩將軍は唐松を訪れて、犬畜生の如く罵倒して去つたが、然し唐松にも覺悟はあつたので、從容と後事を處理して、見事に自殺したのである。床の下には涙血狀といふ伊富宛の諫告書がて殘つゐた。

『唐松操』の內容は大體以上の如きものであるが、南翠はこの作の出來榮に多大の得意を感じたものと見え、單行本の序文で——

余の往年此編を草する時は奇想天外より墜來り名文佳句意に隨つて奔出す嗚呼吾ながら微妙くも仕りしものかな適れうい奴出來したりと稱贊して措かず他人の之を褒めざるを訝り慷えかねて自ら近代の大筆なるべしと誇れり云々

唐松即ち玉乃が政界暗鬪の犧牲となつて自殺したといふ一篇の大趣向は旣に岡田氏の提供したところである以上、南翠の奇想云々とは何をさすか、恐らく前半の探偵綺譚的挿話や後半の家女下僕と奔る一條の情話の如きを意味してゐるものであらう。南翠當時の大衆讀者はかういふものを喝采したかも知れぬが、然し今日ではこの作を讀むとき、か

ゝる手細工があるために却つて大に興味が減殺されるのを覺える、文章の如きも、名文佳句がさうさう澤山織り込まれてゐるやうには見えない、新聞文章の達者さはあるが、特に拾ひ上げて三嘆する程のところはない。たゞ今日なほこの作に一讀の暇を惜ませぬのは、矢張り當時の歐化主義の反面に、かういふ政治的暗鬪があつたといふことの政治的興味である。玉乃の死が果してこの作に記されてゐると同じ原因になるものか、又その作中の密謀の如きものが果して形跡があつたことか何うかは、今日から判ぜられず、又今後とも或は判ぜられまいが、然しそれは判ぜられずともよい。我等はこの小說によつて、當時の一部國民の心情に歐化主義が如何に反映してゐたか、一部國民のイデオロギイ內にこれに反抗する政治的暗鬪が醞釀しつゝあつたかといふことを想察出來るが、それでいゝのである。南翠にして『唐松操』を政治小說として生かさうと欲するならば、此の暗鬪を中心にプロットを立てるべきであつたのに、徒らに所謂奇想に捉はれ、通篇その奇想的出來事が主となつた觀があるので、政治小說としては效果的でないものが出來上つてゐる。それにしてもこれに盛られた多少の政治的イデオロギイをもつともつと熱烈に感情的に吐露すべきであつた。將軍連の慷慨に托して南翠自身の氣持を幾分かは見せてあるが、あゝいふ微溫的なものでは、決死的凄氣の潛む當時の政界裏面の空氣が出ない。人物は、唐松の性格は大體よく書けてゐる。根の正直な、腹のあるやゝ保守的な、憂國精神にみちた循吏的人物の輪廓は見える。伊富の一面、人を人臭いとも思はぬ得意の絕頂時代の彼が、唐松に對する言語の端々に出てゐる、たゞ歐化主義を西洋崇拜癖とだけ簡單に片付けずに今少し伊富の腹を探つて描出する方が可い。將軍連の性格も略ぼ出てゐるが、心理的說明を今少し細かに少しないと、何で憤起したか、何で伊富を姦雄といふのか、折角大事を企てる動機が朦朧たるものである。要するに狙ひ處は面白いのだが、奇を弄して狙ひのピントを外したかの觀があり、政治的に熱がない。事件が事件だけに有名な作になつてゐるが、膏の乗つた作ではない。

註（一） 昭和四年七月一日「明治文化」五ノ七號

『社會現象うつし繪』 これは彩幻道人戯著南翠外史删潤となつてゐるが、彩幻道人の南翠たるはいふまでもない。

序に曰く――

東京有レ蟲。其名爲レ困。困之久。不レ知ニ其幾十年一也。化而爲レ獸。其名爲レ暴。暴之積。不レ知ニ其幾百人一也。怒而罵。其聲若ニ燒原之鑼一。是獸也。嚧中レバ則將レ徙ニ於官海一。官海者金池也。彩幻者惡レ怪者也。幻之言曰。暴之徙ニ於官海一也。門拜三千回。阿ニツテ鬚髯一進者九瞞人。去以ニ免職一罷者也。自由也。改進也。議論之以異相分也。生之磊磊其本色邪。志輩而無レ所ニ變移邪。其視レ政也。亦若レ是則已矣。此是壯士稱揚篇之一節也。余同生同體之吾弟彩幻道人。頃者著ニ一書一。曰ニ社會現象幻燈繪一。蓋寫ニ壯士處世之眞態一也。而來請潤ニ色之一。余受而讀レ之。說ニ下宿舍房裡之事一。陰諷ニ於世一。雖ニ意匠不一レ高。文詞不レ絢。亦以有ニ解レ頤之妙一存焉。乃稱揚勇一句以代レ序云爾。

この序でも分かるやうに、この作は一種の諷刺小說であるが、政治小說といふべき程の作物ではない、「壯士處世の眞態を寫し」、「下宿舍房裡の事を說いて陰に世を諷し」たとあるが、下宿屋に於ける當時の壯士の生活を寫し、これに絡んで當時の大事件だつた保安條例退去事件をにほはせ、その間に眞の些少政治的諷刺を加味してあるのみ、政治小說的色彩の極めて薄いものである。然し此の政治的諷刺に幾分かイデオロギイ的根據があるので、準政治小說程度に扱つても、許されるであらう。

時は明治二十年、條約改正の議論に加へて言論出版集會の三大自由の問題が喧しくなり、いはゆる壯士なるものが肩肘張つて横行し示威運動會などを頻りに開いたころのこと、神田小川町の秦野某女の下宿に、高岡某、谷橋某とよぶ二壯士（表面法學生）がゐる。某女に娘二人あり、長をおぎん、次をおやすといふ。高岡は長を狃ひ、谷橋は次を

狃つてゐる。然るに母はおぎんと自己の情人淺妻某の仲を疑ひ、おぎんを奉公に出す。高岡は大に失望したが、今度はおやすを手に入れんとかゝり、暗に谷橋と競爭する。こゝに同宿の一人に瀨川某といふ着實家がゐる、彼は二壯士の如く大言壯語もせず、悲憤慷慨もせず、政治外交を論せず、默々として我が道を步む、銀行家である。二壯士は始めから彼を除け物扱ひをし、彼も亦二壯士に交はらうとしない。二壯士が政治論を挑んでも冷然として時機でないとばかり、應じようとはせぬ。然しおやすの母は夙に瀨川の人物の堅固なのを見込んで、彼におやすを許し、おやすと彼の間には一種の約婚が行はれてゐる。二壯士はこれを知り、憤然として瀨川を暗討にしようとして、却つて瀨川に巧く扱はれる。かくておやすは瀨川と約成り、又おぎんも瀨川の世話で有名な政客小關倫道の後妻となることに定つたが、好事魔多しとやら、折から發布された保安條例のクーデターで、小關も瀨川も退去となる、高岡、谷橋も勿論退去せしめられるが、此の時大言壯語家の魁たる高岡が國事探偵だつたことが分かる。おやすの母は又情人淺妻の犯罪に連坐して捕はれ、一時はおやす一人で途方にくれるが、瀨川はやがて退去を取消されて歸京し、おやすと結婚して後始末をすることになる、おぎんも貞節に小關の病兒を預かつて、三年後を待つことになる、といふのである。

南翠の從來の作品には少ない寫實風な手法で、一寸異つた淡白な味ひであるが、描寫の筆致が珍らしく輕妙振つてゐるので、その諷刺も極めて淺く、やゝもすると讀者に見のがされる恐れがある。然し二壯士が瀨川に政治論を挑む條を細讀すると、南翠の立場とその諷刺とが幾分明瞭に看取される。瀨川が自ら商人だからとて、政治的意見を述べるのを差控へると、胸に一物ある高岡は强いて大言して彼を激さしめようとする。（第六番）

高岡は名に背かぬ鳩胸を突出して小癪な事をといふ顏つきにて肩を怒らし肱を張り口を尖らして膝を進ませ「氣力のない人物ぢや縱令商人ぢやちふて今日政事を談ぜん奴が仕方があるものか（中略）畢竟我が國民は政治に冷淡なること皆な君の樣なものぢやけん天賦の自由が伸張せぬのぢや進取の氣象が乏しいけん政治の進步が鈍いのぢや治

外法權、集會言論の檢束は吾人の甘んじて受くべきものか進んで改革せんでは竟に國家の體面を一新する時はない看給へ都人士は錦衣玉食して浮遊すれども地方の志士は性命財產を抛つて陸續上京するではないか口を箝られ手足を縛られて今にも倒れさうな家に入れられながら默つて居る卑屈な奴があるものか云々（七〇—七一頁）

これに對する瀨川の答へ、——

瀨川は冷然として微笑し「先生は實に憂國の志士です小生如き一商人の共に談ずべき人ではない……だが……今は斃れてのち已といふ時でせうか御說の通り治外法權の爲めに常に外人の專橫を被り條約改正の遲延する爲め今以て稅權も恢復せず集會出版新聞の三條例の爲めに人文本身の二自由を得ることが出來ず不自由極つた世界ではありすが夫々でもモウ三年の辛抱で今屈んで居るのも却て伸る足代ではありますまいか用ひられもせぬ事を知りながら騷ぎ立るのも醉興ではありますまいか小生の考へでは今は優しく內に憂ひ政府が何をするか能く見定めて置いて愈々活動すべき時に共の休養した全力を盡して敵に當るのが妥當の策ではあるまいかと考へます。（中略）小生は卑屈かは知らぬが今は屯田策を守る精神です云々（七一—七二頁）

平に玩味すると、高岡の言は自ら舊時の自由黨壯士の如く、瀨川の答ふるところは、改進黨主義を守るものに似てゐる。さうして南翠の精神が暗に瀨川に贊成してゐるのは、彼としてもとより當然のことであらう。此の意は前出の序文の中にも瞥見してゐる、時の大言壯語者流の當にならぬことを諷した意は、「是獸や噓ゝれば將に官海に從らんとす」云々の以下の數句に見ても明らかである。

要するに保安條例發布直前の世相の諷刺書としては多少の興味があるが、かゝるスケッチ式の寫實描寫は南翠の得意とするものではない。僅に存する政治小說的色彩を取りのけると、平々凡々取柄のない作であるといへやう。たゞ注目すべきは、此の作の大體の空氣から察して、一般世人が政治よりも經濟力の方を重視して來る如き氣味の見えて

ゐることである。これは作者が二壯士及び瀬川に對する態度に照してやゝ明確に感じられるが、生活の經濟的根柢の固い瀬川はそれのない二壯士よりも優越的地位にあり、且つ政治に關係する前に經濟的基礎を養ふといふ瀬川の意見が、經濟的基礎を無視した二壯士の議論よりも重視されてゐる。これは十分注目すべき傾向といはなくてはならぬ。

『隱君子』

『隱君子』は明治二十一年二月大隈伯が外務大臣として出廬して以後、大隈の前任者にして條約改正の失敗者たる井上馨が農商務として再入閣するまでの政界が舞臺となつてゐる、寫實的政治小説で、或る意味で春の屋の『外務大臣』の後篇とも見らるべきものである。その中心は後藤の大同團結運動と井上のいはゆる自治黨運動である。當代の名士をモデルにした人物も多勢出るが、それは後にして、先づ何ういふ小説か語らう。

發端は、廿一年夏の一日新外務大臣菊地伯（大隈）の向島別邸に於ける大園遊會である。盛大な割に餘興の舞踏のないのが目立つ。又在朝の人よりも在野の人々の多いのも特徴である。此の園遊會で、蘇我伯（井上）は、交際界の女王たる星見未亡人を相手に、近頃の心境を語り、條約改正の心事の違つたこと、今に一旗あげるにつき、助力を乞ふ旨告げる。二人の間にはなほ種々政界その他の噂が交されるが、山路伯(後藤)の東北行が一番注意を惹く。

蘇我は、此の春以來自治主義による政界革新の理想を抱き、好んで民間の志士に味方を求め、近々關西地方に遊説してその趣旨を遊説する豫定になつてゐた。蘇我伯の謀將はといふと最近メキメキ賣出した新傾向の某雜誌主筆菊住逸二郎と洋行歸りの學士で新に某御用新聞の社長に納まる筈の鞠子秋彦の二人である。中にも鞠子は殊に親しく、伯の愛女百夜の心をさへ得てゐた。

園遊會の後幾干もなく山路伯は、これも帷幄の士翁屋秋圃香夏好次の二人を隨へて、甲信越より奥羽地方への遊説

に出かけた。伯の遊說の趣旨は大同團結といふにあつたが、舊自由黨の再興運動視するものがまだあつた。事實伯を送迎する人々は舊自由黨が中心であつた。伯は到る處、内外の狀勢を說き日本の前途の容易ならぬを說き、此の難局を打開するには國民の大同團結によるべきを熱心に說いた。この超黨派な大見得には舊自由黨以外の人々も感動し、改進黨、地方ブルヂョアなどと新に味方になる人々も多く出來た。

一方蘇我伯も、星見未亡人に約した如く、關西旅行の途に上つた。未亡人は兼ねての打合せ通り、蘇伯が歸來新政府組織の際に幾分地ならしの役にでも立つやうにと、英伯（伊藤）を訪問してこの事を相談するが、英伯は政府組織には反對する。

蘇我伯は今様西行めく様子で京坂の地を漫遊視察する。その所說は自治論で、眼目は農事の改良と商工の奬勵であり、そのためには人民の自治を必要とすといふのであるが、一部ブルヂョアの外感心するものはない。且つ蘇我と山路の旅行は好對照である。山路に伴ふものは壯士、山路を迎へるは有志で、兎もあれ憂國的氣分があるが、蘇我は美妓を携へ、官憲に保護され、ブルヂョアの饗應をうける、全然遊山氣分である。

山路、蘇我を中心にした政界遊星群の外に、今一つ國粹思想を中心にした一團がある。蘭馨がその代表となつゐてる。此の三團體の謀將鬪士は一面互ひに友好關係にあるので、政爭を以て私交を害せぬやう、温情會といふ社交倶樂部を組織してゐる。星見未亡人の義弟で伊太利歸りの星見承和も入會する。承和は政治を離れた純文學で國家に奉仕しようといふ青年である。

蘭は熱心の餘り、この會でもよく人と衝突する。蘭一派がこの頃主として取上げてゐる問題に高島炭坑坑夫虐待問題であつたが、鞠子や菊作などと此の問題でよく激論した。これは遂に重大な社會問題となり、表面上蘭派の言論の勝利となつたが、有力な某新聞主筆黄草某が、この問題は蘭が騷ぐ程の問題ではない、眞相が違ふといふことを論じ

たので、蘭は大に立腹し、黄草に決鬪を申込む。然し決鬪は、黄草の機轉によつて一場の喜劇に終つた。

決鬪は喜劇に終つたが、長い間續いた蘭家の家庭爭議は遂に悲劇に終り、蘭夫人は親類に預けられた。蘭は妻に對し、社會に對し、又論敵鞠子に對する悶々の惱みに堪へかね、旅に出る。

鞠子は愈々某新聞社長となり、表面獨立自主の態を示して暗に蘇我を助ける。才子多幸で、百夜孃の外に、千代見家の秀子孃の心も得さうになる（この方は然し蘭の親類なので、蘭が邪魔して緣談を壞して了ふ）。秀子の兄宿根、百夜、鞠子秋彥、秀子、この四人の間に艶めいた交渉が展開されさうになる。然しそこまでにならずに落つくところに落つく。

山路伯は遊說から歸つて後、新政府組織の準備として先づ戊子俱樂部をつくつた。壯士も學生も學士も、伯の傘下に集まつた。然し俱樂部の談論は昔日のやうな悲憤慷慨ではない、着實な經濟論貿易論である。伯が自由貿易を唱へると、千代見宿根はケレーの保護說で駁するといふ如きである。宿根の非國粹主義、歐化主義再來論も十分一顧すべきものであらう。

此の頃、廟堂でも國家の形勢の重大なるに悟り、且つ兩伯を在野の政敵とするの不可を感じたが、先づ農商務の缺員に蘇我を入れることにした。蘇我は主義政見に關する條件を提出して、內閣の容るゝところとなり、入閣した。伯の入閣の裏面には英伯の手が動いてゐたことといふまでもない。且つ英伯は又、一面蘇我のやり過ぎを抑へるため、星見未亡人に梶をとることを賴んだ。

蘇我の入閣と前後して、才子佳人の結婚が二組あつた。星見承和（つぎかず）と千代見秀子、鞠子秋彥と蘇我百夜である。

この小說が寫實的であるだけ、その主な出來事にも人物にもモデルがあるのは、前述の通りである。これに關し

て、私は先づ『蘇峯自叙傳』の一節を引用せざるを得ない。『自叙傳』第四十「井上侯と予」の末段にかうある（昭和四年十一月「改造」）

しかも屢々井上侯邸に出入するの止むなきに至つたから、世間からは自然斯く認められ、當時須藤南翠氏が『改進新聞』に掲げたる小説には、予と當時日報社長にして『東京日々』の主筆なる關直彦君を小説中の人物に書込んだと云ふ事であつたが云々

これによると、此の小説のモデル問題は當時から相當有名であつたものであらう。

成る程、德富氏のモデルと關氏のモデルとは評判になつたゞけ極めて容易に指摘され得る、即ち菊住逸二郎は前者である、鞠子秋彦は後者である。又菌は志賀重昂、國粹派は「日本人」の連中を指す。黄草は犬養毅に違ひない。山路伯、即ち後藤の謀將たる香夏好次は大石正已か、翁尾秋圃は菅了法か三宅雪嶺であらう。秋圃英一（梗概には出ない）は明白に瀧本誠一を示してゐる。又在朝在野の貴顯中、蘇我の井上伯であり、菊池の大隈伯であり、英の伊藤伯であることは述べたが、梗概中に出ぬのに、慈童寺伯（黑田清隆）、東籬伯（板垣退助）、金村子（谷干城）などの名がある。

又出來事の點でいへば、外務大臣別邸園遊會も事實、山路の遊説、蘇我の漫遊、皆事實である。山路の大同團結遊説は誰でも知つてゐるが、蘇我即ち井上馨が京阪に漫遊したのも、政治的意味のなくなかつたことは、此の作中に出てゐる通りである。高島炭坑問題及び、これに關する決鬪事件も矢張り事實である。

勿論、以上の人物や出來事も十分想像を雜へて小説中に織り込まれてゐること、いふまでもない。例へば園遊會は事實は四月三十日であり、井上は此の日を以て京阪漫遊に出發した、且つ鞠子即ち關氏は此の時はまだ歸朝してゐない。且つ關氏が井上の娘と結婚したなど、全く南翠の空想に成るものである。又菊住即ち德富氏が井上伯と知り合つ

たのは社交界の女王たる星見未亡人の紹介といふことになつてゐるが、蘇峯氏の語るところによると、同志社寄附問題から知り合つたのである。これは眞の一二例であるが、以て事實と假作の程度を、大體想察することが出來るであらう。

『隱君子』の政治小說としての興味は、二十一年度前半の政局の消息、卽ち一種の暴露的興味である。宣傳的政治小說ではない。二十一年度の政界現象中注目すべきものは、外務大臣の更迭、內閣の更迭（伊藤と黑田の入代り）、種々あるが、何といつても後藤伯の大同團結運動と井上伯の所謂自治黨準備運動が最も世人の視聽を動をした。

運動に着手したのは、この小說では井上伯が幾分後手になつてゐるが、事實は大分先である。井上伯は四月三十日東京を發し、名古屋、岐阜、大津、京都、大阪、各地て土地のブルヂョアジイと接し、商工の奬勵、農事の改良を說き、その前提として地方自治の圓滿發達を希望した。（六月十七日歸京）。井上伯は、條約改正失敗の名をこの運動で回復するつもりであつたか何うか、從來になく熱心に奔走した。世評では井上系の官吏が中心となり、井上系の實業家が兵糧方となり、地方ブルヂョアジイを連繫して一新黨を起すつもりだと取沙汰した。井上伯の運動は七月農商務大臣として入閣したので、一時中止の形となつたが、十月に入つて自治制研究會といふものに變形して現れた。然し實業家連の氣乘薄から遂に明白な政黨的形態はとらずにやんだ。

後藤伯の大同團結運動は、三宅雪嶺の所謂「明治年間に於ける空前絕後の離れ業」（二）であり、事件の本質は一後藤象二郞の地方遊說といふだけであるが、時勢と人物と相俟ち、一擧手一投足が世人の耳目を聳動した。七月五日東京を發し、信越から奧羽に入り、八月二十二日歸京した。演說三十一回、演說不可能の場合には旅館で談話して有志を激勵した。後藤伯のスローガンは國家の危急存亡と大同團結であり、自由改進の大同團結、紳士壯士の大同團結を說いたが主として動いたのは、舊自由黨員であり、改進黨は、大隈在朝のため、餘り蹈らなかつた。

南翠はこの兩運動の樂屋を比較的巧みに覗かしてゐる。自治黨に關しては、第一回に於いて早くも、星見末亡人に對する蘇我伯の談話で、伯に「一旗幟」を飜へす決意があるのと、その運動の要領を知ることが出來る。
自分の主義は異日公然と告げる機會もありますが先づ摘要んだ處が通商貿易を盛んにして殖產興業の富源を開き兵權若くは哲學上の空理を排して實利主義卽ち平民主義の社會にしようとする精神です云々
更に第八回に至ると、吾等は、漫遊中の蘇我伯が最明寺氣取りで民情を察し、淀川の三十石船の乘客に諄々とその主義を說くところを聞く。卽ち農事改良、商工奬勵の持說である。然し彼の說に首肯する聽者は少ない。百姓は不景氣を呟やく、壯士は條約改正の失敗と三大自由（言論出版集會）のないのを悲憤する、商人だけは何うやら贊意をみせるが、これとて政府と資本閥の巨頭と馴れ合ひ商法をするのを恨む。此の一章は、時代を活寫せる點で出色の出來といつて可い。

これに對して、第六回は山路伯一行の新潟に於ける活動を細寫したもの、これも十分讀者に當時の空氣を傳へる。伯の演說が、日本の危急存亡、西伯利亞鐵道の布設、巴奈馬運河の開堀云々から大同團結を說くところは、蓋し實寫に近い。席上伯が改進黨も解けたといつたに對して改進黨員が文句をいふのは、矢張事實あつたことである。壯士の活躍も面白い。鞠子の筆に成る課を挿んだのも手際である。第八回程には行かぬが、兎も角出色の章であらう。

蘇我の再入閣をめぐる政局裏面の動き、星見末亡人の飛躍、英伯の遠謀も、興味深く讀めはするが、これは今少し暴露的筆致を要する。再入閣をする理由が明白に描かれてゐないが（よしいろいろに想察されるにせよ）、慈童寺や菊池が影の人となつてゐるから止むを得ないにしても、何等か今少し詳しく突込んで描くべきところである。

次に國粹的風潮の發生については、「舞踏ばかりではない、彼れ程流行て來た洋服や束髮までが一雨一雨に尠くなる」といふ星見末亡人の嘆息（第一回）で要領を得るが、南翠がこの風潮に理解があつたことは勿論としても、始終の

態度が多少同情にかけてゐる點がある。篇中、菌に對する扱ひ方にも、又千代見宿根の歐化主義再來論（第十回）にも、その片鱗が出てゐる。これは南翠が本心は歐化主義に贊成してゐた爲めといふよりも、むしろ改進黨根性が有意無意の間に出たものであらう。蓋し國粹主義は大隈伯の條約改正に新に反對の火の手を揚げつゝあつたからである。この改進黨根性は山路伯の大同團結運動を論ずるところにもいさゝか見える（第十九回）が、然し何といつても、彼の改進黨的色彩は此の期に入つて漸次稀薄になつて來、この作に於いては極めて薄くなつてゐることは事實である。

思ふに此の作の傳へる空氣からすると、もうこの時代は、山路伯の大運動があるにもかゝはらず、漠然大言壯語する政治家や政治論は次第に通用しなくなつて來た。人の傾聽をかち得るには、根底に數字的な經濟論を潛めた新な政治論でなければならない。蘇我が、議論に統計を重んじて、山路や東籬の頭の單純さを嘲けるところ（第三回）や、山路が、大學生千代見宿根と經濟論を戰はして時遲れを笑はれるところ（第十九回）など一二の例を見ても察せられる。時代の目は單なる政治よりも、政治の根底に經濟があることを認め、今迄政治に注がれてゐたのと同じ度合で經濟に注がれ出したのである。明治二十年以後の企業熱と共にブルヂョア地主や資本家の社會的勢力を増大したことは、この邊にも現れてゐる。

なほ、自治黨の運動も大同團結の運動も、本質はブルヂョアジイ（地方有志家とか富商とかいふ名でよばれてゐる）を目標にし、これが自覺を促したものであることは明白である　たゞ自治黨運動は、ブルヂョアジイの自治主義を高唱して中央政府に干渉せぬことを說き、大同團結はブルヂョアジイの團結の力によつて中央政府に干渉し、これを牽制せんことを主張する點だけは相違する。何れにしても、此等の運動は、ブルヂョアジイの政治的制覇の將に成らんとしつゝある一面を語るものではないか。

以上の當時の政界現象描寫といふ事實的興味から離れて、一篇の小說としてテクニクの巧拙を述べると、概して南翠の作物中では、傑れたものゝ中に加へても可からうと思ふ。從前の諸作は大體或る政治的理想があり、これを宣傳せんとしてプロットを立てたのであるが、二十一年度の諸作になると、生活描寫を小說の中心として政治的描寫や興味をそれに織り込むといふ風になつて來た。此の作に於いてそれが特に著しく感銘される。政治的分子と家庭的分子の入れ交ぜ加減が當を得てゐるので、表裏相映じて大體調和を得てゐる。ストーリの運びにも從前見たやうな唐突不自然なところがなく、割に素直である。たゞ此の小說には主人公がない、強いていへば、當時の政界に活躍した一群の男性女性が、皆主人公であるといへぬことはなからうが、それにしても中心主人公がないので、プロットが無統一散漫なものになる恐れがある。南翠はこゝに氣がついたかつかなかつたか、兎に角筋の散漫を防ぐため、背景を利用し人物を相關的に動かしてゐる。まだ何處やらに才士佳人式の月並みの臭ひのするだけは何うしても缺點である。

以上から背景の役割は可成大きい。背景の描寫も從來の想像的なものよりずつと寫實的になつてゐる。背景の園遊會、集合、俱樂部、應接間などがプロットの發展統一に對してやる必然的に必要な役目を果すことになつて來たが、これ等の利用は暴露的興味の上からも必要なのである。又かゝる背景を通して、政治と社交と女性といふ三者が如何に離れ難い關係に入りつゝあるかといふことが示されてゐる。これは勿論單なる寫實といふよりも南翠の理想の現れであるが、英國政治小說の影響も加はつてゐやう。政爭と私交とを別々にするといふ主張は、この作にも反復されてゐる。

人物の印象は、モデルがある割合に不鮮明なのが多い。これはモデルがあるだけ却つて苦心した朦朧たらしめたのかも知れない。隱君子の代表たる山路、蘇我二伯の印象も茫としたものであるが、性癖や生活の半面でそれと受け取れる程度には描き出されてゐる。その他の主要人物鞠子、菊住、蘭三人のうち、性格描寫の點では蘭が最もよく出來

てゐる。詩人型の血性的男子、家庭爭議の受難者として、やゝ輕躁な複雜な心理の持主たる味が兎に角出てゐる、この點は政治家として不扱ひをうけてゐるのと反對である。次は菊住、沈厚老成、好箇の才物らしく見えるが、實物は恐らく今少し機鋒峻辣な、少々生意氣なくらゐ昂然たるところがあつたかと思ふ。鞠子は篇中で優遇されてはゐるが、人物描寫としては三人中最下である、洋行歸りの經世家とは見えず、秘書官どころの輕薄才士あく。女性では矢張り二令孃の對照がいゝ、秀子の純情もよく、百夜の當世風のお俠なのも、惡感をそゝらない。薗夫人露子が「謎」の夫をもて餘すのは同情はされるが、愚痴の塊りとしか見えない。若し夫れ全卷を通じて最も興味ある存在はといへば、星見未亡人なるものである。これは當時實在のモデルから寫したものか、南翠の創造か、恐らくさうではあるまい。恐らく『エンヂミオン』(ビコンスフヒールド作)中のモントフォート夫人あたりを換骨脫胎したものであらう。だが兎もあれ時代を支配してゐた歐化主義、これを擬人化して活動せしめたのが、星見菊子だと見られてもないではないか。第二回「寡居」の一章は菊子の人物容貌經歷を細說してあるが、この經歷が又好箇の小說となる。最高の歐洲的敎養をもち、社交界の女王たり、政治界の斡旋者たり、新女性の指導者たる彼の女は、正に當代の理想的女性を表示したものといつて可い。

場面としては、二令孃が互ひに理想の夫を探りあふところ(第十一回)、薗夫妻の關係を寫したところ(第九回、第十八回)、薗の悶々たる心事を寫したところ(第十九回)など割合に印象に殘る。

南翠の政治小說は、この『隱君子』に至つて最も寫實的になり、『照日葵』が最も多く稗史的分子をもつてゐるのと好對照をなす。たゞ寫實に走せて、宣傳すべき理想を沒却した結果、熱を失つて冷味を加へ、幾分懷疑的とさへなつてゐる(第十九回の大同團結に關する評の如き)。たゞ文章は、鴇文は鴇文だが、例の濃厚が練れて一家の體を成

して來た。

蘭は思はず進み寄れば彼方も蓮歩をうつし給ひて我が熱したる右の手は彼の冷たき右の手に觸れて握りて握り締めたり女儀も反けし顔を正して、珍しや我が夫か、と聞ゆるは寔に露子なりけり蘭も始めて心解け、露子にて在せしよ珍しき箏の調今一曲所望ぞや、不束な爪調君の御心解けたらば、と赧顔みてぞ見えにける嗚呼夢なり皆夢なり寢るも夢、夢も夢愚なる哉愚なる哉今夢といふも亦夢なり蘭も亦夢中の人なり夜毎に斯る夢を樂しみ熱海の浦の浪枕能を絶えたる夢を夢嗚呼夢なり皆な夢なり（第十九回）

最後に、もつとも注意すべき事は、この作を通じて時代の文學獨立の氣運――此の兩三年來は完全に政治に支配され從屬してゐた文學が、今や漸く政治と絶縁し、文學自身として獨立せんと決心した消息が、仄見えることである。篇中第十四回「胸の中垣」に於ける星見姉妹の爭ひを讀め。義姉菊子は、文學を政治の奴隷視し、文學專攻者たる義弟承和を政海に入れんとする。然し承和は「社會に名乘を揚げて花々しく名譽の戰場を縦横し適れ光明を放たんとの俠氣は露だも丹田に舍さゞる」文學家である「我が一身は文學より生れて文學の傳育を享け文學の空氣を呼吸し文學の美味を咬み文學の花園を逍遙し文學の梓宮に葬られんことを企圖する」ものである、語を替へて言へば承知は「純粹無垢の文學家にして目にも耳にも口にも文學といふもの丶外は視も聽も語りもせざる」ものである。だから承知は義姉の申出を慇懃に辭してから言ひ切る、――

政治の如き目前の問題には誰しも力を盡します又名譽を博すのは平和の戰爭程容易なものはございませんから少しでも功名心のある者は必らず爭つて政論の賭を試みるでありませう而して見ますれば一人の私が政治を論ぜんからと申して日本の國體が危い事もありますまいから私しは文學を以て國民の義務を盡す精神であります云々

これは時代文學の宣言であると共に、幾分南翠自身の告白と見て然るべきではあるまいか。

この小說が新聞紙上に大尾となつたころ一日朝比奈碌堂（知泉）は作者にあふや、『隱君子』の如きこそ新聞小說の最も勗むべきものだと推稱したといふ。この小說の性質上、大衆よりも知識階級から喜ばれたことが察せられる。

註（一）三宅雪嶺「同時代觀」明治二十一年（下）（我觀第九十五號）

『萬　春　樂』

此の作は、私の知る限り、南翠の長篇政治小說中最後のものである。刊行年代によれば、短篇『新編破魔弓』の次に入るべきであるが、然し內容から判じて何うも二十二年の政治界が暗示され、『隱君子』の續篇らしく思へる點があるから、今この方を先に語ることにする。

大體の特色をいへば、この作は、『隱君子』の調子を更に索然としたものと思へば可い。たゞ梗概は『隱君子』よりつかみ易い。

若年にして政海に名を馳せた法學士梅岡四貴大郎が、五年の歐米遊學を終つて歸朝する。然るに當時の日本の政治分野は四派に分れてゐて、その四派がそれぞれ梅岡を味方にせんと待ち構へてゐる。四派とは大同團結派、自治黨、國粹保守派、改進黨であるが、大同派を代表する香散見高雄將軍は梅岡の嘗つて首領視した人で、多年の恩義がある、又自治黨を代表する內務書記官春木韶光は梅岡の義理ある姉の夫である、國粹派の代表たる日野芳樹は梅岡の從兄弟に當る、改進黨を代表してゐる難波好文は梅岡の最も親しい友人である。此の四人が何れも梅岡を味方にせんとするが、梅岡も深慮して、四人に會はず直ちに日向の故鄕に直行し、靜養半年の後出直すことにする。流石の四人もこれには啞然としていふ處を知らない。或は手紙で或は使者で種々勸誘を試みるが、梅岡は一切取り合はない。然る

に、香散見將軍の愛孃歌子はかつて梅岡と相許すところがあつたので、此の度の事の成行について、四人とは別の意味で大に心配してゐる。新聞の調子も初めは梅岡一人を引張凧にしてゐる四派の醜態を笑つてゐたが、それがやがて、梅岡の態度を八方美人的日和見主義として罵る如き筆鋒を見せる。歌子はこゝに至つて堪へきれず、梅岡の妹で自分の親友の薰子と密議し、二人家出して、梅岡の許を訪ひ、諫めて共に上京させようとかゝる。幸ひ好便を得て二人は無事梅岡の許に達するが、梅岡は然し二人の勸告を聞き入れない、たゞ辛うじて上京の時は二人を伴ふことだけを許す。梅岡と歌子の二人はこの間幾分舊情を暖める。

期に至つて梅岡は上京した。だが梅岡の上京する前に、日本の政海には多少の波瀾があつた。政府が思ひきつて獨逸式武斷政治を試みたこと、國粹派と大同團結派とが、大同の名の下に妥協したこと、改進が兩派に利害を說いて却つて味方に引入れんとしてゐること、公然保守中正と名乘つた一派が出現したこと等々であつた。上京した梅岡は香散見將軍を始めとして、四派の代表者に會つたが、政治論は一寸もしなかつた。だが四派が自ら是として愈々相爭ふのを見るや、徐ろに自治、大同、國粹、改進四派の長所短所を批評した(第十四回)。批評の語は肯綮に中つてはゐたが、彼自身の主義をきかれると、無主義と答へるのみ。人は皆彼の眞意を知るに苦んだ。然し事實の上では、難波に妹の薰を許し、香散見父子と親しみ、日野とも疎でない。そのうち流石の藩閥政府にも一寸ギャップが生じ、在野領袖が入閣して聯立內閣となつた機に、香散見と日野は官海に入る(これも梅岡の勸めで)。梅岡はその後も主義としては依然明確に口にするところなく、演說も學術講演に類したものばかり、强てその政治上の主義を訊ねられると、文學者は文學上に美を求めるが、余は政治上にその美を求めるものだといつた、さうして、その道はと問ふと、公明正大の見識と愼重なる德義によるべしと答へた。人々は强ひて推測して、彼の政見は民友記者が所謂國民主義に近いものとなした。それは、梅岡の意見が、國民は宜しく政治區を形つくり、團體をつくるを先にし、政黨に入るを後にす

べしといふにあることを綜合し得たからであつた。

然し梅岡は一方秘密に同志を銓衡し、香散見將軍と密議しつゝあつた。彼等の計畫は、一種改進主義の政黨を組織し、難波の立憲改進黨と共同して議院に働くにあつた。機熟して選擧の爲めに再び鄕里に向ふ梅岡は、新春の一日、病める歌子を訪れ、彼女が平生の厚き志に報ふべく、この秘密を第一に彼女に打ち明けたのである。

此の作を通してみた南翠の政治的見地は、何れかといへば批判的な、冷靜といふよりもやゝ冷淡な、懷疑的なところさへ見える。それは如上四派に對する批評その他に見られる。第十四回に於いて、梅岡が四派を批評して——

大同論は漠然として沙漠の中に黔首を聚る策で殊に其人々の信用するに足ない者が多いのが第一の缺點です少壯客氣の徒に阿るのが第一の失敗です、自治黨は表面の美に拘はらず陰險手段にして且其目的を踏違へ往々區域を狹く取る人の出るのが缺點です已に改進黨の綱領に自治制度の綱目を揭げたからは今更別に自治のみを以て一政黨を作るのも贅でせう。國粹は保守の換稱で秩序的進步論を唱へるやうに見えても實際は守舊の精神でありますから後來の發達は知らず今にして之を稱ふるは甚だ嘉すべきこととも思ひません、改進黨は宜しいが財產と智識とを鼻にかけて他黨を侮る氣が見えます世間の多くが反對する點は全く是で英國の改進黨とは同日の論ではありません何處やらの演說に失敗したのも全く自尊が過たからの事自ら尊きを說んとするには尊きと言ずして尊き所以を夫となく說くに爲くはありません政黨の尊き所は主義でありますから主義の擴充をさへ計れば別に吾佛の功德を說くまでもありますまい。云々

と論じ、難波等四人から「然らば君の主義は」と問はれて「余しは無主義です」と答へるところなぞ、その好例である。

とはいへ從來の改進黨の同情者たる立場を抛棄してたのではない。その改進黨たる態度は、第十二回に見える大同團結と國粹主義派との合同を評した語葉にも、又四派中改進黨の難波を好待して妹を嫁せしめる事にも、又末段、大同派の香散見將軍を說いて自ら一種の改進黨を組織し、議場では難波の立憲改進黨と提携して働くことを宣する點などに、やはり朧ろげながら現れてゐると考へる。

それと共に注目すべきは、いさゝかアレゴリカルな氣味が加はつてゐるかに見えることである。抑も梅岡四貴太郎は何人ぞ、此の人は政治的に何を意味してゐるか。これがたゞ南翠が描いただけの、洋行歸りの才人を意味してゐるだけであるとせば、この小說は全然纒りのない、政治的に主意のない。何のために書いたかわからぬものになる。如何に南翠が惡頭でもさう初めから主意の分らぬ小說を讀者に押しつける譯がない、梅岡の性格その他は寫實的に語られてあるが、梅岡なる人物は、實に寓意的存在なのである。梅岡は日本國民を象徵する。梅岡の政治的閱歷は、日本國民の政治的經驗なのである。彼は嘗て急激主義として平民主義の香散見と行動を共にした、然し急激の弊に懲りて遲疑の癖を生じたといふ。これは國民が初め双手を擧げて自由民權を贊成したが、その暴擧續出するや、これに懲りて、一時政治熱の衰へたことをさす。五年の遊學云々は、明治十八年以來、國民が廿三年國會開設の爲めに潛心根本を養つたことをいふのである。四派が梅岡を爭ふのは、四派が國民の心を得ようとするのである。然るに梅岡は四派の秋波を顧みず決然故郷日向に歸る。日向は日本國祖發祥の地である。卽ち過去を清算して新に步みを進める準備として、國祖發祥の地から出直さうといふのである。國民主義の語はこゝに於いて明瞭する。而かもその梅岡がいよいよ政治的旗幟を明にするや、大同團結を含む改進黨の一種で、在來の改進黨と提携するといふ、卽ち改進主義の日本國民の心を得べきことの誇らしき暗示である。

このアレゴリイを解けば、散漫なる中に一貫した主義が生じて、政治小說として多少の生命をもつことになる。今

日では、かゝるアレゴリイなど全く不必要な無駄骨折と思はれるが、然し當時は矢張り必要なカムフラージュであつたのであらう。然し公平にいつて、これ又政治小説として熱なく、理想の光彩がなく、甚だ氣乘りのせぬものたることは勿論で、且つ何處となく未完成品といふ粗雜な印象を與へる。この點で南翠の長篇中最下作といつて可い。

この、何處となく未完成な、「お粗末な」といふ印象は、政治小説といふ點を離れても、同樣である。陳腐な才子佳人型のプロットを破るつもりで（乃至破つたつもりで）種々工夫してゐるが、要するに、政治的イデオロギイを引離せば才子佳人小説の型を出ない。プロットを性格と結びつけたのは、一寸手際と思へるが、その性格に無理があるので、プロットも自然な進行をとらず、無理が多い。歌子、薫の二處女が梅岡を追ふて九州に奔るところ（第九回―十回）がプロットのやまの一つであらうが、動機が政治的なところは新しい。木下川の梅見（六回―七回）は、當時の尖端趣味の一つで讀者にうけたものかも知れぬが、この梅見は難波と薫を接近させる爲めに設けたものであり、餘りに傳統的人情本風な趣向である。然しお伴の書生の會話で、難波の心中の喜びを語らせるあたりは老手である。

南翠が人物の性格を寫實的に描くため可成り苦心をしてゐることは、この作でも分る。例へば、梅岡の性格を描くに（第三回）從來になく力を入れて解剖を試みてゐるが、遂に纒つた性格を作るに成功してゐない。彼は『小説神髓』にいはゆる心理學者の眞似を試みるつもりであつたかも知れないが（彼はその小説論でさういふ眞似はせぬといつたが）心理を描かずに皮相的な奇癖を描いてゐるだけである。而かもその説明が無理不自然を免れない。第四回の薫が敎師との仲を疑はれて、衆女學生から苛められる心理は、一寸着眼が面白い、且つ當時の女學生氣質が幾分出てゐる。然しそれも矢張り淺薄皮相以上に出ない。

この作で見落してならぬことは、背景にも人物にも、歐化主義的趣味の極めて稀薄なことである。これは『照日葵』

以後の南翠の作には無い事實である。それと共に、政治上に積極的興味をもつ女性も出てゐない。『綠簑談』『新粧之佳人』に比して何といふ相違であらう。歐化主義的趣味流行の下火になりつゝあることは、『隱君子』中にも出てゐるが、然しその女性の中にはかゝる趣味流行の維持者たるものがあつた。この作中の社會に至つては、かゝる流行が全く影を隱し、歌子の如き、女性が政治に關係するを過失を犯す如く考へてゐる。此の小説は拙作ではあるが、なほ吾等はこれから多少の事を學び得るのである。

『新編破魔弓』、『罔　雨』、『魔　風　扇』

此等の三短篇については、私は多く語らうとは欲しない。又事實多く語るべきものがない。

『新編破魔弓』は表面直接的には政治小説の部類に入れられぬものといつて可いが、たゞ背景に『唐松操』の中に描かれた對藩閥陰謀に類する事件が暗示されてゐるので、準政治小説と見ても可い。荒筋をいへば、將軍東山青元と將軍朱南亭明とは莫逆の友であり、朱南の女阿利は早くから東山の息たる少壯士官金義の許嫁となつてゐた。然るに朱南の部下たる大尉風間才一は深く阿利に懸戀し、是非金義より引離してわが有にしたいと思ふ。そこで畢生の才智を絞り、東山將軍の大陰謀なるものをフレームアプする。東山は、「現政府が藩閥の基礎を固めて正理を壓し輿論を蔑ろにし相位に戀々として永く政權を握らんとするを以て筆すれば筆を折られ舌すれば舌を嵌され眞理は窒伏し正道は湮滅するが故に之を兵力に假りて第二革命の成功を」期し、壯士千五百人を募り大事を擧げんとしてゐるといふのである。同盟規約には多數名士も見える。一本氣の朱南は忽ち風間の言に迷ひ、東山の末子龍丸の七歳の誕生祝ひに招かれたのを機に、强て東山との間に隙を求め、東山の罪を責めて、刺し違へようとする。風間は肝心な阿利の處分を探ると、朱南は、親の罪は子に及ぼさず、阿利と金義は別だといふので、大に失望するが、今となつては仕方がな

く、種々の證據を提示する。朱南がこれを掴んで別室の東山に迫らんとする刹那、龍丸が誤つて射た破魔弓（朱南の贈物）の矢が飛んで風間の眼を貫ぬく。瀕死の風間はその惡心を懺悔し、東山將軍の大陰謀及びその證據が悉く彼の僞構にかゝるを告白する。

趣向が既に空々しい上に文章が又無味乾燥、何の面白味がない、南翠が往年のフレキシビリチイは些も認められない。性格も類型、出來事も不自然、總體にプロットの運びが淺々と工夫が足りない。風間一人の言で多年の親友の陰謀を信ずる將軍の心理にも呆れるが、事實かゝる大陰謀のフレームアップの如き、風間一人の力で出來ようとも思はれぬ。たゞ取柄とすべきは、朱南が東山の罪を憎みつゝも、娘の心事を思ひやり、金義と阿利の仲は割かぬといふ點である。こゝに封建道德と違つた或るものが看取される。

『罔兩』は或る政治密偵の策動を中心に政界の裏面を暴露せるもの、當時何等かこれに類した出來事があつて諷したのかも知れぬ。（二十三年十二月、國民之友に「探偵に注意せよ」といふ記事がある）。然し人物事件の總體は南翠の想像に成る。

これも前者と同樣年代が明らかでない、又場所も不明である。それだけに餘計朦朧とした印象を與へられる。

議政俱樂部の書記たる猿渡某は、多年貧苦の生活に甘んじ、よく志士的操守を持してゐるといふので、會頭や僚友の信用を得てゐる。然るに彼は何時しか恐るべき當局の密偵となつてゐた。當時俱樂部は大問題に當面してゐた、これは會員中に、俱樂部のまゝの非政社的會合に滿足せず政社として結合しようと欲する一派を生じて大動搖をしてゐたからである。俱樂部幹部はこの一派を滿足せしめるため、會員を選んで主義綱領に記名調印せしめ、內密に政社組織にしようとした。然るにその議事や會員氏名などが警視廳に筒拔けとなり、俱樂部の存廢が危ぶまれるに至つた。

猿渡はかねて政社論社の頭目速水某を密偵だと宣傳し、自ら蒐集した證據で幹部に審問せしめたりしたが、速水は堂堂と辯駁して寃罪を證明したので、却つて勢力を加へた。然し警廳視の警告から密偵問題は倶樂部の人々に大に刺激を與へ、一時は人々互ひに疑ふ有樣であつたが、日を經て漸くその疑ひが猿渡の上に集まつた。その理由として、彼が舊外務官吏たりしこと、妻が警保局長の親戚なること、その他の條々が擧げられた。猿渡は幹部の詰問にあひ、妻を離別したり、種々芝居を試みるが、遂に化けきれず、交際官試補に任ぜられて米國へ逃げた。

總體として皮相的な如何にも作り物語らしい氣がする。種々波瀾らしいものが並べられてあるが、要するに見えすいた工夫で奏功せず、平板無味を脱しない。作家としての南翠は明白にスラムプに陷入つてゐる。その原因は寫實主義を穿ち違へて、何でも皮相的表面的なものを雜然細々と列べさへせば寫實主義だと考へて無理にさうしてゐる風が見える。些の深味も、眞劍味もない。第一かゝる淺墓な反間手段に籠絡される政治家もあるまいし、猿渡がそれ程立派に密偵の資をもつてゐて、而かも最後に疑ひをかけられるなど、人をして捧腹せしめるよりも呆れさせる。

『魔　風　扇』

雜誌「自由平等經綸」第十三號から二十四號までの間に連載された政治小說で、明治二十四年九月一日から、二十五年二月十五日までに亙つてゐる。

これは暴露小說で『罔兩』よりまだ拙劣なものと思へば可い。然かも極々初期の寓意的政治小說の手法が加はつてゐるから、餘計拙いものになつてゐる。

總體がスケッチ風の淡白なものであるから梗概を述やうにも述やうがない。つまり時の松方內閣と議會の險惡な關係、政府の買收策、買收策の不成功、解散によつて政府黨の多數を期す、その不成功等を材料にしたものなることは

分かるが、必ずしも或る事件、或る人物をそのまゝ描寫したといふのではない、種々な風說や見聞を綜合して構成したものであらう。然し當時の政界の祕密を熟知してゐる人々の眼に照せば、自らモデル問題などもあつて、面白いところがあるのかも知れない。さういふ祕密に暗い吾等には、さういふこともあつたのかといふ甚だ茫漠とした影法師を捉へるやうな氣持のするものである。

この小說に姿を現す人物は先づ五人、そのうち主なのは三人、厚岸安純、小金井銀子、常盤忠誼である。他は甘縄某、丹治伯といふのが一寸出場する。

厚岸は進取倶樂部の領袖で、進步黨に近い下院硬派の有力者、甘縄は前宰相藤渡伯の女婿で軟派の統領且つ買收本部たる役をつとめてゐる者、その甘縄の誘惑で厚岸は小金井孃と會ひ、孃の魔風扇のために多年の淸節を變じて政府黨となる。孃は前宰相以來、黃金と愛情の力をもつて內閣員や代議士の懷柔に當つてゐる不思議な女性である。厚岸は小金井孃と交際の深まるにつれて、全くその奴隷となり、宰相のために議場の指揮に任じ、その上、解散の曉にはかくかくと祕策を錬る程變つてしまふ。祕策とは、(第一)民黨に運動費を供給してゐる實業家連の頸の根を締めること、(第二)民黨自身の聯合を離間すること、これである。かくて議場では政府が失敗したのでいよいよ解散となり、政府は黃金と暴力で勝利を得ようとするが、結局失敗する。厚岸に小金井孃は結婚して外遊する。梗概はさういふ簡單なものである。

厚岸とは何人ぞ。南翠は彼のことを叙して曰く、――

厚岸は固と中國の名胄にして少かりしより經世濟民の學を修め專ら政治の宿弊を撓めんことを首唱し屢ば目覺しき運動をなしたるより同國の有志爭つて刺を通じ其の才幹偉略に敬服して陽はに統領をもつて仰ぐに至りしかば其の名聲近國に鳴り轟き餘響遠く上國にまで聞えわたり各黨の首領は孰れも涎を此の偉人に垂れるゝ(第二)

然るに、厚岸自身は「某黨の穩當なる綱領」を慕ひ、上京してその首領と密議するところあり、山陰進歩黨を組織し、「赫々たる威名」を馳せた。それで議員選擧には高臥して大多數で當選、議會では獨立中正を標榜したが、中央進歩黨と氣脈を通じ、硬派の雄辯家として畏怖されたといふ。これは、厚岸の政治的經歷であるが、そのモデルは誰か、「某黨」は改進黨とするも山陰進歩黨といふものは國會開設以前にはないし、中央進歩黨といふものもない、南翠の肚裏に誰の面影を描いてゐたものか、容貌風采は光明寺三郎らしくあるが、經歷は全然反對である。又島根縣選出代議士佐々田某は石見改進黨といふのを組織したことがあるが、まさか佐々田をそのまゝモデルにしたとも思へない、要するに南翠の空想から湧いた人物であるとして可い。厚岸は厚顏を意味し、安純とは因循を意味することがわかれば、買收された代議士の綜合モデルと思へば可いわけであらう。

小金井銀子は如何なる人ぞ、——

都門幾門の巾幗綺々競い綉を鬪はして紅紫爛漫蒐集悉く花ならぬはなき中に就き獨り喧々として其の名々專らにする小金井銀子孃は如何なる幻術あれば斯くまで都人士を惱殺するの技を得たる歟、年少紳士は皆言へり予は幸ひにして小金井孃と邂逅することを得たり孃が紹介に應じて予は次週の某會に臨まんと欲するなりと、又或る貴公子は言へり予は渠と巴里の公使館に於て相識となりたり渠は日本に於ける勢力よりも强大なる信愛を得て巴里の華奢なる交際社會を蹂躪したりき渠は眞に歐米各國の所謂淑女なるものゝ總ての行爲と藝術と嗜好とを滿足に曉通したる淑女なりと、又某の老紳士は言へり若し渠をして總理大臣ならしめば國會の喧囂も更に憂ふるに足らず人は皆な手を拱して一に渠が料理に任すべく天下の大計着々として整理するを得べしと、然らば小金井孃の名は獨り交際社會のみならず政事社會にも、經濟社會にも、文學社會にも、法律社會にも、教育社會にも、技藝社會にも、實業社會にも、到る所として喧傳されざるはなく人は皆な一たび其の玉手に接し瑤音を聞かんことを渴望して已まざるもの

の如し（第三）

實に交際社會の女王ともいふべき女性である、孃は當時婦人の勢力が社會から排斥され、政治上に對する影響など全然無視されてゐることを憤慨してゐる、從つて前宰相の時代から喜んで政府對議院の間に立つて調和妥協の役目を買つて出てゐる。魔風扇とは孃の手にしてゐる扇のことである。この女性も勿論モデルがありやなしや、その邊は不明である。たゞその名を一考したまへ、小金井は黃金に通ずる、名は銀子である、金子、銀子卽ち金銀の意となりはせぬか。政治上勢力あるのも、買收役を買つて出るのも、それでは無理がない。

宰相常盤忠誼に至つては、時の總理大臣松方正義を指すものであることは、疑ふ餘地がない。松は常盤の常盤であり、忠誼は正義である。

さるからに常盤宰相は專ら內閣の基礎を人に歸するものと信じ同列大臣を擧ぐるに頗る苦心を費やし終に名望よりも寧ろ實力ある人を網羅し尙ほ先輩の功臣を顧みて悉く己れが助言者傳導者と仰ぐことゝはなしける（第四）

後入齋の面目躍如たるものがある。これが松方でなくて誰であらう。

甘繩は、末松謙澄に相當する、藤波伯とは伊藤博文である。その女婿たる新代議士とは末松謙澄の外ない。

丹後伯は黑田淸隆の面影をとつたものと見て可い。

テクニク上からは論ずる限りではないから、それは止めるとし、たゞ文章は大分思軒調が入つて來たことを注意しなくてはならぬ。」

以上、私は須藤南翠の政治小說に關して、文字通り縷說して來た。恐らく彼の小說家としての位地斤量に比して、紙數を割くことがやゝ多すぐるやうに見えたかも知れない。かく詳に失したのは豫定外だが、一に私の意のあるところを十分盡さうとした結果なのだ。南翠の政治小說なるものが從來檢討を經たことがなかつた爲め、政治小說家としての位地を文學史上に許されながら、南翠の存在は甚だしく輕視乃至蔑視されてゐた。私は彼の政治小說を讀んで、かゝる甚だしい輕視蔑視の理由のないことを感じ、公平を信ずる立場から彼の政治小說を檢討し、政治小說家としての彼の存在だけでも正當に認識しようと努めてみた。さうして論究の無理を避け妥當なものにしようとした結果が、かく詳に失したわけである。作そのものについて私の見た結果はその各々の條で述べて來たし、又正式な明治文學史を書くわけでもないから、何も結論を必ずつけなければならぬといふことはないが、長談義の印象を纒めるといふ程の意味で、こゝに雜記的に南翠論をかいて置く。

南翠は殆んど天成のオッポチュニトスである。根が舊封建武士の出でありながら、終始新思想かぶれのインテリゲントらしく振舞つた裏面には、多分かゝる素質の厄介になつてゐる。且つ彼は大衆相手の通俗新聞記者であつた。此の二事が小說家南翠の動向を決定するに根本的に與かつてゐる。彼の小說家としての徑路は、時好、即ち大衆の嗜好乃至注文の變ずるに從つて變じて行つたものといへる。彼は最初は勸懲主義の續物を書いた。それから魯文流の毒婦物（例へば『茨木お瀧』、『新藁お皆心黑髮』の如き）に轉じ、馬琴に私淑して稗史的趣向の作を試み（例へば『梢藤常盤紫映綠』、『旭日美譚』の如き）、更に矢野龍溪の『經國美談』が盛名をかち得てから、政治小說に着眼し、苦心してその方面に新境地を拓いた形となつたが、春のや主人の『書生氣質』及び『小說神髓』が漸く文學界の主潮を支配する傾向を見てとるや、急に寫實的手法を取り入れ、その苦心して拓いた政治小說的分野に於いても寫實的なものを作つたのみならず、讀者の心が政治小說から去りつゝあるを見て、自分から政治小說をすてゝ世話小說を好んで描

くに至つた。而かも世の好奇心が俄然涙香の探偵小說の上に集まると、南翠もあはてたやうに探偵小說犯罪小說に力を入れた（『殺人犯』『朧月夜』の如き）。勿論かく轉々推移する間、彼がたゞ他動的に樂々と動かされ、引廻はされてばかりゐたと思つたなら間違ひで、寧ろ自分の方で相手方大衆の心の動きを鋭敏に捉へて、此方から時好に應合するやう努力したものである。彼が新聞新時代によく腦病にかゝつたり、又出社前車を待たして圖書館に入り、讀書に耽つたといふ事實は時好や時代思想に遲れまいとすと彼の苦心と努力を語つてゐる。

　彼は大衆視されてからこそ鈍感惡頭視されたれ、政治小說時代までは、あくまで聰明なインテリゲントであつた。彼の眼先きは利きすぎる程利いた。彼が如何に大衆の時好を察し、これを取入れるに拔目がなかつたかは、彼の政治小說の特質を一見すると、およそ見當がつく。本來彼の小說の根幹は才子佳人的人物と馬琴的勸懲的趣向とを組み合せた以外に出ない極めて單純なものであるが、政治小說を作るに當つては、これを變化して、才子を志士乃至紳士とし、佳人を淑女とし、勸懲的趣向を政治的趣向にかへ、善の勝利の代りに民權（民間理想）の勝利を入れ、更に背景として添へるに歐化的新時代の描寫と社會改良の理想をもつてした。かくして暗にヂスレーリを手本にして、新時代新社會に於ける人民（こゝではブルヂョアジイ）の勝利を暗示宣傳したので、彼の政治小說が大喝采を得、彼が群續物作家を拔いて嶄然大家の位地に押上げられたのも無理がない。

　もつとも南翠の執筆したのは改進黨系の新聞であり、その小說に盛つた政治理想は改進黨的理想であつたゞけに、南翠の政治小說の人氣は、改進黨の社會的勢力の消長と比例すべきものであつた（さうして事實その通りになつてゐる）。改進黨が勢力を失ひ（主として大隈の條約改正問題以後）、改進新聞もその機關でなくなると共に、南翠の政治小說が終つてゐるが、これは當然の運命であるともいへる。從つて南翠の政治小說の人氣も、幾分は當時唯一の在野大政黨たる存在を持續してゐた改進黨の背景があつたと見なくてはならぬ。然しその人氣の第一原因は、何といつて

も彼の小説がよく時人の嗜好を迎へて、從來の作よりも遙か面白い優れたものに讀ましめたからだと見て可い。

大家にされた南翠は、人氣に迷つて自分の教養や才能技倆のリミットを忘れ、次第に大家意識をもち始めた。大家意識と共に競爭意識が頭を擡げる。政治運動上又新聞記者として彼の先輩である末廣鐵腸が、政治小説界にデビューして、一擧にして和製デスレーリの名をかち得、政治小説上には先輩たる南翠の光彩を次第に薄れしめた如き、南翠の競爭意識を最も刺戟したものである。これは二家の小説を比較せば歷々示し得る事だが、今こゝでは一二の例を擧げるに止める。鐵腸の描寫は經驗に據るに對し、南翠のは主として空想の力による。又鐵腸は好んで函根の風物を背景に取り入れるに對し、南翠はこれを故意に避け、專ら日光の景色を利用する。而かも南翠はその作中で鐵腸の小説の批難めくことを試みてさへゐる（『新粧之佳人』第五回）。

春のや主人によつて首唱された寫實主義が次第に文壇の大勢となるや、南翠は勿論これに接近し、例によつて此の新主義を自家の藥籠中のものとして、更に一轉向を試みんとした。思ふに、政治小説家として既に鐵腸に後れ始めた彼は、政治から離れて專ら文學の方に赴くつもりであつたのであらう。然し案外深い革命的精神に根差してゐるものであり、從來南翠の成功した如き小手先の輕業や皮相的糊張細工で何うにでもなるものではなかつた。これに接近すればする程、自家の小説を清算される期が近づいて來るのに、南翠は自分の力で此の新主義を苦もなくマスタア出來るものと考へ、又實際出來たつもりでゐた。その自信ある氣持は彼の小説論にも歷然と見えてゐる。彼は寫實の意義を穿き違へ、單に趣向を實際めかし、皮相的描寫を細かくし、文章を馬琴、春水から春の舍、思軒張りにさへせば、讀者は再び喝采してくれるものと甘く考へてゐた。又それで喝采された作もあつた。（然しそれにはそれだけの理由が別にあつた）然し總體として、それが却つて大衆的人氣を消すことになり、彼自身の墓穴を掘ることにならうとは、氣がつかずにゐた。彼は口で小説は美術であるとか何とか、相應受け賣りをしてゐただけでなく、小説の地位の向上

と共に生じた小說讀者の趣味眼識の向上（讀者層の移動）、批評界の發達の如き點に敏感になりすぎ、專ら知識階級の喝采をもとめようとかゝつた。然しそれは南翠としては自己を知らぬものゝ甚しいものであつた。かくて三十にして文壇第一流の大家に押上げられたオッポチュニストの彼は、三十を越す幾歳でもないのに、その悲壯な努力にも拘はらず、立派に中央文壇から清算されてしまつた。

最後に、政治小說だけに限つていへば、今日如何に彼の文學史的位地を輕く扱はうとする人々でも、南翠の政治小說が明治政治小說發達の上に兎に角相當大きな貢献をしこゐることは認めざるを得ない。私は簡明にそれを列擧しよう。第一は明治政治小說が近代小說として資格を具へるに至つたのは、南翠の力が與かつて大きいことである（これは南翠によつて始めてさうなつたといふ意味ではない）。これを細分して論すると、テクニク上の改良、即ち作法上に西洋小說の手法を入れるとか（例へば心理描寫めくものゝ如き）、表現方法の西歐的清新をとか、性格描寫の進歩とか、プロット發展上の新機軸とか、種々な條項にならうが、要するに明治政治小說は南翠に至つて大に近代小說らしいものとなり、從來宣傳第一だつた政治小說が小說としても讀むに値ひするものとなつたことは事實である。第二に政治小說として、政黨の政綱を具體的に反映させ、黨の政治理想を明瞭に揭げて、讀者啓發の任を立派に果してゐる。第三は、時代の描寫、即ち二十年前後の社會理想と生活風俗の斷面を豐富に活寫（寛大に解してして）當時進行中の貴族とブルヂョアジイの紳士的闘爭及びブルヂョアジイの政治的社會的制覇を描いてある點で、今日の讀者には甚だ興味がある。以上の三點からして、政治小說家としての須藤南翠は、初期小說史上到底無視さるべからざる大きな存在である。こゝに於いて、吾等は、彼が二十年前後の過渡文壇に於いては篁村と共に二巨星と見られたといふ露伴氏の言を首肯出來るのである。

末廣鐵膓研究

鐵膓傳

一

此の章で先づ試みなければならぬことは、鐵膓の傳記である、能ふ限り詳しい正確な鐵膓傳を書くことである。これを特筆するのは譯がある。それは、鐵膓が政治小説界きつての代表的存在であるからばかりではない、鐵膓の政治小説を十分に理解するため、かゝる政治小説の根柢に潛んでゐる鐵膓の政治思想を把握するためにそれの必要であるのは勿論だが、そればかりでもない、當時の政治運動に於ける大物なる鐵膓の立場が特殊なものである點で、鐵膓の傳記は直ちに明治初期政治運動の歴史そのものとも見られ、從つてこれを十分語ることは明治政治小説全體の史的背景への理解を大に助けることになるからである。且つ又、明治十三年の『新聞記者奇行傳』以來大正十五年の『十大先覺記者傳』に至るまでに末廣鐵膓傳が長短幾種かあるのは流石といふべきであるが、その最も出來榮えの好いものでさへ不詮索不滿足の甚しい點がある。私は手許に持ち合せの資料で幾分以上の諸傳を凌ぐ程のものを作れる自信がある上、今日以上諸傳の不詮索不滿足な點を是非正して置いた方がいゝと思ふ。これ亦、私が新たに鐵膓傳を試みる動機の一である。

鐵膓、末廣重恭、字は子儉、號を浩齋といふ。鐵膓は別號である。嘉永二年二月二十一日、伊豫國宇和島城下に生

れた。士族出のインテリゲンチヤたることは、當時の政治運動者、操觚者乃至政治小説家の大半と變りがない。鐵腸の幼名は雄三郎。父は禎助重舒、本姓は近藤氏、母は飯野氏の出で、禎助の繼室であつた。末廣家は世々藩の勘定役を勤めた。初め禎助には一女孝子があるのみで四十まで男子がなかつたので、甥の靜修（後に靜）を孝子に配して嗣子とした。間もなく室を失つたので、飯野氏を娶つて、莊藏、雄三郎の二子を擧げたのである。長子莊藏は藩主の命で藩儒都筑燧洋の後を嗣いだので、早くから都筑姓を名乘つた。

鐵腸の身には詩人的遺傳の血が多量に流れてゐた。禎助は字を思道、號を雙竹といひ、固苦しい役儀に似合はず、詩歌殊に漢詩に秀で、南豫の詩人として、籾山衣洲著の『明治詩話』にも一席を占めてゐる。學問は江戸詰の時長野豐山の門で經史を仕込まれた。少時は稗史を好み、太閤記が第一の愛讀書であつたとぞ。姉の夫で從兄たる靜修は、字を成侯、竹溪散人、晩に靜古園と號し、これ又南豫の詩人として有名であつた。兄の莊藏重溫は（後に溫といふ）、蘭塘又は鶴洲と號し、學術文章あり又詩を能くしたが、寧ろ熱血の志士として著名で、少壯維新勤王の運動に加はり、後藤象二郎が二條城で德川慶喜に大政奉還を說いたときも、一行の中にゐた。維新後は餘り榮達せず落拓して終つたが人物は却々のもので、鶴洲先生といへば宇和島の一名物だつたらしい。それで弟雄三郎重恭たる鐵腸の天性如何は、父兄の爲人から略ぼ推察されるであらう。

鐵腸は夙く父母を失つたので、姉夫婦の手で生長した、さうして姉夫婦に子がなかつたので、養嗣として家を襲いだ。鐵腸の幼少時を知るべき資料は、その敎養に關するものを除くと何もない。敎養の點からいへば、五歲で師（藩儒金子魚州ともいふ）に就いて句讀を受けたが、天資頴敏で、過目誦を成したといふ。それから十一歲で早くも四書五經を終つた。此の頃から多少の武技ぐらゐは稽古したかも知れない。十五歲で藩學明倫館の寄宿舍に入つて本式に勉學した。鐵腸はこゝで何を誰に學んだか判然しないが、彼は詩賦よりも歷史と文章と經義に苦思したものらしい。



壯年時代の末廣鐵膓

經義に於いては藩學の朱子學一點張りに滿足せず、潛かに陽明學に指を染めてみたりした。十八歳（慶應二年）の時、八幡濱の謹教堂に帷を下してゐた上甲振洋の門に遊學した。振洋名は僖、字は師文、宇和島の人、遼幽散人、存々齋、餘學楼の號があり、少いとき江戸の昌平黌に遊んだこともあり、當時學問淹博、詩文もよくしたが尤も經義に邃しといふ評判であつた。かつて藩校を督したが、此時は隱退してゐたのである。鐵腸は主に經義の點で彼を叩いたものと見える。八幡濱に留まること一年餘、又藩校に還つた。此の間、『疑孝經刊誤』の著があるが、小册ながら鐵腸の造詣と思想の老成を見るべきものである。

鐵腸は八幡濱から還つて間もなく、藩黌の舍長に擢んでられた。彼が公然陽明學に心を傾けたのはこの頃からであらう。『孟子』を讀んで朱子の說に疑ふところがあり、去つて『傳習錄』を讀むに及んで、著者陽明の解釋の易簡明決に服し、寢食を忘れる程の陽明宗となつた。それでこれを同舍の學生に語つたので、朱子學の同舍生から忽ち猛烈な誹難を浴び、異端邪說と目された。然し鐵腸は屈せず一文（或は一書）を作つて、自分の志を辯じたといふ。その文章も（一書も）今は遺つてゐないが、兎にかくお坐なりのいはゆる學問でなく、青年らしい熱情をこめて自發的修養に志したことが分かる。殊に此の陽明學をやつたといふ點は、鐵腸の政治的生涯に種々な影響を與へてゐるのである。或る夜、大きな地震があつた、彼は瞑目靜坐して敢て走らなかつたが、而かも心の動くのを靜めかねた。そこで嘆じて曰く、吾學や未だしと、毎夜、夜深け人定まつてから城東の愛宕山に上り、古廟の中に趺坐し、朝になつて還つたといふ。彼は、兄莊藏のやうに勤王運動に奔走はしなかつたものゝ、正に自家の敎養上の維新に當面してゐたのである。淺見絅齋の『請献遺言』を愛讀しつゝ、而かもこの書が支那の事績だけに限つてあるのに慨し、『皇朝靖献遺言』を著したのも、大抵この前後であらう。

明治二年、彼の師上甲振洋が藩主の懇命默止しがたく再び出廬して藩政を輔け、同時に藩校明倫館を督した。此の

時鐵腸も藩校明倫館の教授に抜擢され、又藩主伊達公の命によつて藩政改革の議に參與し、議員となつた。彼は青年の元氣に任せて種々思ひきつた献策をし、門閥参政等の失政を責めて忌憚しなかつたので、一藩皆なその硬骨に驚いたと傳記者はいふ。驚いたとは美辭で、事實は若者の盲目的突進に呆れたのであらう。三年春、靜氏に從つて東京に遊學し、有名な林鶴梁の門に入つた。然し當時は戰後のことゝて、書生の風が多く放縱粗豪、眞に學を修める者に似なかつたので、むしろ紛囂の都下を去つて、郷里で靜かに自修しようと決心し、此の年八月歸途に就いた。さうして大阪まで來て人の噂を聞いてみると、京都に春日潛庵といふ學者があり、陽明學に深く、門生も多いといふ。且つ此の人は鐵腸の舊師上甲振洋の知己でもある。鐵腸は大阪から又京都に取つて返し、潛庵の門に入つて、こゝで三年から五年まで二年間勉强した。潛庵、振洋に書を與へていふ、「末廣生は志有る者、前途期す前し。乃ち薫陶の益の尠なからざるを知る。進んで止まずんば、未だ量る可からざる也」云々（『潛庵遺稿』卷三）。

明治五年歸藩して、又明倫館教授となつた、間もなく宇和島藩が廢されて神山縣が置かれ、それと共に彼は教授から縣官に轉じ、少屬（せうさかん）として訴訟の事を掌つた。尋いで縣廳を松山に移され、石鐵（いしづち）縣といつた。移轉に先立ち、宇和島附近の人民でこれに不賛成な連中が數百人集まつて縣廳に押寄せ、今にも暴動を起さんばかりの勢であつたが、鐵腸が出て從容利害を說いたので、群集も無事退散した。石鐵縣に移つてからも前職のまゝでゐたが、稜々たる平生の言動が、何うも長官と合はなかつたので、翌六年、決然と職を抛ち、再び東京に出て來た。

二

鐵腸が再度の東遊は、たゞの遊學ではなく大に青雲の志に燃えてゐたことは、明らかである。だが伯樂はさう樂々と見つからず、翌七年の末に至つて僅かに大藏省十三等出仕をかち得た。此の間（七年一月）副島、板垣などの舊參

議と洋行歸りの士族インテリゲンチヤが合同して民選議院建白を出し、人民參政運動の火蓋をきつた。儒敎流の政治理想をもち、民治の經驗があり、而かも官僚に不平のなくもない鐵腸が、これに相當共鳴したことは想像するまでもあるまい。十三等位の小吏で終るのは勿論本意ではなく、さりとて長官の機嫌を取る特技とてもない彼にさう急な榮達の途が拓けるわけがない。鐵腸は密かに官場に見切りをつけ、學術文章で世に立つ工夫をした。同時に彼の眼を强く射たものは、折柄の政論と共に日益に盛んになりつゝある新聞紙なるものであつた。鐵腸はこゝに自分の天職を感じた、彼は新聞記者として初志を天下同好の士に語る愉快を思ふては、胸の躍るのを禁じ得なかつた。

こゝで一寸挿記するが、大槻如電翁の「新撰洋學年表」明治七年甲戌の條にかういふ一項がある。

「先是民選議院建言の政府の納るゝ所とならざるや新聞各社民權自由の輿論を引起さしめんと筆陣を揃へて政府の差置を攻擊す旣にして日々新聞其鋒を倒にして飜然尙早論を唱出す末廣鐵腸憤て一書を福地櫻痴に贈り其變說を詰問す櫻痴マネー一語これに答へたり果せる哉十月に至り東京日々新聞は太政官記事印刷御用の特命を受しと云ふ」

この記事は今のところ私は裏書するに足る資料をもたないが、洋學年表の他の記事は概して信用出來るものであるから、これも一概に何かの錯誤とはいはれまい。問題は鐵腸の一書なるものであるが、それが何新聞かに公にされたものか、それとも全然私的のものか。私は新聞方面は可成り探訪したが遂に見出し得なかつた。然し何れにせよ、そこには少壯鐵腸の面目を躍如たらしむるものがある。

此の頃草創間もない東京の新聞界に兎もかく覇を唱へてゐたのは、東京日々、郵便報知の二新聞であり、朝野と曙その他がこれに次いだ、日々の福地源一郎、報知の栗本鋤雲は新聞記者として壓倒的な盛名をもつて居り、朝野の成島柳北の名はまだ幾分その下位にあつた。だが鐵腸は三人のうちで柳北の風流文采を慕ひ、同鄉人の某が朝野新聞の

校正方をしてゐるのに賴んで、柳北に近作の一詩を贈り、暗に記者の員に加はりたい旨を傳へた。柳北はこれに答へなかつたが、世に末廣重恭なるものがあることを心に認めた。間もなく當時第二流の大新聞たる曙新聞社主青江秀が、何處からともなく、鐵腸に新聞記者となりたい希望があると聞いて、突然彼に會ひ、記者が望みなら自分の新聞の編輯長になつてくれぬかと言出した。彼は喜んで官を罷め、直ちに曙新聞に入社して編輯長の位地についた。明治八年四月の末で、鐵腸二十七の時である。

編輯長の名は宜いが、此の頃の新聞社は憐れむべきものであつた。乞ふ彼自身の語るところを聞け。——

曙新聞の編輯局は七八疊敷にして、記者は余を余を外にして飜譯掛り一名、雜報掛りの老人一名、校正兼編輯の補助一名と、出省方と稱し諸官省へ出て布告書類を貰ふて來る下等の探訪者二三名に過ぎざりしなり。諸者はどうして夫れにて日々編輯が出來たかと疑はるゝなるべけれども、當時の曙新聞は今日の新聞紙の半截に少し廣くして白紙に文字がバラバラ並んでゐる樣な體裁にて短き論説の外に雜報の十件か十五件もあればそれで紙上が塡まる程なれば、記者は少なけれども職務は至て暇なり云々。(一)

鐵腸の仕事はその「短き論説」を毎日書くことが主であつたが、未經驗の彼には、それでもさうさう樂な仕事ではなかつた。

余は少し許り漢文を稽古したれども新聞に從事するは始めてなる故、最初は隨分骨が折れ、短かき論説を書くに、二度も三度も稿を起し、晝から夜半まで掛りし事もありたり云々。(二)

隨て發行紙數も今日からは言ふに足らず、會計の困難はいふまでもない。それにも係はらず鐵腸は喜んで熱心に筆を執つた。內容は多く茫漠としたもので、いはゞ支那の諫議大夫が專制君主を諫める時の態度を理想とした漢學書生流のものだが、たゞ元氣一杯に叩きつけてある點が眼立つ。勿論初めはまだ名を世間に知られる機會を得なかつた。だ

がその機會はさう待たせずに遣つて來た。

明治八年六月、卽ち鐵腸が曙新に入つてから二月後、政府は突如あの有名な讒謗律及び新聞條例を發布した。發布前後の一般的事情は、『明治政史』で大體察しがつく（第八卷、文化全集版一一六八頁以下）。だが政府としてもこれを制定しなければならぬ具體的理由があつたので、必ずしも一般的政論熱の高まつたのを恐れた爲めのみでない（鐵腸『新聞紙經歷談』（三）、文化全集新聞篇五三頁以下）。何れかといへば政府の自衞的動機が大分加はつて居り、必ずしも新聞紙そのものを目の敵にしたものではない。實施してみて、政府も案外の結果に驚いたことであらう。だが動機は兎もかくとして、此の條例發布の結果、新聞記者の筆には官吏侮辱、成法誹毀、國安妨碍といふ三つの大きな重錘（おもり）がつくことになつた。從來かち得てゐた自由が比較的大きかつただけに、これは甚だしい壓制と思はれ、靑天の霹靂とされ、突然のことゝて慌惑しない新聞社はなかつた。彼等はともかく論說の調子を加減して鋭鋒をひつこめる一方、聯合協議を催して、協力して犯例の程度を具體的に測知しようといふことになつた。それで福地源一郞（日々）岸田吟香（同）、藤田茂吉（報知）、箕浦勝人（同）、横瀨文彥（評論新聞）、及び鐵腸等が淺草第六天の福住樓に會合し、文例を持ち寄り、それに各條「この文例は官吏侮辱となるや、成法誹毀となるや、國安妨碍となるや」といふ伺ひを附して、一部に纒めて政府に提出した。ところが、政府からは指令の「限にあらず」として返付された。成る程指令出來得る事柄ではない、今日からは如何にも滑稽な馬鹿げた事に見えるかも知れないが、當時の彼等としてはそれどころではない、大眞面目であつた。而かもそれに出席した記者連は何れも當時第一流の錚々たる人物ばかりであつたのである。以て時代思想の幼稚な一面が分かる。

以上の如く、此の新條例の霹靂には、何の對策もたゝず、一時各新聞ともに屛息の有様であつた。

乙亥之秋八月既望、社主僕と机を並べて燭臺の下に集る、投書頻りに來たつて編輯終らず、紙を展べ筆を握つて、讒謗の律を調べ條令の文を誦す、少焉あつて汗雨腋の下より出でゝ横腹の邊に沾滴す、心配胸に横はり困苦肝に銘ず、一身の置き所を失ひ萬事の茫然たるを覺ゆ、慄々乎として邪を受け風を引き、其の寢たる所を起さるゝが如し、惴々乎として一生懸命輸業で綱渡りするが如し云々

戯文とはいへ、成島柳北の『辟易賦』は當時の新聞從業者の顚倒狼狽した心理の一面を眼に見るやうに穿つてゐる。實際、この條例の如き、解釋の如何によつては、如何なる事でも讒謗となり、如何なる事を揚げても官吏侮辱、成法誹毀、國安妨碍となるといつた性質の條文では、いくら新聞記者側で用心してものを書いたにしても、絶對に書くことを止めぬ限り、早晩何んかゞ引係るに定つたものである。況んやわが鐵腸の如き、若くて血の氣の多い、漢學者的理想のある、反政府的不平もなくはない侃々諤々居士に於いてをやである。彼は平生から、「筆硯を執つて文明社會の末に連なる」以上は、「天下百般の事に於て其利害得失の耳目に觸るゝものあれば」一々之を論辯し以て世道の萬一に裨補せん」と欲し、「之を以て罪を江湖に得るも亦顧みざらんとする」漢子である。新聞條例の發布の風說があるや、彼は直ちに猛烈に反對したが、いよいよ發布に會ふや、屛息どころか却て激した。彼はいふ——

吾政府新聞條例讒謗律を頒布せらるゝに當るや吾輩誤て以謂らく此れ吾黨平生主張する所の自由論と決して兩立すべからず以て天下の元氣を培養し一世の文化を誘導する所にあらざる也と故に一身の安危を顧みず自由發論の先唱となり以て吾賢明なる廟堂君子に献替する所あらんと欲し新聞紙上を以て言論の地となし日々筆を把て律例の可否を辯析し其の投寄文章に於ても論鋒の此に向ふものあれば繁濆を厭はず喜で之を採錄せり(三)

發布後の彼の政府攻撃の鋒先は益々鋭どく、斷然言論自由の率先者を以て自ら任じたのである。彼は青年の純な意氣地からかゝる惡條例に抗論する精神こそ一世の元氣を示すもの、又政府人民兩者萬世の利益を謀る所以であるとし、

その主義を自ら筆するに止まらず、投書でも寄書でも、この主意に合するものは敢然と皆登載した。此等投書中最も過激痛烈を極めたのは、三鱗某の文章（五三一號）、山根某中津某二人（五三九號）の文章であつた。これ等の文章は投書といふが、實は鐵腸の筆が可成りに加はつてゐる（疑へば、最初から投書であつたか何うかも疑はれやう）。かく鐵腸の言論が矯激に走つて來るのを見て、心ない人々は彼の狂愚を哀れみ、心ある人々は彼の猪突を危ぶんだ。果然、彈壓は先づ曙新聞社に下つた。八月二日社主靑江は主として上記の投書のため、召喚されて町內預けとなり、越えて四日いよゝ鐵腸の召喚を見、七日上記二通投書掲載の理由で、禁錮二ケ月罰金二十圓といふ官裁があり、更に二十日に及んで、上記の投書より以前（五一七號）高橋某の新聞條例論を掲載した廉で禁錮一ケ月罰金十圓の官裁があつた（二罪倶發例で、此の後の方は論ぜられずに濟んだ）。かくて彼は覺悟の如く、新聞條令最初の犧牲者となつたのである。これが國法による新聞記者の處罰の最初であつたゞけに頗る世人を驚かした上、法廷に於ける鐵腸の言動の男らしさ、新聞記者のために大氣焰を吐いたことなどが世間に傳はつたので、昨日までの靑年無名記者（社會的には）が一躍言論壇の花形となり、そのお蔭で曙新聞も名聲と賣高をぐつと增した。又此の條例は惡法には違ひなかつたらうが、然しこの時の裁判官の被告に對する態度も見上げたもので、一切國士をもつて遇したなど、實に床しい。兎もかく曙新聞の末廣鐵腸の名を天下に喧傳した點で、又後世明治言論史上に於いて鐵腸の名を不朽なものにした點で、此の官裁はやゝ安價に過ぎたものといつて可からう。況んやその禁錮が寛大な自宅禁錮で、面會文通が自由だと來ては尙ほ更である。負けぬ氣の鐵腸は此の自宅禁錮の間も內々で依然論說を書いて曙新聞に揭げさせた。而かも此の所謂「窮態」によつて感慨を增した鐵腸の筆は、痛烈悲壯の趣致を帶び、時の靑年に大に歡迎された。

　この鐵腸の筆禍事件がいかに當時の社會人心を動かしたかを知る逸話がある。鐵腸禁錮の報が傳はるや、福澤諭吉は彼と一面識がなかつたに係らず、慨然として、今回の事は日本言論史上に一大關係あり、彼が如きは後世までも名

を沒す可からざる人也と語り、わざわざ麥酒數打を贈つてその慰藉の志を表したといふ。(二) 以てそのセンセイションの一斑を察すべきであらう。

曙、始め各社の新聞の對政府態度が、鐵腸の所罰後著しく政府反抗の調子を强めたのを見て、時勢に敏感な政府當局は、不平士族が四方に充滿してゐる際濫りに嚴罰主義を用ゐるのを不可とし、俄に懷柔の手を廻はすことになつた。曙社の青江は元來が舊官吏であり官邊に知己も多かつたが、一日彼の友人芳川顯正(後の內務大臣)が井上馨の旨を受けて青江を說き、兩人の間に買收の約束が成立した。青江は更に一夜禁錮中の鐵腸に說き、井上との會談を慫慂した。鐵腸は枉げて會ふには會つたが、官權と妥協するのは、勿論素志でなかつたので、井上、芳川、青木の勸說には默して答へなかつた、だが青江が旣に可成り深處に踏み込んでゐて、自分の力では何うにもならぬのを察し、今は自分が曙新聞を去るの止むないことを覺悟した。それで密に成島柳北に手紙を送り、禁錮解除の曉には朝野社に入りたいがといつてやつたところ、今度は花形役者たる彼のことだから、朝野も歡んで直ちに編輯長として迎へることになつた。それで鐵腸は青江に對する禮として、內々で自分に代つて曙新聞の編輯長となるべき人を物色した。さうしていよいよ解除となつて、青江と圓滿諒解の上、後任者を定め、自分は暫時靜養して朝野に入つた。鐵腸の後任となつたのは、後に新聞界では關西の吾曹子と呼ばれ、仕官して諸縣の知事にまで至つた有名な關新吾である。此の時は勿論書生で、烏森の下宿屋にくすぶつてゐた。鐵腸の禁錮解除は明治八年十月六日、朝野入社は十月二十七日であつた。

註(一) 末廣鐵腸『新聞紙經歷談』(一)(文化全集『新聞篇』五一頁)

註(二) 右同

註（三）　鐵腸「入社之辭」（明治八年十月二十七日、朝野）
註（四）　西川通徹『鬼城自叙傳』（九四頁）（昭和六年九月刊）

三

明治八年十月二十七日朝野新聞には、鐵腸の入社の辭の外に成島柳北及び高橋基一の名を署した鐵腸入社の稟告なるものがあるが、この文章は實に鐵腸を推重すること至れり盡せりの觀がある。鐵腸の當時の人氣思ふべきであらう。半歳前には自分から記者の員に加はらうとして採用もされなかつたのに、二ケ月の試練を經た半歳後の今は、何といふ歡迎振りであらう。當時朝野社では柳北は局長と稱して別格待遇であり、高橋は編輯長である、その柳北は自ら局長を讓つて鐵腸を据ゑようとしたが、社主乙部鼎が流石に肯んじなかつたので、高橋は編輯長を讓り、自ら先輩の身を以て甘んじて下位に卽いた。高橋の雅懷もさることながら、鐵腸の記者としての市場價値の如何に大であつたかゞ察せられる。然しこれは朝野としては賢明な策であつた、鐵腸も此の破格な厚遇に感激し、柳北と心を合せて献身的に朝野新聞のために盡した。鐵腸が持前の慷慨口調で諤々と政治の得失、民權發達、國權伸張を論ずると、柳北は主として雜錄に隱れて時事諷刺に輕妙な才筆を揮ふ、兩々相俟つて一種いふべからざる光彩が加はり、これで朝野新聞の聲價は一時に揚つた。同時に記者としての鐵腸の名聲もこゝに定まつたのである。だが彼は朝野新聞に入社後幾ばくもなく、更に大きな第二回の試練に出會はざるを得なかつた。

此の年十二月二十日の朝野新聞（六九六號）に無題無署名の社說が掲げられた。これは局長柳北の筆に成つたもので、その大旨は、元老院には法律制定權があるから良法を制定して貰ふのは望むところであるが、同時に惡法は廢止して貰ひたいといふのであつた。惡法とは勿論讒謗律新聞條例を指したのである。鐵腸の禁錮を皮切りに嚴罰を食ふ

記者がこの頃踵を接したので、柳北も心中憤るところがあつたものに違ひない。ところがその中の一節に曰ふ、――

我輩ノ年少ナルニ當テ同社ノ士人ト天下ノ法律ヲ論ジテ天下ノ制度ヲ議ス當時兩個ノ士人有リ一ヲ井上三郎ト云ヒ一ヲ尾崎毅ト云フ共ニ才學有テ而シテ頗ル狡黠ノ術ニ長ゼリ能ク當路君子ノ意旨ヲ迎合シ以テ唯ダ利ヲコレ視ル我輩ガ法律制度ノ利害得失ヲ論駁スルコト有ル毎ニ彼ノ二人ハ必ズ我輩ヲ目シテ誹毀トシ讒謗トシ勉メテ我輩ノ口舌ヲ箝シ我輩ノ志ヲ抑壓セントセリ我輩ハ正論公議ヲ以テスレドモ彼レガ狡黠ノ詐術ニ敵スル能ハズ常ニ之ガ爲メニ困シメラレタリ云々

勿論井上三郎、尾崎毅は井上毅、尾崎三郎の入れ替へで、此の二人が新聞條例の編成者だといふ風說があつたので、幕末の事に托して存分諷刺したのである。鐵腸は柳北から此の文章を持ち込まれた時、これは條例にかゝる恐れがあるぞと忠告したところ、柳北は、自分は法廷で言ひ開きの出來る自信があるから、此の姓名を削り去つてくれるなと固執した。それで鐵腸も然らばと掲載したが、何でこの諷刺が條例に引掛からずにゐよう。翌九年の一月柳北及び鐵腸は刑事課から召喚されて、右の文章は故意に井上、尾崎を讒誣したものに相違あるまいと訊問された。柳北は待つてゐたとばかり、それは違ふ、人物も事件も實際幕末にあつたことである、本人二人は故人となつたといふが、その子孫は新潟と福岡に生存してゐる由、宜しくお調べを乞ふ云々と答へる。鐵腸も口を添へる。幾度調べても同じことである。口供の儘だと無罪にするより仕方がない。然るに此の頃政府では新聞記者の政府攻擊に業を沸して嚴罰主義を執ることになつてゐた上、井上、尾崎が親分ともいふべき大久保內務卿の手を通じて司法卿大木喬任を動かし、省內では新法の威嚴を示すため此の二人には是非最長期の體刑、最多額の罰金を科することに內々定つてゐたので、裁判官も板挾みになつて弱つた。それで當局でも大に手古摺つた揚句、策戰を代へ、風流判事鎌田景弼（醉石と號す、詩集あり）をして記者の名譽と首服遲速の利害をもつて二人を說かしめた。鎌田の溫情ある說諭には流石の二人も感

激せざるを得なかつた。且つ此の事件が既に天下に傳はつて、井上、尾崎の名が識者の笑柄となつてゐるので、腹癒せの目的も立派に達してゐる。そこで柳北が先づ首服し、鐵腸もこれにならつた。これが九年二月のことで、その十三日に愈々判決が下つた。曰く――

其方儀明治八年朝野新聞第六九二號雜錄中西村茂樹見込書ヲ編輯シ又ハ同新聞六九六號論說中二等法制官尾崎三郎井上毅ヲ讒毀スル存念ニテ直指スルトキハ律令犯觸ノ恐レアルヲ以テ成島柳北ニ謀リ古人ノ氏名ニ假托シ故ラニ尾崎三郎、井上毅ノ氏名ヲ交換記載シ右兩人ヲ讒毀スル科讒謗律第一條及第四條ニ依リ禁獄八ケ月罰金五十圓申付ル

柳北の分は略す。鐵腸が主犯として罰が重く、柳北が輕かつたのは（禁獄四ケ月罰金百圓）、條例に定めるところに依つたものであり、鐵腸が柳北を庇つた譯でも何でもない。刑の決定と共に二人は鍛冶橋の獄に下つた。判決文中西村茂樹の見込書といふのは、西村の讒謗律新聞條例の批評めくものが評論新聞第四十五號に出たのを轉載したことを指す。鎌田判事は此の裁判を片付けた手腕を認められ、縣令に拔擢された。因みに右の見込書一件と同時に調べられた西河通徹投書の件（八年十二月二十四日）は有罪となり、三月鐵腸は禁獄六ケ月罰金百圓、西河は禁獄三ケ月罰金五十圓を科されたが、鐵腸の分は二罪俱發例によつて論じられずに濟んだ。

この時の獄中生活については、柳北の『ごくないばなし』及び鐵腸の『轉獄新話』その他で可成り明白に知られてゐる。當時獄中に於ける記者連中の生活の如何なるものであつたかは、略ぼ見當がつく。柳北は九年六月に無事出獄したが、新聞條例發布の八年六月から此の時までに前後して入獄した記者は、約三十名を算したといふ。「記者ノ禁網ニ罹ルノ多キ實ニ此ニ至テ極點ニ至ルト云フ可シ」といふ柳北の言も誇大とはいへない。鐵腸は柳北とは別檻であつたが、讀書詩作談論といふ生活順序は同じことであつた。鍛冶橋時代は書物以外筆墨は許されなかつたので、鷄卵の黃味を箸の尖につけて詩を書いて送つたなどゝいふ逸話もあつたが、市ケ谷へ移つてからは（九月）、筆墨も公然

許されて、大に便宜を得た。鐵腸は元來が漢學書生のことゝて、洋學は知らず、新聞記者になつてからはその必要は認めても時間がないので學べずにゐたが、この八ヶ月の禁獄に圖らずもその機會を與へられ、始めて同獄の某々に就き、又獨案内によつて英語を學んだ。さうして熱心は恐ろしいもので、出獄放免の頃には、兎も角も簡略な英書なら解讀出來るまでになつたといふ。此の八ヶ月間の修養が、この後十數年間の記者生活に何れ程役を助けたか分からなかつたであらう。十月九日、いよいよ八ヶ月二百四十日間の刑期を終へて元氣よく市ヶ谷より放免された。その獄中諸子に留別する詩にいふ――

湖海茫々伴侶歸。出籠幽鳥奈孤飛。秋風有恨誰相識。回首西山空夕暉。

家に歸つての詩にいふ、――

須將文墨了前緣。自覺壯心窮益堅。脫却囚衣先一笑。依然此筆大於椽。

朝野新聞は此の頃既に一流中の一流新聞と認められて來てゐたが、柳北及び鐵腸の入獄が世評に上り、その獄中生活が紹介され、獄中作の詩歌が傳唱されるにつれて、朝野の人氣は急を加へた。鐵腸の出獄した頃には六千内外に上つてゐたが、出獄後一月を出ずして七千に達し、翌十年一二月頃には飛ぶも飛んで一萬八千餘となつた。これは當時としては無比の驚嘆すべき發行高で、この前後が實に朝野新聞の黄金時代であつた。

(四) 柳北は鐵腸の言にきかずして此の度の筆禍を生じたことを遺憾とした、殊に忠告者の鐵腸が主犯で重く罰せられた點については、衷心から氣の毒に思つたらしい。(二) それで、鐵腸が出獄するや、彼を推して局長とし、別格待遇の坐を分つて優遇の意を示した。此の時に當つて有志の士は、實に鐵腸の辛苦を多とした、折しも、此の年九月、明治大帝から元老院に對して國憲制定の聖勅を下されるに至つたので、これも一重に鐵腸等のおかげ、殊に鐵腸自身のおかげ

であるとし、その「生靈を祭らん」と（戯れにせよ）した者さへ現れた程であつた。(二)

註(一) 朝野新聞九三三號雜錄「末廣ノ蔭膳」

註(二) 同 九三八號雜錄「末廣子ノ生靈ヲ祭ル」

四

明治九年の後半、丁度鐵腸が出獄したころから西南戰爭の前奏曲が始まりつゝあつたが、西鄕が突如起たうなどゝは眞面目に考へられなかつた。熊本、秋月、萩、それから東京へも飛火したから（思案橋事件）、鹿兒島でも何かやるだらうとは何人も想像してゐたものゝ、西鄕がゐるから抑へて妄動させまいと見られてゐた。九年の末（十二月十七日の朝野新聞）に鐵腸が西南の大亂を豫想して、「眼ヲ擧テ西南ノ一角ヲ望ミ秋天ノ一碧ナル間ニ於テ半點々ノ颶母ヲ現出スルガ如キモノヲ見タリ」云々と論じたが世人は多く信ぜず、政府當局さへこれを妄言と見做したのである。だが十年二月に及んで果して豫想は適中し、肝心の西鄕が不平士族の御神輿にされてしまつたので、今度は朝野新聞の機敏な豫想に驚いた。然しこれにはそれだけの譯がある、鐵腸は、當時鹿兒島黨の耳目たる評論新聞の記者達と親交があり、且つその社にも屢々出入し、九年一月からは論說の補助もしてゐたから、竊に彼等の本據に於ける計畫を聞き知つてゐたわけである。これが又朝野の社會的信用を高めたことはいふまでもない、朝野が最高部數を刷出したのが、丁度西南戰爭の初期であつた。

戰爭の豫言で當てた朝野は、然し戰爭を利用する點では敗けた。初め、いよいよ大亂勃發と見るや、鐵腸は早速自ら從軍記者として戰場に出向くことを發議した、だが柳北は例の高踏主義から、これを不必要として贊成しなかつた。然るに東京日々では敏速に社長の福地自身が戰場に出張して戰地通信の人氣を一人占めにした觀があり、郵便報

知も大套数を派遣してこれに劣らぬ成績を擧げたので、流石の柳北も默視されなくなつたか、自ら買つて出張した、だが出張はしたもの丶戰場には往かず行在所たる京都に滯在して、當局者から得た戰地の報告を通信するに過ぎなかつたので、留守の鐵腸等が如何に頑張つても他社より記事の光焰が薄らいでゐたのは止むを得なかつた。且つ柳北は戰地通信の不足を補ふつもりか、頻りに京都で見聞したものを書いて送つたが、祇園の歌舞鴨川の景色文人墨客との談話等が多かつたので、所謂柳北宗信者には大に喜ばれたもの丶、此の爲めに一般讀者の反感を買ひ、幾分の聲價を落した。柳北も後には我を折つて、熊本城と官軍と聯絡がついたころ、自分は歸京して朝野社から二名の記者と戰地に送つたが、大に手遲れとなつて、全く信用を恢復するまでには至らなかつた。

十一年五月紀尾井坂の變には、逸旨く變事及び現場の景況を記載したのみか、刺客一味の斬姦狀が屆いたので、その要領を摘記したところから當局の怒りを買ひ、朝野新聞は發行停止を命ぜられた。これは日刊新聞發行停止の最初で日本の新聞發達史上特筆すべき事件である。これを手初めとして、新聞の發行停止は大流行となり、殊に朝野にあつては毎年發行停止に會ふものが幾回なるを知らず、そのうちで長いものは五週間にも及んだ。これが又、やゝ下り阪の朝野新聞には當然可成りの痛手となつた。依然一流新聞たる權威は落さず、柳北、鐵腸、高橋基一、淺野乾の外、横瀬文彥、小松原英太郎、草間時福、城多虎雄等の有能な記者が前後入社して助筆した。

五

明治七年の民選議院建白に端を發した自由民權運動は西南の亂で一時その發展を妨碍されたが、亂後は再び擡頭して、國會願望を中心とする形態をとり始めた。この國會運動は大體二派に別れるが、それは專ら實行主義で國會の開設を直接に請願するといふのが一派、又間接に人民の政治思想の進步向上を謀つて、自然に國會開設の機運に至らし

めようといふ啓蒙主義が一派、前者は國會期成同盟がこれを代表し、後者は嚶鳴社、北辰社の如き啓蒙團體がこれを代表する。二派は勿論完全に獨立したものではなく、或る點で相互に關係し、相互に聲援し合ひ、同情し合つてはゐるが、然し運動方法に關する意見は相違してゐた。わが鐵腸の如き、都市インテリゲンチヤの文筆階級の多數は此の後者の方に屬してゐた。彼等は新聞と演壇とによつて、文章と談論とを武器として、大衆の政治的教化を志ざしたのである。

鐵腸は朝野新聞を舞臺としてその筆を存分に揮つて民權主義的政治論を吐露した。これは周知の事實で詳しく述るまでもない。その內容の如何なるものであるかは、後に一瞥するとして、吾等は先づ談論による鐵腸の啓蒙運動を語らう。さうしてこれを語るには嚶鳴社なるものについて簡單に述べる必要がある。

嚶鳴社は前身を法律講習會といふ。沼間守一が、福地源一郎、益田克德と共に起したもので、明治九年四月下谷の摩利支天横町德大寺で開講したのが最初であるらしい。初めは政法の書を講習するのを目的とし、傍ら演說討論の練習をなした。西南の役が平いで國會論が勃興して來るや、彼は法律講習會の組織を一變して嚶鳴社と改稱し、專ら政談を試みて人民の政治的啓蒙に盡力した。此の頃沼間は元老院權大書記官であつたが、民權論者のチャムピオンとして聞え、その討論會場たる柳橋の萬八樓は天下俊才の言論を發表する場所と思はれ、嚶鳴社員の言動は直ちに市民の輿論となる勢ひがあつた。時の元老院議長有栖川宮熾仁親王も同院幹事河野利鎌の案內で數度臨場した。十二年五月政府は論達を出して官吏が公衆を集めて政治學術の談話をなすことを禁じた、多く官吏を講習者とした嚶鳴社はこれで打擊をくふ形になつたが、沼間は一日よく熱血を吐いて百數十の聽衆に說いて全部入社して貰つたので、却つて社運を好轉堅實ならしめた。次いで嚶鳴社の勢力を社會に知らせたのは、此の年八月グラント將軍來朝の際、府會議長福地源一郎等二三の府會議員が府民總代の名を勝手に使つたことを痛擊した事件である。この沼間の雜辯には六百の

聽衆が固唾をのんで聞き惚れた。福地も東京日々に據つて辯駁を加へたが、然し結局閉息し、公人として容易ならぬ痛手を負はされた。かくて十二三年頃には關東及び東北に二十九の嚶鳴支社と一千の社員を擁するに至り、國會期成同盟會と天下の政治界を二分する勢ひを示した。十三年末、期成同盟中の會志が政黨組織を試みるや、沼間は嚶鳴社中の數子と共にこれに加はり、座長として周旋し、自由黨を先づまづ假に結成せしめた。

鐵腸が嚶鳴社員となつたのは何年であるか、正確には知れないが、十二年六月には同社の演說會に出て雄辯を振つてゐるところを見ると、それ以前、恐らく十一年頃であらう。或はもつと早く法律講習會時代からの一員であつたかも知れないが、十一年初め頃の有力な社員中に鐵腸の名が見えないところから推すと、十一年の後半から十二年へかけて加入したものであらう。或は十二年五月沼間の熱血演說に感動したものかも知れない。兎もあれ、十二年後半に於いては、その新聞の背景と雄辯の力によつて鐵腸は最も有力な社員の一人に數へられ、嚶鳴社の演說討論會には殆んど每回出席するは勿論、此の年十月同社で各國憲法を調査して私擬憲法を作ることを決議するや、彼も、河津祐之、金子堅太郎、島田三郎、田口卯吉、小池靖一、河村重固等とその委員の選に當つた。十三年四月集會條例の布令は日本言論史上空前の災厄であるが、嚶鳴社もそのために多少組織を變更し、爾後討論會のみは嚶鳴社員のみで非公開で續行し、演說會の方は分離して東京演說會と稱した。東京演說會に於いては、雄辯家としての鐵腸は沼間を凌ぐ程の名聲を得、立役者中の立役者となつてゐた。

此の頃、三田慶應義塾出身者を中心にした演說會に政談演說討論會といふのがあつた。馬場辰猪が牛耳を執り、井生村樓を會場にして大石正已、江口高遠、奥宮健之、犬養毅、竹内正志、波多野承五郎、西村玄道などが出演してゐた。これが十三年の末に及んでその組織を改め、廣く世間の雄辯家を迎へて同志にすることになつた。彼等は先づ田口卯吉及び鐵腸を招いで、共に演壇に立たしめた。田口及び鐵腸は喜んでこれに應じた、さうして何れも嚶鳴社員で

ありながら此の會の演説にも殆んど毎回出席した。殊に鐵腸は此の會に於いても、馬場、大石と並んで大に人氣があつた。此の會の論客にはインテリ青年が多く、從つて論調も活潑であり、思想も幾分急進的分子をもつてゐたので、殊に青年の聽衆をひきつけ、回を重ねるにつれて盛大に赴いて來た。それで遂に明治十四年四月、此の會が中心となり、國友會なる政治的啓蒙團體を組織した。鐵腸はこの時、國友會組織の議に與かり、遂に同志と共に嚶鳴社を脱して、國友會に加はつた。有力な會員は、馬場、大石、田口、波多野傳三郎、原猪作、鈴木萬次郎、堀口昇、西村玄道、本多孫四郎、佐伯剛平などであり、これに鐵腸はその親友で同志たる高橋基一、淺野乾、門田友太郎等を率ゐて合した。會の牛耳を執る者は勿論馬場、大石、鐵腸の三人であつて、他の會員に異同があつても此の三人は動かなかつた。かくて次第に盛大になるにつれて、國友會はその政治的啓蒙運動に於いて立派に嚶鳴社と對抗が出來る、嚶鳴社にとつて一敵國となつたのみか、表面的には馬場、大石、鐵腸、此のトリオの活動の方が華やかで生き生きしてゐたので、ある時期は確かに嚶鳴社を凌ぐかの如き觀をみせさへした。

國友會の活動本據は淺草の井生村樓であつて、毎月二回乃至數回演説討論會を催して、大衆の政治的啓蒙につとめた。その他地方からの招聘によつて隨時出張講演もした。

十四年八月、卽ち、國友會誕生間もなく端なくも啓蒙的政治論者と實行的政治論者とを接近させる一大事件が生じた。それは北海道開拓使拂下事件である。これが契機となつて、鐵腸は國友會と共は實行的政治運動に加入し、やがて、政黨組織に奔走することになる。

六

北海道開拓使拂下事件は今日からいへば、二重の意味で政府側の失敗であつた。これによつて內部不統一の現狀を

暴露したのは勿論であるが、それより重大なことは、民間の政府攻擊者反對者に目標を與へ、彼等の攻擊力を合同せしめたことである。從來は、誰でも一口に民間運動といふ語で總括して語るので如何にも一纏めに連絡のついてゐるやうな感じを與へてゐるが、實際の民間關係の參政運動はさう統一のある連絡のついた一絲亂れざるものではなかつた。これに與かる改進主義者中にも急漸の二派があるは勿論、急進論者必ずしも全國一致した實際運動をなしてゐたのではない。又言論の方とてもその通りである。各社各團、口では協力を唱へても、實際はたかだか感情的異見を捨てなかつた。然るに一とたび此の問題が外間に漏洩すると、諸新聞は猛然筆を揃へて政府に迫り、各團體は聲を合せて政府の非を鳴した東京と大阪と呼應し、更に東西各地がこれに響應して、日本全國が文字通り鼎沸の狀を示した。全國諸新聞は、京濱每日、郵便報知、朝野、曙等の論說を指導理論として、連日同一主義の激烈な攻擊を試ろみた。漸進派の東京日々さへこれに加はつた。又言論で最も大きな刺激を世人に與へたものは、東京に於ける國友會、橫濱に於ける顯猶社、大阪に於ける慶應出身者の演說會、大阪日報社一派のそれの如き、代表的なものではあつたが、何といつても、八月二十五日、新富座に於ける嚶鳴社中心の大演說會が最も效果的なものであつた。

勿論民間運動者の烱眼は、この氣勢を本來の參政要求運動の進展に利用することを忘れなかつた。彼等は政府の失政を筆舌で攻擊した揚句、定つたやうに「これも畢竟は我が國に國會なく憲法なきの致すところである」云々と結論した。社會大衆はこれを喝采して受け入れた。在官者でさへが有志の人々は反對しなかつた。鐵腸のいはゆる「社會と言論の一致」は實現した。政府は矢繼早やの民間黨の攻擊に幾分自失の態で、得意の集會條例、新聞條例の適用さへよくしなかつた（有力な反對があつたともいふ）。此の好機に於いて民間諸團體が一大合同運動を起し、今一歩手強く攻めたてたなら政府も案外もろく城を明け渡したかも知れない。聰明な民間運動の指導者達にこの邊の消息が看取されない筈がない。今が好機だ、何とかして口火をきりたい、彼等の或る者は期せずして胸中から感じたであら

う。折も折、いはゆる南海の臥龍たる板垣退助は、八月末高知城下の草廬を起ち、東遊の途についた。彼等の二三は、此の報を得て、これこそ天與と勇んだであらう。わが鐵腸もその一人であつた。

板垣は先づ大阪でその第一聲を揚げて「自由の眞理」を論じ、横濱では民間團結の必要を說き、九月十七日を以つて東京に入つた。同二十三日嚶鳴社、國友會の有志が發起人となり、上野精養軒に府下の少壯政治家政論家の合同懇親會を開き板垣を招いて將來の運動方向を議した。會衆は板垣の外、西園寺公望、中島信行、竹內綱、福地源一郞、藤田茂吉、肥塚龍、田口卯吉、大石正巳、小室信夫、益田克德、尾崎行雄、高島小金次等三十餘人で、鐵腸も發起人の一人として列席したのみならず、總代として（沼間は旅行不在）此懇親會の主意を述べた。彼は先づ「向來互ひに親和協同して一大政黨」を組織することは大に必要であるが、それにつき諸君の意見を問ふと切り出した。中島信行は起つて、、この會を機に自由主義の一大政黨の出現を望み、藤田茂吉はこれを賛し、板垣又同志間不一致の戒むべきを說いた。それより本末の議論續出となり、贊否交々あつたが、結局發起人その他の斡旋で、滿場一致、政黨組織の方案を起草することゝ定まつた。席上、板垣が蹶起して、今回の開拓使事件を痛擊せんことを慫慂した人々があつたが、板垣はこの方に對して冷々然として應じなかつたので、あはや會が分裂するところであつた。由來板垣は兵機に曉いといふ、然るにかゝる敵陣攻擊の好機をすてゝ顧みず、不急の漫遊を續けた心事は解し難い。思ふに、板垣及びその一味は政變近しと見て東上したものではあつたらうが、然し直接開拓使事件に捲き込まれては、これによつて政府落城の曉、その反對者と稱されてゐた大隈重信をして獨り名を成さしめる如きは拙いと考へたものであらう。又多年實行運動に力を入れて來た板垣一味からいへば、輕視すべき口舌の徒が此の問題を機會に今更天下取りの大仕事に割込む如き、蟲が好いと內心思つてゐたかも知れない。兎に角板垣等は口で大合同の必要を唱へつゝも、開拓使事件の合同攻擊を避けた。さうして板垣一派卽ち國會期成同盟の人々は別に精養軒懇親會の翌日向島八百松に會して一

大政黨を結成すること、東洋自由新聞を再興する（この新聞の件は後に一時中止）ことを議決し、板垣はそのまゝ北陸に去つた。

政府は異常の決心で、此の間突嗟に陣容を立て直し、政府内の異分子を排除すると共に、民間運動の機先を制して、明治廿三年を期して國會を開設する旨の聖詔降下となつた（十月十二日）。

此處に於いてか期成同盟はその存在の意義がなくなつたので、十三年末假結成した自由黨なるものに合流し、更に同志を得て一大政黨を結成するに至つた。この時馬場、大石及び鐵腸は、國友會員を擧つて自由黨に參加した。たゞ十三年の自由黨の產婆役ともいふべき沼間守一が馬場と善からず、遂に此の新黨結成に加はらなかつたのは、遺憾であつた。（精養軒の政黨組織の議は、組織案の起草まですゝみ一種の立憲政黨なるものを立てるつもりであつたが、結局立消えとなつた。これと沼間の嚶鳴社一派とが合併して、翌年三月の立憲改進黨の核心となつてゐることは、注意すべきである）。

此の年十月二十九日、自由黨で役員の選擧を行ふや、馬場と鐵腸は常議員に、大石は幹事に當選した。

七

十五年三月改進黨の出現と共に、朝野新聞はイデオロギイ的に二分した。社主乙部鼎及び社長の成島柳北は大隈の傘下に赴いた。鐵腸と共に自由黨に加はつた人々は高橋基一、西村玄道、淺野乾等である。柳北は然し鐵腸の爲人を重んじ、別にその言動に何の制肘も試みなかつた。その他の人々も依然同社にあつて私交は親密に續けた。六月自由黨の機關紙自由新聞が發刊されるや、馬場、大石、鐵腸は社員と署名し、馬場と鐵腸は社說掛に選ばれ、國友會員佐伯剛平、西河通徹は調局、西村玄道は會計掛を補けた。鐵腸等は自由新聞に關係を生ずると同時に朝野新聞紙上で朝

野の立場の不偏不黨なることを公言した。とはいへこれ以後朝野の言論は歩調が一致せず、社會の信頼が昔の如くには行かなかつたのも、止むを得ない。

だが鐵腸等と自由新聞の好望な關係は長くはなかつた。此の年四月、板垣退助は岐阜の演説會に刺客の難があり、大阪に創を養つて、六月歸京した。然るに既に自由新聞發刊も故障なく緒に就き、黨勢も順調に盛大に赴いたのを機に、後藤象二郎から外遊同道の話をもちかけられ、これを承知した。もちかけた後藤にも複雜な心理の動きがあり、承知した板垣にも相當複雜な心理があつたらう。板垣の周圍には二つの感情が渦いてゐた。板垣の爲めに謀るものと自由黨の爲めに憂慮するものがあり、前者は自由黨の激化から板垣を西郷の二の舞にすまいとし、後者は同じく自由黨の激化を憂へても、これを抑へて一致團結發展せしめることを主張した。從つて外遊の計畫に前者の感情が籠つてゐるとせば、後者の側から反對の聲が揚るのは明白である。此の外遊の計畫が發表されるや、果然大反對が起つた。反對の急先鋒は馬場、大石、鐵腸等、主として國友會員であつた。最初の理由は、自由黨は今丁度船體が出來て港を出ようとするものに似てゐる、此の大事の際に船長たる總理に下船されて觀光旅行に行かれては堪らぬ、といふのであり、これには黨中共鳴者頗る多く、東京地方部の如き部の決議として反對した程である。然るに沼間守一の率ゐる改進黨派の東京横濱毎日新聞は、一石を投じて曰ふ、板垣後藤の洋行は結構なるも、費用の出所が頗る怪しいと。沼間は果して何等か知るところがあつて此の言を成したか、それともたゞ從來の感情的行掛りから成したものかは分からぬが、意外にも今日からせばこの言は的中してゐた。これが自由黨の外遊反對者にとつて新に好口實として採り上げられたのである。然し本來、これが事實であつても、自由黨員自身としてはかゝる事をもつて口實に利用すべきではない、あくまで最初の理由をもつて押すべきであつた。鐵腸のいふ如く、費用の問題は枝葉のみである。然し度々の折衝で感情的になつた彼等にはさういふ思慮まではなかつた。遂に費用問題で外遊反對派は、板垣と猛烈な正面衝

突をした。感情家の馬場は、殊の外いきり立つて自由新聞で公然外遊反對を論じかけた。板垣も止むなく新聞發起委員に計つて九月二十八日馬場を退社させた、そこで鐵腸も同日自ら退社し、西村以下も多くこれに倣ひ、國友會（此の頃は國友社と改稱）と自由新聞との緣は切れた。かくて板垣は反對を押し切つて、後藤と共に十一月洋行の途に上つたのである。

沼間の一石は、自由新聞に致命の一擊を加へたもので、沼間個人の感情的滿足は得られたかも知れぬが、然し此の爲めに改進黨と自由黨の薄い交情さへが地を拂つた。馬場の代りに自由新聞の主筆となつた古澤滋は、自由黨を代表して、改進黨に石を投げ返し、黨首大隈と岩崎彌太郎との特殊關係を說き、改進黨の賄ひ方は三菱にありとなして、猛然三菱征伐を始めた。尤も古澤には別に三菱を攻擊する理由があつた。彼は、これもやはり三菱壓迫を策して共同運輸會社を創立した當時の政府の旨をうけてゐたのである（井上馨を介して）。古澤の攻擊に對して東京橫濱毎日、郵便報知を始め筆を揃へて駁擊した。此の爭ひは十五年末から十六年春に及んだ。これより先き精養軒の會合では政黨組織案起草の委員になつてゐた福地は政府に買收されて、立憲政帝黨たる御用黨を作つてゐたが、此の際兩黨の間にあつて離間の策を行つたものである。十六年四月自由黨は大會を開いたが、その時黨の今後の運動のプログラムの一つとして改進黨の徹底的膺懲を決議した。さうして翌五月久松座に於いて改進黨及び三菱攻擊の大演說會を開いた。いはゆる『僞黨撲滅』、『海坊主退治』の大運動である。これが東京を起點として殆んど全國的に起されることになつた。この際、古澤等は共同運輸の回護をなして、一部黨員の不快を買つた。且つ外遊反對論者を悉く三菱から何か特に手當をもらつてゐるかの如く諷した。馬場、大石の如き多少とも三菱に關係ある人間には古澤の遣り方がいかにも憎むべきものに見えたらう。それで、六月板垣が歸朝したのを幸ひ、古澤の處分が提議された、然し板垣はそれに從はなかつたので、遂に馬場、大石は決然自由黨を去る、鐵腸も勿論二人と行動を共にした。さうして國友會の古巣に

立て籠り、獨立黨の創立を宣言したのは、十六年九月である。その二十三日、井生村樓で鐵腸は「獨立的黨ノ必要ナルヲ論ズ」と題して自由黨を去る所以を辯じた。これは、先づ政黨本義から始め、自由黨の歴史、立黨の精神に及び自由黨の今回の所爲は當初立黨の理想に反する、故に吾等は同黨を去るが、去つたのみでは無意味だから自由黨立黨の大精神を實現するために獨立黨を組織し、同志を天下に求めるといふ主旨の堂々たる大雄辯であつた。而かも獨立黨宣言の翌日が帝政黨解散の日であつたのは、一奇といへばいへる。

こゝで一言鐵腸の爲めに辯じて置くべきは『自由黨史』の著者の言である。著者は何所から聞いたか、馬場を板垣に嗾しかけた張本として鐵腸を指し、これ偏に鐵腸が馬場を排して自ら自由新聞の主筆となりたいためだとなしてゐる。思ふに當時鐵腸等の心事に關して幾多のいはゆるデマが飛んでゐたに違ひない。現に鐵腸自ら、この頃自分が三菱から多額の金を得て自由黨の岩崎征伐に反對してゐるといふ風説があるさうだと一笑してゐる。自由新聞云々も、恐らく鐵腸の心事を誤つて忖度したデマの一つと認めざるを得ない。鐵腸は既に瘦せても枯れても朝野新聞なる大新聞の實際上の主宰者である、何を苦しんで今更新興の經濟的基礎の怪しい自由新聞にさう執着をもつてゐやう。且つ又、その大同主義から自由黨に加はつたものゝ、元來彼の政見は改進黨主義、英國流であり、自由新聞の米佛流とは一寸立場を異にする。進んで急激主義の自由新黨の主宰に當らうとは考へられない、事實文名があるために社説掛にはなつてゐるものゝ、自己宣傳流に出しや張つた形跡はない。且つ又、鐵腸は此の一二年、健康上甚惡の場合に置かれてゐた。肺炎につぐにチフスをもつてし、死を傳へられたことが再三である。自由新聞の成立は、丁度その病後保養の時である。朝野さへ休みがちである、さういふ時に殊更慾張つて他の新聞の主筆を爭ふなど、常識では分からない。蓋し當時の事情を綜合するに、三人は確かに外遊費の出所について大なる疑問をもち、多少偵知したところがあつたに違ひない。馬場、大石は三菱に關係あり、末廣は改進黨の諸士と親近でもあり、十五年十二月改進黨員中心の

明治協會といふものが出來たが、鐵腸は自由黨員であつて明治協會の會員となつてゐた。政府大官中知己がなくもない(井上の如き)。從つて何か嗅ぎ知つてゐたらう。だが確證はなかつた。然し外遊反對は多少その邊の動機があつたにしても、大體は純理純情の立場から黨の結束を憂へた爲めと解するを至當とする。馬場、大石が先づ唱へ、鐵腸がこれに贊成したと見るのが、當らずとも遠からぬ所であらう。若し鐵腸が板垣に對して馬場を離間した實證があるなら、當時斷乎として鐵腸を擊つたが可い。當時此の擧に出たものが一人としてなかつた。且つさういふ事實があれば馬場、大石が、その後末廣と仲違ひしさうなものであるが、さういふこともない。『自由黨史』にいはゆる鐵腸の離間策說はデマに止まるものである

八

十六年六月歸朝後の自由黨首板垣が故鄕の草廬に歸臥したなり殆んど何の新活動を示さなかつた。かくて黨幹部に不滿な靑年組の意氣が爆發して加波山の一擧(十七年九月)となるや、あはてゝ黨員大會を東京ならぬ大阪に開き、政府の壓迫云々といふ泣言めいた理由を名文句で飾り、今後は無形上の團結を事とする云々といふので、遂に解黨してしまつた(十月)。折しも新潟で官吏侮辱罪のため責付にあつた星亨(彼は十六年に後藤の紹介で入黨したものであるが、その人物財力のため早くも領袖の一人となつてゐた)は、反對の電報をうつたが、問題にされなかつた。種々無理のない理由はあるが、立黨當時の意氣を思ふと龍頭蛇尾の感がなくもない。

自由黨を脫した獨立黨は如何。馬場、大石、及び鐵腸の三人は、國友會及び朝野新聞を根據として大にその主義主張を宣傳した。此の黨は原則として主義上の團結を主とし、有形的な黨員の團結はもたぬことにしたので、形の上では盛否をトし得ぬが、自由黨幹部に不平不滿で此の三人に前後し脫黨した人士が相當あつたので、そのうちには三人

と共鳴するものもあり、地方に支部めくものゝ出來たことも一二に止まらなかつた。殊に目ざましかつだ出來事は、十七年一月名古屋の愛國交親社の獨立黨員招待の大演說會大懇親會である。愛國交親社は元來熱心な自由黨で、主として舊士族の團體で腕力黨であつたが、自由黨のやり方に政府と裏面に一脈通ずるところがあるのを見て、不滿の餘り自由黨と絕縁したものである。首領庄林一正は古武士風の頑固漢ではあつたが、封建親分的氣質を多分にもつてゐたので、二萬五千の黨員は手足の如く動いた。それが此の時、獨立黨員を迎へて、反自由黨の大演說會をやつた。自由黨側でも此の大會を無事に濟さすか濟させぬかで問題となつたが、然し交親社側の凄じい勢ひに恐れて手を出さなかつた。この時臨席したのは馬場、大石その他であつたが(末廣は冬から神經痛で臥床中)、交親社は社員總出で護衞につとめた。此の他金澤盈進社、信州正理社が皆獨立黨に賛成した。

かく極力獨立黨の主張を宣傳する一面、政黨大合同の精神を忘れず、鐵腸は十七年一月改進黨系の明治協會に加入して、改進黨と連絡を通じた。

十八年は鐵腸にとつても獨立黨にとつても厄年であつた。鐵腸は近年頻りに大患にかゝつた。十五年には肺炎で死を傳へられ、十六年にはチブスで死に損つた。爾來、常に身心何となく違和を覺え、筆舌の活動も思ふに任せぬことが往々あつた。それで夏冬は箱根熱海等に轉地して養生したが、何うも思はしくない。十七年十一月には社長柳北の死にあつて、朝野の重荷が彼の双肩にかゝつたので、彼はその聲價を落すまいとして自然無理をした。身體の工合は益々惡い。それが、此の年三四月、主治醫によつて彼が可成り重い糖尿病に罹つてゐることを發見された。身心違和の源因がこれだつたのである。醫術の未進步の當時はこれを蜜尿病といひ、一種稀有の奇病となした。鐵腸はこれが根本的治療をなすため大學病院に入り、郵便報知社から犬養毅を迎へて、自分の代理とし、當分は療養を專らにした。入院が約三月、その後箱根に遊ぶこと六旬餘、先づこれで大體糖尿がなくなつたが、それでもなほ劇務は一切避

けて服藥と養生をつゞけ、醫師から愈々再生を宣言されたのは、翌十九年の六月であつた。

鐵腸が病中病後の間に政治界は何うなつてゐたか。表面的には政府の勝利で、政府は權力をもつて民間運動を彈壓する一方、又その多少とももつてゐる進歩的使命の實現に能ふ限りつとめ、憲法政治の前提として內閣を作り、鋭意憲法政治の改革につとめてゐた。政府に彈壓された民間鬪士はやむなく潜行運動に力を集め、加波山事件以後續々某某事件、何々暴動が爆發した。殊に人心に大きな刺激を與へたものは十八年十一月の大阪國事犯事件である。これには舊自由黨の名士が多數關係してゐた。然るに此の事件の間接の捲き添へとして、此年十一月三十一日馬場、大石二人は爆發物買入の嫌疑で突然入獄の身となつた。問題は、此の二人が横濱の英商で匿名で爆裂藥の價格などを問ひ合せた件で、そのために折柄の國事犯事件と同志か別働隊か乃至は全然新手の企てかと見られたのである。入獄は十八年末から十九年につゞき、五月公判、六月證據不十分で無罪放免となつた。馬場等の主張は、たゞ偶然該商店に立ち寄つたまでとなつてゐるが、實際は馬場、大石の言動に照して果してさう偶然の出來心かどうか、今日からは疑問がある。然し要するに證據不十分である。二人は出獄のその月のうちに渡米してしまつた。

かく國友會の三立役が、一は病氣、二は入獄するに至つた。表面は依然時々演說討論を催してはゐても、もう實質的には生命を失つたものになつた。從つてこれと同時に、國友會を根據としてゐた、獨立黨も自滅した形になつて來た。然し獨立黨はもう黨として自滅しても悔ひがなかつた。それは、十九年には、舊自由黨再建の運動が（星を中心として）起ると共に、鐵腸等が立黨の大精神として脫黨を賭して護持した大合同主義が聊か實行可能らしいものになつて來たからである。

十八年から十九年にかけて病中或は病後に、鐵腸は和漢の小說を盛んに讀んだらしい[一]。最初は、恐らくこれを消遣の具としたものに違ひなかつたらうが、やがて彼の小說稗史の涉獵は此種のジャンルの文學に對する興味をよび（時

の政界事情と相まつて）彼自身に政治小說を案ぜしめるに至つたのである。

註（一）　十九年十月二日朝野新聞雜錄「小說改良」は新聞小說の改良を說いたもの、筆者の虎門居士は鐵腸であり（虎門にあたので）、鐵腸が小說涉獵の名殘りの一つであらう。案外居士といふのも可成りあるが、これも鐵腸らしい、然しこれは未詳として置く。

九

十八年に委微したかと見られた民間政治運動は、十九年に入つて次第に活氣を帶びて來た。それは、一言すると民間の經濟的復活と、政府の勝利から來た油斷によるものといふべきである。十九年の後半に至つて、先づ著しく目立つのは、舊自由黨の再興運動で、その中心は、かつて自由黨の解黨に反對した星亨（十八年十月出獄、二度目の洋行後）であつた。星は解黨反對論者である。その星が再興論の中心にをるのに不思議はない。然し單に舊自由黨の再興といふのでは、時機が不可と見て、先づ民間黨大合同を計らうとした。星は破壞力の強い人間であるが、然し元來が頑迷者流ではなく、且つ外國にも遊んで、その政治思想の根本は英國流である。だから改進黨と提携しても、別に理論的に困惑する譯はない。彼は先づ鐵腸及びその一黨の中間的立場を利用する點に着目し、鐵腸を表面に立てゝ運動を進めた。鐵腸は勿論素志の實現として、喜んで利用され、府下の同志殊に改進黨側の人々を加へるために盡力した。かうして十九年十月二十四日、全國有志大懇親會が井生村樓で開かれ、星や鐵腸、中江篤介、高橋基一、加藤平四郎、岡山兼吉等の發起の下に全國二百餘名の同志が相會し、今後の一致協力を誓つた。この時星は、此の會の主旨として、政治運動不振と大同主義が此の會を開いた二原因だと說いた。鐵腸も起つて改進黨側の贊成意向を說き、「余は改進黨五六名を同伴して來た、いな五六名の心を同伴して來た」といひ、矢野の書翰を示し、島田、箕浦、肥塚、

犬養等皆賛意を表せるを述べ、更に大隈も斷然好意をもつてゐることを告げて會衆を鼓舞した。此の懇親會は彼の有名な大同團結運動の萠芽であり、鐵腸がこの運動に投ずる端はこゝから出てゐる。

二十年に入つて、政府の歐化主義が弊のみ目立つて實效が擧らず、看板の條約改正が失敗に終つたので、民間の政治運動はこれを好機として加速度的に盛り返した。鐵腸は內政を主とする國粹的立場から歐化策を喜ばなかつたのでこの運動を聲援した。四月には改進黨の大會が東京に、五月には舊自由黨中心で全國自由主義者の大懇親會が大阪に催され、大に氣勢を添へた。後者の主旨は矢張り大合同運動であつた。鐵腸は此の春歸省したが、五月歸京の途次大阪、京都大津、名古屋、靜岡等に遊說した。六月、辭爵のため上京した板垣を中心に、舊自由黨の大會が東京に催された。既にして政府の失敗が明らかとなるに及んで、志士壯士が上京して頻りに上書建白し、國事を憤慨して示威運動を試み、大臣に面會を强要する等民間の反政府的空氣が頗る過般濃厚となつて來た。さうして何れも租稅の輕減、言論集會の自由、外交上の處置の三大事件を旗幟に表示した。國權による民權運動である。機到れりと見て起つたのは、久しく虎視耽々としてゐた大山師後藤象二郞である。十月三日先づ民間有力者七十餘名を芝三緣亭に招き、大に彼等を饗應し、政治的時事的に結束する試みをした。さうしてその翌四日各黨有志懇親會が井生村樓に催されたが、これは日本全國大團結の基礎を固める目的であつて、會衆は、舊自由、改進兩黨は勿論、九州の政黨人、東北の志士、中國の政論家等二百餘名に及び盛會であつた。此の席で大石が開會の主旨を演述し、續いて鐵腸は雄辯を揮つて折柄政府の出した地方官への訓示を批評して民間黨の覺悟を促した。だが意外の出來事から、折角出來かけた自由改進兩黨の合同運動が實質的には破れてしまつた。それは改進の領袖沼間と自由の主帥星との辭後の衝突である。然しそこには多年の感情問題も絡んでゐた。それで此の月九日十日の聯合大演說會には、改進黨からは有志として尾島行雄、吉田熹六が出來たのみで、兩黨提携は破れ自由黨中心になつてしまつた。かくて在野黨大同團結の理想は遺憾に

も終に空想に終つたのである。或はこの時改進黨では、舊首領大隈の入閣問題を見越して、暗に合同運動を避けた點もあつたかも知れぬ。鐵腸は此の大演說會で第一日目に「政事家の擧動は公明正大なるを要す」といふ題で、政事家たる者は露國虛無黨の如き手段に訴へて志を達せんとするの不可を說き、又一面大同團結運動の必要を說いて政黨人の奮起を强調した。

この後壯士の運動、有志の活動が一段の活氣と統制をもつて來た。諸縣の有志總代は、土佐派の片岡健吉、山本幸彥等の入京を俟つて、申合會を開ひて、互に運動の連絡をとり、十一月十五日井生村樓改め鷗遊館に全國有志大懇親會を開いた。會者凡四百名、鐵腸は、賛成者を代表して一場の演說を爲し、改進黨が此の度の會に應ぜぬことを遺憾とし、同時に民間大合同の機運は社會の要求によるものであり、「此の會にして果して社會の必要に應ずる以上は漸次に勢力を增加し之れに離れんと欲するも得べからず、之れに抵抗せんと欲するも亦得べからず、諸君にして其擧動を明白にし其主義を盛大にすれば全國の賛成期して待つべき旨」(一)を力說して喝采を得た。この會には後藤象二郎も來會して言論の力について演說を爲した。星亨の演說に至つては露骨に改進黨の冷淡を諷したものであつた。この會以後は然し、運動の主體は星と片岡となり、鐵腸は漸く疎外さるゝに傾いた。旣に改進黨との合同が杜絕てみれば、大合同論者の彼の如きは、自由黨一流の過激運動にとつて邪魔にこそなれ、助けとはならなかつたからである。『自由黨史』によると、彼は總代會の席上大言壯語するのみで運動の機密の外間に漏れるのを構はなかつたので、片岡等に嫌はれたといふ(上卷六〇八頁)。然しこの秘密とか機密とかいふものが、かゝる大運動の性質上有り得ぬものと鐵腸は解してゐた。正面から公議輿論で押す彼、と場合によつては裏面の策謀も選ばぬ自由黨一流(主として土佐派)の遣り方とは、遂に合致し難いものがあつたのであらう。

民間の反政府運動の高まるにつれて、政府も法律と手段を盡して彈壓した。言論や建白では容易に動かないと見

て、この運動の指導者間にはいよいよ最後手段が議され（鐵腸は與からず）、來る十二月二十七日を期し、各大臣の年末最終閣議の際に決死的態度で彼等の處決を促がすことになつた。勿論流血を覺悟してゞある。ところがこの決議が漏れたので、驚愕した政府が先手を打て、有名な保安條例發布の大詰となつた（十二月二十六日）。

此の大詰については今更呶々するを要しないが、疑問は、當時建白運動に關係した名士が悉く奇禍にかゝつたに係らず、鐵腸と大石正已が意外にもこれを免れたことである。爲に二人は同志の志士達から怪訝の眼をもつて見られ、甚しきは政府の牒奴（いぬ）といふ者もあつたといふ。その牒奴（いぬ）云々の風説の根據のないものたるは、いふまでもないが、然し二人（殊に大石）が逐客の群に入らなかつたのは何等かの特別な理由があつたに違ひない。さうしてその特別の理由とは直接間接に官邊との諒解を意味するものでなければならぬ。現に大石は三年退去定つてゐたともいふ。[二] 而して當時の朝野新聞によるに、これより先き鐵腸は某貴顯或は某大臣なるものと面會して議論を上下してゐる。某貴顯とは何人か、鐵腸を引見して談論しさうな貴顯はさう多くはない。こゝに至つて二人の倖免と此の人と何等か關係があるかに考へられる。或は曰く、二人とも逐客名簿中にあつたが、伊藤博文が自ら保證したので名簿から消し去られることを得たのであると。[三] 大方そのやうな事であらう。

これより先き、いよいよ國會開設の二十三年もこゝ二三年に後に迫つたので、鐵腸は、歐米政界の實際を調べてわが國の憲政の發達に資せんことを朝野新聞の社主乙部に建議し、容れられて自ら渡歐の任に當らんとした。それで彼は犬養の言を容れて先づ報知社から尾崎行雄を招き、尾崎は更に吉田喜六、久松義典の二人を呼んで記者とし、鐵腸不在中の論説陣を固めた。然るに尾崎は自由黨への義理から建白運動に深入りして、遂に三年退去と身となつたので機を見るに敏なる彼は、二十一年一月鐵腸に先立つて外遊してしまつた。鐵腸の遊意はこれを見て俄に高鳴りした。彼は戯れに十九年來、『二十三年未來記』、『雪中梅』、『落葉のはきよせ』、『花間鶯』等の所謂政治小説を作つたが、案

外時好に投じ、人氣の集まるところ、書肆が多大の利潤を得たのみならず、彼の手にも思ひがけぬ印税が入つて來た。而かもその額が兎も角も彼の外遊の資を辨ずるに足るものがあつたので、いよいよ宿志實行に決した。これで先づ箱根に退いて專心『花間鶯』の第三編を完結せしめるに努め、それの出版をまつて、直ちに途に上つた。二十一年四月十三日である。彼は發するに臨んで一詩を賦していふ。

夢繞西洋萬里天。賣文不蓄買山錢。硯池一滴化滄海。也泛乘風破浪船。

明治文壇に於て、賣文錢で洋行したのは第一が矢野龍溪、鐵腸をもつて第二とする。

註（一）　明治二十年十一月十六日朝野新聞記事中

註（二）　明治二十年十二月三十日、讀賣新聞

註（三）　昭和八年十一月號「キング」尾崎行雄「明治大正の人傑を語る」

一〇

鐵腸外遊中の旅程、旅中の出來事、見聞の如きはその著『啞の旅行』及び『鴻雪錄』及び朝野新聞によつて知られる。今はたゞその旅程と感想の一端だけ述べるに止めよう。

四月廿八日桑港着、五月六日發、米大陸を横斷して十三日紐育着、途中シカゴとナイヤガラ瀑布を見物した。紐育で先發の尾崎と會つて暫時ぶりで故國の形勢を歡談した。馬場はこの時もう費府で肺を患へてゐて、會へなかつた（十一月死去）。十六日渡英の汽船に乘り、廿四日リヴァープル着、翌日倫敦に向ふ、當時の岡部公使は種々便宜を計つてくれた。彼は最初歐洲大陸を素通り的見物するつもりでゐたが、米國にゐるうち考へが代り、英國に來てからは最初は成るべく倫敦を動かず勉強することにした。彼は先づ語學研究を專念し、例の獄中獨學の變則英語が、それで

も英文日記を曲りなりにも認める程になつた。語學の少し用を達す位になつてから、國會や監獄や工場、新聞社などを見學した、時々は小旅行もしマンチェスタアの工業都市の盛大なのに讃歎したりした。然し何かしら次第に健康が弱くなつたやうな氣がしたので、倫敦の冬の寒煙毒霧といふに恐れて十二月一日渡佛し、巴里に滞在すること二十六日、その新聞記者兼政治家の立場から種々見聞した。見聞の箇條は英國の時と略ぼ同じで、彼は心中英國と比較し、佛國文化の粹然たるを讃美しつゝも、英國の堅實な富强を慕はざるを得なかつた。たゞ彼は巴里では度々オペラを見「トスカ」、「ファウスト」の如き名曲の上演に感心してゐる。然し裸體彫像や裸體畫には終に感心しなかつたらしい。概していへば、彼は西洋文明を實地に見聞して、從來日本に紹介されたものが大柢は皮相的なものであり、西洋文明にも表裏明暗の二面があることを知り、益々外國文化に對する採長捨短の思想を固くしたものである。勿論此の漫遊のために西洋文明に對する彼の批評眼が現實的なものになつたこと、世界に於ける眞の日本の姿を朧ろげながら認識することが出來たこと等、彼としては相當以上の收獲があつたわけである。

だが今日からいつて、明治二十年前後が日本社會及び國家の轉換期となつてゐるやうに、別の意味でこの外遊は鐵腸の生涯の轉換期であつた。彼はこれによつて社會に政治家鐵腸の虚名を博したことは事實であるが、思ひがけなくもこれが機緣となつて政治的活動の本據を失なつてしまつた、朝野新聞との絕緣これである。

彼は明治二十一年十二月三十日マルセイユを發し、丁度翌二十二年の二月十一日卽ち憲法發布の日に歸國した。昨年四月の出發から丁度箇十月不在の間に、故國の政情は種々變轉してゐた。そのうち最も注意すべきは、後藤象二郎の大同團結運動と井上馨の自治黨組織運動である。後藤は今や決然黒頭巾をぬぎ、陣頭に立つて、東北を手始めに、例の三大事件建白當時と同じ題目を掲げて大遊說を開始した。鐵腸の相棒たる大石はその懷中刀と許されてゐた。こ

の運動は勿論自由、改進合同を意味した國民的覺醒運動であつたが、事實は舊自由黨が中心として動き、國粹主義者が賛成したが、改進黨は極めて冷淡で、有志の參加を見るに止つた。彼等は勿論後藤の主旨には反對しなかつたが、大隈が入閣してゐるのと、自由黨中心の動きを見ては、冷然靜觀せざるを得なかつた。

鐵腸は歸朝早々朝野新聞にその瀛蓄を洩らすものと期待されてゐたが、意外にも突然朝野と絶縁し、專ら後藤の大同運動に奔走した。さうして三月二日新富座に於ける大同派の大演說會には「內政外交ノ必要」と題して、外遊中の知識を傾けて、數時間に亘る雄辯を振つた。大同運動に投じたことは、大同主義が彼の素論であり、又後藤及び大石との關係上怪むを要しないが、朝野との絶縁は說明を要する。朝野は、十八年犬養の入社後、その所論に幾分の改進臭を伴なつたが、二十年尾崎、吉田熹六の入社その他によつて益々これが強くなつた。鐵腸は新聞上にも大同主義で、別にこれを問題にもしなかつたが、彼の外遊中、朝野はその公平不偏の看板を棄てゝ、公然改進主義を揭げ、後藤の大同運動を冷然批判した。鐵腸は歸來、これを見て心大に平らかならぬものがあつたが、最早や犬養、尾崎中心の羽翼が成つて、彼の力で旗幟を元にもどすことが出來ないことを知つた。それで止むなく自から去つたのである。いはば庇を借して母家を取られた形である。かくて鐵腸はその多年の活動的本據を失なつたが、朝野も鐵腸と離れて大きな損をした、卽ち犬養尾崎では言論に活氣があつても經營が甘く行かず、遂に翌二十三年十一月他へ身賣し、この豪傑連中は新に民報を發刊して根城にした。さうして朝野は遂に數年不振の後廢刊されてしまつたからである。

朝野を去つた鐵腸は、「東京公論」に入社した。「東京公論」は大阪の新聞王村山龍平が「大阪公論」の姉妹紙として此の年一月新に創刊したものである。公論入社後間もなく(三月)、鐵腸は歸省して、養父の病を見舞つた、而かもこの間、大同運動の頭首たる後藤は、運動半ばに三月二十二日突然遞信大臣として入閣し、大に同志の憤激を買つた。鐵腸もこれを耳にして事の意外にいさゝか驚いたに違ひない。然かも彼の相棒たる大石は後藤支持派である。彼は止

むなく幾多の憤悶を抑へて事後承諾的態度に出でた。さうして郷里宇和島に於いて數回演說會を開いて大同主義を鼓吹したのみならず、東京たる本部の電請に應じて中國に渡り、廣島、忠海、三原と遊說して大同團結の爲めに雄辯を揮つて來たが、養父の死によつて又宇和島に引返し、後事を經紀して五月初め東上した。

元來大同團結は後藤個人の大風呂敷によつて彌縫された合同運動である。別に統一された政治運動なのではない。既に後藤在野の時にも本部は火曜會といふ改進黨を交へたブルヂョアジイとインテリゲンチャの一團、及び東京倶樂部なる青年壯士の一團(主に舊自由黨)とに別れてゐたが、後藤かペテン立ちをして入閣した後、政社か非政社かの問題によつて、明らかに分裂してしまつたのは、當然の成行といへやう。それは大同派の結束上の問題で、政社論者は來るべき國會を見越し、この際大同派を公然たる一政黨とした方が國會議員選擧の際有利だといふ穩和黨であり、非政社派は、政社となると集會條例に活動を束縛されるから寧ろ雜然たる社交團體のまゝでゐるが可いといふ急激黨である。鐵腸、大石、及び舊國友會の一派は皆政社派に加はつた。而かも五月十日と豫定された大會には政社派が大多數を得ることが明白になつたので、非政社派は大會前に分袂することを發表し、大會は結局政社派のみの結束會議となつた。かくて政社派は大同倶樂部なる一政社を組織し、綱領を議定した。鐵腸はこの時世話方として周旋し、又常議員に選ばれた。同日非政社派も協議會を開き、大同協和會と號するに至つた。

鐵腸の東京公論入社は同社が不羈自由なものと信じてのことであつたが、然し實際は豫想を裏切り、何等か暗に彼の筆を制肘するものがあつたので、在社數旬にして公論社を去つた。折から大阪大同派の中堅たる月曜會(以前の獨立黨なるもの)で機關紙「關西日報」を發刊する計畫が熟したので、人を派して主筆兼社長として鐵腸を迎へた。鐵腸は、公論社辭職後著述しつゝ中央の政情を看視するつもりでゐたので、辭拒したが、關西に於ける大同派の勢力擴張のためといふ理由に負け、遂に一年間と期限をきつてこれに應じ六月末西下した。新聞は七月初め花々しく出たが

鐵腸の經營が圖に當り、僅か一ケ月で二萬餘の讀者をかち得たので、流石の村山も、好敵出現を叫んだといふ。

關西に於ける彼の活動中、目立つたものは大同團結宣傳の外、大隈伯の條約改正に對する反對運動がある。彼は元來條約改正斷行論者であつたから條約改正その事には反對する理由はなかつたのであるが、新條約そのものが自主の實を失つてゐる點に猛反對をしたのであつた。東京の大同派諸士は早く七月の末に反對の大演說會を開いたが、此の前後から次第に國論の沸騰を見、八月の末には全國有志聯合會が三日間打通しの大演說會を開くに至り、政府の一部(後藤)及び日本倶樂部その他と通じて大に反對の勢焰を煽つた。それが漸次中央から地方に及び、長野、廣島、京都に飛火したが、十月十日大阪桃山に、全國有志大懇親會が開催され、十一十二の兩日大阪土佐堀靑年會館で大演說會が開かれて、大に非條約論の爲めに氣を吐いた。鐵腸は部下を率ゐて筆舌ともに熱心にこれに應援した。然かもこの熱心には幾分朝野を去つた、當時の不快さがこもつてゐなくもなかつたであらう。

二十三年一月、鐵腸は上京して大同倶樂部常議員會に臨み、常置員及び政務調査員に選ばれた。さうして同月末、同鄕の股肱ともいふべき西河通徹を伴なつて一旦下阪し、關西日報を西河に托し、改めて四月上京、中央の黨務に奔走した。

是より先き、二十二年五月、板垣退助は大同團結兩派の軋轢を憂へ、後藤その他の慫慂により上京して調停を試みたが、成功せずに歸國した。然るに非政社派はその劣勢を挽回するため、自由黨再興を名として板垣引込み策を試み、板垣も意や〻動いて政社派にこれを交涉したが、政社派の反對に會つてこれも亦成らずに了つた。板垣は何とかして兩派を調停せんと焦慮する餘り、自由黨再興を止めてその前々身たる愛國公黨の再興の旗幟を揚げて兩派の合同を策した。政社派はこれに幾分應諾の色を示したが、非政社派は板垣の態度に表裏があるとて斷然これを拒否し、單獨で自由黨再興に着手したので、板垣も止むなく土佐派を中心に愛國公黨の組織を宣言し、折角の調和案が却つて三

派鼎立の形勢を生んだ。これが二十三年一月である。然るに此の三派の末流の青年壯士等は、かく同主義の大同派が小節に拘束されて相爭ふのを慨し、挺身して強制調停を試み、必ず三黨合同の效果を得んと期した。そこで三黨もこの熱心に動かされ、遂に各々數名の調和協議委員を擧げて三黨調和の事を相議さしめ、五月十四日遂に三派は原則的に合同するに決し、その合同團體を庚寅倶樂部と名づけた。鐵腸は大同倶樂部側の委員として活動した。然し三黨相互の間及び各黨内部の感情問題はさう急激に融和せず、内實は對立のまゝで第一回の總選擧に臨んだ。

大同倶樂部派は五月二十日「大同派ノ諸君ニ告グ」といふ照會狀を地方團體に發し、三派合同のことゝ倶樂部の將來の結束のことを告げ、六月從來の機關紙「政論」を「大同新聞」と改め、鐵腸にこれを主宰せしめた。（後立憲自由黨が成立して大同倶樂部が解散するや、この新聞は全く鐵腸の手に歸した、さうして十一月に至り東京公論との合併の議が持ち上り、それが實現して「國會」となつた。鐵腸は主筆として「國會」編輯の首位を占め、二十八年その廢刊の時に及んだ。さうしてこれは實に鐵腸死去の前年であつた。）

此の年七月の第一回總選擧に鐵腸は愛媛縣第六區から當選してわが國最初の代議士たる榮を擔つた、彼は早く立候補はしたものゝ、黨の用務や大同新聞擴張のため歸國して運動する時間がなく、僅に意見書を送つて有權者に示したのみであつたが、容易に大多數をもつて當選したのである。當選議員三百人中、彼の大同派に屬するものは六十二人と算せられた。

三黨合同が名義だけ可決され、三黨は非政社のまゝ庚寅倶樂部なるものに合流する筈のところ、七月二十五日集會及政社法が公布された。これによると三黨を解散せぬ以上此の庚寅倶樂部の存在が不可能になつたので、三黨とも種種の曲折を經て解黨を決し、各々新政黨組織員を設けて折衝の結果、八月末に及んで立憲自由黨が成つた。鐵腸は組

織委員の一人としてこれに盡力した。

　これより先、三派解黨の際、改進黨側にも解黨して三黨に合し、一大進歩黨を作るべしとの議があつたが、遂に實現せず、却つて大同倶樂部中の改進分子が脱離して舊黨に還るに終つた。

二

　明治二十三年の國會開設と共に、鐵腸の實際政治家としての生涯が始まる、だがそれが意外にも不人氣と失意と誤解で始まつた。さうしてそれの幾分は議院生活の終始に亙つて伴なつて居り、ある意味では今日でもさうなつてゐる。國會準備期の開輝やかしい民間黨の一鬪將として人氣の高かつた鐵腸としては、これは不思議な運命と思へるが然しかういふ羽目になつたのはひとり鐵腸のみでない、第一自由の神とまで持ち上げられた板垣を見るが可い、初期の國會願望時代の猛者達を見るが可い。多年憧憬の國會に出られなかつたものさへ多かつたではないか。元來國會は自由民權論者が多年理想として來たところの實現したものである筈であり、若しさうとせば是等自由民權の先驅者はかゝる冷遇をうくべきではなかつたらう。然し出來上つた國會は民權論者の理想の實現ではなくて藩閥政府とブルヂョアジイの妥協的制作であり、民衆にこれを押しつけられた形である。事實、又新興日本の資本主義的發展のためには、當時としては藩閥政府がブルヂョアジイに妥協し、ブルヂョアジイが藩閥政府を利用するより道がなかつた。かくて實現した國會が、かゝる目的のために動くとき、此の兩者の何れにも利害關係をもたぬ理想主義的インテリゲンチャ達が兩者から邪魔物視され冷遇されるのは當然であらう。いはゆる國會政治は黨人政治である。黨人政治は多數專制を旨とする。多數專制の維持結束には現實の利害關係がもつとも有力である。準備時代には主義目的がよく多數を合同せしめたが、國會開設の後には現實の利害が多數を制する。かゝる利害關係もなく、黨人となりきらず、藩閥

にもブルヂョアジイにも迎合せぬ理想主義者が、以上の如き性質の國會に於いて失意、不人氣、誤解をうけるのは極めて自然であらう。わが鐵腸の如きも、この非迎合的理想主義者の一人であつた。

鐵腸の理想からいへば、政府も議會も共に不滿足だらけであつた。彼は政府も責め、民黨をも責めた。殊に議會に對しては希望をかけてゐたゞけ、その實現したものに對する失望も大きかつた。時としては彼は、かゝる政府と議會によつて左右される政治に絕望を感じたかに見える。少數ながらも熱心な後援者達が彼を引廻さなかつたら、一度きりでもう選擧をやめてしまつたらう。彼はかういふ後援者の希望を無にしかねて、引つゞき立候補をした。此等の後援者がなかつたなら、杉浦重剛や中江兆民の後を追つて、たゞ一度で議院生活を淸算し、二度とは出て來なかつたであらう。彼は此の人々あるがために、萬事一切をあきらめて、その政治的環境と能ふ限り妥協し、續生する政治問題を片端から解決しようと努力し善處してみたのであつた。

だが鐵腸の衷心はさうとして置いて、現實の政治界に出て彼は如何なる振舞ひをしたか、それを一通り辿つて置かう。それには先づ材料の公平なものに依らなければならぬ。たゞ感情によつて歪曲された反對派の記事記錄だけを基礎としたものであつてはならぬ。私は當時の新聞文獻中比較的感情的舞文のないものによつて第一議會以後に於ける鐵腸の行動とその心事を明白にしたい。

第一議會開會前、立憲自由黨所屬の議員は彌生俱樂部なるものを組織し、議會に於ける運動の方針を議し、政務の調査、議員相互の親密を計ることになつた。だが當時院外黨員の勢力が非常なもので、議員の自由を拘束する惧れがあつたので、評議員會といふものを設けて議員對院外團との關係を圓滿にせんと試みた。鐵腸は議員は國家の議員である。以上、十分獨立自由なものであるべく選擧民にさへ阿附すべきではないと考へてゐたので、院外の決議で議員を拘束するのに敢然反對した。いよいよ開會となるや、彌生俱樂部では各派に先んじて集會政社法、出版法、新聞法

の改正案を提出することになり、その起草を鐵腸に托した。鐵腸は苦心して起草したが、それは必らずしも自由黨員の感情を反映したものではなく、且つ何れの罰則に於いても體刑が加はつてゐた。これが黨員に氣に入らず、先づ政社法の方は評議員會が種々折衝してその點を加減して提出したが、他の二案は猶豫してゐることに他黨から先んじられる恐れがあつたので急いで原案のまゝ議長の許へ提出することになつたが、それが發表されると、黨員は大に揉めた。評議員會は事面倒と見て鐵腸に一旦撤回せんことを勸告したが、鐵腸はかゝる事で院外から議員の自由を拘束するのは不可ぬとて、きかなかつた。越えて二十四年一月、豫算案査定の問題が生じた。自由黨は黨議として七百餘萬圓の減額査定案を決したが、政府は後藤及び陸奥を民黨操縱係りとして切り崩しにつとめ、これが奏效して、所謂土佐派議員(大江卓、竹内綱、林有造等)の脱黨となり、結局六百餘萬圓減額に折合つた。鐵腸は、この時初めは、豫算減額の是非はともかくも、その方法が官制を改革し、法律に立入り、「順序なき」仕方でなされてゐるといふのでその點に反對した。自由黨その他民黨の對政府的態度には多年の軋轢から來る感情が交つてゐた。鐵腸はこれを見て國家の發展上無謀感情的な豫算削減は不可であり、且つ黨が黨の査定案をもつて議員を束縛することを不法であると考へたので、自由黨を脱黨し、議場では、この査定案には反對である旨を唱へた。事實は、彼の信念として、政略を攻撃して内閣の顚覆を計るのは可いが、制度官制上の改廢は國家存立上慢りにすべからずといふにあつたのである。然るにこれが民間黨の機關紙によつて鐵腸の變節、「吏黨の褌持ち」とまで喋々されるに至つた原因である。鐵腸のこの態度の裏には幾分後藤の操縱があつたとも想像する人があるが、然し入閣後の後藤を鐵腸はさう快よく思つてゐなかつた、假に多少のことがあつたとして、彼がそれのみによつて變節したといふのは、彼と自由黨の關係を見ない人々の言である。元來朝野相互の讓歩寛容によつて憲政開始の美を濟し、日本將來の發展に盡すことにしたいといふのが大調和主義者たる鐵腸の理想であつた。(末廣除名說があるが、それは評議員會で定つたが末廣へ達されぬうちに、彼

の脫黨屆の方が早く着いたのであるといふ。」

鐵腸が吏黨に變節したと聞くや、選擧區の反對黨は喜んで讒誣中傷の火の手を煽つたので、選擧區民中の有志者達が上京して辭職を勸告せんとした。然るに鐵腸は、選擧の際の區民の好意は忘れぬが、一度選擧された以上は國家の議員だから、さういふ不法な勸告には應じ難いと手強く刎ねつけようと決心してゐたが、それは實現しなかつた。然し彼はその風說をきいたゞけで、議會での豫算演說の筆記を選擧區に送つて自分の態度を說明し、若し贊成者が少なく大多數反對ならば甘んじて辭職するといふ意を仄見せた。然るに選擧區民の大半はこれで釋然としたらしい。

二十四年三月、當の政府黨大成會は政社派、非政社派に分れて爭つたが、遂に分裂し、政社派は無所屬團と合體して協同俱樂部なるものを組織した。無所屬には大江、末廣、井上(角五郞)など錚々たる名士がゐたが、大江、末廣等はこの俱樂部に加はつた。俱樂部のモットーは、國民の自由自治、國權の伸張といふことであつた。三月末彼は急いで歸鄕して議會の眞相と所謂吏黨云々の原因を說いて聞かした。區民の多數は彼の行動を諒とした。彼は宇和島その他で大演說會を開き、更に九州へ渡り、協同俱樂部のために二豐地方を演說して廻つて五月始め歸京した。五月には有名な大津事件がある。十一月の第二議會では、彼は政府及び民黨に是々非々の態度をとつた。「協同俱樂部員二十三名の牛耳を取り政府の爲に惡戰苦鬪した」云々とその傳記中の或るものには書いてあるが、これは眞赤な噓言で、鐵腸は十一月五日協同俱樂部を脫し、前田案山子、綾井武夫等と聯合新團體を作るために奔走し、俱樂部そのものは十一月十九日、第二議會の前に解散してしまつてゐる。解散した俱樂部の牛耳を何う取らう。且つ又、九月會津若松での演說では、人心一新のため內閣更迭を必要とすと論じて居り、十二月十九日の議場では、民黨の豫算査定案に部分的ながら贊成演說をしてゐる。政府の爲めに惡戰云々はデマである。この議會で彼は內々大津事件に於ける政府の違憲糺彈を旗幟として民黨の聯合攻擊を目ろんだが、各派が感情的行掛りで贊成しなかつたので、お流れとなつた。彼

はこれをむしろ痛憤してゐる。たゞ總じて彼は、民黨が徒らに感情に驅られて政府いぢめを事とし、民力休養の外に何等積極的經綸の見るべきなく過激的な空論を事としてゐるのを遺憾とした。此の議會は又も豫算案で政府と衆議院とが正面衝突をし、十二月二十六日解散となつた。總選擧は二十五年二月十五日と定められた。彼は鋭意選擧法改正案を起草したが遂に提出に至らずに終つた。

この第二回の總選擧が憲政史上有名な品川内相の干渉選擧である。鐵腸は早速愛媛縣第六區の舊選擧區から出馬するかに思はれた。居住地の芝から出馬とも噂され、有志にさういふ人々もあつたが、然し彼は二回の議會生活で、もう情實と駈引の現實政治がふつふつ嫌になつたらしい。解散直後の述懷にいふ――

浮雲多變態。世事與心違。昂々雲間鶴。豈同群鴉飛。驅車出都門。去敲漁家扉。茫々海色碧。鬱々松樹圍。獨坐有所思。慷慨轉長欷。牛李互成黨。國事日將非。經綸非無志。狂愚不測機。世運如落日。魯戈誰一揮。緬想南海畔。水暖碧鱸肥。寄語家鄉友。爲掃舊釣磯。

そのうちにも選擧區からは頻りに促すので、一月末奮發して歸鄉し、半月の間失はれた選擧區の恢復に努めた。然し反對黨の宣傳から區民の感情が相當惡化してゐた上、買收で對抗されたのでは勿論當選出來やう筈がない。昨日の英雄は今日の落伍者、彼も流石に一昨年の七月と思ひ合して感慨に堪へぬものがあつたらう。此の頃の心境を述べた詩句に――

投筆走南海。半月徒踉蹌。章甫越人棄。蹉躓笑我狂。遂入維摩室。跏趺踞一牀。落花茶烟颺。頗覺禪味長。

とあるから、その懊惱を佛學にでも紛らさうとしたものであらうか。だが漸く氣力を恢復するや、この間を利用する第一の工夫として、彼が多年心がけてゐた東亞問題について實地の認識を得べく、清韓及び露領沿海州の視察に赴いた。八月十四日發途、先づ韓國に渡り、東海岸に沿ふて沿海州を浦潮まで遊び、その軍港としての價値及び工作中の

西伯利亞鐵道を視て露國の東漸作等が大に進捗しつゝあることを知り、わが國の立場の容易ならざることを感じた。浦潮に滯留すること半月餘、更に韓國を經て芝罘天津に遊んだが、病を得て又韓國に引返し、十月二十五日歸つた。彼は此の時の見聞を東邦協會及び國家經濟會に於て述べ、又十二月三日錦輝館で一人演說會を開いて東露支那朝鮮の形勢から我國從來の外交政略の誤つてゐる所以を論じた。此の行の土產が、『北征錄』、『東亞之大勢』の二書である。

二十六年彼は福島中佐の歸朝歡迎に斡旋した外、多くは退いて著作につとめ、殊に政治小說『明治四十年の日本』を國會に揭げて大に自家の素論を述べた。その他、度々詩酒徵逐の雅遊を試みて鬱屈の氣をもらした跡が見える。然るに此の年の第五議會は、第四議會から引續き、閣臣と議員の軋轢が甚しく、先には官紀振肅の上奏案あり、後には條約厲行の建議案あり、停會につぐに停會を以てし、十二月三十日遂に解散されてしまつた。

總選擧の期は二十七年三月一日である。鐵腸は又も前選擧區から推薦された。だがこの頃何の區の選擧も投票買收の醜慣が漸く入つて來、彼にして起てば又前回以上に不愉快な事になりはせぬかと豫想されたので、彼は「愛媛縣第六區の諸君に告ぐ」といふ趣意書を發表し、運動費の多寡で當落の決するやうな選擧は眞に議員を選ぶ所以でないから自分は進んで運動することは斷念すると告げた。二月に入つて東京府下第二選擧區（芝）から推薦しようといふもの、淺草から出てくれといふものなどあつたが、鐵腸は積極的には進出しなかつた。然るに彼の同志で愛媛縣第四區から出てゐた鈴木重遠が第一區に廻つたので第四區の有志が是非にと彼を招いた、殊に在京有志が熱心に彼に勸說したので、彼も遂に斷りかね、二月二十日に俄に歸縣して急に東奔西走運動を始めた。然し僅に一週間では如何に鐵腸の名望雄辯をもつてしたとて何うにもならない。況んや反對黨は遠慮なく買收の奥の手を出すに於いてをやである。彼は矢張り敗戰した。三月十二日彼は歸京に臨んで宇和島で選擧の弊を題に大雄辯を揮つた、土地の人々は大懇親會を開いて彼を慰めた。

此の時の遊說中、彼は舌端に微粟粒を生じ言語やゝ硬澁を感じたが、醫者に示すと、これは疥だから早く治せぬと癌になる恐れがあるとのこと、それで歸京早々大學醫院に入つて、これを截斷してもらつた。幸ひ經過がよくて十數日で退院した。

折柄韓國を中心に日清間の雲行に大に險惡なるものがあつたので、鐵腸は、同志志賀重昂その他と謀つて、自主外交責任內閣の二條を旗幟に全國新聞聯盟といふものを作つて、輿論を作興させようと試みた。彼は此の時から對清策は卽ち對露策たることを說いてゐた。此の年五月開會した第六議會は、失政糾彈の彈劾上奏案で政府と正面衝突をなし、遂に六月二日解散となつた。越えて七月二十五日日清開戰し、八月宣戰の勅が發せられた。かくて自主外交卽ち對外硬の點で主義を同じくする新聞同盟、改進黨、立憲革進黨、中國進步黨、舊大日本政務協會、國民協會の六派は總選擧に共同戰線を張ることになり、選擧中央本部、後に中央政社といふものを設けた。鐵腸の選擧區愛媛第六區の有志は今度こそ何としても鐵腸を出さうといふので多額の運動費を醵出して待つたところへ、八月鐵腸が歸縣したので勇躍して運動にかゝり、九月の總選擧に見事當選した。

此の年十月の臨時議會、十二月の通常議會には鐵腸は全院委員長に選擧され、返り咲きの榮えを示したが、この頃から彼の健康は再び蝕ばまれて來た。

二十八年三月には天皇陛下の親征を謝する上奏案及び陸海軍表彰決議案が提出され、鐵腸は最後の雄辯を振つた。四月日清の間に媾和が成立した。五月鐵腸は頸部に癌腫を生じ、その切斷のため大學醫院に入つたが幾ばくもなく創癒えて退院はしたものゝ、爾後遂に健康にはなり切らずに終つた。而かもその不健康の身ながら日清役の結末についての政府の遣り口、三國干涉、戰後經營等について憂慮に堪へず、犬養、尾崎等の同心を得て一大國民運動を起すことを試み、六月自由、改進、國民、革新、大手倶樂部、中國、財政、中央、實業等の九派の有志を愛宕館に集め、大

運動のモットーと運動實行の方法を決議した。モットーに曰く――

（一）帝國の光榮を興復する爲め速に軍備を擴張し軍政を刷新すること

（二）遼東半島の還付に對しては內閣をして其責任を明にせしむること

（三）朝鮮の獨立を扶殖し韓國に於ける我が帝國の地位勢力を維持すること

運動の方法としては、政府に臨時議會の開催を要求すること、全國要地に於て演說及び文書をもつて還遼の眞相を告げ、同志を糾合し、中央と連絡して運動の普及を計ること等であつた。その實行委員には、病餘の鐵腸の外に、伊藤大八、尾崎行雄、平島松尾、島田三郎、工藤行幹、鈴木重遠、鈴木萬次郎、志賀重昻、田口卯吉、犬養毅、安岡雄吉などがゐた。此の連中は運動の手始めに神田の錦輝館で數回大演說會を開いたが、その都度政府の彈壓を喰つた上、警視總監から政治法違犯で告發までされた（然しこれは控訴して何れも無罪）。鐵腸はかゝる活動が祟つたか、七月頃から又々可成り病氣が惡くなり、癌再發の兆が見えた。現に右の大演說會の第三回には出席はしたが自ら演說が出來ず、「世運一轉の機會」といふ草稿を代讀して貰つた程であつた。その趣意は、遼東還付を機會に日本國民たるものはこの不法な事件を善用して國運を一轉させるやうに望むといふのであつた。

各派有志の共同運動の自然の結果として、一つ合同して一大新政黨を組織しようといふ事になつた。そこで鐵腸、志賀、森肇が中心となつて交涉を進め、犬養、尾崎、肥塚龍等も贊成し、先づ個人の資格でこの新政黨に加はつた上、追々同志の人々を引き込むことになつた。さうして出來たその新政黨の名を假に同志會と名づけた。これが二十八年八月のことである。だが十月には、鐵腸は遂に癌再發の爲め、再び大學醫院に入院した。入院中でも國事を憂へる念が衰へず、折柄の朝鮮事件（十月八日）を大失態となし、國家の前途を憂慮して、政友に折翰して說明を求めたりした。その書翰の末に一句あり、――

木枯しやいとゞ都のなつかしき

十二月二十五日第九議會の開會に當つてはそれでも登院した。同志會を中心にした民黨各派は、開會劈頭遼東還付に關して內閣大臣を彈劾し、併せて十月八日の朝鮮事變の責任を明かにせんがために上奏案を提出した。翌一月九日此の上奏案は議事に付され、尾崎は提案者側を代表して痛烈な廣長舌を振つた。だが反對黨（自由黨及び國民協會）は、我が國の實力からは還付の止むなきこと、戰後經營が閣臣問責以上の重大案件なることを理由にして、上奏案に反對した。採決するに及んで、民黨の敗となつて、上奏案は葬られた。此の日、病臥久しい鐵腸は家人の諫を退け、病を力めて起ち、二人挽きの人車で登院して味方に貴い一票を投じた。味方も敵も、この光景に並々ならず感動した。だが、このために彼の病は日增に惡化し、二十九年二月五日午前十一時大學病院で遂に逝いた。年四十八。彼を葬るの日、葬場たる增上寺に會した朝野の名士は約千名に及んだといふ。

置土產といふでもないが、彼の死後幾ばくもなく、同志會に代表者を加盟させてゐた各政黨は、解散して新政黨を組織した。即ち進步黨がこれである。

註（一） 太田原在文著『十大先覺記者傳』中、鐵腸傳（一一三頁）、大正十五年三月、大每東日兩社發行。

鐵腸雜記

鐵腸の生涯については以上「鐵腸傳」で一通りの事は書いた。なほ「傳」に漏れたもの、書かずにゐたもの、性格生活を知るべき逸話などを集括して雜記とし、「傳」の補遺とする。

人の號などは大抵私淑するところから出るもので、往々その人の性格を示すことがある。鐵腸の號浩齋はいふまで

もなく『孟子』の養浩然之氣から出たものに違ひない。これだけでも鐵腸の爲人を知る參考になるが、鐵腸の號に至つては一層面白い。此の語は唐の皮日休が桃花賦の序に出る。余嘗慕宋廣平之爲相、貞姿勁質、剛態毅狀、疑其鐵腸與石心不解吐婉媚辭、然覩其文而有梅花賦、云々。處でこの宋廣平である、これは唐の玄宗の時の名宰相宋璟のことで、功によつて廣平公に封ぜられたから宋廣平ともいふ。鐵腸はこの宋璟を慕つてゐたのである。宋璟については、唐書卷百二十四に傳があるが、略をいふと、璟は邢州南和の人、耿介にして大節有り、風度凝遠なり、武后に仕へて御史中丞と爲る。玄宗の時、相と爲る。法を守りて正を持し、刑賞に私なし。姚崇と並稱さる云々。房杜につぐ賢相の一人で、漢學仕込みの鐵腸が好きさうな人物であるが、唐書にも鯁正とあるやうに硬骨剛正な性質であつた、而かも學問を好んで文章を善くし、梅花賦の如き風流文字もある。これが鐵腸の氣に入つたのであらう。鐵腸が宋璟に擬してゐたことは同人間でも有名であつたと見えて、二宮孤松が『雪中梅』に序した文中にも「宋廣平の再來を以て自ら任ずる人」云々の語がある。

鐵腸に對する宋璟の感化が案外深いものがあり、宋璟の行事が鐵腸の政治理想とまでなつてゐるかと思はれるところがある。國家の爲めと信ずると死を犯しても政府に抗言するところ、政治に中正を持するを尊ぶところ、邊功を求めず内治主義であるところなど、甚だ似たところがある。

鐵腸は漢學で鍛へた人だけに、物の見方考へ方にも漢學書生じみたところが根本的には抜けない。英學は明治九年の禁獄中心がけ、出獄後も馬場その他から少しづゝ敎はつて、何うやら政治法律書をのぞく位は出來るやうになつたらしい。洋行の時、前にものべたやうにロンドンで英學の急仕込みを始めたが、もう年が年だから覺えられないと嘆じてゐる。十七八年からは二宮孤松が秘書格で、英獨の參考書調べ役をしてゐた。鐵腸が今少し早く英學をしてゐなかつたのは、國會議政壇上の人となつてから、相當祟つてゐると思ふ。

理想主義の漢學書生じみた態度が晩年までぬけなかつた彼が、やゝもすると實際家らしい言辭を吐き、又事實、空理を避けて實地を尊重することに心がけたところがあつた。この邊のことは、同じ漢學でも、陽明學をやつたゞけに違ふ。明鏡止水の如き心をもつて事上練磨に力をつくすのが陽明學の修養の第一義といふが、鐵腸は努めてこの工夫をし、これを實行しようとしたものである。この實際的工夫は彼の政治思想にも現れてゐる。

漢學書生が詩を善くし、漢詩人が酒を好むのは殆んど常態であらう。鐵腸もその例に漏れなかつた。彼は文章を善くしたが、詩に至つては更に自信があつた。彼は、自分の文章は滅しても詩だけは殘ると信じ、その事を人にも語つた。(二)十八年の大患前は折にふれ感興に任せて作る位で、寧ろ詩人扱ひにされることを欲せず、後進にもかういふ急がしい時世に漢詩などを捻くるのは不心得だと誡しめてゐる程だが、二十年前後、殊に第二總選擧に失敗してからは、再び詩酒に鬱悶を紛らすの餘儀なきに至つた。支那の詩人では、蘇東坡が殊に氣に入つてゐたと見えて、東坡集を旅行に携へたとか、東坡の詩に和するとかいふことがその遺稿によく見える。詩友として殊に相許したのは、籾山衣洲であるが、衣洲が『鐵腸遺稿』に序した一節にいふ(原漢文)、——

初め余の先生と交を東都に訂するや、巳丑庚寅の間に在り。時に議會將に開けんとし、政黨迭みに興る。先生其の間に周旋し、坐論奔走に之れ暇あらず、然れども余其の家に至れば則ち香を焚き地を掃ひ、酒を飲んで詩を賦す。物外に逍遙する者の若し。一日天雪る。余を邀へて懽飮す。夜に至つて雪霽る。乃ち虎門より歩して星岡に登る。大虚寥廓、星月凄輝、回飆忽ち至れば、落屑衣に滿ち、鶴氅裘を披るが如し。先生東坡が聚星堂の雪の詩を朗誦す。歎じて曰く吾憾むらくは斯の人と世を幷うして生れざるを。

詩人鐵腸の面目、畫くが如きものがある。その遺稿を讀むに前半旅中の詩が多く、後半家居の詩が多い。面白いものは矢張り前者に多いかと思ふ。代表的佳作と思はれるものをこゝに出して置く。明治十八年八月箱根塔澤の環翠樓上

で月夜感あつて作つたものである。

我將乘月遊湖上。去看萬頃湧銀浪。又恐山深風露寒。病軀衣薄觸嵐瘴。自有層樓枕溪流。且以彫欄當畫舟。竹林獨擁蒲團坐。招邀山月爲臥遊。此夜溪風拂炎熱。漸聞澗水響幽咽。群山歷歷辨高低。青熒大星影滅沒。須臾清輝射奔湍。一溪玲瓏漲晴雪。湖上一輪轉凄酸。不若此地尤奇絕。出京城時暑正闌。山中再逢月成團。清涼已覺秋氣動。一病日輕夢亦安。却愁歸期已逼促。此月轉合城中看。萬家鱗鱗瓦色碧。空教玉兎窺綺席。樓樓歌吹耳爲聾。無由溪響聽揚激。定有幽夢繞函山。水風吹月半簾白。

此の詩酒の交際が、政治家としての彼の、兎もすれば角立つべき生活を、大に圓滿ならしめたことは、想像に難くない。

既に詩酒を說けば、色に及ぶべし、これ又當時文士の常態である。明治初年は百事破壞から建設への過渡で道德や倫理にもさう嚴重な社會的規制がなかつたので、今日なら異常の行爲と見られる事も、何人も自ら行つて怪まなかつた。遊里に色を漁することの如きも、その一に屬する。鐵腸は上京以前から妻君があつたので、吉原通ひまでする程好色ではなかつたらしいが、その詩酒の遊びから興に乘じて妓樓に遊ぶことは度々あつた。殊に十四五年以前、就中十年前後が大に盛んであつたらしい。この頃の惡友には橫瀨文彥、小松原英太郎等があり、惡友中の惡友が成島柳北であつた。鐵腸も『新聞經歷談』の中で、その幾部分を告白してゐるが、宮武外骨翁の示敎によると、成島柳北の『新柳情譜』といふものゝ中に、鐵腸と狎妓に關する艷話が數條あるといふ。又これは當時の朝野(九年十一月七日)卽ち彼自身主筆の新聞で素破抜かれた記事であるが、丁度十一月三日天長節の夜、鐵腸が妓樓で祝酒に大醉した餘り、狎妓と同衾してゐるところへ、巡査に踏込まれ、大目玉をくつたといふ滑稽もあつた(二)。然しこの事は十五年の大患後は大に愼んで、いはゆる過ちを二たびはしなかつたらしい。酒は可成り强く、量なしといふ方であつたといふが、これ

も十八年糖尿治療以後は全く禁酒の態であつた。だが二十年頃から政治上の運動が急がしくなるにつけ、諸種の會合が多くなり、世話人役の鐵腸に何かと酒を呑む機會が多くなつたので、何時の間にか再び酒杯に親むことになり、續いて議院生活の方が面白く行かぬので、益々酒に鬱を紛らすことになつて、再び健康に異常を來したことも是非がない。十八年以後絶對禁酒したなら、或は今數年生きのびてその經綸の實現される日を見ることが出來たかも知れないのにと、遺憾に堪へない。

明治十年前後の鐵腸の生活を知るべき材料を外骨翁から示して貰つたが、それはこの頃鐵腸が親交のあつた書肆山城屋の主人稻田政吉へ宛てた數通の手紙である。これを讀んでみると、鐵腸を始め當時の無冠帝王たる新聞記者連の内幕生活が分つて極めて面白い。忙しさうで呑氣な、物質的にはいつも窮迫した、それでゐて貧乏には屈托した顏を見せない、元氣一杯な、志士氣取りの生活であつたのである。その手紙の中代表的なものを一二通左に引いてみよう。年代不明のものが多いが、何れも十年から十一年へかけてのものと思はれたい。

(斷簡)飜譯もの丶注文横印へ段々說キ候處兩人ニテ壹圓十錢ナレハ引受ケ候由事か極らぬと遲クナルカラ此の處ニテ斷然御取極ニ相成候ては如何至急御答ヲ乞フ

再拜

十八日

二陳生囊中一錢ナシ已ニ饑渇に至らんとす少しくモネーの御周旋は出來不申哉(モトノマヽ)

二陳が振つてゐる。横印とは横瀨文彦のこと、飜譯とは、明治十三年に漸く出版された『英京倫敦新誌』をいふ、原書はジプロース氏著『ブック・ヱバウト・ロンドン・エンド・ロンドン・ライフ』といふもの丶由。

御來教之趣御尤も之事ニ存候只だ昨夜已れか樓上にて愉快を盡す時他人が之を見たなれば亦た今日吾が十字街頭の

相乘りを羨むと一般なりしならむか瞑目して之を反省せば忽ち悟道すべしそれはさて置き昨夜誠に失禮いたし果は熟し風無くして自ら落るの勢ナリ可羨可憎可妬呵々

西洋事情（英佛のアル所）と地方自治論（此の書名間違へて居るか知らん夫の米國の邑政を書きたるものなり）幷びに佛國政典を一寸拜借は出來不申候哉一時間程（損料を出してもよろし、社から）。

右は眞面目の話なり

前半は醉鐵腸の狂態みるべしである。後半は社説起草用の書物をかりたものか。損料云々も面白い。今一通——

龍動繁昌記之儀ニ付愈々小松原へ御相談有之候由にて昨夜生へ相通じ候此書の飜譯修飾は中々容易ならず生は第一篇と同價に非ざれば斷然御斷はり申度小松原も同様なれ共同氏儀是節非常ニ相窮し居候事故若し先日拜借致し候二圓の上に八圓を加へ前金御渡被下候はゞそれニ應して負け可申考に有之候此段小生より相通し申候可成卽答被下度候也

重　恭

山城屋さま

以上によつて、十年前後の鐵腸の生活を概することが出來やう。

若い頃の酒興は別として、鐵腸は當時の家庭人としては、理想的な一人であつたらしい。彼は好い夫、好い父であり、家庭的和樂を愛したらしい。彼はその健康保持の必要からよく熱海や箱根に避暑避寒に出かけたが、大概は妻兒を伴なつた。彼の紀行を見ると、妻を勞はつた文字が隨分多い。勿論それには妻君も內助の功と貞婉の徳を具へてゐて、鐵腸の優情にふさはしい女性であつたと想像して可からう。彼は又多忙の間に暇を作つては、數囘遙々宇和島へ歸省し、その父兄の心を慰めることを忘れなかつた。

鐵腸の生時及び死後の文獻で彼の公人としての節操に疑問を投げかけてゐるものが少なくない。これは然し酷である。彼の節を疑ふのは、自由黨員でありながら平然改進黨員と交はり、政府大官とさへ通交しなどした點から來てゐるらしい。その保安條例の退去を免れた時の如きは、前に述べた如く、政府の間諜とまで嫉視されもした。又露骨に彼と井上馨との醜關係を云々し、(三)彼の洋行費の大半は井上から出たなどといふ人もあつた。然しこれは彼の洋行後の行動に徴して、根據のない浮說だといふことが分かる。又後藤象二郎と特殊關係があつたともいはれる。が、成る程馬場、大石を介して、ありさうなことと考へられる。然しそれは後藤の在野時代のことで、且つ若し金をもらつたとしても、さう大した金額ではなかつたに違ひない。大同團結分裂後乃至大同俱樂部解散後はさう特別な關係があつたとも思はれない。第一議會で政府の肩をもつたといふので、後藤と親分子分の關係があるので動かされたのだといふが、それだけの理由では鐵腸も心にもない政府贊成の演說などはしまい。矢張り鐵腸のいふ通り、國運伸展のためには暫時政府の爲すところを贊成することが必要だと信じたから贊成したものに違ひなからう。彼は自由主義ではあるが、公正を貴ぶ人である。だから反對黨の意見を聞くためには改進黨員とも往來し、又政府要人の意見を知らうとしては、彼等と議論を上下する。彼は自分で疚しいと信ぜぬので、平然とかゝる行爲に出る、而かもそれが自由派の舊同志、その他の人々から見れば、却つて疑團を深める原因となつたかも知れない。然し鐵腸の政治的信念を叩いてみれば、疑團は決して疑團にはならない。彼は、後にも述るが、政治上には元來の大同論者なのである、大合同主義者なのである。善い意味の進步的妥協論者である。改進黨は愚か、政府要人と意見を交換するのは當然であらう。然し政治運動に祕密主義を附き物とする一派の人々からは、油斷ならぬ存在と見られたに違ひない。然しその爲めに公人としての彼の節操を疑ふに至つては、過酷である。鐵腸にして利に敏な僞善的虛名漢であるとせば、彼は何を苦しんで貧窮を甘じて新聞記者を立て通し、二回も禁獄されてまでも初志を棄てなかつたのであらう。彼は官吏として榮達

する機會がないではなかつた。彼には大官に知巳があつた上に、舊同僚たる小松原、横瀬の如きが皆官吏に鞍替へして好い手本を見せてゐた。政府では彼の就官を望んだばかりでない、積極的に重官をもつて誘惑しさへした。西河通徹の『鬼城自叙傳』(九三頁)にかういふ面白い一節がある。

斯の如く當時余等少年の先輩視せる志士にして、中途變節して官海に入りしもの珍らしからず、當時の官海にも策士は中々に是ありし。乃ち言論罪の滿期出獄者其他文才の聞えある自由民權論者に對しては、遠くより巧みに手を廻して重爵、高祿を其眼前に懸け、是れを餌として官海に釣り入れ、以て言論界の氣勢を減殺せんとの謀略に出づるの痕跡は所々に見られたり。文官任用令も未だ設けられざりし當時には、殊に此自由も便利もありし事なり。玆に一笑話として記すべきは、夫の硬骨を以て聞えたる末廣鐵腸氏にして、近く官海入りを爲し、某縣に知事たるべしとの一說を傳へたるものあり。是れ全く無根據の事にはあらず、煙の起つ所に火の在る譬へに洩れずして、其の頃末廣氏に向ては早くも其筋の撫手是れに廻はり、君にして官海に入るに意あれば、一躍縣知事の重職を以て優待せらるべし、幸に宮崎縣知事に更迭あるべき筈となり居れば、即今誠に其好時機なり云々の甘言に對して、末廣氏は固より一笑に附し、即座に是を斥けて應ぜざりしと云ふは事實なり。猶ほ甚しき一笑話は、余の如き一青年に向てさへ、末廣君を說得して先づ官海に入らしむることに努むべし、末廣君にして知事たれば、其一言の推擧に依りて君は同君の下に書記官を賭し得ること難からずなどの戲れ半ばの甘言は、遠廻しに舞ひ來たりたる事ありき。當時の余にて書記官を欲せざるにあらざるも、本尊の鐵腸翁其號の通りの硬骨一途にて大磐石の如く、決して動かさるを如何せん。呵々。

明治十三四年のことであらうと思ふ。上の引用によつても鐵腸の公人的節操を疑問視する考へは訂正されるのが當然であらう。

　鐵腸はかく自ら持したが、然し彼は人に對しても己れと同じくすることを責めなかつた。彼の苦闘時代の同僚は、前にも言つたやうに、官海に入つた人が少なくない。然し鐵腸は己れに同じくしないといふ理由をもつて彼等と絶つ如きことはしなかつた。例へば後に官僚として榮達した小松原英太郎の如き、純民權論者からいへば、變節者といへるのだが、然し鐵腸は公爭と私交は別とし、依然交際を續け、小松原も鐵腸の交誼の厚きに感じた。小松原は明治九年評論新聞編輯長時代に「壓制政府顚覆スベキノ論」で筆禍を買ひ、二年の禁獄が不服で、抗訴上告とやつたが、結局負けて服罪し、出獄後鐵腸の世話で朝野の客員となつた。その心機一轉して官海に入つたのは明治十三年で、外務、內務、司法關係の方面に從事してゐたが、十六年四月の改正新聞紙條例の起草に與つたので、操觚社會には裏切者といふ印象を深くしたらしい。鐵腸もこれだけは流石に心外だつたらしい口吻を洩してゐる。[四]然し野にあつては野の爲めにし、官に在つては官の爲にするのは當然だから。鐵腸は小松原との私交を斷たなかつた。十七年七月小松原が獨逸に官遊する時、鐵腸は詩を作つて彼を送つてゐる。

　敢論出處不相同、猶有舊遊存夢中、市谷瘴烟會駢枕、柳橋風雪共推蓬、笑吾紫闥情殊薄、喜子青雲路己通、一世功名從此始、晴洋萬里趁飛鴻、

歸朝後も依然交際は續いてゐた。歸朝は二十年十一月、保安條例の出る少し前、而かも歸朝早々內務省參事官になつた小松原には保安條例の發布も人より先に分つてゐた筈である。鐵腸が條例を免れたのは、幾分この邊からも來てゐはせぬか。何うも此の邊の事實も案外助けになつてゐるかも知れない。然しかゝる交際も、自由派の人々からはたゞ惡くのみ解される一因となつたであらう。

　たゞ後藤との關係に於いては少し深入し過ぎて後藤に酷ひ目を喰つた。大同團結は鐵腸多年の理想であり、又後藤は盟友大石の親分であつたから、鐵腸も思はず深入したに不思議がない。然し歸省中、無斷で入閣といふ離れ業をや

られるとは思はなかつたであらう。鐵腸は旅先で情報不十分だつたので止むなく後藤の入閣を事後承諾的に扱つた。蓋し折角起きかけた大同團結の機運を破るのが惜しかつたのである。然しそれは後藤の入閣で明白に破れてしまつたのである。彼は早く一考すべきであつた。此の點が愚圖愚圖になつてゐたので、議會でも專ら後藤の呼吸がかゝつてゐるものと見られ(事實多少かゝつてゐたらうが)、その活動の純眞さを認められなかつた。これが議會人としての鐵腸には何よりの損害であつた。

今日公平に鐵腸の性格を想察してみるに、政治家としての長所も多くあつたが、短所も少くなかつたらしい。理想もあり、東洋的英雄性格もあり、多少の腹も策もあり、此の點は政治家として誠に適當であるが、而かも一面讀書を爲し過ぎてニヒリスチックな達觀の分子が多く政治に夢中になれぬ。又南方人だけに感情が割に激しく、詩人的風流が好きであるが、政治の實務は煩に堪へぬところであつたらう。學問讀書の効によつて表面老成練達に見えるが、本來は却々激し易い氣性で、清濁併呑などと澄してゐられない。理論家で、聰明で、獨自の意見があり、根が正直な人だけに、政友との折合ひも他の思つた程圓滿に行かず、又人を使ひこなして親分でゐられる人ではない。膽略は相當あるが、然し執着心が比較的ないので、事を成すに當つて他の妨碍にあふと、すぐ老莊的達觀の態度を出して、積極的に他と爭つてまでもこれを遂行するといふ熱意が欠けてゐる。合同主義とはいへ、自家の理想を中心としてのことで、理想に合はなくなると、合同も顧みないこと往々である。その癖言論上には自家の理想には大に忠實で、虚心らしく何人とも語る。理窟はいふが、實行には無精といふたちである。この無精も多病から出てゐると見れば同情はされるが、然し人によつては無誠意と誤解せぬとも限らない。要するに、理想主義のインテリ政論家の代表的なものであつて、實際政治家としては遂に失敗すべき人であらう。二十年前後までの盛名と二十三年以後の不遇はこれを物語つてゐる。

宮武外骨翁は、明治十四年上京した人であるが、國友會員でよくその演説會に出かけた。その時の鐵腸の印象によれば、服裝など粗末な和服で、袴をつけ、田舍の村長然として居た、頑丈無骨な身體つきで、背長は尋常、肉やゝ瘠せて骨太く、肩幅がひろく、顴骨の張つたやゝ平たい赭い角顔で、長い髮をもぢやもぢやに生やしてゐた。音聲は少し鹽辛聲であつたが、その雄辯は非常なもので、態度は莊重、いつも男性的な意氣が滿場を壓してゐたといふ。又、後に國友會員として度々演壇に立つた久我懋正氏に聞くところによると、鐵腸と馬場、大石は國友會の三人男といはれてゐたが、鐵腸と他の二人との間には根本態度の違つてゐるところがあつた。二人は過激派で對內的には暴力革命も避けず、對外的には武力侵略を主張したが、鐵腸は對內的には政治改良主義であり、對外的には武裝的だが平和主義を旨としてゐたといふ。さもあつたらうと思はれる節がいろいろある。

註(一)　吉野作造先生が、鐵腸の息末廣恭二氏(工學博士)の談なりとて私に傳へられたうちに、「親父は平生人によくいつてゐた、おれの文章は殘らぬかも知れぬが、詩だけは殘るだらう云々」とあつた。

註(二)　この間の消息を知る一材料として面白いものがある。花月新誌第六號(明治十年二月二十五日)に次の詩がある。

醉中贈校書某　　藤園情史　失姓

名花何必在妖嬌。淡々風丰魂欲銷。輕撚金絃笑侑酒。燈前相見不寂寥。俠慧況又識文字。温藉自足風流意。回頭一唱琵琶詞。邂逅誰能不盡醉。綺樓半夜春靄然。月老爲儂訂天緣。偏怕私語人偷聽。湘簾不捲月含烟。牡丹雖艶多粉飾。桃花亦帶斷腸色。獨有李香才思深。風情誰似侯方域。(横瀬天放云。石心鐵腸之人。而吐此綺語。亦是宋公梅花之匹儔)。

評によれば、鐵腸の詩たるは明かである。

註(三)　明治廿一年八月二十五日「社會燈」第七號

註(四)　『新聞紙經歷談』(十五)(文化全集『新聞篇』六六頁)

鐵腸の政治思想

鐵腸の政治思想については、部分的にいさゝか述べたところもあるが、今こゝで纒めて論ずる。前に述べたところと多少の重複はあると思ふが、宜しく取捨されたい。資料は主として曙新聞、朝野新聞に掲げた其の論文である。これによつて政治小說出現當時までの鐵腸の政治的イデオロギイを對內的のもの、對外的のものと分けて檢討してみよう、これ以後の分は次章政治小說研究の際に、必要なる限りに於いて觸れて行きたい。

ただその前に一寸前置きともいふべきものがある。それは鐵腸の政治思想のいはゞ基調とも根幹ともいふべきものを一應述べて置かうといふのである。鐵腸は封建武士階級出身のインテリゲンチヤであり、その思想の根幹は武士階級の公認教養ともいふべき東洋儒教主義に出發してゐたことは勿論である。此の頃政治上に活動したインテリゲンチヤには武士階級出が多い、彼等の政治思想を論ずるのに、歐米からの外來的影響だけを重視して、その根柢にある東洋的儒教思想を度外視しては大きな片手落ちである。殊に鐵腸の如き三十近くまで儒教的理想主義の教養をその唯一の教養として來た人には、格別大きな作用をしてゐやう。操觚者としての鐵腸は英米流の西洋政治思想の上塗をかけて新人に伍してはゐたが、然し根柢は彼も儒教理想の舊人であつた。儒教の政治理想は卽ち大體孔子の政治觀そのものといつてもよく、政は正也、政治卽道德といふ德本主義を原理とし、詩書禮樂で民を教へるといふ文化主義を手段にしたものであるが、鐵腸は此の德本主義、文化主義的政治觀をそつくり受け入れてゐる。且つ同じ儒學でも陽明學をやつただけに、知行合一說、事上練磨論などのおかげで、感情主義非現實主義の空理空論を排し、實驗實行を尊ぶといふ一種の實際主義めく分子も加味された。

鐵腸に影響した西洋政治思想は、徹頭徹尾英國風の改進的自由思想であつた。彼は自由黨に參加して重要な位地にあつたからとて、彼を目して自由黨の主流思潮ともいふべきフランス的自由平等主義、感情的革命主義を奉じてゐたなどと考へては大に誤る。黨として自由黨に屬した彼は、その政治的所信乃至主張に於て改進黨一流の秩序ある議會主義であつた。

鐵腸の政治論の中心は勿論自由民權論であるが、それが國權伸張國力發展を豫想してなされたものであることも、いふまでもない。これは自然後に重ねて觸れられるに至らう。細かくいへばまだまだあるが、先づ前置きはこの位にして置く。

明治初期の政治革新の Course を定めたものは第一に明治元年のいはゆる五ケ條の御誓文であり、明治七年の民選議院建白であり、次に明治八年立憲政體建立の聖詔である。この頃の幾多の政治論がさうであるやうに、鐵腸の政治論もこゝをスタートとする。

抑もそも政治の目的は何であるか、政治とは何を意味するかといふに、鐵腸によると——

最大公衆ノ上ニ最大幸福ヲ與ヘ所謂ル實利主義に背違セザルモノ（一）

これが政治の目的であるといふ。然らばこれを實現するには如何すべきか。それは何よりも先づ公議輿論を採つて政策に具現することを大眼目とする。公議輿論を政策に具現する最良の方法は、歐米の例を見るに國憲を定めて萬世の大計を建てた上、議院を開設してこれに參政の權を與へるにある。では、鐵腸のいはゆる公議輿論の性質は如何、これはいさゝか注意を要する。輿論とは勿論國民全部の贊成を經たる意見といふわけではない、多數少數の數できまる問題ではない。國民の中堅たる智識あり分別ある階級、換言すれば教育あり財産ある中等社會の同意せるところを指

す。(二)即ちインテリゲンチヤ、プチ・ブルヂョアジイ、殊にブルヂョアジイの共同意志の現れをいふものである。そこでこれを上述の政治の定義に宛てはめると、鐵腸のいはゆる政治とは主として一般ブルヂョアジイ（廣義にいつて）の幸福安寧を中心眼目としたもの、といふことになつて來る。

兎もあれ、政治の目的が以上の如くであるから、政治家たるものゝ任も亦、時勢民心を察し、社會の福利を計ることを第一の義務とすべきである。(三)輿論は機運から生じ又機運を生ずる、此の機運を利用して時勢に順應した政策を行ふ、これが政治家たるものゝ理想として心掛くべきところである。政治家たるものゝ資格は、鐵腸によれば、次の六つである、曰く公正なる心志、曰く敏捷なる才智、曰く快活なる精神、曰く剛猛なる膽略、曰く高邁なる識見、曰く寛濶なる度量、これである。(四)政治家はその理想の遂行には、此の六つの資格を必要とする。ところで此の六つは、當時としてはいはゞインテリゲンチヤのもつあらゆる善い資質から抽象拔萃したエッセンスである。鐵腸は意識的にか無意識的にか、政治家の第一資格がインテリゲンチヤたるにあることを明白にした。インテリゲンチヤが時代の公議輿論を踏まへて、ブルヂョアジイを政治的に指導し、彼等の福利の增進するやう改良をこゝろみる、これが鐵腸の考へた理想的な政治形態であつたといへやう。

さてかゝる政治理想をもつた鐵腸は、これを實現すべく、在朝在野の政治家に何ういふ註文を出したか。吾等は先づ在朝爲政家に對する鐵腸の要請を調べてみよう。

在朝爲政家の第一に留意すべきは、下情上達といふことである。よく民情時勢に注意し、公議輿論のあるところを察して政治を行ひ、人心を沈滯厭倦せしめず、活潑進步的ならしむるにある。而してこれを實現するには、なるだけ早く憲法を制定し、國會を開設するにある。時勢や輿論にみるも、歐米の例にみるも、國會尙早の如きは議論として成りたゝない。その準備としては、先づ民間政客に十分な言論の自由を與へ、常に上意下情が相通ずるやうにし、又

進んで民間の士を指導し、乃至協力して、理想達成の實を擧げなければならぬ。人民を奴婢視せず、敵視せず、虚心坦壞、警戒と猜忌を去つてこれに接すべきである。政治家の擧動は凡て光明正大でなければならぬ、これと同樣に爲政の態度に祕密陰險の分子を含んではならぬ。政治は國家の大事であり、國家の大事が祕密の帷幕の中でのみ行はれるやうでは、上下相通とはいへない。公議輿論を採る政治は、凡て祕密政治とは相反したものである。

時代と社會の勢ひは自然である、これを人爲的な力で喰ひ止められるものではない。民權論の勃興は、一つは維新以來の政府當局の進歩的改良主義が生んだ結果である。今更民論の威勢に恐れて、假りに中古時代の如き專制獨裁の政治を行はうとしたとてそれは出來はせぬ、有司專制といふ變態を生じ、官民をともに政治的に退歩せしめる。政府としては、今更反動主義を助長しようとしたとて、それは自然の勢ひに逆行するものであり、徒らに社會の不安を增し、上下を紛亂せしめ、公議輿論の所在を沒却させるだけである。既に憲法を定めて立憲政體とし、人民に參政權を許す方針である以上は、何としても改良主義に徹底する外に途がない。政府は人民の政議に熱中するのを見て、空論に奔つて愛國心を忘れたかのやうに考へ、これに早く參政を許したなら如何なる事を仕出來すかも知れないといふ懸念をもつてゐるらしいが、これは民權論の本體を知らぬもの、自由主義と共和主義をとり違へてゐるからである。民權と國權は表裏をなすものであり、從つて民權が伸張すれば國權も伸張する、民權論は要するに愛國論憂國論であり、民間志士は皆愛國者である、政府當路の人々と比較して、この點で優るとも劣るものではない。元來政府は、社會人民の幸福を實際的ならしめる方法として設けたものであり、政府當局はその目的を遂げるために位にあるわけであるから、同一當局が政府を獨占し、參政權を壟斷するのはよくない。單によくないばかりでない、事實存在の意義がなくなる。政府の意義をはき違へ、公議輿論と絶縁した政府當局が、藩閥を形成し、反動勢力たる舊封建士族を糾合して、その力によつて自家の權力を永續させる如きことを企らむならば、それは、國家の進歩を阻害するものであ

る。眞の政府らしい政府、明白に政治の理想を認めてゐる政府ならば、反動士族に依頼するよりも、進歩的な民權家を保護し、これと協力して、國家永命の法を講ずるのが當然である。政府が公議輿論を無視して、非進歩反動化すれば、勿論上下通ぜず、民論の激昂を招く。さうなればたゞ官民が相軋轢するのみで、政治の理想と相去ること遠いものとならう。いかに軋轢すればとて、今日に及んで民間運動の武力鎭壓は不可能である。强て干渉壓服すれば出來るが、その代り社會が沈滯し、人心萎縮して、國運の發展が憂へられる、若し又然らずとせば、激昂の極諸外國の例に見る如く、社會黨虚無黨の如きものが生ずるかも知れない。爲政者のもつとも心すべきところである。鐵腸のかゝる憂國警世的な文章のうち、十三年八月朝野に出た「祈天永命論」の如きは八章から成る長篇で、この種のもの丶代表的な一つであるが、左にその一節を引用してみよう。

故ニ一國ノ幸福ヲ保持シ天祿ヲ億萬斯年ニ傳ヘント欲セバ上下ノ協同一致シテ天ノ永命ヲ祈ルニ外ナラザルナリ嗚呼上ニ君主アツテ下ニ人民アリ而テ政府ナル者ヲ建テ、社會ノ事ヲ經紀ス上下尊卑ノ異同アリト雖モ同一ノ社會ニ立ツテ同一ノ邦土ニ居ル利害相關シ痛癢相及ブ恰モ五管四支ノ人身ニ於ケルニ異ナラス苟モ狂顚麻木ニ非ザルヨリハ何ゾ同胞ノ安危ヲ視ル秦人ノ越人ニ於ケルガ如キ者アランヤ故ニ君主ハ曰ク如何シテ政府ノ基礎ヲ鞏固ニシ人民ヲシテ其ノ休養ヲ得セシメン人民ハ曰ク願クハ我ガ君ヲ奉體（モトノマヽ）シ之ヲシテ疾病無ク憂慮無カラシメント而シテ上意ヲ下達シテ下意ヲ上通スル者ハ政府ノ職掌ナリ故ニ善良ノ政府ハ必ラズ善ク君主ヲ補佐シ社會人心ヲ慰撫シテ公論輿論ニ背馳セザラン事ヲ要ス上下ノ協同一致シテ君主ノ九五ニ安ンゼズ人民ノ田野ニ樂マザル者ハ未ダ之レ有ラザルナリ君主安ジテ人民樂ム是ニ於テ政府モ亦其ノ平安堅固ナルヲ得テ社會ノ幸福繁榮ナルヲ望ムベシ一國ノ爲メニ天ノ永命ヲ祈ルノ道ハ蓋シ玆ニ外ナラザルナリ

此の種の文章には何れを讀んでも、上下相通、公議輿論といふ文字の下に、何處やら陽明學流の在レ親レ民といふ大學

の一句が潜んでゐるやうな臭ひがする。

政府に對する註文は註文、警告は警告として、政府の實際的態度については如何。鐵腸によると、かく上に立憲政體の聖詔あり、下に國會論の勃興があるに係らず、政府に獨り斷行の勇がない。陛下は既に國民の前途を祝福されて立憲政體を人民に與へることを許し給つた、人民は聖衷に感激し、これに報ぜんとて國會論を唱へて奔走する。然るに政府は時機尚早を名として、上下の間に立ち、公議輿論を遮閉する如き態度をとつてゐる。時機尚早とする理由は略ぼ五つ、曰く國會論を全國の輿論といふも、これは舊士族が地方人を煽動してゐるからに過ぎない、曰く人民は未開無知なものが多いから到底まだ國會に與かる資格はない、曰く漫りに人民に參政權を許すときは皇家の不安を來す恐れがある、曰く假に國會を定めて代議制體とするも、要するに政治の樞機は二三有力者の握るところとなり、要するに一種の專制政治となる、曰く代議政とすれば、多年養成した熟練と經驗が廟堂から一掃されてしまふ、これである。然しこれは問題を一方的に見て、專ら政府自身のためにのみ杞憂してゐるに過ぎない、國家人民全體の上からせば、かゝる理由は理由とならない。第一の士族の煽動云々は、この頃の地方ブルヂョアの自覺を知らぬ言である、第二の公民無知云々、それならば益々餘計代議政體を布いて人民を政治的社會的に啓發向上させてやる必要がある、且つ政府や役人には成れる人間があつても代議士にはなれる人間がないとは妙な論法である、第三の皇家の不安云々、これこそ杞憂中の最大なるものである、事實上國會願望論が維新運動の延長たる國權伸張主義を一面にもつてゐる限り、かゝる事は起り得ないが、理論上からいつても立憲政體に於いては政治的責任は一切大臣と政黨に歸し、皇家は政治的には極めて安全である、不安どころか却つて皇家に利がある。第四これは一應尤もらしいが、憲法や議院法やの力でさういふことのないやうに十分出來るし、第一公議輿論が有力なものとなれば、さういふ有力者專制政治をやり遂げる見込はない筈である、第五に代議政となれば廟堂から熟練と經驗が一掃されぬか云々、その熟練と經驗が眞

の政治的才識を意味するものであれば決してその恐れはない。一度一掃されるかに見えても又復活する。かういふ次第で、鐵腸によると、政府側の時機尙早論は何れの點からも成り立たない。政府は宜しくかゝる一時逃れの詭辯を弄さずに、早く公議輿論實行の府となり、國憲論國會論を實行するやう上下の間に努力しなくてはならぬ。これが國家をして天の永命を得しめる道である。(五)

以上は主として政府即ち在朝爲政家の爲めにいつたのであるが、轉じて在野政治家、即ち民間志士の爲めに鐵腸は何をいつてゐるか、如何なる註文を出してゐるか。

若し政府の第一義務が公議輿論の實現にありとせば、民間志士の第一義務はその公議輿論のあるところを政府に知らしめることでなくてはならぬ。それには何よりも先づ言論操觚の自由を獲得しなくてはならぬ。然し言論操觚者が注意しなければならぬことは、人民の利益を思ふ餘り極端に走せて、何でも彼でも政府や役人を人民の仇敵視してしまはぬと人民の爲めにならぬと考へることである。これは根本的な誤解で、政府も權力も人民社會にとつて必要なればこそ發生したものであり、本來の性質上人民と敵對的立場にあるものではなく、相調協して政治理想の達成に當るための機關なのである。勿論、民間論者をして、政府をかく仇敵視せしめるのは、政府の爲政家にも責任があるが、然し政府そのものは人民社會の利益幸福のために、存在して居るべき筈のものであつて、從つてこれを無差別的に憤怨の對象とする譯はない。權力が上に重く下に輕い場合、又は下情が上達せず上下背馳した場合、一二の有志が社會人民の爲めこれを正さんとして矯激の言を弄することは許すべきである、然し總體的にいへば、時事を論じ時政を批評する人々の精神は、政府の治化を助け、公議輿論のあるところを知らしめ、政府がこれを實行せんとする努力を援けてやるといふ點になくてはならぬ。即ち民間政治家たるものも亦虛心坦懷、政府を助けてその不足不備を補ひ、相調和して輿論の眞現達成につとめなくてはならぬ、(六)と鐵腸はいふ。

幕末維新以來、政治改革の手段として反上抗官の腕力主義が選ばれる風潮があるが、かゝる風潮は文明的國家に於いては決して繰返すべきものではない。宜しく文化施設によつて人民を啓導し、公議輿論の力をもつて改革を遂げるやうにしなければならぬ。總じて政治上に腕力萬能主義を用ゐるのは野蠻未開時代の遺習であつて、文明人士の所爲ではない。勿論文明世界にも腕力の必要はある、然しその必要を發揮するときには知力に指導されなければならぬ、知力に指導されるとき始めて、腕力は國家社會の利益となるやうに行使される。凡そ腕力主義による政治革命程測り難い慘害を人間社會に與へるものはない。(七)我が國近年の大天災は安政年間の大地震をもつて最とする。然し暴力革命の慘はこれより更に更に甚しい。尤も天災に前兆がある如く、革命の來るのにも前兆があるから、政府も人民も十分注意してかゝる大慘事を豫防しなくてはならぬ。革命の來る時機を考へるに、上下が如何程衝突しても、共に社會の幸福を念としてゐる限り、革命といふものは生じない。たゞ政府が手段と目的を穿き違へ、政令を濫發して、眞向自家の地位の安全をのみ保たんとして肝心の全社會の利害を顧りみぬとき、又人民が一も二もなく政府に反對し、專ら政府攻擊を目的とし、自家自身の過度の自由を主張して社會の利害を考へぬときは、革命の前兆と見られる。單に人民の側からのみいへば、權利自由の增大といふ形式的結果は豫想されるかも知れないが、然し實際はそのため極度の無政府狀態となり、腕力によらずば何事も出來なくなつて、非常な壓制政治を生ぜんとする。フランス革命はその適例である。政治改革を要望する人民はこゝに三思するところがなければならぬ。同時に、政府當局が社會の風潮に鑑みて進んで適度の改革をなすべきである。

抑もそも政治改革には腕力革命が當然とする思想は自由民權に對する誤解乃至誤用から生ずるものである。自由とはもとより「吾人ガ爲スヲ得ベキ所ヲ爲シ行フヲ得ベキ所ヲ行ヒ敢テ他人ノ爲メニ妨害セラレザル」の謂ひではあるが、(八)然し他人の妨害を受けぬといふことは何事につけて自分勝手に振舞つても可いといふのではない、國法がある以

上、自由も國法の許す範圍内の自由でなければならぬ、國法を無視せる自由は無政府である。人民に自由を與へるといふのも國家の發達人文の開導に資する目的から出てゐるのだから、絶對無條件の自由の許される譯もないが、又それを望む方も間違つてゐるのである。又民權についていへば、民權論の主張に當つて、第一に用心しなければならぬことは、僞民權論を峻別排斥すべきである。[九] 僞民權論とは何かといふと、民權論の假面を被つた士權論、これである。僞民權には二種あり、一は元來の反動家で封建主義者たる人々が、民權論を利用して反上抗官を試みんとするもの、他は、官途に志を得ぬ失脚者流が、民權論を利用して青雲に上る足場にせんとするもの、これである。この第二の方は士權論とはいへぬといふ異議もあらうが、然し官權萬能の思想をもち、目的に手段を撰ばず、不平士族に民權論を鼓吹して密に立身の足場にしようとする如きは、又やはり間接の士權論者たるものである。眞の民權の發達にはこれを邪魔物として排斥しなければならぬ。況んや又虚無黨社會黨に倣ふ腕力行爲の如きは、民權の誤用たることいふまでもない。凡て政治の改革は實力を背景にした公議輿論を介して行はれるべきである。從つて貧書生が西洋歴史から生呑したらしい鮮血自由論を通用させてはならない。學識あり、身體の重んずべく財産の尊ぶべきを知る人々で始めて責任をもつて自由民權を擴張する道を説すべきである。卽ち鐵腸は政治改革は凡て合理主義によるべく、感情主義に逸することは絶對禁物であるとなした。

要するに、政治の事は、封建的遺習で士族だけに任せてよいと思つてゐてはならぬ、國民全體が進んで國事を負擔する慨がなければならぬ。封建制度崩壞の後は人民と士族と地を換へ、一切が人民卽ち平民中心の社會に移り行く運命にあるので、殊に人民は奮發しなくてはならぬ。[一〇] 世事萬般士族中心の時代はもう過ぎた、政治も教育も人民中心の實用的なものに改革する必要がある。凡そ此の種の改革は空理空論によらず實力によらなければならぬ、さうしてその實力は財力の有無によつて定まる。然し單に財力だけでは輿論を作して改革の實を遂げるわけには行かない、宜し

く知識を指導者とし知識の力を藉らなければならない。財力と知力の合體したものが鐵腸の所謂眞正の實力である。これを當時の實勢に照して具體的に言はうならば、地方人士は財力に富み、都會人士は知識學識に富む、これは一地方と限つても、全國的に見ても然り、然るに日本當時の實勢よりいへば、財力ある地方ブルヂョアジイは知力を缺き、知力ある都會インテリゲンチヤは財力がない。從つて先づ地方人士は奮起してその財力によつて輿論を後援し、都會人士と合體してその實現を期すべきであり、又都會人士は又地方人士を後援として輿論の指導表白に知力を傾けなくてはならぬ。かくして生じた輿論こそ眞の力ある强いものであり、これによつてこそ政府當局をして政治改革の必要を意識せしめるのである。

　政治上に於ける人民の奮起はかく極めて望ましいものであるが、然しそれの本旨を穿き違へて、此の人民を下等社會の人々の義に解し、平等主義の理によつて下等社會を政治的に啓蒙することを意味するとのみ取つてはならない。抑も政治の目的は多數者の幸福にあるので、空想的な權利の平等にあるのではない。今日下等社會の人々は財力も知力も共に缺けた人民の集團であるから、輿論構成に參加する實力はない。勿論政治の目的たる幸福を實現するためには、財力階級は下等社會を物的に救濟し、知識階級は彼等を知的に開導教育しなくてはならぬ。然しながら、空理空論を實にせんと焦慮するあまり、實力なき彼等を實力あるものゝ如く考へ、乃至實力あるものゝ如く思ひ込ませて、彼等を政治的に煽動し、ルソオ流の思想を吹き込むのは、決して政治改革の道ではない、政治の目的を達する所以では勿論ない、一歩誤ると腕力革命の危險を生む。輿論指導の任に當る人々は、この點に深く注意しなくてはならぬ。（二二）

　かくて實力ある輿論、輿論の强力化の問題は自然に政黨團結の問題に落ちて來る。輿論は如何に公正なものであつても、それだけでは政府を動かす力が出て來ない、眞に政府を動かさうとせば輿論の背後に團結の力を組織しなければならぬ、即ち政黨團結の必要が生ずる。政黨は輿論を代表する團結たる點に於いて、民間人士にとつて强力な對政

府運動の武器たるのみならず、政府にとつても政治改良の要求と目標を知るためにも必要な存在である。それは立憲政體に於いて必要なるは勿論、立憲政體の準備期に於いても大に必要なものであり、有効なものである。だが鐵腸の政黨論については、いづれ後に詳しく述べるつもりであるから今こゝでは一寸觸れるだけで止めて置かう。

何れにしても、輿論が眞に力あるものであり、強いものであれば、如何なる權力でもこれを阻止することが出來ない、その主張の必ず貫徹されることは、古今の民權發達史に徴して明らかなところで、貫徹に伴なふ困難の多少は問題にせずとも可い。これが貫徹に困難が伴へば伴なふ程、その結果たる政治的改革には光輝が伴なふわけである。從つて民間志士は、この點からも、焦慮して奇道を用ひ、自分から必勝の道を塞いではならない。あくまでも正々堂々あくまでも光明正大に、主張し要求し行動しなければならぬ。多少の時日は、忍耐して待つべきである、然し主張貫徹の程度遲速は一に民間人士の熱意如何にあるのだから、決して油斷懈怠は許さぬのである。

だが鐵腸は民間志士にかく理想的註文を出すと共に、政黨團結以外、時勢に即して具體的に民權を伸張する二三の手段を彼等に暗示せぬでもなかつた。當時の政府の對自由民權運動の態度が前述のやうなものであつたゞけに、民間人士の政府に對する態度も、實際的手段となれば、合法的であるが抗官的な分子をもつて來るのも止むを得ない。

鐵腸が暗示した第一の手段は民會、即ち地方府縣會を利用することである。府縣會は地方的なものであるが、實際政治を議決する府であるだけに、その任が重く、その影響は直ちに官民に及ぶ。民間人士はこれを以て輿論實行の機關たらしめるは勿論、最初から全國的立憲政治の稽古のつもりでこれに當り、あらゆる機會を利用して民間の政治熱を覺醒するやう務めなければならぬ。成るべく民間の施設には官憲の干渉を排し、人民が主となり、官の都合より人民の爲めといふことを主とし、可及的官憲の權力を殺いで濫用する餘地のないやうにしなくてはならぬ。土地の舊慣の尊重に托し、區戸長の實質的官選を改めしめ、府縣費の使用權を占取するなど、兎もかく完全に地方自治の實を擧

げるに務めなければならぬ。かく民會によつて自由民權の運動を進めようとせば、必らず官民間に衝突が出來る。この衝突を利用し、民間人士は操觚者の力を藉りて政府の失態を明白にし、その根源が畢竟まだ專制政體に執着してゐる爲めにあることを宣傳すべきである。さうしてこれが鐵腸の暗示する第二の手段である。具體的にかゝる利用可能の衝突の例を擧げると、地方的なものとしては横濱瓦斯の紛紜(十一年二月)とか川崎驛積立金處分問題(十一年三月)とか、金澤の縣議拘引事件(十三年)とかゞあり、これをやゝ全國的なものとしては有名な北海道開拓使拂下事件(十四年)の如きものがある。實際鐵腸は又かゝる問題の起つた時、蹶然起つて民權擁護、專制排撃の筆を振つた。殊に開拓使拂下事件の如きは、政府の失態蔽ふべからざるものがあるため、極力これを利用して反政府の氣勢を煽り、國會要求の口實たらしめた。此の事件をもつて鐵腸が「三千五百萬ノ兄弟ノ爲メニ慶賀ス可キ事件」(二二)であるとなしたのは宜なるかなである。

鐵腸の暗示した第三の手段は、藩閥自滅策である。時の政府が所謂藩閥から成つてゐるが、藩閥の續く間民權は廟堂に伸び難い。從つて藩閥の自滅を計ることは間接に民權伸張の効がある。藩閥は然し事實上はさう恐れるに足らぬ、要するにその頼むところは腕力權力である、だが開明社會知識社會には腕力や權力は言論の力程强力なものではない。幸ひ藩閥には言論の力は殆んどないから、知識階級の人々が言論でこれに味方することを止めたなら、藩閥は必らず自滅の道を取るより仕方がない。言論操觚者はこの點を心得べきである。

鐵腸の第四の暗示ともいふべきものは、直接の政治的意義を離れた民間施設乃至經濟、生産事業等からも能ふ限り政府の干渉を撤去せしめる(乃至局限せしめる)ことである。鐵腸は民權伸張の立場からそれを論じたのであつて、必ずしも經濟學上の自由放任主義がブルヂョア商工業の興起に必要條件だといふことを心得てやつてゐたのではなかつたらうが、期せずしてブルヂョアの代辯となつてゐるのは、注目される。鐵腸のかゝる自由主義的態度は、例へば

商法會議所が同業組合設立に政府の助力を乞ふたのを排したとき（十二年三月十三日朝野）、三菱會社の保護金の不當を論じたとき（十二年十月九日朝野）、火災保險が政府の職掌に非ることを論じたとき（十二年十月三十一日以降朝野）、官設の備荒貯蓄法が却つて人民搾取を助長する恐れのあることを論じたとき（十三年二月五日以降朝野）、民間産業には官の干渉の不要なるを論じたとき（十四年一月二十三日朝野）、民間施設乃至事業に對する政府干渉の弊害と結果を論じたとき（十四年三月十一日、十五年十月十九日朝野）等々に於いて、明らかに看取される。然しその議論が民權伸張の立場から割出されてゐるのは今言つた通りである。凡そかゝる鐵腸の自由主義は對内的に民權を伸張せしめる限りに於いてのことで、對外的事情に於いても同樣だといふわけではない。この點は後に觸れられるであらう。

以上詮ずるところ日本をして國家的に圓滿に發展せしむるには立憲政體を採り、議會政治を行ふより仕方がない。では鐵腸が理解してゐた立憲政體とは如何なるものか、それを一瞥する。それには「祈天永命論」の一節を引くが便利である（同論第七より）。曰く――

立憲政體トハ如何ナル者ゾヤ君主モ政府モ人民モ盡ク國憲ノ下ニ支配セラレ國會ヲ以テ法律ヲ制定シ行政ノ大權ハ一ニ宰相ノ擔當スル所ニシテ宰相ノ助言ナケレバ一事ト雖ドモ之ヲ履行ス可カラズ、而シテ其宰相ハ止ダ國王ノ執政ニシテ國王ニ對シテ責任アルノミナラズ亦國民ノ公僕ト爲リ國會ニ對シテ責任セザル可カラズ故ニ其ノ計畫スル所ノ君主ノ爲メニ拒絶セラルレバ其ノ位ヲ去リ其施行スル所ノ國會ノ爲メニ排斥セラルレバ其ノ職ヲ辭シ一切ノ政務ハ國會ニ向フテ之ヲ辨解シ內政外交ノ失錯ハ自ラ其ノ責任ヲ負ヒ自ラ其ノ責罰ヲ受ケ毫モ君主ノ敢テ與リ知ラザル所ナリ夫レ止ダ此クノ如キ組織ナルヲ以テ苟モ政府ガ所爲ニ於テ人望ニ背馳スルコトアルモ人民ガ囂々ノ怨聲ハ

徒ニ宰相ニ向フテ之ヲ發シ政府ニ困難ノコトアルモ王家ニ顚覆ノ禍ヲ蒙フルコトナシ國會ト國王トノ間ニ起ル危難軋轢ハ變ジテ政黨ノ拮抗ト爲リ勝利ヲ國會ニ得ルモノ玆ニ一國ノ權力ヲ占取シ政府ノ事務ヲ宰相ニ引キ受ケ國王ヲシテ之ガ勞苦ト危難トニ當ルヲ須ヒザラシム故ニ曰ク國王ハ惡ヲ爲ス能ハズ又曰ク君主ハ位ニ在ツテ宰相ハ政ヲ執ルト英國ノ立憲政體ノ組織ノ如キ卽チ是レナリ

鐵腸の所謂立憲政體の如何なるかは、これで明瞭であるが、同時に彼の眼中には英國の立憲政體が理想として映つてゐたことも、これで略ぼ想察される。以下、立憲政體の根幹たる國憲、國會、政黨の三件について鐵腸が如何なる思想をもつてゐたか、その概略を窺ふことにしよう。

嚶鳴社では明治十二年憲法調査に着手し、私案をも作つたかに噂されたが、此の案の成否は判明せず、從つて內容の如きも一切不明であるが、嚶鳴社それ自身の政治的イデオロギイから察して矢張り英國風改進主義のものであつたらうといふことは信じて可からう。鐵腸はこの憲法調査の際進んでその員に加はつたといふが、以上のやうな次第でそれに何れだけの貢献をしたか、勿論想像の限りではない。又鐵腸の憲法論といふ如き纏つたものは、朝野新聞にもその他の何處にも見出されない。だが彼の意見の片鱗の諸處に散在してゐるものと、朝野新聞に於ける彼の同僚達の論調を參考すると、大體左の如くではなかつたかといふ見當がつく。卽ち、國憲は一種の國約たるべく、草案は政府の手に成るにせよ、單に政府の好都合をのみ規定したものでは萬世の法とはならぬ、宜しく人民の認諾を經なくてはならぬ、敢て民約とはいはぬが、十分人民を滿足せしむるものでなくては施行すべからず、とした。(二三)鐵腸の同僚中には、先づナショナル・コンヴェンション（國民公會）を召集して憲法を議定し、これに天皇の批評を請ふべしとした人々もあつたが、(二四)鐵腸はそれ程明白には言ひ切らなかつた。然し衷心の理想はそれを望んでゐたらしい、卽ち先づ國會を召集して政府と共に憲法草案を議定することを欲してゐたらしい、然し人民の意を十分汲んで吳れゝば、欽定に

も强ひて反對はせぬといふ立場をとつたものであらう。國憲に關する鐵腸の思想は、大體以上の如きものであつたといつて可い。

國憲と反對に、國會に就いては、鐵腸は可成り明白な意見を吐露した。その最も纏つたものは明治十四年十月二十五日國友雜誌第三十四號に見える。同年九月廿五日井生村樓で國友會員が政談討論演說會を開いた、出演者は鐵腸の外に、林包明、西村玄道、堀口昇、角田眞平、大石正巳、青木匡、高橋基一、淺野乾等の國友會員、外に客員として坂崎斌(紫瀾)、宮地茂春(板垣の女婿)であつた。この時の討論議題は「議院ハ必ズ上下兩局ヲ要スルヲ論ズ」といふのであつて、上の國友雜誌第三十四號にはその討論筆記が出てゐる。鐵腸はこの議題の發論者として熱心に上下二局議院論を述べた。その議論の大意は次の如くである。曰く、一局論者は、立憲政體の主義上上院は邪魔物であり、英國の如きは特例に當る。議會は政府と人民代表とあれば可しいと主張する。然しこれは贊成出來ない。抑もそも政府が專權なれば國會が抑へるが、國會が專權なれば誰が抑へるか、こゝに上院なるものゝ必要が生じて來るのである。上院は政府と下院の調停役である。一局議院論者は、此の調停役の上院に君主をもつて代へようとするのであらうがそれは不可ない。又さうかといつて上院下院が完全に權力を兩分して兩立してしまつたのでは、相嫉視して恐るべき結果を生ずる。歐洲諸邦、殊に英佛の例によるに、上院の用は、政府の强梁する時下院と共にこれを抑へ、下院强横なるときは政府と共にこれを挫いて、憲政の妙用を發揮するところにある。これが第一である。第二に今日日本に於いて普通選擧の理想を行はうと說く人々もあるが、これは出來ない相談である。若し强いて普通選擧を行へば、議會は愚人又は勞力社會の集會所となつてしまふ。だがさればとて中等以上の貴族人士のみから議會を組織するのも不可である。それでは下等社會人民の幸福が顧慮されない。かゝる時に一院制の缺點が極めて明瞭に出る。兩院制の長所はこゝでもわかるが、卽ち財力經驗ある人々よりは上院を組織し、中等以下の人民からは下院を組織するが可い。第

三に、兩院のある方が一院よりも議事を鄭寧にすることになる。第四には、天下國家の事を行ふに空理空論によるのは不可である。宜しく歴史的經驗に據るを可とする。英佛の議院制の如きは、既に歴史的試驗を經たものであるが、皆一局一院制に失敗し、結局上下二院制の方を可とすることになつてゐる。これが最も有力な證據である云々。大石、堀口等はこれに反對し一局議院論を主張したが、鐵腸は再三反復して上下兩院制の利なる所以を固持した。その後、十月二十三日の討論演說會に於いて馬場辰猪は、「議院ハ必ズシモ二局ヲ要セズ」の議題を出し、自ら起つて鐵腸の二院論を痛烈に駁撃し、一院制ならざるべからざる所以を主張したが、鐵腸も負けてゐず、東京府會を例に取り、下院一院では下層社會の論に制され易く又豪傑の士に制され易い所以を論じた。(當時の府會は殆んど沼間守一の個人意志で左右されるかの觀があつた)。

國會について上下二院主義を執つた鐵腸は、選擧法について如何に考へてゐたか。それは今し方一寸暗示したやうに、普通選擧反對、制限選擧贊成であつた。勿論それには、當時としてはといふ條件がつくであらう。國友會員は、十五年二月四日に井生村樓で國會議員選擧法を討議したが(その筆記は國友雜誌第四十號にある)、鐵腸は發論者として、大體次の如き意見を述べた。曰く立憲政體の本旨として議員の選擧權は成るべく廣く及ぼすやうにしなくてはならぬ。然し今日實際の狀勢に於いては普通選擧とはなかなかされない。彼の米國の如き(明治十五年當時のこと)、選擧權の及ぶところの極めて博いので有名であるが、それでさへ女子、小兒、被救恤者、白痴などにはやつてゐない。卽ち普通選擧ではなく一種の制限選擧である。我が國今日の事情よりせば、議員選擧法に於いて幾分の制限を設けるのは止むを得ない。單なる自由權利の美名に驅られて突然普通選擧にするといふことは、世の極端な空妄論者とてやられぬところであらう。然らばその制限はといふと、それには二つの標準がある、第一は教育、第二は財産である。卽ち少くとも小學卒業以上で丁年に及んだもの、又國稅負擔の能力あるものに選擧權を與へることにしたい。かゝる制

限を設けるのは議院が愚人の府となることを防ぐためであり、社會多數の幸福のためである、眞正なる代議士を擧ぐる權利を重んずれば、何うしてもかゝる制限を必要とする、云々。これに對して大石正巳、奧宮健之等は反對し、同等同權主義の立場から徹底的普通選擧を主張した。然し鐵腸は更にその同等主義を駁し、下等人民には人物の眞否を見分ける能力がない。下等社會に無制限に選擧權を與へるのは危險至極である。若し制限選擧を不可として普通選擧を行はんとならば、下等人民を啓導して知識財産に均霑せしむべきであると論じた。

當時、別に黨議といふ程ではないが、自由黨は一局制普通選擧、改進黨は二局制制限選擧と相場が定まつてゐた。然るに自由黨常議員として代表的名士の一人たる鐵腸の議會及び選擧に關する意見は、實にかくの如く改進黨的である。鐵腸の政治思想の包容的調和的な特色はこゝにも出てゐる。然しかゝる改進黨的意見及び改進黨的人士との交際が從來彼の頭上に多少の疑雲を生むに至つたのは止むを得ない。此の點からいつても、鐵腸は到底自由黨に終始の出來る人物ではなかつたのであらう。

さて續いて鐵腸の政黨論を調べてみようか。

鐵腸によれば立憲政體は當然政黨政治たるべきものを意味してゐるから、立憲政體に政黨の必要たるは言ふまでもない。然らば立憲政體實施前には政黨が必要ではないかといふと、鐵腸によると決してさうではない、さうではないどころではない、大に必要がある。それでは立憲政體實施以前の政黨とは如何なるものでなければならぬか。鐵腸の政黨論は、主として立憲政體以前の政黨に關するものゝ方が多い。

鐵腸の解してゐた如き政黨なるものゝ窮極の目的は、勿論輿論政治の貫徹を期するにある、輿論政治を貫徹せしめて社會の利益を圖り人民の幸福を鞏固にするにある。これは如何なる政黨にも通じて變らぬ原理である。だが窮極の目的は同一であつても、時勢によつては當面の目的を異にする。立憲政體實施以前と實施以後とは政黨の目的が相違

せざるを得ない。實施以前の政黨の目的は、團結の力によつて輿論に强力な支援を與へ、能ふ限りその實施を促進せしむるにある。これを具現する手段としては、先づ同一主義、同一意見を有する人々が（卽ち鐵腸の場合には、國會贊成論者が）、合同して一大團結をつくり、反對主義者の主張を破り、政府をして輿論の威力を知らしむることである。これがその鬪爭的一面である。同時に又、立憲政體實施のために自ら準備し、人民をして準備せしむるところがなくてはならぬ。これがその啓蒙的一面である。最初は勿論鬪爭的一面が重視されるべきであるが、立憲政體實現の可能性が近くなるにつれて、準備政黨たる一面が大切になつて來る。

此の故に鐵腸が、當時に於いて何より急務なのは大同主義に成る政黨の團結にあるとしたのは、無理がない。この頃の日本の政黨社會は全然小黨分立で、地方的感情で團結した地方黨、個人的勢力を中心とした個人黨など、多い時には全國で百三十程もあつたといふが、[一五]何れも政黨らしい政黨はなかつた。十四年自由黨立憲政黨の結成となり、十五年改進黨、帝政黨の組織となり、幾分眞の政黨らしき團結が出來たと思つたのも束の間、各黨間の感情的軋轢と維持力不足と政府の干渉とで、二三年經つうちに、共倒れとなり、殘つたのは、ともかくもインテリゲンチャと新興ブルヂョアの合體した改進黨だけが僅に形だけ殘つた。自由、改進兩黨の爭ひの如き、實に猛烈を極めたものであつたので、民間運動の氣勢を殺ぐこと甚しいものがあつた。始め鐵腸が自由黨に合流したのは、その持論たる大同主義的團結を實現するにあつたのであるから、かく當然協力すべき兩黨が感情的に同志打ちを始めるに及んで、脫黨して獨立黨を作つた。傳記の條でも述べてあるが、鐵腸の脫黨は、直接には板垣一派との衝突のためのやうに見えても、實は此の大同主義の立黨精神が行はれなかつたのに基因してゐたのである。又一方、政府の政黨に對する干渉的態度も、實は政府としては損な策で、小黨分立は政黨を私黨徒黨にし、政治運動を過激な潛行的自暴的な破壞的なものにする。大同主義的政黨の出現は表面恐ろしく見えても、國家社會の大體からいつて利益であり進歩であるのみならず、自家

にとつても不利なものではない。政府は干渉政策よりも啓導的態度を取るべきであつた。鐵腸はその獨立黨をもつて民間黨の調和役であり大同主義實現の機關であると見なした。勿論この理想は悉くは行はれなかつたが、然し十九年以後の政黨大同運動が、幾干にせよ鐵腸の言動に負ふてゐることは、改めて言ふまでもあるまい。

平靜に當時の日本で一般に政黨が發達しなかつた事情を考察してみると何うか。鐵腸は大體次の如き原因によるものとしてゐる(一六)。即ち、先づ各政黨に關係する人々の數が少ない、黨の中央と地方と連絡がない、人民に政治的經驗が少ないので、政黨に財を投じて政黨の活動を圓滑ならしめる人々が少ない、歐米の政黨は主義思想の結合を根本とするが我國は名簿の如きものを必要とするため徒黨の觀を呈し易い。又未だ立憲政治が實施されて居らぬので、政黨に政治上の實際的經驗なく、人民も十分政黨の力を信じない等々である。だが政黨の發達を自然に放任にしては立憲政體の美を見ることもそれだけ遲くなるわけであるから、民間の人士は、協力してこれが改良に從事しなければならぬ。ではその改良の理想を何處に置くべきか。何國の政黨を目標として改良したら可いか。政黨の發達せる國家といへば、先づ英米獨佛四國しかない、さうして日本でも政府は新興ドイツの政黨操縱鎭壓策に依らんとし、民間には佛國流米國流の共和政治を要求する向きもあるが、然し此等諸國は斷じて日本の模すべき國ではない、日本將來の政黨の模倣すべきは英國あるのみ。宜しく日本の政黨は、英國の保守改進二大政黨が對立して交互に政治的經綸を行ふといふところまで行かなくてはならぬ(一七)。凡て政黨はその根本條件として、(一)主義を以て結合すること(個人中心黨、情實黨、地方黨などは斥くべし)、(二)黨議政策を天下に公示すること(政黨の目的、手段、運動方法等の如何を知らしむべし)、(三)國會開設後は勿論、國會開設前と雖ども、參政準備を怠らず、國會議場にて自黨の目的を實現する功夫に努むべきこと(學者實際家を加へ敎育、司法、外交等の部門を分つて研究調査し、議場に役立てるやう心掛くべし)――が必要である。その反面に又、(一)有形上の組織より無形の一致を貴び、出入進退を自由にすること

(盟約や名譽に拘泥せぬこと)、(二)個人の徳義内行に立ち入り、讒謗してはならぬことが必要である。(一八)

又、政治家が政黨を持續するには、(一)その黨中多數者の利害を顧慮するやう、(二)一時の人氣にのみ依賴せぬやう、(三)黨員個人には容易に愛憎を示さぬよう、注意しなくてはならぬ。如何に主義思想上、團結一致した政黨にせよ、その團結持續にはこれだけは注意する要がある。又、政黨も窮極は社會の利益を進め人民の幸福を固める義務があるのであるから、その進退には常に社會人類の利害を考へなくてはならぬ。黨利、情實、風俗習慣に拘泥して小黨のまゝ分立を續けたのでは、この理想を實現する道ではない。小政黨は宜しく大主義を選んで合同せよ。國家の利益の場合は多數に從へ、自己の經驗なき問題、社會に格別の利害なしと見たる問題も多數に從へ。かくして次第に大團結の政黨が起るであらう。これが理想實現、政黨改良の道である。勿論二大政黨となつても黨爭はある。殊に國會開設後は政策討議上當然大に爭ふことになる。然しその黨爭は、國會議場内に止め、場外にまで持ち出して私交に及ぼしてはならぬ。然し例へ議場内と雖どもその爭ひが嵩じて極端になつては、國會はその機能を發揮し得ず、一事も建設的事業に參與することが出來ぬ結果となる。若し又これが國會開設前であれば、政黨の力が社會にのびず主張も宣傳も無效になり、政府の爲めに甘々と仕てやられる。此の場合にはやはり英國風の獨立黨を設け、學識經驗に富む中正主義の人々をもつてこれを組織し、社會人民の利益の在る處を視て兩黨の何れかを助け何れかを抑へることにしたい(一九)云々。

議會開設時の政黨現狀に對する豫想は未だあるが、これは後に當然述ぶべき場所があるからその方へ譲るとして、鐵腸の政黨論は、大體以上の如きものである。自ら英國を模範とせよといつてゐる通り、眼中つねに英國の政黨政治を反映してゐる。そのイデオロギイを論ずれば、勿論、例の如くインテリゲンチヤと進歩的ブルヂョアジィを中心としたもので、下層社會を政黨分子に加入せしめることなど鵞毛程も考へてゐない、寧ろかゝる事を考へる人があつた

ら反對したであらう。たゞ藩閥政府を排する一事は彼の念頭を始終去らなかつたもので、政黨論に於いても大同主義に於いても、斷えずこの點を警告してゐる。ところで鐵腸の大同主義は、勿論直接にはかういふ實際的必要から生れたものであらうが、その根底には確かに儒教主義の大同思想が潜んでゐる。此の大同思想は治國平天下を理想とした支那民族が創造した主要な思想の一つであり、支那民族の解するまゝでは、自己の文化を中心にあらゆる民族を同化して大統一の社會をつくることをいふのであるが、鐵腸はこれを當時の政黨社會に適用したのである。更に又、英國を理想とした獨立黨云々の根底には中正不偏の思想が潜んでゐるが、これも亦鐵腸の場合儒教から來てゐることは疑ふべくもない。當時のインテリゲンチャの政治思想に儒教主義の特色があつたことは注目すべき事實であるが、鐵腸の場合はその好適例といへよう。

以上で、鐵腸の政治思想のうち對內的なものゝ根幹ともいふべきところを叙し終つたので、對外的の部分へ移る筈であるが、私の手記中に、なほ經濟生活及び教育に關する鐵腸の意見の大要を知るべきもの若干が殘つてゐるので、それを簡單に附記してから移ることにする。

(二〇)

鐵腸の經濟論は、日本の現狀が貧乏の一語で盡きるといふ點から出發する。政體の不定、法律の不備、教育不及、が皆これを證明してゐる。文明開化とは富有の實力をいふのである以上、貧乏である間はその國家は文明開化なりとはいへない。日本國民は上下とも富國の道を講じなくてはならない。それには、從來日本は農業國として立つてゐたが、今後は主として商工業を盛んにし、英米の例に倣つて物產製造に力を盡さなければならぬ。商工業を盛大にするのは、勿論平民が中心であるが、華士族共にこれに協力しなくてはならぬ。華士族がその金祿を死藏するのは、日本の財政を萎靡させる一因であるから、これによつて大に殖產興業の道に盡さなくてはならぬ。且つこの殖產興業に於いて、政府は干涉せず自由放任を可とする、さもないと依賴心を生じて何時まで立つても殖產興業の實が擧らぬ。然

しかく積極的に進むことも勿論必要であるが、又一面消極的方法も試みなければならぬ。國費官費を節減し、不急の事業施設を繰り延べ、租税を減じて人民を休養させなければならぬ。殊に農民は多年國費の基礎たる重い租税を負擔して來たから、これを輕減して商工の方に負擔を分つ工夫を要する。又消極の一策として、外國へ貨幣の出ぬやう、つとめて舶來物貨の減ずるやう試みることも必要である。（なほこの外國貿易のことは次に述べる）。

かゝる富國政策、商工政策を徹底させるには、如何にしても政府の力だけでは出來ない。教育の力を假りなければならぬ。從來の教育は士族中心の精神教養一點張りのものであるが、これは一大改良をしなければならぬ。然し改良といへば政治熱に動かされてその方面の知識を注入するだけと考へても困る。單に學問を教へるだけではいかぬから社會、實業、政治上、實地必要の教育を先にしなくてはならぬ。(二二)書生諸君の方でも單に學問するよりも、社會の需要を考へて實業の方へ志を向けるのが賢明である。

經濟問題を論ずるにしては、鐵腸の頭腦は粗大であり、從つてその議論は何處までも政治家流の粗枝大葉に過ぎないが、それにしても、鐵腸が、日本は商工業國になるより外にその半植民地的貧乏を脫し得る道がないと見たのは、當時の狀勢からして正當なものであつた。こゝにも我等は、ブルヂョアジイの代辯たる代表的インテリゲンチャの一人を見出すのである。

對外的には、當年の鐵腸は如何なる思想を抱いてゐたか。

對外的には當時の日本人の前には、民權論者たると非民權者たるとに論なく、唯一つの問題があつた。それは日本の獨立維持如何の問題である。彼等は、西歐人から半植民地扱ひをされてゐる日本の現狀に痛憤を感じ、如何にかして國家的獨立の威力を認めしめ、同等に交際する權利を獲得しようとした。自由民權論者が民權を主張したのも、內

政整理を主張したのも、對外的にいへば、明白にこの目的の一準備としてゞあつた。此の意味で、民權主義と國權主義は、當時相表裏するといふ奇現象を生じてゐた。だが當時としては、これは當時の要求から出た當然の現象に外ならなかつたのである。鐵腸の如き、この問題について最も多く憂慮し、最も多く痛心し、最も多く發言したインテリゲンチヤの一人であつた。

此の問題に關する鐵腸の意見の結晶ともいふべきものは、明治十八年三月十三日以後數回に亙つて朝野紙に連載された「日本ノ獨立」といふ論文である。今對外策の前提として、この問題に關する鐵腸の意見を聞き、それから對西洋、對東洋の經綸の一斑を窺ふことにしよう。

鐵腸の日本獨立論は、先づ當時西歐諸國の東洋に對する侵略的態度から始まる。世界の現勢は弱肉强食であり、資本主義國家の市場開拓であることは、西洋諸國の東洋政策を見れば明白疑ふべくもない。英國は當時改進黨の內閣ではあるが、國民は旣にそれに倦んで保守黨的政策の具現を見たがつてゐる。殊にその植民政略に於いて、對東洋の積極的態度に於いてさうである。佛國も、普佛戰の屈辱を東洋開拓に取り返さうとし、東京事件を起し、清佛戰を起しあはよくば支那を蠶食しようとする。獨逸に至つては、ビスマークの東洋政略は有名なものである。魯國も黒海通過に失敗して以來東漸政策を取り、中央亞細亞より支那印度を窺ひ、更に朝鮮に垂涎してゐる。このまゝで行けば强者は益々强く、弱者は次第に獨立を失ふて來る。亞細亞はいはゞ西洋諸國のために俎上の肉なる觀がある。幸ひ、西歐列强が對東洋の利害の點で同一步調を取ることが出來ぬので、力を合して東洋經略に當らぬが、若し協力が出來たら大變な事にならう。東洋諸國はこの協力の出來ぬ間に自ら振起して、富强の道を講じ、西人の侮を拒ぐ方法を建てなくてはならぬ。それを日本からいへば、歐洲諸國が支那や安南に係り合つてゐるうちに、根本的に獨立の大計を定むべきである。當時鐵腸の理想とした國家獨立の資格とは如何樣なものであつたかといふと、國民が獨往自治の精神に

富むこと、内政治まり、國勢整ひ、國に富强の實ありて文化昌盛なこと、これである。要約すれば歐米强國の如き實力ある國家、これである。これ有りて始めて獨立を維持し、外的發展も可能であるとした。

鐵腸の當時、在朝在野のインテリゲンチャの間に日本の獨立維持の方法に就いて種々の論議が交はされたが、それ等の主旨は大抵次の三種に歸する。曰く專ら歐米の有形上の開化(卽ち皮相的文明)を取り入れ、日本を歐米化し、日本人を歐米人の如く生活せしめ、かくして歐米人をして日本及日本人を同等に識認し尊敬せしめたい、その結果日本の獨立を認めしめ對等の交際をなさしめるやうにしたい(第一)。曰く先づ武力强兵主義を取り、我より積極的に亞細亞大陸に進出し、國權擴張の實際を示して歐洲人をして日本を輕視するの不可を知らしめ、その點より日本の獨立を維持する(第二)。又曰く當分は成る可く海外との交渉を避け、力を內部の改良に盡し、物產を興し、工業を盛にし、國家をして富庶の域に達せしむる一方、所謂自由政治を施行し、人民をして國家と利害を同うせしめ、以て外侮を防禦し國家の獨立を保持する(第三)。これを當時の實狀に照していへば、第一は主として政府當局者の施政上に目ざすところ、第二は主として不平武斷家を收容することの多い上に急激な改革を欲する自由黨の望むところ、第三は改進黨政治家及び當時の知識階級の代表的大多數の欲するところであつた。目的に於いて勿論、同一であるが、手段が異ふ。何れも當時の日本として獨立維持の方法を各自の立場から見たものだけに、何れが何れも日本としては必要な政策であり、一を取つて他を棄てることは許されない。事實又何れの一も他の二に全然關係なく實行されるものでもない。武力主義も富國主義が必要であり、富國主義が物質文明に待つことはいふまでもない。政治の衝に當る者は一方によらず、三者を參取する要がある。然し旣に手段を異にする以上、三者を同時に行ふ譯には行かない。參取するにしても、何れか一を主に定めなければならぬ。然らずば國家としての方針が一定しないことになる。以上三策中何れを可とするか。

鐵腸は、自家の立場からこの三策を吟味した。(第一)策の實行は外からするだけに比較的容易且つ便利である。國民の日常生活を歐風にし、衣食住から社交娛樂まで能ふ限り洋化する、洋館に住み、洋食を食ひ、洋服を着し、夜會、競馬、舞踏、俱樂部などを流行させると、如何にも皮相的には歐化日本が生ずる。かゝる歐化主義も單なる表面的模倣であつては彼をして我を尊敬せしめ同等に扱はせる譯には行かぬ、國に實力があり、それが自然に湧溢してかゝる生活となつたのなら兎も角も、然らずば如何に眞似したとて日本の獨立を認めしめる所以ではない。却つて彼に克服されて漸次彼の屬國的色彩を帶びて來る恐れがある。(第二)策は如何といふに、武力主義侵略主義は、當時歐米列强の現に取つてゐるもので、亞細亞に對する態度の如き、この最も明白なるものであるが、然しこれも國家に實力があつて後の話である。實力があつて後ならかゝる侵略主義でも何でも取れるが、逆に侵略主義から實力を生じはしない。且つ世界の文明が進步するにつれ、戰爭は器械の勝敗を意味することになる。さうしてその器械は最も富饒な國家が最も勝れてゐる。銃砲船艦の精銳も、日新の發明を應用することも、皆この富力の賜物である。だが遺憾ながら今日の日本には歐米列强に比較すべき富力はない、今日の日本がこのまゝ漫りに武力主義を取つて大陸進出などを試みては獨立維持どころか國を危くする。以上二策とも主なものに出來ぬとせば、(第三)策は如何、これこそ正に今日日本の急務を道破したものである。亞細亞の不振は所謂有形上の開化が整はぬ爲めではあるが、それは根本に國貧に民窮し、物產興らず、商工業盛んにならぬ現狀の結果である。かゝる現狀を改良せずに、西歐文明を皮相的に眞似ても仕方がない。西歐文明の根本に何があるかを認め、そこを學ばなくてはならぬ。國力も充實せぬのに徒らに武を練り兵を講じたとて、それが國家の利となりはせぬ。宜しく朝鮮、支那の獨立出來ぬは何故ぞと考へて、これを參考に日本の獨立を確固たらしめなくてはならぬ。鐵腸はそこで斷じていふ。第三策こそ日本の獨立を維持する根本策であると。この點では、鐵腸は全く改進黨政治家と同意見であつた[二二]。

更に又、今日東洋が西人の侵略を蒙つてゐるのは富强の差の故もあるが、人民に自治自衛の精神がない爲もある。現に同じ東洋人で西人の傭兵となり、東洋侵略に懸命に從つてゐる者がある程である。國人にかゝる精神があるといふのも、畢竟東洋多年の專制政治の致すところだから、深く心を用ゐなくてはならぬ。之を要するに、國家發展の目的を定め、成るべく海外との交渉を避け、一國の富饒を養成し、自由の政治を施行して人民に自治の精神を發揮せしめる時は、實力ある我が日本に對しては、如何なる西歐人とて獨立を脅威する如き行爲に出ることは出來ない。有形開化の移人も武力的國權伸張も必要であるが、目下の日本としては此の根本の富國主義を行ふを是とする。以上が鐵腸の、日本獨立維持に關する根本的態度である。

鐵腸の對外思想は萬事以上の態度から割り出されて來る。以下鐵腸の對外的意見を對西洋と對東洋とに別けて略說して見よう。そこで、煩いやうであるが、日本が西歐に臨む態度はといふと、國民も政治家も、先づ以上の如き目的を確固と定め、剛毅の精神をもつてこれを實行に移して行くことである。此の剛毅の精神は所謂西洋文明を取入れる時にも極めて必要である。(二三) 剛毅の精神といつても、排外主義とか强兵主義とか侵略主義をとれとかいふのではない。此の頃の鐵腸は戰爭の害を極言して、最も大規模な饑饉天災以上な惡いもので、人生の害悪中最大のものゝ一つと見てゐる。勿論將來の國力發展上、自然戰爭を誘發するにしても、今のところは能ふ限りこれを避け我が國の天然が守勢的に出來てゐるのを幸ひとして、對外平和手段を持し、先づ商工振起、國力充實の途を講ずるが可い。强兵主義も必要上着手するのは可い、然しこれにのみ重點を置くのは國家の健全な發達を邪魔する恐れがある。西洋文明の攝取も必要であるが、これには國利を目的として、社會の必要上から文物制度を移入し、內政の改良平和的富國策の實現を助けることを第一に心がくべきで、社會生活の表面を外國のそれに似せしめて社會の有形的改良から着手する如き

は、眞の經國家の執るべき道ではない。(二四)

けれども平和主義は根本的に守るとしても、國家存立上發展上の正當な主張はあくまでも主張して可い。外交談判による國際正義の要求は勿論當然である。對西洋の最重大な交渉は條約改正であるが、これは明治初年からの國家的大問題で、ある意味では日本將來の發展がこの問題の解決如何に懸つてゐるともいへる。政府當局は如何なる事があつても、この問題は是非解決しなくてはならず、又日本國民は政府を後援し鞭撻して是非ともこれを解決させなくてはならぬ。日本政府がこれの改正に着手するや、在留外人は專らこれを物質的利益の增殖にあると考へ、條約改正が決して日本政府及び國民にとつて物質的福利を齎らすものではないと警告した。(二五)これは恐らく單なる改正反對のみではなく幾分啓蒙的親切心からも出てゐるであらう。彼等の言を綜合するに、關稅改正については、曰く(一)若し此の擧が直接國庫收入の增收にありとせば、關稅のみを有利に改正しても、輸出稅が撤廢されるから、增收とはならぬ、(二)又國產保護の主旨ならば主旨としては諒解されるも、日本人の適應能力のある事業と適應能力のない事業との區別もなく、漫りに外國人の經營や貿易を束縛せんとするのは却て自國の繁盛を害する虞がある、(三)日本人は關稅の爲めの貿易の不均衡を云々するも、これは勘違ひで、西洋諸國何れの例に徵するも、輸入額の多いのこそその國家の富を增すものである云々。治外法權については、曰く、日本は一方で內地雜居を許さずに居留地なるものを設けて居る、又日本の法律の不備はお話にならぬ、從つて治外法權撤廢の承諾は出來ぬのみか、第一撤廢するせぬを論ずる必要さへない位である云々。だがこれを日本の側からいへば、現在の物質的福利の增殖といふことも勿論勘定しないではないが、然し改正主張の根本はこゝにあるのではない、此等の條約が日本國の國權を犯すからである。條約改正の主眼は國權恢復が第一義であつて、利益增殖が第一義なのではない。從つて場合によつては、物質的利益は全く犧牲にしても改正をやり遂げるつもりでさへゐる。然し、現在の比較からいへば、この改正は、彼等外人のいふ如く格別

の物質的利益の件はぬ徒勞の如く見えるかも知れぬが、日本帝國の遠い將來を思へば、必ずやこの改正が又日本の物質的利益なり繁榮なりをも齎らすことになるに違ひない。日本の現狀は國際資本主義的競爭には立ち遲れで、このままでは西歐の大資本に壓されて商工立國の基礎を据ゑることが出來ない、條約改正の濟むまでは、新事業の興隆も日本の平和的伸張も遂げられない。これには關稅改正と或る程度の保護政策が如何にしても必要である。又治外法權の撤廢について、法律不備の點は、ある程度まで認むべきであるが、然し明治政府以後この點に於ける努力は異常なもので、決して條約締結當時の如きものではない、必ずやこの點についても今に彼等をして改正反對の口實を失はしめるに至らう。彼等が治外法權の撤廢を承諾するまでは、斷じて內地雜居を許すべきではない。今日でさへ彼等外人の治外法權を利用する非行橫暴は實に眼に餘る程である、それを、このまゝ內地雜居を許したなら、日本を半植民地視してゐる彼等は果して何を仕出來すか分つたものではない（この邊幾分當年攘夷論の殘滓が見えはしないか）。第二、この條約の成立なり性質なりを考へてみよ、嘉永安政の頃、內患に蝕ばまれた德川幕府が時の勢ひに迫られて止むなく結んだ不對等條約である。而かも一方幾年か後國事改良の緒につくを持つて改正するといふ含みが双方にあつた。然るに今日に及んで、不對等の點を利として改正に應ぜぬとは、國際道義上何とも話しやうもない。假りに地を代へて、日本が英國であり佛國であり、英佛が日本であつたとせよ、英佛たるもの果して默して日本の橫暴を甘受してゐるであらうか。決してさうではない。否な國民的感情の興奮の餘、如何なる大事を勃發せしむるか分からないではないか。日本亦かくの如しである。[二六]要之、日本はその獨立國としての體面保持と國家的伸張發展の必要上、國際條約上諸外國列强と平等なる權利を要求するものである。勿論日本の現在の實力を思へば、かゝる大事業が容易に成功するとは思はれぬが、倦まず屈せず、剛毅の精神をもつて全國民が政府を激勵してこれに當らしむべきである。徒らに彼等に追從し機嫌をとり、以て萬一の僥倖を冀ふ如き卑屈千萬な態度は唾棄しなくてはならぬ。鐵腸は日本人の覺悟を

論じて曰ふ、――

我ガ國權國利ノ吾人ガ今日ノ榮辱苦樂ニ關スルヤ甚ダ切ナリ若シ徒ラニ彼ノ邦國ノ强大ナル文運ノ高尙ナルガ爲メニ枉ゲテ此ノ國權國利ヲ損害セラルヽニ一任スレバ其ノ結果ノ慘毒タル果シテ如何ゾヤ苟モ日本國人タル者ハ發奮興起シテ一方ニ於テハ益々法律ヲ完全ニシ愈々政治ヲ整理シ又其ノ海陸軍ヲ精練シ以テ其ノ獨立ノ基礎ヲ鞏フスルヲ期シ他ノ一方ニ於テハ全國人民ガ結合ノ力ヲ以テ大ニ政府ヲ奬勵シ海外各國ニ向ツテ斷乎タル談判ヲ爲シ彼レヲシテ其ノ不正ノ政略ヲ放棄シ我ガ要請ニ從ハザルヲ得ザルノ位置ニ至ラシム可シ云々(二七)

日本の對西洋の態度は斯くの如くすべきであるとし、全東洋の對西洋の態度は如何にすべきであるか。勿論、當時の日本はまだ單に東洋の一島國たるに過ぎなかつたが東洋の安危は卽ち日本の安危であり、日本對西洋の問題は、延いて全東洋の問題でもあつた。

明治十年の交から、歐人の東洋侵略と東洋諸國不振の現狀を慨した我が國の志士達は、振亞社といふものを設けて、東亞振興の策に熱心してゐた。これが次第に識者間に勢力をもち始め、從つて事業も擴張されて來たので、十三年二月更に興亞會と改めて、同樣の目的を更に强固な基礎から實行することになつた。鐵腸は最初からこの會の熱心な後援者であり、この會が上海に建てた興亞學館は鐵腸の主宰下に置かれた程であつた。

此の會の主旨及び鐵腸の言を綜合していふと、東洋諸國不振の現狀は實に酷だしい。世界の舊國であり、中世時には歐洲文明の恩人ともいふべき位地にあつた東洋が、方今衰微を極め、歐人の蹂躪に委し、小國は併呑されて獨立を保つことが出來ず、纔に獨立を保つてゐる二三の國とて對等の交際はされない上に、何時その獨立を失ふか分らぬ。抑もそも東洋がかういふ不振の狀態になつたのは何に原因するか。その根本は、政體の組織と國民の氣象の差にある。

歐洲は近年大抵立憲政治となつて人民に參政を許してゐるので、人民の氣象が活潑であり愛國の精神も旺盛で、自然に富國强兵の途にある。亞細亞諸國はその反對に、政治は專制であり、人民に自由なく、參政の權なく、從つて獨立活潑の氣象がない。これは自ら衰亡の道である。興亞の策もこの點から根本的に着手しなければならぬ。その他學問の迂腐、敎法（宗敎）の固陋の如きもかゝる歐亞人民の差違を馴致するに力がある。結局、東洋諸國の人民は、その無氣力から各自孤立して交際せず、桃源に睡生夢死する常態に墮して來た。これがその今日の不振を招來した原因である。それで興亞策としては、根本的にはその政治組織を改め、人民に進取の氣象を與へ、教育、社會、風俗、萬般の點で改良を施して行くことゝし、差し向き西歐人の侵略に對して如何にすべきかといふに、それは東洋諸國の合縱連衡の一途あるのみ。諸國民ともに全亞細亞の利害榮辱を自家の利害榮辱と考へ、協力して西歐人の侮辱を拒ぐ外に手段はない。そして鐵腸等は、興亞會をもつてこの大亞細亞連合實現の楔子たらしめようと欲したのである。興亞會の事業としては、東洋諸國の各地に學館なり支部なりを設け、國情、風俗、言語を研究して、交際貿易の路を拓くことであつた、さうしてその第一着手として上海に興亞學館を起し實際鬪士の養成に努力した、案としては次に朝鮮、次に印度、安南その他にも及ぼす筈であつたが、先驅的事業の常として經營が意の如くならず、鐵腸等の目論んだ亞細亞連衡の計は遂に成らなかつた、だが一時は朝鮮、支那の有志は勿論、土耳古、波斯あたりの大臣名士も入會員に名を列ねるといふ盛大なものであつた。

かく鐵腸等の興亞策は、理想通りには行かなかつたが、興亞會の活動は當時の日本の立場からは決して徒爾ではなかつた。一般的には、國民に海外雄飛の氣風を刺戟し、實際的には、日本帝國主義の亞細亞大陸進出の機因となつたことは、注目されるべきである。

以上の如き概括的理想論とは又別に、當時發展途上の日本としては東洋諸國との間に解決すべき種々の問題があつた。東洋諸國といつても、主として日支韓の三國關係のことであるが、從來東洋の中心が支那であつたのに、明治維新後日本の文化的躍進が目ざましいため、何時とはなく、東洋の中心が支那から日本へ移りつゝあつた。若き日本の生長につれて、對支對韓の種々具體的な問題が發生して來たのは當然といはなければならぬ。大局の理想からいへば、東洋の治安維持は東洋諸國が合縱して互ひに救援保護をなすにある、合縱の盟主となるものは日本と支那とであるから、日支の不和は漁夫の利といふわけである。日支和親して東洋の治安を維持出來れば文句はないのだが、現實上ではさうはいかず、總體的に新興日本と老大國支那とは、何うしても兩雄併立たぬ立場にあつた。日本の勃興は支那の喜ばぬところ、日本も亦その進取的國是から支那の下風には甘んじてゐることが、出來ない、自然兩者間には猜忌的感情の睨みあひがある、それに具體的の利害問題が絡みあつては、兩者の間に大きな溝渠の生ずるのは勢ひ免かれぬところである。だから日本の有志が如何に口舌で東洋合縱策を說いても、支那の有識者達はさう踊らなかつた。それどころか日本有志の說く興亞策を、興亞の假面をした日本の大陸進出策と猜し、これに反對の氣勢をさへ揚げた者がゐた。[28]（これは然し結果からいつて支那の考へてゐた通りになつたので、爾後支那が益々日本人の親切に用心し出したのは言ふまでもなからう）。而かも明治七年の臺灣征伐、明治十二年の琉球問題、明治十五年以後の朝鮮事件等、次第に兩國國交の將來を危殆に導びく事件が疊出して來ては、事の勢ひが赴くところに赴くより仕方がなかつたのである。

此の間にあつて鐵腸は、特に支那に對する日本の態度を何うすべきかと考へてゐたか。彼には對支政略を論じた數篇の論文があるが、[29]これを要約すると、日本は地勢上守勢的に出來て居り、新興日淺く、實力また乏しい。東洋の英國を氣取つて外國の事に干渉がましい態度を取るべきではない。彼より挑戰せぬ限り、專ら內治第一の平和主義を執

り、直向國勢向上國力充實に努めるべきである。支那とは國交を厚くし、商業による競爭は主として勵むべきも、血氣に任せて干戈に訴へる如き事は決してすべきではない。兩國間の懸案の解決も互讓によるが可い、例へば臺灣と琉球については日本の主張が通つたのであるから、朝鮮事件については日本の方で讓歩しても惡くはなからう。兎もかく戰爭は害惡の第一であるから、これは必ず避けなくてはならぬ。油斷なく準備するのは當然であるが、如何なる事があらうと我より手を出してはならぬ、たゞ國民の氣象を振起せしめるために、日支の將來を豫想せしめこ、重大なる覺悟をなさしめる必要はある。然し現在としては交際を厚くし、貿易を盛んにし、商工主義により經濟的に進出するをもつて足れりとしなくてはならぬ云々。

明治十七年の朝鮮事件は、支那人の侮日感情を露骨に示したものとして、わが朝野の人士の神經を可成り刺激したものであつた。勿論對支開戰を叫んだ人々も少くなかつた、だが鐵腸は矢張り平和主義を捨てず、感情に驅られて事を起すことを嚴に誡め、戰爭の害と平和の利を說いた。この意味で、十八年の天津談判については、兎も角も平和の局を結んだといふので、大使伊藤博文の勞を多としさへしたのであつた。

この鐵腸の平和主義は、勿論若い日本の發展を成るべく餘計な障碍に出會はせずに成就させたいといふ念願から出てゐるに違ひない、卽ち日本の實力がまだ武力主義をとるには不足だと考へてゐたからに違ひないが、一面又老大國支那の虛實を知らぬ爲め、支那を憤激させることを必要以上に警戒した點があつた。「西洋人は眠れる獅子などと評してその底力を畏れ乍らも多少侮蔑の態度を示してゐたが、若き日本の眼にはその初め支那は徹頭徹尾威迫的勢力としてのみ映じたやうである」(三〇)。支那も亦、日本の實力を想像以下に低く見てゐたらしい。從つて機會ある每に、その侮日の態度を示し、排外感情を露骨に示すことを忘れなかつた。十五年、十七年の朝鮮事件の如き、十九年夏の長崎事件の如き、見様によつては一種の挑戰的示威と見られぬことはなかつたのである。支那側のかゝる態度は次第に日本

に對して、對支衝突の必至を覺悟させるに至つた。それで、大亞細亞合縱の理想は理想として、日本は支那に對し重大決心を固めるの止むなきに至つたが、鐵腸はなほ平和主義を棄てず、兩國の和親に東洋問題解決の鍵を置いてゐた。なほ、日支問題その他については後に述べる機會があるであらう。

對支問題と並んで、當時の日本政治家の頭を惱ましたのは、對韓問題である。韓國卽ち朝鮮も當時はまだ微力ながら東亞の一獨立國であり、且つ支那より一層日本に接近してゐた爲めに、日本に對して支那より一層緊切な關係をもつてゐた。殊に露國の東漸以來、朝鮮の存在は我が國の安危に特殊な意味をもつことになつた。

明治初期の對韓問題の根本は、要するにその獨立問題である。日本は自衞の必要上、朝鮮の開明を計り、これを自覺せしめて完全な獨立國たらしめ、これと和親して露國の南下東漸を抑へようといふのである。和親して露國を抑へることは、彼に於いても異論がないところであるが、問題は獨立云々である。日本はこれを對等の獨立國として交際し、又獨立國の實力あらしめようとかゝる、然るに日本のかゝる遣り方は支那の朝鮮に對する態度と衝突をする。何故といふと、支那は朝鮮をもつて屬國視し(これには歷史的根據がある)、朝鮮も自ら內々さう思つてゐる。從つて朝鮮自身も日本から獨立國として世話をやかれることは多少迷惑でもあり、支那に至つては全然餘計な事と見なしてゐる。朝鮮や支那の日本を疑ふのは無理ではない。豐太閤の昔から西鄕江藤の征韓論に至るまで、朝鮮併呑が日本民族發展の一過程と考へられてゐたからである。

當時朝鮮獨立を企てる議論に二種あつた、一は日本と朝鮮との歷史的關係から、是非とも支那に手を引かせて日本の手で獨立させてやらなくてはならぬとするもの、二は西歐列强が此の半島に垂涎してゐるから、此等の國に占有されぬやう獨立させてやらなければならぬ、といふものである。何れも背後に日本の障屛とするといふ意味を含んでゐる。然し鐵腸はいふ、能く考へてみると、これは何れの場合にも支那と干戈を交へる危險がある。干戈に訴へて朝鮮

から手を引かせても、我が國で實力をもつて、その獨立を維持させてやることが出來れば、それは先づ可いとする。それが出來ぬとせば、折角獨立させても佛造つて魂入れずといふもので、決して鞏固な獨立とはならず、又肝心の朝鮮から感謝されもしない。それでは何のために貴重な人命や財寶を犠牲にして獨立させてやるのか譯が分からない。朝鮮を獨立させるといふ問題と、朝鮮を他國に取らせまいとする問題とは、一寸性質が違ふ。支那が朝鮮を自家の屬國といひ、又さうであると朝鮮も認めてゐるものとせば、先づ支那をして朝鮮を固く守らしめるが可いではないか。何も我が國が、双方から嫌はれる大損役を買つて出るにも及ぶまい。且つ今日の日本には、朝鮮の獨立を徹底的に助ける程の實力はない。且つ、支那を相手に戰爭せば、勝つても負けても、日本は相當な痛手を負ふ。かくして國を賭して、朝鮮獨立をかち得たとて、必ずやその利は害を償はぬであらう。寧ろ朝鮮をば、一歩讓つて支那の保護に委し、日本は平和主義、貿易主義をとつてこれに臨むが可くはないか。獨立策遂行のことは、機を見るまで拘泥せぬが可い。當面の問題は寧ろわが居留民や官吏やが、母國の强を過信して弱小な朝鮮を侮辱する如き振舞のないやう、眞に腹から和親して、彼を啓導し我の眞心を感ぜしめるやうにしなくてはならぬ、これが對韓策の第一義である。[三二]云々。

鐵腸は、なほ露國の東漸について日本上下の注意を促すところがあつたが、シベリヤ鐵道の開通を見るに及んで、露國の東方侵略の大意圖が愈々判明して來た。自然わが國としてもこれに對する態度を明らかにしなくてはならぬわけであるが、これに就いては何れ後節に於いて詳しく語ることにしよう。

以上によつて、當年鐵腸の抱懷してゐた對外策の如何なるものであつたかは、想察される。彼の眼に映じた日本は國力養成時代の日本であり、從つて內外緩急の輕重、和戰攻守の得失から考へて、當分の間は專ら內治第一主義を執り、外交を紛亂して邊功を求める如きは、極力避くべきであるとし、國威國權を損せぬ限りあくまで對外的には平和主義、親交主義、實利主義をもつて臨むべしとした。勿論二十年以後に於いて、日本の國力が次第に充實して來、產

業の基礎も定まり、愈々海外に市場を求める必要が生ずるところに及んでは、最早や鐵腸も單に平和主義をのみ固守してゐはしない。今少し融通のある態度に出てゐる。だがその邊のことについては、後章、鐵腸の小說について語る時に改めて言及する機會がある。

兎もあれ、吾等はこれで、鐵腸の政治思想の大系乃至根幹を了知したわけである。では吾等の鐵腸研究の眼目たる政治小說の諸作に進むことにしよう。

註（一）　朝野新聞二四八三號（明治十四年十二月二十七日）「政治ノ目的」

註（二）　嚶鳴雜誌第二十五號（明治十三年十二月八日）「輿論トハ如何ナル者ゾ」

註（三）　朝野新聞三〇二九號（明治十六年十一月二十一日）「政治家ノ心得」

註（四）　同　二七五七號（明治十六年八月二十五日）「政事家ノ不活潑ヲ嘆ズ」

註（五）　以上の一節は、本文にいふ「新天永命論」を節略したものである。

註（六）　以上の一節は、朝野新聞六八一號（明治八年十二月二日）、同九四三號（明治九年十月二十日）以下「內患論」、同一四一六號（明治十一年五月二十九日）、同一四三一號（明治十一年六月十五日）、同一七八二號（明治十二年八月十七日）「論士ノ偏枉」等々を參照せよ。

註（七）　朝野新聞二五三四號（明治十五年三月九日）「改革ノ慘毒」

註（八）　朝野新聞二二一〇號（明治十四年二月一日）「自由ノ說」

註（九）　同　一一六五號（明治九年七月十八日以下）「僞民權論」

註（一〇）　同　一八九五號及び二一二七號（明治十三年一月九日及び十月十六日）等々

註（一一）　同　二九二五號（明治十六年七月十九日）「下等社會ノ奬勵ヲ論ズ」

註(一二) 同 二三九五號(明治十四年九月十日)社説題目

註(一三) 同 一八〇六號(明治十二年九月十七日)以下、國憲編制論(青木匡)、一九五七號(十三年三月二十七日)「有名無實ノ國會ヲ望ムベカラズ」、二〇七五號(十三年八月十五日)等々の論説を參照せよ。

註(一四) 同 一九〇七號(明治十三年一月二十三日)、高橋基一「國憲編制論」、二四一四號(十四年十月四日)等「國會開設ノ手續」を參照せよ。

註(一五) 同 二七〇七號(明治十五年十月二十五日)「干渉ノ結果 第四」

註(一六) 以下の記事は、朝野新聞二九四〇號(明治十六年八月五日)「政黨論第九」等々によるもの。

註(一七) 同 二九四一號(明治十六年八月七日)「政黨論第十」による。

註(一八) 同 二九八三號(明治十六年九月二十六日)以下、「獨立黨ノ必要ヲ論ズ」を參照。

註(一九) 此の一節は總體として「政黨論」(明治十六年七月十二日、朝野新聞二九一九號より八月七日二九四一號に亘るもの)を參取して記す。

註(二〇) 朝野新聞一二九〇號(明治十年十二月十四日)「日本ノ現狀ハ貧乏ノ一語ニツク」

註(二一) 同 一二六一號(明治十年十一月八日)その他、同二八一八號(明治十六年三月十四日)「敎育論」など。

註(二二) 例へば改進新聞七一七號(明治十八年八月四日)「内部改良の結果遂に外部に及ぶこそ望ましけれ」、その他。

註(二三) 東京曙新聞五二一號(明治八年七月九日)の論説參照。

註(二四) 「現今の政事社會」(明治二十年十月)

註(二五) 朝野新聞一六九五號(明治十二年五月九日)、「條約改正論」以下これに依る。

註(二六) 同 一六九六號(明治十二年五月八日)以下「條約改正論」

註(二七) 同 二一一一號(明治十三年九月二十八日)「國權恢復セザル可カラズ」の一節

註（二八）同　二〇二四號（明治十三年六月十七日）、「興亞會ニ於テ循環日報ヲ駁スル演説」

註（二九）例へば、朝野新聞二六六七號（明治十五年九月六日）以下「支那ニ對スル政略如何」、同　二六七二號（明治十五年九月十二日）以下「再論關支那政略」

註（三〇）吉野作造博士「對支問題」（昭和五年十二月）第三頁

註（三一）朝野新聞二〇九八號（明治十三年九月十一日）、「朝鮮修信使歸國ス」、その他が擧げられる。

鐵腸の政治小說

一　鐵腸と小說的文字

鐵腸は以上の如き「鬪士」的經歷敎養の持主であり、從つてそれが假令政治小說にせよ小說を書くに至らうとは、彼の政友なり知己なりいはゆる鐵腸フアンなりの意外としたところであらう。鐵腸の詩名は夙に世に聞えて居り、彼の父兄も詩人として名があつたから、藝術的血液の傳來は認められるが、今日の文學的イデオロギイと違ひ、當時にあつては詩と小說とは全然範疇を異にした文學と見なされ、詩が士君子の最高敎養の結晶の一つとされてゐた反對に、小說は婦人小兒の玩弄物視され、戲作文學と卑められてゐたのであるから、かゝる藝術的血液の傳統も、必ずしも彼の小說的文字を豫想せしめるものではなかつた。それだけに、當時の人々にとつては、小說家鐵腸の出現は詩人鐵腸から當然豫想される存在ではなかつたのである。

だがさういふ意外の感じは卒然表面から見てのことで、仔細に觀ずると鐵腸と小說的文字とは必ずしも兩立されぬものではなかつた。何故ならば如上の藝術的血統は兎に角としても、彼の新聞文章を通觀すると、そこにはかなり早くから時々簡單ながら意外な小說的構想の織り込まれてゐるものが見出されるからである。一二その例を擧げると、「東京曙新聞」第五三七號（明治八年七月二十七日）の論說にかういふのがある、——

一昨廿五日吾輩ハ終日日新堂ニアリ鉛槧ノ暇ヲ以テ賓客ニ應接シ日沒家ニ歸リ獨リ南軒ニ坐シテ晩風ノ淸涼ナルヲ呼ビ滿ヲ引キ快ク一醉柱ニ倚リテ假寢セントスルノ際偶々門ニ剝啄アリ先生々々ト連呼セリ余驚キ起チ戶ヲ開ケバ

一少年立テ闇黒ノ中ニアリ余迎テ之ヲ坐ニ引キ燈ヲ隔テ之ヲ見ルニ其人齡二十四內外ナルガ顏暗黒ニシテ亂髮蓬々垂レテ其肩ヲ蔽ヒ衣垢ツキ袴壞レ身ニ長刀ヲ帶ビタリ余大ニ之ヲ奇トシ而シテ其語音ヲ發スルニ南海中國邊ノ人々ノモノノ如シ余揖シテ其姓名郷里ヲ問フニ少年笑フテ曰ク吾四海ヲ以テ家トス孰レヲ以テ郷里トセンヤ吾姓名未ダ以テ子ニ語ルベカラズ子强テ之ヲ問ヘバ吾ガ僞名ヲ以テ之ニ應ズベキノミ余モマタ一笑シ殘酒ヲ溫メ之ニ杯ヲ勸ム少年滿引辭セズ劇談高論シ唾珠坐上ニ飛ブ其言フトコロハ政府ヲ誹謗シ官吏ヲ罵詈スルコトニアラザルナシ云々（中略）忽チ冷氣ノ衣ヲ侵スニ驚キ眼ヲ開ケバ日影窓ニアリ杯盤狼籍トシテ坐ニ少年ヲ見ズ嗚呼是レ果シテ眞ナルカ是レ果シテ夢ナルカ（下略）

今一つ、朝野新聞二四五〇號（明治十四年十一月十七日）に出た「十年間ノ用意」の一節を引用して見よう。

（前略）玆ニ一少女子アラン生レテ十四年ナリ春心己ニ動テ自ラ標有梅ヲ歌ヒ良媒ヲ四方ニ求ム之ニ幣ヲ納ル丶者アリ、曰ク我レ汝ヲ以テ室家ト爲サン然レドモ汝ノ年尙幼ナリ未ダ家政ヲ奉ズル能ハズ汝ガ廿三ノ靑春ニ及ビ始メテ與ニ婚儀ヲ結ブ可シト而シテ女子ハ之ヲ許諾センニ此ノ十年間ニ向テ如何ナル準備ヲ爲ス可キカ妻タリ母タルノ道ヲ學ビ室家ヲ治ムルノ法ヲ聞キ裁縫績紝ヨリ中饋ヲ司ルノ道ニ至ルマデ之ヲ習熟シ衣裳粧具ヲモ漸次ニ之ヲ製作シ置カザル可カラズ苟モ然ラズ妻ハ十年ノ後ニ於テ某家ノ夫人トナル可シト公言シ漫然トシテ歲月ヲ經過シ婚禮ノ時期ニ逼ルニ及ビ嫁具ノ一モ整備セザルノミナラズ知識擧動ノ敢テ十年前ニ異ナラザラシムレバ吾輩ハ其ノ約束ノ忽チ破談ト爲ルカ然ラズンバ更ニ數年ノ延期ヲ告ゲ此ノ女子ヲシテ益ス靑春ニ後ル丶ノ恨アラシムルコトヲ恐ル丶ナリ而シテ夫婿ノ如キモ亦然リ或ル女子ニ向ヒ歲月ヲ期シテ親迎ヲ爲スヲ約シナガラ十年ノ歲月ヲ遼遠ナリト思ヒ百事ヲ度外ニ放棄シ女子ノ來ツテ門ニ入ルニ及ビ始メテ狼狽シテ花燭ノ用意ヲ爲スガ如キアラバ豈不都合千萬ノ至リニ非ズヤ儀式スラ整ハズシテ其ノ四海浪靜ニ偕老同穴ノ契ヲ爲スヲ求ムルモ得ベケンヤ（下略）

以上の如き例を、私は更に十をもつて數ふる程擧げることが出來る。だがさう擧げるまでもなく、これだけによつても、鐵腸論文中の小說的構想を想察し、彼が小說的文字を作る可能性のあることが十分わかるし、一方又鐵腸が平生案が小說といふものに心をひかれてゐたことを證明する一資料となるであらう。

鐵腸は何故小說をかくに至つたか。これは頗る興味ある問題である。然しこの問題を端的に說明する資料は一つもない。勢ひ、諸處で拾ひ集められた零細な材料を土臺として、想像によつて組み立てゝ見るより仕方がない。鐵腸に藝術的血液ともいふべきものがあること、又彼自身小說的文字を弄する可能性の多いことは今述べたところである。さて彼は勿論根本的な文學觀念に於いては舊人であり、時には――

小說ハ寓言ナリ法螺ナリ支那ノ上古ニ在ツテ能ク法螺ヲ吹キシ者ハ莊子ニ若クハナシ(一)

云々と放言し「此ノ遊戯三昧」(二)云々と卑下してゐる程であり、その小說論も窮極には勸善懲惡の功利主義以上に出なかつたらしいが、然し兎もかく文明紳士的政治家の一人をもつて自ら任ずる鐵腸のことであるから、小說稗史の如きものについても、皮相的にせよそれ相當な進步的理解はもつてゐた。試みに次の數言を聞けば、それが察せられるであらう。

（前略）小說は一の高尙なる美術だから名人となるには中々骨の折れるもので第一想像力に富んで世間萬物の有樣を腦中に畫き出だし、又概括力ありて森羅萬象を集合して自在に己れの材料と爲し而して構造力ありて前後の配置を巧くせねばなりません之に加ふるに小說家たる者は能く人情に通じ英雄は此の如く奸物は此の如く婦人小兒政事家盜賊の心中までも能く之を洞察して明鏡の物を照すが如く又文章が上手で想像から得たることを目の前に觀る樣に寫し出す伎倆が無ければなりません何んと六ケ敷いものでは御座いませんか(三)（後略）

武士階級出のインテリゲンチャは、得て小說的文字を戲作視し輕蔑視する癖があつたが、同じ武士出のインテリゲンチャでも、鐵腸には、兎も角も小說に對するこれだけの理解があつたわけだし、如上の條件も揃つてゐるのだから鐵腸が小說に筆を染めたといふ動機も、間接にはこれで說明がつく。だが、鐵腸をして小說を書かしめた直接の動機は何か。間接の動機は決して單なる想像ではなかつたが、この直接の動機は勢ひ想像の分野に入りこまざるを得ない。

想ふに、鐵腸は、明治十八年、療病靜養の數月間に、退屈凌ぎに和漢乃至飜譯の小說院本の類を可成り澤山渉獵したものらしい、このことは、傳記の條にも一寸述べたし、又その例證めくものも擧げて置いた。然しこの外にも、實は別の名で小說論めく雜錄を數篇朝野紙上に揭げられたものがあるが、(四)これ等の文章が何うも鐵腸の筆癖に酷似してゐる。署名の案外居士といふのも、前の虎門居士を一寸方向轉換させたやうなもので、案外な人間の案外な論といふ意味にも解さなくもない。此等の小說論は、何れも、當時の小說稗史なるものに對してテクニクの點から不足と注文を述べたもので、總體として小說改良のイデオロギイを雜記的に表明したものである。例へば、その中で「一人殺シノ流行」は、小新聞の小說の拙なるを罵つたもので、小說の主人公が度々代つたり、又人殺しをしたりするのが多過ぎることを諷したもの、「寶ノ詮議」は、同じく新聞小說の趣向が依然陳腐で一律なことを論じたもの、「勸善懲惡」といふのは、新聞小說の勸善懲惡の當てにならぬこと、宜しく西洋支那の小說を學ぶべきことを述べたもので、議論の裏面には何れも小說改良のイデオロギイが潜んでゐる。これ等の文章が鐵腸のものかものでないかは別としても、私はかう考へたい、鐵腸が和漢洋の小說類を盛に渉獵して行くうちに、これ等の文章の內容と同じやうな、時の文壇小說(卽ち戲作系の)に對する不滿、從つて改良の希望が、鐵腸の胸にも湧いたものではあるまいか、と。この希望が抱負となり、抱負と試作となるのは、さう無理な過程ではない筈である。殊にこの案外居士と鐵腸居士の小說論なるもの丶發表時日が丁度鐵腸が『雪中梅』を推敲しつ丶ある最中の頃に當つてゐるのは、案外居士と鐵腸居士の間に何等かの脈絡のある

ことを暗示する手蔓の一つになりはせぬであらうか。だが然し案外居士は案外居士として、明白に鐵腸と推される虎門居士の小説改良論の要領を擧げてみよう。これは、前にも述べたが、鐵腸の『雪中梅』の上編が出てから公にされたものだけ少々遲播きであるが、先づまづ鐵腸の旨意を窺ふに足るものといふべきか。冒頭、戯場改良の一節は省略して、直に小説改良の條に進まう。

之に就き思ふには劇場と同一に風俗人心に影響あるものは夫の小説なるが今日の有樣にては全く封建の殘物にして容易に改良の端緒を開かざるが如きは誠に歎息の至りなり尤も近來學者政治家なども自ら奮て小説に從事せられ一二貴重なる著書の世に出るもの無きに非ざれどもふり假名新聞の紙上に掲ぐる新聞を視るに篇々一律にして毫も變化の妙なきのみならず其の趣向とする所は小男小女が身投げ道行きに非ざれば盜賊博徒等の狀態にして概して之を言へば淫猥と殘酷二者に出でず其の品位を論ずれば却て遙に演劇の下にある樣なり今や諸紳士達は旣に率先して劇場の改革を主張せらるゝ程なれば更に小説に向ふて適當なる誘導法を施す方便は無きものにや諸紳士達に向ふて御相談いたさんと欲するなり論者或は曰はん小説の卑陋なるは之を喜ぶものゝ多きが爲めなり讀む者の品位が進まねば小説の體裁を一變する氣遣なかるべしと然れば劇場も同樣にて諸紳士の之が改良を唱ふるは無駄骨折りと謂はざるべからざるなり今や「小新聞の續きものには困る」といふ人は隨分世間に多き樣なれば獨り罪を讀者にのみ歸すべからざるに似たり居士は敢てオータア・スコットの我國に出るを望まず止だ血塗れ騷動が每日繪圖に現れたり一家團欒の間に於て之を讀むべからざる樣な言語の迹を紙上に絕つに至れば小説の一大進歩をなせるものと見做さんとするなり世の紳士達は如何思召さるゝか。

要は、小説に對する根本の功利觀は勿論として、畢竟封建的觀念の殘滓を一掃して新興ブルヂョア的道德を反映し乃至强化するものを求むべしといふにある。鐵腸が小説試作の根底にはかういふ改良理想が潛んでゐたといふことは種

種　點で記憶すべきである。

此の小說改良論、乃至試作衝動の背景として、時代一般の改良熱乃至小說熱があることは、疑ひない、だが何より强い刺戟となつたのは、彼の政友乃至準政友達の間に渦卷き起つた政治小說創作熱であらう。明治十六年矢野龍溪の『經國美談』が宣傳的にも物質的にも大成功をしてから以來、文學嗜好のある政治家の間には政治小說創作熱が可成り猛烈に燃え立つて來た。藤田茂吉、尾崎行雄、久松義典、織田純一郎の如き知名の士は、何れもこれに指を染めようとしてゐた。殊に鐵腸の同鄕人で同商賣者たる須藤南翠の如きも、小新聞記者、續物書きたるに甘んぜず、次第に政治小說に轉向して來、その才鋒に讀者を驚かさんとしてゐた。鐵腸にとつて、かういふ生きた實例や空氣が、大にその試作熱を促進させたことは、大概斷言出來るであらう。

今一つ、明治十八年前後に於ける政治運動の不振である。丁度この頃は政府當局の彈壓と、民間の不景氣と、志士の無氣力の爲めに政治言論も政治運動も萎靡しきつた時である。かゝる時代には眞正面から堂々と大衆啓導など出來はしない。寧ろ別種の乃至特殊の發表形式によつて、その政治意見を大衆に徹底せしめることが必要でもあり効果的でもあつた。

正々堂々トシテ天下ノ事ヲ論ズレバ聽者ハ居睡リシテ之ニ應ゼズ之ヲ寓言ト爲ストキハ世人爭フテ之ヲ購讀シ東京ノ紙價爲メニ貴キニ至ル（五）

かういふ時代では、如何な鐵腸でも「何ゾ椽大ノ筆ヲ投シテ姑ク小說家ノ假聲ヲ學バザルヲ得ンヤ」である。（『雪中梅』上編、二宮孤松の序を參照）更に又、これは私だけの推測であるが、次のやうな事情も潛んでゐはしなかつたか。明治十八九年に及んでは、言論界も可成りに進歩し讀者の眼も肥えて來たので、根本的に新教育で鍛へられてゐない鐵腸は、新教育から出て來た尾崎、犬養等に對して、新聞政論家として內心いさゝかひけ目を覺えて來はしなかつた

か。從來とても鐵腸の議論は主として大局論で、政治外交等を大摑みに論じたものが多かつたが、此の頃に及んでは新興日本も愈々工業資本主義の本舞臺に乘り出して來るので、如何にしても、社會經濟に對する精密な知識が必要となる。鐵腸には然しその持合せがない、無くないまでも極めて少ない、尾崎、犬養その他はこの點で彼よりも數日の長があつた。鐵腸が政治小說に比較的眞劍になつたのは、幾分か新生面打開のつもりがあつたのではないか。從つて鐵腸の小說創作は、表面徐技的戲作らしく見せても、內實はさうではなかつた。それは鐵腸の筆が單に政治小說にのみ止まらず、進んで世話人情の作にも及んで來てゐる事實に徵し、又小說改良に對する態度に見て、如上の見方は一概に僻見といへないと思ふ。

鐵腸が小說試作の動機は、想ふに大體以上の諸點の複合したところにあつたであらう。いさゝか無用の想像めくが然し小說家鐵腸の出現に對する時人の驚異を思ひ、この出現が事實はさう偶然のものではなかつたことを說明したかつたのである。それでこの點の說明はこれで略ぼついたやうに思ふから、以下鐵腸の政治小說の一作一作について研究の步を進めたい。

註(一)「時事小說落葉のはきよせ」の序より

註(二)「花間鶯」中篇の序

註(三) 同上篇の序

註(四) 明治十九年五月十五日朝野、「人殺シノ流行」案外居士、同五月十九日朝野、「賓ノ詮議」案外居士、同二十三日朝野「勸善懲惡」案外居士

註(五)「落葉のはきよせ」の序

二 鐵腸の政治小説

今鐵腸の名によつて發表された約二十篇の小說中、政治小說だけを拔いてその發表の年代順に擧げてみると、左の如き表が得られる。

○二十三年未來記
原題「夢ニナレ〳〵」、明治十八年十一月三日、朝野新聞、同十一月十日上篇畢、同十一月二十八日下篇畢。十九年五月單行。

○政治小說 雪中梅
上篇、明治十九年八月 下篇、同年十一月

○時事小說 五色目鏡
模象居士と署名す、明治十九年十月三日——十四日、朝野新聞。「落葉のはきよせ」所收

○浮世の夢
明治十九年十月二十日——二十八日、朝野新聞。「落葉のはきよせ」所收

○未來の夢
明治十九年十一月十二日——十七日、朝野新聞、「落葉のはきよせ」所收

○手管のもつれ
明治二十年一月二日——六日、朝野新聞。「落葉のはきよせ」所收

○時事小說 落葉のはきよせ

明治二十年三月刊行。上記「五色目鏡」以下四編を集めしもの

○政事小說 花間鶯

上篇、明治二十年四月、中篇、同年十月、下篇、明治二十一年三月

○政治小說 雨前之櫻

明治二十一年三月二日――二十四日、繪入朝野新聞、明治二十一年八月刊行。

○國會開設之前後

原題「廿三年六月後の日本」、明治二十三年六月、大同新聞に出しもの、同年十月刊行。

○政事小說 嫩絲

明治二十四年一月三日以後國會、二十日にて中絕か

○政治小說 南洋の大波瀾

明治二十四年六月單行

○黃金之花

明治二十四年十月單行

○あらしのなごり

明治二十四年十一月刊。「南洋の大波瀾」の拾遺に充つべきもの

○政事小說 南海の激浪

明治二十五年九月單行、神戶又新日報

○政治小說　明治四十年之日本
　前編、明治二十六年二月十一日——四月十六日、國會。前偏、明治二十六年五月刊行、後編、同年七月刊行

○政治小說　大海原
　明治二十七年八月刊。前記「南洋の大波瀾」と「あらしのなごり」を合して一部にしたるもの

○政治小說　戰後の日本
　原題「大戰後の日本」、前編、明治二十八年十二月刊。後編、明治三十年七月刊、後編は村松柳江の續筆

○鐵腸叢書　過去の政海
　明治三十二年一月。小傳、「國會開設之前後」、「二十三年未來記」、「鴻雪錄」を收む。

○鐵腸叢書　政海之夢
　明治三十二年刊といふも、刊否未詳。若し刊行されてゐるとしても、『過去の政海』と同じく舊著を集めたものなることが明らかである。

○慘風悲雨　世路の殘月
　故末廣鐵腸稿、鹿鳴散士編輯と署名あり、明治三十四年十二月刊

此の他、大同新聞百二十號（二十三年十月二十一日）以下に見える烏有散士の「國會の內幕」といふ作も鐵腸かと思ふが、確證がないので、假に採らぬことゝする。尙ほ新聞雜誌に見えたまゝで私の眼にふれないものもあるかと思ふが暫らく以上で鐵腸の政治小說が網羅されたものとし、この順序で敍述の筆を進める。ところでその前に、以上十餘部の政治小說を二十三年を境界として前後二期に區分したい。これは單に便宜上さうするといふ意味ではなく、自然にさうなつてゐるのである。以上の諸作を通覽すると、二十三年までの作物は大抵國會問題に中心を置いたものであり

二十三年以後は主として國權伸張、對外政策、海外發展等の思想を中心としたものである。勿論そればかりといふのではなく、兩者互ひに混じ、因果關係をなしてゐることもあり、他の問題も取り上げられてゐるのであるが、中心はさうなつてゐる。これは一面に鐵腸の如きインテリ政治家の理想の心的推移を語ると共に、當時の日本國家の發展過程を反映してゐるもので、極めて興味がある。この點からも鐵腸の政治小說は代表的なものといはれ得るのである。

三　鐵腸政治小說・前期

『二十三年未來記』

此の作は、政治小說家鐵腸の處女作であり、筆馴らしであり、それだけに小說的條件の最も具備してゐない小說となつてゐる。いな有態にいふと小說といへるか何うかさへ疑問な位で、上下二篇の中、上篇は兎も角も小說的構想によつて書かれたとし、下篇は全然政治論文の體裁である。この點で如何にも新聞政論家の試作といふ感じが生々しく出てゐる。

上篇、即ちその小說的部分についていへば、これは、一種夢幻に托した警告ともいふべく、明治十八年當時の政界の現狀より推想して、このまゝでは來る二十三年の國會がかくかくの不完全なものになる恐れがあるぞといふことを夢幻的想像を驅つて十分に吐露したものである。甲乙二人が新聞紙を讀みあつて、新聞紙上に報道されてゐる國會議事の有樣を批評し、併せて過去現在の政海の事情を諷刺するといふ仕組になつてゐる。最後に至つて著者一場の夢にして結局させるところは、從來の政治小說諷刺小說の好んで用ふる形式である。

この夢幻中に現出された國會は種々の點から見て鐵腸の理想の國會とは極めて遠い不完全不滿足なものに寫されて

ゐるが、その敍述にわざとらしい誇張作爲の痕は歴々と見える、然しこれはその本旨たる警告的寓意を强める方便からも來てゐるので、必らずしも素人作家のテクニクの拙劣といふ點からのみ見らるべきではない。構想も勿論言ふに足るものはないが、たゞ新聞記事と甲乙の對話との連ね方に一種老巧な呼吸が見える、然しこれとて欄外の評者がいふやうに「才思湧クガ如キ」ものではない。

かくテクニク方面からは極めて單純な作物であるが、內容的には鐵腸の政治小說の總論的立場にあるので、幾分詳說するを要する。

鐵腸の國會及び政黨に對する理想は、前に述べた。撮要していへば、國會は英國風の二院制、政黨政治、政黨は原則として二大政黨、たゞその非違橫暴を制約する存在として第三黨を許すといふのである。然るにこの小說中の國會の現狀の如何にこの理想から遠いものであるかは、新聞記事に擬した次の一節を讀んでも知られる。

（前略）我々ヲ以テ現今我邦ノ國會ヲ視ルニ實ニ政黨ノ多キニ驚カザルヲ得ズ自由黨アリ改進黨アリ保守黨ト稱スル者アルカト思ヘバ更ニ漸進家ト唱フル一小團結アリ虛無黨主義アレバ何事ニモ政府原案ニ反對スル一黨アリ同ク內閣ヲ保護スル黨派モ亦二三ニ分裂スルガ如シ而シテ主義ノ爲メニ合體セズシテ九州黨四國黨ト云フガ如キ名ヲ下ダスベキモノ極メテ多シ而シテ議員中三分ノ一ハ各自ニ獨立シテ孰レヘモ團結セズ如何ナル黨派ノ種類ニ屬スベキ者ナルカ我々ハ未ダ之ヲ知ル能ハザルナリ此ノ如キ政黨ノ多數ナルモ各黨中ニ充分ノ結合アリ其持論ヲ主張スルニ於テ其方法順序ヲ得レバ猶ホ可ナリ今ヤ議院ノ有樣ヲ見ルニ一疑問ノ起ル每トニ一黨中互ニ發言ノ前後ヲ爭ヒ甚ダシケレバ其ノ議論ノ抵觸矛盾シテ殆ンド黨議ノ在ル所ヲ辨ズベカラザルノミナラズ同黨互ニ紛爭ヲ爲シ一大混亂ヲ引起スコトハ每々有リ多數政黨ノ集合ニシテ加フルニ各黨ノ有樣モ亦此クノ如クナレバ其ノ議事ノ整頓セズシテ何等ノ黨派モ其目的ヲ達スル能ハザル者ハ誠ニ故ナキニ非ザルナリ今日我ガ政府ノ公平ナル敢テ國會ニ向テ籠絡手段

ヲ施サル、コトナキハ我々ノ深ク信用スル所ナレドモ（中略）若シ歐州諸國ノ政治家ヲシテ此クノ如キ結合ナク支離滅裂ナル政黨ノ上ニ立タシムレバ之ヲ前後左右スル一トシテ意ノ如クナラザルハ無シ國會ノ力ヲ藉リテ充分ナル專制ヲ施行スルモ亦容易ナランノミ（後略）（初版、上篇第二章九頁―一〇頁）

成る程かくの如くであれば、鐵腸の理想からいつて不完全不滿足極まるものでなければならぬ。だが十年來渴想された國會が愈々開設されてみて斯かる不完全なものとなつたのは、如何なる理由によるか。それは即ち――

明治十四五年ノ頃ニ於テ一時政黨ノ四方ニ興起スル有樣アリ當時其ノ組織結合ノ完全ナラザルガ爲メ頗ル識者ノ非難ヲ受ケシト雖ドモ若シ全國ノ有志家ニ於テ早ク國會準備ノ必要ナルコトニ注目シ主義ニ因テ同志ヲ結合シ自由保守兩黨ノ互ニ對立シテ勢力ヲ競爭セシナラバ假令ヒ我邦ヲシテ一時ニ英國ノ如クナラシムル能ハザルトモ豈議事ノ混雜スル今日ノ如キコトアランヤ（前同、一一頁）

畢竟國民準備の不行屆の致すところで、俄に如何とも爲し難い。作者は人物甲の口を介して更に明確にその意を示してゐる。曰く――

余は是れまで頗ぶる重大の希望を國會に屬し居たるが實際に就いて視ると氣に入らぬ事が多い元來明治十四年の頃は日本國中一時に政事上の熱心を引起し政黨の勢も盛んになりたれば漸次に國會の準備も出來實に完全の議會が開けるかと思ひの外、十七八年頃に至り社會がメチヤ〱になり僅々の人を除くの外は國會の事に奔走するものもなくロクに政黨の組織も出來ずに國會の立つたから不都合の事が多いのぢや（初版、上篇第一章六頁、以下引用は凡て初版）

これが即ち全篇警告の眼目である。十七八年當時の如き無準備不活潑をもつてせば、かゝる國會をもつに至るもやむを得ないぞといふ作者鐵腸の憂國の一念がこの一片の俗談に强く出てゐる。下篇は即ち上篇の註譯ともいふべく、かかる國會の生ずべきことを事實に基き論理的に演繹して示したものであるが、二十三年の國會に對して――

（第一）政黨多數ニシテ其ノ結合堅固ナラズ（第二）議員ハ各自ニ辯論ヲ騁セテ議事整頓セズ（第三）神權論ト天賦人權論ト相紛爭ス（第四）議員實務ニ熟練セズシテ空論ニ流ルヽノ弊害アリ（第五）議員ニ雄辯家少ク（第六）國會ノ內外ニ粗暴ノ言語擧動アツテ各種ノ妨害ヲ生ズ（第七）選擧法不充分ニシテ意外ノ人物ヲ國會ニ出ス（第八）中等社會ニ熱心ナク輿論微弱ナリ（第九）下等人民ハ殆ンド國會ノ何事タルヲ辨ゼザルコト（下篇第二章六二頁）

等細かに九ケ條の豫想を下してゐる。その推論の根據についてはこゝで縷述する必要も餘裕もないので、簡單に擧げると、（第一）先に自由黨改進黨その他多數の政黨が群出したが、政黨が眞に有力な活動をなすには大同主義による合同運動でなくてはならぬ、これには相當長い年月を要するので、實現せずにやんだ。然るに十七八年來自由黨が解黨し改進黨も殆んど解黨同樣となり、他の群小政黨は雲散霧消したものが多い、而かも國會開設まで五年よりない、この間に盛大完全の政黨を組織することは、前よりも一層困難となつて來た、（第二）は一面（第一）の自然的結果とも見られるが、政黨的訓練がない初期の國會では、これは當然である、（第三）これは自由黨左翼の佛國流と政府支持御用學者派の神權論との軋轢の歷史から演繹したもの、（第四）民間政治家の理想主義一點張りの連中を眼中に置いたもの、泰西の理想的空論を直に實行せんとする風をさす、（第五）言論束縛の現より當然の歸結である、（第六）政府の峻嚴なる彈壓に對する反動の激化を豫想す、（第七）國民の政治的經驗が乏しいので、選擧法不備ならば、選擧は選擧區民の小利害を標準として決定される、（第八）國會は公議輿論の動力で善くも惡くも動く、財產學識ある中等社會は輿論の源泉であるのに、十七八年來中等社會の政治熱衰微して振はぬ、（第九）下等社會は中等社會の提唱によつて政治思想を起すものであるから、中等社會が冷淡であれば、下等社會のかくの如きことは自然の結果である。この下篇を讀むと、豫想された二十三年の國會なるものが、このまゝでは鐵腸の理想的國會と事毎に背馳することになるといふことが益々よく分かる。鐵腸の理想的國會は、彼によれば最も多く國會の威能を發揮するものである、然るに若し此

の豫想の如くんば、二十三年の國會は最も無能な國會となりさうに見える。幸ひにしてこれは夢裡の想像（いか程正確な基礎によつてゐるにせよ）であつて實現された事實ではない。そこで鐵腸は警告して曰ふ、――

吾輩ガ夢中ニ現出シタル國會ノ有樣ヲ數日ノ紙上ニ掲載シタルハ亦大ニ寓意ノ在ルアリ此ノ如キ不都合千萬ナル國會ヲ實地ニ演出スルモ將タ吾輩ノ想像ヲシテ空中ノ樓閣ノ如ク風ニ從テ消滅セシムルモ我全國有志家ガ今日ノ擧動如何ニ在リ吾輩ハ何ゾ大聲疾呼シテ其ノ注意ヲ引起サヽルヲ得ンヤ（下篇第一章五七頁）

『二十三年未來記』の單行は十九年五月であるが、發行早々鐵腸も意外とする程な歡迎を受けた。この年十二月十六日朝野新聞の報ずるところによると、書林の調査では、この時既に飜刻ともに三十二版、三十萬部內外の賣高があつたといふ。而かもこの後幾年間か相當多く賣れてゐるのであるから、恐らく五十萬乃至それ以上に及んだに違ひない。何がさうこの作を歡迎させたのであらうか。

　この作の主題が丁度當時の人々の期待をかけて知り度いと思つてゐた事柄であることも、一因であり、又この作の作家鐵腸が人氣のある民間政治家であること、よもやと思つたその人が思ひがけなくも小說を書いたといふこと、これ等もそれぞれ一因であらう。だが第一の原因はこの作に見える國會に對する豫想が如何にも現實らしい強い感銘を與へ、成る程さうかと讀者に感心させるところが多かつたからである。卽ち當時の人々にとつて、つまりこの豫想が甚だ面白かつたのである。作者鐵腸は多年政海に出入したいはゞヴェテランであり、それだけに政海の情僞、政黨の內幕、政治運動の消長の如きを知り拔いてゐる。從つて素人文人の政治小說と違ひ、單なる空想や想像を盛つたものでなく、その豫想も、警告も、諷刺も、暴露も、實情に基づき、實感がこもつてゐる。その豫想が Well-grounded であるは勿論、その警告にいかにも條理があり、その諷刺には肺腑をつくものがあり、その暴露には骨髓を抉るものが

ある。例へば上篇第三章政黨間の競爭を叙したところ、改進黨の氣障と御馳走政策、自由黨の無學と腕力主義、保守黨の老猾、博覽會にて人心を割からうとする政府の陋策、改進黨の進退兩難等々、第四の選擧民の無知無識を穿つたところ、如何にも手に取る如く描かれて、讀者をして破顏せしめずに置かぬ。殊に第五、第六の議場內の想像畫面に至つて極めて興味がある。有名無實のいはゆる大家連が第一線から引退せしめられて若手の熱心家の舞臺となつてゐること、教育案の討議に、國家教育の精神がのみこめず、自由主義の凝り屋が干涉呼ばりをして國費支出に反對するところ、外債募集案の討議に當つて、如何にも空寂な理想論には眼の色を變へて口角沫を飛ばす癖に緻密な數學的經濟論になると支離滅裂の無能狀態になる議員が多いかを示し、これを多年空論にのみ馳せた結果と斷じたところなど、實に舊い豪傑的政治家型の時代遲れを痛烈に皮肉つてゐる。かういふ諸點は今日吾等が讀んでも尙ほ極めて興味を覺えるる。況や當時の讀者が、國會といふ大きな未知的希望を前に控へつゝ讀んだ時には吾等に幾倍する興奮を覺えたことであらう。これが幾十萬部の賣高といふ歡迎となつたわけである。

鐵腸の豫想は單に豫想に終つたか。いな、上記九ケ條の豫想は（第三）だけを除くと、幾分程度の相違はあるが、不幸にして悉く中つたのである。それは第一議會以後の實際の歷史に就いて見れば判然する、今はそこまで說き及ぶ餘裕がないので、たゞ豫想の適中といふ事實だけを明言して置く。國會開設と共に、實現された理想の不完全にロマンチツクな希望の夢を破られたインテリゲンチヤは、呪咀の聲を擧げ、自暴自棄的態度で多年渴仰の對象物に背を向けてしまふ、この氣持が政治小說にも反映して、二十三年以後絕望的な暴露的な興味を中心にした作物が多くなる。鐵腸が此の未來記を書いた時は眞摯な憂國の一念からであつたことに疑ひはないが、それが不幸に適中して、理想が實現されず、遂に反理想が實現されたので、折角の慨世憂國の警告的豫言書も、見樣によつては、二十三年以後に於

けるインテリゲンチャの政治的絶望の先驅的著作と見えなくもない。十七八年頃から既にインテリゲンチャの内心には、我知らずかういふ絶望的氣分が喰ひ込んで來てゐたといふことが、こゝに反映されてゐるともいへる。これは記憶して置くべき點である。

政治小説として『二十三年未來記』の名を用ゐたものは鐵腸のこの作が最初ではなく、既に明治十六年三月に柳窓外史の『二十三年未來記』といふものが出てゐること、前述の如くである。更にこの作を模倣したものに服部撫松の『二十三年國會未來記』、末廣政憲の『二十三年後未來記』がある。服部氏のは、この傳の條に述べるつもりである、又末廣政憲の作は、この篇の最後に一括して附錄的に語らうと思つてゐるから、こゝでは何も言はない。

『雪中梅』・『花間鶯』

此の二部は、著作の主旨に於いて『二十三年未來記』と正に相表裏する。『未來記』は不完全なる國會の出現を警告する意味に於いてかゝる國會の想像畫を描いてみせたものであるが、『雪中梅』、『花間鶯』は、『未來記』に於いて當然描破及されるべくして描破されなかつた積極的一面、卽ち如何にして完全なる國會をもつべきかといふその方法順序を描破したものである。卽ち『未來記』を病者の容體書といふべくば、『雪中梅』、『花間鶯』はそれに對する處方箋の如きものと見て可からう。

『雪中梅』、『花間鶯』の二部は鐵腸の政治小説の代表作視され、又鐵腸が明治政治小説家を代表する意味に於いて廣く明治政治小説の代表的作品視されてゐる程重要なものであるから、聊さか詳論せざるを得ない。尙ほ著作年代によれば、此の間に『落葉のはきよせ』が入るわけであるが、この二部は直接連續するものであるから、矢張り續けて述

べることにする。

政治小說 雪中梅

鐵腸が、積極的に完全なる國會の成立する順序を小說によつて描かうとしたのは、『未來記』の發表後間もなくであつたらう、或は『未來記』の構想と同時であるかも知れない。何れにしても、明治十九年一月には小說『雪中梅』に手を着けつゝあつた。丙戌歲旦の詩に、瓶梅香裡寫新篇の句があり、詩の自註に、余方著雪中梅云々とあるから、この時は既に明に手を着けてゐたのである。(なほ『花間鶯』中篇の序に至つては、起稿一月と明言してゐる)。もつとも、『雪中梅』の題名の如く、自由志士をもつて雪中の寒梅に比する思想は、支那趣味の鐵腸にあつては可成り早くからもつてゐたもので、例へば明治九年二月二日朝野で自由志士の覺悟を語つてゐるあたりにこの小說のイデオロギイ的萠芽が見えるといへばいへぬこともない。だが、それが鐵腸の意識內でいよいよ小說と結構されるまでには丁度十年の年月と變遷を經たものである。かくて『雪中梅』上篇は十九年晩春初夏の候一旦脫稿したらしいが、鐵腸は大事を取つて公にせず、自ら推敲し人(例へば前田香雪の如き)にも推敲させ、漸く八月に及んで發表した。而かもこの間、「鐵腸居士が小說に着手しつゝある」といふ噂が久しくたつてゐたので、一度發表されるや、文字通り人氣が沸騰した。鐵腸はこれに力を得て、同じ年十月の交、箱根に客を避けつゝ下篇を完成し、この年の暮に公けにした。續篇『花間鶯』の腹案の大體は、恐らく『雪中梅』に着手する初めから立つてゐたらしい。

この作、卽ち『雪中梅』の發端は二樣の意味に於て一種のカムフラージュに受けとれる。それは一方に於いては、その小說が百五十年も未來の出來事といふ點を强調して、その內容の現實描寫に對して讀者の寬大な態度を要求するためであり、他方に於いては、その小說を作る目的を明白にし、同時に俺は本氣で(實際は本氣だが)かういふもの

を書いてゐるのではないぞ、皆この目的のためだぞといふことを示して、識者中の識者が何故戲作小說などに指を染めたかといふ社會の一部の人々の暗默の批難に對する辯解のためである。明治第百七十三年の國會紀念日祝日に昔鶯谷の所在地だつたところから堀り出した古碑により、國會開設の大功勞者に國野基といふ人物があることを知り、好者の人が上野書籍館を搜訪して、つひに國野の傳記を小說化した『雪中梅』、『花間鶯』の二書を發見する、これが發端であるが、古碑を發端とするのは、水滸傳から借りたともいへるし、或はスペンサアの『社會論』中にもこれを暗示するところがあるといふ。(二)この百五十年後の社會の未來記には、立憲政體の讃美の寓意は受けとれるにしても、想像の點では決して豐富なものとはいへない。未來記を紆曲にしないで前曲にし、現在の描寫を未來から見た過去といふ風にぼかしたのを、妙絕の工夫といつて喝采してゐる評家もあるが、今日の吾等からいへば、この發端は全然無用の長物で、この小說の現實味を殺ぐこと甚しく、大に興味索然たらしめる。それは、こゝに描かれた未來社會が如何にも現實味のない、空想的な、機械的な、貧弱なものになつてゐて、戯けてゐるなといふ氣を起させるからである。然し以下本文の現實描寫に對するカムフラージュといふ意味で我慢して置かう。

さて『雪中梅』本文の梗概に入るのだが、その前にこの作に出る主要人物を擧げてみると、――

國野　基。此篇の主人公、一時深野梅次郎ともいふ。純情の靑年志士で正義社員。富永お春の未知の許婚者。

富永お春。女主人公、富家の女だが進んで女教師となつてゐる、有志の淑女。國野の未知の妻君。

藤井夫婦。お春の義理の叔父叔母

川岸萍水。代言人、政治家、正義社の首領ともいふべき人物。お春に意あり。

武田　猛。正義社員で國野の親友だが、政見言動に於いては過激主義也、別に一黨派を作らんとす。

松田　肇。正義社員で代言人だが、川岸のお幇間めく役をしてゐる。

等であるが、これ等の殆んど全部が續篇『花間鶯』にも活動する。

國野基は苦學幾年の後、潜に四方に遊んで日本の形勢を察し、いよいよ識見を磨いて、在野青年政治家の一團たる正義社の一方の旗頭となる。井生村樓の演說會で數ば大雄辯を揮つて喝采を得るが、妙齡の一佳人が彼の演說の時には必ず姿を見せるといふので、同志や聽衆の評判になる。然し國野は何も知らない。だがかゝる有爲の國野も、下宿に歸れば一個の窮措大で、下宿屋の亭主に滯つた下宿料を催促されて困却してゐる、一日、亭主から嚴談をうけて最も閉口してゐるとき、誰ともなく國野宛で女文字の手紙を寄越した人がある。開けば中には數十圓の金と手紙があり國家の爲め使つてくれといふ意味が書いてある。國野は潔よいとは思はないが、背に腹の代へられぬ窮迫の際なのでその金を受けて下宿料を拂ふ。間もなく過激派の友人武田猛に送つた手紙の書き損じた文字(「ダイヤモンド」〔小形英語字書〕とダイナマイトの違ひ)と、此の女文字の手紙の出所が疑ひを招き、武田と二人投獄される。すると又、差入れの手巾に一首の和歌を認めて彼の志を勵ますものがある。これも女文字、前の匿名の手紙と同じである。流石剛腹の國野もその未知の女性を床しく思ふ。やがて嫌疑は晴れたので、國野は一人箱根に出かけ、避暑と保養を兼ねて暫時入湯の客となる。すると、同じ宿の浴場近くで一葉の短册を拾ふ、それが夢にも忘れぬ例の女文字である。それで不審に思つて探ると、階下の一女性であると知れた。

この女性、卽ちお春はこの時、名のみの叔母に監督されて面白くもない湯治に來てゐたのである。お春は富家の女であるが、深窓に引込んで昔風な空氣を吸つてゐることを潔よしとせず、兩親に願つて早くから和漢洋の學問に身を委ね、女教師の資格さへ得た新時代の淑女である。今は父母ともにない身だが、名ばかりの叔父叔母に監督後見されて、味氣ない日を送つてゐる。お春には父母の許した未婚の夫深谷某があつたが、その人が嘗て東北周遊に出かけたまゝ消息を絶つてゐるので、めぐり會ひ度いと念じてゐる。活潑な性質とて、政治の運動にも理解をもつてゐたので

井生村樓の演說會などにも好んで出かけてゐたが、嘗つて國野の演說を聞いてから、たゞ感心し、その人となりに傾投してゐたのであつた。匿名の手紙も金も、手巾も皆彼の女の眞心の現れであつたのである。

國野はこゝでお春と知り合つて、志士と佳人が始めて淸い交際を結ぶ。だが叔母の用心から二人の交際が熟さぬうちに名乘り交はしもせず別れてしまふ。東京へ歸つたお春は、いよいよ叔父夫婦の奸謀に陷入つたことが分かる。叔父夫婦は、父の遺言と稱し、許婚の夫との約束は年限が盡きたからといふので取消し、自分に都合のよい人に嫁入らせようと巧らむ。叔父の黑幕にあつてお春と富永家の財產をわがものにしようと狙つてゐるのは、不思議にも同じ正義社の領補川岸萍水である。川岸は井生村でお春を見染めたのであつた。だがお春の心が國野に傾いてゐると知るや子分の松田を使つて、新聞の投書や藝妓の取り持ちを種子にして、國野とお春の間を割かうとする。お春は窮して國野に救ひを求め、自分を助ける爲め、假に婚約の夫となつてはくれまいかといふ。國野も承知する。ところが國野がお春の手許でこの許婚の夫の寫眞を見た事から、端なくも自分こそお春の尋ねてゐた許婚の夫だつたといふことがわかる。叔父夫婦も改心して、惡巧みを打ち明ける。かくて志士と佳人は良緣を結んで父母の遺志を全うする。ひとり納らぬのは、川岸の胸の中である。これが、國野の上に何う反響して來るか、『花間鶯』に詳しいが、國野はお春の資財を得て、多年心がけてゐたやうに國家の爲めに奔走する機會を得る。

『雪中梅』に見える政治的分子は理論的イデオロギイ的なものと趣向的描寫敍述的なものと二樣に分れる、勿論いつも嚴密に劃然と區分されるのではなく、相混じ相調和してゐる場合が多いが、大體さうなつてゐる。この理論と描寫とが政治的効果に於いて兩々助け合つてゐることはいふまでもない。その中で『雪中梅』の上篇ではまだ理論的なものがそのまゝ露骨に投げ出されてゐるところがある、卽ち第一に上篇第二回、井生村樓に於ける國野基の演說である

が、この演説がこの小説及び『花間鶯』の政治的イデオロギイの主眼で、實に作者鐵腸の精神の集注したものである。鐵腸はかつて同じ井生村で「社會ハ行旅ノ如シ」と題してこれと同趣意の演説をなし、その筆記を朝野新聞（明治十九年三月二十三、四、五日）に掲げたが、それを叮嚀に反覆したのが、この國野の大雄辯なのである。始終に亘つて國野は、政治的には鐵腸の理想を代表する代辯的存在であるかの觀がある。

國野（卽ち鐵腸）の大雄辯の要を摘むと、冒頭は人生を旅行に譬へた美文的比喩である。旅行には日暮れて路遠しの嘆になりがちであるが、社會人生にもかく嘆を生じ易い。云々と一見迂遠な論法で淡々と論じ出した揚句、突兀として二十三年の國會に對する國民の無準備無自覺を責める。十四年に二十三年國會開設の聖詔の出た時には十年の準備期が長過ぎるとて、囂々と政府に不平をいつたものである。ところが既に五年經過した今日何うかといふと、政府は憲法制定なり政府組織改革なり多少現實的に準備してゐるが、民間人士は何の準備をしたか。何等見るべき準備がないではないか。（こゝで第二段の歴史的回顧となる。）成る程七八年前の國民の政治熱は大したもので、國會國會の聲は全國に反響した。陛下の御仁慈と地方有志總代の努力によつてその熱心が幾分貫徹して、遂に十四年の聖詔降下となつた。そこで有志家諸君は益々感激奮勵して此の十年の間に十分の準備を整へて國會の設立に應ぜんことを決心し、その第一着手として政黨を組織した。こゝに於いて自由黨、日本立憲政黨、改進黨、九州改進黨、曰く何曰く何と全國到る處に大小の政黨が生じ、盛んな意氣であつた。勿論初度のこととて此等政黨の主義精神に遺憾不完全なものは多々あつたが、これを改良して純粹の政黨たらしめ、以て國會の必要に應ぜしむるを得べき希望があつた。その改良意見はといへば、「（第一）小團結を解散して大團結となし、（第二）は博く學者と實際家を黨中に網羅して活潑なる運轉を試み、（第三）は空漠にして事實に基かず激烈にして破壞の性質を帶ぶる言論を制止して全國の政事思想を呼起し、（第四）は黨中に就て立法行政の事務を調査して井々と條理あらしめ、以て何時にても國家の大事を擔當するに足る

べき準備を整頓する」にある。余、即ち國野は民間政黨がかく改良されぬ以上、國會の設立に會つても豫期の利益は得られぬであらうと考へ、この改良に努力せんとしたが、その後政黨の有様は何うであるかといふに、殆んど蜃氣樓と一般といふ狀態で、民間の政治氣運は全く衰微した。これでこのまゝ二十三年の國會に臨んで豫期した利益を得ようとするのは、無謀といはざるを得ない。（こゝで第三段政黨及び政治熱衰微の原因を檢討する）。然し事こゝに至るにはそれぞれ原因がある、將來の注意の爲めには過去の弊害を知るも亦甚だ必要である。政治言論の衰微には政府の政略も關係がある、然し民間志士の自ら取るところも多いのである。今その原因を箇條にして列擧すれば、——

（第一）空理空論を主張し之を聞く者をして厭倦せしめ實際家の同意を得る能はざりしこと

（第二）言動過激で中等社會の人々の同情を失せること

（第三）老成家財產家に眞の政治的奮發心なきこと

（第四）民間諸政黨は組織結合を固くせず政爭に銳意せること

（第五）民間志士の暴力主義の失敗

となる。國野はこれ等の各條を說明して曰ふ、先きに一二の先輩がルソオとかスペンサアとか、哲學上の議論を引用して政事上の改革を主張するや、英佛政事哲學の說は一時人心を支配し、「遂に我が政事上の議論は概ね想像に出で事實に就て利害を比較するものを擯斥して因循姑息の陳言と爲し大聲して權利と呼び自由と叫べば聞くもの爲めに喝采する」有樣となつたので、世の所謂民權家は一部の哲學書を以て六韜三略と爲し政治上の萬病に効能ある金冊と同一視して、實務の利害得を不問に付し去るに至つた。だが歷史的關係を度外視し、風土人情の如何を不問に付して徒らに想像の政事社會を論ずる時は、一時大人氣を得ても、久しきに及んで厭倦を來すのは、自然の勢ひである。世故に熟練する老成家の如きは、一時の氣焰を避けて枉げて之に屈從してはゐるが、內心は常に之に反對せんと欲する。

政事思想の單純な連中に至つては、始めは言論の壯快に魅せられて自分も民權家の仲間入りをやらうとするが、いつまで經つても論者の言が天賦の權利平等の自由といふのみで千言萬語一の狹隘な圈中を出ることが出來ないので、論者の伎倆を信用しなくなる、これが第一の原因である。又、下等社會の人々を煽動してその耳目を政治上に注射させ、その聲援によつて自家の勢力を得んとするのも確かに政治家の一手段に違ひない、だがさうなると何うしても中等社會と感情的に對立して來る、彼等の理想通り行ふとせば、必ず普通選擧を行ひ、無智無產の下等社會にも政治的權力を附與しなくてはならぬ。これは當時としては甚だ過激な改革であり、社會の中堅たる有產的知識階級が眞正面から反對する。かくて一部少々の人々の言動の爲めに、自由論全體が有害視されることになる。これは第二の原因である。又、老成家財產家は何れも時の不景氣に藉口して政治活動をやめたが、これで見ると彼等が數年前に奔走したのは、眞情熱心に出たのではなく、少年客氣の徒の爲めに煽動されて流行を追つたものに過ぎない。彼等には運動に對する誠意がない、(ブルヂョアジイが政治に熱意を失つて來たことを擧げてある點は注意を要する。)卽ち第三の原因が生ずるわけである。又、社會には優勝劣敗の作用が行はれてゐるから、若し民間の政黨が强大な勢力を有し、公議輿論がこれを贊成するに至れば廟堂の諸君子も甘んじて政權を附與するであらう。だが英國の如き國ならいざ知らず、我が國の如き國では、政黨の勢力知識が政府に一倍してゐないと、目的が遂げられぬ。然るに四五年前の諸政黨の如き、力を合せて政府に當つても危いのに、三々五々秩序の整頓せざるをも顧みず、或は正面に立つて政府を攻擊し、或は裏面に於いて政黨間に爭ひを繰返してゐる、この反動に依つて自ら分裂潰散するに至つたのは、是非もない次第である。これが第四の原因となつてゐる。世の民權家の間には全國を結合し、平和手段によつて自己の主義を政治上に試みることの必要なるを察せず、動もすれば粗暴な腕力主義を爲して法律上の罪人となり、所謂濟崩しの國事犯を頻發させて、希望ある身を以て獄窓に呻吟し、世人に民權家を激徒と同一視せしめるに至つた。これが第五の原因で

ある。以上、國野の演説は、大旨に於いて『二十三年未來記』(殊にその下篇)と相表裏してゐるので、その心算で讀んで、頂きたい。

國野は進んで、聽衆の政治的覺醒を促した上、如上弊害の救治策として、次の如き前途の運動方法を提示した。曰く――

(第一)學者實際家の協和を求む前年政黨の四分五裂して結合を爲す能はざりしものは要するに學問あるものと世故に慣るゝものと互に氷炭の勢なりしに因るなり小異を棄てゝ大同を求むるは後來社會の爲めに奔走するもの丶注意すべき一大要點なり(第二)務めて封建の迷夢を破る我らは九州男子なり我々は奥羽の人物なりと云ひ土地に因つて相結合したるは明治十三四年頃の有様なりしが此の習氣は今日に至るまで未だ全く洗除する能はざるもの丶如し頑陋の凝固物を打破するに非らずんば決して眞成なる政黨の成立を見るべからず封建の分子は最も立憲政體に妨害あることを知らざるべからず(第三)激烈の言論に因て下等人民の熱心を引起すは亦政事家が一時の方便なれども之が爲めに毒害を後日に流し動もすれば意外の結果を生ずるに至る余は後來世の有志者が此の如き擧動あることを欲せざるなり(第四)は空漠の議論を排して實際の事業を調査し以て我々の主義を實地に貫徹するの準備を整ふるは最も今日の必要とする所なり哲學上の空理は姑く之を政事上に關係なき學者の抵掌に付して可なり地方の民情を知り海外の形勢に達し制度法律を始め軍政警察より鐵道電信等の處置の如き之を新劃して井々條理あるに非らざれば國會の設立に逢ふも決して之が改良の目的を達する能はざるべし余の今日諸君に望む所は此の四者に注意して國會の準備に着手するに在り(喝釆)(初版、上、第二回五一頁―五三頁)

以上四條の前途の運動方針は、卽ち『二十三年未來記』の所言より一歩を進めて、積極的建設的忠告を吐露したものであるが、然しこれとて、前述の鐵腸の政治的イデオロギイを想起して頂けば、自からそこに旣に暗示され散見し

てゐることがわかる。卽ち（第一）は政黨の大同主義であり（第二）は封建的地方感情を去れといふ主義、（第三）は中等社會の下等社會指導支配、この點は鐵腸の政治的立場を最も明らかに示す一證左となるのだが、つまりプロレタリアに對するブルヂョアジイの制覇を理想政治の必要條件の一つと見るところに、ブルヂョアの代辯家たるプチブル知識階級の面影の一面が躍如としてゐる。（第四）は鐵腸の持論たる空理空論を排すること、實質的國會準備をせよといふことである。いかにも鐵腸としては當然の歸結點であることが、『二十三年未來記』からも推測される。此等四箇條は、完全な國會をつくる爲めの準備條件であるとし、それでは完全な國會とは何ういふものか。鐵腸はこれに對して文字によつて露骨に答へてゐないが、然し想像に難くない、それは、『未來記』に於いて夢想した不完全缺陷だらけの國會の正反對のもの、これが卽ち完全なる理想的國會なのである。この作では、まだそこまで描出されてゐないが、『花間鶯』に於いては、これを具現して出さうとする努力が或る程度まで爲されてゐるわけである。

以上の四ケ條を前途運動の根本方針とし、さしむき何處から實行に着手して行くか。それは下篇の第二回に暗示されてゐる。箱根の浴舍の一室に偶然落合つた國野武田の二人と田村某島田某といふ地方政客とが酒間政治を論ずるところである。談は先づ地方政情の不振から始まる。この頃の地方議會（卽ち府縣會のこと）が一向振はず議員が無能無力のやうに見えるのは、畢竟輿論が微弱なためである。鐵腸は國野の友人の演說筆記といふので「何ゾ議會ヲ刺衝スルモノナキヤ」といふ文章を武田に讀み上げさしてゐるが、この文章は實は鐵腸自身がやつた演說で、この筆記が朝野新聞（十九年七月十四日——十六日）に載つてゐる。こゝに引用されてゐるのは、後半の一部分で、議員無力の原因を論じたところだけであるが、その前に「代議政は何の爲めに設けてあるかといふと、社會の必要に應じ公議輿論を以て政治の方向を定めしむる手段となり國家國民に重大な利益がある」云々といふ前半がある、これから地方政治の實驗から議會政治への不安、議員の無力への心配となる。この文章では議員無力の原因を大體、（一）輿論の聲援

なきため、(二)議員に有能の人物の無いのは輿論が議員といふものを尊重しないため、(三)議員選擧に當り主義言論を問はず名前のみを聞て選擧するため(つまり輿論冷淡のため)に在ると論じてゐる。畢竟、地方政治の不振は民間の輿論の微弱なるに在るわけである。そこで國野(即ち鐵腸)は、語を續けて論じて曰ふ、人民の政事思想が進歩し議會を刺衝する輿論が强大にならねば、如何なる制度法律を設けても實際の利益は得られぬ。(こゝで地方政治から論鋒を轉ずる)——

尤も府縣會のことは僅に一地方の利害に限るからさう心配をする程のこともないが國會設立の後に至り地方の人民に政治思想の乏しい時は國會は孤立して聲援がないから勢力の强大なる政府と對立して人民の權利幸福を保護することの出來ぬは勿論議會も輿論の制裁を受けぬ爲めに自然に腐敗を生じて國家の利益を妨害する様なことがないとも言はれまい地方の有志家などは今から能く注意して人民の政事思想を引き起して有爲の人物を國會に出し强大の輿論を造り出す様に盡力せねばなるまい云々(下、第二回五五頁)

同時にこれが又「何ゾ議會ヲ刺衝スルモノナキヤ」の結論でもあるのである。地方は以上の如しとして、然らば府下政界の實勢は如何。府下は流石に學者政治家に乏しくはないが、何れも自尊自大で、結合なく、何等の協力的連楔もない、かゝる次第で、二十三年の實質的準備の如きは、全く出來ぬ相談である。そこで、國野は斷案を下していふ、國會準備の第一急務は、府下の諸有志を結合し漸次に地方に向つて聯絡を通ずる外はない。即ち明治十四年に還れといふのである。明治十四年の秋頃府下の有志家中錚々たる人々が小異を棄てゝ大同を取り一大黨派を組織すると云ふ考へで上野精養軒に相會したことがあつたが、種々の事情から目的を達せず分裂して小黨亂立となり政黨軋轢の端を開いたが、一切を淸算してあの頃の大同的精神に還つて新に大同主義の運動を始めようといふのである。これを要するに、完全な國會とは眞に一致せる公議輿論を基礎としてゐるものたるべく、輿論にして眞に一致强大なものであれば

その國會は不完全なものとはなり得ぬ。そこでこの必要な輿論の一致を得るために、先づ府下有志の大同運動より始めようと、國野は説くのである。さうして、この意見は又、先きに吾等が鐵腸の政治的イデオロギイを研究した時に度々出會したものであつた。

國野のこの方案を是認しつゝもこれを迂遠至極となし、直に暴力革命をも辭せざらんとするのが武田猛である。然し國野は斷じてこれに反對である。武田はあくまでも天賦の自由平等を信じ、これを文字通りに力づくでも實現しようとするが、國野は、「僕は輿論に因つて平穩に社會の改革を成就する決心だから」、前後を顧慮せぬ粗暴の事は眞平御免だ、と明言してゐる（上篇第三回七〇頁）。この點でも、國野は又鐵腸の排腕力主義的イデオロギイを代表してゐる。國野即ち鐵腸の説くところによると、「明治政府には許多の常備兵がある上に全國に巡査が配置してあるから民間に何程の不平家があつても差向き腕力の競爭に打勝つ」ことは出來ない、殊にかく專制政治のまゝの時代に於いて然りとする、一時腕力主義が政治運動界に流行したことがあつたが、その結果は世の民權家に不利益な結果を生出したことが測り難い。かく腕力尊重の現象を生ずるといふのも、「一時社會に勢力のあつた政黨がめちやめちやになりその多數の黨員に方向を失はしめたに因つて起つたことだと思はれる。先輩たる者はかく後進に方向を見誤らしめぬやう注意しなくてはならぬ」云々。此の暴力排斥主義は又續篇『花間鶯』に於いて更に明白にされるであらう。

明治十九年の後半、即ち『雪中梅』上篇の發兌された前後から、當時の政界に大同主義實現の空氣が動き、その萌芽として有志懇親會となつた過程は、鐵腸の傳記のところに述べてあるが『雪中梅』を讀んでこの事實を想起すると鐵腸が自からこの主義を唱道するだけで足らず、その小説を假りて更に再三再四これを反覆して大同主義を實現しようとした熱意も聊か酬はれた形があるのを見るのである。

こゝまではいはゞ主な議論で、鐵腸の政治理論を直接反映したものであるが、これと表裏してこの作を政治小說たらしめてゐるものに、趣向的描寫的に、政治的空氣を包んだところがある。上篇第二回井生村樓演說會の光景、第三回スパイの須田某が國野を煽動するところ、第五回警察に於ける取調べ、第六回監獄の內外、下篇第二回地方有志との談論の場面など主として描寫的な部分であるが、何れも作者自家の實見乃至實聞に成つてゐるだけにその描寫が如何にも寫實的であり、明治十八九年當時の政治社會の表裏の動きを髣髴とさせて見せる。これによつて國野卽ち鐵腸の政治理論の生れて來た背景がよく分かり、その理論に生氣あらしめる、それが寫實的であるだけ餘計效果的なのである。井生村樓の演說會の光景は實見に基づいてゐることはいふまでもない、密偵が國野の言質をひつかけようとする邊は實驗ではあるまいが、然し當時よくかういふ事實があつたもので、鐵腸は決してモデルに窮することはなかつたことゝ思ふ。警察に於ける取調べから監獄內の件は、勿論鐵腸の實驗も入つてゐやうが、然し明治八年九年の出來事では、單に氣分を寫すなら格別、そのまゝでは十八九年の寫實とはなり得まい、然るに幸ひ獨立黨の相棒たる馬場と大石が十八年六月、爆彈購入嫌疑で拘引され、暫時未決にゐたことがあつたので、此の二人の經驗を巧みに自家のものらしくして織り出したのである(二)。本文ダイナマイトの嫌疑云々はいはゞこの事件の場當りで、實際大に讀者に喝采されたものらしい。地方政治の談論から大同團結の提唱に至る一段は、勿論鐵腸自家の經驗に手本を求めての業くれであらう。井生村樓の場は、當時の政治運動に關心ある民衆の政治認識の程度を示したものとして、又須田が國野を煽動するあたりは、當時の政府の密偵政策を暴露した意味で、それぞれ寓意があるといひ得やう、ダイナマイトとダイヤモンドの件は、過激志士に對する警告的意味もあり、當局の神經過敏、上下の猜疑心を諷してもゐる、警察署の場もさうである。監獄の場には現實暴露による勿論監獄改良論が含められてゐることはいふまでもない、すつかりその心算で書かれてゐることが分かる。又國野とお春を離間せんとする川岸一派の行動は、民間志士にも油斷のならぬ

不純な連中がゐることとの諷刺と見て可い。地方政治の不振から府下の同志の散在孤立を說くところは、矢張り現實暴露による忠言と解して可いのである。以上の如く、此等の政治的描寫の場面は、現實性をもつと共に、暴露乃至幻滅、諷刺の意味が籠められてある、何等かの意味で大抵さうなつてゐる。さうしてこれが前の理論的部分と何ういふ關係をもつかといふと、理論は將來のために建設的理想を揭げ示してゐるに對し、此等の描寫的場面は何れも現實暴露の覺醒によつて理想的建設のための地ならしの役目を果す、換言すれば一片の理想論がかく現實の政治現象の描寫と連闘するため、その對比によつてかゝる理想論の生ずる所以も分かり、從つて大に實現可能の姿をもつて來るわけである。而かも一面に、これが當時のインテリゲンチヤの心裏に我知らず萌して來た時代政治に對する自省的幻滅の氣持ちを反映してもゐるのだといふことは、『二十三年未來記』のところで暗示したのと同じである。

此の作の趣向の大團圓ともいふべき、國野がお春の財產によつて平生の志を實現し得るといふ一段は、矢張り鐵腸のもつ一つのイデオロギイを示したもので、つまり如何に學問あり熱心があつても、無產者では政治改良の志を遂げ難い、有產者との結合を得て始めてその志を成し遂げ得るに至るといふ、例の知力財力結合論を實地に說いて見せたものとして可い。この事の反面に、プロレタリア無力、ブルヂョアジイ萬能（いさゝか誇大だが）といふ改進黨派の思想が潛んでゐることはいふまでもない。この點は須藤南翠の小說に於いても數ば見られるが、當時新興の波に乘つて素晴しく盛上つて來つゝあるブルヂョアジイを眼の前にしたインテリゲンチヤとしては、當然もつべき一つの觀念であらう。

又これはいさゝか餘談の形があるが、鐵腸は小說改良と共に演劇の改良にも意がなくはなかつたらしい。此の頃は小說も演劇もさう意識的にして區別されずにゐた時代だから、小說改良を思ひ立つた鐵腸が演劇改良に贊成したとて不思議はないが、下篇第二回國野武田が地方有志と談論する條に國野の演劇改良意見があり、同時に改良脚本の輪廓

が描かれてゐる。鐵腸のことであるから、勿論演劇にも自由幸福の氣象を出したいといふのであるが、時代は西洋紀元前、舞臺をギリシヤにしてある點は矢野龍溪の『經國美談』の影響によつたものであらう。

紀元前何百年とかに希臘に一の王國があり、其の王は賢明の聞えある人で「アゼン」や「スパルタ」の風を學んで國民會議を開きたるも當時國中に政府黨と國民黨の二つがあつて國民黨は次第に勢力を增加し政府黨も些か持て餘し兼ねる樣になつて來たものだから宰相は內閣にて會議を開き二十年も維持した政權を國民黨に渡すのは遺憾の樣なれど古語にも之れを取らんと欲すれば先づ之れを與へよと云ふこともあり國民黨には一時人望があれども政事上の經驗に乏しいから迚も十分に內閣を組織することは出來まい一度之に地位を讓りて其の爲す所を見るが上策ならんとて衆議之に一決し一同辭表を出だし遂に國民黨の內閣になりしに果して新內閣には人物の乏しきより何事も纏りが付かず再び政府黨の勢力を得る樣になりしが其の新陳交代の間に制度法律も大に改良に就き國民黨も最初の失敗に懲りて自ら實力を養ひ遂に政黨政治の端緒を開き一國次第に繁盛して人民は盡く國王の寶祚萬歲を祝する云々。

（下、第三回七五頁―七六頁）

これは勿論演劇をもつて國政に擬した一種の寓意譚で、眞面目な演劇改良の意圖を取るべきでないかも知れないが、この脚本の輪廓は面白い。而かもシイザア奇談（暗殺物）や佛國革命の傳記は新脚本には思はしくないと排して、かゝる案を出してゐる如き、何處までも鐵腸流が出てゐるのが特に面白いと思ふ。

更に小說のテクニクから見た『雪中梅』は何うか。當時の讀書社會にとつては、この小說の出現は何やら劃期的なものと見こたらしく、新聞雜誌に於ける毀譽褒貶の批評は夥だしい。『經國美談』、『書生氣質』を除けば、この頃これ程世評で彼れ是れ言はれたものはなかつた。これ等の批評の一端は此の小說の再版以後の廣告に利用されてゐる（二）から、これに就いて見るべく、鐵腸はこれ等の世評に對して十九年九月二十九日三十日の二日に亘つて「雪中梅批評諸君ニ

謝ス」（朝野）といふ一文を書いて應酬してゐる。これ等の批評の中で今日一讀に値するものは殆んどないが、二篇程優れたものがある、その一は吾妻新誌一二六號から一三八號に散見する「小說卮言」（三木愛花）、他の一は學藝雜誌第四號及び九號に出た坪內雄藏の「雪中梅の批評」である。此の二篇は今日でも、『雪中梅』を論ずる時參考すべき好文獻である。以下これ等の批評を參照してテクニクの上から『雪中梅』を研究して見よう。

趣向からいへば、上篇に於いて奇を求めた突兀たるところがあり、下篇に於いて尋常自然を旨としてゐると見える。支那小說の知識にも負ふところがあるが、日本の舊小說、殊に人情本物に可成り負ふてゐる、さうしてその人情本式の色彩が下篇で次第に濃くなる。趣向そのものは、從來の稗史小說に比して全體としては自然な方であるがその發展に時々無理な工夫が用ひられ、專ら外的複雜をのみ求めてゐる上、且つ描寫が凡て說明的であるから、往々にして本來自然な趣向を前後の混亂した譯の分らぬものにする（上篇のお春の箱根行きの原因が下篇でとつてつけたやうに說明されてゐる如き）。かゝる照應を當時の讀者は奇也妙也と讃めたものであらうが、然しこれは古い支那式ロマンスのテクニクの影響で、明治の新小說にそのまゝ適應出來るものではない。第一回の老母の遺言は陳套、第二回の井生村樓の演說は生硬、第三回の下宿屋はやゝ好いが、四回の無名氏の手紙で切り拔けたのは拙い、同じ手紙でも武田へやる手紙の書損じから大仕事になるのは一寸面白い、六回監獄の中のことを一切夢にしたのは極めて拙い不自然な舊くさい趣向で、國野の夢中の想像か著者鐵腸が外から描寫してゐるのか混沌たるものとなつて、これに直ぐ箱根溫泉場の場を續けてよむと、宛然そぐはない怪談めくものゝやうに取れる。（鐵腸も再版以下でこれを多少訂正した）。もつともこれは、一面カムフラージュの必要もあつたのであるから、惡口ばかりもいへない。その次の回、國野とお春の奇遇は先づ可としても、如何に前から慕はしく思つてゐた人物にせよ、お春の打ちとけ方が餘り急である、これについてはお春の性格についての說明があるが、然しそれにしても不自然を免れない、且つ浴場近くに短册を拾つて無名氏

を知るなどの趣向も大時代のロマンスものである。下篇に入ると上篇よりは可成り小說らしくこなれて來る。第一回國野とお春を翌日分れさせたのは古いが猾手である、國野を病氣にして直ちにお春の後を追はしめずに、漸く追へるやうになつたところ、又辛じて歸途に遭ふ、これは面白い(後回でごたごたの說明がないと大に面白いのだが、この說明で頓に索然となつてしまふ)。第二回も政治論のところは下手すると上篇同樣生硬になつてしまふのであるが、流石に經驗を積んだゞけに、種々工夫して相の手を入れ、その生硬さを大分ぼかしてある。こゝで國野と武田の意見の對立を示したのは、『花間鶯』への重大な伏線である。第三回でお春の惡口を新聞に出し、後回で又々說明をしてゐるが、これは拙い、下篇四回五回は、いはゞお春の國野に對する述懷を說明するために設けたもので、時間的にも錯誤的印象を與へる上、プロツトも大に深刻悲劇的であるべきところだのに、ありふれた遺產爭奪の淺薄な趣向になつてゐるのは必要な工夫が足りない。六回、川岸等が國野に宛がはうとした妓が以前國野の恩になつたものといふのは、古いは古いが、この場だけに許すべきであらう。七回お松(女中)のことは聊かやゝこしく混線してゐる。又こゝで二度目に會つたばかりなのにお春が國野に假の夫となつてくれと乞ふことは面白くない。これが背後に鐵腸のカラクリがあるから可いが、さもないと折角の志士佳人の大理想を臺なしにする。第八回の問題は寫眞で始めて國野がお春の許婚の夫深谷だと分るところである。鐵腸はこれについて種々辯解してゐるし、又この趣向では結局からでもして同一人たることを示すより仕方はあるまいが、明白に不自然な苦しいものがある。寧ろ最初から國野と深谷を別人にする心算でプロツトを立てゝ、深谷を何かの理由でお春の夫とならしめないことにした方がよくはないか云々、これは玄人先輩たる春のや朧の批評である。

性格では先づ國野、國野は主人公であり、鐵腸の理想的政治論を發言する機關となつてゐるだけに理想化された國士型の志士になつてゐる。元來は鐵腸の機關であるから性格として獨立してゐないのは無理がないとしても、上篇は

特に露骨である、并生村樓や監獄の場でさうと知られる。一つは心理描寫がない點、今一つはその素生出身が明瞭でない點の影響もある。下篇の方はまだ可い。殊にお春と別れた後二回は可い。だが總體これを獨立した性格として見るには實に統一がない。何れ二十を幾つも出てゐない青年であるべきに、政治的にはその思慮が餘りに多く老人じみて少しも若々しいところがない。而かも一面又世間の事にかけては、全然無知無經驗の一書生で國士の箔が剝げてしまふ。そのお春に對する態度の如き、忽ち馴れ、忽ち疑ひ、忽ち解ける有樣で、情の動く時は判斷の力を失ふ。普通の戀人ならこれが自然かも知れぬが、一國の政治を改良せんと志す國士的人物としては性格破綻である。これでは折角の中正重厚な政治改良論も、反對に難を避けて、我が情慾を恣まゝにしようための口實としか受けとれぬ如き結果にさへなる（もつとも『花間鶯』の方で多少補正されてはゐるが）。お春については、鐵腸は新時代の教育を受けた活潑な獨立精神に富む女性を描く心算であつたといふ(三)、それはその心算であつたと覺しく、所謂深閨の處女とは違つてはきはきした、活潑な、舊時代の空氣や習慣に束縛されてゐないらしい女性が描かれてはゐるが、これも亦統一がなく徹底してゐない。若し實際かういふ女性だつたら、行衞不明の未婚の夫のことを思つてくよくよ　たり、見す見す叔父夫婦の奸謀の犧牲になつたりなどはしない、さうして國野に對する時だけは全く舊時代の娘めく態度に還る。第一の問題は、母の臨終の枕頭で未婚の夫を探して偕老の約を全くすると誓ひつゝ、既に幾ばくもなく國野を慕ふ心を起してゐることである。これは今も一寸暗示したが、國野と深谷を同一人にする腹案が最初からあり又讀者にも略ぼさう察せられるからいゝやうなものゝ、さもないと此の種の小說では一の致命的欠陷になる。且つ如何に新時代の女性にせよ、國野に初めて會つた時の馴れ馴れしさは何うであらう、今少し女性の見識といふものがある筈である。總體として、國野も拙いところがあるが、お春はなほ拙い、全然生きたところがなく、同情も牽かない。鐵腸は女性を描ける人ではないのであらう。

國野とお春の外は性格として論ずべき人物もないが、一言すれば、武田は國野と對照的に造り出された過激意見發表の機關で、この小說では勿論國野の引立役に强て設けられたものに違ないが、當時の政治界の風潮議論に武田の代表する如きものが可成り强く、人物にも武田宛然の性格のが多かつたらしく、その意味で割に素直に受けとられる。川岸は又武田と對照的に設けられた一性格で、武田の男性的に對し、女性的陰險な策士型である。それだけに世俗的知慧では國野や武田など及びもつかぬ。當時此の川岸が鐵腸の友人末松靑萍（謙澄）をモデルにしたものとの評が出て、末松が大に迷惑したことがあつたといふが、成る程これは末松以外に別に指す人なりタイプなりがあつたに違ひない。然し武田も川岸もむしろ『花間鶯』を舞臺とする人物であるから、『雪中梅』で論ずるのは、お門違ひかも知れない。監獄の中で脱獄話をする熊公なる人物もこの點で記憶して置くべきものである。似而非壯士の密偵須田某の言動は當時政治運動の裏面に動いた一種のタイプを穿つたものとして一寸面白い。

此等の政治的に活動する人物は、何れもプチブル知識階級の出であり、その描く世界もプチブル世界である。これは作者鐵腸の經驗の局限を語るものではあらうが、同時に當時の政界實狀でもあつた。たゞ國野は無產者出身らしく見えるが、然しお春との結婚によりプチブルヂョアジイの仲間入りをして志を遂げる點は、同じことである。政治的背景乃至場面については、前に述べたからこゝでは勿論繰返す必要はない。同じ背景で注意すべきは、箱根溫泉である。箱根は鐵腸が幾度も遊んで熟知してゐる土地であるだけに、この箱根の風景・乃至浴場の描寫だけは、皮相的だが實感が出てゐる。

> 湯本より早川の河流（ながれ）に沿ひ五町許り登りて塔の澤に達す此處も一の浴場にて許多の浴樓あり此處を行き過ぐれば七曲と呼ぶ峻坂あり愈よ登れば山高くして谷深く樹木鬱蒼として處々に飛瀑あり水聲錚々として溪間に鳴り風景の幽邃なる人をして行步の艱を忘れしむ行くこと一里餘にして太平臺に出れば一の村落にして許多の人家あり湯本近傍

の諸山は脚下に出沒し遠く數里の外に相模洋を望む海色鏡の如く白帆の往來歷々として數ふべし路傍大樹の下に一の茶店あり店前に井欄を据ゑ飛泉潺々として其の間に噴出す云々(下篇第一回、初版十八―十九頁)懸巖相對して屛風を立つるが如く其の深き幾百尋なるを知らず澗底樹木鬱蒼として其の下に水聲の洶湧たるを聞く一逕屈曲して巖角を繞り兩崖の狹き處に一の危橋を架し道を前山に通ず橋下水色藍の如く側らの巖石より熱泉を噴出し硫氣飛騰して烟霧をなす里人之れを大閤風呂と名く(中略)前面の峭壁上より數條の水簾を瀉下し轟々として雷の吼るが如く又一匹の白練を曳くに異ならず仰げば高山突兀として頭上に墮落し來らんとし幾條の小飛瀑あり碧樹の間に隱見す是れ箱根七湯の一なる底倉の實景なり云々(下篇第二回、初版二七―八頁)

表現形式がかういふ文句であるから、實感といつてもいふに足りないものであるにせよ、此の頃の小説にこれ程の實感さへ珍らしいとせねばなるまい。

　此の頃の新聞の評には又、この小説の文章なり描寫の法なりについての注文が一二見える。文章については、俗語を多く入れた珍しい文體といふ意味で賞めてゐる(四)、この俗語とは主として寫實的の會話の如きを指すのであるが、今日の眼からせば總體に蒼然と古色を帶びてゐるもの丶、かういふ評言を聞いて仔細に讀めば、歷史的には雅俗折衷體の先驅的文章の一つとも見られぬことはない。この小説の文章は主として繪入朝野に記者たる前田香雪の删潤を經たものといふが、香雪には何か文章上の積極的な工夫があつてこの小説にそれを施したか何うか。何れにしてもこの小説が文章上にも新味をもち、それが魅力の一つとなつてゐるといふだけで、こ丶では十分であらう。描寫の法については、省筆が多く、人物事件の印象がともすると朦朧となる恐れがある、といふ意味の批評が出てゐる(五)。これに對して鐵腸は三木愛花の「小説卮言」の語を借りて餘韻餘情の意味で答へてゐるが、これは今日からせば、批難者の言の方が當つてゐる。全體として、描寫が疎漏で、窮屈で、簡略だといふ欠點は確にある。本來この作はもつと大幅の作

にすべきを無理に縮めた感があるが、描寫の欠點や趣向上の無理などもその爲めと見られぬことはない。

今『雪中梅』の研究を終るに臨み、その總評として、鐵腸の政友尾崎行雄の評語と、當時新興文壇の總帥たる春のや朧の批評を引いて置く。春のや氏の批評の一節に曰ふ、——

「我が國終に「ヂスレイリ」を出さんとするか」とは遊人が「雪中梅」を讀終りて覺えず大呼したる言の葉なり脚色の意想の外に出たる文章の流暢にして且つ靈活なる近き著作中に見ざる所なり平生憂國の思想に富み眞に政事的の肺肝を有する鐵腸大人にあらざりせば爭でか綴り得て此極に至らん兼て文章を以て世に鳴りたる兼て政事家を以て名を知られし大人其人に耻ざるかな小說を以て居らんとする春のや朧をして讀ましめなば慚愧に堪へざる事多かるべし其旨高うして其趣深しまことに可憐なる小册子なるかな

此の評を今日から讀むと甚だしい過褒の感があるかも知れぬが、當時の讀者の多くは一度はかう感じたものであらう（その幾多の欠點あるは認めつゝも）。政治界の老將であるが小說には素人たる鐵腸が作つたといふ點に幾分の斟酌はしても、兎もかく心にもない世辭を並べたものではない。尾崎氏の語はこれに比すればやゝ直截である、——

此書の如きは novel の品類に屬すべき者にして意匠俊拔措辭奇警固より尋常小說家の企て及ぶ所に非ずと雖ども一言一行悉く根底を世間實在の事態に占め絕て空漠荒唐に涉る者なし蓋し政治小說中の最も時事に適切なる者乎

此の小說の寫實的なる點に價値を認め、この小說によつて始めて政治小說が novel の仲間入りをしたと見る尾崎氏の語は、流石に正鵠を得たものであらう。春のやの褒詞も考へて見ると、この小說が政治小說でありながらその小說哲學（卽ち『小說神髓』の寫實理論）を幾分でも體現してゐるのを喜ぶ餘り發したものとも受け取れる。

兎もあれ、『政治小說雪中梅』の特長はその寫實的な點にある。これが根本に於いて理想小說たるに論はないが、そのテ

クニクに於いて、(幼稚不完全不十分は勿論ながら)兎もかく寫實的であり、現實を踏まへてその理想を築き上げてゐる。その趣向に於いて寫實的、人物に於いて寫實的、背景に於いて、文體に於いて皆寫實の風を追ふてゐる。幾分理想化はあつても現實世界を離れてゐない。殊に注目すべきは、此の小說に於いて始めて、作者が自分一個の政治理想を何等の寓意的カムフラージュなしに明白に堂々と直截に語つてゐる點である。而かも十分の自信をもつて、實現を期してゐるかに見える。これは從來の政治的ロマンス乃至政治小說に嘗つて見ないところである。而かも時の政治界の風潮が幾分にせよこの作の主張に應じて動き始めた、この事實が又、この作の寫實的强味を裏書きする。要するに尾崎氏の語の如く、『雪中梅』は政治小說を架空の空想世界から現實世界にもち來した。有體にいへば、小說を近代小說らしくしたことは、獨り『雪中梅』の功だとはいへない、事實先驅的作品の一系列がある[六]。だが『雪中梅』に至つてそれが明確動かざる特色となつた。この意味で、政治小說は『雪中梅』と共に小說の仲間入りをしたと言つても、過言ではない。以上から結論して、『雪中梅』はその小說として數多の幼稚、拙劣、凡庸、不自然な瑕疵をもつてゐても、政治小說の發展からは劃期的のものたるや、疑はない。政治小說發展の歷史を、『雪中梅』以前と『雪中梅』以後とに區劃するに足る程顯著な位地を與へられて可いことは、推察されるであらう。

『二十三年未來記』に擬して『二十三年後未來記』を書いた末廣政憲は、『雪中梅』の流行を奇貨とし、問題の『雪中梅』なる剽竊本を出版したので(二十年二月)訴訟となつて、處罰された。この僞版については後に述ることにする。又、二十年四月大阪角ノ芝居で、竹柴諺藏の脚色で『雪中梅』を演劇化し、左團次一座がこれを上演し、大當りを取つたといふ、同十一月上京し、本鄉春木座で上演しようとしたが、差止めとなつた、理由は劇中の人物武田の言動が不可といふにあつたが、總體として當時政治界が可成り激化し、例の三大請願事件から保安條例といふ朝野の正面衝突となる直前であつたからでもあらう。

次に續篇『花間鶯』に移ることにする。

『政治小說花 間 鶯』

『花間鶯』が始めから『雪中梅』の續篇として立案されてゐたことは、『雪中梅』下篇の末尾に――

此の二人の前途に就て尙ほ許多の談話あり才士美人の國事に奔走する模様を知らんと欲せば請ふ花鶯間を讀め

とあるのでも分かる。だから『雪中梅』を書き終つて間もなくこの方に着手したらしく、二十年一月にはもう上篇を起草して居る、中篇は一寸遲れて七八月の交の成稿であらう。下篇は更に遲れて二十一年一月頃箱根で書き上げられた。何れもその序や詩集によつて略ぼ推定される。『雪中梅』に一倍する長篇であるが、多忙の鐵腸として割に早く脫稿したのは、世間の大喝釆と差し迫つた洋行の必要から多分急いだものであらう。

梗概に移る前に人物に對する概念を記して對照に便にしたい。もつとも『雪中梅』から引續きの人物はそのまゝ名だけ擧げて置いて、新加の人物をほんの印だけ說明することにする。

國野　基

富永お春

川岸萍水

此の篇ではいよいよ保守黨の首領に轉じ、政府に身賣す。」

武田　猛

此の篇では武田、最も活躍す、秘密社會黨をつくり、遂に上海へ亡命。

松田　擊

秋野鶴次郎

國野の親友で且つその片腕たる人物

山下お勇

女流社會革命家、武田猛と頗る意氣投合す。

春田嚶鳴

維新の功臣にして、明治後民間に實業を試み、巨萬の財を提げて政治界に復歸せんとしつゝあり。國野に共鳴す。

隈川、稻田、澁木。皆春田の知己にして在野の貴顯諸君。

在朝貴顯二三、姓名を出さず。

金尾惟取

川岸の片棒をかつぐ士族上りの御用商人。利權屋。

八藏

『雪中梅』に出る脫獄囚熊公のこと、武田の爲めに大に盡す、且その說に感化されて秘密黨を作つて大に爲すあらんとす。

話頭は『雪中梅』に直に續く。

國野基、富永お春の二人は、お春の叔父夫婦や川岸、松田等の陰謀に打ち勝つて結婚する。國野はその披露の宴を上野の精養軒に張り、わざと民間錚々たる政客を招いて、この宴を利用して民間有志の大同團結を計らうとする。川岸はこの時既に政府に近づいて居り、且つ國野夫婦に反感をもつてゐるので、結黨には反對する、國野はこれを駁し

て堂々所見を述べるが、十分の成功を得ない。又武田初め過激黨はこの席には出て來ない。こゝで却つて將來民間が三黨——自由、保守、過激——に分立する芽萠が作られる。武田は箱根で知己になつた島田某と共に某の故鄕へ遊說に出かけるが、言動の過激粗暴な爲め投獄される。彼はこれを不法として脫出し、憤激の餘り愈々下層勞働者を煽動して社會黨を作る決心をする。さうして暮夜國野を訪ふて助けを求めるが、國野は主義を異にするからとて、助けを與へない上、脫獄の不心得を諭す。お春は夫の心を察し、自分の意志でした如く、武田に金品を贈るので、武田は感激して去る。これより武田はいはゆる潛行運動を試み、過激な革命社會主義を說いて各地に同志を集めるが、福島栃木地方の勞役階級に殊に共鳴者を得る。だが早くも官の嗅つけるところとなり、國事犯として捕はれの身となる。この時禍が又も國野に及ばんとするが、國野自身の言動が如何にも公明正大であるのと夫人お春の誠心とで、無事免れる。武田の方も、俠女お勇や八藏、虎松等の連中の協力で護送巡査の手から脫走し、お勇共々一時東京に潛伏するが、危險になるので、折柄見た新聞で國野夫妻の歸省を知つたのを幸ひ、國野夫妻に化けて京阪地方に走り、再び京阪尾濃の地方に過激主義を宣傳する。（だが遂に事成らず武田は上海へ亡命することになる）。國野夫婦は、讃州高松に歸省して國野の父母を見舞ふが、これを機に、地方から先づその大同主義の實現に着手し、大に鄕土人の信用を得る。歸途京阪を振り出しに東海道を遊說し、その大同主義及び經濟國策を提唱したが、多大の同志をかち得た。一時は武田と誤られた爲め、又川岸の奸計の爲め、危險な目にあふが、その度毎に却つて國野夫妻の人氣を高める。川岸はこの頃はその野心家の特色を十分發揮し、金尾惟取の紹介で在朝の某大臣に取り入り、機關新聞を買收して保守黨糾合にかゝり、あくまで國野に對抗しようとする。然かも公然の政府黨といふのではなく、飽くまでも民間黨であるかの如く裝ふ。かくて、漸く民間黨の分野三分の形態が明瞭になる。此の間、國權恢復問題、國會準備のための言論集會出版の自由を請願する事件等が機會となり、廟堂の不一致暴露と共に俄然民間黨が活氣づいたが、民間黨の條理ある

要求も、感情のもつれから官の絶對反對を招き、上下軋轢激昂の極遂に政府側で斷乎クーデターを試み、民間闘士數百名を追放する(國野は免れるが秋野は米國へ追はれる)。川岸はこの間、或は配下をして民間黨を探偵せしめ、或は政府に威迫的態度を示しなどして、自家の地歩を大に好轉させ、得意の絶頂に立つ。國野はかゝる衝突を豫想したので、頻りに官民調和論、大同團結論を唱へたが、幾分大衆の失望を買つただけで、遂に衝突を避けさせるには至らなかつた。だがその行動の至誠が朝野の識者貴紳を動かし、野に於いて春田嚶鳴の如き味方を得たのみならず殊に在朝の貴顯某大臣は特に國野を引いて、クーデターの善後策、官民調和の方途を聞く。國野はその第一の急務として、官民合同の憲法諮問會議を開き、民間人士の疑懼の根本を一掃せよと勸める。かくて幸ひこの説が納れられた上、尖鋭化した民間黨の暴動計畫も國野の力で鎭撫されて政局小康を得る。かくて目出度く憲法發布となり、國事犯は大赦される。これより先き國野は大に仕官を勸められるが、輿論を指導して政黨内閣の實現を期してゐる彼は、斷然辭して應じない。いよいよ第一會の總選擧となるが、國野の牛耳をとる自由黨が壓倒的大多數を得、國野は勇んで春田嚶鳴等の上院に於ける同志の士と共に國政改革の理想を實現しようとする。

これが『花間鶯』の梗概である。

以上の梗概は原作に可成り忠實なものであるが、これを讀んで一寸感じられるのは、『花間鶯』には、『雪中梅』で豫想されたやうに、國野の政治理想が十分に展開され具現されてゐないやうに見えることである。事實、政治理想の點でいへば、『雪中梅』で示されたものが、十分順序よく『花間鶯』で展開されるべくして、十分にはされてゐない。豫想からいふと、『花間鶯』では、『雪中梅』で意圖されたものを繼いで、完全なる國會の實現する道程を示すのが第一の主旨でなくてはならぬ。從つて、實現した國會の完全なりや否やを證明する意味で、國會そのものゝ理想的活動なる

ものを十二分に描破して示すべきであつた。さもないと、『二十三年未來記』以來一貫して來た政治理想の團圓とはならぬわけである。『雪中梅』と『花間鶯』とは正續といひ條、抑も頭初から同一プランを描くことに腹案の定まつてゐたものである。

元來此二書の趣工と申すものは二三の有志者が許多の艱苦を凌いで國會の開設に盡力し遂に輿論を引起して世間の有様を一變し順序を追ふて政事社會の進歩を致し民間に勢力ある政黨を現出して政府も十分に百般の準備を整へ廿三年に至り古今に卓出する國會の設立あることを書き出す積りでありますが云々(七)

ところが、今『花間鶯』の内容を通覽すると、筆は總選擧の勝利で絶たれ、國會議場に於ける自由黨諸名士の活躍はたゞ想像に任されてある。勿論大體からいつて、『花間鶯』が『雪中梅』の政治理想を展開してゐないとはいはない、確に展開してはゐる、然し作者の腹案乃至讀者の豫期してゐたとは、可成り違つたものとなつたことが、以上の梗概と引用した鐵腸の語とを比較して考へても分る。かゝる相違は一體何によるものであらうか。

それはつまり、作者がこの作を書いてゐる中に、一種のヂレンマに落ちたので、かうなるより仕方がなかつたのである。諄いやうだが、今一度繰返していふと、『二十三年未來記』や『雪中梅』の調子を追ふて來ると、此の篇では完全な國會に立ち至る道程から、完全な國會なるものを想像で描寫しなくてはならぬ。ところが、かういふ想像的描寫を效果的に生かすには、對象の實現まで相當長い時間的餘裕がなければならぬ。然るに今や國會は三年後に迫つてゐるので、かゝる描寫を有效に首肯させるだけの時間的餘裕がない。

小說は元來空中樓閣でありますから勝手次第に趣工を立てることが出來る樣なものゝ讀者に感動を與へやうと思へば實際の人情世態に背馳せぬ樣に注意せねばなりませんソコデ一度紙上に現れたる一書生が社會に名望を得て貴重なる政事家となる迄は是非とも許多の經驗を積み許多の世故に出逢はねばなりません之と同樣で今まで四分五裂に

開きたる地方の有志家が僅か三月か半年の間に能く秩序の立つた政黨を組織することは餘り事實に違ひますから書かれません其上に政黨が旨く出來て夫れから憲法上や政事上の取調べをしてサア何時國會が出來ても善いと云ふ樣になるまでの有樣を描き出すには紙の上でも餘程時間が掛ります又一方を顧みますればナンボ賢明なる御役人の淵叢と云はれる政府でも一二月の間に憲法を定め法律を改めて少しも遺憾の無いと云ふは事實に於て有るべからざることなれば是も亦順序を立てゝ進歩の有樣を書かねばなりません。[八]

要するに、時間不足の爲め、この小說で國會の準備の出來ることを示すのは、甚だ無理といはなければならぬ。然るに今一つのヂレンマは以上の引用文の初頭にも一寸見えてゐる如く、寫實尊重の精神である。小說で「讀者に感動を與へやうと思へば實際の人情世態に背馳せぬ樣に」注意せねばならぬといふ。これは明白に坪內逍遙の『小說神髓』の影響の一つと見て可いと思ふが、この覺醒があるために益々如上の政治的理想の想像的描寫にすることが出來ぬ上、現實尊重といふことになれば、先づ時の政局の動靜によつて趣向を立てゝ行くより外に仕方がない。然らば此の時の政局の動靜は如何。

明治十九年の末に及んで民間大同運動が成りかけたのは既記の通りである。ところが二十年に入つて政況の進展は急になつた。今詳しく述る餘裕はこゝにはないが、「政治小說發展の背景」及び鐵腸傳の記事を撮要して繰返すと、十七八年來政府の採つて來た歐化政策の弊が漸く露骨になつて來たので、朝野の反感憂慮を招くこと大方ではなかつたが、その歐化政策を辯護する唯一の口實だつた條約改正問題から、內閣に意外の紛議が生じ、又諸外國も容易に改正を諾しないので、遂に談判中止といふ不成功の結果となつた。そこで數年間抑壓に屏息してゐた民間政治運動がこの問題を中心に俄然活潑の度を加へ、地租輕減と三自由（言論集會請願）を兩翼にして、猛然として起ち、政治史上空前の建白流行時代、壯士橫行時代を現出した。丁度動きかけてゐた民間志士合同運動はこの氣勢に大に力を得たこ

とはいふまでもない、だが大同運動がこのために聊か横逸れした觀があつたのは注意すべきである。これは鐵腸等の主張して漸く實現されかけて來た方のは、主義上の民間大同を主眼としたものであるが、今此の時出來たのは、事件乃至問題を有利に解決するを目的とした全然方便的なものであつたからだ。だが兎もかく民間有志は一致して此の國家的大問題を取り上げ、政府に對する一大反對運動を起した。殊に先に立つて働いたのは舊自由黨の志士壯士であつた。彼等は何故に先頭に立つて働いたか、勿論彼等の純眞な憂國心を疑ふわけにはいかぬが、彼等の熱心に働いた裏面にはこの反對運動を利用して舊自由黨を再興し、自由黨をもつて民間黨の中心にして萬一の政變に乃至來るべき國會に備へようといふ策動のあつたことも首肯される。かくて最初條約改正失敗を口實として起つた運動が、次第に全面的な政治運動化し、政府破壞陰謀化して來たので、所謂官民の軋轢が深刻になつて來た。民間有志の運動手段も運動會、懇談會の如きものから潛行的になり秘密會合、秘密出版等の流行となつた。政府も亦常套手段たる彈壓と密偵政策買收政策で對抗した。鐵腸等はその所謂中正的見地から、官民の軋轢が漸次秘密革命的色彩を帶びて來るのを見て憂慮に堪へず、官民共に一歩讓つて破裂を未前に防ぐべしといふ意見を持し、その實現のため自ら廟堂の貴顯大臣に會つて議論を上下し、公議輿論を容れて先づ官民合同の憲法諸問會議を開き、これによつて民間派の緩和を試むべきを說いたと信ぜられるが、大に大臣の心を得たとしても[九]、必至の勢ひを回避させる力はなく、彼自身却つて民間派から疑問視され、因循姑息視されて人望を損じたのみ。かくて遂に二十年十二月の保安條例といふクーデターとなつた。

　政局の進展がかく意外な方面に及び、極めて重大な狀態を現すにつれて、鐵腸の『花間鶯』の腹案は動かざるを得なかつた。殊に寫實尊重の意識からも亦政治小說としての本篇からも、現實の政局の動きに即したものとならざるを得ない。かくて完全な國會を描く筈が、政局の變轉に引摺られて、遂に現實の描寫に興味をもち、保安條例前の官民の軋轢を寫し、これを批評し諷刺して將來を戒め、同時にその善後の計を暗示する方に力の大部分を割くことになつ

たのである。從つて現實を寫すことが多ければ多い程、『雪中梅』で豫想とは遠くなるわけであるが、以上の如き事情があるからは、此の點をさう咎むべきではない。『花間鶯』の政治理想が、『二十三年未來記』及び『雪中梅』のそれの直接の展開としては不徹底な不統一な點があるのは何故か、これで大體分つたことゝ思ふ。

それはそれとして『花間鶯』の政治的イデオロギイを改めて見てみよう。此の小說の政治的イデオロギイは綜合せば主張と警告と暴露の三つになる、この點は『雪中梅』の政治的分子も同じことである。たゞ『雪中梅』にあつては、主張の分子が壓倒的に強く、『花間鶯』では警告と暴露が、壓倒的とまで行かぬまでも大に强調されてゐる。そこにこの二小說の主眼の相違があることを示す。次には主張を主として述べて警告や暴露はやゝ略にしてあるが、讀後の印象の强さは反對なのである。

先づ第一の主張は、國野の言動を中心として示されてゐる政治論で、勿論鐵腸本來の理想を宣傳したものと見て可く、『雪中梅』とも直接思想的連絡をもつ。その中でも上篇第二回の準備政黨團結論が最も顯著なものである。上野精養軒の披露宴兼同志結束會で、國野の同志秋野島田等の政黨團結論に對し川岸萍水は反對する。反對の理由は、歐洲と違つて日本では政黨はまだ社會の要求に合せぬ、(その證據には衰滅してしまつた)、强ひて政黨を作るとせば、何れ改進主義のものでなくてはなるまい、改進主義は保守主義に對するものであるが、それはな頑冥な保守老人に反抗するものか、前者なら、わざわざ政黨團結までして當る要はない、後者なら、明治政府は可成り急進主義であるから、これに反抗しては却つて保守主義と見られるであらう。且つ國會準備を立黨の目的とする以上は、國會の實際に就て精密な定說なり主義なりをもたなくてはならぬ、卽ち憲法とか、君主の特權とか、一院と二院の利弊とか、選擧規則、議員の資格、乃至財政、軍務、教員についても同志の主義を確定しなければならぬ、漠然たる大同說では此の時人心

の結合は出來ぬ云々、これが川岸が反對する理由の大要である。國野はこれを駁して、次のやうに主張する。(上、第二回、初版四四頁—五五頁)

(一〇)

抑も物は必要から出る、政黨も然り、政黨の存在は社會の進運が必要としたからである。從つて社會の必要に應じなくてはならぬ以上、その當時は利益に一致し輿論に合するものが善良な政黨といふべきである。政黨は元來この大主義の一致する人々より成るもので、憲法上の細かな問題までも一致することを要しない。殊に國會準備政黨に於いては尙ほ更である。

一方に政府と云ふ結合體がありて國家の權力を掌握せらるゝからには一方に民間の政事思想を抱くものを組織し、强大なる輿論を造り出して政府を刺衝し民意のある所に從ふて政事の方向を左右せしめ漸次に政黨內閣を設くるの準備を爲すは今日の一大急務では御座いませんか(上、第二回四六頁)

明治政府が大體よりして改進的(つまりブルヂョアジイの支配的努力に向つて)であることはいふまでもない、然し自由主義を眞に愛する人々からせば、改良を要するところが更に多い。例へば言論集會の如き、地方人民の智識程度からせば多少の制限を要するものがあるから、一切人民の自由に放任せよといふのは過激に失するかも知れぬが、國民の政事思想を刺激し自由政治を行はうとするには、今少し現在の制限を寛大にする必要がある。又地方制度の如きも、府縣會を純然たる地方の立法府とし、町村の自治を許し戸長を人民の總代と爲し、部區長を人民の公選にするといふところまで改正したい。司法事務については、この上一層裁判官の獨立を望みたい。政府の歲入は巨額ではないが、人民の生活程度を考へれば多少減額しなくてはなるまい。商工業の發達に保護主義を取るのは可いとして、或る一部の人々にのみ利益を與へて社會自然の發達を妨碍するやうな形跡もありはせぬか。最も肝心のことは、國會開設の際、政府は如何なる主義によつて憲法を頒布するか、それは分からないが、歐洲諸國の歷史に徵するも、憲法が政

府の手から出たものと人民の手に成つたものとは自然その性質を異にするのは事實であるから、社會に强大の輿論が なければ人民の幸福を增加することは出來まいではないか。以上によつて政府が改進的方針をとつてゐればとて、國家の主義のあるところを天下に表白して改進黨（自由主義政黨）也と斷言して少しも差支へはない。然し自分達は、憲法、政略その他具體的問題について一定の目途を立てゝ、新に同志を天下に求めようといふのではない、元來自分達の見る如くば、自由主義者は天下に充滿してゐるのだが、種々の故障があり事情があり、感情問題があつて、結合團結しない、それで輿論といふものも微弱で勢力を政事上に及ぼすことは出來ないのである。從つて今日の勢ひは我から進んで輿論を造り出さうと努力する必要はない、全國多數の一致する所に從つて活動すれば自然に努力の强大なる政黨となり十分に國會開設の準備を整へ政事上の改革を成就することが出來やうと思ふ。それで此の目的を達するに如何なる手段を用ふるかといふと、——

是れとても太だ容易なことにて新聞雜誌を以て全國の輿論を發表し學者實際家を集めて政社を組織し憲法政略上の疑問を調査して之を實地に施行するの用意を爲し同志を四方に派出して大に民間の政事思想を鼓動する時は天下雲の如く集り風の如く起り我々の自由主義を政事上に貫徹するは決して困難の事業ではありません云々（上、初版第二回五二頁）

談何ぞ容易なるといひたいが、國野の論は、自由主義の大勢を利用して大同團結し、國會準備政黨を造つて政府に對しようといふのであるから、かうも云へるのである。以上の大體は、鐵腸の政治的イデオロギイを論じた際に言及した準備政黨の論と略ぼ同じことである、たゞこの小說に於いてはその實行方法に及んでゐるだけ、具體的實際的になつたといひ得る。

上篇の第二回と相表裏して國野の主張を補つてゐるものは、中篇第四回、國野が政府へ仕官せよといふ知人高官某

の勸告を却けるところである。高官某は貴顯〇〇氏の旨を含んで、廟堂の改革を機に國野に仕官せよと說く。政治改革を廟堂よりせよといふのである。某氏の勸告は、「今度の改革では餘程政府の組織が變る上に愈々〇〇君の意見が行はるれば第一に國權を恢復して我國の利益になる樣に條約を改正することが出來る計りで無く國民にも成るべく自由を與へて國會設立の準備を整へる筈であるから君も政府に入つて平生の持論を實地に行ふが善い」(初版、六一頁)といふのである。成る程一應道理ではあり、政府自ら改進的に立ち直つた際はこれを利用する方が効果的と思ふが、國野は又國野で、民衆の前途に多少の見込みをもつてゐる、それで、仕官の勸告を辭退して、輿論政治、政黨內閣を達成せんが爲めに、依然民間にあつて大同運動を續ける。國野の考へるところを綴合すると大體かうなる。(初版、六二—六四頁)

今日廟堂の君子達は學問もあれば經驗もあり世間に卓出した政事家に相違あるまいが政府の組織が是れまでの通りでは一國の大臣が人民に對して責任を負はぬから輿論の風潮によつて政治の方向を定めることが無く廟堂の交迭と云ふたとて止だ甲の權力を乙の手に移す位のことで眞成の改革は出來難い樣に思はれる(中略)政府の組織がサツパリと變つて仕舞ひ政治の方向が輿論に從ふて動く樣にならねば誰れが出て政權を執つた所が結果は大同小異で格別面白いこともあるまい(中略)今日の樣に輿論の勢力が微弱ではどんな憲法が立つても政府を刺衝して國家の幸福を維持することは出來ないから君達が愚と云はうが迂濶と云はうが僕は地方の結合から手を下だし輿論の力で政黨內閣を造り出して見せる積りヂヤ云々。(中、初、第四回六二頁)

即ち地方を結束して輿論を強め、輿論政治の端緒を造らうとするもので、丁度上篇の主張と相表裏する。さうして此の地方結束を具現して示したのは、中篇第七回以下の歸省、鄕黨結合、歷途遊說の一段である。

なほ輿論政治を別の意味で高唱したものに下篇第八回がある。これは普通の抽象的理想論といふよりも聊か格別な

意味があるので、つまり保安條例の善後策として官民兩者に對して公議輿論による政治を新に眞劍に强調したものであり、その點で抽象論の場合には見られない熱烈な論調を出してゐる。これは、前述の如く官民衝突の前、かゝる結果になることを憂へた鐵腸が、密々某貴顯と會つて輿論政治の議論を交した、恐らくその大要を直寫したものかと見える。國野によれば、輿論とは中等社會の意見を指すものであるが、それは、何れの國でも人民の意志を代表するのは中等社會の人で、教育もなく智識もない下等社會の人民は政治上に關係ないからといふのである。固より輿論も一時の風潮に支配されて社會の利益に合はぬことがある。然し政治家は中等社會の感情に背馳して政治をなすことを得ない。從つて政治家は輿論に服從出來ぬときは自分で輿論を誘導して自分の政略を賛成させるやうにしなくてはならぬ。さてこゝに有力な異論が生ずるが、それは國會の無い國では輿論の知りやうがないといふのである。國民が選擧した代議士が一堂に會して多數の意見が一致したのなら、初めて輿論といへるが、政治家が輿論といふべきはこの外にない。無智な人民の献言書や新聞記者の意見だけでは輿論といへない、輿論を知る爲めにこそ國會が必要なのだといふのである。いかにも一應の道理はあつて、國會がなければ機械的に輿論を測量することは出來ないが、然しさうと限れば專制國專制時代には輿論がないことになる。手近い例は、舊幕府は輿論に背いて倒れたもの、明治政府は輿論に從つて起つたものではないか。何れの時代でも如何なる國でも政治上の問題について大體の輿論が成り立つことは可能である。可能である以上、政治の目標としてこれを採ることも當然であらう。そこで此の度の官民衝突は政府と輿論の背馳したのが原因であるから、善後策は先づ輿論を容れてこれと調和することを條件としたものでなければならぬ。先きのクーデターを猛とせば、寛猛相濟の常道によつて、寛を手段としなくてはならぬ。かくて國野は輿論政治を實地に示す第一着として、憲法制定會議を開いて、多數人民を安心せしめ政府に對する疑惑（果して國會を開くべきか云々）を一掃することを勸告する。然し固より憲法の欽定なることを天下に示した以上、今更國約には出來

ないから、政府と民間から適當の人物を選び、全く陛下の諸問會の性質にて召集せば可い、かくすれば欽定の主意に背かぬ上、萬機公論に決すといふ輿論政治の現れともなる。卽ち民論參酌によつて人民に安堵せしむる上、別に人民をして國會の準備を稽古せしめる利益がある。若しこのまゝ官民の軋轢を續けては、日本は專制國になるか無政府國になるか、何れにしても將來寒心すべきものとならう、これを救ふ唯一の道は輿論政治の實行あるのみ云々、これが國野の意見の大要であるが、吾等はこゝに鐵腸の輿論主義の一段の發展を見るのである。

主張に就いては大體述べ終つたので、警告に移ることにする。

國野が主張の部分の中心となつてゐる如く、警告の部分は武田猛が中心となつてゐる。武田の過激な言動を國野に批評せしめ、忠告せしめて、自家の立場を明らかにする一方、かゝる過激な言動の生ずる氣持なり、言動なり、その社會に於ける現れなりを描いて爲政者に諷諭することを忘れない。警告といふも、結局一面は主張である。鐵腸の政治的イデオロギイの一つに中正主義があつたが、この警告の一面は卽ちこれの主張である。この作に於いてもこの主義が次の一節で明白に繰返されてゐる。

國野基は眞成の輿論にあらざれば政治を改革して國家を維持すべからず壓制主義と革命主義とは均しく國家の大害物なりとて堅く其說を執り有志家に向ふては法律外の擧動をなして自ら失敗することを戒め政府に對しては民心の歸向する所を察して早く斷然の政略を行ひ多數を滿足せしむべきことを勸め演說新聞は云ふ迄もなく許多の小册子を發行して其の中正の主義を主張せしが云々（下篇、初、第六回八一頁）

此の中正主義が發して或は腕力革命主義不贊成となり、壓制政治反對となることは、前々にも暗示してあるが、この作の警告のところでは、具體的の例に托し描寫を主として論じてゐるので、讀者には抽象的議論よりも更に切實な印象を與へる。殊に鐵腸當時の讀者には一層さうであつたらうと思ふ。

武田猛の心事乃至その過激主義讃美は、既に『雪中梅』の數箇所に於いて說かれてゐる。(上篇第三回、下篇第二回等)。國野がイデオロギイ的には鐵腸の分身である如く、武田は、舊自由黨左翼乃至それに近い思想を代表する(必ずしも青年自由黨と結合させる必要はないが)。即ち空想的な自由平等哲學に心醉した擧句、過激手段で國政改革の捷徑をとらうとするのが、武田の理想で、これは武田の言動の隨所に現れてゐる。その當面の實行手段としては、天下を周遊して秘密黨を組織し、「歐州諸國の虛無黨や社會黨に」倣つて非合法的潜行的に政治運動に熱心し、自由平等の理想を實現しようといふのであるが、それには下等社會に不平の渦卷いてゐるのを煽動利用し、主としてそこに同志を求める。さもなくとも、この頃は積年の不景氣と稅額の過重から貧富の不平均が漸く甚だしくなつて來たので、下等社會自身何となく騷しく、所謂亂を思ふ狀態にあつたのである、而かも歐化政策による上流社會の似而非文化生活は、下等社會のかゝる感情を刺激するのみである。これに乘じて、巧みに爲政者及び上流社會に對する反感を煽り――

> 諸君孰れの國にても上等社會に立つものは皆な此の通りで有ります第一は土地を占有し第二は資本を占有し第三は權力を占有して他の人民を擯斥しますから我々は何程勉强しても一生愉快なる地位を得ることは出來ません何と不都合千萬なる世の中の仕組ではありませんか夫れ故に歐羅巴などでは社會黨と云ひ財產共有黨と云ふ有志家がありまして一國の土地資本權力を世間一統に分配する說を主張しまして云々(上篇、初、第五回八九頁)

といふ風に平等哲學を持ち込まれると、下等社會は待設けたものゝやうに忽ち贊成し雷同する。煽動が團結となり、やがて實行となるのは當然である。而して又爲政者の政策を秘密にする態度と民意無視、民間有志家に對する不法な壓迫とは、爲政家自身に對する不信猜疑と反映し、民間感情を刺激して官民軋轢の端を繁くする。この兩者が相俟つて一種の暴動による社會變革を目論む危險が發生する。かくては國家安危の大問題である。鐵腸即ち國野が憂慮するのは全くこゝにあるので、彼の中正主義が發して警告となるのはこの所以である。國野の武田に對する言にいふ、(上

篇、初、第三回六六―七頁）

人々が法律を破つて勝手氣儘の事をなす樣ではドウシテ自由幸福の天地を造り出すことが出來るものか近來有志家を以て自ら任じながら時々凶暴の擧動を爲して國法の罪人となるを顧みざる者のあるは如何にも歎息至極のことではないか此の人々も自身では大功を爲す者は細瑾を顧みずと云ふ見識で國家を改良するの目的さへ失はねばドンナ手段に依賴しても苦しうないと云ふ決心かは知らぬが士君子の身を以て强盜を行ふたり破牢を企つる樣ではトテモ天下の大事を成就することの出來る氣遣は無い別して智識のある中等社會に向ふて賛成同意を求むるの謀を爲さず無智無學の下等人民を煽動して社會の秩序を變亂することは最も國家の不幸であるから僕は決して賛成致さぬ

表面は國野の武田に對する言とはいふものゝ、事實は敵本的に諷するところがあるのだから、鐵腸の筆は却々鋭い。下篇第九回、國野が芝山内で秘密黨の暴發を諭す段に至つては、鐵腸は一層明瞭に排暴力革命主義を强調してゐる。（一三三頁）

國野基は今の政府と反對の地位に立つものであるがドコ迄も正義公道に基き輿論の勢力によつて社會を改良する積りである暴力を頼んで法律を犯すものは取りも直さず正義公道の敵であるから國野基も力を盡して抵抗せねばならぬぞ元來貴樣達の樣な治安を妨害するものがあるから法律が次第に嚴峻になつて良民にまで迷惑を及ぼすのである改進自由の説を主張する國野基が政府に立つた時でも暴力の支配は受けぬ一揆暴動は法律を以て制止する外はあるまい云々

これは鐵腸のイデオロギイから考へて、假託ではない、正にその本音でなければならぬ。

鐵腸は又同時に時の爲政者に對しても、同樣な立場から隨處で警告の意を示してゐる。蓋し鐵腸の意を忖度するに、人民の潛に亂を思ふのも惡いが、亂を思はしめる一半の責は政府にもある。政府は第一輿論といふものを政治に入れ

て吳れない。何事につけて秘密主義一點張りで、その政策なり政綱なりを人民に知らしめない、依然として「民は依らしむ可し知らしむ可からず」の封建流である。例へば憲法制定の事業は萬人の渇想して知らんとするところであるが、制定事業の進度は知られない。草案の內容も知られてゐない。（此の憲法制定の事業が、いかに時人注目の的となつてゐたかといふことは、中篇第十一回に於ける秋野より國野への內報も、又同第八回の、名古屋に於ける武田の演說等を見ても知られる）。國會開設が間近くなつてゐるのに政府は誠心誠意その準備をしてゐるやうには思へない。條約改正とても然り、如何なる內容で、何の程度まで進行してゐるか一向不案內である。人民の猜疑不安は政府のかかる態度の反映である。又、明治十三四年以降、連年の不景氣で人民の困窮が甚だしいのに、政府は民の富に不相應な稅を取り立て、一向人民の困窮怨嗟を顧みない。これは國力發展の途上にある新興日本として止むを得ないことではあつたのだらうが、然し及ぶ限り稅を減じて民力を休養せしめる必要がある。この不景氣から民心が荒んで來てゐる事實は上篇第四、五回兩回を讀んだゞけでも知られるが、かゝる事實を鐵腸は隨所に描寫してゐる。いはゞ一種の實物警告を續けてゐる。更に民間有志の最も必要とするものは、ある程度までの自由である、言論集會出版の自由が欲しいのである。來るべき國會を完備せしめるには、今から幾分でもこれ等の「自由」を許して貰はなくてはならぬ云々。

鐵腸は、過激主義の活動を全體的には不成功に終らしめる一方、爲政者にも讓る可きは讓るやう、描寫に托し趣向に示してそれとなく警告を發した。卽ち鐵腸からせば、自家の中正主義に官民とも屈せしめるといふ勘定だが、この點では警告が、實に明白な主張となつてゐる。

さて第三に暴露の問題であるが、こゝでは自由黨から裏切つて保守黨を造つた才物川岸萍水が中心にされてゐる。『雪中梅』の暴露分子も大體川岸が中心になつてゐたが、然し『雪中梅』の川岸は兎も角國野の同志であつて正義社

の領袖である。然るに『花間鶯』に於いては明白に賣節によつて保守黨を造り、國野等正黨の人々と對立し、闇中に策動してゐる。此の人の行状が暴露の中心となるのである。元來暴露といふことはたゞそれだけでは何等のイデオロギイも持たぬものであるが、暴露者の態度を明白にすることによつて、それが間接消極的な攻撃武器となり得る。『花間鶯』に於ける鐵腸の態度の如きが、卽ちそれである。

此の小説中に於ける暴露描寫の目的は何處にあるかといふと、これは先づ民間有志が政府黨に賣節する動機と經路を如實に示すにある。次に政府側の秘密政策探偵政策が如何に政治を毒するか、國民の政治的進歩を妨げるかを示すにある。さうしてこれが共に表面的であるが相當有効に描寫されてゐる。川岸は元來有力な民間鬪士であつたので、決して初めから政府黨を志してゐた譯ではない、それが何故に政府黨に身賣するに至つたかといふと(金(マネー))の一語で盡きる。彼は物慾が強く素行が修らず、その結果經濟的に生活が破綻を示して來たので、心ならずも轉向をしたのであらう。然しその結果として政府の非進歩的イデオロギイを強化して反動化せしめたのは民黨の有志として許すべからざる罪惡である。(國野との對立は原因でなく結果である)。上篇第六回、川岸が金尾惟取を使つて政府貴顯に取入る心算のところ、同第七回、金尾別邸の貴顯招待宴の席で打ち開けた秘計——卽ち表面民黨らしくして裏面で政府に結ぶ方が有効といふ駈引、下篇第二回川岸が政府に對して居直りの威嚇を試みるところ、下篇第五回政府の手ぬるさを諷し、志士追放令を暗示して民黨の打潰しを計るところ、正に政界裏面の醜實情を曲盡した趣きがある。これは作者鐵腸の多年の見聞と經驗の致すところで、尋常駈け出しの作家に出來る藝ではない。又所々に挿んである政府高官の虚勢的壯語が讀者に却つて政府自身の不安を暗示してゐるのも、老練な行き方である。

此の作の暴露の調子は『雪中梅』に比して強い、單に理窟ではなく、何處やら感情的なところがある。これは恐らく一川岸に對し、乃至川岸の原型たる某々人士に對する感情のみではない、無意識的にであらうが、政界の醜狀一般

に對するインテリゲンチヤの反感を示すものであらう。今迄自家の進出に有利の地歩を占めるためにインテリゲンチヤを敢て利用した新興ブルヂョアジイの一派が、一旦利によつて政府に結ぶやインテリゲンチヤを裏切つた上、却つてその或る者を買收してインテリゲンチヤの逆襲に備へたといふ事實を憤る氣持が作者の心の何處かを去らずにゐるものに違ひない。新興ブルヂョアジイたる金尾の生活を描寫するときに、殊にこの反感が強く出てゐるのは、その爲めであらう。(然し鐵腸の意識せる政治理想が廣義のブルヂョア改進主義であることに變りはない。)それから今一つ感じられることは、この暴露に伴ふ寫實精神の現れである。眞の暴露は當然寫實精神から出てゐるべきものであるが『花間鶯』の暴露は幾分にせよ正しくこの精神を示してゐるのは注目される。川岸の扱ひ方を見ても分かるが、多少の批判こそしてゐれ、彼をもつて徹底的な惡型乃至奸物としてはゐない、本來さうしさうなのにさうせず、國野と對立せしめて、最後まで彼に對して勸懲的態度を徹底させてゐない、これが舊式の理想小說の手法では、川岸を徹底的に打ち潰して目出度しにするところであるが、さうしてゐない不徹底なところに、此の小說の小說作法上の新味が見えてゐる。この新味が卽ち寫實主義の精神から出てゐるのである。

以上の外、吾等はこの暴露から何を學ぶか。理論的には、政治家は經濟的に獨立してゐなくてはならぬといふこと、政治と經濟との不可分的關係、從つて無產階級の政治的不適應、中產階級を中心とすることの必要、政治と道德の關係等を學ぶが、現實に卽していへば、新興ブルヂョアジイの一流が、インテリゲンチヤとは別の仕方でインテリゲンチヤを押しのけて漸次政治界に進出しつゝあるかに見えることである。これは自由主義鬪爭とは違ふ形で、經濟產業方面から政治界に進出しつゝある。彼等は政府と爭はず、この保護の下に共に漸進しようとする、この頃の如き資本主義的發展の初期にあつては、これは止むを得ない行方なのだ。兎にかく一部のブルヂョアジイが別形式で妥協的に進出しつゝ政治界の實權を握らうとしてゐる事實がこゝに反映されてゐるのだと言つても宜しい。が、一方又、自由主

義インテリゲンチヤの立場も甚だ困難なものになつて來たことも察せられる。彼等が微力ながら第一線に立つて奮鬪してゐる間に、肝心のブルヂョア革命の波瀾が意外に早く妥協に進みつゝあつた上、下等社會即ちプロレタリアの擡頭が豫想されて來たからである(警告の條を見よ)。

『花間鶯』の政治的イデオロギイは以上三つに綜合されるが、更にこれを要約せば、根本は　竟中等社會による公議輿論政治の實現を要求するものであり、警告も暴露もこの必要を裏書し補說するものに外ならぬことが看取される。だが『雪中梅』で豫想された民間大同團結の理想についていへばこの大理想が遂に成らず、三黨に分裂し、遂に三黨分裂のまゝ國會に臨むことになる。三黨の中自由黨が最も優勢とはいふもの〻、完全なる國會を描寫する意圖は(二院制であるといふ外には)遂に實現されず、僅に自由黨(といつても舊自由黨ではない、廣義のブルヂョア改進黨)の優勢といふことによつて、(さうしてその優勢が國野の後援者たるお春や春田、さては地方財產家事業家の力によつて生み出されたものであることを注意せよ)、——作者の理想が反映されるに止まつたのである。

小說としての『花間鶯』は、總體として『雪中梅』よりも出來榮えがいゝ。趣向の點でいへば、大體自家の經驗なり政界の時事なりによつて構想したもので『雪中梅』より更に寫實味に富み、單純な空想的分子は少ない。プロットの運びが割合自然で、而かも相應な複雜さをもち、波瀾を含み、それでゐて先づ纏つてゐて破綻を示さないところは買ふべきであらう。たゞ時々、作者のお里を示すやうな時代錯誤的な古稗史からのかり物が多少あるが(中篇第一回囚人護送の巡査が痲醉藥をのまされて囚人を奪はれる條は水滸傳乃至八犬傳の借り物、同第十回、宇都谷峠で國野夫妻が追剝に苦しめられる條など)、然しこれは枝葉の一つ二つで寧ろお愛嬌といひたい位〻あり、織り込まれた時事への強い現實的興味がこれを塗り蔽してゐるので、格別眼障りにもならない。その他の小說から借りたものとしては、

武田一味の虚無黨的活動を描くに、ロシヤの虚無黨小說、殊に『鬼啾々』によつたところがあるが（中篇第一、二回邊の、武田お勇逃亡の條、下篇第六回の武田が外國から宣傳文書を播布させる條の如き）、これは眼障りどころか、時代が時代だけに却つて讀者の興味を添加したものに違ひない。概していつて上篇は作爲的な奇趣に富み、中下篇は自然な寫實的な波瀾を見せてゐる。

趣向に織り込まれた時事體驗は、今日では說明しないと分からなくなつてゐるものが多いかも知れないが、當時は一讀しただけで讀者の心にはそれが何か判然したものだつた、それだけに、これが大にこの小說の興味を助けたものである。今それを分るだけ擧げると、例へば上篇第一回上野精養軒の結婚披露招宴は明治十四年秋の政黨結成相談會（板垣招待の宴となつてゐるもの）によるもの、第四回栃木地方の不況は作者が遊說に赴いて實見したところ、車夫取締の規則勵行も當時實際下等勞役社會の疾苦としたところであり、過激思想煽動は加波山事件を暗示させる、中篇第一回風雪中に國事犯人を護送する條は福島事件を藉りたもの、同第四回國野が仕官を勸められるのは鐵腸の實驗したところ（傳記を參照せよ）である。殊に同第四回國野の歸省から第十一回途中遊說より歸京までの趣向は、武田に關する部分を除けば、作者鐵腸の實驗したところである。鐵腸は此の小說の上篇の出て間もない四月十六日歸省の途につき、約一ケ月鄉里に滯在して地方人士の團結に務め、五月二十五日大阪に入り、二十七日城山靜一、善積順藏等と政談大演說會を開いたのを手始めに、京都、大津、名古屋、掛川、藤枝、靜岡と遊說して地方人士の團結覺醒を論（二）じ、六月十二日歸京した。彼は恐らく出發の最初から此の歸省旅行をその著作中の小說の趣向に利用する心算であつた、中篇第四回以下がこの意圖の現れである。彼はこの歸省旅行を二重に利用した、卽ち國野夫妻をして地方團結に利用せしめ、武田とお勇一行をして潛行宣傳に利用せしめてゐる。替玉利用の趣向は本來ならば陳腐と貶さる可きなのに、こゝではさまでその陳を感じない。これはこの旅行の寫實なのが與つて力があらう。中篇諸處に出る川岸對余

尾の賣節一件も、恐らく指すところがあり、當時の讀者をして一讀微笑させたものに違ひない。下篇第三回國野と春田との交際は、鐵腸が後藤の知遇を得ることを描いたもの、下篇の第四回から六回へかけての武田お勇の擧動は正に大阪事件をモデルとしたものであり同第五回の某伯夜會に於ける大臣と高官の對話は、保安條例直前の民間不穩の形勢を概括し、舊自由黨連中の秘密運動等を織り込んだもの、第六回は保安條例の騷擾、第七回の秋野夫妻の別離は鐵腸の同志尾崎行雄のことを採つたものか、第八回國野が貴顯と會合して輿論を論じ、官民軋轢を論じ保安條例の善後策を論ずるのは、これも大體事實である(傳記參照)、たゞ事が保安條例の直前なので、善後策が事實は事前策であつただけの相違がある。第九回芝山内に秘密黨の面々が大臣の馬車を襲ふところは、舊自由黨の秘策だつた大臣の駕を擁して强願する事を諷して見せ、暗にその利害を論じたものである。以上によつてこの小說に織り込まれた時事的實驗的分子の如何が知られ、同時にそれ等分子の沸き起す興味の相當大きかつたことも察知されやう。而して、『雪中梅』と對應するところは對應させつゝ、最後に於いてあつさり總收をつける手際は、素人作家としては上出來である。

趣向が以上の如くであるから、背景にも自然時事や體驗、見聞が浸み出で、概して寫實的であつて空想的でない。殊に或る場合、例へば栃木方面に於ける人心不安の有樣、保安條例直前直後の空氣の如きは、割合によく出てゐる、某伯爵の夜會といふもの乃至芝山内の暴動等を見てもこれが分かる。然し概して背景の描寫はまだ概念的抽象的であつて、小說に於けるその重要さが十分認められてゐない、今一層細かく獨立して描寫された方が可い。中篇第四、國野夫婦歸省の途中の風光の如き、或は上篇第四、五回深夜社會黨集合の光景の如き、この小說中では描寫の成功したものゝ中である。然し獨立した自然描寫の如きは、『雪中梅』よりも少ないかと思はれる。たゞ背景が趣向と融け合つてゐる處は、『雪中梅』に一段進めてゐるといへやう。

性格について、第一に言はれることは、『雪中梅』が國野とお春の小說であつたが、『花間鶯』は、何れかといふと

武田と川岸の小說だといふことである。國野も勿論重要な位地を占めてはゐるが、『雪中梅』のやうな獨舞臺ではない。性格も『雪中梅』時代の書生風に比し、この作では既に紳士となり、例の老成癖考慮癖を出し過ぎるので、志士的活氣に乏しいやうに思はれる。且つ公明正大をお呪のやうに口にしてゐるが、自家辯護としては兎も角、實際はさう計りもいつてゐない、例へば官民軋轢の善後策とはいへ、貴顯と幕夜密會する如きは疚しくないとはいへまい、又春田等の貴族を利用せんとのみかゝるのも如何はしい。大同團結を唱へつゝ飽くまで個人主義的である點も見逃せない。結局口舌の雄で何等仕出來さぬ漢子だとも思はれる。上篇第一回、三回お春に對して述懷する言葉には、一種政治的幻滅の跡痕が見えたくもない。國野の性格は變つた上複雜になつた。お春も性格が變つた。『雪中梅』では、男女交際を是認し、好んで政談演說會に出入する位の新時代の女性だつた彼の女は、この作では、概して平凡な令夫人化し、全く蔭の人として國野を助けるのみ、共に手を携へて國事に奔走する樣などない。もつとも國野を勵ましたり、お勇を助けたり、武田に金をやつたり、種々當年の意氣を示すものはあるが、大體は國野令夫人として社交界に出入する內助の功を稱へられる、それが精一杯のところである。

武田の性格は面白い、誇張はあるが、單純なだけに不快の感を與へない。舊自由黨の志士乃至近くば馬場大石等をモデルにしたらしいところが見える。如何にも實在の熱血漢らしい氣がする。然しあの如き大事業を企てる人としては聊か性急輕率過ぎる。國野と對照して、國野の理想家的老成型を有利に見えさせる爲めにしたものとしても、自分の輕忽の爲めに度々大事を誤つてゐるのは、面白くない（勿論作者としてはかくすべき理由はあるのだが）。スパイを腹心にしたり、深夜焚火して野外演說をしたり、逃亡囚の身で白晝他人の身替りになつたり、餘り度々輕擧し過ぎる。然しともかく過激主義による政治改革の初一念を變へず、終始民衆の爲め奔走し、支那へ逃れてまで秘密活動を續けるところは、痛快といへば痛快である。お勇が自分を慕ひ、自分もお勇を愛す心はあつても、私の情慾を遂げず、ベタ

つかぬところはいゝ。お勇は明白に景山英子をモデルにしたものと見える（中篇第三回のお勇の履歴を讀めば首肯されるであらう）。それにロシヤ虚無黨の女鬪士あたりを多少取り入れてあるやに見える。男裝して武田を助ける膽勇、武田を慕ひつゝ打ち明けられぬ心、國事に專念してゐる身ながら、故郷に一人ゐる母を忘れられぬ女らしさ、兎もかくお勇は面白い性格である。

川岸は『雪中梅』以來の憎まれ役であるが、この作に入つて始めてその眞面目を示す。國野、武田にモデルがある以上、川岸にもこれがある筈であり、讀者は當然それがあるものと期待し、萍水といふ名から思ひ付いたか、これは末松靑萍をモデルにしたものといふ風說を立てた。然しこれは勿論寃罪で、鐵腸の眼中には福地櫻痴の如き人々が宿つてゐたのではあるまいか。鐵腸の意圖では、川岸を一種の政治的姦惡者に描いて、賣節的インテリゲンチヤに復讐するつもりであつたから、倫理的善惡からいへば勿論問題にはならないが、然し單に小說の性格としては、川岸が一番面白い。又一番偉いともいへる。その智慧の逞ましさ、行動の無良心的自由、上長を擒縱する手腕、是を非といひくろめる辯口、政府に對する橫着な態度、民黨と政府を操つる腹藝、金尾に利用される如くにして金尾を利用してゐるところなど、喰へたものではない。一寸考へてもお坊さん御成人の國野と段が違ふといふ氣がする。性格の面白味複雜味は第一であり、又もつとも現實的人間らしい感じを與へる。國野や武田の言動には理想化された非人間的モチイブがあるが、川岸のそれは飽くまで人間的感情から出てゐる。たゞ一つ女性に弱いのは缺點だが、それが益々彼を人間的なものにする。かゝる缺點さへなかつたなら、川岸の智略は正しくメフィストフェリスの部類に入る。

國野の同志秋野は何となく尾崎行雄に似たところがある。殊に保安條例で追放される前後の條を見ると益々さういふ氣がする。秋野の妻君お松は、『雪中梅』に於けるお春の女中であつたが、この作では一ぱしの賢婦人として意外の出世をしてゐる。

國野は寓に實在の人物を取り入れ、これを讀者に暗示して、興味を與へる一手段にする。主情なところがある。春日野梅が後藤象二郎であり、武太が板垣であり、鬼田が大隈であり、澤田が谷干城であることは、その姓名を見ても分かるが、國野が議論の相手とした栗貫郷とは伊藤と推定される。或は井上かも知れない。政商金尾官藏は東洋何人か指すところがあつたらうと思ふが、これは分らない。『雪中梅』から引續きの人物で、今少し面白く描かるべきは、俠客八萬である。前者その他に於ける働きを見ても、機智があり、古井の正夫として終らせるに惜しい。好漢の働き振を國野の一言で擬抑するのは、いかにも小説とはいへ少々異様となる。

自由派の春田、國野派の島田、共にその人らしい面影と見る。その他の男女多數については略す。

映していつて、性格描寫も、『雪中梅』に比して一進歩である。人物も象徴的なところが甚々少なく、實在人物をモデルにしたので現實的興味が加はつた。その爲めに、例の古稗史の才子佳人的人物配置を大分脱してゐるが、然しまだ何處かにその臭味があり、脱しきつたとはいへない。

最後に描寫そのものについていへば、『花間鶯』に於いては、『雪中梅』よりも更にこなれた小説らしい文章になつたといひ得る。前者に見えた生硬さは、可成り消えて、それ丶ゞ圓熟なものに變つてゐる、その代り幾分新聞雜報めく氣味がありはせぬか。會話はたしかに此の方がうまくなつた。但し全體の描寫態度は説明的であつて、眞の敍述表現になつてゐないのは、まだ如何ともし難い。文章を見るため、描寫の面白い場面から一節引いて置く。（上篇第五回見人發し當律院庭上の一節）

（前略）大平山の小坂を登れば火は正しく一の森の中より出で山風の起つて小笹の動く毎に隱見すれども雨を含める雲暗に映し青々として空を罩ぜり暗夜ながらも前の地形を考ふれば老樹四方に鬱茂りて天を掩ひ律院と云ふ賤き寺のある處と覺しく次第に火光に近くに從ひ多人數の話す聲もアリ〳〵と手に取る如くなれば巡査は愈々不審を起

し手に持てる角燈を吹き消し小笹を分けて攀ぢ登り老樹の影に身を寄せて屹度前面を見渡せば簷朽ち柱傾き四壁半ば頽れたる廢寺の軒に車夫の提燈と覺しきものを吊して一人椽側に突立ち何やらん高聲に呼はり庭上には小柴を焚きて明を取り笠を被り又は手拭にて面を蔽ひしもの數十名或は立ち或は屈み椽側に向ひて一列を爲し其の演說を聽聞する模樣なり火の光りに透して椽側に立つものを窺ひ見れば股引袢天にて車輓きの風俗なれども年頃は二十四五の壯夫にて色白く頰髯黑く眼光爛々として人を射り一癖あるべき面相なり今や壯快なる談論ありしと覺しく數十人は一同に喝采して其の聲溪間に反響せり壯夫は更に眼を見開き庭上を睨み云々。（上、初、第五回八七—八九頁）

『花間鶯』に就いて語るべきことは略ぼ語り了へたから、左に結收の數言を記す。

正篇『雪中梅』との比較は、上來處々で試みたので今更述べるのも重複と思はれるが、極大體のところを纏めていふと、小說としての『花間鶯』は確に『雪中梅』より優つてゐる、理想の爲めの理想化が少なく、現代を舞臺として現代を寫すに幾分にせよ成功してゐる。『雪中梅』の趣向の淡白なのに對し、『花間鶯』はやゝ色彩が濃く、前者の單純なのに對し、後者の複雜波瀾が興味をひく、だが『雪中梅』よりも舞臺が廣いので、窮屈な感じがそれ程でない。人物に於いても、『花間鶯』にあつては必らずしも傀儡といふではない、それは國野、川岸の關係に於いて、川岸を貶下する態度をとりつゝも國野に屈服せしめず獨立な性格として描かれてゐるのでも分かる。事件の進展が例の說明的な索然たるものでなく、兎もかくも讀者の想像なり感情なりを刺激する描寫的なものになつて來た。要するにテクニク上の種々の點で、『花間鶯』は『雪中梅』より進步したものといひ得る。だが此等の作品の本來の目的たる政治理想の宣傳の點からは如何。『雪中梅』は單純でその政治理想を露骨に示してゐるだけイデオロギイの力は强く、人の心に直に作者の主張が觸れる、『花間鶯』はさう單純でなく、政治理想も複雜な趣向事件の中に織り込んであるので、この

分折には多少の時間を要し、イデオロギイ的には稍や徵妙なものとなつてゐる。それだけに、この小說だけを讀んだのでは、『雪中梅』程手取早く作者の主張なり理想なりを見定めかねるやも知れない。總體として、前者は淺露だが強い感情で貫ぬいてあるので宣傳的効果は強く、後者は複雜な氣持が反映してさう露骨でないので、宣傳的には力が弱いかも知れない。勿論單に宣傳だけでなく一般的に政治小說としての進步性を論じたなら、それは『花間鶯』の方が優れてゐやう。然し『花間鶯』は『雪中梅』で提起された政治理想を正當に發展せしむる爲めの續篇として書かれたものである、この點でいへば『花間鶯』の方が幾分旗幟不鮮明、態度曖昧といはれても止むを得ないのではなからうか。この事は又、一方に於いては各々の執筆當時に於ける作者の意氣の相違を、時勢の束縛の緩急を、物語つてゐるであらう。

『花間鶯』と共に、然し鐵腸は小說について自信をもつたらしい。彼はこれの成功を見て漸く作家として立つ心を起したものと思はれる。それは、この作には單に政治的宣傳に滿足せず、小說としてもいゝものにしたいといふ意識が見えるからである。此の小說が人情小說的プロットをもつことは最初からで、今更いふまでもないが、時代の要求をいれて社交小說乃至世間小說的な描寫(social novel)を試みた如きもこの意識の一ツの現れであらう。[一二] 性格の書き分けなり、その他の點に於いて『小說神髓』の所論を入れたらしく見える如きも、さうと察せられる。さうして『雪中梅』を終つて『花間鶯』に着する間に數篇の習作を試みてゐる事實[一三]はかゝる意識の存在を決定的なものたらしめる。

それと同時に、この作が、鐵腸の政治小說中、國會問題を中心興味としてゐる前期の諸作に於いてその興味の頂點を成すものであることも、注意すべきである。

明治政治小說界の全體からいつて、從來鐵腸が作家として代表的な位置を與へられてゐる如く、作としての『雪中梅』、『花間鶯』の二部作が代表的な地位(といひ得ずば、代表的な地位のうちで最も目立つ列)を與へられてゐる。

これは今日では文學史上の常識となつてゐる。それは何故であらうか。他なし、畢竟この二作が當時凡百の政治小説中「代表的に有名」であつたからであり、即ち政治小説として時代の要求を代表的に多く反映してゐたからである。その「有名」を別の言葉でいふと、ほゞ三つの點で時代の心を最も多く把握してゐたといふことである。――一、作者の名聲、二、政治理想の力、三、小説としての成功、この三點に於いて。

作者鐵腸の政治家としての名聲がこの作を有名なものにしたことは、前にも一二度述べたと思ふ。大同團結の運動が次第に緒につき、その多年の理想が漸く實現されんとしつゝあつた明治十九、二十年の交、此の人氣政治家が、いはゞこれ等の作で大衆に不意打ちを喰はしたのであるから、人々が騒いだも無理がない。次に此等の小説に盛られた政治理想は、當時もつとも勢力のあるものであつた。鐵腸の大同主義は根本は兎にかく、時代に即していへば自由改進兩黨の政治思想を折衷したものに違ひない、それが後藤の奮起によつて再生するに至つたのが即ち大同團結運動であるが、元來が舊自由黨の志士が、鐵腸等の主張に從つて改進黨側と共同戰線を張らうと試みたのが萠芽となつてゐる。かくて鐵腸の立場は自由黨によく、改進黨にもとよりよく、時代の政治理想を代表する點で得意といへば得意である。鐵腸の政治理想は獨造的なものはないが、包容性は大きい、且つ實現可能性に富んでゐる、空理空想的でない、これが時代に對して勢力をもつに肝心な點の一つである。殊に近代小説（極く寛大な使ひ方での）に織り込まれる政治的理想としては、これが最も必要である。即ちこの政治理想の實現可能といふことは、政治小説としての眞實性 verisimilitude を増すことになる。（この點でも、『小説神髄』の要求に近づいたといふことが出來る）。これ等の政治小説が當時の小説として何れ程の成功を遂げたものかは、上來度々述べてあるのでこゝでは繰返さないが、要するに小説としてもこれ等の作を代表的に有名にする程度の進歩的なものは若干もつてゐたのである。

最後に、今一つ此の二部作について語るべき多少重要なものがある。それは、『雪中梅』、『花間鶯』の二作を通じて

見ると、意識的にか無意識的にかは知らぬが、此等二作が全體の骨子に於いて、ビコンズフイールド卿ベンジヤミン・ヂスレーリの傑作『政海之情波』（原名"Endymion"）の面影が髣髴とされてゐる。『雪中梅』に着手する當初から此の『政海之情波』を意識的に學ぶつもりが鐵腸にあつたらしい證據はないが、何うも、筆を進めて行くうちにヂスレーリへの崇拜と此の傑作への讃美がいつとはなく自身の小說をもこれに似たものにして行つたものではあるまいか。『政海之情波』は頭書して三英双美といふ、三英とは三人の英士、双美とは二人の佳人といふ義であるが、エンヂミオン・フエラーズ、フロレスタン親王、フエロール公は三英に當り、マイラ・フエラーズ、ベレンガリヤ・モントフオート夫人は双美に當る（既に『ヂスレーリの政治小說』の章に詳しい）。然るに此の『雪中梅』、『花間鶯』に於いても、三英双美が描かれてゐる、三英とは國野、武田、川岸であり、双美とはお春とお勇である。さうしてエンヂミオンがベレンガリヤの財力と智力によつて助けられてその政治的經綸を行ふに至る如く、國野もお春の財力と智力にてその政治理想の實現に向つて努力し得るに至る。且つヂスレーリ得意の、社交界を政治に利用せんとすることも、鐵腸の小說に於いて試みられてゐる。細部の描寫に於いてまでヂスレーリの作を模してゐるとは思はれぬが、然しその骨子に於いてはかく類似したところがある。これを以て鐵腸の側に於ける意識的模倣と見るべきかいなかは、議論の餘地があるとしても、私自身は、鐵腸その人の英國心醉癖、英國政治崇拜熱を思ふとき、これを意識的と見たくなるのである。が、意識的か無意識的かは兎もかくとして、鐵腸の政治小說にヂスレーリの小說の影響があることは認めて可からうと思ふ。

註（一）上篇、九六頁（初版）の欄外評の文による。

註（二）鐵腸「新聞經歷談」（九）（文化全集『新聞篇』五九頁）

註（三）鐵腸「雲中梅ノ批評家諸君ニ謝ス」（明治十九年九月二十九日、三十日朝野新聞）の中にある。

註（四） 明治十九年九月二十八日朝野新聞の廣告に見えし改進新聞の評

註（五）「雪中梅ノ批評家諸君ニ謝ス」の中に引くところの某新聞の言なるもの

註（六） 本書上來記すところの諸章に明白である如く、『情海波瀾』（十三年）以後、『自由廼錦袍』、（十四年）、『春窓娘讀本』（十五年）、『寒紅梅八年之雪』、（十六年）、その他後出『才子佳人螢雪美談』（十七年）、『當世娘氣質』（十八年）等々

註（七）『花間鶯』上篇緒言、「政治と小說と孰れか難き」（鐵腸演說）より

註（八） 同上

註（九） 鐵腸傳（二十年）の條參照、「政府は如何にして多數の人心を慰めんとするか」（明治二十年十二月二十四日朝野新聞）

註（一〇） 鐵腸論文「物ハ必要ヨリ出ヅ」（明治十六年十二月十三日朝野）

註（一一） 鐵腸雜錄「手紙の代り」第三（明治二十年五月十二日朝野）

註（一二） 末松謙澄「東洋書籍編纂ノ體裁ニ就イテ」（明治二十年一月講演、二十三年日本大家論文集第二卷六號）といふものの小說の項に「ソーシャル・ノヴェル」を要求する主意があり、鐵腸に對して末松がこれを要求したことも見えてゐる。

註（一三） 鐵腸の政治小說目錄を參照せよ、なほ次節「落葉のはきよせ」に詳しい。

『時事小說 落葉のはきよせ』

『落葉のはきよせ』は作の順序からいへば、丁度『雪中梅』と『花間鶯』との中間に入るべきもので、『雪中梅』の直後朝野新聞に掲げた小品四篇、第一「浮世の夢」、第二「手管のもつれ」、第三「五色目鏡」、第四「未來の夢」を集めたもの、通じて鐵腸習作集スケッチ集たる性質をもつてゐる。さうしてその存在價値の大部分はかゝる性質にかゝつてゐるのである。卷頭に鐵腸居士戲著と署名してあるが、戲著の意はその序文（一）にも明白に示されてゐる。別に鼎軒田

口卯吉の序があるが、これも小説戯作をもつて洒落半分の鬱散の具となしたもので、當時の封建的教養の浸み込んだ武士出身の知識階級の觀念を見るに足る。

此の集の毎頁の欄外に、何人の手に成るか隨讀隨評めくものが掲げられてゐるが、これは極めて面白い、是非讀むべきものである。この欄外評の筆者は、毎篇の首にその篇の寓意するところを簡明に解題して示してゐる。よつてこれを利用して、各篇に就いて語つて行かう。

第一、浮世の夢。欄外評者の言に曰く——

此篇ハ民間ノ政治家ガ實業ヲ務メズ浮薄ニ流ル、トキハ其ノ地位ヲ維持スル能ハザルヲ諷スルナリ

この篇に出る主な人物は、「先生」と呼ばれてゐる在野政治家、その客で投機的實業家山田某、「先生」の權妻お紋、「先生」邸の書生松山某、松山の友人竹田及梅村某、金貸し山上某である。場所は凡て「先生」邸内。「先生」邸の書生部屋で松山の一人話し、先生の生活の如何にしだらのないものか、遊蕩と借金の言ひ譯で日を暮して然かも無職でよくヤリクリするに呆れてゐるが、それでも今に巨萬の金を握むとか臺閣の上に立つとかいふ先生の法螺を半分當てにし差し向きは五圓も貰つて根津行きを樂しみたいなどと考へてゐる。そこへ同じ貧乏書生竹田と梅村が遊びに來る。武田は有志の活動に有頂天になり今に國會が開けたら直に代議士になれると噪やぐ。だが制限選擧だらうと聞いて、英學を始めたから飜譯で金儲して支度するといふ。梅村、これからの國會は財産なくば駄目だから、いつそ政治をやめて海外へ飛出し、外人相手に對等で取引する位になりたいといふ。そこへ「先生」客と共に歸來。座敷にて兩人語る。

兩人の第一の話は昨夜來の賭(花牌)の勝負のことである。主人公、借金の周旋から、政治家の生活は西洋風がよきこと、同學友人の成功談となり、民間で政治に奔走せし心得違ひ、世事は大方賭博だから眞面目に勉强するは馬鹿

馬鹿しいといふ。客も賛成し、今日の貧富はチャンス次第だから政治をやめて一攫萬金の商賣をやれといふ。そこで主人は本音を吐き、實は自分が大政治家にならうといふのも目的は金にある、日本ではまだ商業の樞機が政治にあるから政權を握らねば大金が儲からぬといふ。客怪しんで、國會が出來、政黨政治になつたら却て金が要ればとて儲かりはせぬであらうがといふと、それは一を知つて二を知らぬので、權力利用、機密漏洩その他でいくらも出來る。民黨內閣が出來ても長いことはないから、要路に立つたが最後權力を利用して存分取り込み、早くやめるのが肝心だと告白する。藝妓上りの權妻お紋は襖の陰で、この會話をきゝ、もう「先生」が大官になり大儲けをしたやうな氣で、いろいろと將來を空想する。座敷では主客二人が數十萬圓攫んだ夢をみていゝ氣持ちになつてゐると、そこへ山田の株の暴落した通知が來る、「先生」の借金取りが來る、最後に山上が貸金の債促に來て、「先生」の虛飾家で懶惰家で西洋人の眞似ばかりして何一つ出來ず、僥倖を賴んで着實を馬鹿らしく思ふ根性を罵る。その勢ひの激しさに「先生」も客も權妻も書生も一時に夢がさめてしまふ。

何れも想像で好い機嫌になつてゐるところへ、最後に現實を打つけて眼を醒まさせる、その對照は陳腐といへば陳腐だが一寸妙である。この篇の主意は、政治家の遊食生活が遂に彼を邪道に陷れるであらうといふ意を諷したものであるが、讀者はこれを未來に取るよりも現在(鐵腸の當時)に對する諷刺と解して種々な時世相を看取することが出來る。當時の政治家の生活の如何に precarious なものであるか勿論、ブルヂョア勃興に伴なふ投機精神、この精神が政治をも金儲事業と化するに至るべきこと、政黨政治の陷入る危險(利權政治)への警告などを知ることが出來る。末段金貸しをして時人を罵倒せしめたのは、作者の皮肉である。

第二、手管のもつれ。欄外評者の言に曰く――

此篇ハ何等ノ寓意ニ出ルカ名詮自稱ニヨリテ事實ヲ推知スルヲ得ベシ因ツテ評者ハ之ヲ貼出セズ

といつて、妙に奥齒に物の挾まつた態度を示してゐるが、これは當時としてはさうせざるを得なかつたらしく又別に說明されずとも分つたのである。全部、新橋裏街邊の藝者屋乃至料理屋の出來事となつてゐる、一讀頗る人情本風の味ひが濃厚なものである。主要な人物は藝者大和屋お國、お酌お蝶、藝者おシナ、お客英吉、德藏、米藏、鷲藏の七人である。場面は四つ程に別れてゐるが、(第一)には、お國の宅でお國がお蝶を捉へてその浮薄と忘恩を責め立てゝゐる。お國の言ひ分は永年親切に世話し漸く一人前となつたのに、お國と楯をつき合つてゐるおシナの妹分となつたり鷲藏を情郎にもつたりするのは何事ぞといふのである。お蝶は鷲藏一件はおシナの言ひ掛りで無根である、又おシナの妹分となるのは好ましからぬも古い義理で仕方ないと泣く泣く辯解する。お國イキリ立つて何でもお蝶をおシナに渡しては顏がたゝぬといふ。(第二)そこへ德藏が飛び込んでなだめ、お蝶を歸す。後でお國に譯をきく、お國は(第一)の理由を繰り返して話す。德藏、それは皆英吉がおシナを尻押してやつてゐるのだといふ。お國德藏にいふ、此の頃お前と急に仲よくなつてから古い客の英吉や米藏は皆邪慳にしたり忌味をいつたりする、何分見捨てず末永く賴むといふ、德藏、今度の新普請に俺れの力の入れ方を見ても志がわかるだらうといふ。(第三)新橋の或る酒樓の新年宴會、一室でおシナが英吉にお國の增長をいひつけ尻押しをしてくれといふ。英吉智慧を貸す。英吉は又鷲藏や德藏を油斷ならぬ奴だといふ。(第四)同、(第三)の室の前、お國は二人の話を洩れ聞き怒つて室にとび込まんとする、そこを米藏が抑へて意見をする。曰く、英吉がおシナを贔屓にするはお國が此の頃德藏にばかり熱をあげてゐるためである。德藏は近頃賣出しの男で金もあり評判もいゝがまだ英吉には敵對出來ぬ、且つ英吉も德藏も本妻があり、あとは一時の浮氣だから深入するのではない、藝者商賣で一人の客のみ大事にするからこんな事になる、現に英吉と德藏の二人は蔭ではお前達二人の鞘當を笑つてゐる、二人が喧嘩して仲が惡いと自然英吉德藏が利益の算段を始める。多くの客を相手に商賣するものは誰れにも愛嬌を賣つて大勢に可愛がられねば成るまい、これがヂプロマシイといふも

のだ、だから藝者の外交政略も隨分六ヅケ敷ものだ云々。

此の外交政略の一語こそ全篇の主意である。お國は日本、おシナは支那、お蝶は朝鮮、英吉は英吉利、米藏は米國、德藏は德逸卽ち獨逸、鷲藏は露西亞（舊帝政時代は鷲を國章とするよりいふ）であると說明すれば、格別喋々することはあるまい。それがわかると、明治二十年前後の日本の外交政略を諷刺したものたるは一讀して明瞭であらう。お國對お蝶、おシナ、お國對英吉、德藏、鷲藏の關係は、卽ち當時の日本外交の實狀を諷したもの、米藏の意見は、作者鐵腸が日本の外交に對する苦言と解して可い。お蝶の浮薄云々は、小國朝鮮の無節操である、忘恩は十五年、十七年の朝鮮事變を見ても分かる。おシナの妹分云々、當時支那は朝鮮を自家の屬領視し朝鮮も甘んじてこれを母國視してゐた。鷲藏を情郞にもつ云々、この頃ロシヤは大分朝鮮へ接近し、明治十八年から十九年へかけて露韓條約が締結されたが、その裏面に更に保護國となる密約があつたとて、露支間に大悶着が起つたことがある、この密約說が支那側から宣傳されたので言ひ掛り云々といふ。英吉がおシナの尻押しをする云々、支那は鴉片戰爭で甚い目にあつたがその後次第に親英主義に轉じ、明治十八年佛國との間に戰爭を始めたり、又ロシヤと紛議を生じたりしたので、一層親英主義に向ひ、英國も亦露佛を牽制する必要上對支親善を旨とするに至つた。日本外交家も薄々この點に氣がついてはゐたが、殊に驚かされたのは、明治十八年に英國が占領した朝鮮の巨文島を、支那に讓渡する旨聲明した時である（十九年）。先是支那と日本の間には天津條約が結ばれたが、支那は平然これを破る、軍艦で示威運動をする、長崎事件を惹起するで、大分挑戰的態度を見せて日本朝野の神經を尖したが、こゝに至つて、背後に英國がゐることが明白に分つた。日本當局は英佛の自由思想に懲りて獨逸思想に近づかうとしてゐるところへ、獨逸は又支那で英國から喰ひ込まれた利益を日本で取返さうといふので、日本との接近を歡迎した。新普請云々は、此の度日本で制定される憲法や新政府組織が大抵獨逸を眞似てゐることを指す。さうと分つてみると別に難しい寓意ではないが、實狀に照し

て以上を言ひ添へて置く。鐵腸の意圖に至つては、その政治思想中、對外政策の條と參照せば、自ら首肯されるであらう。

(二)

第三、五色目鏡。欄外評者の言に曰く――

此篇ハ世上ノ實際ヲ知ラズシテ濫リニ社會ノ事物ヲ判斷スル者ヲ諷スルナリ　斯邊鎖氏ノ社會論ニ曰ク佛人アリ倫敦ニ遊ヒ一週ニシテ此ノ都府ノコトヲ記セントシ三月ニシテ漸クニシテ其ノ內情ノ知リ難キヲ覺ヘ三年ニシテ遂ニ筆ヲ投ズルニ至レリト著者ノ主意ハ蓋シ社會論ノ一節ヲ飜譯スルナリ

この篇は別にこれといふ政治的イデオロギイはない、先づ右の主旨の高等落語の如きものと思へば可い。上州〇〇郡〇〇村の百姓八藏、戶長の河野某と上京し、芝愛宕町の盆倉屋といふ下宿兼旅人宿に逗留中、隣室の書生青木某（西國生れ）と知りあひ、東京の印象を語り合ふと、八藏の印象は極めて醜く、書生の印象は極めて立派なものである。それは八藏が細民街として代表的の土地だけを見、青木は目拔きの盛り場や名所を見てゐるからである。外出中の河野某も歸つて來て、東京とは意外の事が多い、看板に僞りがあるといふわけ、小役人の意氣地なさ、金貸しの大威張り、貸舟屋と船宿の間違ひ、矢場女と藝妓、物價の不同（洋服や庭石のこと）などを語る。青木は正しい東京觀を與へるといふので、田舍新聞に出す東京通信の草稿を讀んで聞かすが、これが又大變なもので、鹿鳴館を紅葉館ととり違へたり市內の俗曲稽古所を皆舞踏場と勘違ひしたりして、條約改正決行の手段が殖えたと喜んでゐる、演劇改良の聲に促されてドン帳芝居の盛元座をもつて新富座を律する勢ひ、淺田宗伯の駕籠を見ては東京の新流行と早合點し、鐵道列車の車輛の多寡で世間の不景氣を論ずる、殊に絕倒すべきは、官員錄を瞥見して、要路の大官は皆東京人で藩閥出身の人は一人もないといふ。呆れたものであるが、然かも河野はこれを聞いて感心する。やがて三人散歩に出ると、青木の先輩生田某にあふ。生田は一同を愛宕山に連れて諸方を指し示すが避病院を華族邸とか、セメント工場を紙幣局とか

好い加減の出放題、見當違ひばかりいふ。最後に東京一の料理屋といふので銀座の松田へ連れ込まれるが、そこで靑木の今一人の先輩宇會田某に會ふ。某はアメリカ歸りの喰ひ詰め者である。宇會田はアメリカ談をとせがまれて、途方もない大法螺をふく。アメリカでは大金もうけが直ぐ出來る。汽車でも鐵橋でも家屋でも衣服でも、食物でも西洋には叶はぬとて、見たこともない大都市を引合に出しての衣食住改良論である。西洋の女は皆美人で男女同權が行はれてゐる、人間萬事洋行に限るといふ。談のうち一同酩酊してランプの色について爭ふ、或は赤といひ、紫といひ、黄といひ、黑といひ、白といひ、涯しがない。傍人は見かねて敎へていふ、「貴君方は皆んな眼鏡を掛けて居らつしやるでは無いか」、五人とも此の一語で我に歸る。

今もいつたやうに、たゞこれだけの話で何もないが、强ていへば、今のアメリカ讃美論衣食住改良論で、當時の政治家や改良論者を皮肉つてゐる、と同時に當時かういふ空氣が充滿してゐた社會ではあつたといふことを敎へてくれやう。

第四、未來の夢。欄外評者の言に曰く――

此篇ハ一時世上ニ風說アリシ浮浪律ノ制定アルトキハ意外ノ結果ヲ生出スベキヲ諷スルナリ

場面は地方の或る警察の取調室、警官甲と乙とが浮浪罪といふものについて論議する。甲は暗にその法律上の妥當性を疑ひ、かゝるものを設くるの不可を暗示するが、乙は警官の實際的立場から、怪しい者は無證據で取抑へることが出來るから便利だといふ。その實例として(といふわけでもないが)、先づ此の土地へ出稼ぎの爲めに流れて來た無辜の勞働者が、定住恒產のない故で浮浪罪に問はれることになる。次には乞食、博徒、缺落者などが片端からこの罪に問はれて禁獄される。最後に書生上りの政談演說者が引出される。警官との間に種々論辯があり、定住、恒產の點について、書生は、定住無きが犯罪とせば東京にゐて下宿屋を轉々してゐる書生は皆浮浪罪に問はるべく、又學業未

成の書生なれば産無きが當然ではないか、と論ずるが、警官は萬事法の明文通りにする、不服があるなら裁判所で申立てろと壓制して投獄してしまふ、といふのである。末段に稗史子即ち鐵腸が附言してかういつてゐる、「頃日政府にて刑法を改正し浮浪罪の一節を追加せらるゝ風說あり蓋し遊食の徒が諸方を徘徊し動もすれば社會の靜謐を害するの恐れあるを以て之を禁止せんとするの主意に出るならんか蓋し英佛の刑法中にも此の條ありと聞けども若し之を今日の我が國に實行すれば恐くは其の弊害の多きに堪へざらんとす因つて吾儕は想像によりて或る地方の警察署の有樣を說き出し立法官として深く之に鑑みる所あらしめんとす此現象として吾儕が一場の夢に過ぎざらしむれば實に小民の至幸なり」云々。これ以上何等附言するには及ぶまい。

上にも述べたがこの四篇は、共に習作的のもので形式は何れも寫實的スケッチ風、大したプロットもなく、格別力を入れたものでもない、極く輕く描寫の諸法を稽古したお草紙程度のものと見て可い。と同時に、一面鐵腸が小說といふものに積極的に興味をもち出せることを語つてゐるとも見られやう。四篇とも時事的寓意があるが、然し政治と直接關係があるのは第一、第二の兩篇である。殊に第一は『花間鶯』のある場面、或る人物、例へば川岸金尾等の原型らしいものをもつてゐる。この集が、年代的に『雪中梅』と『花間鶯』の間に入つてゐることは、その點からも興味の多いことである。第二は確に南翠の『癡人之夢』と通ふところがある。

註（一）　この序文は、自藏本「落葉のはきよせ」の初版（二十年三月）には載つてゐないが、明治二十年二月十九日の朝野新聞に載つてゐる。

註（二）　この篇の寓意を裏書する新聞記事は澤山あるが、例へば朝野新聞十九年十二月二十八日「日淸兩國ノ外交政略及ビ外交家」の如きをみるが可い。

『政治小說雨前之櫻』

この作については、目錄表には創作年代を考定しなかつたが、これは恐らく繪入朝野にのつたもので、保安條例の事が見えるから二十一年に入つての作、而かも一月二月は恐らく『花間鶯』に多忙であつたと思はれるから、それの一段落のついた三月頃のものであらう、四月に入つては洋行支度で、これ又かゝる「戲著」を草してゐる暇はない筈である。要するに一つは櫻の季節を當て込んだ讀物であるから、先づ三月頃として可い。（追記。その後目錄訂正）。

題意は、この作を最後まで讀むと分かるが、櫻は當時の權門諸公をいつたもの、雨とは民權論の威力をいつたものと解すべく、寓意と警告の意を示してゐる。本文の寓意小說たるはいふまでもない。

全篇の骨子は、維新前の慷慨志士で今は廟堂の權臣たる風間芳雄の生涯の變遷を叙するに托して諷刺の意を寓したものである。主要な人物は、――

風間芳雄　中國某藩士、慷慨勤王の壯士、明治權官の一人

松本お捨　同藩松本源五兵衛の娘、風間の前妻

茨城左門　同藩家老で佐幕論者

藝妓君香　祇園藝妓、風間と相愛し、後に風間令夫人

壯士　某　明治政府の政治を憤慨し、風間を論難する

等々。場面は凡て風間邸內外の出來事であるが、第七回までは主人公風間の夢中の物語で、風間が夢に昔を思ふ態となつてゐる。風間芳雄は中國某藩の武士であるが、少年の身ながら文武の才があり。上下から望を嘱されてゐる。藩

の名家松本源五兵衛は芳雄の材を見込んで一女お捨を妻あはせる。折しも幕末で勤王佐幕の論が起るが、風間は熱心な勤王黨となる。然るに江戸家老茨城左門は佐幕の論を唱へて一藩の歩調を逡巡せしめるので、風間等の同志は怒つて彼を斬らうとする。風間等は一夜遂に茨城を攻襲したが、彼の奸智の爲めに失敗して、身を匿してしまふ。これで風間はお尋ね者、妻の父松本は入獄せしめられる。お捨は風間の母を奉じて、具さに辛苦を嘗める。風間は事件の成行を見て慷慨に堪へず、再度茨城襲撃の決心を定め、夜お捨と母を訪ふて別れを告げる。お捨と母は風間の志を察し、無理せずに時機を待てと諫める。風間もこれに從ひ、母をお捨に託して京都に奔る。京都で同志と交際し、度々花柳の巷に足を入れるうち、君香と馴染むことになる。且つ君香の俠氣によつて大難を逃れもしたので、恩愛と義理に絡まれ、お捨をそれなりにして君香を妻のやうにする。明治になつて、君香の姉分たる某妓の情人春野某が廟堂に立つことになつたので、風間も立身出世して廟堂權臣の一人となる。

以上が風間の夢物語である。こゝで風間の晝寢の夢が覺める。この時邸外では、通行の書生連が風間のことを噂さしてゐる。風間の立身の凄まじいこと、この立身が皆春野氏のおかげ、卽ち君香夫人の緣故によること、風間も昔は天晴れの慷慨家であつたが、今日では全然保守政治家となつたことなどを話し合ひ、人間は位地が出來ると皆さうだといふ、邸の內では、風間は居間で眼を覺し、君香夫人を呼んで昔の京都時代の物語りをする。君香いふ、あの頃の貴方は今の壯士にそつくりだつた、風間は壯士といはれて愕然とし、面會強要の壯士の來るのは閉口だ、何れも皆過激粗暴だから困るといふ、自分の昔のことをすつかり棚に上げての言ひ分である。君香は、風間を助けし折のことをいひ出し、あの時世話になつた同藩の枝元や國にゐるお捨は何うするつもりかといふ。風間、枝元は維新後一度小役人にしてやつたから義理は濟んでゐる、且つ傍にゐると諫言立てして昔を忘れるなどといつて困るから構はずに置かう、お捨のことは先年人を介して金をやつてあるから自然處分がついたやうなことをいふ、然かも現在お捨から哀情

を訴へ孤獨になつた身の振方を賴んで來た手紙を懷中してゐるのである。知人紹介の壯士が來て面會を求める、仕方なく會ふ。この壯士の言動は往年の風間の如くで、覗見した君香さへさう呟く(第九回)。君香は風間が落した女文字の表封を見て嫉妬する(第十回)。壯士は風間に對して例の通りの議論を吹かける、曰く近年の日本は物質的進步はしたが、精神的には轉落した傾きがある。今回の問題(條約改正、その他)について兩國及び奧羽の連中が建言するといふが、政府はこれを如何に處置するつもりであるか。又他日國會が開設されると政黨內閣にし輿論にて政府を更迭する必要があると思ふが如何。風間は表面冷然と答へる樣、政治には熟練が第一必要である、政府人には何といつても二十年の經驗があるが、民權家は空論するだけで實務の經驗はないから、外交、會計、民政の實際を知らぬ、國會が立つて民黨が勝つても、直に政府は渡されぬ、政府はこのまゝ進む方針と思ふ云々。壯士いふ、經驗を云々されるが、經驗を問題にせば維新の大業は成らぬ筈である、二十年前のことを考へてみられよ、貴方がたよりも幕府の連中が經驗に富んでゐたわけではないか。これが敗れたのは何故か、要するに天下の大勢である。政府は何處までも獨逸風の有司專政の政體を維持する心算でも社會の風潮には叶はぬ、今に吾等の力で强大な輿論による政黨內閣をつくつて見せよう。風間は嘲笑して、國會さへ立てば政府の更迭が英國風になるものと考へたら間違ふ、書生がそんな天下國家の問題を考へるよりも飯食ひ道を考へるがよいといふ。壯士は奮然席を蹴立てゝ去る(第十一回)。君香は壯士の去るのを待つて夫に女文字の手紙の主を責める。風間は仕方なくこれがお捨から來たものであることを告白し、可哀さうだから上京させようといふ、君香は陽に贊成して陰に拒む。風間も仕方なく、金を送つて手を切ることを誓ひ、君香の機嫌をとる(第十二回)。風間邸で新築落成を兼て花見の宴があるが、來客の話題の中心は、自然活潑な壯士の奔走に移る。風間は頻りに保安條例の必要ある所以を說く、若手の役人はうつかり壯士を維新の慷慨家に比較し、幕府が慷慨の志士を遇した態度も、今の政府が壯士や有志家を遇する態度も同じではないかと言ひ出して、風間の怒りを買ふ。

中には君香の前身を知らず、彼女に向つて藝妓を夫人にする人々を攻撃する男もある。そのうちにも、風間は昔のことを忘れて、直向民間有志を罵り、彼等は知識經驗なく道德を知らぬ、財産がない爲めに粗暴過激のことを口にし、秘密出版や過激文書に人心を煽動して困る、これでは國會が立つたとて仕方がないといふ。この時一方に二三の人々が別の話をしてゐる。昔の花見の話から花見の名所、向島、上野、御殿山の話となり、御殿山から維新當時の西洋館燒打のことをいひ、昔の壯士の亂暴を語り合ふ。「今では大政治家と云はれて老成沈着の議論を唱へる人でも二十年前には亂暴な壯士であつたから此節壯士と云つて老成家に嫌はれる少年の內からドンナ政治家が出て來るかも知れん、花は櫻で人は少年サ得意の地に立つと自然氣象までが退守になるから仕方がない」と嘆息する。(第十三回)

折から東風ユラ〱と櫻花を搖し花片雪の如く飛び散れば酌をして居たる藝妓は庭の方を指し

藝『皆さん御覧なさいアノ花の散るのは誠に綺麗で御座いますこと』

主人は眉を蹙め心の中にて

ナアニ散るのが宜いことがあるものかドウも櫻は麗しくても盛りの短いので困る世の中に何時までも散らぬ花はないか知らん

この引用によつて題意の幾分が明らかにされると思ふ。この作はこれで終つてゐるが、その寓意したイデオロギイからいへば『花間鶯』の餘話とも、補足とも見られるもので、當時の政府當局をして、自分達が維新當時の慷慨壯士であつた事實を反省せしめ、壯士や民間有志の運動の取扱ひを寛大にせしめるのが主眼であつたらう。而かも總體が所謂「戲著」で稍や輕俗の風があり、維新の元勳諸公をからかつた調子で、諸公も一讀苦笑したであらうと想はれる。然したゞこれだけの主意を十三回の小說に引のばしただけのもので、小說としては輕いユーモラスな味ひがあるといふ外、格別の取柄はない、說明體の寓意小說とて、テクニク上からも特に論ずる程のこともない。如何にも大作の後

の息抜き乃至骨休めといふ趣きがある。

風間、君香、お捨等のモデルは、何れはあつたのであらうが、今は尋ねる手蔓もないし、別に無理に尋ねる必要もなからう。出來事とてもさうである。然し何れも平々凡々の類型的である。

たゞ當時の壯士を維新時代の志士と同視するところに、自由民權運動をもつて維新運動の繼續と見る思想が仄見えてゐる、この點は別の意味で注意すべきであらう。

逆に維新問題の方からいへば、この頃から、明治維新の史實がやゝ公平に批判されるやうになつて來たことが、側面的に出てゐる。第十三回の青年役人が井伊大老觀を語るところなどこれを示すものであらう。又正面からいつて怒られる事を迂廻して維新當時の追想に托するカムフラージュは、この頃としては新しい思ひ付である。然しこの作の主旨が主旨であり調子が調子であるから、維新をキャリケチュアにしてしまふ恐れがなくもない。以上たゞ注意までに附言して置く。

『國會開設之前後』

表題は宛然論文か雜錄かの印象を與へるが、內容は正眞正銘の政治小說である。これは前記の同錄にも述べたやうに初め『廿三年六月後の日本』と題して、大同新聞の創刊號から揭げたものである、この時は金陵居士と署名してゐたが、單行本には明らかに末廣鐵腸居士戲著としてある。

『雨前之櫻』は二十一年八月刊、二十二年二月歸朝して、朝野新聞から東京公論に轉じ、小說『啞之旅行』を揭げた。東京公論から關西日報に移つたが、此の關西日報時代に小說は何を揭げたか、いづれ何か揭げたであらうと考へるが

今のところはまだ關西日報に寓目する機を得ないので、如何なるものを掲げたか、殊に政治小說として何かなかつたか、その邊一切が未詳である。二十二年二月から二十三年六月『廿三年六月後の日本』を發表するまでの一年八月有餘の間に、一つの政治小說も出來なかつたらうとは考へられない。必らずや少くとも一二篇の政治小說があつたに違ひないと思ふが、以上の理由で遺憾ながらかゝるものについて語るべき材料は何もない。だからこの間を一跳にとんで直に『國會開設之前後』について語ることにする。

この作は、名の如く明治二十三年七月の國會議員の選擧から十一月國會開設に至るまでの政治界裏面表面の種々相を、穿ち物即ち諷刺的スケッチ風の茶番狂言的趣向で一連につゞけたものである。從つて一貫した構想があるではなく、前後通じて出場する人物がある譯でもない、一場一場に選擧騷ぎの馬鹿しさ、裏面の駈引、新議員の失策、國會の光景等を即興的に描き出して讀者を笑はせる、といふのがその內容の表面的特色である。それだけに梗概などと纏つたものはない。大體內容は選擧前と選擧後とに別れてゐる。選擧までは多少の種子があらうが、選擧以後は殆んど想像に成る。それだけは區別して讀むべきである。以下回を逐つて荒筋を述べて見よう。

場所は地方の小都會とは推察がつくが何處か分らない、だから吾等も、想像で、この選擧騷ぎは鐵腸の田舍の何處かの出來事と假定して置かう。

第一回、候補者山田某の有權者大盤ふるまひ、茶屋のもうけ。第二回村長の得意、村の有權者のブローカアとして候補者より御機嫌をとられる、進物を貰ふ、招待される、(心中は現金取引を望んでゐる)、大受けである。第三回山カン候補者、當選確定を口實に高利貸を延期させる、代議士商賣としても割がよしといふ。第四回山田からの賴まれ辯士法羅尾某、勘違ひして、推薦演說に失敗、法羅尾は議員の第一資格は學問經驗であるといつたが、山田にはこ

の何れもがなかつたわけである。第五回代言人の候補者が有權者の事件を無代で引受け、暗に投票をもとめる。第六回、候補資格欲しさの俄養子、醜女の深情に閉口する。第七回、運動員が候補者を脅して運動費をせしめる、中に甚しいのは、甲候補から賴まれて金をとりつゝ、甲候補の惡口を乙地で、乙候補の惡口を甲地でいつてそれとなく自薦運動を試みてゐる頭の良い男もゐる。第八回、キリスト信者が急に神佛を禮拜する、選擧に負けまいといふのである。第九回、貴族院議員は大丈夫だと思つた男が落選し、急に村への貸金などを嵩に衆議院議員候補の方へ强いて割り込む滑稽、第十回、運動員中の惡玉が、候補者から依賴されて買收をやつてゐながら、これを種子に候補者を威して金を取る、度々やるのもある。第十一回大同新聞の宣傳、同黨の同志を責る候補者、甲地へ行くと熟練家の同志を褒め、乙地へ行くと學問ある同志を褒め、間に立つて漁夫の利を占めんとする。第十二回、貴族院議員になりし田舍大盡、急に華族氣取りになる、第十三回、〇〇倶樂部〇〇黨側の選擧詰所、運動員等全勝と思つてゐたに案外負けさうなるに驚く、御馳走にて買收するはよきも金がかゝり過ぎる、演說會場の買收は新聞にて叩かれるから却て不利、壯士に思ひ入れ演說を妨害させるが可い、それでもいけずば投票箱奪取乃至投棄といふ手を出すべしとなる。第十四回、新貴族院議員某、友人から東京生活に金の入ることを忠告されて驚く。第十五回、此の回は選擧の光景がよく概括してあるから全回引用しよう。

一匹の兎が田の中へ出れば其の近邊に耕作する者は手んでに鋤鍬を打ち揮るつて追ひまくり都合よく兎を手に入れたものはたつた一人ア、麥も大根も皆んな踏荒らして仕舞つたと呟やいても後悔先きにたゝず我れこそ多數の選擧を得んものと一つ選擧區に五六人の候補者があり競爭——憤爭——鬪爭——讒謗——罵詈——離間——賄賂——强逼——親子兄弟も敵味方となり同窓の朋友も東西に分れ同黨同派と云つて與に政事上に奔走せしものも選擧の爲めには吳越の勢ひを爲し公然の演說會懇親會秘密の相談會料理屋は目の舞ふほど忙しく田舍藝者も御茶を挽くの暇な

く選擧者は毎日の御馳走の爲めに自稱候補者の懷中と倶に下痢を起し世間は大不景氣でトント商賣が無けれども何故か鰹節と手拭は相應に賣口あり手紙の往復織るが如くして郵便脚夫は脚が擂小木になりはせぬかと心配す一時勢力を得て意氣揚々たれば忽ち意外の所より競爭者が出で今まで味方と思ひし者が急に裏切をして敵黨に勢力を與へ運動費を遣ひ盡くして歎息する者あれば全勝の目的なきを以て失望する者あり其紛々擾々たる金陵居士が一枝の禿筆を以て能く其の萬一を狀すべきに難ず六月も急がしき競爭の中に經過して早や七月三日となりぬ各黨は孰れも倶樂部へ詰め掛け選擧場へは許多健步の男を出だして結果如何と待ち受けたり候補先生は朝からモジ〳〵して新婚の日に出逢ふたる花婿の如く奥へ往かと思へば玄關へ出來たり小便所へ這入ることは幾度と云ふ數を知らず兩脇よりも膏の如き汗の溢れ出るならん折り柄第一の注進が我黨は勝利じや今開けた二ケ村の投票六分までは山岐先生だ反對黨の投票は二つに割れた「夫は妙だ大出來〳〵と喜ぶ内に又も馳せ來る第二の注進「山北と山南の二ケ村は皆んな反對黨じや」第三第四の注進にて勢ひが善いかと思へば又惡くなり候補先生の睾丸は上がつたり下がつたり面の色は忽ち赤く忽ち青し夕景に至り選擧が畢ると「ア、失策た、タツタ百點の差で半ケ年の運動は百日の說法屁一つ馬鹿〳〵しいことをした、」縣廳や內務省への報知、新聞紙倶樂部への報告孰れの電信局も商家の大三十日の如しそこで翌日の新聞紙に掲げたる電報を讀めば是は不思議自稱大學士で一地方を飛び廻つた人は何處へ往つて仕舞つたか同郷人でも姓名を聞いたことのない先生が飛び出し第何區の候補者と新聞に廣告せられた人の名が見えずして其の周旋人が拔け掛けの功名そこで政黨員が二分無主義黨が三分中立が二分半で誰れも人物を知らぬものが一分半嗚呼奇と妙この國會選擧が濟んで奇事珍談愈々多し面白い哉明治二十三年下半季や金陵居士や硯田の大豐年

これから先は新議員その他の內幕のぞきが主になつて來る、第十六回、小川某當選祝賀會、太平樂最中當選者は投票買收の嫌疑で拘引され、會衆も關係者として禁足を喰ふ、第十七回、落選候補者、支拂の苦しみ(料理屋、金貸しなど)

第十八回、當選議員の俄勉强と無學(憲法、稅の區別、歲出節減のことその他)、第十九回、運動者が當選者空手形を口實に後ねだりをする(上京旅費、學費補助、登樓遊興費などの名で)、第二十回、選擧當てこみの俄新聞、才子が金持を說いて候補者にするとて金を出させて新聞を起し内々自分の運動をし、間際になつて自分で表面に出て當選する狡智を發く。第二十一回、新議員上京後の失敗、中央の政狀を見るため國會開設までに皆一度上京する、さうして生活の俄改造を始める。パイプ、安洋服、金時計、旅館もホテルにするものなど、ホテルに於ける裸體の失敗、旅館の瓦斯に生命を失はんとするなど、第二十二回、新議員同志の祝杯、互ひに投票買收を心配し合ふ、大臣の夜會の盛大に驚く、○○伯のニコポン主義に大に感激し、政費節減も政黨內閣の持論も、忘れて政府に人物があるやうに思ふ。第二十三回無所屬の新議員、無所屬では既成政黨からの勸誘も面倒であり且つ幅もきかぬので、何れへか所屬を定めようといふ(選擧當時の言論には關係なく、有利な待遇してくれる方に入らうといふ心算)、第二十四回、國會では何れ民業保護金削減が問題になる、これが通らぬと大變といふので從來保護金のお惠みに與かつてゐる會社が俄に新議員の買收を試みる、その效目で、數月後の國會で豫算討議の際、或る會社の保護金が漸つと助かつた(これは鐵腸の豫言が適中した)、第二十五回、書生同志の選擧談、議員の色分け、新議員の多くはお粗末千萬の人物、議場で發論出來るのは何人もあるまい云々、且つ意外の人物が多く出てゐる、これは選擧人の不熱心の外、多くは多年政友の同志打ちの爲めである、候補者の整理が必要云々、第二十六回、保守主義の某伯爵、味方になりさうな新議員を招いて洋食を饗し、且つ非政黨臭を吹きこむ、饗應席の滑稽いろいろ、第二十七回、新議員の生活振り、妓を擁し、服裝を奢る、俄紳士の態たらくが見られる、自分の生活から政府役人に同情して、政費節減など實行出來ぬと思ふ、田舍の妻君からの手紙は面白い、第二十八回、此の回以下が新に開設された國會議場の光景である。こゝでは、『二十三年未來記』の想像が大體當ることになつてゐる。自由改進兩黨に兎もかくとして、無主義の獨立黨は不秩序混亂を極める。議事傍聽、議員の無

學無識、第二十九回、無主義の獨立黨が急に政務の分擔をつくる、捧腹の滑稽がある、第三十回、廟堂貴顯と一紳士との密話、議場に政府反對の氣勢が强い、諸省定額減省論が通過した上、今や新聞集會二條例改正案も通過しさうである、愈々反抗すれば解散の外は無いが、それも面白くなし、正々堂々の反對には閉口するとの話、それで下院の議員の力を殺ぐには上院に入れること、金を使ふことの二法があるが何れも成功果を必し難い、そこで妙案として文官登用試驗規則改正案を出し、議員は試驗なしで奏任となれることにし、有力な反對者を知事なり參事官なりにする、これが實行されると內閣萬歲であると話し合ふ、第三十一回、大臣が議會答辯の苦心、演說の稽古の可笑しみ（豫算討議の仕度）、第三十二回、租稅改正案が通過し、地租五厘減が實現する、又各省定額節減の結果、不足補充の爲め新稅を與す。銀行稅、遊獵稅、所得稅率改正等、貴族院でも餘儀なくこれは認めたが、たゞ熱心に遊獵稅に反對した殿樣がある、第三十三回、政府も先手をうち集會條例を改正し、結社集會の自由を認めるが、婦人の政談會出入禁止を條件とする、そこで婦人連大に怒り、反對運動を始める、急激黨はこれを機に女權擴張運動の演說會を開く。第三十四回、議場にて敎育費の議論、溫和黨二割減、急激黨、干涉敎育不可、然し差し向き全額削除は不都合につき二割以上を減ずべしといふ、而かも急激黨雄辯家の數字は溫和黨のより少ない、そこで逆に政府委員から普通敎育必要の揚足をとられる。以上で、新議會に對する豫想は自然消滅となつてゐる。

さて鐵腸がこの小說を書いたのは何ういふつもりであらうか、鐵腸自身政治家であり、新議員の一人である以上、まさか單に選擧騷ぎの穴を穿つて讀者の一笑を博するといふだけのものではない、彼の心算では多分に警告的なものを含んでゐたと思はれる。既往の失態は二度と繰返さぬやう、又將來に對してはかゝる事實のなきやうといふ注意から書いたものである。暴露小說ではあるが、この點で、政治嫌ひの逍遙、政治から離れた櫻痴の書いた同種の暴露小

說とは違ふ。然し吾等には、かゝる警告も汲取れるが、同時に新議員の本質を暴露して、國會への豫想を示す態度に、矢張り裏切られたインテリゲンチヤ政治家の鬱憤といつたやうなものも見られるのである。

鐵腸の主張からすれば、新議員の第一資格は學問經驗ある人といふことでなくてはならぬ、インテリゲンチヤの中のインテリゲンチヤでなくてはならぬ、然るに實際選擧場裏に打つて出た人々は、大部分は學問經驗よりも、財産家、金を工夫し得る人々、前官吏等が多かつた。而かも此等の候補者は何等の抱負があつて議員候補に立つたかといふに、國政國策について格別に希望があるではなく理想があるではない、或る者は地方人に威張れる名譽の地位として、或る者は立身出世（就官就職）の手蔓として、又或る者はその歲費を目當てとし、割のよき商賣として、議員たらんことを望んだものである。眞實經論を實施しやうといふ意氣をもつて立つた人は少なかつた。國會開設は、十年來民權論者の玉手箱となつて來たものである、然るにそれがいよいよ蓋を開けてみると、當然選出されるべき人々が少くて、案外な人々が多く出てゐる、これは鐵腸の極めて心外としたところであつだ。彼からいへば、これ等の地方財産家その他の人々、つまり大ブルヂョアや地主などは自分達の後援をして自分達の理想たる政黨政治實現に盡力すべき筈の人々であつた。さう信じて多年奮鬪もして來たし、今なほ努力しつゝある。自分等の力でなければ、憲法政治も政黨內閣も十分に發達しないものと信じきつてゐる。然るに理想實現の一步手前で、今まで後援者と信じてゐたブルヂョア達が、俄に競爭者の態度を示し、黃金の力でインテリゲンチヤを抑へて我慾の犧牲にしてしまつた。鐵腸の心裏には何處かにさういふ不平なり反感なりが動いてゐたに違ひない、これが（前にも言つたが）、鐵腸の小說の暴露的分子の背後にいつもついてゐる氣持である。

新議員の大半が、無學無識、買收當選の、歲費勘定を仕事にしてゐる人間であればかゝる議員から成る新國會の如何なるものかも想察されるであらう。この小說に描かれた國會は、假令想像に成るにせよ、全く輕蔑すべき無價値な

世界である。衆俗の府、愚論の集團、何ともいひやうのない代ものである。『二十三年未來記』ではまだ眞面目に憂慮してゐるところがあつたが、この小說では、表面警告諷誡の意を示しつゝも、何處となく「態を見ろ」といふやうな白眼視した氣味がある。

この小說は、いはゞ理想主義者鐵腸の幻滅記錄である。實現した國會は民權主義者の理想とは甚だ緣遠いものであつたこと、然かも形の上では彼等の要求を或る程度まで滿してゐたから公然と表面的に苦情をいへなかつたこと、その不滿不平が諷刺的暴露文字となつて來ること、議員資格の第一は金、第二も金、第三も金であること、主として自分達のものと信じてゐた政治上の實力はいつか完全にブルヂョアに獨占されてゐることに氣がついたこと、等々、を吾等にも教へる。この意味で、小册子の割合に注意して讀まるべきものである。

だが善きにせよ惡きにせよ、かくの如きものが現實に國會である、實現された理想である。今後はこれを能ふ限り活用して政治的改革の成就に進まなければならぬ。現實は强い、今更何う出來るか。これで鐵腸等の多年の政治活動の一半が兎も角も一段落となつたといふべきであらう。鐵腸の政治小說も二十三年を一區劃として、國會問題が中心興味であつた前期の諸作から自然に後期に移る。さうして此の後期に於いては、彼等がその政治活動の他の一半に於いて要求してゐた國權伸張の問題が小說の中心興味となつて來るのである。

四　鐵腸政治小說・後期

鐵腸と國權伸張思想

度々前に述べたやうに明治初期の自由民權論はその特色として、國權伸張論と併立し得たのみならず、或る程度まで因果關係をさへもつことが出來たのである。從つて民權家鐵腸が又一面國權伸張論者であつたとしても、格別不思議とはいふべきでない、いな寧ろ鐵腸にして眞の民權論者であるならば、國權伸張的思想を懷抱せざるを得なかつたに違ひない。たゞ然し、二十年前後までの鐵腸は、何れかといへば、內主外從論であり、彼の關心は國權伸張よりも民政興起、國會開設に向つてゐた。これは彼の幾多の論文なり演說なり、乃至政治小說なりに徵しても知られる事實であつて、多言するまでもない。然るに二十三年以後の鐵腸は、明白に內政改良よりも國權伸張に興味を多くもつてゐることが、その著作に示されてゐる。內主外從ではない、外主內從である、勿論內政改良と關係なしに國權伸張を强調してゐるのではない、內政の改良、國會の改善、政黨政治の確立等も主張してはゐるが、これ等は何れも國權伸張、卽ち新興日本の對外發展といふことをば目標にして主張してゐるので、いはゞ國權伸張のための必要條件としてゞある。前にもいふ如く、鐵腸の態度なりイデオロギイなりの中に最初から國權伸張の分子があるのであり、全然新規に加入したものでないから、鐵腸のこの態度をもつて何等か根本的變化を意味するものゝやうに考へるのは誤謬であるが、變化したことは確かに變化したに違ひない。少くともその目標とするところが違つて來たことは勿論である。さうしてこの變化が明治二十年前後から二十三年までの間に生じたといふことも、前記の事實から自明のことと思ふがこの變化の性質上、又鐵腸の性格上、かゝる變化は、この三四年の間に種々の原因から影響されて累積的漸層的に生じて來たのだといふことも、確實なことと想像して可からう。それではかゝる變化を生ぜしめた種々の原因とは何のやうなものであるか。吾等は大凡、三つ數へることが出來る。（一）日本國家の急激な物質發展に伴ふ對外接觸の變化（二）歐洲諸國の露骨な東洋侵略主義の現れ、（三）世界に於ける日本の位地に對する鐵腸の認識を强めたこと、これである。三つとはいつても全然獨立した三つではない、必然的に關連してゐる三つであるから、一つといへばいひ得

る、即ち日本の現實の變化に對する鐵腸の自覺、これである。以上三つの原因のうち、第一は、條約改正問題といふ語にその諸事實が結晶されてゐるが、これについては世人が多少常識をもつて居り、又既に公刊されてゐる文献が幾部かあるから、これ等に就いて見るやうに希望し、今こゝでは述べない、たゞ注意すべきは物的發展と討韓、對支關係への結果である。第二は漠然たるものに聞えるかも知れないが、私の意味するのは、歐洲諸國が、東洋市場を爭奪するに急なる餘り、支那から朝鮮に對して露骨に爪牙を示し始めたことをいふ。東漸諸國のうち、英國は最も古く露國はこれに次ぐが、明治十五年以後殊に露骨な侵略的態度を取り出したのはフランスである（歐洲で損失したものを東洋で取返す意識があつたに違ひない）。西力東漸の歷史的事實を今更めかしく並べたてるではないが、フランスは明治十六年、安南を攻め、翌年柬埔塞（カンボヂヤ）を占領し、同年更に支那と戰端を開いて清佛戰爭が翌十八年に及び、少なからず我が國人をも覺醒した。英國は勿論その傳統政略を止めず、明治十九年にはブルマを占領した、獨逸も勿論負けてはゐない、これは南洋諸島（マーシヤル諸島、サモアその他）をわが有とする。中央亞細亞で英國に印度進出を阻まれた露國は東方に轉向して朝鮮に垂涎する。英國も對抗上朝鮮まで手を延すが、支那と連絡を取るといふ巧妙な手段でやる。陸上は支那に抑へさせ、自分は海上から遮切るといふのである。明治十八年の、英國海兵が無遠慮に巨文島を占領した事件は、我が朝野を愕然と驚かしたが、十九年の露韓保護密約も可成り我が國を神經過敏にした。朝鮮は當時の新興日本にとつては重大な大陸市場であるのみならず、國防上の藩塀として失ふことの出來ぬところである。こゝで一は自衞上一は對抗上、我が國の軍備擴張熱が猛烈に起り、遂に明治二十年三月の海防整備の勅令となる。鐵腸は國家の將來から、穩健ながら軍備擴張贊成論を唱へ、且つ陸軍よりも海軍を擴張充實せしむべきであるとの意見を發表したものである。[一] 第三は、迂廻したエキスプレッションで言つてあるが、簡短にいふと、鐵腸の英米洋行を指すのである。鐵腸の洋行は明治二十一年四月から翌二十二年二月まで約十箇月に過ぎないが、この爲めに彼の受けた影響

は、豫想外の大きなものがあつた。その歐米大陸に於ける見聞は、たとひ皮相的なものにせよ、事毎に祖國日本の現狀との對比を生んだ、彼は始めて外から日本を眺めることが出來た、彼は世界の現實に觸れることが出來たのみならず、これを背景にして日本の眞の姿を認識することが出來た。これは彼としては、多少豫想するところがなくもなかつたにせよ、正しくは一の發見であつた。彼は日本は物的發展に於いてはまだ歐米に多くを學ばなければならぬこと、然し歐米にのみ依賴しこれに心醉しこれを模倣して足れりとしてはならぬこと、歐米諸國は必ずしも日本の善友ではないこと、我が國は遂に我が國として立つところあるべきこと、目下は鋭意實力を養ふべきこと、國民的團結の必要等をその洋行によつて或は新しく學び或は舊い感銘を强めた。かくて鐵腸はその洋行より歸來の翌月卽ち二十二年三月二日、新富座に於ける大同派の大演說會に於いて、「內政外交ノ必要」と題して、前後三時間に及ぶ雄辯を揮ひ、その歐米に於ける見聞を披瀝して內政を批判し外交に注文をつけ、日本國民の覺悟を促した。この大演說の大要は、幸ひにも傍聽者の筆記によつて吾等の手に傳はつてゐるから、次に揭げることにする。(明治二十二年三月十五日發兌、明治之輿論第十二號)

氏は歸朝以來初めての演說なれば、本日の聽衆は皆氏を燒點として集まれり、氏着京の際は、宛も憲法發布の祝日にして、都民狂奔の烈しきを見て其甚だ大早計なるに驚きたる旨を述べ、夫れより歐米漫遊の途次、耳目に感觸せしものを叙述して曰く、余は先づ桑港に至り、カリホルニヤの建國日淺きにも拘はらず、今日の隆盛を致したる國民の勉强と忍耐とに感じ、ロツキー山を過ぎ、隧道の壯大にして、其國の富力に驚き、英國に至り、都街の壯麗、地下鐵道の工事の如き、或は全衞製造所を以て充たしたる「マンチエスタア」の如き、我國人の容易に競爭する能はざるに感じ、佛國に渡り、國民の報國心に富むことを羨み、埃及に遊び、其國の衰運に至りし跡を考へ、其他アデン、コロンボ、新嘉坡、香港の如き、樞要の港灣は皆英佛虎狼の掌中に歸し、我々東洋人をして轉た震慄の情に

堪へさらしむ、余の漫遊中、目に觸れ耳に聽くもの、皆悲慘の感を惹かざるものなしと說き、屢々東洋の形勢甚だ危急たる旨を告て、夫れより本論に入り、先づ內政に就て國是を定むるの最必要なるを論じ、英國の海軍の如き、佛國の陸軍の如き、米國の金力の如き、各國皆一定の國是あり、然るに我國は如何、余未だ之を知らず、國是定まらず、政略常に變更するは最も憂ふべき者なりと說き、我國敎育方針の常に變更すること、香川縣の廢置、參事院の改稱の如き引例を擧げ、且地方制度を評して曰く自治の制は嘉す可きものなるも、名實相伴はず、或は其地方の習慣を破る如きことあらば如何、習慣は實に地方自治の基礎たらざる可からず、夫の町村の名稱までも變更せんとする如きに至ては其弊蓋し豫想外に出づることあらん、世人動もすれば佛國人を指して習慣破壞の民なりとす、然れども未だ我が國人に及ばざるものあるが如し、されば英國知名の政治家チャーレス・ヂルク氏は、其著書中、露國政府を評して Japanese System を學ぶと謂へり、豈慨くべきことならずや云々と論じ來り、夫れより我國官吏の俸給、他國に比例して甚だ高きに過ぐる事、虛飾の弊害を除くべき事、外人崇拜の念を絕たざる可からざる事を說き、殊に市區改正に就ては、都民の財力未だ足らざる事、二十五間の道路は甚だ廣きに失する事、東京は地震の餘脈地なれば大厦高樓を建設する能はざる事等、着々其非を鳴らし、或は經濟上より說き、或は地質上より論じ、駁論周到餘すなく、頗る聽衆を動かしたるものゝ如し(中略)、氏は夫より外交問題に論及し、支那日本の間を親密ならしむべき事、歐洲諸國に對し、交際に偏頗なく、務て圓滑ならしむべき事を述べ、猶一步を進み、條約改正に關して詳細なる議論を試みたり、氏は條約を改正せんとするに當り、彼れ若し我の要求を斥けば斷然彼と交際を斷つ決心なかる可からず、夫の我が要求を容れたる國に限りて改正を爲し、以て漸次他國を誘はんと欲する如きは、決して成功を期す可きものにあらず、要するに條約の改正は、之を破棄するにあらずんば其完きを得る能はざるなりと斷言し、或は倫敦タイムスの社說を引き、或は曾て印度政略に關するハーチントンの演說を藉り、最も熱心に之を

演述せり、猶氏は終りに臨み、內政外交は實に我政府に忠告して共矯正を促がさゞるを得ざるところなり、然れども徒に政府にのみ依賴せず、我々國民たるものも亦自ら共策を講ぜざる可からず、然らば如何にして可ならん乎、唯國民の大同團結を要するのみ、世人動もすれば大同團結なる語を目して或は後藤伯の大同團結となし、或は舊自由黨の再出となすものありと雖も、決して然るにあらず、我國の風潮卽ち輿論の然らしむるに出でたるのみ、見よ、英國に於て保守聯合の二黨相團結して、グラッドストン氏と輸贏を決し、遂に今日の內閣を致したるは、大同團結の力にあらずして何ぞや、又佛國に於てフロケー氏の內閣を斃したるものは、卽ちブランジェー派と王政黨との大同團結したるにあらずや、英佛今日の政治社會は實に大同團結に支配せられつゝあるものと謂はざる可からざるなり云々と論して共局を結べり。

その歐米文明の見聞觀察は如何にも皮相的であり、又英佛の政黨聯合を我が國の大同團結と同一のものと見る如き見當違ひもあるが、大體からいつて鐵腸の態度に從來見ざるところの國權伸張的意識が罩つてゐることは、看取されるではないか。彼が、歸朝直後、後藤伯を輔けて身を挺して奔走した大同團結運動が、その「危急存亡の秋」といふモツトーによつて國權主義的一面を示してゐた爲めにこそ、あれ程の半國民運動とまでなつたのである。

以上は、後期の鐵腸を語る前置の心算であるが、それにしては聊か縷々と語り過ぎたかも知れない、然しこれによつて吾等は、明治二十年の鐵腸がかゝる種々大小の原因に漸次强く影響されて二十三年以後の鐵腸となるに至つたものと斷じても、さう無根據と咎められることがあるまいと信ずる。それで可いのである。では以下、鐵腸政治小說の後期、卽ち二十三年以後の諸作に就いて語ることにしよう。

註(一) 軍備擴張論は諸所に散見するが、明治十九年十二月二十二日朝野社說等々を參照せよ。

後期の諸作中第一に取り上ぐべきものは、この『嫩綠』である、これは新聞「國會」に連載されたまゝで（中絕）單行本になつてゐない、從つて名前さへが、恐らく今紹介されるのが最初であらう。

「政治小說 嫩　綠」

此の小說は二十三年十二月末から鐵腸が箱根で執筆したもので、初め『深山櫻』と題される筈であつた。同年十二月二十八日の國會に——

鐵腸翁が箱根入浴中に起稿すべき深山櫻と題する小說を連載云々

と見えてゐるのでそれが分かるが、翌年一月いよいよ小說が新聞紙上に出たときには「嫩綠」と改められてゐる。

鐵腸の二十三年以後の政治小說は國權伸張意識が中心だと、前節に述べたが、この作はまだ直接に國權伸張意識を主旨としたものではない、議會批判の暴露的興味が直接の主旨であり、國權意識は間接にそれに伴なつて浸み出されてゐるのみである。

『嫩綠』に出る主要な人物は次の三人である、

櫻木　薫　主人公ともいふべき人物。某黨の少壯議員、國家の利害を以て言動の主義とし、官民間に調和を試みんとする。

梅田芳子　政治家を理想の夫とせんとする新時代の女性、櫻木の幼馴染。

松林　茂　櫻木の敵役。某黨屈指の政治家、舊式の政黨人。私利黨利に敏なり。

劈頭吾等に紹介されるのは、第何議會かの豫算案討議の光景である（第一だが第一と斷言しない）。然し鐵腸は討議

そのものゝ叙述にさう力を入れてゐない、これは當時としては別に眞物の討議筆記が新聞に附いて居り、且つ鐵腸の眞意は、たゞ豫算討議に對する議場の空氣に感情派と理性派、政黨派と國家派があること（前者は議會史上硬派と呼ばれ、後者は軟派と呼ばれるが、然し初めはたゞ文字通りの意味で褒貶の意があるのではなかつた）を述れば足りたのだからであらう。

某黨屈指の議員松林茂は、某省の定額豫算を何うしても二十餘萬圓程減じなくてはならぬと論ずる（これは政黨として出した空手形に支配されてゐるから）、これに對して同じ黨ながら櫻木薫は敢然反對し、民力休養の主旨は可なるも、感情的に無理な減額を試みて成立せる法律の施行に故障を生ずるのは不可也といふ。松林はこれに駁論を試みるが、それは漫罵に止まつて櫻木を屈服せしめ得ない。傍聽人は當年の松林の衰へたこと、議會でも學問ある青年には叶はぬことを評判し、皆櫻木を褒める。傍聽人中梅田芳子、松山春子の二佳人がゐたが、芳子は殊に櫻木の印象を深く受ける。

梅田芳子の父は興業會社の重役であるが、これは政府の保護金を受けて成立つてゐる會社なので、議會で保護會社の貸與金を豫算から削除するといふ噂がある折柄皆大に心配してゐる。そこで會社側では削減阻止の運動を始め政黨買收に着手する。さうして先づ某黨の有力者に手入れし、第一に松林を抱込まうとかゝる。松林は會社側の饗應の席でわざと保護金の危いこと、然しそれは自黨の態度で何うにもなること、自黨は自分の力で何うにも動くことを諷示して、萬事賄賂次第と謎をかける。その上、好色漢の彼は重役梅田の娘芳子をいつか議會傍聽席で見染めてゐたものと見え、暗に芳子を妻に欲しいと仄めかす。

芳子は櫻木の面影を忘れかねてゐたが、一日海水浴の歸り大磯からの汽車の中で櫻木に會ひ、互ひに顔に見覺えのあるところから、不思議に思つて話し合つて見ると、櫻木は舊姓中山といひ、二人は幼馴染みであつたことが分かり

改めて親交を結ぶ。櫻木の方でも芳子を憎からず思ひ始める。

かくて芳子は、父から松林の意向を聞かされ、自分の爲め會社の爲めに松林の妻になつてくれと說かれるが、新時代の教育を受けて理義に明らかな彼の女は、松林の人物の如何はしいこと、今有名な人に嫁するより將來有望の人に嫁したいことを語り、父の意を聞き入れない。そこへ先日の約束通り櫻木が芳子を尋ねて來る。芳子の父母も會ふと櫻木を知らない顏ではない上、芳子が深く思ひ込んでゐる樣子といひ、櫻木の人物も可いしするので、あきらめて芳子の意に任せる。

松林は櫻木が同じ黨中にありながら正論を唱へて屈せず、自己の勢力も大に薄れて來るのに業を沸し、遂に傳統の腕力主義で政局の紛糾を解決しようと時代違ひの妄想を起し、腹心の壯士に酒肉を與へ、それとなく煽動して櫻木を威迫せしめる。櫻木が自分に反して一派を立てんとする野心があるので黨內が纏まらぬ、且つ櫻木は興業會社の梅田と親交があり、會社から五千金を收受して保護金下附の達成を承諾した、自分の許へも若干金持つて來たが自分は受けぬ云々。壯士は平生櫻木の正直な爲人を知つてゐるので容易に信じないのを、松林は僞造の手紙を見せて納得させる。さうして例によつて、先づ新聞を利用し、聲を大にして櫻木が梅田に買收されたことを吹聽する。梅田父子はこれを讀んで松林の奸策に成ることを看破し、櫻木の爲めに心配する。

松林に煽動され且つ手當を買つた此の壯士は櫻木を脅しに來るが、書生に追ひ返される。そこへ芳子が尋ねて來て自分の書生が壯士仲間から聞いた一大事を忠告する。今夜富士見軒の會の歸途櫻木を暗打する計畫が成つてゐるので今夜の會だけは出てくれるなといふのである。櫻木はさういふ計畫のある譯はないといつて信ぜぬが、兎にかく芳子の厚意を入れて出席を思ひ止まる。芳子は喜んで歸つたが、櫻木から借りた提灯のために、途中壯士のために車を覆されて負傷する。然しその時壯士等が松林からの密書を落して逃げたので、それが芳子の手に入る。この手紙で、櫻

木を陥入れんとする計劃が松林の手に成つたこと、松林が過激の言を吐くのは、政府の某々と通謀してゐて、政府と議會とを衝突させて中にゐて利を占めようといふのであることが、分明になる。芳子はこれを櫻木に送る。

松林の部下が後でこれに氣づいて種々工夫して密書を取返さうとするが、出來ない。松林はこれを聞いて大に驚く、同時に同黨の〇〇倶樂部員を煽動して櫻木排斥を一氣にやつてのけようとする。一つは倶樂部所屬の議員の間にも、政府の〇〇伯と結んでわざと過激な事をするといふこと、壯士をもつて反對黨を脅すは不可也といふこと、議員中會社より請托をうけてゐる者があるといふことが、誰いふとなく知れ渡り、松林は一抹の不安を感じて來たので、急いで〇〇伯との打ち合せ通りに、わざと過激主義を揮廻して解散まで導かうといふのである。

この間櫻木は、前夜見た惡夢についてある覺悟をする。その夢では、破壞黨（過激黨）の氣勢が昂るので遂に巡査と爭ふやうになり、世間が物騷になる。新議事堂の火事も破壞黨壯士の爆彈の爲めだといふ。內閣では、議員が壯士に制されて爲すなく、又議員中破壞的陰謀を執るものが多いので、遂に解散に決したといふ。櫻木はこゝで夢さめて、邦家の前途を憂へる餘り、一身を犧牲にして立たんと決心する。櫻木の感慨は、この作の眼目であり、又直に鐵腸の本心を吐露したものである。歐洲の立憲政體は革命の結果であるが、日本のそれは平和の裏に成つたものである、それだけに十分注意してその基礎を立てたい。だがこの頃の政界の有樣では懸念のことが多い。議會が小黨に分裂してゐる上、又、感情的に二分してゐる、壯士が橫行して議員の言動に自由がない、世間に迎合して空な過激論の勢力が多くなる。議員が國家の利害を考へず、政府も亦對議會の處置を誤まつた。これでは必ず衝突して無事にはいかぬ。既に議會中に保安條例の執行（壯士退去）があり、議事堂燒失があり、解散の勅令が出るばかりになつてゐるといふが官民の軋轢も極つた。民間で喝釆されるのは無責任な暴論である。政界の先輩は世間態を繕ろつて皆破壞主義に贊成する。これではならぬ、然し議員に態度を改めさせる前に政府にも改めさせなくてはならぬ。櫻木は夜の明けるのも

知らずに、調和の策を考慮する。さうして一策を考へつく。それは梅田芳子が某伯夫人（〇〇伯ならぬ）と知己なるより、芳子の手から夫人を通して某伯に意見書を送ることとである。伯も、議會の過度の興奮と官民調和を計る人のないのを嘆じ櫻木の態度に感心してゐたところなので、直に聲息が通じられる。かくて他派の議員中にも漸く自覺する連中が出來、櫻木に味方する人々も殖える。

丁度これから櫻木が中心で如何に官民調和の策を行はれるかゞ期待される面白い場面になるのであるが、惜しいかな、こゝで中絶してゐる、小說が小說だけにこの中絶には必ず何か有力な理由があつたに違ひない、然し鐵腸も新聞社も何等語るところなしに、第二十回を以て突然中絶せしめてゐる。

以上の梗概を讀んでも多少察せられると思ふが、この小說はその一面に『雪中梅』、『花間鶯』に極めて似たものをもつてゐるといひ得る。續篇ともいへず、外篇ともいへまいが、『雪中梅』や『花間鶯』の骨子を新しい舞臺に當て嵌めようとしたものだとはいつても可さゝうに思ふ。形の上で相似た點はいろいろあるが、根本的構想として、少壯、中老の二政治家が一佳人を爭ふ、さうして此の二人はその所屬が同じであり乍ら政治的立場に於いて對立的であるといふ點が先づ同じである。少壯者は正義派を代表し、國家の利害をその言動の準則とするに對し、中老者は奸黨側を代表して、私利黨略によつて動かうとし、事毎に前者を陷入れようとする。これも同じてある。感情的に多年反目した官民は感情的に衝突する。官民の軋轢に對し、少壯者が國家の前途を憂慮し、調和策を講じようとするが、中老者は却つて不調和を煽動して、中間にゐて利するところあらんと欲する。これも同じである。結局少壯者の主張が勝ち、中老者が敗けて、少壯者の天下となるといふことも、この小說ではまだそこまで明白にされてゐないが、明白と想定しても可からう。たゞ違ふのは、『雪中梅』や『花間鶯』には、書生が多く活躍し、あくまでも書生流の元氣があるが、この作にはそれがない、壯士は出るには出るが、好い意味での書生臭がしない、さうして主要人物は何れも一國の議

員、即ち紳士である。又舞臺は全く違ふ、一は將來開設される國會を目標として想像的に動き、これは現に開設されて討論中の議會を眼中に置いて、現實的に語られてゐる。
描寫手法や道具立てに似通つたところのあるのは勿論である。
これは大體形の上の相似た點を學たのであるが、更に作の主意そのものに至つては、似たとはおろか、全然同じである。この小說に於ける作者の理想も、國會改良、官民調和である。たゞ『雪中梅』、『花間鶯』に於ては、國會をかくかくのものにしたくない、かくかくのものにしたいといふ將來への希望であるが、この作では正に開設された國會を前にして、現實の弊を矯正しようといふのである。それだけこの作の方が讀者に強く響くのは當然である。
この作で鐵腸が語る國會改良の要は、流石に前記の諸作に比してやゝ具體的になつてゐる。こゝで國會改良とは、即ち多年政府から壓抑されてゐた鬱憤を晴すつもりで感情的に政府に衝突するのは不可ない、國會は冷靜にその本來の職分たる政府監督の仕事を行はなければならぬ。それには勿論議員自身の頭腦を改良すべきで、國會議員は地方的利害に拘束されずに國家を目標として言動すべきであり、その所信によつて正々堂々と献替すべきである。且つその職分が政府の實際的施設、即ち政治工作に關係するものであるから、論議も自然精密數理的となるを免れず、この點で漢學者生流の天下國家論や、維新の策士連が試みた舊式黨人的の驅引は何の役に立たない。且つ議場の爭ひは議場に止むべく、議場での敗を議場外で取返さうとし、言論の解決を暴力によつて定めようとする如きは、言語道斷である。即ち議員の理想的資格をいへば、一面に國家を念とする志士的風格をもつと共に、一面には學術に富み精密な頭腦を有する實務家でなければならぬ、同時に人格秀高で文明的紳士として恥かしくない人物たるを要する。鐵腸は、櫻木によつてこれを描き出さうとしたものであらう。さうして國會改良、議員改良は勿論、官民調和を前提としてのことであるから、鐵腸が政府に對しても態度緩和、民意尊重を要望してゐるのは當然である。然しその要望の手段が

口癖の正々堂々ではなく、舊式の黨人的策謀によつてゐるのは、假令一時の便法と辯解したにしても、鐵腸自身の舊式策士的意識を暴露して、案外封建的イデオロギイが殘つて居るを示してゐるのは、遺憾である。この點は、『花間鶯』に於ける國野の態度の方がまだまだ立派であるといふべきであらう。

鐵腸は、以上の理想を宣傳するために、『花間鶯』等の諸作で試みた以上に政界乃至議會の現實的事件を利用した。勿論多少のカムフラージュとして架空的人物、想像的筋立を設けてゐるが、作中の事件は大概事實の潤飾したもので當時の政界の活寫たるに變りはない。その主なもの丶二三について語つて置く。

此の作に寫された議會は、勿論二十三年十二月に開院した第一議會のことで、某黨とは自由黨、某倶樂部とは彌生倶樂部（自由黨所屬議員中心）○○集會所とは明白に議員集會所（改進黨中心）を指すものに違ひない。第一議會の豫算案討議の際の硬派軟派の騷動は、議會史上政治史上有名なもので、それをこ丶に事々して繰返して語る必要はないが、要は、衆議院の豫算委員會が政府案に大削減を加へ、官制俸給制を變更して自ら豫算を立案し、所謂査定案なるものを造り上げたことである。これが造り上げられるまでには、裏面に種々な政治的タクチック行はれたが、それはそれとして畢竟多年の官民軋轢から感情的になつた議會が民力休養の空手形を強て實にすべく故意に政府反抗に動いた形があることは事實である。それで議員中、この査定案を支持して遮二無二政府をしてこれに屈服せしめようといふのが硬派、國家の體面とか、立憲政治の圓滿なる發達とか、「第一議會だけは」とか、豫算討議に名をかりての官制改廢は議院として違法とか、國家の發達のためとかいふ名義でこの査定案を承知すまいとか丶るのが軟派といはれた。この小說によると、某黨卽ち自由黨の對豫算態度が二つに分裂してゐること、議員中政府大官と通謀してゐるものがあることが描かれてゐるが、これは正にこの通りで、査定案に對する硬軟の爭ひから自由黨は分裂して終に多數の脫黨者を出した。此の頃の自由黨は今の政黨と違つて院外者の勢力が議員より強かつた、從つて議員の言動は始終

院外から制肘される、そこがこの爭ひの一根源である。又豫算査定案を造つた議員中にも政府大官（主として後藤象二郎）と連絡がついてゐたことは、公然の秘密であつた。

この小說で鐵腸の分身たる少壯議員櫻木が豫算削減不當、所謂軟論を唱へてゐるが、これが直ちに此の時の鐵腸の所信を示したものなるは、言ふまでもない。この點で『嫩綠』は鐵腸の對豫算態度の辯解小說といはれないこともない。豫算査定案に反對する鐵腸の表面の主な理由、所謂軟論の根據は、削減不當、卽ち議會の越權は憲法違犯だといふ點にあつた。彼は二十四年二月十五日の國會に「豫算案査定に就き、吾輩の心事を明告し且つ世の所謂硬派諸氏に戒言す」といふ論文を掲げてその態度を明らかにしたが、それによると、冗費節約は無論であるが、今回の査定案は削減にその道を以てしない、官制變更にまで立ち入るのは、憲法所定の行政機關を亂すものであつて、賛成出來ない、官制俸給を變更せんとすれば、別に道なきではない、二者混同するは議院の越權である、といふのである。この文章は、それより八日前卽ち二月六日の議院で鐵腸が試みた演說を要約したとも見えるものであるが、この二月六日の演說は當時討死演說として甚だ有名であつたのみならず、議會の識者老成家の一部の對豫算査定案態度を代表するものであり、査定案反對が內實は國家主義、國權主義から來てゐることが分かつて、種々敎へられるところがあつて面白いから少し長いが左に抄出して見よう。（國會第六十一號附錄議事筆記による）。

○末廣重恭君（二六二）　本員は豫算を議するに先ち豫算會議の順序方法を定むるを至當と信ず先達より本員は每戰每敗議場は殆んど感情の爲めに支配せられ黨派心勢力を得二大黨派結合して勢力ありて議場を壓倒しつゝあり吾々は實に道理に基き國家の利害を考へ百年の大計を思ふ者なれども議場惡弊の爲には今日も失敗を免れず湊川の討死を爲すあらんも自ら期する所なり（中略）實に天下人民は十年の久しき議會の開設を待ち歐洲諸國人民は本年、議會に注目して立憲政體の東洋に行はるゝや否やを判斷せんとせり吾々の責任は誠に至大なり一方は專制政治の弊害を

掃清し一方は政費を節減し輿論の希望する地租を輕減し以て國家の基礎を建てんとす然るに今や此企望は水泡に屬せんとす之を水泡に爲さしむる者は何ぞや查定案是なり凡そ改革を爲すには自ら順序あり國家の經濟を立てんとすれば必ず其道を以てせざるべからず（中略）元來議院には三大權あり

第一　豫算贊翼權

第二　法律提出及議定權

第三　上奏權

是なり吾人已に此權利を有す然れば則第一の場合に於て法律勅令の範圍內に於て五六百萬圓を減ずるを得べく個は本年の議會に期し得らるゝ者にして順序を立てゝ改革を爲せば第二の權利を利用して登記法裁判所構成法議院法を改正せば幾十萬圓を減ずるを得ん是は本年行はるべからざるものは明年に期すべく又上奏權を利用して官制を改革せば百萬圓以上の節減を爲すを得べし是は本年より調査して明年に期し此如して以て政費節減を爲すべく以て輿論の希望する地租五厘を減ずべし個は衆議院相當の手段を盡す者なり順序ある改革なり此の適當の手段あるをも顧みず三權を混同して豫算のみを以て政費節減唯一の方法とし官制に立入り法律に立入り秩序なく順序なき議決を爲さんとするに至りては決して政費節減の目的を達する能はず云々

かくて査定案採用の結果法律を改廢せざるべからざる諸點を指摘し、かゝる豫算はこのまゝでは實行不能であるから宜しく査定案を廢すべしと論じ、「議院の現內閣を攻擊するの一事は余も贊成なり、」然しこれ、は手段に於て誤まつてゐる。査定案を强行せば、貴族院は反對すべく、政府に査定案拒絕の理由を能ふべく、萬一解散になれば衆議院に責任がある、或は、査定案主張者は案の行はれぬを知るも世間の人氣の爲めに敢てするのみとの風說があるが——此疑惑を起し此想像を起すは畢竟處置の危怪なるに出づ諸君よ諸君は第一期の帝國議會に立ちては自ら大責任を帶

ぶるを知れ又東洋に於て立憲政體を創むるの容易ならざるを知れ國家の大事に臨みては一身の名利を顧みる可からず又黨派の僻心を去らざるべからず一の感情の爲に支配されて査定案を固守すれば我々の企望する政事上の大改革は實行するを得ず政費の節減も目的を達するを得ず、地租の輕減もまた歲月を待たざるを得ざるなり故に我々は何處迄も豫算委員の主義に反對するなり之を決着して始めて豫算會議を爲すを得べしと信ず云々

鐵腸等が査定案反對の動機又び裏面のイデオロギイはこれでよく分かるのである。それにしても、この作で、鐵腸は櫻木黨をして今少し豫算論をせしむべきであつた。

次にこの小說の一趣向となつてゐるのは、興業會社の保護金云々と議員買收問題である。これも豫算討議に緣があるので、自由黨はその年來の主張から、民間會社への政府の補助金を案から削除するに決してゐた、殊に睨まれたのは、日本郵船會社であつた。然るに郵船會社では始め改進黨に藥を廻して宜しく賴んで置いたが、自由黨の態度次第で保護金が危險となつたので俄に自由黨議員の買收を試みて、保護金の可決確定に成功したのである。これは當時の新聞(二)にも特種となつて出てゐる。

今一つ、壯士橫行の件も當時の新聞雜報を賑はした一つで、壯士に最も手を燒いたのはその本家たる自由黨であつたのも皮肉である。壯士は院內外の硬派議員の何人かに使嗾されて、盛んに所謂軟派の議員を脅迫した。或は彌生俱樂部で流血の慘事を演じたり、或は往來で議員を毆打したり、議員の家宅に浸入せんとしたり、亂暴を極めたので、遂に保安條例で退去させられたものも數名あつた。この壯士の橫行の裏面にも何等か機關(からくり)があつたことは、大體この小說に說いてある通りであらう。

當時政府に解散の決心があつたことも、誠しやかに傳はつてゐるが、眞僞は保しない。又、櫻木が密に意見書を送つた某伯は、何人か。その事柄は勿論眞の小說であらうが、その人は何人か指すところがあつたらうと思ふ。所謂〇

○伯は後藤であるとし、某伯は何人であるか分かつたら面白いと思ふが、遺憾ながら分からない。

なほ、女人傍聽は今日からは格別何でもない事であるが、これも當時としては場當りの一つだつたので、最初規則草案の出來たとき傍聽の許されなかつた時に、女性社會、殊に新時代の淑女連は大に憤慨した、中には改進黨に投書までして騷いだものがあつた、それで結局許されることになつたが、一時は可成り喧しい問題であつた(『國會開設之前後』中に女人を政談會場に出入させてはならぬといふので騷ぐところがあるが、この件と參照すべきである)。

何分にも未完成の作品であり、テクニク方面からはさう言ふこともないが、プロットの全體として『雪中梅』や『花間鶯』に似たことは、前に述べた通りである。又大體事實によりそれに多少のカムフラージュを施してゐる點も前に述べた。然し大體の印象をいへば、事實によつたところと、鐵腸の空想に成るところとが鮮かに分り過ぎてそぐはない、例へば松林と櫻木との對立が自然に受けとれるのに、芳子と梅田との關係は餘りに造り物といふことが明白である。又、一部分だから仕方ないにしても、松林の獨舞臺であり過ぎ、櫻木の方は賴りがなさ過ぎる。芳子を使つて某伯に近づからうとする考は實に拙である。拙の又拙なるものである。鐵腸の心では案外氣の利いた案を出したつもりかも知れないが、寧ろ此の小說にとつて致命の一打といひたい位である。芳子自身これで櫻木の傀儡なことを證明するのみならず、櫻木の唱へる主義主張がこの一擧動で全然價値を失なつてしまふ。

性格の點では、通篇の表現がまだ說明體を脫してゐないため、矢張り遺憾が多く、生きて獨立してゐない。櫻木は鐵腸の分身ではあるが、『花間鶯』の國野などより元氣もなく、活動も鈍く、印象も薄い。松林は、川岸の役であるが櫻木よりも複雜で面白い性格となつてゐる、恐らく幾多のモデルから合成したものであらう。松林の配下の探偵武田が又、如何にもさもありさうな人物に出來てゐる。氣の毒なのは芳子である。折角新時代の獨立自覺せる女性を代表

させて、世間を大當てにあてるつもりで作中に紹介されたものに違ひないが、今もいふやうに全くの傀儡的存在であり、父の意に逆つて松林を拒むところに多少の意氣を示すだけ、女性描寫は矢張り鐵腸の短とするところである。背景も、例の說明體のために背景として生きたところがない、描寫法の罪である。たゞ當時の政界の活寫ともいふべき一種の空氣を捉へてゐる點は認めて可い。

文章は、以前に比して老練にはなつたが、この頃からそろそろ鐵腸臭ともいふべき一種の臭味がともなふことも事實である。

此の小說は、鐵腸としては一面得意な作であるべき筈である、何となれば二十三年以後の國會豫言が相當の的中率を示したからである。だが一面からいへば不本意の作であつたかも知れない、それは、彼が『二十三年未來記』以來口を酸くして警告して來た理想が殆んど一つも具體的に貫行されたとは見えず、同じ理想を文切形で繰返さなければならないからである。小說としては長篇の頭だけのやうな不具の作物であり、テクニク上からも長所も進歩もないが最初の議會政治に對する生々しい批判と絕望的氣持、いはゞ轉囘點に立つ鐵腸の姿を幾分でも反映してゐるところにこの小說の取柄があると見て可からう。

註（一） 明治二十四年二月五日國會第五十九號雜報記事（「卑劣極まる」と題するもの）

『黃金之花』

これは殆んど政治小說とはいひ得ないもので、單に時事に對する諷刺警告を潛めた作たるに過ぎないが、一言だけ

說明して置く。

今いつたその時事とは、明治二十三年に東京で水道工事に着手することになり、二十四年にはその財源を市民の負擔にすると決定した。この時、水道工事の請負について種々競爭があつて、例の如く府會市會へも利權家の手が伸び一寸騷動になりかけたことがある。(二十八―九年の不正鐵管事件とは全く違ふ)。鐵腸は、この事件を取り込んで、警告諷刺の意を示し、國政ならぬ市政改革の意を仄めかしたものである。即ち、貝野某といふ前途有望な府會議員市會議員が、一美人と結婚したさから、及び倒れかけた身代を立て直したさから、密に友人の勸めで、水道工事を一手に引受けることを運動してゐる土木會社の社長と會ひ、その金品を受けて、市會で土木會社の便宜を計つてやる。それで水道は土木會社の一手で工事することになり、年々五萬圓の保護金も下附されることになつたが、間もなく貝野等は會社から收賄したことが新聞で發かれ、身代は立て直したものゝ、美人には拒まれ、議員としての將來を全く犧牲にしてしまつたといふ。これを通讀するに、かういふ事件があつてこの小說を書いたといふよりも、寧ろかういふ事件が起りさうだ、起つてはならぬ、といふ心算で書いたと見る方が當つてゐやう。

此の時は、市民間に工事費用負擔に堪へずとの理由で反對やら實施延期請願やらがあり、結局實際起工したのは二十六年、落成したのは三十二年であるが、その間有名な不正鐵管事件が生じて世人をして顰蹙せしめた。

『黃金の花』には、以上の外、政治小說としては何の語るべきものがない。

『政事小說 南洋の大波瀾』

『あらしのなごり』

『政治小說大　海　原』

此等の三部は、その內容の性質上當然一括して語られるのを便とするから、一括して語る。別に所謂三部作といふのではない、第二は第一の拾遺ともいふべきもの、第三は第一第二を合して訂正改題したものである。

この小說は、その大掛りなのに似ず、本筋は割合に單純なもので、成る程「大波瀾」はあつても、戯場の人造波瀾と餘り變らないから、本質的には格別複雜な物語りではない。

本筋の表面は、ヒリッピン獨立の物語である。多加山峻(たかやまたけし)は生粹のマニラ人で、相當の資產も敎育もあり、從來一讀書生として殆んど世事を顧みなかつたが、スペイン太守の虐政とスペイン僧侶の橫暴の餘りに甚いのに奮激し、潛に同志を求めてヒリッピン獨立を企てるに至つた。一日、街上で騎馬のスペイン人から法外な侮辱を受けたので、我を忘れて相手を追跡する。だが道を失なつて彷徨してゐるうち、マニラ名物の大雷雨に會ひ、漸く野中の一廢屋に逃げこむ。さうしてこゝで落雷の爲めに氣絕した一美人を救ふ。美人は瀧川淸子といひ、矢張りマニラの豪商瀧川某の一人娘である。この日野外に散步に出ると、かねて淸子に思ひをかけてゐた監守長のスペイン人讓治に出會ひ、危く暴行をうけるところを、辛うじてこゝに逃げのびたものであつた。多加山は益々スペイン人を憎む心を固める。二人は互ひに慕ひ合ふやうになる。

淸子の父は商人でこそあれ、矢張スペイン人の跋扈を憤ること並々でなく、これも密々獨立の計畫を立てゝゐたので、淸子を助けた緣で多加山がその家に出入するうち、何時とはなく、瀧川と腹心を打ち明けてヒリッピン獨立の大

計を相談し合ふまでになつた。たゞ多加山は歐洲の他の强國の援助でスペインの羈絆を脱しようとし、瀧川は東洋の力で、主として日本の助力で獨立を達成しようとする。且つ瀧川は多加山の擧兵計畫が血氣に任せた無謀のものであることを忠告するが、多加山は却つてこれを因循と誤解し、一時疎隔する。ところが一夜瀧川家に怪盗が忍び込み、主人に瀕死の重傷を負はせ、家寶の銘刀を盗んで行つてしまふ。瀧川は急いで多加山を呼んで、清子と結婚してこの家を繼いだ上、自分の遺志を果さんことを賴んで瞑目する。多加山も、こゝで始めて瀧川老人の案に從ひ、日本人の援助を求めることゝし、大事の準備を十分に成遂げるために、持重主義をとり、陰謀の本部を清子の商會に置いて人知れず計畫實現の機を覗つてゐる。だが多加山の志を知らぬ血氣の連中は、多加山を變節したものと考へ、暗殺しようとする者さへ出る。そのうちに島に不作のことがあり、マニラ煙草の專賣法の實施があり、島民の不平不滿は並々でなく高まる。多加山は、大事着手の準備として、島民の輿論啓導のため、密に人を香港にやつて、島政治攻擊の檄文を出版させ、これを島中に撒布する。警察は血眼になつてその張本人を探すが分からない。ところが瀧川家の下男九藏といふのが、清子に思ひをかけてゐる讓治の手先であつたので、多加山の計畫は讓治に分かる。讓治は國事犯檢擧の功と戀敵除去の一石二鳥主義で、多加山を密告する。警察官は香港商會を取り卷いたので、居合した同志は大事露顯と知り、用意の爆發藥に點火して家もろとも一切の證據物を煙にしてしまふ。多加山は亡命しようといふところを捕まつて投獄される。清子は讓治の要求で無事に釋放される。讓治は職權をかさに、多加山を酷遇し、清子の差入を途中で奪取つて、直向死ねがしにする。その一方、清子の方へは日參して、多加山の一命は今自分の掌中にあるから清子次第で何うにでもなるぞと脅して、結婚を承諾させようとする。清子は勿論聞入れはしないが、多加山の生命のことを考へて大に心配する。事實、多加山は衰弱を重ね、有爲の志を齎して獄中に死せんとする。ところが、天なる哉、突如大地震が起つて、牢獄が崩れ、多數の死傷者も出たが、多加山は無事脱して清子の許に隱れる。だがマニ

ラにゐては結局安全でないので、二人相談して支那まで渡らうとする。淸子も家をすてゝ多加山に伴なふ。折柄の荒波を冐して二人（多加山女装）は先づリンガエン港に向はうとしたが、出船がないのでカビテに上陸、風雨に惱まされ、鰐魚の危難を凌ぎ、追手の巡査を逃れて辛うじてリンガエンに達し、多加山の家に元召使つてゐた老婆の家に匿れて、廈門行の便船を待つ。ところが、マニラ警察のお布令が擴まり、人相書なども渡つて來たので、老婆の夫が先づ裏切り、浦人を催して二人を捕へようとする。老婆は止むなく老夫を殺し、浦人の手を逃れるため小舟で沖に出る。ところがたゞさへ荒い海上に龍卷が起り、三人が波のためにばらばらになつてしまふ。

小舟に氣絶してゐた多加山は通りかゝつた英國の飛脚船に救はれる。多加山はこれを機會に支那へ渡ることは止め歐洲へ亡命する決心をする。乘客中何れも多加山の物語を聞いて同情するが、中にも香港の巨商ウヰリアムなる人物は多額の金を與へ又英本國に於ける知人への紹介狀を澤山くれる。かくて多加山は無事ロンドンにつくが、途中並びにロンドンについてからも東洋不振、西洋全盛の現狀を見て感慨に堪へない。

多加山はロンドンで同じマニラの亡命客靑木と親み、歐洲列强が競ふて東洋に版圖を擴張しようとし、ヒリッピン諸島が英、獨等から眼をつけられてゐることを聞いて、獨立擧兵には歐洲列强の干涉を受けないことを第一にしようと決心し、同時に日本に賴る心を益々强めるが、靑木から、日本靑年は歐洲の皮相文明のみ崇拜してゐるから駄目だと聞き、落膽する。そのうちにも、ヒリッピンの現狀とスペインの暴政を世界の輿論に訴へることを必要と考へ、近世マニラ政略史なる一書を著して、ヒリッピン獨立の止むなきを論ずる。これで多加山は一躍有名になり、上流社會にさへ知人を得るが、彼の身邊は不安を加へる。

多加山は有名になるにつけても淸子のことを忘れたことがないが、その淸子がある夜夢に見えて彼の身に禍が迫つてゐることを告げる。覺めても猶ほ夜前の夢のことを氣にかけてゐるところへ、以前瀧川家の召使だつた九藏が尋ね

て來て、清子から使ひと稱ひ、清子は多加山を慕つてマドリッドへ來り、そこからロンドンへ來る途中、急病で惱んでゐる、早く自分と一緒に來てくれといふ。多加山は、九藏の示した指環と寫眞に釣られて、うつかり九藏と共に出かける。だが途中痲醉藥で昏睡させられたまゝスペインへつれ込まれるところを、意外な汽車の大衝突で、九藏は即死、九藏を使つた讓治は大怪我、多加山は運よく無事で逃れる。さうしてパリまで引き上げて來るが、パリの旅館で意外にも眞物の清子と再會する。（清子がこゝに至るまでの物語が即ち『あらしのなごり』なのである）。

同志青木はパリまで迎へに來てヒリッピンの形勢が、今にも破裂しさうになつてゐることを傳へる。清子は又、日本の同志三百人が横濱で待つてゐることを話す。丁度都合よく、トルコ問題が紛糾して來て、英佛魯獨墺伊共に東洋には一寸手を出せないことになる。多加山はこの機を外さず獨立の兵を擧げることにする。その前ブリチッシュ・ミユジヤムで見た古刀が瀧川家で盜まれたものに違いないところから、英國當局の活動となり、讓治が戀の叶はぬ怨みから瀧川を殺さしたことが判然する。多加山は、この古刀や自家の系譜のことを考へ、自身が日本人の子孫にあらずやと思ふ。

機熟して、多加山は香港に同志を集め、準備を整へて急にマニラを襲ひ、日本人の武勇のお蔭で苦もなく占領する。多加山は同志と新政府を立て、都督の任につく。幾ばくもなくヒリッピン全島を平定し、スペインの勢力を全く驅逐してしまふ。かくて清子を迎へて正式に結婚する。

多加山は日本人に自分の家の系譜を示したところ、明白に日本人の子孫、而かも有名な高山右近の子孫と知られた、瀧川も同じで、高山の家老であつた。それで多加山はヒリツピンの將來を考へ、日本の保護を仰ぐことを決意し、島民の贊成を得て、これを實現した。スペインも日本の後援があるのを見て、遠征出兵を止め、ヒリッピンその他南洋諸島には永く日本國旗が飜つた。

『あらしのなごり』は、龍卷で海に攫はれてからの淸子を主にしたもの、たゞ拾遺といふだけで政治的意味はないから極簡短に語ることにする。淸子はリンガエン沖で龍卷に攫はれたが（老婆は死ぬ）、幸ひ沖の島の漁師に助けられる。さうして機を得て廈門へ渡り、そこから香港へ行くが、戀人多加山も死んだものと思ひ、悲觀して尼寺に入る。そこへ讓治の旨を受けた九藏が遣つて來て、多加山が今スペイン、マドリツドの獄に捕はれてゐること、國事犯は許されたが（自由黨內閣になつたので）、巡査殺し（實は鰐に食はれた）の罪を被せられ、證人がないので死刑になりさうなことを話し、手紙（僞造の）までも見せるので、つひ尼寺を出て九藏と共に遙々スペインに行き、うまうまと讓治に監禁されてしまふ。だが新聞で多加山がロンドンにゐることを知り、何とかして逃れ出さうとしてゐると、例の汽車の事件で讓治の大怪我となり、監視の緩んだ際に女中を買收して逃げ出すことが出來た。さうして偶然とつた旅館が多加山の泊つたところであつた。日本同志三百人が待つてゐる消息は、香港にゐるころ手に入つたものである。

『大海原』は、『南洋の大波瀾』と『あらしのなごり』の二部を、その適當のところで綴合せ、それに多少の刪減を加へ、文詞を訂正したもので、前記二作に比すればずつと纏まつてゐる。勿論本筋の變更はないから、前記二作の代りにこれを一部讀んで十分なわけである。たゞこの方は『南洋の大波瀾』より本が少ないので幾分入手が困難であらうかと思はれる。

以上の如く鐵腸がヒリッピン獨立譚を書いたのは、勿論寓意のあつてのことではあるが、舞臺をヒリッピンに選んだのは偶然ではない、多少の因緣がある。『南洋の大波瀾』の序に曰く——

余の前年西洋に遊ぶや魔尼羅の一紳士と相識る魔尼羅は南洋中にあつて西班牙の植民地たる緋笠濱群島の一なる呂宋の首府なり此の紳士は竊かに群島の獨立を謀りて成らず、捕はれて獄に下らんとし脫して海外に走れり余が爲め

に西班牙政府植民政略の其の當を失ひ群島人民の激動する有様を說き人をして悲憤慷慨せしむ一日紳士の寓に於て一女子の寫眞を視る明眸皓齒楚々として人を動かすの狀あり而して其の容貌は宛然たる日本人なり之を問へば慘然として曰く我が婚媾を約せし魔尼羅の貴女なり余は萬死を出でて國を脫せしを以て此の情人を携帶する能はざりしと數月の後紳士に逢ひ君が故鄕にある情人の恙なきやを問ふ紳士曰く頃日音信を得たり余の海外に飄泊し其の歸期なきを以て遂に家を棄てゝ尼寺に入れりと說き畢り自ら悲哀に堪へざるものゝ如し余も之を聞いて爲めに袂を濕ほし竊かに謂へらく此の紳士と貴女とは多情なる才子の筆に成る小說中の人物の如しと頃日偶々感ずる所あつて一の政事小說を著さんとし遂に此の紳士貴女の事實を敷演して之を南洋の大波瀾と名く云々

鐵腸の示さんとした寓意の外に、實にかゝる好資料があつて彼の創作慾を誘つたのである。このマニラ人とは何人であるか、吾等は幸にして鐵腸の歐米見聞記ともいふべき『鴻雪錄』に於いてこの人を知ることが出來る、――同書二十一年十二月一日の條――

九時半馬車に上り議事丘を下たるに際に親友リサル氏の步して余の寓に來るに出會ひ呼んで車に乘るリサル氏は「マニラ」人なり年齡僅に二十七八なるが已に七ケ國の語に通ぜり其本國の西班牙の支配の下に立つて壓制を受け且つ羅馬舊敎の爲めに慘毒を蒙るを怒り前年西班牙語を以て書ヲ著はし西班牙の植民政略と羅馬舊敎とを攻擊したるを以て太守は氏を捕へて獄に下だし宗敎の犯罪人と爲し之れを死に置かんとす氏は身を脫して我國に奔り止まる一月半にて略ぼ日本語に通ず余は始め「ベルジック」號の船中にて氏と相識り同行して亞米利加を經過し英國に來たり其後も絕へず氏に往來せり（中略）聞く西班牙政府は氏を以て國事犯なりと布告し氏の著書を藏する者は之を同類と見做して入獄を命ずると云ふ云々

ヒリッピン獨立運動の先驅たるリサルにリサルが二人とはない、即ち此の「マニラ」紳士こそ、アギナルドの先輩で有

名な『ノリ・メ・タンヘレ』(譯名血の涙、直譯「我に觸るゝ勿れ」)の著者たるリサル博士に外ならない。鐵腸洋行の同行者がこの革命兒であつたとは、何といふ奇遇であらう。鐵腸のこの小說も、一つは自由主義者たる立場からリサル及びヒリッピン人に同情する餘り書かれたものたるは疑ふことが出來ない。

然し勿論この小說はヒリッピン獨立のイデオロギイのみの爲めに書かれたものではない、間接だがもつと大きな目的がある、前に引用した序中にも、この小說創作の直接動機を「頃日偶々感ずる所」があつたからとし、又「余が胸中に鬱勃たる不平を洩らさんとするに外ならざるなり」といつてゐるところを見ると、ヒリッピン獨立の事績を假想し、これによつて何等かの寓意を試みようとしたものに違ひない。この寓意の何たるかは、左の文字によつて明白であらう。

著者は嚮に我が國民の內地の小利害に齷齪して外國の形勢に注目せざるを慨歎し之を海外の事跡に托して『南洋の大波瀾』を著し次て其の拾遺として『あらしのなごり』を草し大に世人の喝采を博せり云々(『大海原』の奥附廣告文より)

鐵腸が何の「感ずる所」があつたか、又何に「鬱勃たる不平」をもつてゐたかは、これで分る。鐵腸がこの小說に寓意せんとしたところは、日本人の進取の氣象を振起させ、海外發展の氣運を刺戟し、國權伸張、國土膨脹を實現したいといふにあつたのである。彼は、この小說の中で、種々な語葉でかゝるイデオロギイを暗示してゐる。

吾等は鐵腸の外交政策を論ずるとき、彼が大亞細亞合縱なる理想を抱いてゐたことを述べた。大亞細亞合縱とは何ぞ、畢竟するに、東洋人の東洋といふことである、つまり一種の東洋モンロー主義である。抑もその東洋不振、白人跋扈の原因は何によるにせよ、東洋を振興するには白人を斥けるがその第一步である、それには然し同じ白人の力を假りては不可ない。これは「狼を虎と入れ代へ」にさせるだけのものであつて、拙策愚策である。白人の暴力を斥け

るには宜しく「東洋聯合」の力をもつてしなければならぬ。卽ち東洋モンロー主義である。然しそれには何よりも先づ日本の力を借らなくてはならない。又日本も力を借さなくてはならない。鐵腸の理想は、畢竟日本を中心とする東洋モンロー主義の實現にあつた、これの實現を白人排斥、東洋獨立の第一條件と見るのである。それと同時に、東洋諸國は白人の手を跳ねのけると共に、内政を整へ、憲法を制定し、議會政治を行はなければならぬ、西洋の侵略を防ぐと共に、西洋をして隆盛ならしむる所以の道をとつて、これを自家に行はなくてはならぬ。日本が東洋に雄飛する勢をもつて來た理由は、東洋で議會をもつ國家が日本のみといふ事實によつて主として說明されるであらう。

これが、この小說で示さうとした鐵腸の根本的思想である。鐵腸はかゝる立場からして當時の日本の現狀に對し、兼ねてヒリッピン獨立運動の將來に對して警醒するところあらんとした。日本人の進取の氣象の無いのを慨した言葉は、『南洋の大波瀾』の到る所に散見するが、試みに次の數箇所に聽いてみよう。曰く――

此の節英字で書いた新聞紙などを讀んで見れば日本の開化は急に進歩したと云ふことですがドウも進取の氣象のある人民とは思はれません(三四頁)

又曰く

今では兩國交通の道が開け日本から此島までは十日餘りで往來が出來先き〳〵商業の見込みもあるのに此節一つの領事館が出來たばかりで誰れも此の土地に渡海するものがありません若し日本に翼を海外に展ばす氣象があれば此の魔尼羅は云ふ迄も無く南洋諸島の間には日本の國旗が飜へる樣にならねばならぬ筈ですナンボ文學技藝が進歩しても進取の氣象のない人民では此の競爭の烈しい世の中に歐洲諸國と對立して獨立を維持することは出來ますまいから私は日本の樣な國を後賴みにするのは不心と思ひます(三五―三六頁)

又曰く――

ナゼ西洋ばかり繁華になり東洋諸國は衰運に傾くのであるか許多の國があり乍ら次第〳〵に西洋諸國の植民地となり僅に獨立を維持する者は支那と日本の二つである此の二國も今日の樣に遠大な志ざしが無い時にはとても進んで西洋諸國と對立することは覺束なからう（一九五―一九六頁）

又曰く――

本國に居る日本人はどうであるか知らんが先年來此地で逢つた日本人は大方紈袴子弟であつて歐羅巴の外形上の開化にばかり目を付けて居つて勢力を南洋に展ばす樣な考へのある奴つは一人も無い樣だ（二〇四―二〇五頁）

以上の言葉を聽けば、鐵腸の不平、鐵腸の憤りなるものが奈邊にあるが、一層明瞭に分かるのである。

日本が當然展ばすべき羽翼を擴げる氣もなく、一生懸命歐洲の猿眞似ばかりしてゐる（と鐵腸は見る）のに、歐洲諸國は展ばすべからざる羽翼をも無理に展ばさうとする。彼等はヒリッピンと母國スペインとの紛議を見越し、虎視眈々でわが有とする機を覗つてゐる。就中用心すべきは、英國と獨逸である。多加山の同志青木の言に曰く――

英國人も機會があれば魔尼羅を西班牙の手から奪取る考へがあるので僕の國事犯人であることを知つて色々取調べものを頼み大層に手厚く待遇します英國人の遠大の志しのあるのは畏るべきことだ云々（二〇三頁）

又曰く――

此間大陸を巡回して獨逸へ往て見ると獨逸でも東洋に勢力を伸ばすには第一に緋笠濱群島に據らねばならんと思ふて居る樣子に見えるから早やくなんとか處置を付けんと我國は歐洲諸大國の競爭場となるに相違ない（二〇三―二〇四頁）

青木がヒリッピンの爲めに憂へるところは又、鐵腸がわが國の爲めに憂へるところで、ヒリッピンをして英獨の手に渡してはならず、歐洲諸大國の競爭場たらしめては大變である。それには日本人は斷然進取的態度を示し、我から進

んでその獨立を助けて南洋に雄飛する覺悟がなければならぬ。

ヒリッピン獨立について呉々も注意すべきは、かゝる虎視眈々たる歐洲諸强國の干涉を排することである。最初は好意的傍觀であつても、獨立戰が長引けば必ず干涉する國が生ずる、干涉は勝利を意味してもやがて來るのは保護權要求である。スペインの虐政は逃れても英獨の保護領となつては何にもならない、いなスペイン程の壓制はせぬかも知れぬが、今度は幾層倍も獨立し難くなるであらう。從つて獨立には機を撰ぶべきである。機とは何であるか、つまり歐洲の不安が增大して、東洋に手を伸す暇のない時機を撰ぶことである。スペインを孤立させる爲めに歐洲の輿論に訴へこれを利用し、同情を買ふことは可い、然し斷じて武力的援助をうけてはならぬ。必ずや如上の機を撰んで起つべきである。日本の援助も、かゝる機に於いてこそ、最も有効に働らくであらう。(因みに、鐵腸はこの時歐洲だけを氣にして米國を問題にしてゐなかつた、米國はまだここの頃は自由の天國、正義の搖籃の如く、一部日本人識者には考へられてゐたことが、これでも分かる、ところが、天公皮肉で、この後數年アギナルドの獨立軍が起つた時、世界史上稀に見る汚ない詐手を用ゐてヒリッピンを奪つたのは、意外にも、この時豫算されてゐない米國であつたのである。畢竟、鐵腸が日本をして行はしめようとしたところを米國に先んじられた形である。而かも、その獨立軍へ接近の手段は正しく武力干涉で、これだけは鐵腸が先見の明を成した)。

この小說の公にされた明治二十四年は、前年からかけて我が國民の一部に植民熱の最も高まつた一時期である。當時の新聞にも——

植民又植民、甲唱へ乙和して我が四千萬同胞の頭燃たる最大急務なりとす。而して其の渡船すべきの地を問へば、則ち曰く米洲大平洋沿岸諸州、曰く濠洲並に南洋諸島と。或は新に殖民省を設置せんとする議ありと云へり(國會

第一一五號ノ

などとある如く、實に盛なもので、中には、今日外務省の國家に盡し得る唯一最大の能事は、たゞ植民の一事あるのみと論した人もあつた。（二）鐵腸のこの小說の如きも、時代の空氣を善導したいとの意識から生れたものたること、いふまでもない。さうしてこの植民熱が、當時國民の間に發生して來てゐた新な國家的自覺を根底にもつてゐたことは、次の「國會」記者の論調によつても明白であらう。

（前略）社會は有機體なり、卽ち動物なり、一國の民族は卽ち一頭の動物の如し。若し夫れ動物にして四圍の變化に應じて其一身の現存を謀らんとし、爲めに幾多の方策を運用することありせば、一國、一民族も亦た四圍の變化に應じ其現存を謀らん爲め幾多の方策を運用せざるべからず。是を理學の原則に順適するものとす。想ふに世界の事物たるや、彼此を問はず、大小を論ぜず、苟も理學の原則に順適するものは、以て勝ち以て興り、其の之れに順適せざるものは、以て敗れ以て亡ぶ。是に於てか知る、國土を千秋に立て、民族を萬歲に育せんと欲せば、宛も動物の萬般圍外物の變化に應じて一身を措置する如く、能く世界の趨勢を洞見し、以て之に應ずるの方策を聳立せざるべからず。是れぞ日本國の獨立を天長地久の間に保護する第一手段にして、眞個に自然一律に適合せるの大眞理となす、果して然らば乃ち今の時に當りて日本人民の措置すべきは、實に國土を圍繞せる諸般の現象變化を研究し、以て豫め他日に準備せざるべからず。是れ吾輩が平素自ら力を量らずして本紙上に、朝鮮、滿洲、波斯、中央亞細亞、兩亞米利加、濠洲、白皙人種の殖民政略に關する幾多問題を稽査論議する所因にして、亦た事苟も茲に出でず、徒らに區々國內小朋黨の掛引に奔走し、其の成行に留意し、小時事小政治に周旋熱中するが如きは、斷じて日本國の獨立を天長地久の間に保護するの正道にあらず、到底金甌三千年の社稷を毀傷するに過ぎざるを以て、敢て不肖を顧みず、大聲疾呼して「日本國を以て日本國のみの日本國とせず、宜しく大世界上の日本國たるの覺悟なかるべ

からず」と稱道する所因なり。吾輩は是處に到つて我内閣に希望するに能く一定不易にして、且つ陸海軍に貫通する外交の方針を確立し、且つ民間の各政黨は亦た之に關する一定不易の黨議を遂げ、以て豫め他日に準備せんことを希望する者なり。（國會第一一二六號社說、日本獨立の第一手段）

進まざるは退くことであり、守るは自滅する道であるとせば、「世界的日本」となるには何としても海外發展より外に道がない。從つて、植民熱の盛なるにつれて、種々の失敗もあるべく、又山師なども跳梁するであらうが（事實跳梁した）、然しこの折角盛り上つて來かけた進取の氣象だけは沮喪さしてはならぬ。この氣象が即ち世界的日本を維持する親柱となるのだからである。

當時の植民熱の中心といふべきものが、即ちこの小說に暗示され奬勵されてゐる南洋進出である。此の南洋は嚴正に地理的にいつての South Sea ばかりではなく、布哇も、濠洲も、ヒリッピンも、ボルネオも、場合によれば印度支那地方をも含めたものである。日本と南洋との交際は勿論明治二十年以前にあるが、日本が兎もかくも經濟的植民的意識をもつてこれに注意し始めたのは、明治二十年（志賀重昂の『南洋時事』刊行）以後であらう。この間、東洋のコロンブスといはれた橫尾東作の如き先驅者の功勞を忘るべきでない。かゝる意識の具體化したのは、二十三年の南島商會（田口卯吉等發起）、恒信會社（橫尾東作發起）、二十四年の快通社、日本吉佐移民會社等であつた。かく南洋進出熱の强い時であつたから、鐵腸のヒリッピン併合論も、單に假托でなしに案外大眞面目な點があつたかも知れない。

鐵腸の目的からいへば、この小說には特にプロットが第一であるべきで、その他のテクニクは何うでも可いわけである、事實この小說を讀むとさうなつてゐるやうに思はれる。それではその肝心のプロットは何うかといふと、大掛りで異常複雜な點で傳奇小說のプロットとしては根本條件に合してゐるやうに見えるが、大掛りの割に淺薄空漠であり

枝葉が多くて、複雜には見えるがその複雜に無用な機械的のものが多く、有機的結合がない、又餘り異常事の重疊させた爲めに却つて總體として平凡なものとなつてゐる。

鐵腸はこの小說に盛り込むに、日本進出、ヒリッピン獨立といふ二つのイデオロギイを以てした、然しこの二つがプロットの上で巧く調和してゐない、何れか一方が犧牲にならなければならぬが、この小說では勿論ヒリッピン獨立の方が犧牲にされてゐる。その調子を合せるために、主役たる多加山及び淸子その他を共に日本人の子孫だとして濟してゐるが、これは不可ない。多加山が日本人であり、島民も日本人の子孫であれば、かゝる解決も怪しむべきではないが、今はヒリッピン人たる多加山がヒリッピン人のヒリッピンたるべき獨立運動をしつゝ、成就の曉、そつくり日本に献上するといふ、さういふ馬鹿馬鹿しいことが考へられるものではない。こゝは更に讀者の納得出來る理由を述べて日本に併合すべきであつたらう。

且つ又、多加山のもつ日本觀にも矛盾がある、多加山は、日本人に進取の氣象のないことをのみ聞き、これを信じてゐたのに、如何に三百人の同志を得たからとて、急に「國力旭の昇る如き」國と考へ直して、故國をこれに托すとは輕卒千萬ではないか。又多加山が白人の橫暴を慨し、その力を借りぬことを聲明しつゝも事を成すに至つた第一は矢張り白人（ウイリヤム）の助力となつてゐる。さうしてその報酬として至大な經濟利權をもつてしてゐる。これは何といふ不用意な話であらう。又國民と共に運動するを是としながら、その國民運動が殆んど描かれずいつも出るのは多加山と淸子のみである。又スペイン太守や僧侶の暴虐を更に更に多く描いて示した方がずつと效果を增したであらう。全體からいつて餘計な冒險や無意味な葛藤も多いが、歐洲に於ける多加山、淸子の冒險の如きは、鐵腸が西洋の知識を示し、西洋を紹介せんとした爲めのみとしか受けとれない。

この小說に出る人物は都合三十餘人あるが、その性格を兎も角も語り得るのは、多加山と淸子の二人だけである。

然しこの二人も性格としては成つてゐない。多加山は、一代の英傑と見えぬのは勿論、リサルと鐵腸との混合物から成つた所爲か、その行爲に矛盾が多い、これは今、プロットのところで一寸暗示した點もあるからそれは繰返さないが、血氣に任せて成功を焦り、民衆と共にいひながら案外一身の功業を努める、その邊はリサルかも知れない、たゞ大事な身を忘れて、九藏に誘惑されてスペインに連れ込まれやうとするのは、餘りに無考へ過ぎる。獨立運動の志士の會合が幾分自由黨壯士の會合らしいが、多加山が案外の持重主義から今後の出席を辭するあたりは正しく鐵腸の口調であり、又機を見て動き、先づ輿論を動かして全國的運動にする手段も、鐵腸の遣り口である。淸子も、我が國の草双紙のお姫樣の如く如何にも世間を知らぬ。九藏に再三欺かれてその度に戀人を死地に陷入れる如きは、聰明と言ひ樣がない。又獨立運動に對しても明確な態度を示さない、多加山に惹かれて好意は示してゐるものゝ、成る點まで運動の足手まどひとなつてゐる。鐵腸は例によつて女性描寫が拙である。これは、徒らに豪傑がつた封建的意識から內實女性を馬鹿者視してその行爲を觀察しない結果であらう。

監守長讓治は、幾分『佳人之奇遇』の同役から脫化して來た氣味がある。この人物だけでなく、歐洲に於ける多加山、淸子、讓治等の冒險は總體として『佳人之奇遇』の匂ひがする。

背景はマニラの方もロンドンその他も、當時としては割合に調べて書いてあるが、例の說明體の主觀的手法と概念的文字で全く塗り潰されてあるので何の生命もなく、取り立てゝいふものはない。

これを要するに、小說としての『南洋の大波瀾』その他の根本的欠點が、總體として如何にも嘘らしい印象を與へること、小說としての眞實性をもつてゐないことである。これは傳奇小說として失敗の第一條件である。宜しく矢野龍溪の『浮城物語』あたりと比較するが可い。一つは日本のことを語らんとして、日本を全く客位に置いたからであらうが、日本の事情なり輿論なりを今少し明白にし、日本を主とし日本の現實から割出して書いた方がよかつたであ

らう。鐵腸は、この頃小說創作に自信が出來、政治小說以外にも作者顏をして書き散らしてゐるが、それだけ『雪中梅』時代程一心にならず、調子を下してさつさと書き捲るので、かういふ不出來なものになつたのかも知れない。

かく嚴正に論じて來ると、鐵腸はその目的したところも十分に描寫出來なかつたわけであるが、然しかゝる論評は今日からのことで、これを當時として言へば、この書が彼の如き國民一部の植民熱を反映し、又これを刺激するために生れて、幾分にせよ喝采を得た以上、國權伸張意識の宣傳に多少の寄與は爲したものと見るべきであらう。政治家としても、當時早くヒリッピンに着眼したのは、鐵腸の先覺的經綸を示すものとして、聊か買ふべきであらう。且つ又明治文學史上、三十年以後續出する冒險小說、殊に押川春浪の好主題とした日本南進、ヒリッピン志士援助を描く冒險小說の先驅として、注目すべきである。

此の小說の公にされるや、鐵腸の社僚にして又政友ともいふべき坂崎紫瀾は、これを批評してかういつた。——

鐵腸居士自ら政治小說を著すことを好み雪中梅花間鶯等の作已に都鄙に傳播し其材料愈々出でて愈々富み且其文字は叙事よりも寧ろ意匠に力を致せしものゝ如く殊に自家の胸臆と經驗を間接に寫し來り人をして覺らざらしむる所も亦一種特得の筆と稱せざるべからず而して本書卽ち南洋の大波瀾に至りては則ち其意匠の周匝なること更に層一層を進め流石に文壇の老將たるに恥ぢず居士の自叙によれば本書の材料は全く居士が歐米漫遊中に相識れる魔尼羅一紳士が西班牙政府の羈厄を慷慨して脫走せし履歷に基きしものなりと云へり（中略）然れども其結局とせし多加山系圖に湊合する爲め瀧川翁暗殺の際に紛失せし日本刀を灰線草蛇たらしめたる絕妙の意匠は之を西教史の事實より奪胎し來る狡獪手段と認めざるを得ず是れ卽て本書意匠の骨子にして居士が胸中の成竹は此に在りて彼に在らずと知るべし又本書中魔尼羅の地理の如きは毫も架空の構造なきのみならず其歐洲に脫走中の境遇の如き皆居士過日

の實踐に徴したるものゝ如く其叙事頗る泛ならざるを覺ゆ又文中の佳所を摘すれば多加山が刺客の縛を解きて之に秘密印刷の任を托する所擧止從容として暗に居士自己の雅量を誇るにあらざるかと想はしむるのみならず某所の秘密會議を一言に罵倒する所は世上無識の壯士的群小政事家をして慙憤せしむるの價値あり而して叙事は居士の意に任せて筆を走らしたるものゝ如く少しく熟練を缺くに似たれど唯だ地震を寫す一段のみは文膽大の如く實に傍若無人の快筆にして彼の區々箱庭の寫實と生人形の影像に光陰を徒費する瑣屑文字と同日に語るべからず蓋し一種出色の神氣を有せり又汽車の衝突を假りて將さに多加山の敵國に落つるの身を救ふの意匠は奇絶快絶唯憾むらくは衝突の將に起らんとする瞬間に多加山と兇漢との一小闘を演ぜしめざりしことを（中略）要するに本書は兎も角も一大意匠を具備して始めて成立せし政治小説にして或は兒女の好に投ずる纒綿斷腸の艶情に乏しかるべきも苟も政黨の甘苦と海外の急務を知るものは必ず本書を一閲して居士の精神果して那邊に注ぐやと首肯するに難からざるべきなり云々（國會、第百九十六號）

大層な賞め方である、然るに又、當時の文壇批評家の第一人者內田不知庵は批評してかういつた。——

南洋の大波瀾（鐵腸居士）——爲永的の妄想をマニラの世界に移したるに過ぎざるなり。余は作家鐵腸先生蓄ふる處の滿腹の經綸爰に盡くるかと讀者の作者を誤らんことを恐る。鐵腸先生多年政界にあり論策夙に常班に超ふ、豈輕忽浮薄泛々たる一小才子多加山の亞流ならんや。必ずや世に多加山如き淺膚陋劣國を賣つて外國の爵秩を甘んじて受け、あまつさへ是を以て無上の經綸なりと誇負する斗屑小人多かれば、是等の眞相を寫して遁るゝに地なからしめんとせしならむ。惜むべし、主觀的に寫したるをもつて讀者多加山をもつて作家鐵腸居士の理想人物なりと考ふ。鐵腸先生何ぞ「梅曆」中の人物を理想と爲さんや。作家に望む、他日若し更に小説を著すの時あらば作家從來用ひし主人公多加山又た國野（雪中梅の主人公）等を客觀的に寫し來つて讀者に輕薄才子の極めて笑ふべき眞相を

示せ云々（國民之友第百二十三號）

例の不知庵の持前ながら、言何ぞ皮肉なるといひ度い、批評とはいへ、如何にも故意に冷々を極めたものである。不知庵とて鐵腸の眞意を知らぬではない、而かもその點は默して、意地惡く側面から奇襲する。紫瀾の批評は過褒なるに論ないが、鐵腸の眞意を明瞭にして、これに同情を示してゐる點で人を首肯せしめる、然るに不知庵は、冷然知らざる眞似して冷語を放つ、抑もこれは何故であらうか。

　思ふにこれは、一個不知庵の一個鐵腸に對する嘲弄ではない、實に當時の文壇の政治に對する不滿反感の現れの一例である。鐵腸の小說がテクニク上拙劣といふならば（又事實拙劣でもあるが）、明白にさういふべきである、又鐵腸の日本南進論が間違つてゐるとならばその故を擧げて論すべきでもあらう。その何れにも出ず冷然と放語する、それは政治家全般に對して全く匙を投げたことを示す態度である。政治が理想として希望として光明として存した間、文學はこれと提携して、遂に政治小說の全盛時代を作つた、然るにその理想が實現されて見れば、何たることであらう、「而して得る所終に何物ぞ。大臣の暗啞のみ、議員の紛囂のみ。離間のみ、腐爛のみ。士民多く鬱々として樂むこと莫し。」[二]全く實現された政治理想に對する幻滅である。吾等は、不知庵の一片冷評の背後に、かゝる不滿幻滅の空氣の充滿してゐることを知るのである。

註（一）明治二十四年七月一日國會、社說「外務省の能事」

註（二）明治二十四年三月刊、三宅雄二郎著『眞善美日本人』序

『政事小說 南海の激浪』

此の作は、政治小說としては變態に屬する。その內容及び著作の動機は緒言に出てゐるが、それに曰く——

余が鄕里宇和島に神社あり和靈大明神と云ふ（中略）蓋し初代伊達公の補弼の臣に山家清兵衛氏（公頼）あり忠直廉潔の士なりしが不幸にして小人の爲めに陷られ一家數人賊刄に罹れり其の後變災荐りに起りしを以て、遂に其靈を祭りて神となせり和靈社卽ち是れなり（中略）近頃余が友鈴木譲氏斷簡零册を集め幷に古老の談を採りて一小册子となせり（中略）余之を讀み政治家が時局に處するの艱難なるを思ひ忠直廉潔の士の群少の讒誣に因り一時汚名を蒙るの不幸あるを悲み闇夜襲撃に逢ふて父子命を墜し老母弱妻をして幼兒を抱いて四方に流離せしめ遂に兇徒の爲めに掌珠を奪はるゝの慘狀を想ひ慨然として歎じ勃然として怒り遂に滲々として萬行の紅淚を灑ぐに至れり、頃日偶ま時事に感ずる所あり政治小說を著はさんとし以爲らく山家氏の傳記の如き藉りて以て胸中の不平を吐露し風雨慘澹たる天地を模寫するに足れりと遂に其の稿を起し之を南海の激浪と名く云々

本文はこゝにも述てある如く山家氏の傳記を小說化したもので、歷史小說といふなら當然として首肯されるが、格別政治小說といふに相應はしい政治的イデオロギイも見えない。然し鐵腸が政治小說といふ以上、何等か政治的寓意があるに違ひない。是に於いてか、此の緒言を注意して讀み直してみると、——

政治家が時局に處するの艱難なるを思ひ忠直廉潔の士の群少の讒誣に因り一時汚名を蒙るの不幸あるを悲む云々

といふ數行の文字がある。これで始めてさうかと合點されるのであるが、蓋し鐵腸は自分を以てこの山家氏に比したのである。前に鐵腸の傳のところにも書いて置いたが、鐵腸は明治二十五年の第二總選擧に選擧民と意見を異にして落選した、さうして政治界の現狀に深く憤るところがある餘り、意を政治に絕たんとまで決心した（『失策又失策』緒言）。卽ちこの時の自分の境遇を、鐵腸は主觀的に山家氏のそれと酷似してゐるものと解し、一部選擧民を山家氏を虐殺した藩士共の群れに喩へたのである。この小說を政治小說と呼ぶのは、かゝる寓意があるからに外ならない。卽ち

政治小説としては、一種の樂屋落めくものであり、辯解小説、愚痴小説、落選心境小説ともいふべきもの、既に緒言を讀めば、十分事が足りるので、本文へは一切觸れぬことにする。

『政治小説 明治四十年の日本』

『明治四十年の日本』は鐵腸政治小説中代表作の一であり、『雪中梅』、『花間鶯』と並んで鐵腸の著作中最も有名なもの、最も力をこめたものゝ一つである。(吉野作造博士の如き、寧ろ『四十年の日本』を以て鐵腸の代表的政治小説となすべきを論じたことがあつた)。

此の小説を書く動機のことは、『東亞之大勢』の序を見れば大體分かる、前にも述べた如く鐵腸は二十五年二月の總選擧に落選して大に議會政治なるものに幻滅を感じたが、第三議會に於ける政府對議會の軋轢を見て、その國權的イデオロギイから憂慮に堪へず、大體『明治四十年の日本』にそつくりの構想に成る政治小説を造つて東亞の大勢と日本の將來を論じ、自分の鬱懷を霽らすと共に世人警醒するところあらんとした。そこでかゝる趣向の政治小説を作りたいとの意を親友大石正已に語つたところ、大石は笑つて(鐵腸の語をかりると)、「曰く、後來東亞の形勢は或は子の想像するが如きことあらん、然れども古語にも百聞は一見に若かずと云へり子にして此の著述をなさんとすれば何ぞ一たび西比利亞朝鮮支那を歷遊して其實地の形勢を視察せざるや」とあつたので、鐵腸も俄に遊意動き、二十五年八月から十月まで東亞三國に遊歷した、これは傳記の條にも書いて置いた通りである。歸來、政治小説は一先づ延期し、その見聞を整理して、『東亞之大勢』、『北征錄』の二著を著し、警省の資にせしめんとした。然るに二十五年十二月から二十六年初頭に亘つた第四議會に於いては、政府對議會の衝突が一層甚しいものがあつたので、鐵腸は、新な

手段で更に一層力強くその警省を促がさうといふつもりで、いよいよ前案の政治小說に着手することにし、議會開會の即後、二十六年三月十一日を以て非常な意氣込みでこれを國會紙上に掲げ始めたのである。

この作は、その構想の必要上、鐵腸得意の未來小說となつてゐる。卽ち『雪中梅』、『花間鶯』の例によつて、現在に基づいて未來を想像し、未來の叙述論評に藉りて逆に現在に對し警告諷誡するところあらんとするものである。その『四十年』を標出するのは、別に四十年そのものに確たる基準を置いたのではない、恐らく三十年でも三十五年でも可かつたのであらう、現に、『東亞之大勢』の序に見える初案には明治三十五年の出來事となつてゐる、たゞ大體の見當は年代そのものよりも、露國の西比利亞鐵道完成を假想してのことである、それの完成する時こそ東亞の形勢に重大な變化を生ずる日だといふ意味から出てゐるのである。

時は明治四十年某月。

九年の長日月を、政治學の研究と歐洲各國政界の實地見學に送つた玉野成章は、新開通の西比利亞鐵道によつて歸朝した。玉野は歐洲在留中から東洋の形勢に深慨するところがあり、東洋形勢論を草して日本の新聞に投じたこともあつた。だが歸朝後の彼が見出した日本の現實は如何なるものであつたか。彼は豫期したことながら、今更啞然たらざるを得なかつた。內政は年々高まる官民軋轢と政黨間の爭鬪で成績が一つも擧らず、財政は行詰り、軍備は整はず國是さへ定まらず、從つて重大な條約改正問題の如きは抛棄同樣である、然るに國外では露西亞は西比利亞鐵道完成によつて東洋に對する大野心を實現せんとし、傍若無人に朝鮮問題に干涉する、淸國と英國はその對朝鮮の立場から今にも露國と大衝突を始めんとする。東洋の形勢は極めて重大である。然かも日本はかゝる出來事に對して何等外交的用意がない。

玉野は憂國の念に堪へず、時の保守黨內閣總理松本子爵に會つて國家の前途の容易ならぬことを語るが、子爵は議會切拔けが東洋の形勢に應ずるよりも重大であり、自家墾田の利益が立憲政治の成果よりも大切であると考へてゐる人とて、手答へがない。去つて代議士と語らうとすれば、代議士は地方的利害に熱中してゐるか、利權漁りか、人氣取りの過激論者のみで、相手にならぬ。官吏は御用商と結托して金儲ばかり心掛けてゐる。剛直廉潔を生命の武人さへ愛錢の流行を免れない。一度は自ら議會に入つて革清の實を擧げんと思ふが金錢で投票を買賣するのみで、眼中地方的利益ある外、國家のことは何も考へぬ選擧區民の實狀を見ては、猛志も鈍り、國政腐敗の有樣に呆れに呆れて、厭世の心をさへ起す。だが選擧中止が緣となつて偶然知つた高人富山政成の心上練磨の教訓に深く感じ、我と自らを勵まして愈々救國の念を堅める。且つ一方には、山口海軍大佐の如き同志の士を得て嬉しと思ふ。

果然、玉野の憂慮した如く、朝鮮問題が紛糾し、露國に對して清英が同盟して開戰を宣する、日本は双方から參加を誘はれ、終には東京灣に軍艦が乘り込んで威迫するまでになるが、定見も主義もない松本內閣は、たゞ我流の目算を立てゝ清英側に加はり、三國同盟を形作つて露國に當ることにする。

是より先露國はバルカン半島や朝鮮に試みて成功したところを我が國にも施さんとし、間諜を日本に送り、莫大の黄白を朝野の名士の間に散ぜしめて、露國側に有利なるやう我が政界を左右しようとたくらむ。その手先となつて專ら活躍するものは、多年西比利亞に放浪した妖婦茨木雪子である。當時日本の政界は進歩保守獨立の外に、急激黨の正義黨といふのがあり 好んで矯激の言論をしてゐたが、その黨首は澁谷八藏といふ壯年政治家であつた。稀に見る大野心家で多年內閣に立つ機を狙つてゐたが、雪子と知るに及んで、露國の密謀を奇貨とし、これを利用してこの志を遂げようと計る。彼は露國から得た金の力で議員の多數を買收して自己の傘下に集め、一方條約改正には內地雜居不可論を唱へて人民を煽動し、反內閣の空氣を作り上げる。かくて松本內閣が軍事費協議の爲めに臨時議會を開いた

のを機會に、その外交政策の宜しきを得ざるを攻撃し、清英を頼んで露國を敵として我が國を孤立せしめる恐れのあることを辯論して、遂に内閣不信任を提出する。この時には上下兩院とも既に澁谷方の議員の大半を占めてゐたので、容易に政府を顚覆するに成功する。

新内閣は澁谷の傀儡たる谷川伯の組織する所となつたが、實は澁谷の一味を以て固められ、彼自身内務大臣となり自己の腹心巖谷某を警視總監として、政務の實權を握り、又軍人中武斷政治主義者を二三入閣せしめて、軍人社會の人心を收攬する。新内閣は勿論、直接清英同盟から脫退を宣明し、先に元山沖で露國艦隊を破つて比類なき功名を立てた山口將軍に召喚を命じ、艦隊には急遽歸航せしめ、條約改正に中止する、且つ人心の反覆を恐れて保安條例を施行し、殆んどあらゆる政界の名士を羈束してしまふ。かうして露國の積極的援助を待つて何等か非常の大事を行はうとする。ところが、露國は元山沖の敗戰を怒り、なかなか約束通りにしないので、澁谷は千島を割く密約までしてその援助を乞ふ。澁谷はこの時正式に雪子と夫婦になつて居り、夫妻間の密語を誰知るまいと思つてゐたが、その秘密が逐一玉野成章の手に入る。それには愛國の女の涙ぐましい苦心が藏されてゐる。初め、成章が歸國の途次、ハバロフカの旅館でお清といふ可憐な日本少女に遇つた。玉野はこの少女の氣慨あるを見込み、密に露國國情の虛實を探ることを托して歸つた。この少女は、茨木雪子の日本に乘り込まうといふとき、浦鹽港に之を訪ね、身許を僞り、小間使ひとして日本に同伴してもらつたが、疾くに雪子の日本行の使命の尋常のものでないことを知り、主人の奸計を探らうとかゝる、さうして澁谷と雪子の露語の會話を洩れ聞いて、二人が日本を賣る如き恐るべき陰謀を企めるをつきとめ、遂にその證據となるべき文書を盜み出して、玉野に送つたのである。玉野はこれを見て大に驚き、急に奔走して保守、進步、獨立等の政黨有志を說き、大同團結をつくつて内閣を倒して國事を救はうとするが、議員にそれだけの氣力のある人間がない。それで止むなく、玉野は山口將軍に打ち明け、二人談合した結果、クーデターに依つて一刻

も早く現内閣を倒さゞるべからずと決し、當時、陛下の御親任の最も厚い杉村伯に說いて同意せしめる。やがて谷川内閣は　陛下の勅命で突如罷免となり、新内閣は杉村伯を總理に戴いて組織される。先きに拘束された政界の諸名士は悉く釋放される。澁谷、雪子は行衞不明となつてしまふ。お淸は、警察に自首するが特赦に逢つて放免となる。且つ、玉野と富山政成の談話で、お淸が政成の娘であり、政成が此時浦鹽に赴く途中難船したとき溺死したと思つてゐたのがそれであると知れたので、媒を得て玉野の夫人となる。(松本子爵の娘玉子が玉野を戀して死ぬ話、玉野の妹照子と松本の長子元吉との戀、二人赤十字隊に屬して辛苦したことなどは、それぞれ多少の寓意をもつて描かれてはゐるが、物語の本篇には關係がないから、こゝには述べないことにする)。

新内閣は成つたが、我が國の前途は極めて暗澹たるものである。淸英對露の戰爭は、海で淸英が勝つたものゝ、陸では露に叶はず、遂に支那本部へも露兵が攻め入る騷ぎとなつたので、三國の間に講和の議が持ち上つた。だがそれと共に、露國及び淸英同盟の双方から、日本に難問題を提出して來た。露國は前内閣の約束を楯にとつて千島を要求し、軍艦で津輕海峽を扼し、淸英はまた別に中途故なく同盟を裏切つた日本の態度を怒り、淸は琉球を、英は對馬を要求する。朝鮮に對するわが分前を認めさせる如き思ひも及ばぬ形勢である。そこで杉村總理は玉野を招いでその經綸を聞く、玉野はかゝる艱難な時に退嬰外交を取るを不可とし、斷然進取に決心することを進言し、北京の三國會議の互ひに下らずして結局しないのを機として、有爲の外交家を派遣して、三國に利害のあるところを說破し、我に利益を許す方に同盟し、然らざる方に反對する意志を明白にせば、今日の形勢では彼より我に同盟を求める、かくして禍を轉じて福となすことが出來るといふ。杉村伯はこれを容れ、直ちに玉野を全權公使の任を囑して北京に向はしめる。玉野は上下の望に背かず、よく接衝の勞を盡し、遂に三國をして朝鮮に於いて十分の利益を讓歩せしめ、わが國外交の一大成功を稱へさせて、東洋問題を解決し、國家を磐石の安きに置くといふところで、この物語は終る。

鐵腸がこの小說を書いた素志は、前にも述べた如く、當時の日本に對する警醒にある、單に將來の日本を描くに興味を感じたのではない。こゝに描かれた將來の日本の如き立場を現出せざらしめんが爲めに、これが現出の原因たる現在に警告し諷誡せんといふのである。從つて彼はこの現在への警告を、或は過去を語るといふ形を藉り、或は未來への想像なるかの如く仄めかして、反覆これを述べてゐる。

明治四十年の日本は必然的に明治三十年の日本から生じたもの、それが又やがて二十年の日本から生じたるものたるは、言ふまでもない。だから鐵腸は明治四十年の日本を描くに當つて、十年來の日本を屢々云々し、更に溯つて明治二十何年の日本を云々してゐる。鐵腸の見たその二十何年の日本―は何ういふものであつたか、これは前編第八回隱君子富山政成の履歴を藉りて詳しく語られてゐる。

明治二十何年の頃にやありけん藩閥內閣と民間黨との間に大衝突を起し議院も遂に解散となり政事上何となく穩やかならざる形勢なりその翌年に內閣の總辭職となり世上に名譽ある政事家を網羅して新內閣を組織し當時之れを第二の元勳內閣と稱し一時相應に名望ありたれば世間にても其政事の方針により官民軋轢の弊害を除くべしと豫期せし程なくしに其年に開かれたる議會に於て又々衆議院と政府との間に一大軋轢を引き起せり帝國議會の開けしより紛擾の間に七八年を經過し國家の形勢一も擧らず經濟上の恐慌も一方ならざれば地方にても民間黨の方向を改むることを冀望するもの少なからねども壯年客氣の徒は頻りに急激の說を主張する上に前年選擧の競爭に失敗し又は議院の解散に因つて利益を得んとするものは頻りに奔走して民間黨の議員を刺衝し新聞演說の力に因つて輿論を挑發するに因り少しく溫和の議論を唱ふるものあれば立どころに選擧區より辭職勸告を受くる程なるにぞ最早一歩も退讓すべからざるの勢ひとなれり又た一方には內閣中にも極く溫和の說を取るものあれども當時第二流の政事家政府

内に蔓延しこ一の黨朋を成し此等の人々は多く獨逸風の教育を受け主權在君の主義を演繹して嚴重に憲法を解釋し政黨内閣を主張する者を以て民主主義となし憲法を楯として何處までも民間黨の侵入を制することを内閣に勸誘して陰然と廟議を動かし之に加ふるに前年議院は痛く陸軍の定額を減削して非常に武官を激動せしめしのみならず政府より提出したる海軍擴張案を否決せしにより海軍部内に沸騰を起し武官の急激家は頻りに當局者に逼つて憲法中止を主張し其勢ひ中々盛んなりとの風說さへあれば心あるものは深く政事上の前途を憂へ此の儘にて抑し往けば革命の血を流すか否らざれば國民は武斷政治の下に壓制を受くるに至らんとて竊かに眉を蹙めぬ（中略）當時政事上は全く感情のために支配せられ政府は反對黨を以て全く政事上の秩序を破壞せんとする者として頭乎として其意見に反對し民間黨は政府を視て國民多數の利益と兩立すべからざる者と爲し全力を盡して攻擊を試み政府の提出する所は一も二も無く之れを否決せしかば其衝突は愈々激烈となり中正の議論は一として行はれず遂に憲法上に關する大議論より内閣と民間黨とは最後の決戰をなすに至れり（一〇四―一〇八頁）

たゞ二十何年といふのみでこれを指してはゐないが、第二元勳内閣の語に見ても、これは明治二十五年の第三回議會の經緯を諷示したものたるは明白である、且つかゝる語がなくとも、その政府對議會の衝突の跡を見れば、議會史上に輪廓の窺はれる第三、四議會のそれとそつくりなことが分かる。上の引用によつて二三の說明を加へると、藩閥内閣と民間黨との間の大衝突とは、二十三年四年の第一、二議會のそれをいふ。議會解散は第二議會である。その翌年は卽ち二十五年、此の年八月新内閣成る。世間でこれを二十一年の所謂元勳内閣に對して、第二元勳内閣と稱した。その年の議會とは二十五年の第三、第四議會を引き括めていふ。七八年經過云々はカムフラージュでわざと言を誇大にしたもの、壯年客氣の徒云々は、主として自由黨の院外黨を指すものであらう。辭職勸告は、事實その通りであつた。第二流の政事家云々は白根專一小松原英太郞等の連中を指す。陸軍の定額云々。國防充實費は第一議會以來の問

題であるが、議會は國防充實の必要を認めつゝも、當局者を信用せぬといふので、削減を加へて來た爲め、武官の奮激を買つた。海軍擴張案の否決は、第二議會以來の持越しの問題で、議員も海軍の擴張は國權伸張のため必要なことは認めてはゐるが、海軍部内の積弊が改革されるまでは、擴張案には同意出來ぬとし、第二議會には杉田定一の名で上奏案が出た程であるが、第四議會でも矢張り同理由で否決した(かくて大悶着の結果、御内帑金下賜となり、文武官吏月俸及び議員の歳費十分一を寄附することゝなつて、この問題は片ついた)。海軍部内の沸騰については、當時の新聞紙上に幾多の雜報となつて殘つてゐる(例へば廿五年十二月二十二日の國會)。憲法中止の論も、第四議會の當時風說のないことはなかつた(陸軍大臣高島鞆之助その他の武斷派が中心で、山縣の支持を受けてかゝる運動を爲してゐるといはれた、廿五年三月二十三日國會、「憲法中止の議を立つる者は誰ぞ」)。憲法上の理由より官民大衝突云々は、これは寧ろ第一議會以來のことを總括して述べたものであらうが、第四議會に於ても、勿論豫算問題から憲法第六十七條についての大論戰があつた。

以上で、鐵腸の描くところが第三第四議會を狙つてゐることは明白であるが、然し事實第三第四議會に於ける官民の大衝突は非常なもので、鐵腸がこゝに書いた位のものではなかつた。議員は政府提出の豫算案に大削減を加へて査定案を作り、政府をしてこれに同意せしめんとしたが、政府は同意せず、これを議院に返附した。議會は再度、三度同意を要求し、政府に處決を迫り、休會、上奏案、停會、又も休會となり、眞に壯烈なるものがあつたが、遂に聖詔降下によつて漸く局面一變、事態收拾となつたのである。

議會對政府のかゝる紛議を見て憂慮の餘り、北陸選出議員たりし富山(卽ち鐵腸)は何とかして兩者を調和せしめんとの意志から、次のやうに警告する、曰く今日は東洋の形勢一大變動をなす氣運に際會せしを以て一日も之に應ずる準備を等閑に附してはならぬ、然るに立憲政體が建てから官民の間に衝突を惹起し兩者相持して下らず、國家を一

大不幸に陷いれ必要な事業は一として擧行されない。民間黨は感情の爲めに支配されて、國家の生存に缺くべからざる政費を削減し、對外策までも極めて退守の方針を取るのみならず、平地に波瀾を起し憲法の疑問に因つて議事の進行を妨ぐることは不可である。更に又——

內閣の處置に於ても少しも感服出來ません是れまで年々議院と政府の間に衝突を引き起すのは何故であるか其の大源因がなければなりません政府に於て自ら反省し內部の情實を一掃し一大改革を行はるゝに非ざれば衝突に衝突を重ね我が國を如何なる不幸に陷ちいらしむるかも知れません別して本員の痛歎致すのは立法と行政の間に紛議を引き起すに當り內閣が少も政事上の德義を顧みず憲法を楯として議院の要求を拒絕せらるゝ一事であります如何にも今回政府の固守せらるゝ處の如きも憲法の文字上から見れば政府に於て議會の決議に不同意を表せらるゝ口實があるに相違ありませんが夫れは所謂三百代言の口調と云ふものにて輿論を以て政事を爲す立憲政體の主義とは兩立しません有力なる政事家の伎倆とは思はれません本員は現內閣諸公の公平なる意見を持して居らるゝ事を疑ひませんが如何せん今日諸公を圍繞する第二流の人物は憲法に向ふて穿鑿千萬なる解釋をなして諸公を誘惑し此れが爲めに諸公を誤まり國家を誤まり遂に人民をして憲法の功用奈何を危ましむるに至るは嘆息の至りであります且つ內閣外に在て隱然一團結をなし諸公を刺衝して武斷政治を擧行せしむるものあることは爭ふべからざる事實であります諸公よ此の難局を處置するには三百代言的小政治家を拒絕し武斷政治を主張するものを排除し進んで大改革を施さゞるにあらざれば何年立つても決して立法行政の衝突を避くる事は出來ません內政外交を整理することは出來ません圓滑に憲法を運轉し國利民福を增加することは出來ません（一〇九—一一〇頁）

警告の結果は、富山の公平なる言論が双方から排斥されたのみ、反省の實は何等示されなかつた。

此の如き事態が、このまゝ十年乃至十五年續いたら日本國家が何うなるか、旣に世界的日本への發展の道に乘り出

したのに、その發展條件の完成へは急がず(と鐵腸は見る)、却て國家的發展を阻止する如き擧動行爲をのみ狂亂沙汰で繰返してゐる、前途甚だ寒心すべきはいふを待たない。鐵腸はそこで想像によつて、かゝる狀態の十五年續いた後の日本を描き出し、これで當時の現在日本に對する警告を强調した。現在に對する警告が素志であつただけに(さもなくとも當然のことであるが)、その想像した未來日本はあらゆる點に於いて當時の日本を潤飾誇張延長したものであり、根本に於いては到るところ當時の日本の面影を示してゐる。そこで鐵腸の想像に成る未來日本、彼の所謂「十年來」の日本は如何なる狀態をなし續けて來るか、以上の叙述で略ぼ見當はつくのであるが、左に對內的、對外的に綜合して觀察してみよう。

此の十年間の日本政界は紛擾と軋轢の時代であつた。政府と議會とが軋轢するのみならず、各政黨間の政爭が激烈を極める、議會は解散に續くに解散を以てし、政府の更迭は甚だしく頻繁であり、十年間に七八回の內閣で二年以上のものが一二度しかない。政界の狀況が總體としてフランスに似て來たが、たゞフランスは內閣が變つても國是は不變であるのに、日本は內閣の變る每に國是が變るので、單に內政が不整頓といふだけでなく、內外の方針が一向立たない。政府はたゞ議會の切拔策に全力を盡し、肝心の國家の事業は抛擲してあるので紛亂に紛亂を極めて如何ともし難い、議員の方でも勿論議會が國家的機關だといふことを忘れて、そこで多數を占めて權力を握ることのみ考へてゐる。而し權力が利權を意味することといふまでもない。第一議員の職分の考へが全く變り、國家の大方針とか大問題についで公平な議論ばかりしてゐるのでは務まらぬ、凡て地方的利害を第一とし、選擧民の感情を第一と考へて、地價修正、治水工事などでは何を措いても贊成しなくてはならぬ。さもないと直ぐ辭職勸告となる。又選擧による地方民の腐敗は甚だしいもので、凡て選擧は百姓の御機嫌をとり、選擧區の利益になることをいひ、金さへ播けば大丈夫である。地價修正、地租減額、河川工事、鐵道などについて甘い事を並べると効果覿面であるが、外交とか國家の前途

とかを看板にしたのでは、先づ當選出來ぬとしなくてはならぬ。選擧區民は選擧を一の金儲けと見、自他ともに怪まぬ。從つて議員間にも金錢的醜聞が普通であり、賄賂公行、買收平氣、利權漁りは朝飯前といふ有様である。如何なる民業を興さうとしても、先づ賄賂によらねば議會で賛成しはしない。且つ政黨はその黨費調達のために新聞を利用し、脅迫手段を加へる。

獨り議員といはず官吏社會の腐敗もこれに劣らぬ、内閣の更迭の頻繁なのにつれて官吏の地位も極めて不安であり從つて正道に國事に努力するは馬鹿馬鹿しいとされ、上長官の機嫌をとる術を解し機會ある毎に官權を利用して金儲けするのが當世才子の要領とされてゐる。例へば條約改正成立の機密を握れば、直にこれを御用商人に漏して、結托して土地買收を始める如きものである。かゝる態度は文官はいふに及ばず武官にさへも及び、軍艦用材の購入に當り納入商人と馴れ合つて法外な高價で買上げる位の藝當は、普通である。いはゞ日本全國、政府も議員も、官吏も國民も皆我利心に支配され、愛國心といふものを忘れてゐる。そこで心ある人々は一度戰爭して眼を覺まさせて國家を改革しようと考へるのも無理がない。

この間政黨の分野は、明治二十五六年の自由、改進、國民協會などから變じて進歩、保守、獨立の三黨鼎立であつたが、時勢の致す所で、功名に急な急激黨が進歩黨中から分裂して正義黨なるものを起す。

最近の政狀をいへば、三年前進歩黨の内閣であつたが、急激黨が分裂した爲め保守黨に破られて辭職した、然し財政困難と黨爭の激烈なため誰も政府になるものがないので進歩獨立(自由改進ともいふ)兩黨が聯合内閣を作つたが寄合世帶で直ぐ内部から割れ、保守黨内閣の出現となつた。然し政局はこれで安定したのではない、聯合内閣時代に多年の經綸を實現しようと、地價修正、地租減額、航路擴張案、輸出稅廢止、官制改革、政費節減等種々無定見に手をつけたが、思ふやうにならず、遂に陸海軍豫算に手を加へたところ軍人社會の憤慨で内閣の致命傷となつた。現在

の保守黨內閣に至つて、歲出不足が三百萬に及び、內閣の否な日本國家の重大な惱みとなつてゐるが、これは矢張り根本は、內政方針の不定のためであり、直接の原因としては、政黨內閣が一種の人心收攬策としてやつた鐵道政策が「我田引鐵」主義を生んで不急不要線が多くなつたこと、同じく地價修正が三度も反覆された結果多額の收入減となつたことである。國家としては殊に寒心すべきは國防軍備の現狀であらう。政爭に沒頭せる政府と議會にはかゝる國家問題を考慮する餘裕がない、陸軍は先年豫算削減で大に定額を減じられたが、流石に海軍擴張論はないではない、又政府も政黨も流石にその必要を認めてゐないわけでもないが、何しろ保守黨の案は進步黨が覆し進步黨のは又次の政府が壞すといふ風であるから、案はあつても一向實行の緒につかぬ、且つ海軍自身にも缺點や積弊があり、一度議會は擴張案の實行のため大艦二艘新造したが、一は全然動かぬものを造り、一は外國船に衝突せしめて沈沒させた、それ以後議會は海軍を信用せず、改革の實が擧るまでは軍艦を新造することを協贊しない。かくて海軍改革論は十年來の輿論だが、少しも實現されず、良士官は數ふる程よりない。それもこれも、國民一般の海事思想が起らない限り駄目であるから、一部硬直な軍人の間に、一度戰爭して一つは海軍の試練とし一つは國民の海事思想覺醒に資すべしとの論が起るのも無理がない。海軍がかく露、淸に比して問題にならぬ程劣勢である上に、一般國防の不備も話にならぬ程で、赤間關砲臺は半成、紀淡には何も用意なく、東京灣さへ防備不十分である、且つ北陸山陰には鎭臺一つない。又鐵道は多いが軍事上の必要を顧慮されずたゞ地方民の利害だけで引かれてゐるので、國防上肝要の地でも極めて交通不便なところがある。自國防備さへ覺束ない位であるから、海外發展など到底問題にならぬ。

對外的にいつても、同じことで、內爭の結果、十年此の方外交方針不定で、たゞ彌縫切拔ばかりを事としてゐる。對外的に當面の問題は條約改正であるが、從來幾度談判しても、二三大國側（英國が主）で日本の主張をきいてくれぬ、といふのも一つは內閣更迭の度に對外方針が變つたので外國の信用を失つたからである。然るに英國は露國牽制

上日本を味方にする必要を感じ、條約改正を承諾して來る、それで外務當局は、いよいよ内地雜居を許して司法權關稅權を回復することにする。然るに爲めにせんとする急激派は、内地雜居のことを不名譽な條件となし、保守黨の一派の頑固連と相通じて、内地雜居反對運動を起す。而かも此の派の反對理由とする（第一）耶蘇教が國教となること（第二）外人に商賣を取られること（第三）外人に土地を取られること（第四）社會貧富の不平均を更に甚しからしめることなどといふことが、地方人心を可成り激動させ、漸く改正中止の請願が多く、全國が不穩になつて來るので、又も改正の機が去らうとする。

一方又日本郵船會社に對する保護の途を誤つたので、總體に外洋航路が退守主義となり、その結果露英獨等の東洋航路擴張となり、肝心の日本海航海權さへ外國に占領されて來る。從つて對外商權の不振はいふまでもない。

だが何よりも重大なことは、わが國上下が政爭に沒頭してゐた十年間に、東洋問題の癌たる朝鮮を中心に東洋大戰爭の危機が誘致されつゝあつたことである。かねてから「その完成の時は東洋に事の起る日」だと豫言されてゐた西比利亞鐵道も愈々完成し、浦鹽港の軍備も十分に整つたので、露西亞はその侵略の宿志を遂ぐべく陸は朝鮮に露骨に干涉し、海は日本海に橫行するに至る。然るに英國は元來露國と利害對立的立場にあるので、露國の東洋進出が自國の不利と見てこれを阻止せんとし、淸國は又露國の接壤地であるのみならず、朝鮮を自家の版圖視してゐるので、勿論露國の朝鮮干涉を喜ばない、それで自然淸英が同盟して露に當る勢ひに成る。何れか一方が讓步してその覇權を認めればであるが、勢ひが斯く迫つて來ては、最早や大衝突、戰爭破裂は時間の問題となつてゐる。ところが對內的政權爭奪に夢中になつてゐる日本は、かゝる形勢に對して全然無準備である。朝鮮に於ける自家の利益の侵害されることに對しても、西比利亞鐵道の完成が東洋の形勢を如何に變化するかに對しても、全然無關係無準備である。況んや西比利亞鐵道の沿線に新販路を開拓して商權を擴充する如きことは、考へてもみない。第一浦鹽に對し置かれた開港場（伏

木）に鐵道が通じてゐない有様である、當局者が忘れたのではない。議會の我田引鐵の結果こゝに通ずる線が他府へ奪はれたわけである。事實、清英對露國の葛藤も、日本を味方に引入れた方が勝つことになつてゐるので、必らず双方から日本へ働きかけて來るに定つてゐるが、この機會に國家の實力を外交に示せば、朝鮮に十分な利益を占めて國權伸張の實を擧げることが明らかであるのに、國是不一、國策不定の結果、その實力がないのでそれも出來ない、又わが國の政治家でさういふ遠志のある人もない。

かく政治家に國家觀念がなく、專ら私心で功名爭ひばかりしてゐたら何うか、たとひ一般國民が彼等に欺瞞され感化されて、同じく遺利に狂奔してゐるにしても、心ある人々は必ずしもさうばかりとは限らない。現に輿論の中心たる中等社會には多年憧憬した立憲政治に幻滅を感じた人々が多い、又軍人中には國策不定による國家の前途を深慨して矢張り密に武斷政治を欲してゐる人々も少なくない。かゝる際に、若し我が國に一大野心を包藏する姦雄が出現して、內、武斷派と結びて國會を買收し、或は威嚇し、外、大國と契約してその援助を假り、以て大壓制を企てたとせば國家は如何。たとひ憲法があつてもこの場合これを中止するは容易であらうし、軍人の反感から武備もその用をなさぬかも知れず、日本國家は全く一姦物の頤使のまゝに、外國の左右するところとなるかも知れない。寒心とも寒心すべき事態ではあるまいか。

以上の如きが、玉野成章（卽ち鐵腸居士）の明治四十年の日本に於て見たものである。勿論これは小說であり想像であるが、それは然し架空な無實な想像ではない、二十五六年の現實の日本に、想像上の「四十年の日本」の萌芽が見える。上節にも暗示した如く、かゝる萌芽的事實の例を吾等は今日でも當時の日本政界から幾つも拾ふことが出來る、（況んや吾等ならぬ當時の鐵腸に於てをや）。便宜上「國會」新聞を假りてその例を三四示すことにせば、官民軋轢、內政不整頓、國是不立の如きは一般問題であるからこゝで特に語ることはせぬ、その他軍事豫算殊に海軍擴張等の否定、

軍人社會が激昂し、武斷政治を望む者のあること、憲法中止論を唱へし人ありとの噂さ等は前に語つたからこゝでは繰返さない。その他の點で例へば議員の態度に對する嘆息は「黨派上の榮辱家國宗廟の榮辱」(二十六年一月二十一日國會)「嗚呼條約改正案」(同一月六日同)等の文字に窺ふべく、これ地價、地税、鐵道、治水の外、眼中條約改正の如き國家問題なきを嘆じたものであり、又二十六年二月二十三日の「國會」には條約改正を奇貨として土地買收を試みた改進黨を罵つてある。又國防の不十分、例へば東京灣の防備不十分に就いては同年一月十三日の「國會」を見るべきである。此の記事の前後に海軍擴張海軍改革に關する記事が多い。條約改正に對する論議、殊に內地雜居か非雜居かについては議院外に可成りの激論が戰はされ、非雜居論乃至尙早論の勢が大に強く、非內地雜居研究會の如きものが組織され、[一]全國的に宣傳を試みた。井上哲次郎の[二]諸著及び國會(二十六年三月十九日以後連載)の「大勢論」の如き非雜居、尙早論の代表的なものに屬する。その他代議士連がこれに眞面目な考慮を與へないことを非難した記事は多い。日本海航路へ外船(露、獨、英、朝鮮)の進出と日本船の退守に關する記事は二十五年末から二十六年にかけて相當見當る。東亞の現勢に關する日本の無關心無準備、朝鮮問題に對する注意喚起等に關する記事論說は枚擧に遑がない程である。何れにしても鐵腸の見た「四十年の日本」は想像の所產であり、又警醒の目的で書かれたものだけに誇張があり、過慮もある、然しこれを書いた當時は日本の國家的自信が到底今日とは比べものにはならず、從つて對外感情も今日とは全然違ふので、「四十年の日本」をもつて全然杞憂だつたといふやうなことは出來ない。

以上は警告は警告でもこの點ではいはゞ間接の警告であるが、玉野成章卽ち鐵腸はこの小說の最後に於いて正面切つて直接に大警告を與へ、かゝる危機に臨める日本國家の救濟の道を示してゐる。玉野は歸國直後、日本の現狀を看察して、「小黨派の軋轢で對外策が定まらず、人心の瓦解するは國家が一小島內に居住して海外の形勢を知らぬ故である、これでは外部からの刺衝でなければ內政の改革は出來ぬ」と感じたが(前編四二九頁)この小說の後編第十六

章に於いて、彼は總理大臣杉村伯の諸問に應じ、內外の形勢について政府の取るべき根本方針を陳述してゐる、これはいはゞ大警告の前置ともいふべきものである、その中にかうある。——

我國の政事家は東洋に於ける日本帝國の位置を利用するの途を誤り保守黨政府の時には清英二國に同盟して我と利害の關係ある露國を激怒せしめ前內閣に至れば急に方針を變更して清英二國を敵となせり今や三國とも我國に向ふて種々の問題を提出し云々（中略）各國要求の不當なることを說破し我國に利益を讓與する者に同盟し其の否らざる者に反對して妨害を試むべき決心を示さんか三國は東洋に於て勢力相比敵し日本の方向によりて雙方の利害に大關係あることなれば彼等より來つて我に同盟を求むるに相違なし然れば今日の政略たる進取を務むべくして退步すべからず且つ內國の事情も頗る困難なれども對外策の方針を確定して人民の報國心を鼓動せば多年の弊害を一掃し同心協力して國家の獨立を維持するに難からず云々．

即ち國民に國家非常時なことを認識せしめ、對外一致の覺悟を定めさせて、これで對內的改革乃至振興を計るべしといふ意見である。同後編第十七回に於いて玉野は愈々日本への大警告を與へる、これは或は著者の叙述により或は玉野の演說によつて全回に亘つてゐるので、全文引用することは困難であるから、幾分の節略を加へ書き改めて次に揭げよう。

玉野（即ち鐵腸）は曰く、今回の危機には幸ひ天祐によつて再び平和を見ることが出來たが、日本人は決してこの一時の平和で安心は出來ない、前途には一倍の大困難がある。東洋問題が再び大破裂するのは近く數年の後にある。世界各國が益々富强を競ひ東洋の形勢が益々切迫するに當り我國の狀態が今日の如くであればこの日本帝國を永遠に維持することが出來ない。抑も東洋の形勢に一大變動を生ずべきことは十四五年前より（即ち明治二十五六年より）識者の着眼した所で、ニカラガ運河と西比利亞鐵道が東洋諸國の政治上商業上に大影響を及ぼすべきにつき我が國人

は全力を盡して之れに應ずる準備をすべきであつたに國家の方針が一定せず紛々擾々の間に歳月を經過し遂に内政外交ともに非常の困難を惹起した。その原因はといへば、上下協同して國家の進歩を謀るための議會と政府が第一議會開設以來感情的に衝突ばかりを事として來たからである。解散、更迭、元勳内閣、武斷政治と走馬燈の如き政局を經て漸く政黨政治の端緒を開いたが、今度は黨派の政權爭奪で内閣が永續せず、且つその更迭毎に政治の方針も一變して國民の不便不幸は大變である。かく内政の混雜する時には國是を定めることも、軍備を整頓することも、條約改正も出來るものではない、況んや何で東洋の大勢に從つて國力を增加し國威を伸張する事が出來る筈があらう。然るに此の十四五年間に於いて露國は熱心に日本海岸に移民開墾を務め海陸軍備を整頓し且つ百般の困難を排除して西比利亞大鐵道を成就した、又近年迄進歩が極めて遲緩であつた支那も、わが内政の混雜してゐた間に各種の改革を遂げ、全國に電線を架設し、鐵道も北京より東北は山海關吉林から黑龍江に至るもの、西北は伊犂、南方はビルマの界に至る三大線路を成就し、鑛山製鑛の事業益々盛大となり、海軍に至つては噸數艦數ともに遙に我が國を凌いでゐる（淸露二國の未來は著者の想定）。これに比して我が國は如何といふに、――

鐵道も未だ要地に施設せられず國防不充分にして計畫屢々變更し海軍は支那及び露國の東洋艦隊に對する勢力を有せず外にして云へば西比利亞の發達に應ずる一の準備をもなさず一度占取せし日本海の航權は全く諸外國の競爭に失敗し朝鮮政略の一定せざるが爲めに此の半島に於て愈よ勢力を失亡し各港の商業盡とく衰微に就き前年二三の論者（鐵腸その他）の主張せし支那の諸港並に揚子江沿岸に向て盛に航路を開くことも更に實際に行はれず南洋及び中央阿米利加への航海も更に發達をなさず内外人の曾て東洋の英國たるべしと云しは空く一場の夢に外ならず此の如く東洋形勢の大變動を爲すに際し我國の着々失敗を取りしは何故ぞや諸政黨の軋轢して政事上の混雜を極め人民に國家の觀念なく政事家に遠大の謀圖なきに出るに外ならず議會の開けし以來人民は國家に盡すの義務を忘れ各自の

負擔を述べ又は一選擧區一地方の利益のみを主張し而して議員は國家の大計を思考し前途の方針を定めて輿論を誘導することを爲さず徒に選擧區の歡心を求め或は黨務を擴張するが爲め頻に民力休養を唱へ國家に必要なる事業と雖も之に着手することをなさず偶々鐵道築港治水等の事業を起し國財を費すことあるも概ね地方の感情のために支配せられ不都合千萬の結果を生ずるに至る云々

人民に國家觀念がなく政事上に於て互ひに私利を競爭する時には立憲政體の利益は實現されない、その結果は無政府となつて國内の紛亂を生ずるか、武斷政事家の爲めに壓制を受けるか二つに一つである。前内閣（澁谷）が憲法を蹂躙して遂に外國の力を藉つて大壓制を行はんとしたのは、全く立憲政治が腐敗したのを見たからである、澁谷の不成功は國家の幸福であつたが、若し大豪傑がこの腐敗に乘じたら立憲政體の下に於て大壓制を行ふことも出來る。別して東洋の形勢を見れば、今日の如き政局の有樣では我が國の獨立を維持し進んで我國の勢力を擴張する如きことは出來ない。我が國は内部の紛擾のため外國に向て競爭する機會を失つた、國民が協同一致して内外の政務を整頓しなくては、再び國勢を挽回する望みがない。更に東洋の形勢について再言すれば、今日東洋に於て三大强國の互に競ふて兵力を增加するのは何故であるか、清英二國と露國とは全く利害衝突して、遂に大破裂を引起す恐れあるが爲めである。前日の衝突の如き、暴風雨の前の一驟雨に過ぎない。何の一國も徹底的に相手方に勝てぬため一時的に休戰したのであるから、寧ろ今度の戰爭で益々雙方の怨恨を增し互ひに勢力を競ふ熱心を高めたのは當然であるから早晚再び大衝突を引起すであらう。では、我が國は東洋問題に就き如何なる方針を取るべきであらうか。思ふに我が國は東洋に於いて權力平均の地位に立つてゐる。清英と露國は相對立し勢力伯仲してゐる、我が國が露の味方に立てば清英は非常の困難を感じ我國が清英に聯合せば露の不利は一方でない。然れば我が國に屹然自ら守る勢力があれば決して諸外國の侵略を受ける氣遣ひがないのみならず、我が政略の立て方によつては東洋の運命を左右することも出來る筈で

ある。（これが卽ち『東亞之大勢』の主眼）。先年來、露支が交も我が國に握手を求めたのは事實である、然るに當局がこれを利用して日支貿易上の障害を打破し乃至西比利亞に於て各種の利益を要求することせず、內政紛擾の間に好機を逸したことは、國家の爲め遺憾千萬である。今度の戰爭の如き、わが國に內紛なく、國防整ひ、軍備充實してゐたら、何れに加擔するとしてもわが國に十分の利益を讓與せしむることを得たであらうし、又軍備不十分で嚴正を守つたにしても臨機應變の活動をすれば我が國の威名を輝すに足りたのである。然るに政府の不用意のため双方から怨まれ、勞して功なきのみか、わが國を危急存亡の期に臨ましめた。これは皆政治家が東洋の大勢に通じない咎である。

以上の如く、內政の紛擾を極むるが爲に宇內の風潮に應ずることが出來ず、工業も商業も航海も皆な海外の競爭に失敗し、東洋に於いて最も希望ある地位に立ちながら外交の方針を誤まつた爲めに着々失敗し國威を失墜したこと少しでない。我等はこれに懲りて此の金甌無缺の日本帝國を維持する爲め國民協同一致して外國に當る決心を呼び起さなくてはならぬ、一身の利害を忘れ地方の僻心を去り、黨派軋轢の弊害を制止し、大に前途の計畫を立て我が國を富强に進むることに盡力しなければならぬ。國民は全力を盡して條約改正を成就し一定の方針を立てゝ鐵道を延長せしめ、日本海支那海の航海に就て英露と競爭し、進んで濠洲米國の航路に及ぶべく、國力に應じて海陸軍備を整へ、わが地位を高めて東洋の勢力を左右しなくてはならぬ云々。かくて玉野はその大警告大經綸を結ぶに次の語を以てする。

諸君よ地球上より視れば我國は彈丸黑子に過ぎません區々として此の群島を固守する樣では此の激烈なる宇內の競爭の間に立つて獨立を維持することは出來ますまい近來歐洲諸强國は頻に東洋諸國を蠶食し今日にては南洋中の一小島すらも我國に於て手を付ける場所なき有樣となりました然れども早晚氣運の一變する時節があります（ヒヤヒヤ）妖雲の歐洲諸國を掩ふて東洋を顧みるに暇あらざるときは卽ち我國の進んで大に勢力を展ばすの時であります（ヒヤ〳〵）諸君よ國民の一致協同を謀つて全力を外に向け我が日章の國旗をして南洋諸島を始め東洋の要地に飜飜

たらしむるは愉快の至ではありませんか

實に滔々たる廣長舌で、作者鐵腸の理想、國權伸張意識をどつさり盛り込んだ代表的な警告といふべきであらう。眼光も粗大であり、種々の過慮も見當違ひも誇張もあらう（見當違ひ乃至誇張の例として、當時の議會は必ずしも政爭の爲めの政爭をしてゐたのではない、前々からの行掛りを清算すべく必然的にかゝる態度を採らざるを得なかつたものであり、必らずしも鐵腸が概括する如き無用非愛國的な團體ではなかつた）、だがその態度の眞摯、懇切な點で斷じて一片の附燒刄でないことは分かる。且つその主眼たる對外的認識を正して眞の國民的統一を持ち來さうといふ意見は決して過慮でも見當違ひでもない、當時の新興日本として何よりも强調する必要のあつたイデオロギイである。鐵腸が反覆丁寧悃々を極めるのも尤もである。且つ鐵腸の警告には、可成り粗大ながら幾分の豫言的眼光がある。鐵腸がこの書で日本の危機を叫んだ翌年二十七年には朝鮮問題から清國と交戰するに至つた。この戰で裏面に清國と結んでゐた英國は、我が國の勝利を見て、俄に我に働きかけ、清國と共に當るべく決意してゐた露國に、我が國と共に當る如き政策をとつた。露國の對韓、對清的野心の如きはいふまでもない、西比利亞鐵道の完成（三十六年）と共に、對韓、對清干涉が露骨になり、遂に日露戰爭となつて、明治四十年を待たずに、鐵腸の豫言した國家的大戰爭に遭遇することになつた。ついで歐洲大戰爭（鐵腸の所謂、妖雲歐洲を掩ふて東洋を顧みるに暇なき時）となり、日本は果して南洋に延びた。私は何も、鐵腸を九原に起してこの發展の現狀を見せたかつたなどと感傷するものではないが、ただ、この小說に寓した彼の警告が、日本の過去と現實に對する深い愛着と識認から生じた豫言的警告だといふことを認めてやつて可いと思ふ。

尙ほ、日清役の直前といふ點に卽して興味ある事實は、當時日本上下の對支感情が恐ろしく眞劍だといふことである。支那の交通軍備が日本を凌いでゐるといふことは、玉野の警告その他の場所で擧げられてあるが、議場の討論を

描寫せる他の個所（後編第五回）に於いて、日本と支那とは利害兩立せず、早晩兩國の間に大衝突が起る、然し一支那は疆土も人にも我國に十倍すれば我國の獨手を以て之に當るは極めて困難であるから支那と利害の反對する一の邦國を求めて同盟を爲さねばならぬ——と一議員に言はしめてゐるが、これが或る程度まで有識なる政治家間（必らずしも鐵腸といはぬが）の確信であつたらう。要するに、當時の人々は、支那を日本の恐るべき勁敵と見て居つたのである。(三)

以上で、この小說の政治的イデオロギイの本幹は盡きるが、鐵腸が殆ど故意表ひにしてゐるイデオロギイのうちに、今日から顧て看過し難い興味あるものが一つある。それは當時次第に社會の表面に現れつゝあつた勞資問題及び下等社會の權利に關するものである。急激主義の主義宣言領袖淺谷八藏は夙に保守黨の貴族臭、進步黨の非進步臭を罵つて自家の平民主義を高唱してゐる人物であるが、その政見のうちに、普通選擧、勞働者保護の二項目がある。淺谷の考へによると、政事が腐敗した上に議會では富民の利益計り主張されて國家全體の利害の度外視されるのは、畢竟選擧法の不完全なためである、今日政事上の弊害を一掃するには國民一般に選擧權を與へ廣く政治思想を起すのが必要である、又追々勞力者と資本家の利害が衝突し、勞力社會が資本社會から壓迫を蒙るにつれて、勞力社會の法律的保護が必要である、といふ。三野は當初からこの論を聞いて、その何れもに尚早論を吐いた。選擧については、——如何にも今日の選擧法には弊害が多いに違ひない、然しこれを救ふには成るべく商工業者から成るゝ澤山選擧人を出し相當教育あるものには財產資格に拘はらず選擧權を與へる樣にするのが適當である、政治思想の乏しい人民に向つて普通選擧を行ふのは危險である、といつた。又勞力社會保護については、——歐羅巴などのやうに工業が盛んになつて資本家に大勢力が出來た時には成るべく勞力者を保護する措置を取る必要が生ずるが、今日は工業が幼稚であつて未だ充分に事業の起らぬのに法律を以て勞力者を保護する一方に傾くと資本を固くして工業を起すものがなくなるが

ら、却て勞力者の迷惑を生ずる樣な結果になる云々　鐵腸が玉野の尙早論に贊成してゐること、いふまでもない、だが、かゝるイデオロギイをこの小說に盛り込んだのは、果して偶然の思付きであるか何うか、勿論偶然ではあるまい。此の頃の政治史乃至政黨史を見ると、大井憲太郎がその一派の政客を率ゐて自由黨を脫し、東洋自由黨を組織したことが特筆されてゐる、（二十五年十一月）。而してその綱領（第四）に民力休養（殊に貧民勞働者の保護）を爲すことの一項があり、又その政策の一として普通選擧を標榜し、普通選擧同盟會を組織したので、當時の政界乃至社會の耳目を一方ならず聳動した。玉野の此の論は、東洋自由一派の政綱に對する鐵腸の批評と見るべきではなからうか。鐵腸はこの小說に於いて、澁谷のかゝる主張は必ずしも實行の熱意あるものではなく、一時の人氣取りであるかの如く說いてゐるが、大井の素志が果してこれと同じであつたか何うか、然し何れにしても、此の頃の社會には漸く勞資問題が複雜に根を張つて來つゝあつたことが、こゝに反映されてゐるのである。而して大井がこれを政綱に取り上げたことが、それに對する世人識者の注意を大に增したことといふまでもなからう。同時に、彼等の大半が、これに對してまだ鐵腸と同樣に考へつゝあつたことも想像されるのである。

例によつて、選擧區の醜狀、議員買收、警官買收などの點で單なる諷刺以上に一種の暴露的興味を示してゐる、然しこれは詳しく說くまでもないので、たゞさう言ひ添へて置く。

この小說は、鐵腸の政治小說中でも際立つて政治的な小說であり、政治的な、餘りに政治的な（political, too political）小說といひたいぐらゐのものであるから、その政治的分子を別にせば、もう格別いふ程のことがないやうな氣がする。イデオロギイが自由民權から國權伸張に變つても、テクニクの進歩は見られない。二十年前後には、當時の小說壇から傑作扱ひされたものでも、二十六年には可成りハンデイキャツプをつけて批評される。殊に、二十五六

年は明治小說界の一轉機で、文章第一の時期から趣向第一の時期に向はうとするときである（趣向第一とは、必らずしも舊式な道具立澤山の稗史的趣向を重視するといふのではない、小說をして近代小說らしい趣向をもたしめようといふ努力である）、だが鐵腸は小說家としての自覺も努力もしないので、テクニク上の進步がないのは當然である。さてそれをさうとした上で、「四十年の日本」のテクニクのことを二三語る。

『花間鶯』の場合にはあまり近い未來を描いたので閉口したといふが、それに懲りたか、この作では少々遠い未來を描くことにしてある、然し政治軍備の將來を想像するは先づ可なりとして、政治軍備以外一般の社會的發展變化を寫したところは、想像甚だ貧弱、南翠にさへ及ばない。趣向の主觀的は先づ政治小說の性質上仕方がないとして、描寫の概念的なこと、たゞ說明的なことは、依然性格を傀儡扱ひにし、背景を曖昧なものにするなど、少し大仰だが致命的な缺陷といへばいへる。

プロットは先づ政治小說の定石通りで、政治的事件に才子佳人の戀の葛籐を含んだものである。然し政治的分子に壓倒されたか、戀愛はあつさりで、力を入れたとも見えない。その癖、玉野對松本玉子及び淸子、澁谷對雪子、松本元吉對玉野照子の三組あるが、何れも然し喋々喃々する場面が極めて省略されてある。玉野と好一對と思はれた玉子は死して、まさかと思はれたお淸が玉野夫人となるのは、一寸意外だが面白い。

この種の小說として作爲的なプロットをもつことは止むを得ぬことであるが、然しこれが露骨に出ることは可いことではない、玉野をわざと伏木に上陸させてみたり、富山と少女お淸が難船で離れた親子であつたり、澁谷と雪子の關係があはただし過ぎたり、ロシヤ陰謀の成功も餘りに容易過ぎたり、その他の點で作爲的プロットが餘り露骨過ぎるところが多い。

又前作と趣向の重複するところもある、例へば、難船（前編第十回）は、『南洋の大波瀾』の中のものと同じであり、

保安條例のクーデターは、『花間鶯』のむし返しである。支那小説や西洋小説からのかりものは流石にさう目だたなくなつたが、まだ前編第七回の、玉野が富山政成を訪ふあたりは、三國志の劉玄德が孔明の草廬を三顧するところとそつくりの氣分である。これから一寸氣のつくことは、此の作には、鐵腸の從來の小説と違つて婦人を利用することが割合多い、その一斑は前掲の梗概を見ても知られると思ふが、婦人の出征、婦人の國事奔走の如き、蓋し非常時に於ける婦人の覺悟と奮起を促したものと見て可い。さうして何となくプロット全體の根底に、舊文學から來る勸懲思想が微かながらまだ潛んでゐるかに思はれる。

性格は概して類型を出ないこと、例の如くであるが、舞臺の廣い割合に動く人間が少なく、極めて寂しい、男性では玉野、澁谷、山口少將、この兩三人が日本の運命を左右することになつてゐるのは、いかに小説とはいへ日本の將來が心細過ぎる。その他幾十の人物は出入するが、これはそれ程重きをなしはしない、女性は、今もいつたやうに、この作には比較的多く出るが、それとて四五輩に過ぎない、そのうち男性に劣らぬ活動をして性格を示してゐるのは照子、雪子、お清三人のみ。つまり先づ性格らしい性格は男女合して六人である。然るに舞臺は日本から朝鮮、滿洲、西比利亞にまで及ぶ廣々漠々たるものである、寂寥たらざるを得ない。

玉野成章は富山政成と合して著者鐵腸の兩面を成すものであらう。富山は高踏消極的一面、玉野は憂國積極的一面を示し、（或は、富山は議會に於ける鐵腸、玉野は豫言的憂國者の鐵腸と見ても可い）、共にその理想言動に於て鐵腸の分身たることを明らかにしてゐる。富山はそれ自身の議會經歷に於いて鐵腸そつくりなのですぐ分かるが、玉野に對して心上練磨を說くところは（前編第七回）彼の陽明癖を露骨に示してゐる。玉野については、實は鐵腸理想の權化といふべきのみ、志士的典型といふ外、格別いふことはない、たゞたゞその無完全無缺點なのに呆れさせる。選擧に失敗し戀愛をするので僅に人間らしく思はせるだけである。然し鐵腸の平日の主張よりせば、澁谷の野心を挫くに

は、矢張り議會的手段により正面攻撃すべきが當然ではなかつたか、玉野は矢張り議會に出て、議會を警醒し、澁谷を論駁彈劾し、國民をして覺醒せしむべきであつたらう、然るに事そこに出でず(たとひ力及ばぬを知つたからとて)奇道により軍人の力を假りて上奏の手段に出でたのは、澁谷の上を越す策士的智慧ではないか。この邊、案外、鐵腸が戰國策式の駈引に富んでゐたことを示す。

玉野の性格が人間的に興味がないのと反對に、これに對立する澁谷八藏は、人間的には遙かに興味がある性格である。それは、玉野が抽象的理想化された存在であるに對し、澁谷には實在のモデルがあつたらしい、これも單一なモデルではなく、恐らく綜合的モデルであつたらうが、鐵腸の眼中には、何人かの面影を常に思ひ浮べつゝこの人物を描いたものに違ひない。ではそれは誰であつたか、それは明確に指し難い(指すだけの資料がまだない)、然し明治二十五六年の政狀と、澁谷の性格、正義黨の政綱等を考へ合せると、大井憲太郎の蒼顏が髣髴と現れて來る。澁谷は露語を解し、希臘教の信者である、大井は露語は何うか知らぬが、佛語が堪能で希臘教の信者ではある、且つこの頃大井は自由黨の妥協振りに嫌厭し、最左翼を率ゐて脫黨し東洋自由黨を組織し、一面高島鞆之助の如き武斷派とも消息を通じて自ら大に爲すところあらんとし、又さう期待もされた。自由新聞第百號附錄に六大政治家といふものがあり、當時最も有爲と許された六人の政治家を描いたもの(讀者に公選さして)であるが、その中に伊藤、大隈、板垣、後藤、品川と並んで大井が加はつてゐる。(前にも暗示したが)東洋自由黨の政綱には勞働者保護を公然と揭げ、又普通選擧を黨是として高唱するなど、大井の活動は當時の政界に潑剌たるものがある。恐らく見方によつては、何をするか底の知れない一代の梟雄の如く見えたかも知れない。然し澁谷は勿論小說の人物で、大井には必らずしも澁谷の如き大陰謀があつたわけではあるまいから、必ずこれがモデルとはいひ切れぬが、單に大井の急激な權變なる行動に對する時代の人情を描いたものとせば、强ち否定も出來ないであらう。或は澁谷八藏の名は、早稻田伯大隈八太郎から聯想

したとも考へられるが、名だけは先づそれで通ずるとして、その他澁谷に似たところはといへば、下院の議員五十餘名を動かすといふ點だけである。當時の改進黨員は五十名に足らぬが(第四議會四十一名)、先づその位である。その上當時改進黨と羅馬舊教と何か連携成立といふ風説があつたといふ、(五)だが然しこれだけでは澁谷及び正義黨の行動と大分遠い。或は二者を七分三分位に混合させたものと見ても可いが、何より先づ、當年の馬城將軍の雄姿が思ひ浮ぶのである。

山口少將は、いかにも剛直慷慨で、軍人らしい性格に出來てゐる、類型は免れぬが先づ無難であらう。經綸が今少しあつたらとも思ふが。

その他、選擧運動員、議員、探偵等の性格描寫に流石に一寸面白い穿つたと見えるものがある。

女性中、最も好感をもつのは、玉野照子である、元氣よく、活潑明朗で、幾分モダンな型の淑女である。松本玉子は舊式な深窓の處女らしい令嬢、玉野を戀うて死ぬのは可憐であるが、然し玉野と結婚させてはあまり月並な趣向になるから、これは戀死の方が妙である。少女お清、これは雪子に對立する女性で國事に奔走して大功を立てた烈女といはどいふべき女性であるが、玉野に對する戀心も彼女をして國事に奔走せしめたものといつて可い、だからこの點を今少し明らかに心理的に書くべきである。然し妙に道德ぶり卒直でないところが面白くない。寧ろ茨木雪子の方が面白い、たゞ何故に雪子が間諜になつたか、それについて說明があるべくして何もないので、たゞ譯の分らぬ妖婦といふことになつてゐるが、然し日本婦人がこゝまで賣國的行爲に出るには、何等か深刻な理由がなければならぬ。鐵腸は矢張り女性の性格を描き上げるのに手ぬかりが多い。

背景としての上流社會を描くことは鐵腸は、まだ板についてゐない、智識が少ない所爲だと思ふ。中以下、といつても矢張りインテリゲンチヤ同志の社會が一番上手に表現されてゐる。議場の描寫は大分よくなつた、これも實驗し

たからだと思ふ。背景で、際立つて見えるのは、照子と松本元吉の冒險の舞臺となつた元山から浦鹽にかけての描寫なり見聞なりで、流石に前年十分視察しただけよく調べて書いてある。これだけは一寸買つて可いやうに考へられる。全編を通じて描寫でもつとも骨を折つたのは、後編第三回元山沖日露海戰の描寫である。鐵腸は海軍の智識がないので、海軍佐官某氏に計つたところ、これによつて想像して書かれよといふので、「水交社記事」第二十九號所載「號令塔」(エチ・アール・ノールドフオルスター)を貸してくれた、そこでこれを手本として一生懸命に工夫して描き上げたものであるといふ。

此の小說に對する文壇側の批評は概してよかつたらしい。その例には早稻田文學(第四十二、第四十五號)の紹介を讀めば、思ひ半ばに過ぐるものがある。又、私は未見であるか、ロンドンタイムスにまで評が出たといふ(「戰後の日本」奥附廣告)。然し批評中の壓卷といふべきは、三十六年七月一日の郵便報知新聞紙上に現れた、犬養木堂の批評である。

木堂はこの小說の文章を大に褒め、殊に前篇第九回難船の條を推賞してゐる(木堂の評は前篇だけに對するものである)。然し次の三條の理由で、この小說の大骨子に反對してゐる。その三條とは、(第一)不可有的顯象を書いて徒らに國民を侮辱する(第二)事理に合はざるものが多い、(第三)篇中人物の言動兒戲に類するものが多い、といふ是れである。卽ち澁谷八藏の如き賣國的野心家を出現せしめる如き、露國又は淸英に東京灣頭に迫られて同盟する如き日本國民としては讀むに堪へぬ不可有的不吉不祥の現象で、徒らに國民を侮辱するのみ、これが第一である。第二の例は、玉野が伏木に上陸して鐵道の無いのに驚く如き、西比利亞鐵道が四十年の完成は遲延に失する如き、又、露艦二隻で大阪を衝かんとする如き、又淸英艦隊が東京灣頭に乘り込みイキナリ露艦隊と砲火を交へる如き、多々ある。

第三は「篇中の人物忽ち愚人となり忽ち智者となり忽ち君子となり忽ち小人となり一人にして兩樣に變化するあり言語擧動其の人物地位年齢等に似合ぬものあり」云々、一二例をいへば、あれ程智者の玉野が富山老人に向ふと頓に愚人の如くである、又總理大臣松本子爵がいかに無能の人物なればとて、當面の朝鮮問題にて何の經綸もないとは、人を愚にするものである。又富山程の人物が一寸の不遇に氣落して遁世するは當世の志士とも思へぬ云々（こゝは木堂が鐵腸の逃避氣分を罵り勵ましたものと見る）。

鐵腸はこれに對し、國會紙上で（七月四日、六日）木堂に答へた。曰く、澁谷の如き政治家が出ずに終れば國家の幸であるが、この儘で社會の腐敗が續けば何とも分らぬ。現に上流社會には露國の金をうけて我國の事情を探偵する者があるといふ、又現に鄭某の賣國文書件がある（明治二十四年三月に日本新聞によつて渦巻き起された怪事件、文書は結局僞造と判定される）、又外人と結んで間接に法律を犯すものが商人だけに止まらぬは周知の事實である。又雜居のために露國と交渉を引起すのを恐れて千島を交換の名儀で樺太を露國に讓つたのは何人ぞ、いな近く津田三藏事件に、我が憲法法律を蹂躙してまで露國の歡心を求めんとした政事家がありはせぬか、これでは澁谷八藏が出ぬとも保證されぬ、且つ自分の意は澁谷や雪子の姦惡を憎み、玉野淸子の愛國を擧げるにあるから國民侮辱云々は當らない。又東京灣頭に露國乃至淸英の軍艦を示すも、日本の國防不十分を警醒するためのみ。第二については、玉野については深く怪むを要せぬ、西比利亞鐵道完成の遲延云々については、今の工事進行度合で行けば四十年でもまだ早過ぎるかも知れぬ。又二隻の軍艦で大阪を衝く如き、又外艦東京灣乘り込みの如き現在の如き、軍備不十分を以てすれば、不能とはいへぬ。第三については自ら見解の相違が多く、讀者の判斷に任すべきである云々。

以上は眞の要領だけで、共に兩者の意志を盡したものではないから、若し志ある人は、何れもその本紙に就いて見られるが可い、評答の當否はともかく、木堂鐵腸兩者の性格政見が紙背に躍如たるものがある。

註（一） 明治二十五年六月十二日發開式
註（二） 『內地雜居論』（明治二十二年）、『內地雜居續論』（明治二十三年）、その他の雜居反對文献については明治文化全集『外交篇』年表參照
註（三） 吉野作造博士著『對支問題』（七頁）、昭和五年十二月刊
註（四） 明治二十六年七月四日國會、「木堂居士に答ふ」の中に前年の風說として載せてある。

『政治小說 戰後之日本』

題意の如く、日清戰役後の日本政治家及び國民に對して、國權伸張の立場から警醒を與へんが爲めに書かれたもので、政治的イデオロギイの點では『四十年の日本』の延長乃至變容といつても可い。初め『大戰後の日本』として二十八年十一月前篇が公刊されたが、發賣禁止に遭つたので、(一) 改題して十二月改刊した。鐵腸は、その傳中にも記した如く、前篇成つて間もなく（二十九年二月）病死したので、後篇を、秘書格の村松柳江が續成した（三十年七月刊）。續成とはいへ、大體に於いて鐵腸の遺構に從つたものであることが明白であるから（時事の變遷のためその遺構を多少變化させたとは後篇の序文に斷はつてある、例へばヒリッピン獨立運動を取入れた如きがそれであらう）やはり鐵腸の著作同樣に見て語ることにする。

鐵腸の主意は、今も述べた如く國民乃至政府議會に對する警告にあるのであるが、勿論戰役直後のことで正面から論じられぬ事が多いので、例の如く「未來記」の形を假り、通篇日淸役後數年のことゝして說かれてある。然しこれが勿論カムフラージュのためなるはいふまでもない、その點では『四十年の日本』よりもずつと露骨に「これはカム

フラージュであるぞ」といふ態度を示してゐる。

吾等は先づ此の小說に描かれたいはゆる「大戰」後の日本の現狀（主として政治社會）の豫想畫を見よう。吾等は先づその槪要を、作中の一人物の口から聞くことが出來る（前篇、第三回二四頁）――

（前略）實に我國も十二三年此のかた……敢て政府計りとは云はない……政事界の有樣が一體に腐敗し掛けたから前年の戰爭が一つの興奮劑となつて政事社會の人心を一新するであらうと聊か樂しみに思つてゐたのにイヤモウ實に百事意外千萬である、元來我國威を發揚する爲めには外國に對して國民の協同一致が必要であるのに黨派の軋轢は愈ゝ急激となり、勳績の大小を論じて互に嫉妬の念を起し、互に對立して相反目する者のあるのは何んと困つたことではないか。ソシテ戰爭が濟んで二三年間は官民とも軍備の擴張に誰れも異論はなかつたが、早や今日になると各地方に租稅輕減論が盛んになつて來て前政府などは此の風潮に背馳して現內閣の爲めに倒されたのである。コウ國家の方針が一定しない樣では日本帝國の前途も眞に思ひやらるゝ事ではないか……

大戰直後の國家經營に任じた前內閣は、三國干涉の善後策で第一着を誤つた、これは、當然天下に三國干涉の始末を示して國民の愛國心に訴へ、官民一致して後始末をつくべきであつたのである。又戰後武斷派の勢力と民間急激國權派の軍備擴張熱をもて餘して、延ては一般の軍事思想を邪魔物扱ひするに至つた。而か 多年勢力扶植に苦心した韓國は非日本黨の手に落ちても傍觀の態であり、露國の手がその影に働いてゐると分つてゐても、敢て對露の覺悟も準備もない。大臣は只政商と結托して利權漁りに血眼になり、政府は國家百年の大計よりも議會切拔と大臣の勢力爭ひに腐心してゐる。その癖、民間有志の運動や奔走は、或は苛法により或は探偵によつて拔目なく極力嚴重に束縛し、極力政權の維持を計る、といつたやうな譯で、何やら『四十年の日本』の何處かに說くところと髣髴たるものがあり、

國家の前途は內外とも全く憂慮すべきものがある。

これがいはゞ政治小說『戰後之日本』の展開する舞臺であるが、かゝる政界を舞臺にして動く人物には、何ういふ人々がゐるか。その主な人々を擧げると、——

海上　航三。退職陸軍中尉。憂國志士で日本南進論者。ヒリッピン獨立軍の參謀

朝日　照彥。代言人。政治革新論を持する少壯志士。大陸進出論者。谷川の好敵手

高山　將軍。日淸役の主將、現內閣への反對者で强硬武斷主義者

藤森　昌。現內閣大臣の一人で、海上の叔父。保守的政治家、理財には拔目なし。

松　田　伯。現保守黨內閣總理大臣。(後篇では磯山伯と呼ばれてゐる)

谷川　涉。官場才子の代表的人物。始め藤森の秘書として勢力を得、後に藤森を賣りて松田伯の信任を得、內閣書記官長となる。色慾の點では共に親分達を凌ぐ人物

山木　隆一。某省參事官。松田伯(磯山伯)の腹心の一人で、暗に谷川と競爭の位地にあり、磯山伯の女婿となる。

栗原　某。典型的御用商人

秋山　照子。朝日照彥の許嫁

藤森　秀子。大臣藤森の娘・海上の許嫁

等である。

大戰後の反動で軍備擴張、對外强硬の武斷政策が議會で歡迎されないのを看取して內治黨と通謀して政府を乘取つた保守黨の松田內閣は、國家的經綸をもち合さぬ反對に、利權漁りや勢力爭ひの點では盛んなもので、未曾有の醜態を暴露して心ある議員なり國民なりに眉を顰めさせつゝあるが、就中總理四天王の隨一といふ藤森昌は、性來山氣の

多い人物とて、政商栗原某と結托して貨殖の智慧を絞るに餘念がない。秘書格の局長谷川は大にこれを助け、忠實に御用を務めるので、大に藤森の信寵を得る。折柄新領地臺灣で新に金鑛が發見されたので藤森はこれを栗原の名儀で自分のものにしようとかゝる。谷川は心窃かに藤森の一女秀子の心を得んと欲するが、藤森の甥海上航三が秀子の許嫁となつてゐるで、先づ海上を遠ざけんとし、丁度海上が、政治的には藤森と反對に武斷强硬派に立つてゐるのを幸ひ、盛んに藤森及び夫人に說きつけるが、肝心の秀子の心が動かない。

海上はわが叔父ながら藤森等の行爲を陋とし、大に海外發展の志を抱いてゐる。彼は南進論者で、北方は露國と和し、大に南洋に進出して國權を伸張せよといふ論である。彼の親友の代言人朝日照彥は、反對に英國と和して露國と對抗し、北方大陸に進出すべしといふ論である。共に國權主義であることは同じであり、二人の背後には高山將軍がゐる。將軍は强硬武斷派の本家で現內閣の一敵國を成してゐる。

藤森の利權漁りはやがて議員に睨まれ、臺灣金山一件も議會の問題になる。政府はその爲めに窮地に立つが、止むなく藤森を犧牲にすることにする。卽ち藤森一人を辭職せしめて聯帶責任を取らぬことにする。谷川はこの際、藤森を見限り、却つて總理松田伯に種々密告して信用を得、內閣書記官長に榮進して勢威を揮ふ。辭職後の藤森はあれやこれやの心痛が原因で殆んど憤死する。谷川はこの時自分名儀の藤森の財產をわが有とする。栗原は急に古借を催促するといふわけである。藤森の遺族は困つて、急に海上に相談しようとするが、海上はこの時南洋視察に行つてゐてゐない。それで彼の友人であり且つ秋山照子が秀子と親友であるといふ關係から、朝日に谷川から預金を取戾す訴訟を賴む。朝日は義俠心から喜んで引き受け、大に盡力するが、谷川は裏面から裁判官を操つて、遂に朝日を敗訴にさせてしまふ。朝日は大に憤激し、いよいよ谷川如きの羽振が好い政治を根本的に改革しなくてはならぬと決心する。且つ谷川は何時の間にか秋山照子を見付け、照子の繼母を抱き込んで是非妻にといふ。朝日は一つはこれも大に憤ると

ころがあるのである。

かくて朝日は郷里から補缺選擧を幸ひ、選擧に出馬する。然し谷川が官權を濫用して、無理に朝日を落選させる。それで朝日方の選擧區民は大變な騷ぎで多少亂暴する。谷川はこれを機會に、朝日を拘引投獄してしまはうとする。朝日は止むなく、密かに照子に分れを告げて、風雨の夜外國に奔り、暫時消息が不明になる。（鐵腸の筆はこゝで絕える）。

南洋視察に行つた筈の海上は折柄起つたヒリッピン獨立義軍に投じ、義軍の參謀格で奮鬪する。（六年前に『南洋の大波瀾』に想像的に描かれたヒリッピン獨立問題は、今や現實の大問題となつた、アギナルドの擧兵は一八九六年、卽ちわが明治二十九年である）。高山將軍始め民間の有志はこの機を捉へて義軍を助け、國力伸張を實行しようと思ふが、政府が例の如く對內策で血眼になつて居り、議會は軍備などよりも租稅輕減を高調してゐる。然し藤森秀子は、海上のヒリッピンにあるを聞き、先づ香港に渡つて朝日に會ひ、その眞否を確かめて、マニラに赴く。朝日は故國の情況を聞き、照子の不幸を聞いて、（照子は谷川と繼母に迫られて死せんとし、高山將軍に助けられてゐる）益々谷川を憎み、いよいよ政治改革の志を固める。さうして筆を呵して時事評論なる有力なる政治雜誌に『政弊革新論』を匿名で寄稿し、現內閣を痛擊する。海上も、義軍の失敗から歸朝し、政府の無氣力を罵り、國力の伸張せぬのを慨してやまない。朝日も同時に、北方滿鮮に向つて志を延べようとする。

此の頃議員中にも內閣の施設政策に不安不信を抱くなり、新議會には不信任案が提案されさうになる、政府は議員の買收に奔走するが、成功せず、停會（十日）で漸く一時を喰止める。これより先、東京市區改正に伴ふ東京灣築港の工事について不正事件があり、請負つた日本土木會社の社長綾部某等の拘引となる。栗原は谷川を動して綾部を釋放させようとする、谷川は綾部の娘艶子を妻にくれゝばといふ。艶子は山木隆一と殆んど許嫁となつてゐるのだが、

類の威光で彼の女を說きつけて谷川夫人となることを承諾させ、山木には濱理磯山（卽ち松田伯の娘を取もつ）。折柄ヒリッピン日本人虐待問題が喧ましくなり、又朝鮮北境の事件が紛糾して來て、外交の無能が暴露されるので、流石に現內閣も居堪らず總辭職する。かくて在野各派は聯合內閣を組織し、高山將軍を首相に推す。朝日は、北方に赴く途次谷川のため長崎で捕へられたが、今度の總辭職で放免され、一躍高山內閣の內閣書記官長となり、將軍を助けて改革の經綸を行ふが、間もなく、ロシヤ公使となり、照子を携へて赴任する。海上は最初から官途につかず、秀子と共に再び南洋に赴いて貿易に從事する傍ら南洋の開發に務める。かくて幾年の後、高山將軍の對外强硬政略と、朝日海上二人の盡力で、北方は某地を日本の有とし、又南洋の某大島にも日本國旗を飜へすことが出來たといふ。

以上の政局の豫想畫と物語の荒筋で鐵腸の意のあるところは大體分かる。戰後政局のスケッチは、主として前篇卽ち鐵腸自身の筆に成るものから引いたのであるが、後篇の村松柳江の筆に成る分には、時の政府に對する更に痛烈な諷刺がある。（第二回十二頁以下）

甲『（前略）成る程前の進步黨內閣が組織の前に當つては中々の評判で、財政も整理する、外交も刷新する、內治も改良する、行政も改革する、言論の自由も擴張すると至極結構な觸れ込みであつたから、人皆な一時は救世主の天下つた樣に思つて居たけれど偖て實際は何うであるかといふと、先づ最初肝心な內閣組織に大味噌を附けた揚句が政黨の操縱に苦んで碌々施政の方針さへ明言する事が出來ず、トゞの詰りが施政方針を表裏二樣に造つてヤットお茶を濁したなどは見苦しいではないか、夫れも愈々の實際さへ甘く遣つて吳れゝば言ひ分はないが、新聞の發行停止はモウ決してせぬと堅く國民に誓つた口の下から少し喧ましい問題が起ると忽ち一方から脅迫せられて停止をするやら、禁止をするやら、此の前の保守黨內閣も例の遼東一件では隨分無法な事を遣らかしたがマサカ禁止とま

では出掛けなかつたよ、都べての事が此の通り、折角の行政整理も委員會はアベコベに內閣の妨害をする樣な始末でメチヤ／＼だし、伴食大臣といへば唯だヘイ／＼と畏まつて居るものかと思つたら、アノ時の內閣では伴食大臣が一番巾を利かす樣な始末で、お負けに下からは策士連が無闇に突つ附くし、御本尊の首相はツマリ立ち往生の姿で二進も三進も動きが取れず、其內ヤツト黃金の力で軟弱議員を買收し何うにか斯うにか議會の難場丈けは切り拔けたれどサア跡の始末が六かしくなり、ツマリ進步黨は四分五裂でトウ／＼次の議會には內閣が持ち切れずトヾの詰りが再び今の保守黨內閣に乘つ取られる樣な事になつたではないか、內部の有樣でさへ夫んな譯だもの、ドウシテ外交の刷新などは出來る筈がないのさ、其初めこそ一寸掛け聲で嚇かして見たれど、肝心の朝鮮さへトウトウアノ始末云々ナアニ現內閣も前內閣も詰る處は橡（どんぐり）の背比（くら）べ別段變つた事は無いのさ。（中略）

以上は內政整はずに外交の刷新、國權の伸張が出來ぬことをいふ。

乙『ソリヤ實に君のいふ通り、今の保守黨內閣でも前の進步黨內閣でも詰り藩閥の殘物が憲法政治の面を被つて出たまでの事で、其精神は依然たる藩閥だから到底孰らにしても目覺しい事は出來ない筈さ。

丙『夫れといふのが全體今の政黨屋連中が野心家斗りの揃ひで、眞實責任內閣の實行を期するといふ樣な精神が少しもないから、詰り政黨が藩閥の提燈持をする樣な事になるのだ。

甲『アノ進步黨なども初めは至極面白く往きさうにあつたがトウ／＼一二野心家の爲めに宜い加減にされて仕舞つたのは殘念千萬の事ではないか、ダカラ僕なども（中略）其內に同志を誘ひ眞の責任內閣を樹立する事に骨を折つて見る積りである。（中略）

以上は政黨の無節操と排藩閥主義、責任內閣の必要を論じたもの、——

御覽なさい前方戰爭のあつた當座は頻りに軍備擴張論を主張して軍人の機嫌取りをして居たものが少しく年月が經

つと今度は忽ち『時勢の變遷』を口實にして租税輕減論を主張するやうな有様で、斯う何も角も僅かの時間にグラ〱方針が變る樣では折角進みつゝある我國の地位も又々次第に後退をする樣になり、夫こそ今に臺灣も熨斗を附けて外國に進上する樣な事になりますよ云々。

これは國是不統一の大害をいふのである。

總體鐵腸よりも柳江が戰後の事實を多く見聞してゐるだけに、その諷するところに思はずそれが出で、如何にも痛烈に讀まれるが、やゝ文字淺露の氣味を免れない。且つ後篇は前篇より一年半以上も後に作られたものだけに、鐵腸執筆の部分と柳江執筆の部分に何やら可成りのギヤップがあるやうに思はれる。明白に鐵腸の書いたものよりも柳江の書いたものゝ方が何年か後のやうに見えるが、これは先づ續筆の結果で已むを得ぬことゝして置かう。

だが何といつても、全篇を通じて政局への批判、國民への警告を凝縮して示してゐるものは、『時事評論』の政弊革新論なるものである。後篇第十五回（一五三頁—一五五頁）にその要領なるものが揭げてある——

我國立憲制度を實施してより爰に十有餘年なれど、藩閥の宿弊は今尚ほ除去せず、責任内閣の美制は容易に行はれざる事より。各政黨は表面立憲的動作を裝へども、其實藩閥の奴隷たり爪牙たる事、換言すれば政府も政黨も立憲的形骸に藩閥の精神を充たせるものなる事。從つて彼等は自家の權勢利欲に汲々として、眼中國家なく人民なき事。内閣大臣は相場師の玩弄物にして政黨員は其手先となり、請託盛んに行はれて情實は常に道理を支配し、官紀内に亂れて同僚互に相陷擠し、官吏の醜聞百出して一も之を制する能はず。政府の威信愈よ地に落ちて、野心家の脅迫愈よ甚しく、内閣の政策は常に二三民間策士の爲めに動搖せられ、内治の改良は容易に行はれずして外交の不振は依然として舊の如く。財政の基礎今尚ほ確立せずして經濟社會の不安は愈よ其度を高め。殊に先年松方内閣の時四十餘萬圓の公債捨賣をなし、其際種々條件附の契約を成したる結果、其後患今尚ほ存して政府の財政は常に二三外

商の爲めに、左右せられる事等。有らゆる弊害を抉出し一々證據を擧げて最も痛快に之を詳論し。中に就て內閣大臣以下官吏たるものが規律を無視して。或は民間實業家に結託し、或は賄賂を收めて私曲を恣にする等の事に就ては、極力之を攻擊して官紀振肅の一日も忽にす可からざる事を痛言せり。而して這は獨り現內閣に於て然るのみならず、今日の民間黨と雖も一たび政府に立てば其弊は尙ほ之れと同一にして、要するに現時の在野黨も在朝黨も共に賴むに足らざれば、宜しく一日も速に眞正なる立憲的政黨を樹立して責任內閣制の實行を期せざるべからず、然らざれば幾回內閣を更迭するも畢竟傀儡の戲伎に過ぎざるのみ。

畢竟、現時の政弊を自覺し、これを革新して、早く立憲政治を樹立し、責任內閣を實行して內治整理の實を擧げよといふ點が重點である、この言葉は柳江のものであるが、然しこの意味には鐵腸も勿論同意であつたことを疑はない。內政を整理すれば、自然國是は定まる、國是が定まれば、日本の對外的態度も一定した確固たるものになる。かくてこそ、國權伸張の理想が成就されて行くであらう。然るに、この點について、日清役後東洋の風雲日一日より急なる時、我が國民の現實に解決せざるべからざる大問題は——

北、露國と結んで以て南下策を取らん乎、南、英國と盟ひて以て北進の略を試みん乎、抑々英露の中權を制し以て他日の變を待たん乎(二)

である。當時事實日英同盟論も、日露同盟論もあつた(三)、然し今の場合日本としては他力本願心を起して下手な身賣りをすべきではない。凡そ外交の上乘なるものは、國利を標準とするにある。同盟も非同盟も、又何國と同盟するも、皆國利に據るべきである。よく國利を考へ、外國と事實上の提携を遂げて、前途の障碍を排するを可とする(四)。四十年の日本』に描くところから察しても、上記の三策中の第三、即ち實力を養つて歐洲諸國の變を待つといふ方を鐵腸は可としたらしい。從つて、鐵腸は必ずしも北進論者ではなく、南下一方の論者でもない。北進も可、南下も可、北進

も必要、南下も勿論必要、兩者併行すべくば最も可とする。憂ふるところは我に實力なきにある。彼は先づ北進論者の代表朝日照彦と南下論者の代表海上航三とをして各々かく持論を闘はしめてゐる。

海上『(前略) 君とは少し議論が違ふけれど今日の形勢では先づ我々の進んで事業を成す場處は南洋諸島である、呂宋(ルスン)なりスマタラなり手當り次第に我國のものにして置んとトテモ日本の勢力を擴げて歐洲諸國と競爭することは出來ない

朝日『君の其の論は不同意である、前年日清戰爭以來日本は幾度夫の國のために迷惑を受けたか知れない、今日民間で軍備擴張論の盛んなのも畢竟は彼等に對して武備を整へるのが目的である、夫れに近頃朝鮮事件がまた六ケ敷なつて來たと云ふじや無いか、日本は英國を味方にして東洋の平和を維持せねばならんから南方へ向けて勢力を展ばし他の國々の感情を害するのは決して得策ではあるまいと思ふ

海上『君ソリヤ無益(むだ)だよ、商業上の利益が反對する國々と迚も永久に同盟の出來る筈はない、一度露國の干渉で遼東を取返されたと云つて何時までも露國を敵と思ふのは外交の活機を知らないものである、外に對する必要のある時には佛獨の二國すら聯合したでは無いか、日清の戰爭の時を考へて見給へ露西亞は一兵も動かさず日本に忠告して遼東半島を支那に返させ、其の報酬に廣大な土地まで占領したのは實に外交政略の妙を得たものである、夫れだから此後我が日本帝國も……(下略)

かく闘はしめて、鐵腸は自分が何れに左袒するとも明らかにしてゐない。さうして最後に、朝日にも海上にもそれぞれ志を得しめてゐる。敢て二兎を逐ふといふのではない、要は我にある、わが實力にある、わが實力を臨機應變に驅使して南北ともに國權を伸張する、そこに鐵腸の眞意があつたのである。

而かも鐵腸の國權伸張は必ずしも武力侵略を意味するものではない。彼は勿論背後の勢力として武力と强硬政策を

是認する、漫りに軍備擴張を否とする政策には反對する。然し彼自身は好戰論者ではない、寧ろ平和主義者である、從つて國權伸張に當つても、武力よりも貿易による商權擴張を第一とする、[五]これは注意すべき點でなくてはならぬ。

たゞ一ト口に軍備擴張賛成といへば、一概に政府支持の議論の如く受け取れるが、鐵腸は決して時の政府云々を眼中に置いたものではなかつた。彼の眼中にあつたのは、政府よりも日本國家であつた。これは、彼が二十八年七月錦輝館で試みた演說に[六]も出てゐる（この時はも早や自分で演說が出來ず、淸水梁山氏が代讀した）。その要旨に曰く――

今は政治上大改革を爲すべきの時なり遼東半島の還付は國民誰れか一掬の涙を灑がざらん今日の軍備擴張には國民擧げて嘗膽臥薪の決心なかるべからず夙に民力休養を主張せしもの此の大負擔に甘ずる決心を爲し政府も亦宜しく嘗膽臥薪の實を擧げて根本的の改革を爲し大に國費を節せざるべからず政府自ら改めず其責任を明にせず獨り國民に向て其負擔に甘んずべしと云はゞ其感情果して如何甚だ無理なるにあらずや云々

國家發展といふ大目的のためには、國民も多少の痛苦は忍ばなくてはならぬ、然し同時に政府も國民にかゝる痛苦を與へる理由として、その已むを得ざるものなるを納得せしむるため十分の政府改革を實行してみせなくてはならぬ、といふのである。鐵腸が軍備擴張贊成の本意がこれによつて模索されるであらう。

從つて此等の小說に於いて、プロレタリア階級の物的福利の如きが、時の政治家にとつて無關心なるかの觀があるのは、故意にこれを無視したのではないが、如上の國家第一義の緊張した見地からして已むを得ぬと恕すべきであらう。前篇第三回に、百姓同志の戰爭觀が出てゐるが、これは全く政治的自覺を缺いた可成り封建時代的なものと受け取れる、社會進步上、何の勢力ともなつてゐない。この時代には、部分的には既に社會主義の目覺めがあるのであるが、然し一般大衆はまだこゝに描かれたものに近いものであつたのであらう。

最後に、重ねていふやうであるが、この小說の未來記的形式も、現在に對する警告諷刺をカムフラージュするもの

であるが、既に戰後のと斷はつてあり、實際戰後間もなくであるので、近過ぎてカムフラージュに使ふ現在の材料は少ない、殊に鐵腸の方が少ない、『四十年の日本』に比較すると、大分不自由になつてゐる。從つてこの不自由は、想像力を多くして補ひをつけるより仕方がない。例へば、前篇に於ける議會對政府の大勢の如きも、據りどころはあるが、別にこのまゝの事實があるわけではない、海上の南洋行の如きもさうである。それから前篇としては可成り重大な役を成してゐる臺灣金山を捲き上げる一件の如き、全然空想の所産である。この小說の出來た時には辛うじて臺灣征伐の一通り終つたころで、まだ金鑛を分捕りすると欲張る隙がありはせぬ、たゞその平生の遣り口からすれば、今にかくもあらうかといふのであらう。かういふ風に、鐵腸の政局描寫には想像が可成り多く働いてゐる。勿論その想像が無稽のものでないことは事實で、その想像した軍備擴張對經費削減も政府の對韓失敗も、責任回避問題（遼東還付の責任をいふのであるが、この小說では臺灣の金鑛一件の責任となつてゐる）も、略ぼこれに描いた通りになつた。三國干涉の善後策の失敗、對外硬派への壓迫の如きは、現に實驗した事實である。然し大體に於て鐵腸の想像が大に働いてこの作に見る如き政局の描寫を織り出してゐる。反對に、柳江は、前にもいつたやうに戰後の政界の實際をいさゝか長く見聞したので、自然後篇の材料にその見聞が使用された。議會の風潮、政府の對外無策、ヒリッピン獨立問題等がそれである。議會對政府の衝突は、恐らく第九議會の經緯を諷したものに相違ないことは、議會史を一瞥して知られるであらう。又前篇の金山事件に對し、後篇には土木會社不正事件がある。金山事件はその事實に近いものがないが（強いて求めると、二十七年の金時計事件をもじつたものと見るべきも）土木會社事件には有名な鐵管事件といふ極めて類似した事實問題がある。後者は前者程政治の全局面に關係しないが、政界裏面の腐敗を暴露してゐる點では同じである。その他、政商の跋扈、探偵政策の弊、選擧界の醜狀、官權濫用の惡等を寫す場合に於いて、『四十年の日本』と同樣、作者の暴露的興味が動いてゐることは、新しく書き立てるまでもあるまい。

この小説のテクニクについていへば、大體は例によつて例の如しといふ外はない。

プロツトに時事を借用してあることは、上記の通りで、この點については改めて何も述べない。大體プロツトも例の如しで、政治と戀愛を綯ひまぜて、鐵腸一流の小說的效果を狙つてゐるが、たゞこの作では、政治と戀愛とが、一種必然的に結びつき、然かも戀愛が政治の動機となつてゐるかに見えるところがある（朝日と照子の關係）、これは今迄の鐵腸の諸作と違ふところである。今迄の作は、政治と戀愛と二元的であるが、相手の女性に政治的興味をもたしめることによつて二者の關係を保たしめてゐる、それが直接に因果關係をもつに至る。これは兎もかく政治小說のプロツトの上の一進步であらう。それから必らずしも一人の主人公を定めないこと、（海上か、朝日か、高山か、谷川か）これはその兩頭的國權理想を鼓吹する必要からであるにせよ、極て微かながら近代小說らしい匂ひをもつ。勿論缺點も澤山ある。殊に所謂趣向變化の工夫として、舊式な草双紙的分子を淸算しきれずにゐるところがある（照子が高山將軍に投身を救はれたり、照子の繼母增尾が神經病にかゝつたりするあたり）。又土木會社一件の工夫は、政界裏面の腐敗を示すために挿入されたものであらうが、これは全く場當りの趣向で、本筋からは必要がない。不自然も多い（谷川が見る女から女へと氣が變る如き、又マニラに渡つた秀子と海上が申合せたやうに出會如き等々）。結末が馬鹿に急に過ぎる、北方も南方から樂々と日本のものとなるとは思はれない、宜しくこゝまでになる苦心を描いて讀者に納得せしむべきである。この點では南翠の『旭章旗』の方が小說としては勝つてゐる。總體として、今少し長篇に書くべきプロツトを狹いところに盛つたので、せかせか、さつさと片付き過ぎる、それで讀んで何處となく淺い粗末な印象を與へる。（病中の筆に成つた氣忙はしなさもありはしないか）。

性格で第一に注目されるのは、海上と朝日、これは何れも假作の人物であらうが、何時もの鐵腸の分身と違つて、

やゝ實在性のある人間となつてゐる。朝日が照子との關係から政治世界に入りこんで谷川と張合ふなどは、これまでの鐵腸の性格にないところで一寸面白い。海上の直情徑行もいゝが、外國貿易に着眼する位の人物だから今少し腹があつても可い。人間的には面白いが少し撓いがなさすぎる。大臣中、一性格として取上げ得るのは、藤森昌だが、藤森はその風采、行事、住居などの點で何處となく前農商務大臣後藤象二郎を思はしめる。(藤森昌などといふ名などもこれから考へ出したのかも知れぬ)。後藤が果して藤森の如き失敗があつたか何うか、兎にかく在官中政商を近づけて餘り清廉でない行爲があつたことは事實らしく、二十七年一月の免官は有名な金時計事件に絡んで議會から彈劾された結果である。前にも一寸暗示したが、金山事件は、この金時計事件をもじつたもの、乃至これによつて思ひついた警告的諷示かも知れない。藤森を後藤とすると、谷川や栗原某は何うか、勿論何等かの意味でモデルはあつたらうが所謂綜合モデルで、ある一人の人物を指したとも覺へない。然し谷川は鐵腸の作つた性格の中で、讀者に印象を殘す一人である。その官僚政治家の好典型を示してゐるところ、その才子振り、轉落振り、惡辣ぶり、好色ぶりは、正に明治の高師直たる觀がある。又、その女性から女性へと氣の變る經路は、今少し何か心理的說明がなくては、會得出來ないものがある。たゞ恩人藤森の遺產中自分名儀のものを横領する一件は、いさゝか酷に過ぎる想像のやうに思はれる。栗原は、如何にも政商らしいが、今少し惡型であつた方が性格が鮮明になりはせぬか。

女性は多い、然し何うにか獨立して男性に對してゐるのは、藤森秀子、秋山照子の二人のみ。他は皆男性に利用される爲めに出て來るだけである。秀子の性格が一段とよい、明朗で素直で、勇氣もあり、聰明でもある。周圍が皆戀人海上の惡口をいつても海上を疑はず、周圍皆谷川の才氣を稱へても心を傾けない、父の死にあつて一家思ひがけない零落の淵に臨んでも屹としてめげない。うれしい女性である。照子はそれに比すると、いさゝか舊式の良家の處女らしいところが多く、優柔な所謂女らしいめそめそが多い、その苦衷は諒とするが、新時代の女性なら理義に照して斷

じて繼母の無法などに閉口してゐはせぬ。磯山綱子、綾部艷子に至つては、當時の大ブルヂョアジイの女性の代表であるが、こゝに描かれたまゝでは格別取り上げる程のこともない。

この作には背景らしい背景、獨立して觀察される背景はない。淺い描寫で印象が浮ばず、見るに足らぬ。この點が大に人物の性格や行動にも影響して、朦朧たらしめてゐることが少くない。例へば、上流生活に對する觀察や知識が足らぬので、種々に寫しても眞趣を得てゐない、藤森の家庭や磯山の生活など、如何にも平凡以下で、小月給取りかインテリ賣文家位の生活にしか受けとれぬ。これは皆背景がしつかり把握されてゐない爲めである。總て全篇に亘つて、政治關係、政治的イデオロギイ以外のところは描寫が表面的で不十分である、不十分といふよりも不徹底で印象稀薄である。これは政治の理想に捕はれて、生きた人間社會に對する觀察と同情を缺いた結果と見る、つまり鐵腸の政治小說家としての準備が偏してゐる爲めである。政治的イデオロギイの點では反覆丁寧を極めてゐるに反し、小說的に見て如何にも乾枯して感情の濕ひのない、戀愛的葛籐を描きつゝも如何にも形式的な氣乘りのせぬ態度である。言意、構想に於いて前述の如く『明治四十年の日本』によく似た作であるが仔細に比較すると、意氣込みに於て努力に於て創作的感興に於いて、到底『四十年の日本』に及ばぬことを發見するであらう。

註（一）禁止の理由は安寧秩序妨害である、改題したものは、現在の諸本を見ても本文を改訂したらしくなく、たゞ題目を一字ぬりつぶしたのみであるらしい。
註（二）二十八年十一月二十八日以後「國會」、鶯影漫錄冐頭
註（三）例へば二十八年七月二十四日國會「日英同盟論」九月二十三日同紙「日露同盟論について」
註（四）二十八年九月二十八日、國會「外交の上乘」（下）
註（五）海上の南下が、マニラ煙草製造の目的にある點などを參考すべきである。

註（六） 二十八年七月二十三日、國會、此の時は同志會の第三同大演說會であつた。傳記參照。

『慘風悲雨世路の殘月』

此の書は、史論的傳記の一種ともいふべく、政治小說ではない、從つて私の研究範圍から省いても可いのであるがたゞかゝる著書のあることを知る人が少ないから、一言紹介して置く。

告白をすると、私はこの書が鐵腸の遺著也といふ客觀的證憑を何一つ知らぬのである。この書の表紙に故末廣鐵腸稿とあり、本文の初めに故末廣鐵腸稿案と案の一字を附加し、又序文に於いて高橋謙齋なる人が、この書が鐵腸の遺著を續成したものである旨斷はつてゐる。如何にも鐵腸の著らしいが、內容には鐵腸の手に成るところは全然ない、文章も勿論鐵腸のものではない。疑へば鐵腸の名に托したものと疑へないこともない。

內容は伏見騷動を文珠九助中心に評叙したものといふだけである。その緖論に於いて本書を著す精神と、九助の如き人格の今日益々必要なるを論じ、かく國家多事の秋、人民は皆國家の義民となり立憲的犧牲たるべきであるとなしてゐる。或は鐵腸の口調らしくも受取れるが、然し正しく鐵腸の口調とも斷じ難い。

編輯者卽ち執筆者は、鹿鳴散士といふ、奥附にある名を本名とせば、名古屋の人栗本彥七がさうであらう。

何れにしても、この書は疑問の多い作である。或は、鐵腸に九助の傳記を小說的にでも書く案があるのを知つて、その案にでも從つて綴り成したものかとも思ふ。本文初頭の鐵腸稿案とはその意味かも知れない。

鐵　腸　論

以上の叙述に於いて、政治小說家としての鐵腸の立場を考へつゝ筆を進めて來たので、こゝで鐵腸に關する長々しい研究を結ぶに臨んで改めて鐵腸論をするのは、必要のない重複事のやうにも思はれ、論のための論といふ形式一遍だけの事のやうにも受け取られる恐れがあるが、然し筆者からせば、以上の研究を讀み返して得た印象を纏めるといふ程の、又は讀者からいへば散在してゐる要領を整理するといふ程の意味で、簡單に一段落をつけて置くことにしよう。

政治小說家としての鐵腸の研究を一言に終結すると、如何に割引しても彼は政治小說の代表的作家といふ位地を動かない、といふことである。唯一とはいへぬにしても第一の若しくは最大のとはいへるであらう。その政治小說の名聲が政治家としての彼の聲譽に、負ふところあるは勿論であるにしても、政治小說家としての彼の活動が比較的眞劍で長期に亘り、從つて作物も多く、而かも幾つかの生命ある作物を書いたといふ點で、世人の頭腦に政治小說家の第一人者といふ印象を强く烙きつけてゐることも事實である。

鐵腸の政治小說は何故に代表的と考へられて可いか。それにはイデオロギイとテクニクと二方面から考へてみるのが便利であらう。鐵腸がその小說に盛り込んだ政治理想は勿論自身多年抱懷して來たもので、單に時代を觀察して拾集した間に合せの理想ではない、從つてその主張宣傳に感情の熱が籠つてゐる、これは政治小說家としての鐵腸の第一の取柄である。而かも鐵腸自身の政治家としての立場が立場だけに、かく自家の理想を主張宣傳することが、直ちに時代に卽した代表的な政治思想を紹介し宣傳し强調することになつてゐる。それで鐵腸の政治小說を讀むと、もうそれを讀んだだけで政治界の動向を決する時代の政治思想の推移が歷然たるものがある。この點に於いて先づ鐵腸の小說を代表的といふことが出來るであらう。又、當時の政治家としては、小說に對する態度が比較的眞劍で戲作とか戲著とか何とかいひつゝも、自分の創作に對して出來る限り眞面目に努力することを惜まなかつた。これは、彼が小

說改良に志があり、政治小說だけの試作に止まらず、人情小說、寫實小說に指を染めた事實によつても推察される。かく小說や文學に眞面目な態度で對するのは、當時鐵腸の如き教養と位地とをもつ人物としては、最も進歩的な考へであつたのである、從つてこの意味でも亦、鐵腸を代表的とよぶことが出來るであらう。更に又鐵腸の政治小說をテクニクの方面から觀察すると、テクニクの點で兎もかくも小說らしい取柄をもつたものが鐵腸の政治小說だけだといふことは、何人にも分かるであらう。鐵腸の政治小說を獨立さして論究の對象とするときは、所謂 Novel として如何にも不完全極まるもので、幾多の缺點を指摘することが出來ることは勿論であるが、これを同時の政治小說の諸作家に比較するときは、總體として鐵腸の作物に長所があることを認めざるを得ない。鐵腸が作物と共に、政治小說は稗史から小說となつた、創作的飜譯からともかく創作といへるものにまでなつた、勿論これは鐵腸の小說だけの功にも寄與でもないが、鐵腸の小說がかゝる推移を決定的なものにしたことは認めて可からう。彼以前の作物は多く寓意的な、說明的比喩的な、形式のものでなければ、稗史風勸懲風な形成のものであつたが、彼の作物と共に寫實的描寫風な政治小說が出現した。同時にこれが次第に鐵腸中心に政治小說のタイプなりジヤンルなりとなつて來て、以後これが政治小說の正統ともいふべきものとなり、この形式以外に出るものが餘りなくなつた。この點でも亦、鐵腸の小說が政治小說の進歩的なテクニクを代表してゐるといふ意味で代表的といひ得ると思ふのである。文學史家の言によると、『小說神髓』で唱道された文學革命乃至小說改良の理想は、二葉亭四迷の『浮雲』に於いて最も適切に實現されたといはれてゐる。成る程『浮雲』が『小說神髓』の理想を實現したといふ點については、勿論異論はあり得ない。たゞこの『浮雲』の出現に先立つて、政治小說方面に於いて早くも小說改良の理想を實現しようといふ試みがあつたこと、而もこれは直接間接に『小說神髓』の理想に動かされてゐること、從つて『小說神髓』の理想によつて小說改良を試みんとしたのは『浮雲』以前『神髓』の著者の外に先づ政治小說家がゐた事實を認むべきことは、從來の文學史も研究

家も氣附かぬところであるが、この事實は矢張り正しく認められなければならぬ。今鐵腸だけでいへば、南翠と違ひ彼の小説改良意識が『小説神髓』に直接負ふところがあるといふ證據が擧げ難いが、間接にその影響を受けたことは(或は甚だ微薄な部分的なものであつたにせよ)種々な推想によつて肯定される。文學史的にいつて、かゝる認識が又鐵腸の政治小説をその種の代表的なものといふ理由を強めてくれるであらう。尙ほテクニクの細部に立ち入つて論ずれば、私は鐵腸の政治小説を代表的と呼ぶべき理由を更に幾つか擧げ得ると思ふが、さまではと思ふからその邊は宜しく讀者諸氏に判讀していたゞくことにして、こゝではそこまで立ち入ることはしない。

政治小説家としての鐵腸と、同じく政治小説創作に關心をもつてゐた政治家達とを比較することは甚だ興味ある結果を生ずるとは思ふが、今こゝで具體的の例を擧げて詳細に論じてゐる餘裕はないから、眞の大體の比較論だけ試みてみる。當時の政治界に於いて鐵腸の敵手として或は味方として(主義上の區別からではなく、黨派上の對立からであるが)、轡を並べて驅馳した所謂名士には、矢野龍溪、藤田鳴鶴、尾崎學堂、久松義典の如き人々がある。此の人々のうちで龍溪は、小説的才能に於いては拔群なものがあるかに思はれる。彼にして眞劍に小説に身を入れて書き始めたなら、恐らく此の人々の中の何人かゞ比肩出來なかつたのは勿論、恐らく鐵腸の如きさへ太刀打ちが難かしかつたらうと思ふ。たゞ龍溪は小説創作といふことにそれ程熱意がなかつたので、『經國美談』以後、政治小説の全盛期が去るまでの數年間殆んどいふに足るものを書かなかつた。然しその才分の豐富と手腕の堅實なのは、廿三年の『浮城物語』を讀むとよく分かる。鳴鶴も小説に對して可成りの嗜好を有し、遂に自ら創作した程であり、又その手腕も侮り難いものがあるが、然し何分この實務家的性格が多いために、小説創作に熱心するといふところまで至らなかつた、且つ作物もずつと少ないので、到底鐵腸と對立的地歩を占める如きことが出來ない。學堂に至つては、自らビィコンズフヒールド卿に私淑し、卿の傳記を稗史風に傳へたりしたものであるが、然しその政治小説『新日本』は遂に素人

の試み程度に止まり、小說としては甚だ稚拙なものである。學堂はそのフランス通信を讀んでも小說に趣味の無い人ではないが、その作を見ては何うも眼高手低と評するより外はない、それに何しろ一作だけでは、到底鐵腸と馳騁するなどといふわけには行かない。

政治家以外、此の前後の政治小說家で、鐵腸と好對比をなすのは、須藤南翠である。二人は同鄕であるが、新聞記者としては鐵腸が少し先輩、小說家としては南翠の方が遙かに先輩である。政治小說を書かうといふ志を起したのは南翠の方が先であり、その試作も鐵腸に先立つてゐるが、政治小說家として大に名を成したのは、ほゞ十九年からであるから、先づ鐵腸と同時といつても可い。南翠はその小說觀念に於いて理想主義的稗史的なものであるが、然し『小說神髓』の寫實性を酌んで折衷主義を執つてゐる、この點は鐵腸の考へと略ぼ同じであらう、たゞ鐵腸は能ふ限り所謂稗史的分子を少くし能ふならば無くしようとするのに、南翠はこれを存しこれを加味することを必要となしてゐる。政治的イデオロギイに於いては、南翠の政治小說は鐵腸の政治小說の如く、政治的イデオロギイでの點で代表的といふわけに行かず、政治上では南翠は改進黨の政綱をそのまゝ反映宣傳してゐるのみであるが、テクニクの上から吟味して小說創作の手腕を比較すると、流石に南翠に數月の長がある。鐵腸が好んで自家の體驗と時事を取り入れるので彼の小說は寫實味が強いが、南翠はこの點で全く補綴的空想的にならざるを得ぬので、種々な道具立を借りて來るから何處かピタリとしないところが見えて、何處までも稗史的な理想主義的手法が蔽されない。鐵腸は多く中流乃至それ以下の人々の生活を描くが、南翠は好んで中流以上貴族社會をも描く、殊に女流の社交生活をよく描く、然かもこの女流社會の描寫は鐵腸が最も拙なところである。また背景の社會的描寫に於いても、南翠の方が優れてゐる。鐵腸は多く說明に委して描寫をせぬので、可なり複雜な趣向を取り入れてゐても、妙に狹い感じがする。南翠は、實は割合に單純なプロットを立てゝも手際よく描寫して行くので、如何にも雄大らしく受けとれる。二人が同鄕で、勿論知り

合ひであつたらうが、二人の間には露骨な競爭意識などはなかつたらう。然し何やら見樣によつては張り合つてゐるやうにも見えなくはない、この一例は、鐵腸はその小說中に函根を取り込んでゐるが、これは函根流行の時代でもあり鐵腸の熟遊の地で不思議はない、然るに南翠はこの小說に於いて宜しく箱根とあるべきところを極力避け、日光の湯本などで間に合してゐる（『新粧之佳人』の如きを見よ）、これはたゞ一例であるが、さういふ氣分があるにはあるのである、然し或は二人が張り合つてゐたといふよりも南翠が鐵腸に負けまいとしてゐる、といつた方が適當であらう。鐵腸と南翠の優劣如何といふのは少し可笑しいやうに思はれるが、對比して論じた以上結論はこゝまで來るのは止むを得ない、そこで妥當なところをいへば、政治小說といふ點からせば、鐵腸のが南翠のものよりも優つてゐる、南翠の第一の缺點は自家獨自の政治理想とこれを宣傳する熱とがないこと、これである。だが小說といふ點から見て巧拙を爭へば、鐵腸の作物は南翠のそれの敵ではないかに見える、殊に社會描寫に於いて南翠の小說は可成り立ち優つてゐる、といふ邊であらう。たゞ政治小說創作上に於いて、南翠が先輩であり、鐵腸が後進であるといふことは、立派に事實と認めらるべきである、さうしてこの事實から、後者が前者を意識的に模倣したといふ意味とは別に、何等かの點で後者が前者の影響を多少とも受けたらうと想像しても、無理ではないやうに思ふ。

以上の如く、鐵腸の政治小說はともかく、政治小說史に關する限り、種々の點で代表的なもの、正統的基調を定めたものと論結して可い。これは然し鐵腸個人の才分によるためも勿論あるが、一方、ブルヂョアジイが次第に實力を握りつゝある社會を背後にして、時代の文學觀念が必然的に改まりつゝある潮時に乘じた爲め、鐵腸をしてかゝる結果を生じ易くした點も認めなくてはならぬのである。

昭和十年十月十五日印刷
昭和十年十月二十日發行

政治小說研究（一）

版權所有

著作者　柳田泉
東京市小石川區西丸町二五

發行者　神田龍一
東京市日本橋區吳服橋二ノ五

印刷者　關根慶寛
東京市牛込區早稻田鶴卷町三六二

印刷所　早稻田印刷株式會社
東京市牛込區早稻田鶴卷町三六二

發行所　春秋社
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
振替（東京）二四八六一

發賣所　株式會社松柏館
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
振替東京三九七一六　電話日本橋二六二四

製本・林製本所